HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	両面調整石器群の構造論的研究 ： 更新世終末期石器群理解の枠組み構築にむけて
Author(s)	長沼, 正樹
Degree Grantor	東京都立大学
Degree Name	博士(史学)
Dissertation Number	乙第1164号
Issue Date	2004-12-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65531
Type	doctoral thesis
File Information	naganuma_2004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

東京都立大学　博士（史学）論文

両面調整石器群の構造論的研究

－更新世終末期石器群理解の枠組み構築にむけて－

長　沼　正　樹

目次

序章・・・

第V章　両面調整石器群の構造・・・

図・表目次（出典）

第Ⅰ章　日本列島における更新世終末期の考古学的研究

図 1.2.1　「縄文変革」の石器・土器の変遷（稲田 1986　図１引用）
図 1.4.1　土器出現期の年代幅（工藤 2003a　第１図引用）
図 1.4.2　環日本海の土器出現期の主な遺跡（長沼 2002b　図１引用）

第Ⅱ章　両面調整石器群の提唱と石器群の分析視点

図 2.1.1　縄文時代の石器製作システム（山田 1985　第９図引用）

第Ⅲ章　両面調整石器群のリダクション構造

図 3.2.1　自然石を素材としたリダクションの開始①　（佐藤ほか 2002、長沼ほか 2001）
図 3.2.2　自然石を素材としたリダクションの開始②　（近藤ほか 1992、相田ほか 1986）
図 3.2.3　礫皮面の接合例①ー芯を含む例：その１　（丹野ほか 1999）
図 3.2.4　礫皮面の接合例②ー芯を含む例：その２　（長沼 1988）
図 3.2.5　礫皮面の接合例③ー芯を含まない例：その１　（長沼ほか 2002）
図 3.2.6　礫皮面の接合例④ー芯を含まない例：その２　（長沼ほか 2002）
図 3.2.7　礫皮面の接合例⑤ー芯を含まない例：その３　（澤田 1996）
図 3.2.8　礫皮面のない大形剥片の接合例①　（近藤ほか 1992）
図 3.2.9　礫皮面のない大形剥片の接合例①　（佐藤ほか 2002）
図 3.2.10 礫皮に覆われた大形剥片からのリダクション開始状態　（長沼ほか 2001、相田ほか 1986）
図 3.2.11 礫皮に覆われたやや小形の剥片からのリダクション開始状態
（鈴木ほか 1996、麻生ほか 1989、市川ほか 1998、一部原図筆者、一部原図多田敦子氏）
図 3.2.12 礫皮のない大形の剥片からのリダクション開始状況①　（原川ほか 1998、一部原図筆者）
図 3.2.13 礫皮のない大形の剥片からのリダクション開始状況②
（鈴木ほか 1996、麻生ほか 1989、見崎ほか 1984、一部原図筆者、一部原図多田敦子氏）
図 3.2.14 小形化が進んだ両面調整石器本体と剥片との接合資料①　（相田ほか 1986、原川ほか 1998）
図 3.2.15 小形化が進んだ両面調整石器本体と剥片との接合資料②
（相田ほか 1986、市川ほか 1998、谷藤ほか 1992、一部原図多田敦子氏）
図 3.2.16 両面調整石器が小形化した状態を示す剥片の接合資料（三宅ほか 1980、谷藤ほか 1992）
図 3.2.17 小形化した剥片を素材とした更なるリダクション開始
（鈴木ほか 1996、市川ほか 1998、原図多田敦子氏、見崎ほか 1984、一部原図筆者）
図 3.2.18 両面調整石器を縦割りに分割するリダクション①（三宅ほか 1980、立木ほか 1996、小熊ほか 1993）
図 3.2.19 両面調整石器を縦割りに分割するリダクション②（三宅ほか 1981、小熊ほか 1993）
図 3.2.20 両面調整石器を横割り分割後に開始するリダクション
（菅原ほか 1993、三宅ほか 1980、岩崎編 1992、小野ほか 2002）
図 3.2.21 尖頭器の製作を志向したリダクション（山本ほか 2000、長沼ほか 2002、原図筆者、橋口 1979）
図 3.3.1　両面調整石器本体と他器種の接合例①ー真人原遺跡Ｃ地点（原図筆者）
図 3.3.2　両面調整石器本体と他器種の接合例②ー用田鳥居前遺跡第Ⅴ文化層　（原図筆者）
図 3.3.3　両面調整石器本体と他器種の接合例③ー各地の例：その１（長沼 1988、芹沢ほか 2003、山原 2000）
図 3.3.4　両面調整石器本体と他器種の接合例③ー各地の例：その２（原川ほか 1998）
図 3.3.5　大形の剥片の接合に他器種を含む例①ー下茂内遺跡：接合状態（S＝1／3）（近藤ほか 1992）
図 3.3.6　大形の剥片の接合に他器種を含む例①ー下茂内遺跡：分解した器種（S＝1／3）（近藤ほか 1992）
図 3.3.7　大形の剥片の接合に他器種を含む例②ー下茂内遺跡：接合状態（S＝1／3）（近藤ほか 1992）
図 3.3.8　大形の剥片の接合に他器種を含む例②ー下茂内遺跡：分解した器種（S＝1／3）（近藤ほか 1992）
図 3.3.9　原石形状に戻るが芯のない剥片同士の接合例に他器種を含む例①：その１（長沼ほか 2001）
図 3.3.10 原石形状に戻るが芯のない剥片同士の接合例に他器種を含む例①：その２（長沼ほか 2001）
図 3.3.11 原石形状に戻るが芯のない剥片同士の接合例に他器種を含む例②（長沼 1988）
図 3.3.12 剥片同士の接合例に他器種を含む例①（S＝1／3）（長沼ほか 2002）
図 3.3.13 剥片同士の接合例に他器種を含む例②（佐藤ほか 2002）
図 3.3.14 剥片同士の接合例に他器種を含む例③（谷藤ほか 1992、田村 1994、佐藤ほか 2002）
図 3.3.15 平面形状が規定されている円盤状石核
（中村 1971、村上ほか 1999、武田ほか 1988、佐藤ほか 2002、工藤 1996、三宅ほか 1980）
図 3.3.16 平面形状が規定されていない円盤状石核
（小野編 2002、山本ほか 1999、山田編 1990、小熊ほか 1994、長沼 1988、三宅ほか 1980、
土屋ほか編 2000、小野編 1997、長沼・佐野 2003）
図 3.4.1　両面調整石器の大きさの変異幅（長沼 2003b 第５図引用）
図 3.4.2　両面調整石器群のリダクション構造ー「入れ子構造」（長沼 2003b 第４図一部改変）

第Ⅳ章　遺跡群の形成構造

図4.2.1　用田鳥居前遺跡の代表的な石器（栗原ほか2002）
図4.2.2　吉岡遺跡群Ａ区の代表的な石器（砂田ほか1998）
図4.2.3　主要３石材の上位分類器種別の重量構成比
図4.2.4　両面調整石器の長幅散布図
図4.2.5　母岩類型Ｃ・類型Ａ剥片の長幅散布図
図4.2.6　母岩類型Ｃ・類型Ａ剥片の重量構成
図4.2.7　母岩類型Ｃ・類型Ａ剥片の背面への礫面残存度
図4.3.1　南原遺跡第Ⅱ文化層の代表的な石器（原図多田敦子氏・一部筆者）
図4.3.2　真人原遺跡Ａ地点の代表的な石器（小野編2002）
図4.3.3　真人原遺跡Ｃ地点の代表的な石器（小野編1997）
図4.3.4　石材組成の比較（重量）
図4.3.5　主要３石材の上位分類器種別の重量構成比
図4.3.6　３遺跡における剥片の長幅散布図
図4.3.7　３遺跡主要石材の剥片の重量構成
図4.3.8　３遺跡主要石材の剥片の礫面残存度
図4.3.9　３遺跡主要石材の剥片剥離角
図4.4.1　両面調整石器群の石材獲得からみた遺跡群形成構造モデル
表4.1.1　両面調整石器群の遺跡規模の変異
表4.2.1　吉岡Ａ区と用田鳥居前の石器組成
表4.2.2　吉岡Ａ区と用田鳥居前の母岩構成
表4.3.1　南原・真人原Ａ・真人原Ｃの組成
表4.4.1　両面調整石器群における母岩構成の例（長沼2002b　表１一部改変）
表4.4.2　両面調整石器群における器種組成の例（長沼2002b　表３一部改変）

第Ⅴ章　両面調整石器群モデルの提示

図5.2.1　階層的モデルの包摂関係（長沼2003b　第１図を引用）
図5.3.1　石器製作＝リダクション構造の変遷モデル（長沼2003b　第３図引用）

第Ⅵ章　信濃川流域における尖頭器石器群の遺跡間変異

図6.1.1　本章で言及する遺跡の位置
図6.1.2　信濃川流域尖頭器石器群の代表的な石器
（中村1971、原ほか2000、佐藤ほか2000、山本ほか1999）
図6.2.1　石核リダクションⅠ類の接合例（小野編1997、一部原図筆者）
図6.2.2　石核リダクションⅡ類の接合例（すべて小野編1997、一部改編）
図6.2.3　石核リダクションⅢ類の接合例（すべて小野編2002、一部改編）
図6.2.4　背面構成が求心的な例と側方観が湾曲する素材による尖頭器（すべて小野編2002）
図6.2.5　真人原遺跡Ａ地点・Ｃ地点の両面調整尖頭器（小野編1997、小野編2002）
図6.3.1　真人原遺跡Ａ地点・Ｃ地点の地点間接合資料（珪質凝灰岩・接合資料５）（小野編2002）
図6.3.2　石材獲得と遺跡占拠モデル（長沼2002a 4第４図引用）
図6.3.3　真人原遺跡Ａ・Ｃ地点と野尻湖遺跡群の石材組成の比較（長沼2002a 第５図引用）
表6.2.1　真人原遺跡Ａ地点・Ｃ地点の石核リダクション
表6.3.1　真人原遺跡Ａ、Ｃ地点、道下遺跡の主要石材の組成（長沼2002a 第２表引用）

第Ⅶ章　本州島北半における荒屋系石器群の長距離移動

図7.1.1 珪質頁岩の組成率と石材獲得地からの距離（点数比）（佐野2003第２図引用）
図7.2.1 石材地域ごとの遺跡分布
図7.2.2 細石刃核の大きさの変異（絹川1996 Fig.111引用）
図7.2.3 両面調整石器の計測部位例
図7.2.4 両面調整石器（細石刃核）の大きさと石材獲得地からの距離
図7.2.5 削片の長さと石材獲得地からの距離
図7.3.1 リダクション段階の設定
図7.3.2 リダクション段階　段階Ⅰの資料例（菅原ほか1993、織笠1979、一部原図筆者）
図7.3.3 リダクション段階　段階Ⅱの資料例：その１－両面調整石器と削片
（剣持1979、新潟石器研究会1996、川口1993、桜井1991、一部原図筆者）

図 7.3.4 リダクション段階　段階Ⅱの資料例：その 2ー剥片器種
（佐藤ほか 2002、桜井 1991、東北大学文学部考古学研究室編 1990、新潟石器研究会 1996、一部原図筆者）
図 7.3.5 リダクション段階　段階Ⅲの資料例
（新潟石器研究会 1996、川崎 1976、中村ほか 1975、桜井 1991、川口 1993、田村ほか 1987）
図 7.3.6 リダクション段階　段階Ⅳの資料例（宮ほか 2000、菱沼 1999、川口 1993、高橋ほか 1994、桜井 1991）
図 7.4.1 類型別の遺跡分布図
図 7.4.2 遺跡類型別の分布図
図 7.5.1 荒屋系石器群の移動・居住形態モデル
表 7.1.1 荒屋系石器群の遺跡一覧
表 7.3.1 リダクション段階別の器種組成（点数）
表 7.3.2 リダクション段階の遺跡間変異（%）
表 7.4.1 各遺跡の器種組成

第Ⅷ章　広域比較研究の実践にむけて
図 8.0.1 本章で言及する遺跡の分布
図 8.1.1 オシポフカ文化の遺跡群の位置
図 8.2.1 オシポフカ文化の代表的な石器①（長沼 2004b　第 2 図引用）
図 8.2.2 オシポフカ文化の代表的な石器②（長沼 2004b　第 3 図引用）
図 8.2.3 オシポフカ文化の代表的な土器（長沼 2004b　第 4 図引用）
図 8.2.4 オシポフカ文化に前後する段階（上段：後期旧石器／下段：マルィシェヴォ文化）（長沼 2004b 第 5 図引用）
図 8.4.1 ^{14}C 測定値による各地の石器群変遷の比較（『古代文化』長沼 2003a 第 2 図一部改変）

第Ⅸ章　ゴンチャルカ 1 遺跡の調査
図 9.1.1　ノヴォトロイツコエ遺跡群の位置と周辺の地形
図 9.1.2　ゴンチャルカ 1 遺跡の位置と立地（Малявин, · Шевкомуд1999　fig. 2 一部改変）
図 9.1.3　調査区の設定（長沼ほか 2002　第 2 図引用）
図 9.1.4　基本土層（Шевкомуд · Нагацума ほか 2002　fig 1 引用）
図 9.1.5　調査区の土層堆積状況
図 9.2.1　出土遺物の平面分布図
図 9.2.2　出土石器①細石刃核、両面調整尖頭器（長沼ほか 2002　第 5 図一部改変）
図 9.2.3　出土石器②掻器、彫器、削器（長沼ほか 2002　第 6 図一部改変）
図 9.2.4　出土石器③男根状石製品、石斧（『旧石器考古学』長沼ほか 2002 第 7 図一部改変）
図 9.2.5　出土土器片（長沼ほか 2002　第 8 図一部改変）

序章

グリーンランドの氷床ボーリングコアの解析から、最終氷期を含む過去数十万年間の気温の上下サイクルが詳細に示された（Taylor,et.al 1993）。この$\delta^{18}O$の気温変化曲線の上で、寒冷な酸素同位体ステージ２から温暖なステージ１（現在＝完新世）への移行期である更新世終末期（註１）は、相対的に安定した寒冷状態が持続したステージ２前半とも、また温暖状態で安定しているステージ１とも異なる急激な寒暖の振幅が特徴的であり、変化サイクルが不規則で変化幅も大きい。この気候の激動期に対して、日本列島を含む北東アジアの中緯度地域に居住していた先史狩猟採集民は、いかに対処してこれを乗り超え、後の完新世適応を実現したのであろうか。

本研究の目的は、この大きな課題に取り組む上での前提を構築するために、更新世終末期の石器群を理解する枠組みとして両面調整石器群の概念を提示することにある。

本研究の構成

本研究は３部構成からなる。**第１部**では先行研究を検討することで、問題の所在と本研究の立脚点を明らかにする（第Ⅰ～Ⅱ章）。**第２部**は一般論・原理論であり、両面調整石器群の構造モデルを提示する（第Ⅲ～Ⅴ章）。**第３部**は各論であり、すでに取り組みを開始してきた、各地の具体的で限定的な時空間を対象に、現時点での理解を提示する（第Ⅵ～Ⅸ章）。

第Ⅰ章では縄文文化起源論と旧石器終末期の石器編年に関する先行研究を検討し、今日的な問題点を明確にする。日本列島の更新世終末期の考古学研究は、縄文文化起源論と旧石器時代終末期の石器編年という異なる立場からの議論が個別研究を深めたが、枠組みの議論は不十分であった。しかし 90 年代後半以後には、高精度化した年代測定と従来の年代観との矛盾、および日本海対岸地域での 10、000B.P.を遡る土器の発見によって、古環境情報との共通言語である数値年代と共存できる形に、人工遺物研究の枠組みを作りかえる必要が生じた。同時に日本史の一部としての縄文時代を前提とするのではなく、環日本海の一定の広がりをもつ地域を国境横断的に把握する思考も求められるようになった。この今日的な条件を可能にする枠組みの構築が、本研究の目的である。

第Ⅱ章では石器研究の前提に関する研究史を検討し、本研究が立脚する立場を確立する。技術構造論的なアプローチによって、旧石器時代の石器と縄文時代の石器との本質的な相違が論じられてきた。この中で、更新世終末期の石器研究は「短期間に目まぐるしく主要石器が変遷する」「激動の時代・試行錯誤の時代」とされてきた、旧石器と縄文の時間的中間に相当する部分の石器群も、両面調整石器群として技術構造論的な把握が可能となるというのが、本研究が新しく打ち出す立場である。この把握は同時に、第Ⅰ章で指摘した条件にも合致すると考える。さらに石器群を構造的に把握する際に、遺跡間変異論やリダクション論を前提とすることが、本研究の基本的立場であることを確認する。

第Ⅲ章では、実際の遺跡出土資料の接合事例を検討することで、両面調整石器群のリダクション構造を把握する。時期的・地域的な固有性を捨象した一般モデルの提示を目的とする。**第Ⅳ章**でも具体的な遺跡出土資料を取り上げ、個別遺跡での石器の定量的な検討も含めて石器群の遺跡への残され方＝遺跡形成構造を把握する。**第Ⅴ章**はリダクション構造と遺跡群の形成構

造との２点からなる、両面調整石器群構造のモデルを提示し、あわせて両面調整石器群の時代背景とその歴史的意義について評価をおこなう。簡潔に記述した章ではあるが、この第Ｖ章が本研究の実質的な結論に相当する。

第３部の第Ⅵ章以下は、各章ごとで完結した内容となっている。第２部では一般モデルの抽出を行ったが、実際の遺跡・遺物はすべて具体的な地域・時期の歴史的・環境的な文脈の中に存在している。これらの個別文脈の中での研究こそが重要であり、第２部で提示したモデルは、個別研究のための前提を整理したに過ぎない。しかし各地の資料的条件の違いにより、すべての地域・時期で同質な事例研究を展開することはできない。このために対象とする地域・時期ごとに均質ではない分析と結論になってしまうが、いずれも第２部で示したモデルを実際の資料に応用して、具体的・固別的な歴史的事象を解明する試みである。

第Ⅵ章では信濃川流域における第Ｉ期の小形尖頭器石器群について、真人原遺跡Ａ地点と同Ｃ地点の間での地点間接合事例と石材構成を中心に、関連遺跡や石材産地付近の遺跡を視野にいれて、広域遊動モデルを提示する。関連遺跡の情報が少ない地域であるために十分とは言えない分析内容であるが、当該地域の石材利用を行動論的な視点から体系的に論じた。

第Ⅶ章では、本州島北半における北方系削片系細石刃石器群のうち荒屋系石器群を対象として、リダクション構造の表現形が石材獲得地との分布論上の関係を有して遺跡間で変異する事例を示し、その解釈として回帰移動モデルを提示する。関連資料も多く先行研究の蓄積も厚い対象ではあるが、リダクション論の視点から新しい知見を加えた。

第Ⅷ章はアムール下流域のオシポフカ文化についての先行研究の整理であり、あわせて環日本海北半における国境横断的な比較研究のための前提について検討する。

第Ⅸ章は、近年筆者がフィールド調査を開始したノヴォトロイツコエ遺跡群のうち、ゴンチャルカ１遺跡の 2001 年調査の概要である。

終章では補足的な論点と時代区分の評価について簡潔に述べる。

註

1）小稿でいう更新世終末期は、文化イベントとの比較を念頭に置き、最古ドリアス期の開始から新ドリアス期の終点までを中心に、その前後までを含む時期とする。「更新世・完新世移行期」は考古学の文脈では小稿とほぼ同じ幅広い時間範囲に用いられることが多いが、狭義には新ドリアス期の終わりという限定点を意味することもあり誤解を招く恐れがあるために、これを用いない。

第１部　研究史

第Ⅰ章　日本列島における更新世終末期の考古学的研究

本章の構成

日本列島における更新世終末期の考古学的研究は、縄文文化起源論および旧石器終末の編年研究として進められてきた。本章ではこれらの検討から今日的な問題を明らかにする。しかし関連する諸研究は膨大であり、この目的のために次の３点に絞って検討する。①縄文文化起源論の枠組みの中で構築された「草創期」という概念（第１節）。②岩宿遺跡の発見以後に生じた後期旧石器の編年研究（第２節）。③学説の対立から生じた「神子柴・長者久保文化」の性質（第３節）。最後に、これらの枠組みが ^{14}C 年代の暦年較正とアムール流域を中心とするロシア極東地域の資料によって揺らいでいる点を指摘する（第４節）。

第１節：縄文文化起源論と「草創期」概念

（１）「草創期」提唱前史

人類が現生類人猿との共通の祖先から分岐して進化した一連の過程が、最初から全て日本列島内で進行したと考えないかぎり、日本列島最古の人類は論理上、必ず大陸から渡ってきたことになる（註１）。かつて日本列島最古の人類と考えられていた縄文文化は、日本列島の内部で自生したのではなく、大陸に起源を求めるべきとの考えは、濱田耕作（濱田 1929a、b）や山内清男（山内 1932）が記している。形質人類学にも似た議論があり（清野 1923－1985）、当時の通念といえる。また八幡一郎は、縄文の石器の系譜を「蒙古やシベリア」など大陸北方に求めた（八幡 1936 など）。これは具体的な人工遺物を採りあげて大陸起源説を展開した早い研究例である。

山内は、縄文文化の由来の解明には最古の土器の確定が必要と説き（山内 1932）、日本列島の各地で「古式土器」の探求が進んだ（八幡 1932、白崎 1941 など）。「最古の土器」を確定してこれを「大陸起源」で説明する論法は、江坂輝彌の南北二系統論を生んだ。江坂は、撚糸紋土器と押型紋土器を、時間的並行関係にある日本列島最古の土器とし、前者は北方ルート、後者は南方ルートで伝来して、両者の融合が縄文文化を生んだと説いた（江坂 1943、1944）。だがまもなく撚糸紋土器の編年の変更で破綻した（芹沢 1947）。この南北二系統論は、起源論の展開には厳密な編年が必要との教訓として、学説史上では評価されている（戸沢 1964、橋本 1988b など）。しかし反省は最古土器の追求手続きにとどまり、「大陸に由来する」との枠組みは後にもひきつがれた。この問題構成を「最古土器大陸起源テーゼ」と呼んでおく。

1949 年の岩宿遺跡の調査で、縄文文化の包含層よりも下層のローム層中に包蔵された土器を伴わない石器群の存在が示され（杉原 1950、1953）、縄文文化は列島内最古の人類ではなくなった。ここに、先行する時代からの変遷の中に縄文文化の発現を探る、新しい問題が生まれた（芹沢 1954）。ローム層中の石器群は先土器（杉原・戸沢 1960、杉原 1963）や旧石器（芹沢 1962）とも呼ばれ、その変遷がある程度明らかになると、土器の出現前後で石器に大きな断絶はなく、連続的に移行する可能性が高まった。この移行の段階として、杉原荘介が「原土器時代」（杉原 1967）、芹沢長介が「晩期旧石器または中石器」（芹沢 1967a）を提唱した。このように石器の連続性に注目する展望を「列島内石器変遷パースペクティ

ヴ」と呼んでおく。「最古土器大陸起源テーゼ」と「列島内石器変遷パースペクティヴ」、この２点が更新世終末期研究の問題構成を規定していくのである。

（２）山内清男の「草創期」

1962 年に山内らが提唱した縄紋「草創期」は、かつて江坂らが最古とした押型紋・撚糸紋より古い土器群が多数確認されたことを受け、早期の土器の古い群を分離したもので、①土器の出現を縄紋文化の開始とする、②縄紋文化の由来は大陸にある、③芹沢の長期編年（後述）を批判し縄紋文化の開始を 3000B.C.(後に 2500B.C.に訂正）とする（短期編年）、との内容であった（山内・佐藤 1962、山内 1969)。伝統的な最古土器大陸起源テーゼに年代観を与えたもので、これを「山内草創期」と呼ぶことにする。

この山内草創期は縄文土器の編年研究の概念であり、細別単位の「型式」や、大別単位の「早期・前期・中期・後期・晩期」と同じ、年代学上の単位であった。大塚和義が指摘したように、歴史的意義や時代背景等の評価を含めた時代区分・時期区分ではない（大塚 1968b)。当時ほぼ編年の大枠が得られていたローム層中の石器とは無関係に、縄文土器の編年体系の完成を目的とした研究の一環である。白石浩之が指摘するように（白石 2001b、p306)、前時代からの石器群の連続・変遷や移行期などとは無関係になりたつ論法に特徴がある。さらに大塚達朗が指摘した「日本列島の範囲を所与として、外から孤立的だが内的に安定した文化圏の中で、各土器型式は等価で一元的に連続した縄文土器」という、山内の縄文土器編年体系の前提（大塚 1999）も共有している（註２)。このような性質をもつ山内草創期は、ローム層中の石器からの連続に着目する列島内石器変遷パースペクティヴの立場には、連接しにくいものであった。

（３）小林達雄の「草創期」

山内の没後、小林達雄は「土器の出現をもって縄文時代の開始とする」との論点と「縄文草創期」の用語を継承しながら（小林 1962、1974)、芹沢の長期編年（後述）の年代観を採用してローム層中の石器群を更新世の旧石器と認め、撚糸紋系土器を早期にくり上げた（小林 1977、1979)。これを「小林草創期」と呼んでおく。小林が精力的に展開した議論は、土器の出現とは人類史上初の化学的変化による容器の製作であり、食料事情の安定や男女の分業を進めるなど大きな歴史的意義を持つために、これをもって縄文時代の開始を定義することが妥当である、との内容である（小林 1971、1974、1979、1982、1989、麻生ほか 1980 など)。ここには谷口康浩が指摘したように、「山内の年代観に従わず、^{14}C 年代に基づく年代を採用するのであれば、『縄文時代』という時代概念があらためて問われることになり、なぜ土器の出現が縄文時代の開始としての意義をもつのかが説明されなければならない。『草創期』は『土器出現の歴史的意義』という新たな根拠によって『縄文時代』のはじまりとしての位置付けを得ることになったのである」（谷口 2002 p 25）との事情がある。土器出現の歴史的意義は別にも論じられていたが（岡本 1962、近藤 1965、渡辺 1968)、これを山内から継承した草創期と結びつけた点に、小林の独創性がある。土器の歴史的意義を説くことで、草創期の概念を用いながら長期編年の年代観をとる、との学説史上の矛盾（註３）の解消をねらったと言えよう。また起源地については、後述する芹沢の土器出現多元説（芹沢 1959、1962）を支持した（小林 1987)。だが土器の列島内自生の可能性（麻生ほか 1980 の麻生発言など）には否定的で、東アジア大陸部での自生に賛同した形であり、山内との相違は微妙である。山内の大陸起源説は、西アジアで一元的

に出現した土器が、シベリア経路で伝播したとの前提から短期編年の年代観を導く点で小林と異なっていたが、由来を列島外に求める枠組みでは共通する。

小林草創期は、列島内石器変遷パースペクティヴとの整合も試みられたため、「草創期」の用語は広く受け入れられた。しかしどれほど旧石器からの連続性を重視しても、土器出現を縄文の開始とする発想は、そもそも最古土器大陸起源テーゼと表裏一体のもので、前時代からの連続とは無関係な論法である。たとえ「土器出現の歴史的意義」を強調し、旧石器からの連続性を重視しても、論理的なねじれは残る。岡本東三は、最古の土器がどれほどさかのぼっても、すべて縄文時代に組み込む論法を批判している（岡本 1999）。多元発生説で西アジアよりも古い 10,000B.P.を遡ってよい、としつつも列島外に求めた、土器の起源地も同様である。小林草創期は年代観を改めることで普及したが、山内草創期の抱えていた本質的な問題もまた、継承したものであった。

（4）「草創期」を認めない立場

土器の出現を縄文時代の開始としない立場もあった。鎌木義昌は、最古土器が縄文文化の起源に結びつくとは限らないと論じ、福井岩陰で細石刃に伴った隆起線紋と爪形紋（鎌木・芹沢 1965）をはずして、押圧縄文・撚糸文土器からを縄文土器・縄文時代とした（鎌木 1965、1966）。林謙作は、土器が出現した段階では日本列島の東西で石器組成が異なり、早期以後の「縄文的なトゥール・キット」が未完成として「草創期」を疑問視し（麻生ほか 1980）、後に土器の検討でも隆起線紋土器以降を「型式」が成立するとして縄文土器と認め、その前の無紋などの土器は縄文土器ではないとした（林 1993）。また山内草創期の年代観を継ぐ岡本東三は、石刃技法が残るうちは先土器時代と論じて、石刃を伴う「神子柴・長者久保文化」の無紋などの土器を、「草創期」からはずした（岡本 1986a、1986b、1993、1999）。いずれも石器への配慮で共通しており、同じく石器を重視した、後述する「原土器時代」や「晩期旧石器もしくは中石器」などの設定にも通じる。しかし縄文土器と縄文土器でない土器とを分ける実際上の基準は、研究者間での共有はむずかしい。逆に、日本国内で出土した古い土器でさえあれば一系の縄文土器に組み込む発想は、当否は別に論理的には明快である。このため一部の「最古の土器」を縄文土器からはずす考えは、小林草創期ほど広くは普及しなかった。

一方で岡本明郎や近藤義郎は、後氷期の技術革新の意義を論じた（岡本 1962、近藤 1965）。近藤は日本列島の資料を中心的に論じはしなかったが、人工遺物の編年に終始する議論から抜け出して大きな影響を与えた。宮下健司は、後氷期の技術革新を考える上で「すでに文化・時代が認識されてしまった」「草創期などの時期区分」による思考は矛盾が生じるとし、作業仮説として「土器出現期」を提唱した（宮下 1976）。春成秀爾は「技術的革新だけで時代の先後を画したり歴史的叙述をしようとすること」は「方法的に誤っている」（春成 1976p69）と批判を加えた上で近藤を継承し、先土器、縄文草創期と早期、縄文前期以後の３段階の枠組みで、「社会構造」を捉えようと試みた（春成 1976）。春成の着想は、縄文時代の全体を歴史的評価も含めてまとめなおし、山内の土器六期区分をその中に解消する見解（鈴木 1984、泉 1999 など）に継承された。土器や石器といった人工遺物の編年だけでなく、環境変化や生業、集落の定住性、社会組織など生活内容の変化を重視するこれらの立場は、「縄文草創期」を用語上は便宜的・暫定的に使用することはあっても、本質的な縄文時代の開始とは見ない点で共通する。しかし考古学上の時期や時代の区分は、原則

的に土器や石器など人工遺物に基づくべきとの文化史的な立場（土肥 1982 など）とは、議論がかみ合わない。また後氷期の技術革新の中に土器も含む点では、「土器出現の歴史的意義」を強調する小林草創期と、親和的な側面もある。

このように 1990 年代前半までの縄文文化起源論には、①土器編年研究の枠組みから、山内草創期と小林草創期との両者を含む、土器の出現を縄文時代の開始とする立場、②石器も重視して、土器の出現を縄文時代の開始としない立場、③人工遺物の編年だけではなく、後氷期の環境適応としての生活内容の変化から時代区分を考える立場の３者が提示されていた。

第２節：後期旧石器終末期の編年研究

（１）列島内石器変遷パースペクティヴの展開

岩宿調査以後に現れた、縄文時代よりも古い時代から石器の変遷を追う研究を、列島内石器変遷パースペクティヴと呼んだ。旧石器の編年研究に力点があり、最古土器の確定をめざす縄文文化起源論とは、同じような資料群を研究対象としながら目的が異なる。

杉原荘介は、岩宿文化→茂呂文化→上ノ平文化→縄文文化の見通し（杉原 1953）から、先土器時代の敲打器文化→刃器文化→尖頭器文化→細石器文化（杉原 1965）を経て、先土器時代→原土器時代→縄文時代（杉原 1967）との枠組みを与えた。芹沢長介は、ローム層中の「無土器文化」の変遷を hand axe→大形 blade・縦長 flake→knife blade→切出形石器→point の４段階と予察し（芹沢 1954）、「～無土器文化の point 群以下の小形石器が解明されたとき、はじめて縄文文化の発生が確実な根拠をもって語られ得るであろう」（芹沢 1954p101）との方針で調査を展開して、後に point（尖頭器）に後出する細石刃や（芹沢 1961）、細石刃に後続する有茎尖頭器（芹沢 1966）の編年を示した。はじめ芹沢は列島内の編年整備を優先し、大陸やヨーロッパの旧石器との対比には慎重であった（芹沢 1954、1957 など）。しかし後に夏島貝塚の ^{14}C 測定値（杉原 1959、1962）を受け、また石器の発見で活性化したローム層自体の地質学的研究の成果を評価し、日本列島でもローム層中の石器群は更新世の「旧石器」であると論じた（芹沢 1962）。これが長期編年である。この年代観への反論として、先述の山内草創期の短期編年が提示されたのである。また西アジアとは別に、細石刃文化を母胎として東アジアで独自に土器が発生した可能性を説き（芹沢 1960）、山内とは異なる論法から土器の大陸起源を探った（芹沢 1967b）。

杉原と芹沢の枠組みは、時代呼称の結論には大きな相違もあるが、示準石器に着目した段階的把握との方法では共通しており、杉原の「示準石器名＋文化」との用法や、芹沢が示した変遷観は後の研究に継承されていった。この時点までの成果をまとめたのが戸沢充則である。戸沢は示準石器による段階的把握の方針と、その作業が目指す目的とを明確に理論化し、時代文化・階梯・様相・石器文化の４階層からなる時間軸上の段階を、地域文化が空間的に規定してゆく形で、文化史の構造モデルを提示した（戸沢 1975、1990）。戸沢のモデルは体系的で純化されていたが、研究の前提があくまでも考古学的文化の段階的把握であるところに、当時の研究水準からくる限界を認めざるを得ない。

（２）文化史的アプローチの編年研究

1970 年代以後は土地開発に伴う緊急調査の増加を受け、調査事例や資料数、研究者人口が急増した。重要な議論が多いが後に必要に応じて触れることにして、ここでは 1980 年

代の研究を牽引した、白石浩之・栗島義明・稲田孝司の３者を検討する。

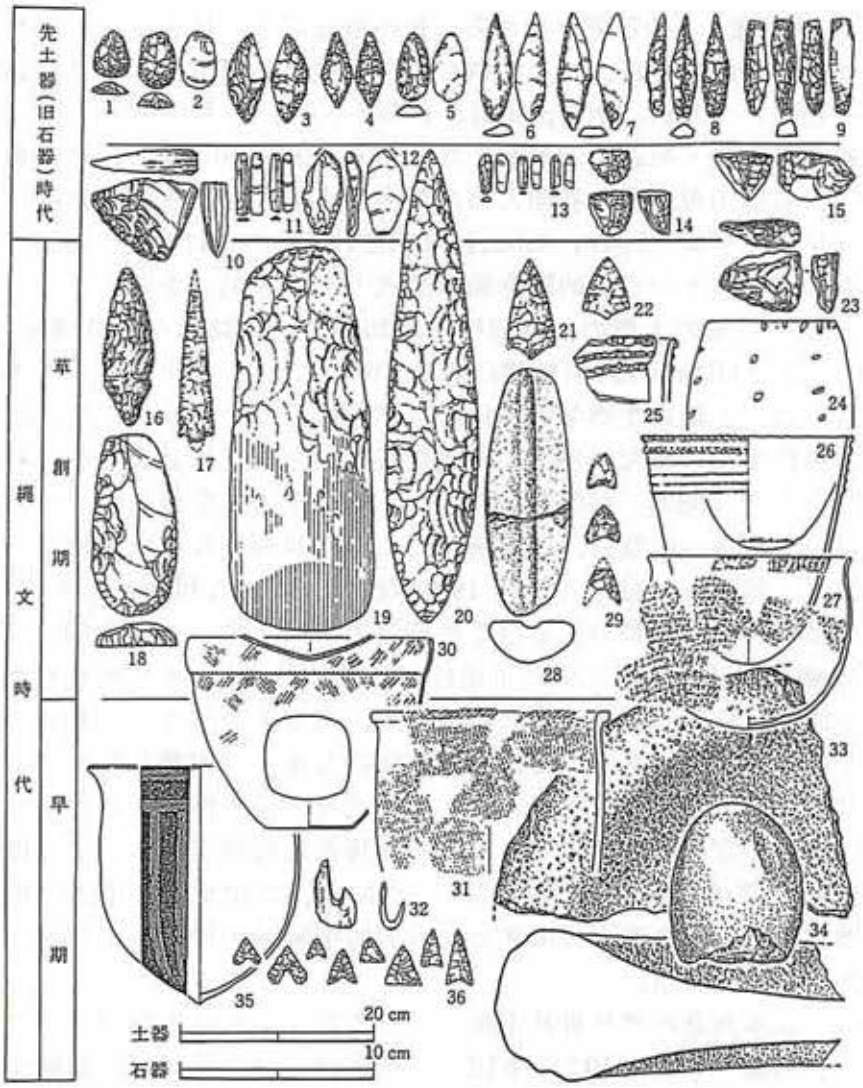
白石と栗島は、縄文土器の編年研究の緻密さを理想とした型式学を手法に、緊急調査で増加した石器資料の細分編年を推し進めた。これを文化史的アプローチとよぶ。方針としては初期の芹沢の路線を深めたと言える。白石はナイフ形石器や尖頭器の形態分類とその組成に着目していたが（白石 1973、1976 など）、後に形態分類とその組成、それらの変遷を、相模野台地の層位的出土例で裏付けた上で、これを基準に列島内の各地を対比した。年代観は小林草創期に従い、「石槍」の変遷を「旧石器時代」に４段階（白石 1989）、「縄文草創期」以後をあわせて７段階（白石 2001）に設定した。相模野台地でも層位的出土例を求めにくい「草創期」以後については、層位のかわりに土器編年を基準として、有茎尖頭器に６段階（白石 1988a）、「旧石器終末から縄文草創期」の石斧に３段階（白石 1992）の変遷を説いた。白石は「神子柴・長者久保の石器群」などの大陸からの伝播を認めてはいるが（白石 1989 p 94）、むしろ角錐状石器を祖形に有茎尖頭器に到る「石槍文化」の、列島内での連続的な変遷を重視している。

一方の栗島も小林草創期に従ったが、本州島の細分編年の中でどの時点に北方からの伝播が到達するかの特定を狙った。有茎尖頭器を５段階に細分しその傾斜編年から「北海道から本州へ」の伝播を説き（栗島 1984）、また「渡来石器」の限定的な時間幅や分布傾向から、有茎尖頭器とは伝播系統が異なるとした（栗島 1986a）、さらに後述する「神子柴文化」を２段階４階梯に細分した（栗島 1988a）。以上をまとめ、「最初は石斧・石槍そして土器の渡来であり、次に有茎尖頭器、そして半月形石器、石鏃、断面三角形錐、矢柄研磨器の渡来である」と、３回の「北からの渡来」による縄文文化の開始を説き（栗島 1991）、「最初の伝播」である石斧・石槍・土器の具体的な起源地として、アムール下流域のオシポフカ文化を名指した（栗島 1991、1999）。しかし栗島の細分編年は型式学と組成論を主とし、層位的には未検証な場合が多い。層位による新旧関係の分解能力を超える細かさを追求しすぎた観もある。層位情報を欠く細分編年は、石器の形や組成に新旧判断の根拠を求めるが、この論法は次章で検討する遺跡間変異論とリダクション論からの批判に弱い。

（３）稲田孝司の「縄文変革」論

後氷期の技術革新を説いた近藤の視点を、列島内の人工遺物で具体的に論じたのが稲田である。稲田は、「動物を狩るために用いられた道具と考えられる槍先用石器」の消長に表れた「狩猟具の変革過程」と、土器や磨石・石皿類の出現と普及に表れた「植物性食物調理具の変革過程」からなる「縄文変革」を論じた。特に「槍先用石器」の変革は、ナイフ形石器群など列島内の先行文化の中から生まれたと評価し、「細石刃文化」や「神子柴文化」の伝播・流入は認めつつも、「縄文変革」は日本列島に以前から居住していた人々の内部から生じたと強調した（稲田 1986）。列島内での内在的な連続性を、技術革新や生産力増加など史的唯物論の観点から、生活内容にふみ込んで論じた点が特徴である（**図 1.2.1**）。

また縄文文化の発生を、土器出現との単一の基準ではなく、長い時間をかけた複数の変化過程の統合として理解する立場は、石器にも配視した先述の鎌木や林と共通しており、土器の出現のみを根拠に「草創期」を置く立場と相容れないはずである。そこで稲田もはじめは「中石器時代」を提唱していたが（稲田 1982）、後に撤回した（稲田 1986、p 71－72）。杉原の「原土器時代」や芹沢の「晩期旧石器もしくは中石器」に続き、先述の宮下健司の「土器出現期」以後も、「中石器文化」（加藤 1992）、「移行期」（安斎 1996）など



1・2掻指形掻器、3東内野型尖頭器、4—6尖頭器、7ナイフ形石器、8下城型尖頭器、9角錐状石器、10白滝型細石核、11・13細石刃、12荒屋型彫器、14円錐・角柱形細石核、15船野型細石核、16・17・21・22有茎尖頭器、18掻器、19神子柴型石斧、20神子柴型尖頭器、23福井型細石核、24豆粒文土器、25・26隆線文土器、27爪形文土器、28矢柄研磨器、29石鏃、30多縄文系土器、31撚糸文土器、32釣針(左は未成品)、33石皿、34叩き石・磨石、35押型文土器、36石鏃
1・2・5東京都仙川、3千葉県東内野、4長野県上ノ平、6群馬県武井、7埼玉県砂川、8・9熊本県下城、10・11北海道置戸安住、12新潟県荒屋、13・14長野県矢出川、15宮崎県船野、16北海道立川、17新潟県小瀬ケ沢、18—20長野県神子柴、21長野県柳又、22愛媛県上黒岩、23—25長崎県泉福寺、26長野県石子原、27福岡県門田、28岐阜県栃の洞、29広島県鳥渡、30新潟県室谷、31東京都多摩ニュータウンNo.五二、32神奈川県夏島、33・34神奈川県大丸、35長野県樋沢、36静岡県若宮

図 1.2.1 「縄文変革」の石器・土器の変遷（稲田 1986　図1引用）

の挿入案は繰り返し提示されたが、いずれも定着しなかった。先述の鎌木や林の立場が普及しなかった理由と同じく、小林草創期に較べた場合の基準の共有しにくさが考えられる。白石・栗島・稲田らは、列島内での内在的な石器の連続に小林草創期を不整合に接木した理解を共有していたが、この不整合は「移行期の激動の時代」や「大陸からの新文化の伝来」として説明されていた。

（4）狩猟具発展史観と「激動の時代」

これらの研究は、それぞれ独自性を持ちつつも2つの点で共通した認識に立っている。一つには「狩猟具発展史観」とでも呼べる前提で、おそらく根底には杉原・芹沢が示した示準石器の段階編年がある。ナイフ形石器→尖頭器→細石刃→有茎尖頭器→石鏃との石器の変化を、手持ちの石槍→より向上した手持ちの石槍→植刃槍→投槍→弓矢との、狩猟具の進歩・発展として評価する筋書である。ナイフ形石器や尖頭器の具体的な機能は不明と

されながらも、およそ「刺突具」「狩猟具」と想像されていた。戸沢充則は、ヨーロッパのソリュートレ論争を参照し、「想像」との前置きながら、骨の槍先が石の槍先に替わったとし「石のもつ重量感と、つめたい鋭利さが、とくに柄をつけて投げるばあいの槍には必要であったかもしれない」と述べた（戸沢 1965 p 160）。白石も、ナイフ形石器から尖頭器や細石刃への変遷を「狩猟具の改良・発達」と理解した（白石 1989 p 95 など）。「未熟から高度へ」とのシナリオは、石器出現以後の初期人類から現世人類までの生物学的進化を見すえた、ルロワ＝グーランのモデル（Leroi - Gourhan 1964[荒木訳 1973]）にも似て親しみやすい。また「生産力の増加」という史的唯物論の公式とも親和的である。

しかし現生人類である後期旧石器の人類の、脳容積や認知能力・生物的な身体機能は、現在の我々とほぼ同じとされる（Mithen1996[松浦ほか訳 1998]など）。ゆえに日本の後期旧石器の「狩猟具発展史観」は、人類の生物学的進化の全体を扱うルロワ＝グーランの射程とは異なる。また現生狩猟採集民の研究からは、狩猟採集民の生業には過少生産に特徴があること（Sahlins1972[山内訳 1984]）が明らかにされ、一見すると怠慢とも見える極端な労働量の低減、必要以上の乱獲への禁忌、産児制限による人口抑制など、生態学の立場からは生態系の破壊を防ぐと解釈され得る（西田 1996 など）、様々な規制が判明した。備蓄を伴う食糧生産社会では「歴史の原動力」となる生産諸力の向上や、これを促す技術革新は、狩猟採集社会では厳重に回避されていた可能性がある（註４）。そもそも狩猟具の威力は、狩猟場の地形や植生、狩猟パーティーの構成人数、毒・罠・犬などの有無といった個別条件に強く規定される可能性があり、これらの具体的な復元が困難な現状では、道具の石器部分のみを取り出して優劣を論じることに、どれだけの妥当性があるのか評価が難しい。日本列島内という狭い空間範囲の中で、はじめは稚拙な狩猟具がやがて高度化するとの歴史像は、一面的にすぎはしないか（註５）。ここには、文化史的な手法で把握した現象面の変化（＝石器文化）を、生産力の増加という史的唯物論の枠組みで解釈しようとする、論理の飛躍があるかに見える。

もう一つの共通する像は、日本列島の更新世終末期についての「比較的短期間におけるめまぐるしい石器群の発生、消滅」（鈴木 1974、p12）、「それは一口で言えば、激動する時代といえる」（白石 1992、p 463）との理解である。代表的な石器の組み合わせや消長を把握する文化史的アプローチでは、示準石器は「時期」や「集団」を表わすとされることから、さまざまな石器が現れては消える現象は、「時期」や「集団」のめまぐるしい消長との理解を導く。稲田も「この間に多くの道具類が発生し、伝播し、変容し、消滅し、またいくつかの人間集団が日本列島の一部へ渡来し、在地集団と融合した形跡もみとめられる。長い先土器（旧石器）時代や安定した縄文時代にくらべれば、やはり動きの激しい時期であったといわなければならない」（稲田 1986、p 104）と述べている。石器の「目まぐるしい変化や激動」は、気候変動への適応のための試行錯誤（鈴木 1974、p 14）、あるいは北方からの伝播が複数回あった結果（小林 1993 p 221）とも説明された。しかし後述するように、今日ではこの「激動の時代」は、物理的な時間幅ではかつての予想よりも大幅に長い可能性が指摘されている。

このように文化史的編年や史的唯物論が抱いた「狩猟具発展史観」や「短期間の激動の時代」との理解には再考の余地がある。しかしながら、土器出現の歴史的背景を知る上でも、土器が出現する時点よりも以前から以後までの長い段階の変化を総合的に理解する必

要があるとの立場それ自体は、継承されるべきであると考える。

第３節　「神子柴・長者久保文化」批判

（１）本ノ木論争の構図と「神子柴・長者久保文化」

いわゆる本ノ木論争（芹沢・中山 1957 、山内・佐藤 1960、芹沢 1966、山内 1969 など）は、最古土器大陸起源テーゼの山内清男らと、列島内石器変遷パースペクティヴの芹沢長介との思考の違いが、同一の遺跡での出土層位や供伴関係など、事実認識レベルでの見解に齟齬をきたしたものである。学説史上の教訓に富むとして繰り返し検討(小林 1975b、栗島 1986、島立 1988、橋本 1988、白石 1990 など）されてきたが、この対立構図を強く反映した議論は他にもある。いわゆる「神子柴・長者久保文化」をめぐる諸問題である。

芹沢は、福井岩陰で隆起線紋土器と細石刃との供伴を認め（鎌木・芹沢 1965)、隆起線紋土器を列島最古の土器とし、細石刃文化が縄文文化の母体であると論じた（芹沢 1965、1967ｂ)。一方で山内らは、神子柴遺跡や長者久保遺跡の円盤形の局部磨製石斧を、シベリア新石器バイカル編年のイサコヴォ期に対比し、これらこそが外来した縄文文化の母体であると説いた（山内・佐藤 1962、山内 1969)。佐藤達夫は「長者久保・神子柴文化」を無土器文化の終末期で細石刃・石鏃・土器を伴わないと規定し、長者久保をバイカル編年のイサコヴォ期、神子柴をセロヴォ期に対比した（佐藤 1971)。この時点では土器の供伴は未確認で、大陸の新石器の特徴的な石器と、日本列島の無土器文化とを対比できるとの可能性が優先された。

しかし後に、本州島では「神子柴・長者久保文化」に土器や細石刃・有茎尖頭器などが伴う複雑な事例が明らかになり、「神子柴系文化」の提唱（森嶋 1967、1968、1970)、純粋な神子柴と変質した神子柴の区別(白石 1988b)など、議論は錯綜を深めた(岡本 1999)。「細石刃文化」と「神子柴・長者久保文化」との接点を探る試み（稲田 1993）は少なかった。「神子柴・長者久保文化」への土器の供伴が知られていない間は、芹沢説に説得力があった。しかし隆起線紋土器は「神子柴・長者久保文化」よりも後出の、有茎尖頭器に一般的に伴う土器であることが明らかになった（江坂ほか 1967、鈴木 1974 など)。加えて「神子柴・長者久保文化」に無紋土器を伴う事例が次々と確認され（白石 1988b など)、それらが隆起線紋土器よりも古い土器である可能性を指摘された（栗島 1988b など)。

しかしこれらの経緯をもって山内らの認識が結果的に正しかったと評価（岡本 1986ｂ）することはできない。シベリア・バイカルのイサコヴォ文化からの伝播と見なすことには、やはり無理があるからである。

（２）北方地域の状況

山内らが特徴的な石斧をバイカル編年と関連付けたこと、本州島に限定すると関連資料が東北地方に多く分布することから、「神子柴・長者久保文化」は、北からの伝播と理解されていた。しかしシベリア・バイカルからの伝播を考える場合、中間地帯であるアムール流域や大陸沿岸部、北海道島の理解はかかせない。山内らが伝播説を提唱した以後に、これらの地域でも資料の蓄積が進んだ。^{14}C 年代が近似し石器群の内容も「神子柴・長者久保文化」に近いアムール流域のオシポフカ文化、極東沿海州のウスチノフカ文化、北海道島の忍路子石器群では、細石刃と大形尖頭器との供伴が一般的に見られ、局部磨製を含む多様な石斧も認められる。しかし本州島の意味で「典型的」な、すなわち細石刃・石鏃・

土器を伴わない「神子柴・長者久保文化」は確認されていない（註６）。土器の供伴が確実視されているオシポフカ文化は、細石刃を安定して組成する。ウスチノフカ文化も多様な両面調整尖頭器と細石刃の組み合わせだが、土器の供伴は評価が別れている（小畑 2002）。忍路子石器群は細石刃と有茎尖頭器の組み合わせだが、土器の供伴は確認されていない。

本州島とくに関東平野から中部地方では、「石器文化の段階編年」として「細石刃文化」を明確に前後から分離できると理解されているが、アムール下流や沿海州、北海道島などの北方地域では、細石刃と大形尖頭器・石斧とは、互いになんら排他的な関係にあるものではない。北海道島には忍路子石器群の他にも、細石刃を伴わない大形尖頭器を主体とする石器群があるが、土器を伴わない上にその編年的位置付けは有茎尖頭器よりもさらに新しいとされており（寺崎 1999ｂなど）、本州島と逆転している。また北海道島の円鑿形石斧・局部磨製石斧は、単独出土例や組成が不明な資料が多い（山原 1998 など）。「神子柴・長者久保文化」に特徴的な石器の断片的なあり方という点で、むしろ本州島西南地域や九州島（綿貫 1992 など）に似ている。このような状況は、本州島の「神子柴・長者久保文化」が北方から伝播してきた、との理解と整合しない。

（３）「神子柴・長者久保文化」の今日的理解

これら山内らの枠組みに整合しない事例の蓄積をうけて、「神子柴・長者久保文化」を相対化する動きが始まった。小畑弘己は、北東アジアの更新世終末から完新世初頭の広域に共通する現象の一部としての本州島の地域色と理解し（小畑 2000）、安斎正人は、はじめて大陸渡来説を明確に批判して本州島内での自生（内在的形成）を唱えた（安斎 2002）。また谷口康浩は、「神子柴・長者久保文化」と呼ばれてきた石器群に広く確認できる、異なる機能の場の間を石器（特に製品）が転移しながら動くように見える現象を「石器のトランスファー」とよび、それまでの同一集団の行動連鎖の中に完結していた石器製作にかわって、分業や製品補給による石材受給システムの出現、交換システムの変更などを示唆し、複数の集団間や地域を横断する「開放性」に特徴があると論じた（谷口 2003）。谷口の議論は、本州島の従来の「典型例」以外にも、「神子柴・長者久保文化」的な石器が細石刃や有茎尖頭器など多様な石器群に部分的に伴う事例や、北海道島や九州島、南関東などで在地の伝統を残す石器群に、「神子柴・長者久保文化」的な石器が、やはり断片的な要素として入り込んでくるあり方など、広範な現象を説明できる可能性がある。

各地で新しい調査事例の蓄積の上に、今日このような諸説が提出されたことを見ると、「神子柴・長者久保文化」を実体視するべきではないかもしれない。谷口が説く、埋納や集約的生産に支えられて石器の単品が広域に流通・移動してゆくシステムの、可視的な一部の表現型をとらえて、これをあたかも「細石刃文化」に対峙する石器文化や、段階編年の一階梯として錯視していたにすぎない可能性がある。「細石刃文化」と「神子柴・長者久保文化」とが、互いに異なる「文化」として対峙したかのような、またそれらの担い手の集団も全く異なる存在であるかの印象は、山内説と芹沢説の対立が生んだ効果によって生じた部分が少なくないのではないか。すなわち「神子柴・長者久保文化」とは、本ノ木論争と同じく、最古土器大陸起源テーゼと列島内石器変遷パースペクティヴとの対立から生じた、学説史上の奇形な概念にすぎないのではないか。山内の「渡来石器」も同根である。

（４）渡来石器という発想

山内は、縄文文化の大陸起源説を証明するために、また芹沢の長期編年の年代観に反論

するために、「神子柴・長者久保文化」の円盤形石斧の他にも、矢柄研磨器・断面三角形の錐・植刃・半月形のナイフなどを、いわゆる「渡来石器」として論じた（山内 1969）。しかし一般的に、地域性が強く現れる土器と比較して、石器は相対的により広い範囲で共通性が見て取れることが普通である。「日本国」の内部に見られる特定の石器現象が、大陸部を含む広域に広がっていることは、その石器現象が大陸起源であることの直接的な根拠になるわけではない。はじめから「大陸起源のはず」との前提に立って、国内の例と類似する資料を大陸に探せば、もとより石器は広域に共通するので、いくらでも「起源地の候補」を「大陸」に見出すことは可能である。ここには空間範囲の問題、言い換えるならば、近代国民国家の領域を所与とした、一国史的な前提の問題が現前している。

第４節　起源論と編年論の揺らぎ

（１）問題構成の根幹

これまでの検討によると、日本列島の更新世終末期研究は、「旧石器時代から縄文時代への変化を明らかにする」との課題を立て、①これが外部からの新文化の伝来（土器や渡来石器などの大陸起源）なのか、それとも内部で自発的に展開したのか（石器の変遷や狩猟具の発展）、の二択を問うてきた。大局的には、戦前いまだ旧石器の存在が知られていない頃の主流であった外来説から、岩宿発見を経て内在説を基本とする理解へとシフトした。また②旧石器から縄文への変化過程は、比較的短期間に複数の石器器種がめまぐるしく消長したと理解された。表面的には相容れないかに見える諸学説も、根底では①と②の枠組みを共有しており、この枠組みに準拠した問題の立て方と回答の与え方が、更新世終末期研究の根幹としての研究プログラムであった。しかし 1990 年代の後半以後、この根幹自体が時間軸・空間軸の両面から揺らぎはじめた。

（２）時間軸の揺らぎ

年代学の北川浩之は、九州島の「縄文草創期」の土器を産出する遺跡の ^{14}C 年代を暦年較正すると、15,000cal.B.P.の晩氷期に遡る可能性を指摘した（北川 1994）。その意義を考古学の文脈から評価したのは小野　昭である（小野 1998）。小野は「個別の経験科学が達成した新しい成果を相互に比較してみると、いままでの基準からはみだすことがらが、基本的な問題に関していくつも出てきた」「事態の共通認識が、複数の学問分野間で形成されることが必要となっている」と述べ（小野 1998 p 286）、具体例として「縄文草創期」の暦年較正年代に触れた。これまで人工遺物研究の立場からの ^{14}C 年代への懐疑は、測定値の妥当性自体に向けられていた。しかし 1990 年代の中頃以後、^{14}C の暦年較正年代は、極地の氷床ボーリングコアの年縞堆積物から復元された、気温変化の寒暖曲線（GRIP Members1993)の刻みに採用され（Stuiver et.al.1995）、全地球的かつ異分野横断的な、共通の物差しとして機能し始めた。中緯度の日本列島でもこの寒暖サイクルは海底明暗縞（多田 1997）、湖沼の年縞堆積物（福沢 1995）に認められるという。「複数の学問分野間での共通認識」の重要性には、個別ディシプリン内の固有性に根ざす批判は届かない（註７）。まもなく大平山元Ⅰを嚆矢に、北川の指摘は本州島でも次々と現実化した（谷口 2000、2002、春成 2001 など）。

^{14}C 年代の暦年較正が与えた時間軸上の衝撃は、以下の２点に整理できる。第１に、氷期の冷涼な環境下で土器が出現していたことになる（堤 1999）。これは土器・石鏃・磨製

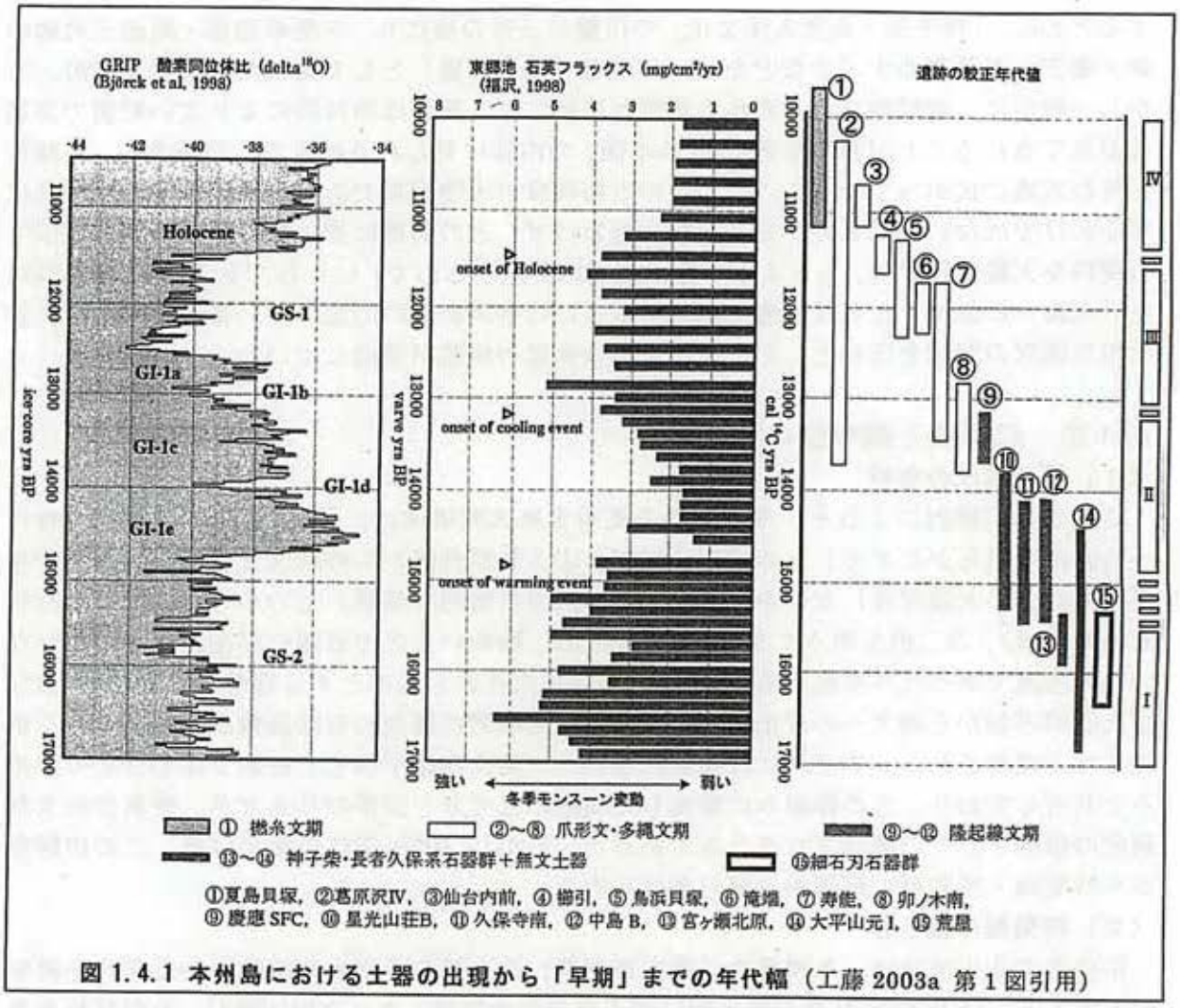


図 1.4.1 本州島における土器の出現から「早期」までの年代幅（工藤 2003a 第 1 図引用）

石斧の出現を「後氷期の技術革新」とみる歴史認識に再考を迫る。第２に、「移行期」全体の物理的時間幅が広がったことで、短期間に複数の石器がめまぐるしく交替した、との了解も変更を求められた。図 1.4.1 は工藤雄一郎が整理した、本州島における土器の出現から「早期」までの、^{14}C 測定値の暦年較正値と古環境変遷史の対比である（工藤 2003a）。これによると、土器出現から早期の撚糸紋土器までの時間幅は約 6000 年間にわたる。さらに最近公表されたデータ、継続年代幅が定かでない本州島の細石刃石器群―荒屋遺跡の ^{14}C 測定値で約 16,000cal.B.P.（北川 2003）や、稲田孝司が「縄文変革」の初発とした細石刃以前の小形尖頭器石器群―用田南原遺跡の L1H 層中部で約 20,000cal.B.P.（砂田 1999）などを勘案するなら、「短期間の激動」の移行期や「縄文変革」の全体は 1 万年間を超える物理的時間幅を有していた可能性が高まり、もはや短期間などではない。そもそも実年代を人工遺物の型式学や相対編年のみに内在して導くことは、原理的に不可能である。にもかかわらず、短期間に複数の石器が交替するとの見方は、主として人工遺物の消長から導かれたものであったところに限界があった。

この長大な時間幅にたいして、旧石器と縄文の間に「原土器」や「中石器」などを当てる立場が、今日再評価されるべき状況にある。もちろん、考古学の時代区分や時期区分を

実年代や環境などとは切り離して、人工遺物の特徴のみで規定することは方法論的には妥当との見解はありえる（田村 2003 など）。しかし単に時間軸との齟齬だけではなく、次にみる空間軸の問題も深刻といえる。

（３）空間軸の揺らぎ

ソ連の崩壊および東西冷戦の終結後、ロシア領の極東地域の情報が日本側にも入りやすくなり、10000 年を超える土器の存在が次々と明らかになった（オクラードニコフ・メドヴェージェフ[清水ほか訳]1990、加藤 1989、可児 1992, デレビャンコ・メドヴェージェフ 1993、梶原編 1995、シェフカムート[梶原訳]1997、梶原 1998、コノニェンコ[栗島訳]1999、大貫 1999、加藤 2000、小畑 2003)。また中国領でも 10,000B.P.年を遡る土器の検出が相次いでいる（佐川 1998)。小野はこの状況を「土器の出現＝縄文土器の出現＝縄文文化の成立＝縄文時代の始まり、という等式の射程が、概念として行き詰まっている」と総括した（小野 1989、p 290－291)。上記の等式は「草創期」と一体のものであるが、この等式の有効な空間範囲は日本列島に限定される。**図 1.4.2** には環日本海の土器出現期の主な遺跡を表わした。これらは尖頭器や細石刃に土器が伴い、理化学的年代の測定値が 10,000B.P.を遡る点で共通する(示した遺跡の中には数値年代が未測定だが人工遺物の特徴から評価して引用したものも含む)。考古資料の現象としては類似性が高いが、現在の国境を超えると異なった「文化」とみなされる。縄文文化・縄文時代という枠組みが、現在の日本国の領土を前提とするため、大陸の 10,000B.P をさかのぼる土器に関しては、土器が出現しても縄文時代とはみなされ得ないことを考えるならば、縄文文化起源論とは極めて空間固定的な議論である。すなわち、土器の出現をもって縄文時代とする、との発想は、あらかじめ空間範囲を限定する限りにおいて有効であるにすぎない。

逆に日本史の空間範囲の内では、各地の多様な実体が均質視され、この空間内の土器はすべて縄文土器となる（山内の縄文土器編年体系の前提にあった一系性)。現在の国境という境界線の内部では、北海道島や沖縄諸島さえ「縄文時代」となる。横山英介によると、北海道の縄文文化の開始状況は、南部の渡島半島のみ明らかで他では不明であるという(横山 1999）が、これは北海道島の全体に縄文時代という概念を適用すべきではないことを、はからずも示すかのようである。

このように日本の縄文という空間規定や、それを前提とした「縄文草創期」の概念は、その外部とされる資料と比較するにも、また内部とされる実体の多様性を評価するにも問題がある。今後は「日本の縄文」の起源を「大陸に」求める発想ではなく、環日本海の一定の広がりをもつ地域に、類似の状況が地域ごとの小変異を含みつつ各地で同時に進行したという理解（山田 1990・1995・1997、梶原 1998、小畑 2000 など)、または比較的広域に均質な状態から、地域性が析出する現象としての新石器化(大貫 1999)という視点で、国境横断的に把握する思考が必須となろう。大陸側のデータが日本側より粗いため、現状では比較に耐えないとの指摘（橋本 1988）もある。しかし調査の頻度、報告システム、研究者人口といった社会環境的な違いが大きく、大陸側の基準を日本列島側の基準に合うように変更することは、現状はもとより将来的にもむずかしい。このため、適用可能な地域を選別しない、中立的な枠組みの構築を追求すべきである。

（４）来るべき枠組みの条件

古環境復元や大陸資料との比較は古くから活発に議論されており、それ自体は目新しい

論点ではない。しかし年代学（^{14}Cの暦年較正）を媒介として、出自や背景の異なる複数の情報の統合が可能になったことは、かつて「自然科学」や「外国考古学」と呼ばれ、狭義の「日本考古学」の言説空間の外部とされてきた情報を統合しなければ、歴史的評価を議論できない状況を招来した。これは 1990 年代後半以後の固有な学的状況であり、従来とは質的に異なった問題の立て方と答え方を工夫しなければならない。このような学的事情の中では、一国史的な空間認識、それを前提とした土器の有無による旧石器・縄文の二分論による時間認識は、不都合である。「日本史」の延長としての「縄文文化起源論」に替わり、更新世終末期の気候変動に対する先史人類の適応行動の変化を明らかにする、との問題系を立てるには、「縄文文化起源論」とは異なる枠組みが必要である。

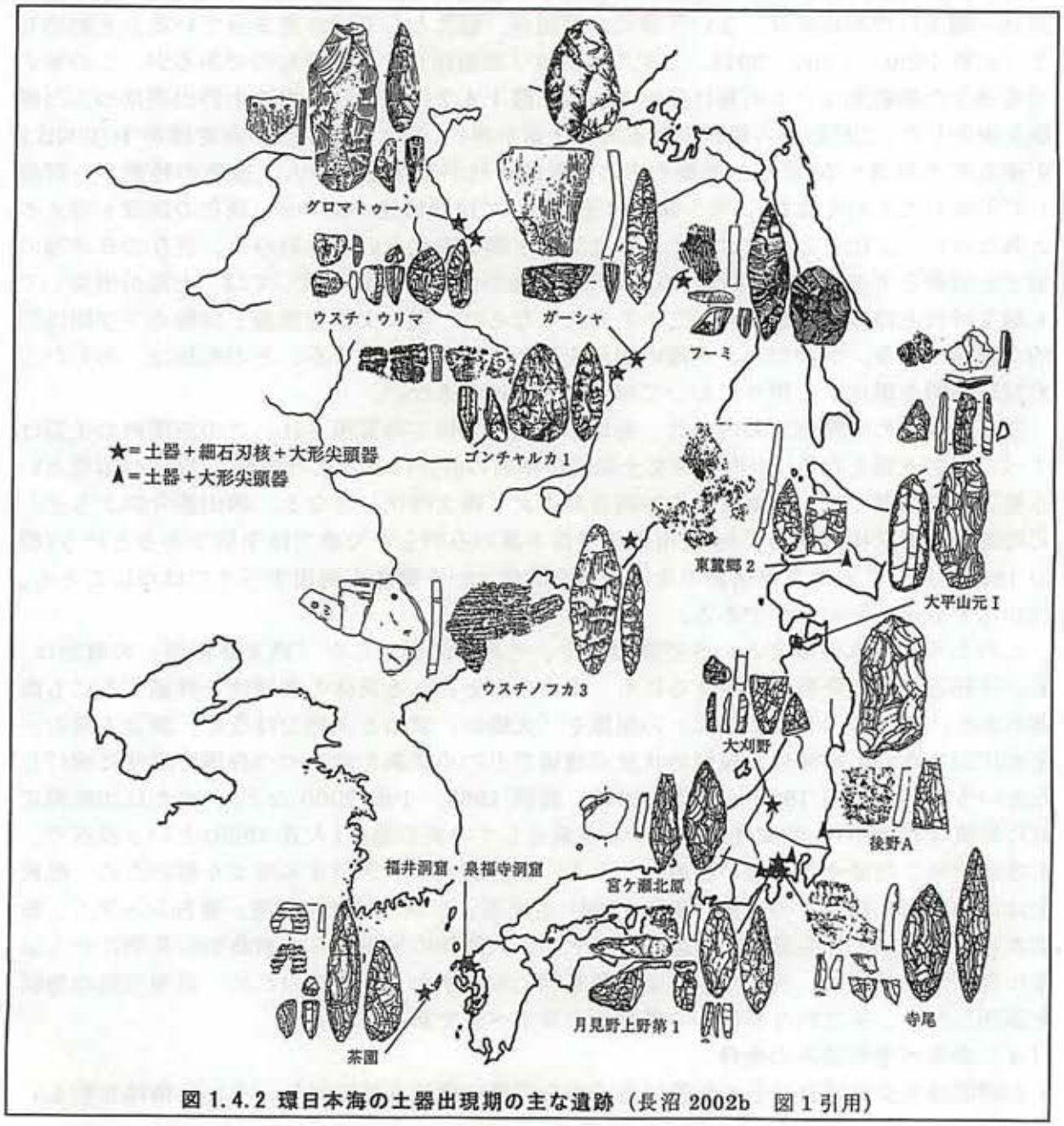


図 1.4.2 環日本海の土器出現期の主な遺跡（長沼 2002b　図 1 引用）

土器の出現という要素一点に過大な評価を与えるのではなく、土器出現の背景を出現以前からの流れの中で把握するには、石材利用の遺跡間連鎖や遺跡間変異の解明から迫る集団の移動・居住形態とその時系列上の変化を明らかにした上で、その流れの中での土器出現の位置や出現後の展開を把握するべきであろう。古環境変遷史との対比も人工遺物の個別的要素ではなく、移動・居住形態の変化とこそ関連させるべきで、このような問題に迫るには、石器資料が中心となる。石器に着目して連続性を追う立場は列島内石器変遷パースペクティヴの継承であるが、文化史的な編年にとどまらず、石材利用戦略や移動・居住形態など行動型の変化として理解する必要がある。

このような議論を可能にするための新しい枠組の提示が、本研究の目的である。この新しい枠組みを両面調整石器群とよび以下の各章で論じるが、その内容に入る前に次章では本研究が拠って立つ先行研究および理論的な前提を検討する。

註

1）今日でも、人類が日本列島内のみで出現・進化したことを示す積極的な証拠はないため、後期旧石器より古い石器の存非論争は、この「アジア大陸からの移住」モデルの適用範囲の内にある。今日的な視点から当時の諸説を断罪することははばかられる。

2）山内がこのような枠組みを形成した背景について、八紘一宇思想による大陸侵略を嫌った山内が、大陸部と関連付ける議論や大陸部資料の検討を意図的に忌避した（春成 1999）、時局に迎合せず大東亜共栄圏の構想にくみしない（大塚 1999）等の評価がある。先史考古学の問題構成に内在しない、研究者が置かれた社会的事情があったようである。

3）しかし山内本来の用法と異なる点への批判は繰り返された（岡本 1986、芹沢 1987 など）。これらに対して小林は「相対年代の問題と絶対年代は紙の表裏のように分離できないというものではなく、別々に検討を進める余地がある」（小林 1989、251 頁）と、論点をすりかえる形で応じているが、議論はかみあっていない。

4）これらの論拠は主に低緯度地域の現生狩猟採集民の観察であり、彼らは歴史的な過程で劣悪な環境に追いやられたに過ぎないとの「修正主義」も提唱されている（Wilmsen 1983 など）。この観点から、先史時代における中～高緯度地域の狩猟採集民を理解する上では、過少生産モデルの妥当性は評価しにくい、との反論はありえる。

5） 両面調整石器の評価も、おもに尖頭器としてこの文脈の中にあった。だが世界的には、両面調整の石器は古くからある。前期旧石器のハンドアックスはもちろん、中期旧石器のムスチエ石器群の一部にも薄手の両面調整石器がある。日本列島内でも武蔵野台地X～IX層の斧形石器など、後期旧石器の初頭から両面調整の石器は確実にある。

6）これらの地域では土層堆積が薄く、寒冷地性の土壌撹乱で埋没後に移動・混在している可能性もあり、一括性の評価は困難な場合が多い。細石刃と大形尖頭器や各種の石斧の供伴が一般的であるとの現象には、単純ではない側面もある。

7）ただしサンプルと人工遺物との供伴関係についての問題は原理的に残る。

第Ⅱ章　両面調整石器群の提唱と石器群の分析視点

本章の構成

本章では、前章で提示した条件を満たす枠組みの構築に向けて、本研究が立脚する立場の学説史を検討する。この目的のために以下の４点を検討する。①技術構造論的アプローチが導いた旧石器と縄文石器の原理的な違いに関する議論（第１節）、②旧石器と縄文石器との間の時間幅に展開した石器群に関する議論と両面調整石器群の提唱（第２節）。次に分析上の前提となる③リダクション論と④遺跡間変異論について（第３節）検討する。

第１節　石器群の構造的把握

（１）技術構造論的アプローチ

稲田孝司は、石器製作の全体を①器種単位と型式単位との関係、②技術基盤内での素材と調整技法との関係、③器種・型式と技術基盤の関係からなる「構造」として把握し、規格的な素材（石刃）の供給と部分的な調整加工からなる「旧石器的構造」が、発達した二次加工による素材形状の枠を越えた尖頭器製作の開始で、崩壊したと論じた（稲田 1969）。素材剥片の供給も含めて石器製作技術の全体を捉える研究方針は、完成品としての石器形状を型式とみなして、その漸次的な変遷を時間軸上の細かな刻みで追う型式学的な編年とは異なる。また小林達雄は細石刃石器群の石器製作全体を把握して、両面調整ブランクを事前に用意するシステムＡと、これを用意しないシステムＢとの対照的な枠組みを示した（小林 1970）。この研究は細石刃核以外の器種の素材供給への言及は弱いものの、後に削片系細石刃石器群の研究に継承された点で重要である。

これらのように、素材の供給から二次加工、製品化に到る石器製作技術の全体の把握を試みる研究を、技術構造論的アプローチと呼ぶことにする。なお構造（ストラクチャー）とは、「部分とそれらの関係からなる全体で、部分の変更に際して不変のもの」との定義に従う（註１）。これに対し、システム（体系、組織）も同じく「部分とそれらの関係からなる全体」ではあるが、「部分の変更によって全体が崩壊する場合があるもの」である。技術構造とは、部分的な技術が全体との関係を前提として成立していること、それらの部分的技術が変異しても、全体との関係性は不変であるような状態を意味する。

（２）〈旧石器〉と縄文石器の対照

稲田以後、旧石器時代の石器（細石刃や尖頭器も後期旧石器時代の石器ではあるが、稲田の議論をふまえて、石刃に代表される規格的な素材量産を特徴とする技術構造を狭義の旧石器とし、以後〈旧石器〉と表記する）と縄文時代の石器との違いを、技術構造論的アプローチの視点から対照的に説明する議論が生まれる。橋本　正は、尖頭器の出現から縄文石器への推移を「第二次加工のウエイト」が高まる過程ととらえ、二次加工が石器の全面を覆う手法がほぼ全ての器種に適用される段階が、縄文時代の開始に一致すると予察した（橋本 1977ｐ73－75）。岡本東三は、新出の両面調整尖頭器の「生産システム」を、「要求する石器にあわせて、自在に原材・素材を選択する製作技術」と評価し、やがて「素材の形状に制限された石器しか製作できないシステム」である旧来の石刃を凌駕すると述べた（岡本 1999ｐ12 および註９）。いずれも規格的な素材剥片を量産し二次加工は最小限に

とどめる〈旧石器〉から、やがて二次加工技術の発展・拡大で素材剥片の規格が追求されなくなるとの理解であり、稲田の議論の枠内にある。

〈旧石器〉の技術構造からの逸脱・変質または発展した過程や結果として尖頭器石器群や縄文石器を理解する立場とは異なり、縄文石器の構造的特質の把握を正面から狙ったのは山田昌久である。山田は東北地方の縄文時代の石器について、①接合資料、②剥片の属性、③石匕や削器など素材剥片の特徴がわかる器種、の３点を検討し「素材の斉一性をもとめず、多様な剥片を、複数の石器に仕上げる柔軟な石器製作システム」として、縄文時代の石器の技術構造を示した（山田 1985）。小野　昭も、縄文時代の石器は「二次調整剥離のレベルにおける入念さ、多様さ、加工の手数の多さ」に特色を認め、「素材としての剥片と器種との対応関係において、互換性に富む」という一つの特徴ある体系」と論じた（小野 1986 p 147）。

第Ⅰ章第４節では、更新世終末期の尖頭器の出現から「縄文早期」までの物理的な時間幅は、「短期間の移行期」ではなく、〈旧石器〉からも縄文からも独立したまとまりとして理解する必要があると指摘した。土器の有無による区分を退けるなら、この独立したまとまりの設定は、石器に基づくことになる。この〈旧石器〉と縄文石器との時間的な中間段階を理解する上では、漸移的変化を追う型式学的編年ではなく、石器製作の全体を把握する技術構造論的アプローチが有効であると考える。技術構造論的アプローチによって〈旧石器〉と縄文石器の原理的な違いが示されたのと同じように、〈旧石器〉とも縄文石器とも異なる固有の技術構造を、これらの中間に当たる部分にも確認できれば、独立したまとま

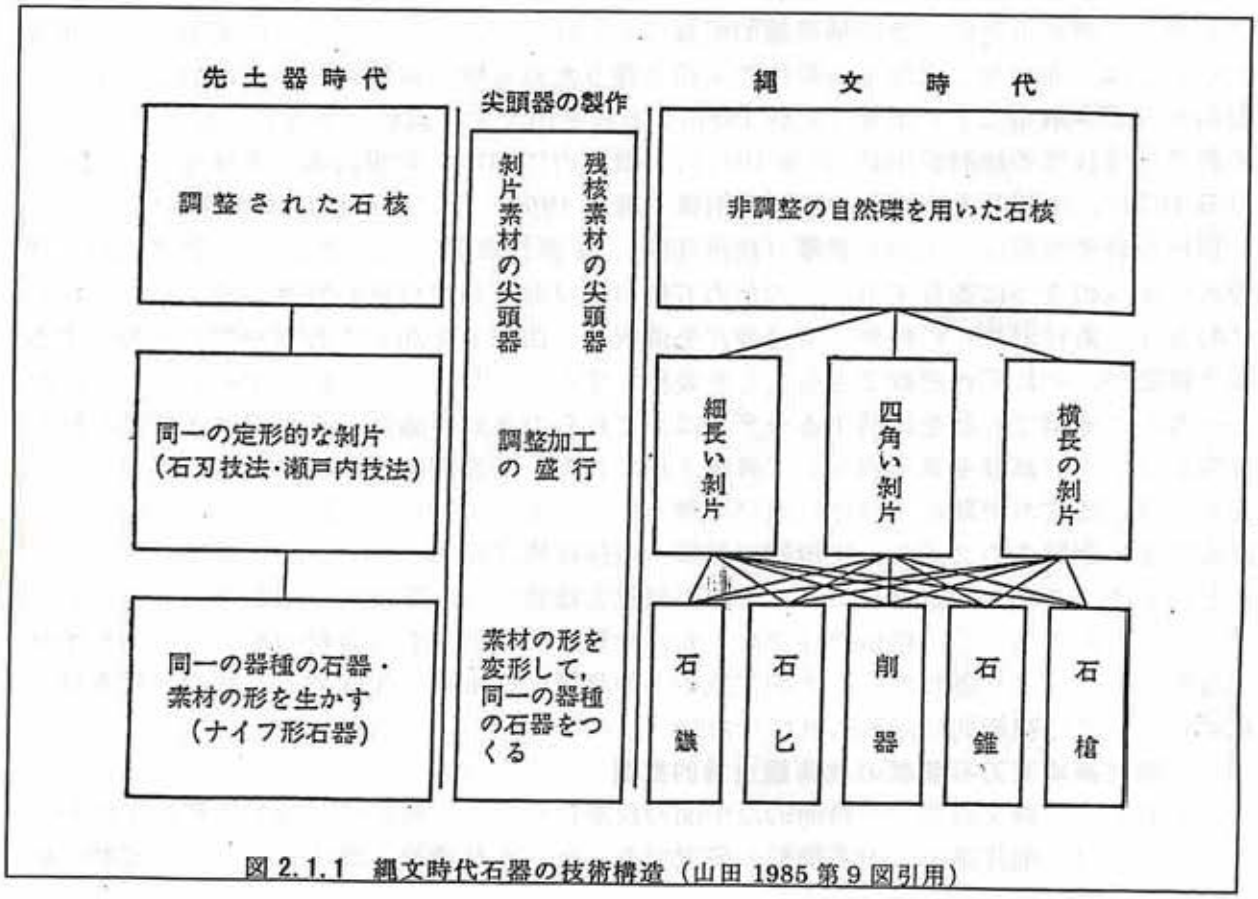


図 2.1.1　縄文時代石器の技術構造（山田 1985 第９図引用）

りとしての理解が可能になろう。図 2.1.1 は山田の模式図の引用である。ここで先土器時代と縄文時代の中間として、「尖頭器の製作」と簡潔に示された部分を技術構造論的に把握することが、先に述べた課題の解決につながると考える。

第２節　両面調整石器群の認識過程

（１）尖頭器石器群の連続性

本州島の後期旧石器時代から縄文時代への変遷観は、「ナイフ形石器文化」→「尖頭器文化」（註２）→「細石刃文化」との序列に、「神子柴・長者久保文化」または小林草創期の「縄文草創期」を後続させる図式が共有されてきた。

しかし一方で、尖頭器石器群の層位的な検討からは、細石刃や土器の出現を前後しても、尖頭器石器群の基本的なあり方は連続的であるとも説かれてきた。相模野台地の槍先形尖頭器石器群を出土層位で３段階に分けた鈴木次郎は、尖頭器の大きさの分化や形態組成の点で各段階間は連続すると述べている（鈴木 1989）。鈴木の第２段階は「細石刃文化」、第３段階は「神子柴・長者久保文化」に相当するが、「石器文化」の枠組みにとらわれず、尖頭器自体の特徴から一貫性を捉えた。同様に藤野次史（藤野 1989、2004）や榊　剛史（榊 2000b）も、細石刃や土器の出現に関わらず、尖頭器自体の製作技術や形態組成に連続性を認めた。これらの見解は、細石刃以前の尖頭器石器群から「細石刃文化」をへて「神子柴・長者久保文化」に到る時間範囲にかけて、すべてに共通する技術構造が認められる可能性を示唆している。

（２）両面調整尖頭器の理解の限界

しかし尖頭器石器群の技術構造論的把握は、しばらく進まなかった。両面調整の尖頭器については、面的な二次加工が器体の全面を覆うため石核－素材剥片－二次加工の工程を製品から読み取ることが困難（栗島 1986）、石核を出土する遺跡が少ない（鈴木 1989）ため剥片剥離技術の検討が困難（伊藤 1987）、一遺跡内における形態組成の多様性（鈴木 1974、白石 1976）、未製品と完成品の識別が困難（織笠 1992）などの指摘が繰り返された。

稲田の構造把握は、①剥片剥離（技術基盤）、②調整剥離（二次加工）、③器種（および型式）組成の３つに着目する。このため石核および剥片剥離技術の特徴、そこから生じた目的剥片（素材剥片）の特徴、素材剥片を選択し二次加工を加えて器種や型式を製作する際の特徴が、それぞれ把握できることを要件とする。しかしこの石核－素材剥片－二次加工－製品の連鎖で石器を説明するモデルは、これらの連鎖の識別とそれぞれの特徴の把握が容易な石刃石器群を典型例として構築されており、両面調整尖頭器のように製作工程復元や完成品認定が困難な場合には適用が難しい。つまり①製作工程復元の困難さと、②完成品認定の困難さの２点が、尖頭器石器群への技術構造論的アプローチの適用を阻んでいたといえる。これこそが稲田によって両面調整尖頭器が「旧石器的石器製作の解体」と評されたゆえんであろう。稲田だけでなく先述の橋本の時点でも、素材の形にとらわれず自在な形を作る「より優れた」二次加工技術との評価に留まり、尖頭器石器群の剥片素材の供給については積極的に触れられていない。

（３）削片系細石刃石器群の技術構造論的把握

〈旧石器〉と縄文石器との時間的な中間の段階について、技術構造論的理解の手掛かりを与えたのは、削片系細石刃石器群の研究であった。小林達雄を継承したこの石器群の研

究では、細石刃核の母形である両面調整石器から生じた調整剥片を、削器や彫器、掻器などの剥片石器の素材とする事例が確認・注目された（大塚 1968a、剣持 1979、山田 1984、橋本 1988a、山田・白石 1990、桜井 1991、永塚 1996 など）。一方で鶴丸俊明は、石材の運搬形態としての両面調整石器との論点を示した（鶴丸 1985）。これらの理解が技術構造論的アプローチの両面調整尖頭器への適用に示唆を与え、削片系細石刃石器群だけでなく、他の細石刃石器群や両面調整尖頭器をもつ石器群にも、専用の石核を用意せずに主要な器種の整形時に生じる調整剥片を他の器種の素材にあてるしくみが確認されてゆく。

伊藤恒彦は、中村遺跡第Ⅲ文化層の尖頭器石器群を個体別分類した中で、「素材剥片剥離技術が尖頭器の加工技術体系の一部として埋没した状態で、表面に現れることなく存在していた」と述べ（伊藤前掲 1987、p96）、尖頭器の製作過程で生じる剥片が素材として利用された可能性を指摘した。藤野次史は「土器出現期」の尖頭器製作を検討する中で、両面調整尖頭器の整形時に生じる調整剥片を削器などの素材とするあり方を確認した（藤野 1991）。さらに真人原遺跡Ｃ地点の接合資料から、両面調整石器（尖頭器未製品）の調整剥片を小形の部分調整尖頭器の素材にあてることが示された（鈴木 1997、長沼 1997）。白石浩之も、尖頭器の製作時に生じる剥片の削器などへの転用を指摘した（白石 2001 p319）。非削片系の細石刃石器群についても、稜柱形の細石刃核をもつ石器群は、主体的な器種の製作工程に付随的な器種の素材供給を複合化する点で、両面調整尖頭器と同質であるとの指摘がなされた（藤野前掲 1991）。舟底形細石刃核をもつ石器群は、接合資料例から削片系細石刃石器群の部分的変異として理解できる（加藤 1996a）。

これらの理解によれば「石核」が出土しないために剥片剥離技術の復元が困難との問題点は、一部が説明可能となる。専用の石核を用意して素材剥片を量産する石刃石器群の技術構造を前提とする枠組みは、両面調整尖頭器の説明には不適当であったわけである。この削片系細石刃核や尖頭器といった両面調整石器の製作過程で生じる剥片（調整剥片）を、他の器種の素材にあてる現象の意味を説明・解釈したのは、北米プロセス考古学の紹介であった。

（４）北米プロセス考古学の技術組織論

北米のいわゆるプロセス考古学では、ビンフォード（R.Binford）の技術組織（Technical Organization）論、とりわけ「管理的な石器／便宜的な石器」（Curated tools／ Expedient tools）に関する議論（Binford 1983）から派生する論点として、北米大陸平原地帯のパレオインディアンの両面調整石器について、両面調整石器自体が頑丈な刃部をもつ管理的な道具であり、多機能性、耐久性、刃部再生可能性に富むと同時に、他の器種の素材剥片を供給する石核でもあるという二面性をもち、運搬時の重量コストを抑えることで、石材が得難い土地での活動や長距離の移動、移動頻度の高い遊動生活に有利な適応戦略であると説明されていた。

これらが日本語で紹介（阿子島 1989、1991、1998）される中で、日本列島の削片系細石刃石器群や「縄文草創期」の楕円形の両面調整石器、石材の希少な下総台地の両面調整尖頭器などにも、石核を兼ねる「管理的な石器」との説明が適用された（佐藤 1992、1995、宇田川 1996、加藤 1996、1997、沢田 1996、仲田 2001 など）。両面調整尖頭器や削片系細石刃核が「管理的な石器」ならば、複数の遺跡間を持ち運ばれて継続的に使用され、ある一遺跡から出土した時点での尖頭器や細石刃核の大きさや形状といった状態は、漸次的

なリダクション（後述）の様々な過程を表わすに過ぎない。これは「形態組成の多様さ」「未製品・完成品の識別が困難」との先にふれた問題を無効化する形での回答を与え得る。

（５）両面調整石器群の提唱

技術構造論的アプローチの諸研究を振り返ることで、本州島北半を中心とする地域での晩氷期から後氷期にいたる技術構造の変遷は、次のようにまとめることができる。

ステージ２の寒冷期では、素材剥片の供給を目的とする専用の石核（利器を兼ねない）を中心に石材を運用し、石刃に代表される規格的な目的剥片を量産して、これらに二次加工を加えて器種を作るしくみがあった。稲田が説いた狭義の〈旧石器〉である。その背景には軽量・小形の少数種類の道具で複数の用途をこなし、最小の運搬重量で最大の刃部利用との遊動生活からの規制を想定できる。やがて石器製作技術全体を統一するしくみをもたない、山田が指摘した「縄文時代の石器群」へと推移する。その背景には、気温の上昇から温帯森林が増加、陸地面積が縮小した環境変化を受けて、人々の遊動領域の小地域化や定住化（西田 1985、雨宮 1993）の進行を想定できる。森林の多様な資源を有用化するために生活の諸技術が多工程化・多種類化（山田 1996）し、定住化が進むことで可搬性を気にせず手間をかけてでも、道具の形（註３）・種類・大きさ・量・材質を、用途ごとに特殊化する、または必要に応じて増やすことが要求され、同時に可能となったのであろう。

この推移の中で、専用の石核から規格的な目的剥片を量産するしくみから、石材を、利器と石核を兼ねる両面調整石器を中心に運用するしくみへの変化が生じる。多様な両面調整石器を多出する「尖頭器文化」（細石器文化以前）、「細石器文化」、「神子柴・長者久保文化」（註４）、有舌尖頭器をもつ石器群の一部までをおよそ含み、結果的には芹沢長介の「晩期旧石器もしくは中石器」（芹沢 1967）とほぼ対応する範囲である。詳細は以下で順に論じてゆくが、この石材を両面調整石器として運用する石器群を、両面調整石器群と呼ぶことにする。細石刃や土器の出現を前後しても途切れない尖頭器石器群の連続性は、この同質性の一側面をとらえていたと評価できる。

だが尖頭器文化（石器群）や細石刃文化（石器群）といった枠組みを突き抜けた技術構造の理解は、稲田による旧石器的石器製作の解体論に加えて、削片系細石刃石器群の技術論、北米プロセス考古学の導入という３段階の議論をへて可能となった。旧石器時代の終末とされてきた一部と、「縄文草創期」の前半とされてきた一部とを、一体として前後と独立させることで、更新世終末期石器群の推移の全体を、包括的に捉えることができる。複数の遺跡間で継続的に使用される「管理的な石器」との論点は、リダクション論だけでなく遺跡間変異論の議論とも関わる。リダクション論と遺跡間変異論は、日本考古学では主として 1990 年代以後に活発になった論点であり、1980 年代までの編年研究を中心とした議論の中では、一部の研究を除き十分に展開されてきたわけではない。石器現象が形成されるプロセスに言及するこれらの議論は無視できない。〈旧石器〉と縄文石器との中間である両面調整石器群を構造的に把握する際にも、リダクション論と遺跡間変異論とを議論の前提に組み込む必要がある。

第３節　リダクション論の可能性

（１）石器研究におけるリダクション論の射程

リダクション論は、原料の獲得－製作－使用－再加工－廃棄という道具のライフサイク

ルの中で、一つの道具が縮小してゆく過程についての議論である。わけても遊動型狩猟採集民が使用した石器のリダクションは「石材産地からの距離、年間の移動経路、石材採取戦略（直接採取、交換、埋め込み戦略）、目的とする石器の法量、そして石器のデザインなどさまざまの要因が複合的に作用し決定されている」（長崎 2000 p 239）とされ、原料が不可逆的に縮小する石器特有の「不都合」に、遊動生活の中で対処してゆく過程ともいえる。これまで北米プロセス考古学の紹介では「変形論」として周知されたが（安斎前掲 1990、長崎 1990、佐藤前掲 1995 など）、変形論という訳語は「縮小」という含意が弱いため、本論ではリダクション論と表記する。

使用による刃部の損耗や機能低下から、二次加工を事後的に再び加える行為である刃部再生については、古くは大山　柏の「再生器具」（大山 1940）や、橋本　正の「第３次加工」（橋本前掲 1977）など、北米プロセス考古学と無関係の立場からすでに指摘されていた。しかしリダクション論と刃部再生は同じではない。リダクション論一般の射程は、先述の「石材産地からの距離、年間の移動経路、石材採取戦略」といった外的・他律的な事情（松本 2003）と石器の管理・運用との関係への論及にあり、刃部再生に限定されるものではない。もちろん上述の外的・他律的事情の具体的な復元はむずかしい。むしろリダクション論の意義は、石器製作行為が、単に製作者の脳内にある目的の形＝範型を実体化する（小林 1968、1975a）過程＝製作工程だけでなく、製作者を取り巻く外的・他律的な事情で変異する可能性を示す点にあるともいえる。

（２）リダクションの定義

本研究ではリダクションを「製作＝使用者の行為から生じた、原料および道具の大きさの縮小」と広義に定義する。しかしリダクション論を実際の遺跡出土の石器資料に適用するにあたり、狭義のリダクションを区別する議論がある。狭義には、①個別器種の製作終了時点より以後から廃棄にいたる縮小過程（榊 1998、山原 2004）、または②石核母型から目的剥片が生産され残核にいたる石核の縮小過程をさし、①はトゥール・リダクション、②はコア・リダクションとも呼ばれる（長崎 2004）。さらにトゥール・リダクションを、a:「同一の手法により、前形状と同様の刃部があらためて形成される」「刃部再生」と、b:「異なった手法により、前形状と異なる刃部があらためて形成される」「刃部再形成」に分ける見解もある（榊 2000a）。これらの整理によれば、古くから指摘のある刃部再生は「狭義のリダクション」のうちトゥール・リダクションの一部にすぎない。

これらの区別は、個別器種の製作終了時点や石核母型の準備終了時点が特定できること、器種の刃部を特定できることが前提となっている。しかし剥離行為の反復を受ける両面調整尖頭器や削片系細石刃核といった両面調整石器は、どの時点で製作や石核調整が終了しているのか判別しにくい。先にみた北米プロセス考古学の見解では石核と利器を兼ねていた可能性が説かれていように、芯に相当する部分が石核か道具かも多義的で、このような対象に狭義のリダクション概念を当てはめることはむずかしい。そこで両面調整石器を扱う上では、先述の広義の定義で議論を行うべきであると判断する。

（３）製作工程復元とリダクション論の違い

一般にこれまでの石器研究は、出土遺物の技術形態学的な観察と製作実験とを手掛かりにして、「石器製作工程」を把握する、という枠組みで行われてきた。しかし現代人による石器の製作復元実験は、リダクション論が想定する石器扱いにかかわる諸行為の、むしろ

対極にある。一般に製作復元実験では、遺跡出土の石器を見本として、その再現＝形の実現を試みる。まさに「範型」を「実体化」する（小林 1975a）「製作工程」の復元である。しかし、見本となる遺跡出土品の中には、本来は別の形状を呈していたものが、リダクションが大きく進んだ状態で出土しているものも含まれる可能性もある。このような石器を見本にしてしまうと、小形化後の形を完成時の形と誤認するおそれがある。つまり結果として遺跡から出土しているものを、目的として復元しようとする研究戦略であるため、本末が転倒している側面がある。また良質な原石をあらかじめ豊富に用意して実験にのぞむなど、季節的な移動計画の中での石材の獲得といった、原料の用意・調達に関わる外的・他律的事情は完全に捨象されている。

このように考えるなら、製作工程の復元とは、外的・他律的事情を無視してはじめて成立できる枠組みといえるかもしれない。このような「製作工程の復元」では、石器現象一般の理解にとって十分とはいえない。むしろ広義のリダクション論こそが石器現象全般を説明する上位概念であり、剥片剥離や二次加工といった諸概念からなる「製作工程」は、石器現象全般から外的・他律的な事情を差し引いたモデルといえる。つまり「製作工程」は、「刃部再生」などと同様に、リダクションの特殊な局面を扱う下位概念として、階層的に位置付けることが可能である。稲田に始まる技術構造論的アプローチも、石器製作工程の構造として理解するのではなく、リダクション（石材の全縮小過程）の構造として理解するべきであると考える。

第４節　遺跡間変異論の諸問題

（１）遺跡間変異論の意義

遺跡間変異論は、同一の集団が残した複数の遺跡の間で、作業内容の違いや石材の保有状態の違いなどが、遺物の出土量や内容（剥片剥離技術や器種組成、石材組成）等の、様々なレベルでの石器の特徴を変化させる可能性についての議論である。これによると、一見異なる内容の遺跡であっても、時期差や集団差として整理することは誤りとなり、文化史的アプローチや、型式学的編年の論理に一部が抵触する。

加藤晋平は、常呂川流域の細石刃遺跡群にみられる器種組成の違いを、同一集団による活動内容の違いとして説明する「常呂パターン仮説」を提示した（加藤 1970）。しかし遺跡間の同時性を保証する根拠が共有され難く、直接の後続研究を直ちには生み出せなかった。一方で安蒜政雄は、砂川遺跡の個体別資料の接合によって、一つの原石の消費の全体が一遺跡の中では完了せず、移動前と移動先の遺跡外に連続することを示し（安蒜 1977）、後に「原料の二重構成と時差消費」としてモデル化した（安蒜 1992）。常呂パターンのように直接に機能差で説明するのではなく、原石の消費から複数遺跡間のつながりを見通す論法に特徴がある。製作工程の復元や個体別（母岩別）分類の手法が共有されやすく、各地の事例研究に引き継がれた（田村 1991、関口 1992、山口 1994、野口 1996、髙倉 1998 など）。これらの事例研究は、検討対象とする石器群にあらかじめ一連の製作工程（リダクション過程と言い換えてもよい）を復元し、この一連の工程が、一遺跡での部分的な欠落・他遺跡での出現といった姿で現れる点をとらえて、それらの相互補完性を把握することで、遺跡間の結びつきを復元する。

これまで日本列島で知られている更新世終末期の遺跡のほぼ全ては、構築的な遺構を欠

き、より新しい時代の集落遺跡などと較べて遺物の量も少ない。したがって長期にわたる定住生活を想定しにくく、遺跡のほぼ全ては遊動生活者の一時的な占拠の痕跡である可能性が高い。一遺跡での具体的な滞在時間の復元は困難だが、一つの原石が割り尽くされる時間より短い（註５）。石材採取地付近など出土量は多い遺跡でも、著しく偏った器種組成から特定の目的＝石材の調達に限定した滞在を想定でき、複数回の活動痕跡の重複で形成された見かけ上の大遺跡の可能性もある。したがって個別の一遺跡には、当時の集団が保有していた技術の一部しか現れていないとみるべきである。ゆえに遺跡間変異論は棄却されてはならず、むしろ石器群理解の前提とする必要がある。

（２）遺跡間の同時性保証問題

しかし複数遺跡間の同時性の保証は、困難である。型式学的方法による編年は、「一定程度の時間幅をもった同時性」の把握にとどまる上に、その時間幅の具体的な測定は難しい。相対編年としての型式学の原理的な性質である（小野 2003）。この問題はまた、研究対象が古い時代ほど顕著となる。古い時代になるほど石器型式の変化速度が緩慢となり（松本 2003）、型式学的「同時」が意味する時間幅が広がる。また遺存する人工遺物が種類・量ともに少なくなり、複数の人工遺物カテゴリー間のクロスチェックが難しくなるからでもある。また同一の地点に時間をおいて繰り返し残された活動痕跡の累積が、間層のない重複堆積物を形成した場合にも、それらを一回毎の活動単位へ分離することは至難である（阿子島 1995）。このように遺跡間の同時性を証明する際に、人工遺物の編年や、それを前提とした最小の活動痕跡単位への分解という方法から迫る方針には、一定の限界がある（註６）。

しかし遺跡間の同時性保証がいかに困難でも、複数遺跡間の結びつきを問う議論を絶つべきではない。繰り返すが一遺跡の中では技術構造やリダクション過程の連鎖の全体があらわれないためである。それではいかなる方策を採りえるのか。髙倉　純は「単位行動の振幅にもかかわらず、世代の交代、個別の〈小集団〉の違いを超えて存在していく」パターンを「ある地理的範囲の中で」考古資料の中から摘出することができるなら、これを「近似値的な移動・居住形態の仮説」として扱うことが、実現可能で有意な方針であるとした（髙倉 1999）。ここでは実際には数百年～数千年の時間差がある遺跡の間でも、その間に人々の行動パターンが変化しなければ、「同時」とみなして遺跡間の連鎖関係を論じる。これは現実的な見解のひとつであろう。本研究では第Ⅵ章と第Ⅶ章で具体的地域を設定した上で遺跡間連鎖関係を検討するが、その際にもある程度の時間幅をもった同時性の中で議論してゆくことになる。

（３）空間範囲の限定問題

この場合の問題は、「ある地理的範囲」の設定である。先史時代の遊動生活者が年間を通じて移動する範囲を特定することは、きわめて困難である。集団を表象する可能性のある型式学的な特徴にしても、その分布圏が、はたして一つの集団の広域な日常的遊動範囲を示すのか、型式を共有する複数の下位集団群が、なんらの境界なしに自在に遊動していたのか、または下位集団群のより狭い日常的遊動範囲が、複数合体した姿なのか（小野 1988 の階層モデルはこれに近い）。また後者の場合には、個々の集団に一対一で対応する排他的な縄張りが生じていたのか、それとも各集団の遊動範囲はおおむね固定的ながら、それらが一部入り合うあり方なのか、これらの問いに答えることはむずかしい。しかし遺跡間連

鎖や石器群間変異を、特定かつ固有な時間・空間のレベルで具体的に議論するには、分析の対象地域を区切らねばならない。その際には、この問題について何らかの前提を選ぶ必要がある。

先史狩猟採集民の遊動範囲の広がりや移動・居住形態は、衣食住全ての財を供給したであろう動物資源＝狩猟対象獣の分布や生態に規定される可能性を、まず考える必要があろう（加藤 1996b など）。しかし日本列島のように、動物遺存体を欠く地域では議論ができない。また人口密度（仲田 2002）も重要である。人口密度が低ければ、各集団による広域の領有や異集団間で入り合う土地利用が可能だが、高ければ排他的な縄張りが形成されやすくなろう。だが人口推定の議論は狩猟対象獣以上に困難である。一方で、岩種毎の産出地に加えて、産状（入手しやすさ・大きさ・石器石材としての質の評価とつながる）も含む石材資源は、当時と現在とで地形（供給メカニズム）に大きな変化がないとの前提に立つ限り、手がかりが得やすい。田村　隆は「地理的な分析単位を確定するためには、まず広域的に石器石材を調査し、次いで特定岩帯との対応関係が検討されねばならない」（田村 2003、47 頁）と述べ、遺跡出土の岩種から遊動範囲を推し量ることで、上記の問題へ実践的な解決を狙う（田村・国武他 2003）。

田村の議論は、石材の獲得が主に埋め込み戦略によるとの前提で成立している。ところが岩石の産状は純粋に地形学的・地質学的なメカニズムのみに規定されており、動物資源や人口密度との間に対応関係はない。石材環境は、集団の移動距離や遊動範囲を直接に規定するというよりは、むしろ動物資源の配置や人口密度、地形景観など他の事情に規定された遊動範囲や移動・居住形態の中で、臨機応変に調整（Kelly 1998）される方の側にすぎず、この調整の中には、埋め込み戦略以外の石材獲得（例えば他集団からの間接的入手）も含まれていた可能性を完全には排除できない。これらの問題の解決はむずかしい。

第５節　本研究の目的と立場

（１）本研究の目的

本研究では、個別の一地域での一回性の出来事（イベント）の復元ではなく、むしろ各地の個別性を成立させた石器群の背後にある構造の理解を目的とする。具体的には、更新世終末期の両面調整石器群の技術構造を、調査事例とデータの蓄積が豊富な日本列島北半を中心とした石器資料にもとづいて、一般的規則として明らかにする。これは今後、①一定の小地域内に限定した具体的な出来事復元の研究を実践してゆくため、②現在の国境の枠組みにとらわれない環日本海極東地域の比較研究を実践してゆくための、前提を整理する作業である。後半の第Ⅵ～Ⅸ章では、具体的な時期・地域を対象として開始した事例研究の一部を提示するが、それぞれ各時期・地域に固有の資料的条件に規定された内容となっている。

（２）両面調整石器の定義

本研究でいう両面調整石器は、両面調整尖頭器、楔形細石刃核、打製石斧、局部磨製石斧、円盤状石核、有舌尖頭器、植刃、半月形石器など器体の両面が平坦剥離で覆われる多くの器種の総称である。上記の各器種は、両面調整石器の特殊化した形、部分的変異と考える。また用途を暗示する名称を与えにくい一般的・不特定な形の両面調整石器も含む。

これまで石器研究の器種分類は、①編年上の時期あるいは段階を指標とする標準化石＝

標準石器としての意義、②道具としての機能＝用途をさぐり生業や活動内容を理解する目的、この２点から行われてきた。しかし①については、日本列島では、標準石器的手法が有効な程度に大枠のレベルでは、編年観が研究者間でほぼ共有される状態におおむね達している一方で、同時に細部では標準化石的手法が有効でない場合がある（リダクション論や遺跡間変異論）との理解も共有されつつあるのが現状である。また②石器の機能＝用途論には、石器の形態分類だけではなく使用痕分析が必要である（ただし使用痕分析は本研究の目的外であり、今回は実施しない）。

これら従来の目的による石器分類ではなく、石材の運用に着目した石器分類が、リダクション論を前提とする本研究には必要である。両面調整石器という枠組みで上記の各器種を総称する方針は、この石材運用に着目した分類を追及する試みである。両面調整石器というくくり方は、機能や用途、製作者の意図の違いなどを暗示する石器分類名称とは異なる。例えば両面調整の掻器や削器があってもよいし、尖頭器や石斧（斧形石器）でも両面調整でないものは、両面調整石器とは呼べない。

ケリーは両面調整石器を「一般に両面調整石器とは、剥離やしばしば押圧剥離によって、二つの平行だが対向する刃部から両方の面を縮小された剥片または石核素材であり、特定の形に整形されたものである」—In general, a biface is a flake or core blank that has been reduced on both faces from two parallel but opposing axes through percussion, and, frequently, pressure flaking, and is shaped into a specific form—(Kelly1988, p.718)と定義した。これは現象論的把握と言える。これを定義１とする。本研究でもこれに従い、先述の各個別器種を包括する広義の用法をとる。

（３）石器群構造の外縁規定

構造の外部との境界線＝研究対象の外縁規定について述べておく。明確な年代的あるいは空間的指標に一致した形で、両面調整石器群構造の内外の境界線をひくことは、すでに批判されているように現時点では方法的にも困難であり（高倉 2004）、将来の大きな課題である。本研究では今後の研究の進展による変更を前提に、差し当たり以下の範囲を設定する。

両面調整石器群の時間的な範囲は、南関東の層位的出土例（諏訪間 1988）を基準として、小形の尖頭器を主体とする尖頭器石器群（細石刃石器群以前）から、細石刃石器群、神子柴・長者久保系石器群、「縄文草創期」の有舌尖頭器をもつ石器群の一部までの範囲とする。以下では小形尖頭器石器群を両面調整石器群の第Ⅰ期、細石刃石器群を第Ⅱ期、神子柴・長者久保系の大形尖頭器石器群を第Ⅲ期、「縄文草創期」の有舌尖頭器をもつ石器群を第Ⅳ期として記述する。両面調整石器群の全体を同質とみなす上でも、個別の小地域ではさらなる細分編年が可能な場合や、異なる石器群変遷が展開していた可能性もあろう。しかし本研究はこうした小地域における編年の細分を目的としていはいないため、この４段階の変遷で議論を展開し得ると判断する。数値年代では ^{14}C年代測定の未較正値で約 18,000～10,000B.P.であり、暦年較正すると約 21,000～13,000cal.B.P.の範囲である。

両面調整石器群の空間的な範囲は、第Ⅰ章で問題点を指摘した一国史・各国史的前提を解除できる、広域的な理解を可能にすると考える。ミクロにみるならやはり個別の小地域ごとの多様性はあるが、マクロにとらえるとアムール流域、極東沿海州、韓半島など日本海対岸側の更新世終末期から完新世初頭の石器群にも、両面調整石器群の構造を共有する

部分が存在する。ただし大陸側の各地では石器群変遷の全体が本州島と同じレベルでは解明されていないため、先に見通しを述べた推移の全体がどこまで当てはまるか、また具体的な相違などについて、現状では判断できない部分が大きい。また内陸シベリアや北米大陸など、大陸部の中での空間範囲の外縁確定には、現状では明確な見通しは立っておらず今後の課題とする。複雑な細石刃石器群が長期にわたって展開した北海道島については認識を定めていないが、およそ細石刃石器群の全体を含むとの見通しを示しておく。九州島南部に局所的に展開した定住的な石器群については、環日本海とは別に南洋方面との関連を考える必要が指摘されており（新東 1997）、保留としたい。

小地域ごとの詳細な実態把握が必要なことはいうまでもないが、旧来的な枠組みを不問としたままに、個別の小地域の特殊性・独自性を主張すると混乱を招く。本研究の目的は新しい枠組みの提示にあり、むしろ一般論的な同質性を明晰に認識した後に、改めて・初めて各地域の独自性を、共通の基準点から評価することが可能になると考える（註７）。

（４）石器群構造の把握方針

本研究では、両面調整石器群の構造は、石器のリダクション構造と遺跡群の形成構造との２点からなると考え、この２点を明らかにすることで両面調整石器群の原理を把握する。

石器のリダクション構造とは、原石の縮小過程を管理する上での規則である。「石器製作工程」とは異なり、むしろ、「石器製作」を実現するために如何なる原則にもとづいて石材を消費してゆくのかを問う。繰り返し述べたように、一つの遺跡の内部でリダクション過程の全体が現れる例はまれであり、実際には複数の遺跡に分散して現れている要素をつなぎ合わせて、モデル的に復元していかなければならない。場合によっては編年的な時期差をこえた遺跡間つなぎ合わせも行うことになるが、提示される結論は、細分編年の枠を越えても議論が成立する抽象性を持たせたることになる。

遺跡群の形成構造とは、当時の人々の移動生活の中で、内容の異なる複数の遺跡が形成される規則として定義する。遺跡間連鎖関係のパターン、あるいは遺跡間変異を生じるメカニズムとも言える。また先述のリダクション構造が、個別の遺跡に分散して現れてくる仕組みでもあり、その背後に石材需給と移動・居住形態がある。ただし先述した複数遺跡間の同時性保証という問題から、本研究では具体的事実の復元ではなく、むしろある程度の時間幅を持つ同時という前提の上での原理的なモデル構築を行うことになる。

リダクション構造と遺跡群形成構造とは、本来は相互規定的で不可分な関係にあると考えられるが、分析の方法としてこの２つを別個に検討する。また個別の小地域の環境条件（植生や地形などの景観、石材の産状など）に規定される部分が実際には大きいとおもわれるが、各地の環境条件に即した形での個別の構造を、逐一各地で解明しなければならないと考えるのではなく、単一の構造が一定の広い時間・空間範囲で作用しており、各地の多様性はその構造の諸変異であると考える。これは大陸部も含めた広大な範囲に共通する石器現象がみとめられることを、伝播系統論とは異なる視点から説明するために採用する前提であると同時に、また一国史的な議論を解除するための前提でもある。

以下の章では、第Ⅲ章でリダクション構造、第Ⅳ章で遺跡群形成構造を検討し、第Ⅴ章でこれらをもとに両面調整石器群の構造モデルを提示する。

註

（1）「構造」の例として数学の方程式や言語の文法を、「システム」の例として生物の個体をあげる。ただし先行研究の引用表記では、原著者が「システム」や「体系」の用語を用いている場合も、要素の個別性より全体との関係性を強く志向している場合には、構造論的アプローチとして扱う。構造という考え方は、一回性の個別事象のユニークさとその時間的変化に価値を置く歴史主義（Popper1957、[久野ほか訳 1961]）とは相入れないと思われる。個別的で頻繁に変化する現象は構造と呼ぶべきではない。また構造自体が変動するという発想は、原理的には矛盾といえる。そこで構造論的な手法を時間軸上の変化の説明に用いる場合には、構造の射程範囲を小さくした上で、これら複数の小さな構造が次々と変遷した、との微分法的な近似を描くことになる。したがって構造論的アプローチは、時間軸上に展開した場合には論理上、段階的な把握となる。

（2）細石刃よりも古い「尖頭器文化」については、地域的範囲が中部日本に限られることを論拠とした懐疑がある（佐藤 1991）。一方で神子柴系石器群の存在は汎列島的である。

（3）縄文時代の石器は現代人の目で見てもいかにも道具らしく見え、「天狗の飯匙」や「斧」、「矢尻」、「呪術具」等との見当がつくが、旧石器時代の石器の形は道具として認識しにくく、その用途は直感的には分かりにくい（榊 2000b）。これは遊動生活における石器の形が、用途だけではなく、持ち運びやすさや石材の節約などの都合に規定される部分が大きいため、または現代人が遊動生活に体験的な馴染みがないためと説明できよう。

（4）引用表記に「文化」の語を用いるが批判的文脈に限る。筆者自身の主張では「石器群」を用いる。「石器群」は多義的に用いられ混乱を招くとの批判（織笠 1991）は承知しているが、階層ごとにふさわしい概念・名称をいまだ立案できない一方、「文化」の語がもつ違和感に耐えがたいためである。

（5）現在知られている資料では、一遺跡での滞在時間の短い遊動生活の想定が妥当との前提であるが、遺跡としての確認・調査が困難な埋没段丘や海底などに、構築的な遺構などを伴った大規模で定住的な「集落」遺跡が存在する可能性は残る。また一つの原石が、数十年以上ないし数世代にわたり伝承されていた可能性や、一つの石核から年間に１～２枚の剥片を剥離することが常態であったなどとの可能性も理論上完全には排除できないが、多数の剥片の接合資料が多くの遺跡で頻繁に確認できることから、一つの原石の中での各剥離の時間間隔について、一般論としては敢えて上記のような想定を行う必要はないと考える。

（6）複数の遺跡の間で石器が直接接合すれば高精度の同時性を認めてよい。しかしこれは人工遺物の編年とは独立した論理である。

（7）「空間的広がりの階層構造」（小野 1988）に則すと、「技法のレベル」の階層が本研究の中心的な対象である。第Ⅰ章で指摘した問題点を克服するには、抽象度の高い階層での議論が必要との判断による。個別の遺跡事例に言及することもあるが、より具体性の高い「型式のレベル」や「日常的生活範囲のレベル」の問題系を直接扱うことは意図しない。これら異なる階層の課題への取り組みは、第Ⅵ章と第Ⅶ章で一端を披瀝するほか、機会を改める予定である。

第２部　両面調整石器群の原理

第Ⅲ章　両面調整石器群のリダクション構造

第１節　接合資料の扱いについて

（１）接合資料の意義

両面調整石器のリダクションの理解には、彫器や掻器などとは違ったむずかしさがある。両面調整石器は、素材剥片の背面を覆う先行剥離面と、尖頭器を整形する際の二次加工との区別が難しいことが多い。またリダクションが大きく進行して二次加工がもはや石器の全面に及んだ場合には、素材の推定は不可能となる。第Ⅱ章で検討したように、両面調整石器（尖頭器）の製作工程の理解が困難であるとの指摘の多くは、接合資料の存在しない状況において、剥離面の観察のみに依拠した場合の話である。このような性質のリダクションを具体的に理解するには、接合資料の検討が必要となる。接合資料とは、剥離または折れによって割れた石器の、割れ面同士を再び接合した一群の資料である。

さらに石核としての役割にも注意しなければならない。「両面調整石器が石核と利器を兼ねる」との命題は、北米プロセス考古学では「管理的な道具」の概念を背景に、両面調整石器の縁辺や、リダクションで生じた剥片の使用痕観察を主な論拠とした（Kelly1988など）。しかし①当該の剥片が本当に両面調整石器のリダクション過程で生じたのか、②剥片の微細剥離痕が本当に「道具としての使用の結果」として生じたのか―つまり人為的な使用以外に、動物の踏みつけなど遺跡形成過程の様々な要因で生じた微細剥離にすぎない可能性もある（Bamforth2003）、この２点の論証について、批判の余地を残していた。わが国の早い時期の論考の中では、両面調整石器（楔形細石刃核）から生じた剥片を他の器種の素材に当てるとの理解は、剥片や器種（特に背面構成）の観察にもとづいていたようであるが（剣持前掲 1979、山田前掲 1984）、ある器種の素材剥片が、両面調整石器のリダクション過程から生じたのか、その他の石核リダクションから生じたものなのかを、属性分析や定量的分析などから再現性をもって識別することは容易ではない。そもそも二次加工ある器種は一遺跡からの出土点数が少ない場合が多く、十分な母集団による定量的・統計的な分析を実施しにくい。

しかしながら近年では、丹念な母岩別分類と接合作業とによって、剥片素材に二次加工を加えたいわゆる器種が、両面調整石器の本体に直接接合する事例が蓄積されてきた。接合資料の形で両面調整石器の本体と「器種」との接合関係を明示できるなら、「両面調整石器が石核を兼ねる」という命題のはっきりした証拠となる。そこで本章では、まず両面調整石器に関連する接合資料を検討することで、両面調整石器リダクションの一般的な形を検討する。次に二次加工のある器種が含まれた接合資料について検討する。

（２）接合資料の限界

接合資料の検討はリダクション過程の理解の上で重要ではあるが、同時に限界もある。一つには資料回収後の、現在の研究者側の問題である。調査面積や剥片の回収精度、回収点数の多寡や石材毎の母岩分類の難易度、接合作業の担当者の熟練度、接合作業にかける時間や労力などにより、接合作業の達成度は、実際には遺跡ごとに大きく異なるにもかかわらず、これらを評価する基準軸はない。潜在的には接合する可能性のある資料でも、接合関係が確認・報告されていない場合も多いと思われる。二つ目は遺跡の形成当時の事情

で、遺跡間にまたがる石器の持ち出し・持ち込み行為である。第Ⅳ章第１節で後述するが、尖頭器や細石刃核など両面調整石器の芯が、リダクションが開始された遺跡から持ち出されたり、逆に一定程度にリダクションが進行した時点で遺跡に搬入されたりといった現象は、多くの研究者から注目を集めてきた。また剥片の単独母岩資料の存在は、他の遺跡で剥離された剥片が、剥片の状態で持ち込まれ残されたことを示す。仮に一遺跡から全剥片を回収しても、そもそもそれらの中にリダクションの全過程が残されているとは限らない。接合によって一つの原石を完全に復元するためには、多くの遺跡の「遺跡間接合」が必要となる。しかしこれは天文学的な確率であり、現実的ではない。

接合資料は重要な情報をもたらすが、このような制約のために量的な保証のない資料を大きく取り上げることにならざるを得ない。本来は例外であるような接合関係・接合事例であっても、統計的な処理によってそれのもつ「例外さ」自体を評価することは困難である。このために接合資料の検討は定性的な性格のものであり、量的な裏づけの弱い議論にとどまる。同じ理由から、特定の時期・地域を限定した検討もむずかしいために、本章では第Ⅰ期から第Ⅳ期（第Ⅱ章第５節を参照）の全てにわたる、接合資料が比較的多く集積されている本州島北半部と北海道島の資料を検討対象とする。したがって、これらの中の細かな地域性や時代性、さらに各遺跡内での個別的なコンテクスト等は捨象している。接合資料を扱う必然的な資料的制約であるとともに、このような個別的コンテクストを捨象しても成立し得る構造こそ、本章での議論が狙う射程でもある。

第２節　両面調整石器の接合例

（１）リダクション開始に自然石を素材とする場合

岩屑や磨耗度の多様な円礫といった自然石を素材としてリダクションを開始し、全体を漸移的に縮小してゆくことで、楕円形や先頭形、石斧の場合は分銅形などに整形してゆくあり方が、両面調整石器リダクションのもっとも一般的・単純な姿として想定できる。**図3.2.1～2**は、自然礫からリダクションが開始した直後の様子を現す資料である。

図3.2.1の上段（１）は**正面中島遺跡**（新潟県津南町、佐藤ほか2002、第Ⅲ期）である。石材は頁岩の母岩407である。母岩407は本資料のほかに３点の剥片がありすべて本資料に接合するが、一部の剥離面は未接合のまま残ることから、遺跡外への剥片の持ち出しを想定できる。転石ではあるが水磨が進んでいないために板状に近い自然石を用意し、原石の角を利用して図の左側縁の全体と右側縁の一部に剥離を加えている。この状態でリダクションが中断している理由は不明だが、本来であれば、おそらくここで生じた剥離面を打面として、礫皮面を広く残している器体の表裏面に平坦な剥離を展開してリダクションが進むのであろう。下段（２）は**北支湧別４遺跡**（北海道白滝村、長沼ほか2001）の石器ブロック２・３からの出土例で、帰属時期は本州島と対比が困難ながらおおむね第Ⅲ～Ⅳ期に相当する。石材は黒曜石の母岩10である。母岩10は本資料に７点の剥片類が接合することでほぼ原石の状態に復元されている。やはり扁平で板状の自然石を選択して、図の右側縁から表裏にリダクションを開始した時点で放棄されている。

図3.2.2の上段（１）は**下茂内遺跡第Ⅱ文化層**（長野県佐久市、近藤ほか1992、第Ⅲ期）の例である。石材は報告書では黒色緻密な安山岩とされているが、他の遺跡の報告書で無斑晶質安山岩やガラス質黒色安山岩などと呼称されるものと同一である。接合資料

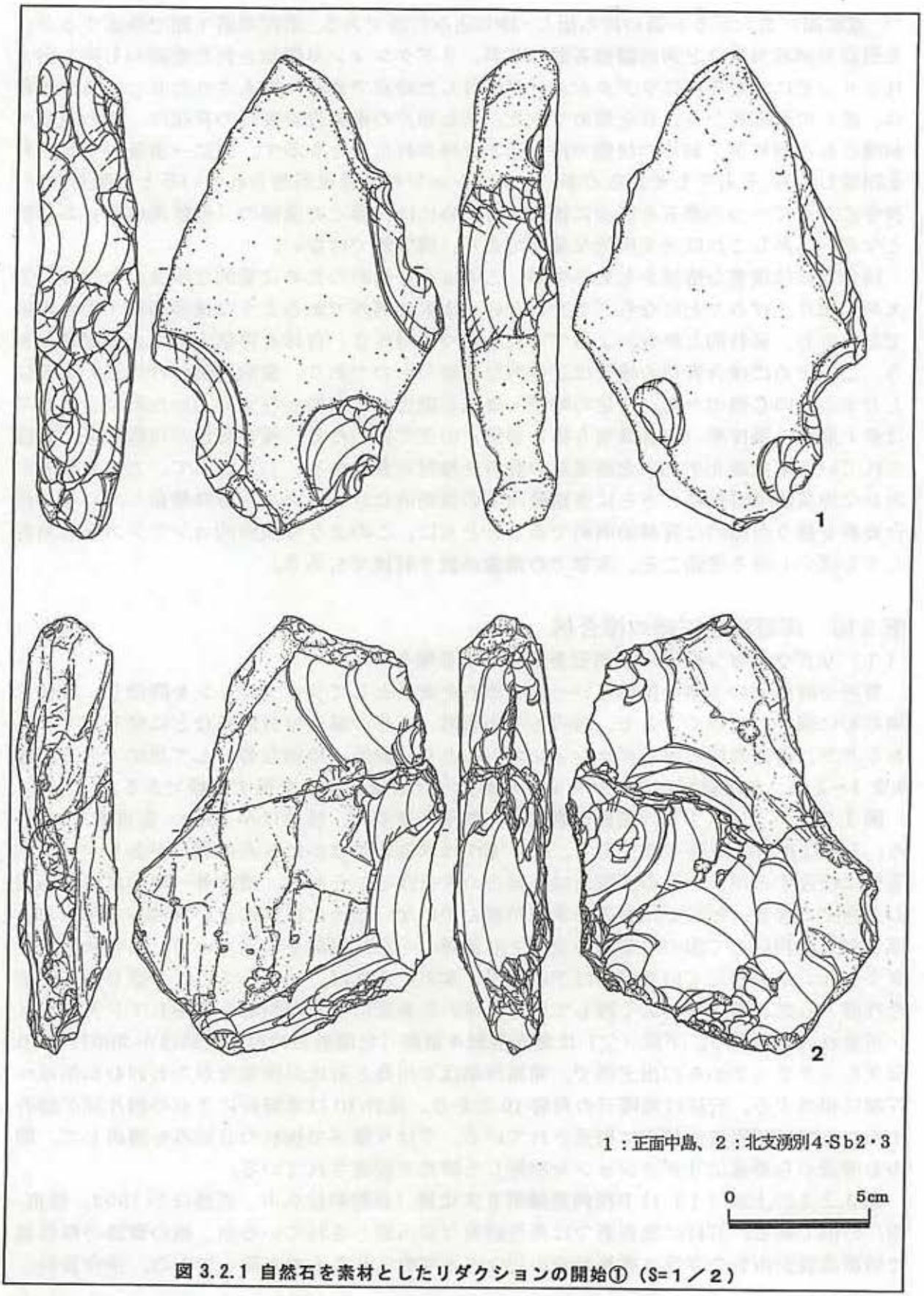


図 3.2.1 自然石を素材としたリダクションの開始①（S=1／2）

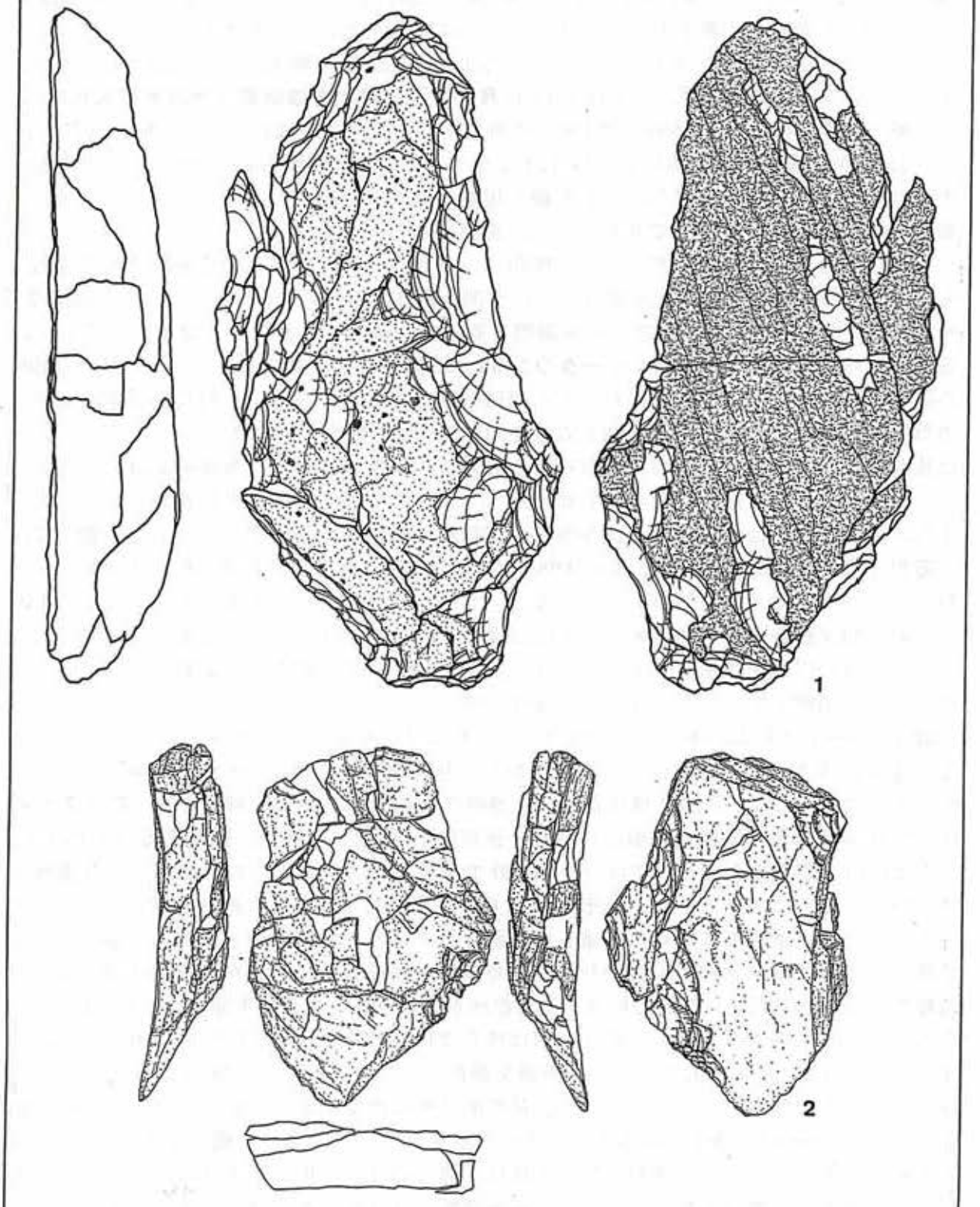


図 3.2.2 自然石を素材としたリダクションの開始② (S=1／2)

No.6とされ、9点から構成されている。両面とも節理面で規定された板状の角礫を選択し、全周に急角度な剥離を加えているが、二つに割れたために放棄されたものと考えられる。芯は長狭な先頭状を呈することから、当初から尖頭器の製作を念頭においていたリダクションである可能性が高い。下段（2）は**月見野遺跡群上野遺跡第1地点第Ⅳ文化層**（神奈川県大和市、相田ほか1986、第Ⅰ期）の例である。石材は玄武岩（ガラス質黒色安山岩）で、35点から構成される個体別資料124である。芯の両面調整石器に19点の剥片が接合する。水磨の進まない岩屑ないし亜角礫の板状の自然石を選択し、主として図の上部から表裏に剥離を展開することでリダクションを開始している。

これらの自然石からのリダクション開始は、自然石の表面を覆う礫皮を除去する過程でもある。この除去された礫皮が接合している例を**図3.2.3～8**に示した。このうち**図3.2.3～4**は、礫皮つきの剥片から芯の両面調整石器まで一連のリダクション過程が接合している例である。**図3.2.3**は**多摩ニュータウンNo.796遺跡**（東京都八王子市、丹野ほか1999）の例で、土器や局部磨製石斧の存在から帰属時期は第Ⅲ期である。石材は硬質細粒凝灰岩の母岩別資料Cで、石斧の未製品2点と1701点の剥片類から構成される。図示した資料は接合資料1で、188点の剥片類が石斧の未製品に接合している。角礫を素材としてリダクションを開始し、最終的な芯は石斧となっている。この石斧は2つに折れており、うち片方は出土していないことから、報告者は遺跡外への持ち出しを想定している。**図3.2.4**は**石川1遺跡**（北海道函館市、長沼1988）の例で、帰属時期は第Ⅱ期の削片系細石刃石器群である。石材はめのう質頁岩の母岩4で、2つに割れた1点の尖頭器を芯として、159点の剥片類が接合している。最大長13ｃｍ程度のあまり大きくない、水磨が進んでいながら凹凸に富む円礫を選択してリダクションを開始し、中間段階を経て最終的に細長い尖頭器状の両面調整石器にいたるまでの全過程が接合している。

図3.2.5～7は表面の礫皮のみが接合していわゆる「中抜け」の状態にある接合例である。遺跡に残されている芯のうちのどれかと、中間の部品を介在することで接合する潜在的な可能性もあるが、母岩の構成から芯を遺跡外に持ち出したと理解できる。**図3.2.5～6**はいずれも**奥白滝1遺跡**（北海道白滝村、長沼ほか2002）の例で、**図3.2.5**は石器ブロック22-25、**図3.2.6**は石器ブロック26-30である。両ブロックは約4ｍほどの無遺物空間で隔てられるにすぎないが、周氷河性の土壌撹乱による遺物群の流れの単位が異なっていることから、遺跡形成過程を考慮して分離されている。北海道島と本州島の編年の対比が難しい上に、時期判別の手掛かりになる特徴的な器種もないことから帰属時期の判定は困難だが、およそ第Ⅲ～Ⅳ期に相当する可能性が高い。**図3.2.5**は黒曜石の母岩61で208点の剥片類から構成される。図示した例は接合2314とされているもので、193点が接合する。最大長が38cmの水磨が進んだ円礫を選択してリダクションを開始し、長さや幅はほぼそのままで厚さだけを減じてゆく。最終的に残った空間から判断して、長25cm×幅8cm×厚1.5cm程の薄手の両面調整石器が予想される。その薄さは**図3.2.5**の断面図からも理解できる。この両面調整石器の本体は、同一の母岩の中に含まれないことから、報告者は遺跡外への搬出を想定している。両面調整石器は原石から薄く仕上げられるまでの過程が一遺跡内で接合しているため、一気に仕上げられた感がある。このため搬出先で次々とリダクションを受けたり石核として機能したりといった潜在的可能性は高くない。むしろ尖頭器といった、特定の形状の実現にむけたリダクションであったと想定できる。

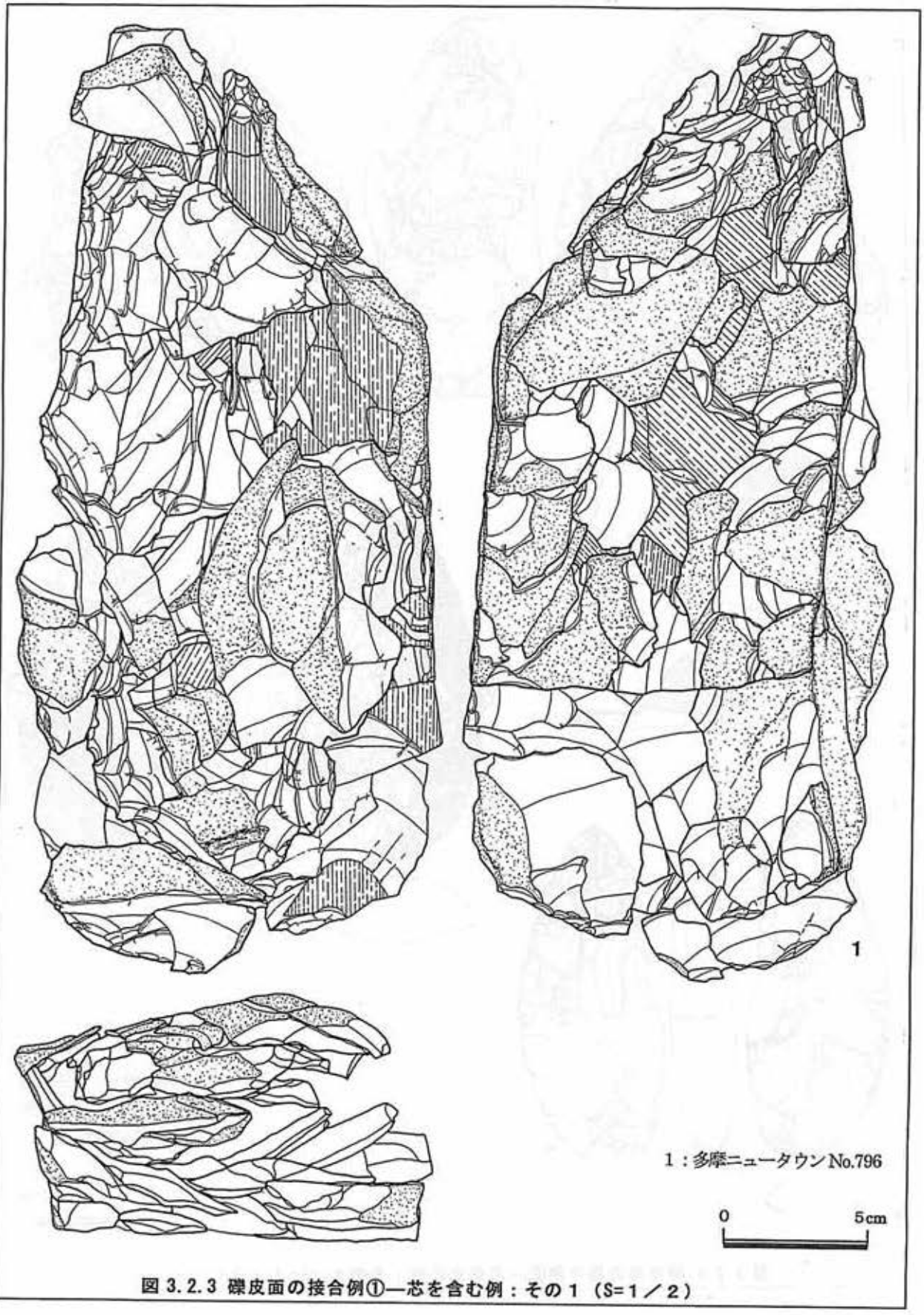


図 3.2.3 礫皮面の接合例①—芯を含む例：その１（S=１／２）

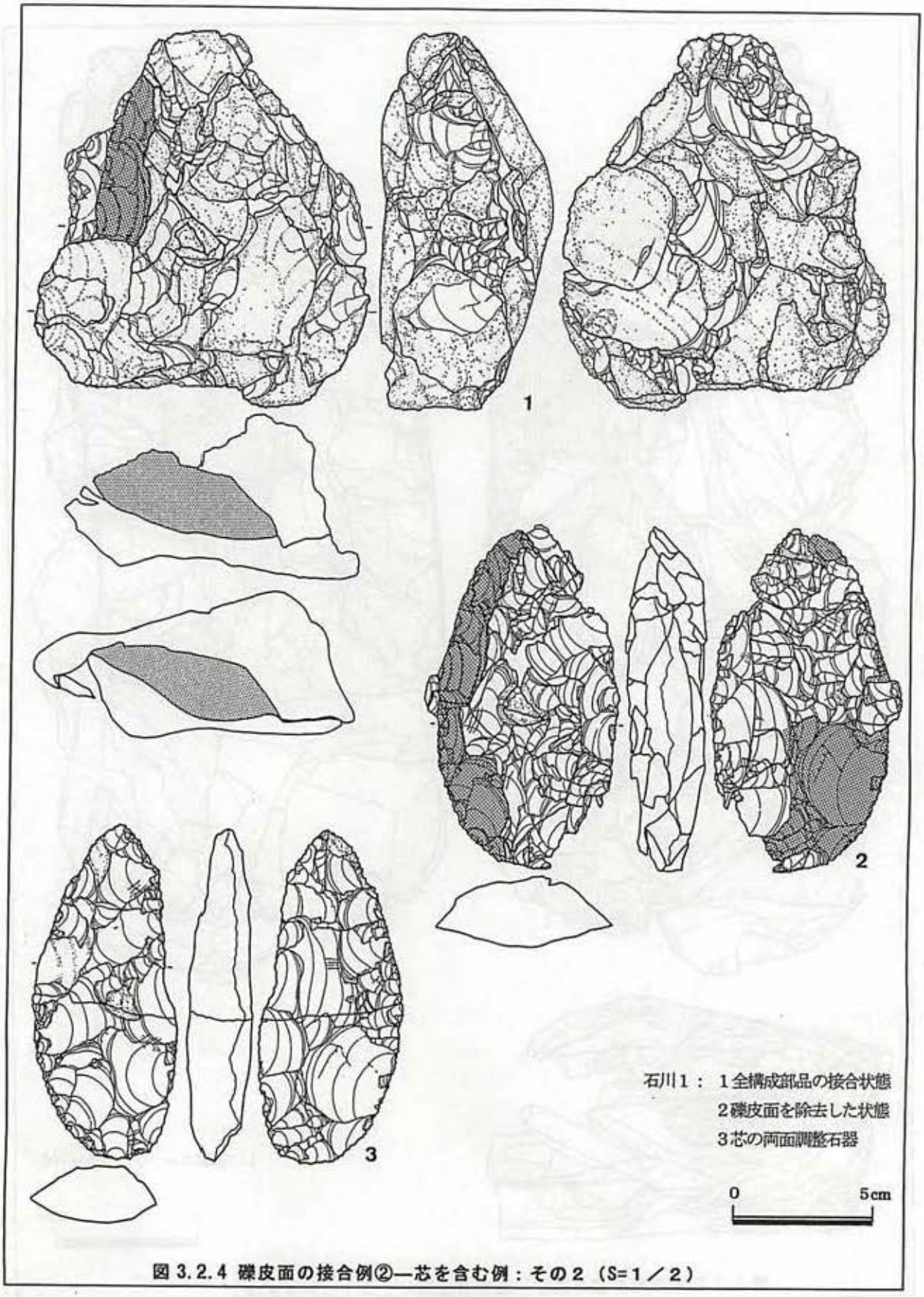


図 3.2.4 礫皮面の接合例②—芯を含む例：その2（S=1／2）

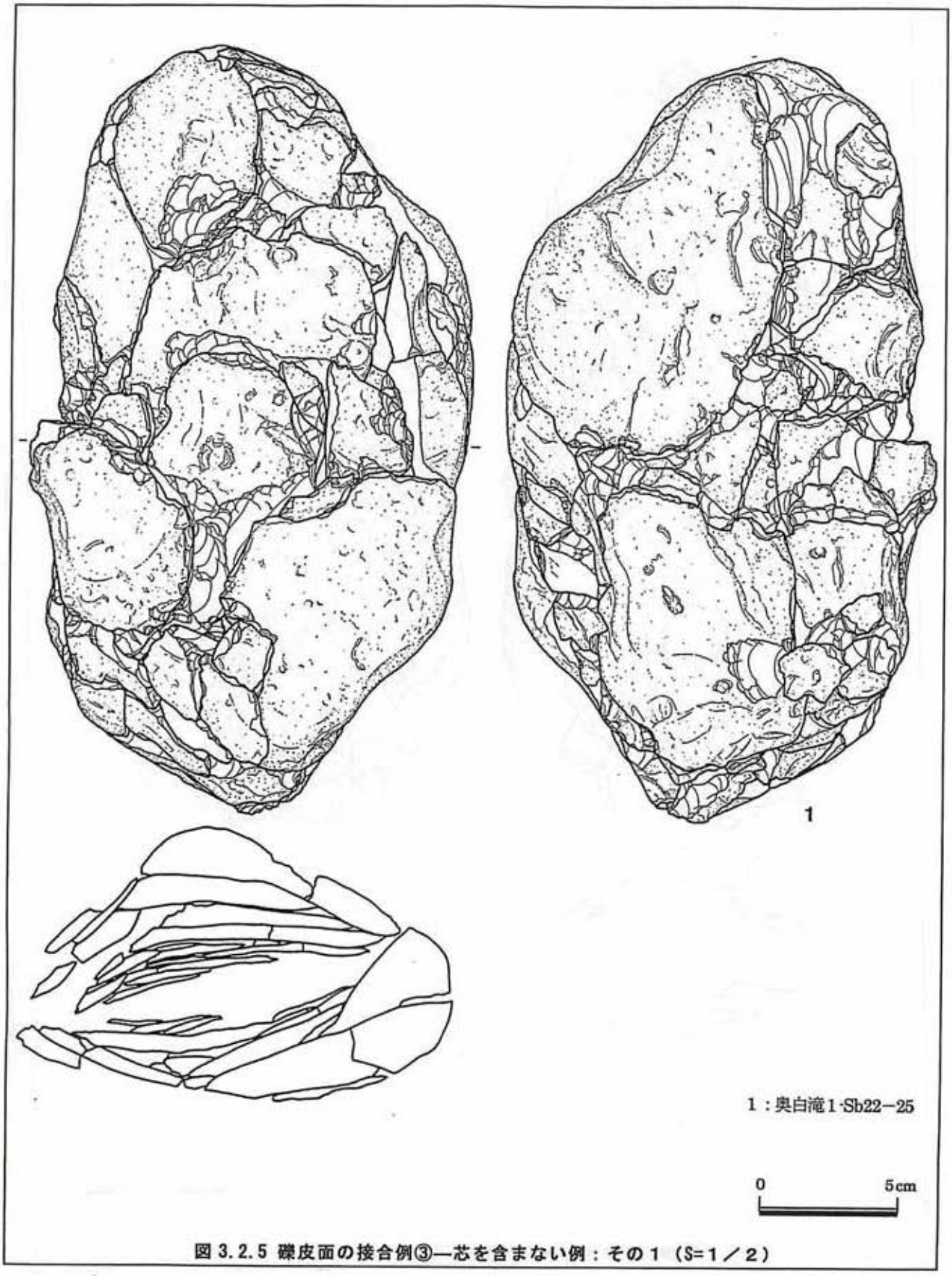


図 3.2.5 礫皮面の接合例③—芯を含まない例：その１（S=１／２）

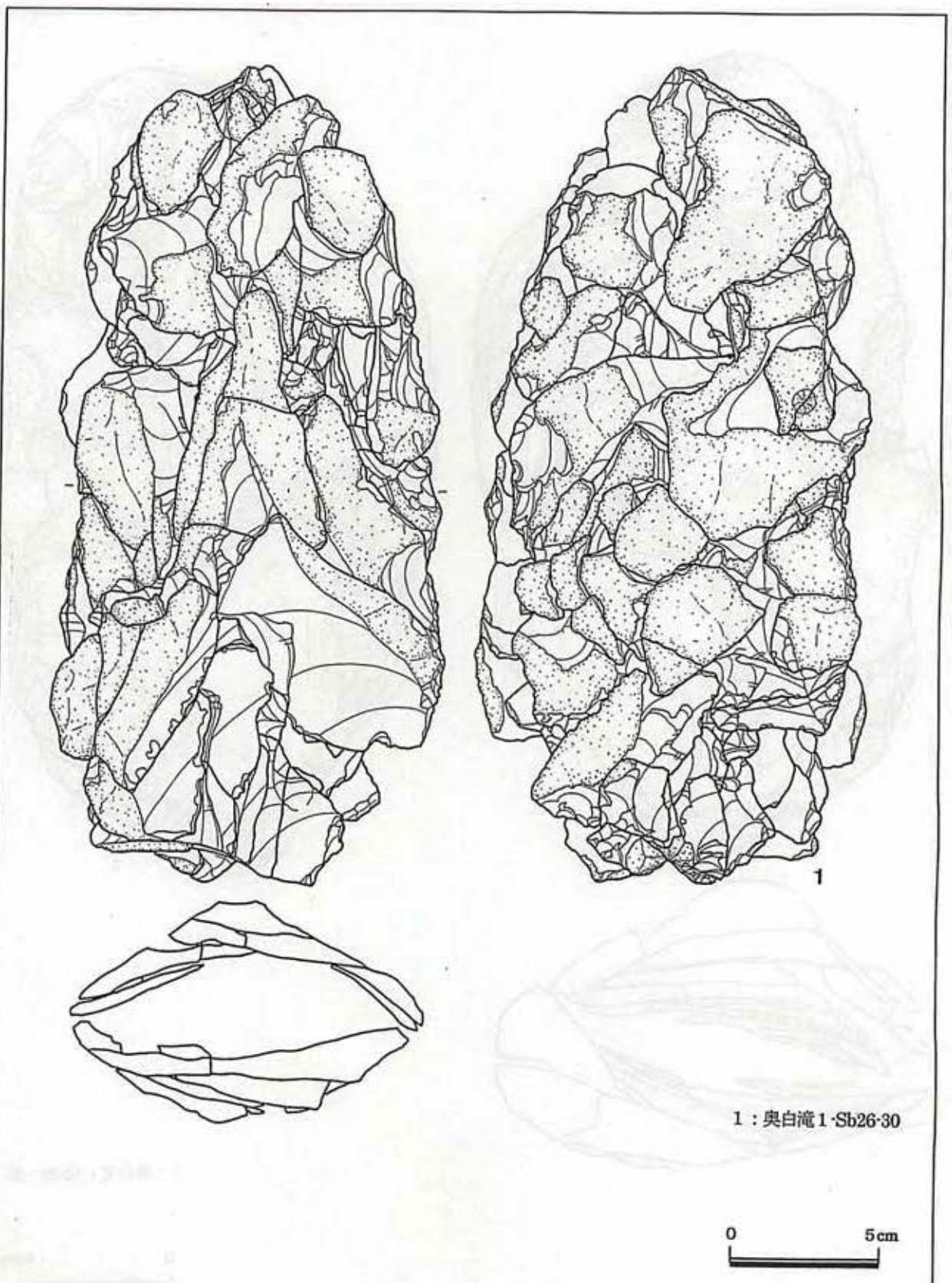


図 3.2.6 礫皮面の接合例④—芯を含まない例：その２（S=１／２）

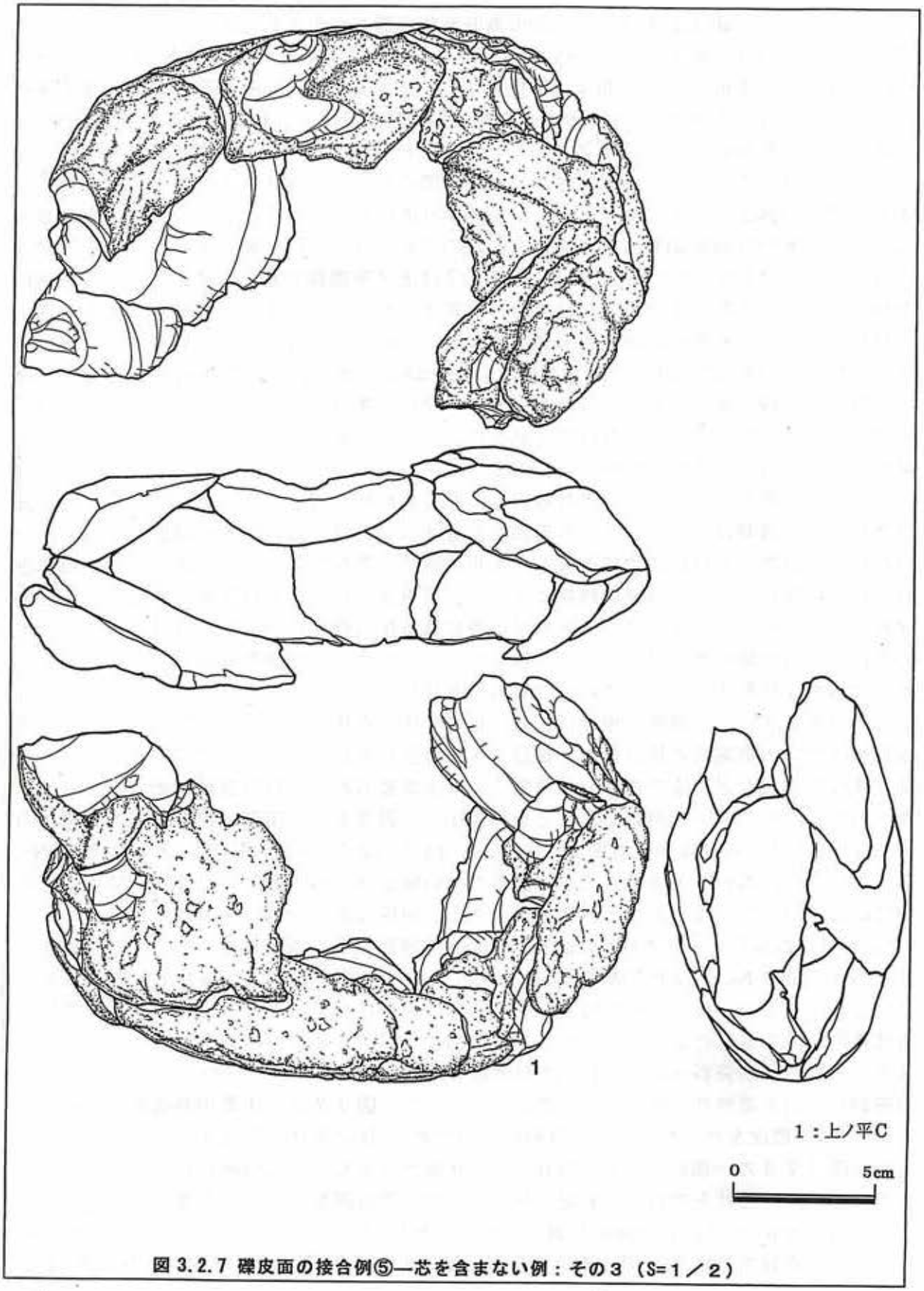


図 3.2.7 礫皮面の接合例⑤—芯を含まない例：その３（S=１／２）

これに対して、**図 3.2.6** は同じく芯の両面調整石器が搬出されながらも、厚手であった例である。石材は黒曜石の母岩 385 で 106 点からなる。図示した例は接合 3186 で、母岩 385 を構成する 106 点の剥片類全てが接合する。最大長が約 28cm の扁平な亜角礫を選択してリダクションを開始し、やはり長さや幅の減少幅は小さい。最終的な空間から長 25cm ×幅 10cm×厚 3 cm 程度の両面調整石器が想定され、やはり同一母岩内に存在しないことから、遺跡外への持ち出しが想定されている。接合している剥片数がさほど多くないことから、礫皮の除去に始まるリダクションがあまり進行しない時点で、いいかえるなら厚手で比較的不整形な両面調整石器が搬出されたのであろう。これは搬出後、さらなるリダクションが想定されていたとみてよい。**図 3.2.7** は**上ノ平遺跡C地点**（新潟県朝日村、澤田 1996、第Ⅲ期）の例である。石材は頁岩の母岩 4 である。母岩 4 は石刃や剥片類 115 点から構成されるが、石核や両面調整石器は含まない。図示した資料は接合資料 4 で、礫皮を大きく残すものを含む 33 点の剥片が接合し、長 23cm×幅 18cm×厚 9cm ほどの水磨の進んだ扁平な円礫に復元されている。やはり芯のない中抜けとなっており、同一母岩の剥片類は多数出土しているものの芯は含まれないことから、報告者は扁平な両面調整石器が遺跡外へ搬出された可能性を指摘している。

このような礫皮を残す剥片が多数接合し、原石の形状が復元されるまでの接合個体が確認されている遺跡は少なく、どこの遺跡でも普通にこの種の接合資料が確認できるわけではない。第Ⅲ期で石材原産地に近接した大規模遺跡（第Ⅳ章第 2 節で後述する）で確認される場合が多い。あるいは他の時期に比べて、第Ⅲ期に特有の石材管理と移動計画の行動連鎖の中でこそ、このような行為の痕跡が特に遺跡化しやすいのかも知れない。しかし本研究は時期毎の傾向や変遷の追求は目指していないため、両面調整石器リダクションの一般的な構造を把握する上で、これらの資料に着目しているにすぎない。

この現象と逆に、一遺跡の中では、同一母岩の中に礫皮を広く残す剥片が存在せず、礫皮を残さない大形剥片の接合のみが確認できる場合もある。これはリダクションがある程度（礫皮の除去など）まで進行した段階で、両面調整石器を当該の遺跡に搬入し、その時点で再びリダクションを開始したことを意味する。**図 3.2.8** は**下茂内遺跡第Ⅱ文化層**（前掲）の例である。石材は黒色緻密な安山岩、1,715 点の剥片から構成される個体別資料 No. 7 のうち、接合 No.29 である。ここに図示しない接合 No.28（接合 No.29 と直接の接合関係にはないが、芯をはさんで反対側を構成する、同様な剥片のみの接合資料）とあわせて 94 点の剥片が接合し、長さ約 34cm 幅約 16cm の両面調整石器を推定できる。報告書によると個体別資料 No. 7 の中を構成する大形剥片はすべて接合 No.28 か接合 No.29 を構成しているとのことで、搬入された時点の状態にほぼ復元されているという。この両面調整石器は礫皮が除去された後に搬入され、本遺跡内でリダクションが再び開始されたと考えられる。また個体別資料 No. 7 の中には両面調整石器の芯が含まれていないことから、芯の両面調整石器を遺跡外へ搬出したと想定されている。**図 3.2.9** は**正面中島遺跡**（前掲）の例で、やはり礫皮を残さない大形剥片の接合例である。接合個体を構成する点数は少なく、先述の**図 3.2.8** の一部が部分的に現れている状態と言える。打面が向かい合う関係で残されているため、これらの剥片が剥離された時点での両面調整石器の幅を推定可能であり、1 では約 13cm、2 では約 16cm を測ることができる。1 と 2 はともに 110 点の剥片類から構成される頁岩の母岩 218 で、1 は接合 No.32、2 は接合 No.33 である。この母岩 218

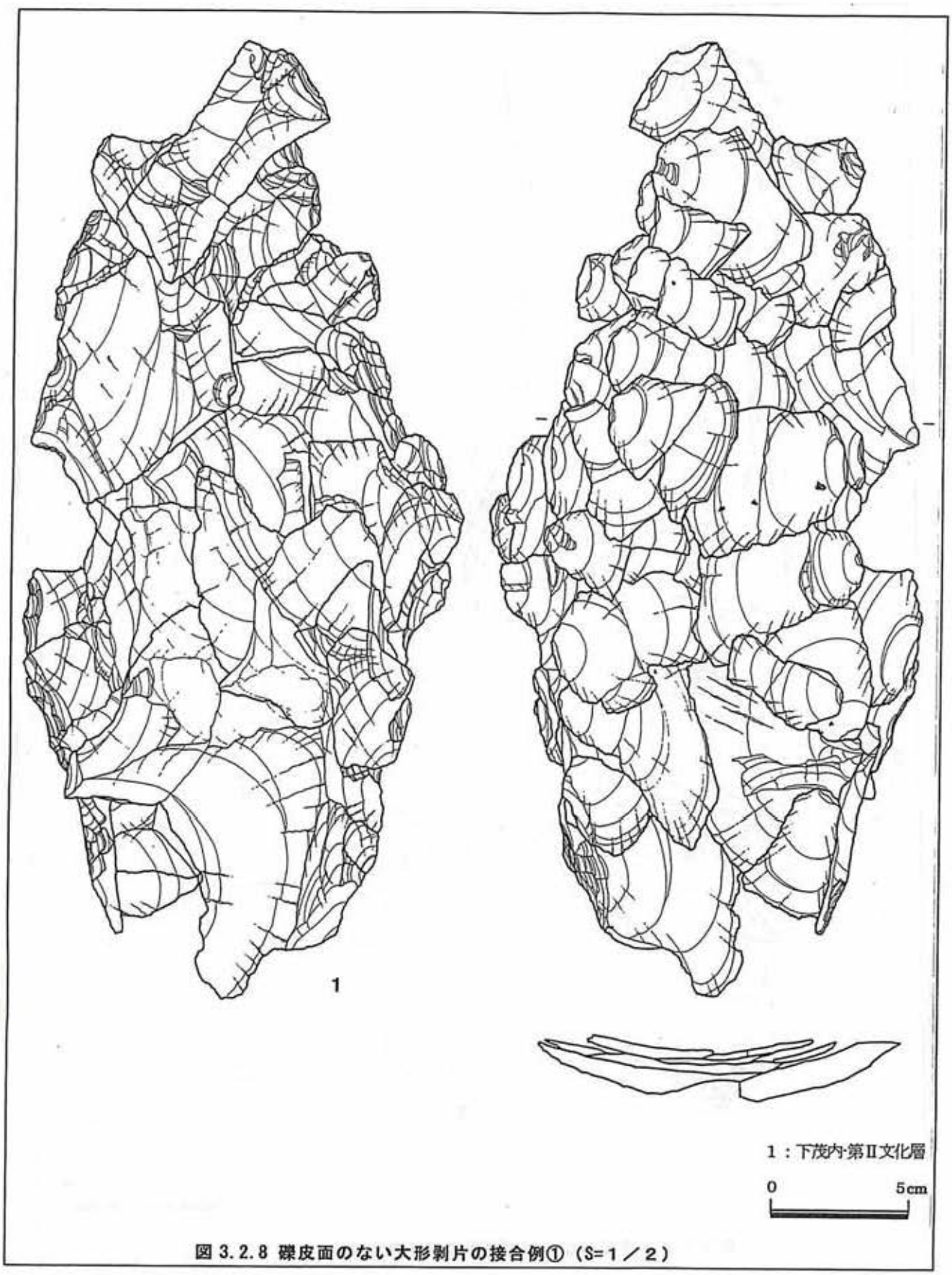


図 3.2.8 礫皮面のない大形剥片の接合例①（S=1／2）

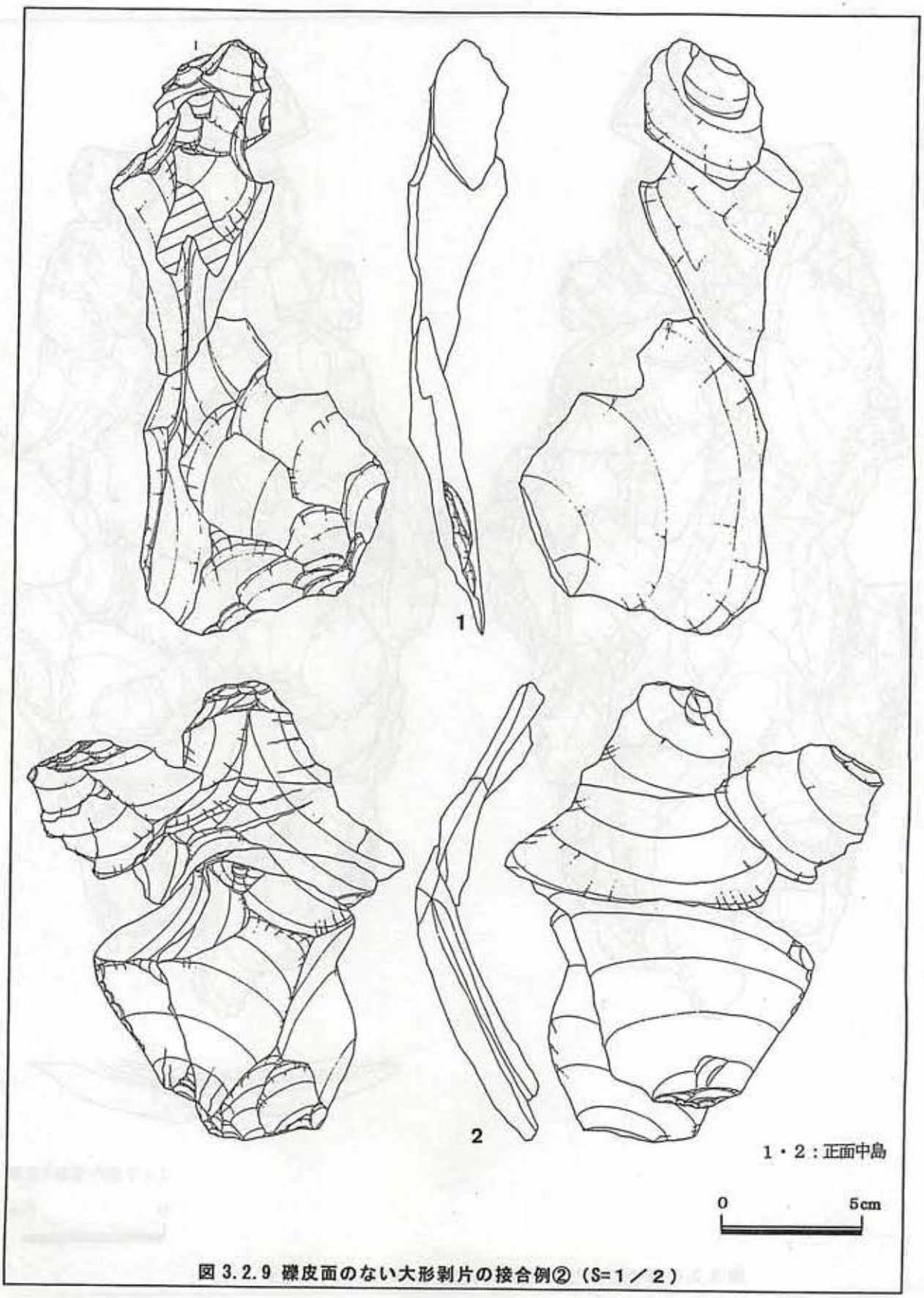


図 3.2.9 礫皮面のない大形剥片の接合例②（S=1／2）

は、110点の中に二次加工剥片5点と石刃1点を含む他はすべて剥片・砕片のみで、両面調整石器の本体は遺跡内に存在しない。また礫皮面を大きく残す剥片はほとんどない。本遺跡の両面調整石器は、最終的には尖頭器の状態で遺跡に残される例が多いことから、**図3.2.9**も尖頭器へ向けてのリダクションの一部として仮定できる。出土している47個体の両面調整尖頭器の大きさの平均値は長6.4cm×幅3.9cm×厚1.2cmであるが、欠損品も多く含まれている。最も大きな尖頭器は長14.5cm×幅6.8cm×厚1.9cmであるが、器体の中央から折れているため精確な最大幅は不明である。欠損のない・または欠損の復元された尖頭器で最も大きいものは、長17.5cm×幅4.7cm×厚1.2cmである。これらの幅よりも、**図3.2.9**の資料から推定した幅は、2倍から3倍以上もある。したがって母岩218のリダクションは、相当に大きな素材からリダクションを開始し、礫皮が除去された直後にこの遺跡に搬入され、100点前後の剥片が生じる程度のリダクションを遺跡内で実施し、その過程の一部のみが**図3.2.9**として可視化していること、その際に生じた剥片の一部に二次加工を加えたこと、やがて芯の両面調整石器が遺跡外に搬出されたことがわかる。

これらと**図3.2.8**の下茂内遺跡の例とでは、接合個体を構成する剥片の点数が大きく異なるが、これは同一母岩に帰属する剥片数自体が大きく異なることに起因している。言い換えると一遺跡内でのリダクションによって生じた剥片数が異なるということであり、一遺跡の中でのリダクションの速度の違いとも言える。**図3.2.8**の下茂内遺跡の例では大形剥片が生じるリダクションが一遺跡の中で一気に進行したが（リダクション進行時間の短縮）、一方で**図3.2.9**の正面中島の例では、リダクションは一遺跡の中で緩慢に進み、複数の遺跡間を持ち回す中でゆっくりと石材を消費したかのようである（リダクション進行時間の拡張）。いずれも幅が16cm前後という大形な、つまりリダクション開始から間もない時点の両面調整石器である点で共通するにもかかわらず、このような差がみられることは、興味深い現象である。

（2）剥片を素材とする場合

最初のリダクションの開始にあたって自然石ではなく、剥離によって生じた剥片を素材として選ぶ場合もある。これらは石核石器か剥片石器かとの区分の上では剥片石器といえるが、リダクションが進行して器体の全面におよんだ場合には、自然石を素材としたのか、それとも剥片を素材としたのか確定できなくなる場合が多く、結果的に核石器・剥片石器との区分が適用できないことになる。

図3.2.10～13は、剥片を素材としてリダクションを開始した状態を示す資料の代表例である。**図3.2.10**は特に厚手・大形の剥片を用いてリダクションを開始している例である。上段（1）は**北支湧別4遺跡**（前掲）の石器ブロック2-3で、石材は黒曜石の母岩26である。厚手の横長剥片を選択し、全周からの剥離が背面に集中しているが、礫面をわずかに残すため背面が礫皮に覆われた剥片を素材としている可能性がある。本資料には3点の剥片が接合する。下段（2）は**月見野遺跡群上野遺跡第2地点**（神奈川県大和市、相田ほか1986）の例で、時期は第Ⅳ期の有茎尖頭器石器群である。石材は玄武岩で、報告書では打製石斧の未製品とされているが、器種が固定化される以前のリダクション開始直後の姿と考えられる。礫皮を大きく残す縦長の剥片を素材とし、背面の左側縁と腹面の両側縁から下半分に剥離が加えられている。

図3.2.11は同じように礫面を広く残すが、やや小形の剥片を選択してリダクションを

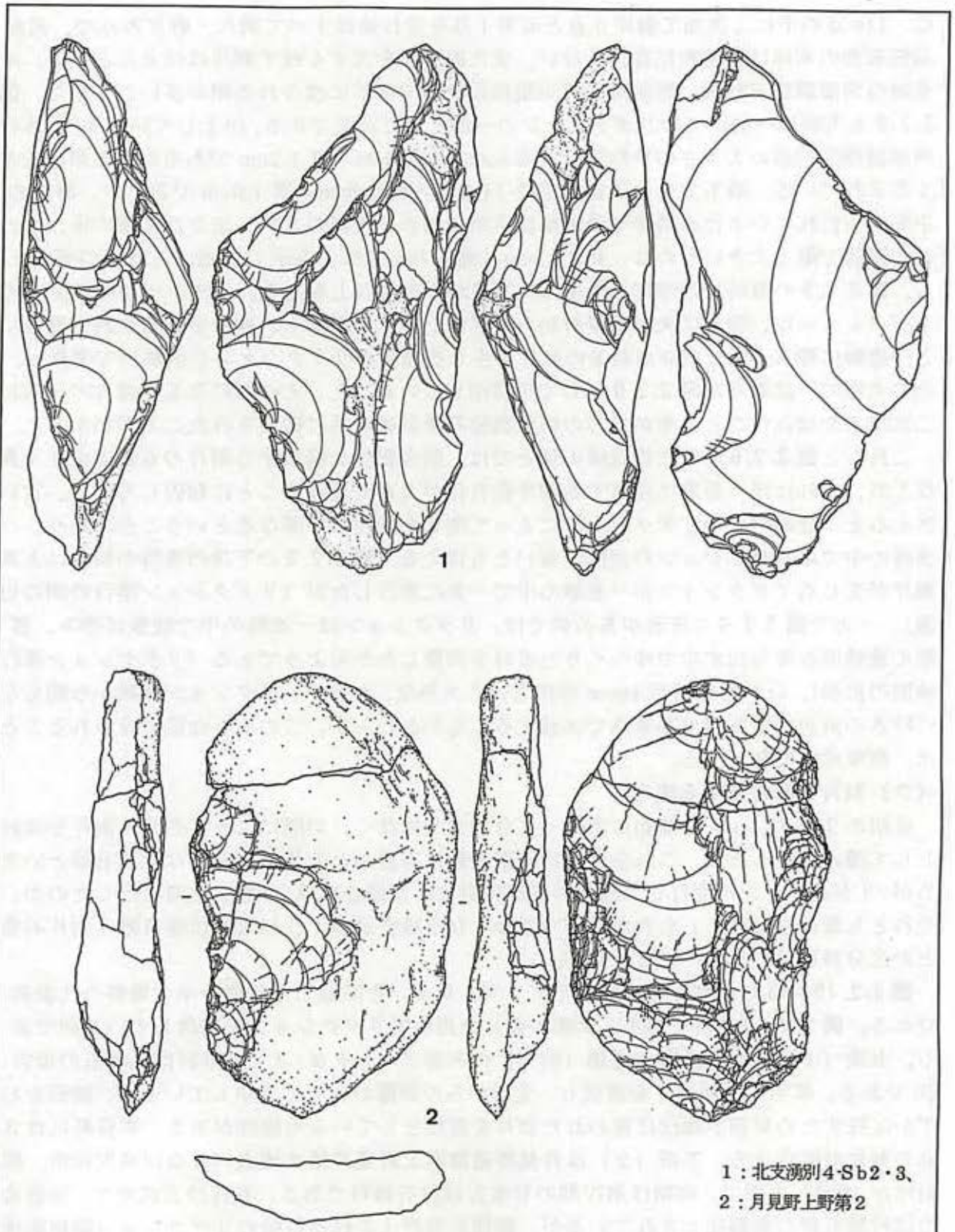


図 3.2.10 礫皮に覆われた大形剥片からのリダクション開始状態（S=1／2）

開始した例である。**図 3.2.1～図 3.2.7** に見た、自然石からのリダクション開始の際に生じた剥片や剥離面と対応する大きさである。図示した資料は、それぞれ遺跡も石材（母岩）も異なるため直接の接合関係にはないが、自然石からのリダクション開始時点で生じた剥片を、ただちに素材として選択し別のリダクションを開始する可能性を指摘できる。1以外は縁辺の背腹両面に、部分的な剥離を加えている。これらは通常、出土時点での形態を重視して二次加工ある剥片や削器などと分類されるものであるが、この先に両面調整石器としてのリダクションが進行していった可能性が高いと評価したい。ただし、ここに提示した資料は結果的にリダクションが途中で停止したために遺跡に残っているので、次なる使用は求められなかった「ハネもの」であった可能性が高い。逆に、次なる使用への有用性を見込まれた石器は、あるものはリダクションが進み、あるいは搬出されるなど、図示した資料のような状態で遺跡に残る機会は少ないと想定できる。

1と5は**南原遺跡第Ⅱ文化層**（神奈川県藤沢市、栗原ほか 2004、第Ⅰ期）、2と3は**真人原遺跡 C 地点**（新潟県小千谷市、小野ほか 1997、第Ⅰ期）、4は**宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第Ⅲ文化層**（神奈川県清川村、鈴木ほか 1996、第Ⅰ期）、6は**風間遺跡群第Ⅰ文化層**（神奈川県城山町、麻生ほか 1989、第Ⅲ期）、7は**宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡第Ⅰ文化層**（神奈川県清川村、市川ほか 1998、第Ⅲ期）の各例である。南原遺跡の1はホルンフェルスで、この遺跡内での同一母岩は本資料と接合する大形の剥片が他に1点あるのみである。この遺跡では、約 4500 点の出土石器の 90%以上がガラス質黒色安山岩であり、ホルンフェルスのこの母岩は図示した例を含む2枚の剥片だけを、遺跡内に搬入している。真人原遺跡 C 地点の2と3は無斑晶質安山岩で、この遺跡内では石核や多数の剥片を含み、重量では最も多い石材である。母岩別分類は行われていないが、遺跡内でリダクションが活発に進められた石材に属する。サザランケ遺跡の4は緻密黒色安山岩で、個体別資料9とされている。この遺跡では 2823 点（19322.1ｇ）の出土石器のうち、重量にして約4分の1（5189.2ｇ）が緻密黒色安山岩であるが、この母岩は図示した例を含む2点の二次加工剥片のみから構成される単品に近い状態での搬入品である点で、1の南原遺跡例と同様の性格をもつ。南原遺跡の5はガラス質黒色安山岩で、同じ遺跡の1とは異なり遺跡内で多量に出土している母岩である。半欠した剥片の打面側の側縁から表裏に平坦な二次加工を加えている。風間遺跡群の6は凝灰岩で、母岩別分類は公表されていないが、総出土点数 330 点の中では 32 点という少数派の石材である。礫皮を面的に残す厚手の剥片の打面部から両側縁に二次加工を加えているが、2つに割れてしまったことからリダクションを停止して放棄したものと考えられる。宮ヶ瀬北原遺跡の7は硬質中粒凝灰岩で、母岩 14 とされている。この遺跡では、硬質中粒凝灰岩は 106 点（3427ｇ）出土しており、全体の 901 点（11509.3ｇ）の中では多数派とは言えない。さらにこの母岩 14 は図示した例の他に剥片1点のみから構成されており、やはり1や4と同様に2点のみ遺跡内に搬入されている。腹面への二次加工が特徴的で、報告書では削器に分類されている。

図 3.2.12 と **13** は礫皮面が広く残らない大形・厚手の剥片を素材にリダクションを開始している例である。**図 3.2.8** や**図 3.2.9** とおおむね同様の、礫皮面の除去後まもない時点のリダクションで生じた剥片を素材としている可能性が高い。**図 3.2.12** の1と2は**多摩ニュータウン No.27 遺跡第Ⅰ文化層**（東京都多摩市、原川ほか 1998、第Ⅲ期）、3は**真人原遺跡 C 地点**（前掲、ただし原図は筆者によるため報告書には未掲載）である。

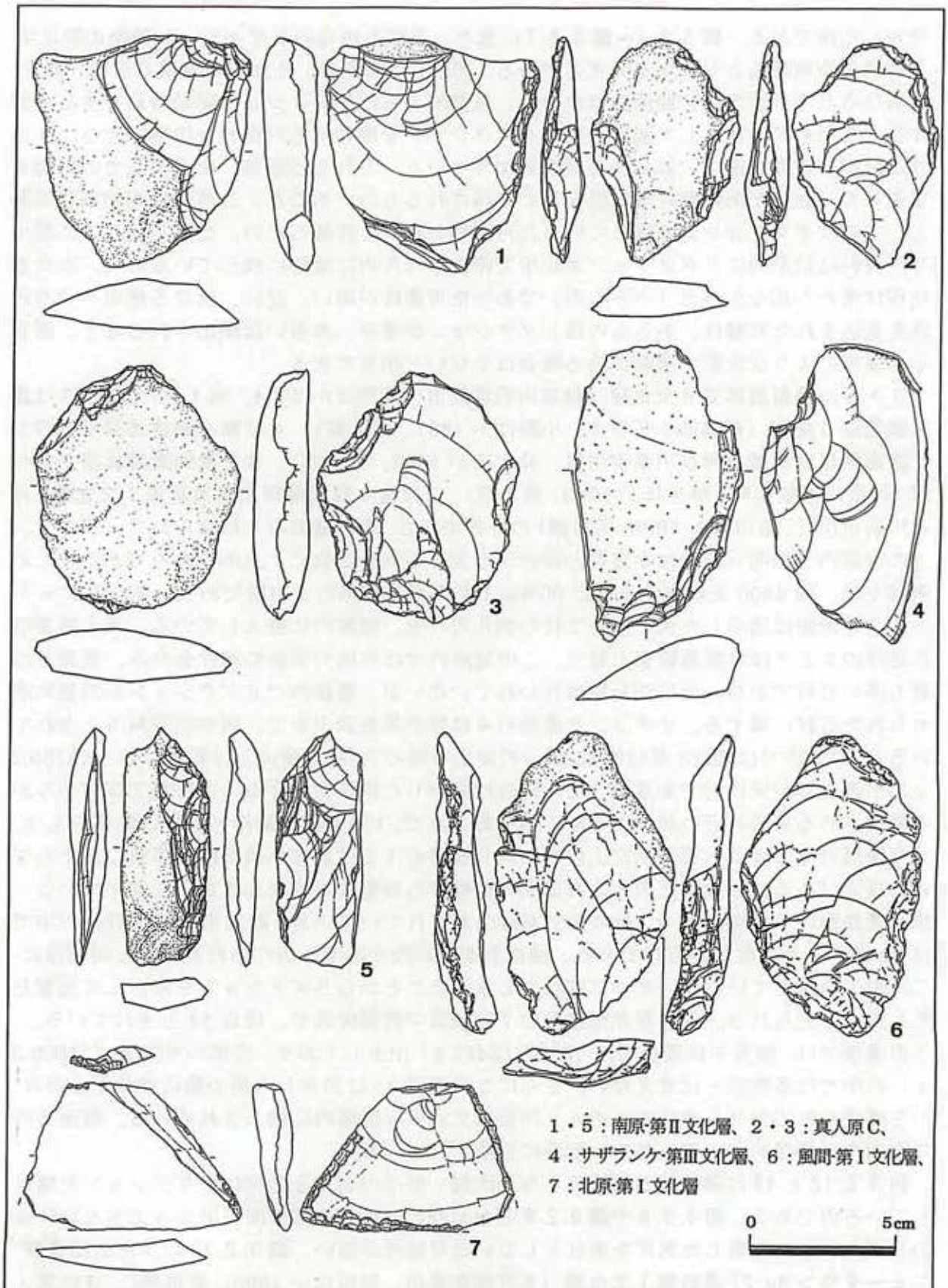


図 3.2.11 礫皮に覆われたやや小形の剥片からのリダクション開始状態（S=1／2）

1と2は頁岩である。ともに、1点の両面調整尖頭器に5点の剥片が接合した第16遺物集中地点の接合個体と、同一母岩の関係にある可能性を報告者は指摘しているが、直接の接合関係は確認されていないという。頁岩は、第16遺物集中地点においては尖頭器6点や剥片1,009点などを含むリダクションの活発な石材であるが、母岩別分類は公表されていない。1と2はともに集中部から離れた単独出土品であり、集中的にリダクションを実施した場から、遺跡内の別の場に持ち出されている。先述の**図3.2.11**の1、4、7などの単品や少数母岩での遺跡内への搬入とは、逆のパターンである。遺跡や時期が異なるために、ここに示した資料同士の実際の結びつきはありえないが、構造的には相互補完的な関係（集中的なリダクション進行の場と、剥片等の形による単品に近い状態での搬出入）を、見てとることができる。3の真人原例は、遺跡内で集中的なリダクションが行われている（多数の剥片が出土している）無斑晶質安山岩であり、遺跡内で生じてから搬出されなかったものといえる。また、いずれも厚手の剥片を選択して縁辺の一部に平坦な剥離を、部分的または連続的に加えている。腹面にも二次加工が入る場合が多いのは、**図3.2.11**や次に見る**図3.2.13**とも共通する特徴である。

図3.2.13は資料の性格としては前掲の**図3.2.12**とほぼ同じだが、尖頭器にむけた平面形状の規定が開始されている例を選んだ。1は**真人原遺跡C地点**（前掲、原図は筆者によるため報告書には未掲載）、2は**宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第Ⅲ文化層**（前掲）、3と5は**南原遺跡第Ⅱ文化層**（前掲、第Ⅰ期）、4は**風間遺跡群第Ⅰ文化層**（前掲、第Ⅲ期）、6は**下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層**（神奈川県大和市、見崎1984、第Ⅰ期）である。1の真人原遺跡C地点の例は**図3.2.11**の2、3や**図3.2.12**の3と同様の無斑晶質安山岩であり、遺跡内で多数の同一石材の剥片が出土していること、リダクションの場から搬出されなかった存在であるとの事情は、同様である。横長剥片の素材の両端をやや尖らせ始めている。2のサザランケ遺跡の例は黒色緻密安山岩の母岩12で、図示した資料以外は剥片類12点（47.0g）のみからなり、本文化層の2,823点（19,322.1g）という全出土点数から見ると、剥片素材もしくはわずかにリダクションを開始した状態での搬入品である。遺跡内でリダクションを再開したものの、器体が半分に割れたために放棄したものであろうか。3と5の南原遺跡例はいずれもガラス質黒色安山岩である。未報告資料のため母岩別分類の成果も公表されていないが、実見によると3は単独母岩の搬入品の可能性が高く、5は多くの剥片類を伴う母岩のようである。4の風間遺跡群例はホルンフェルスである。母岩別分類は公表されていないが、総出土点数330点の中21点という少数派の石材で、遺跡外からの搬入の可能性が高い。素材剥片が割れてしまった後にも、折れ面からさらなる二次加工を加えて有効利用を試みている。6の下鶴間長堀の例は凝灰岩の個体4とされ、3点と尖頭器と19点の剥片から構成される。総出土点数1,255点（重量データ未公表）と比較して少数派の母岩といえ、遺跡外からの搬入を想定できる。図の左側縁の3分の2ほどと、右側縁の先端部の背面、尖頭部の腹面に二次加工を加えている。

このように剥片を素材としてリダクションを開始して間もない状態で停止した資料は、ここに挙げた例以外にも、比較的多くの遺跡で確認できる。また①単独や少数派の石材や母岩で、遺跡外からの剥片の状態での搬入を想定できる場合と、②遺跡内で多数出土している石材や母岩で、直接の接合関係になくとも遺跡内で生じた可能性が高い場合との両方の場合を認めることができる。

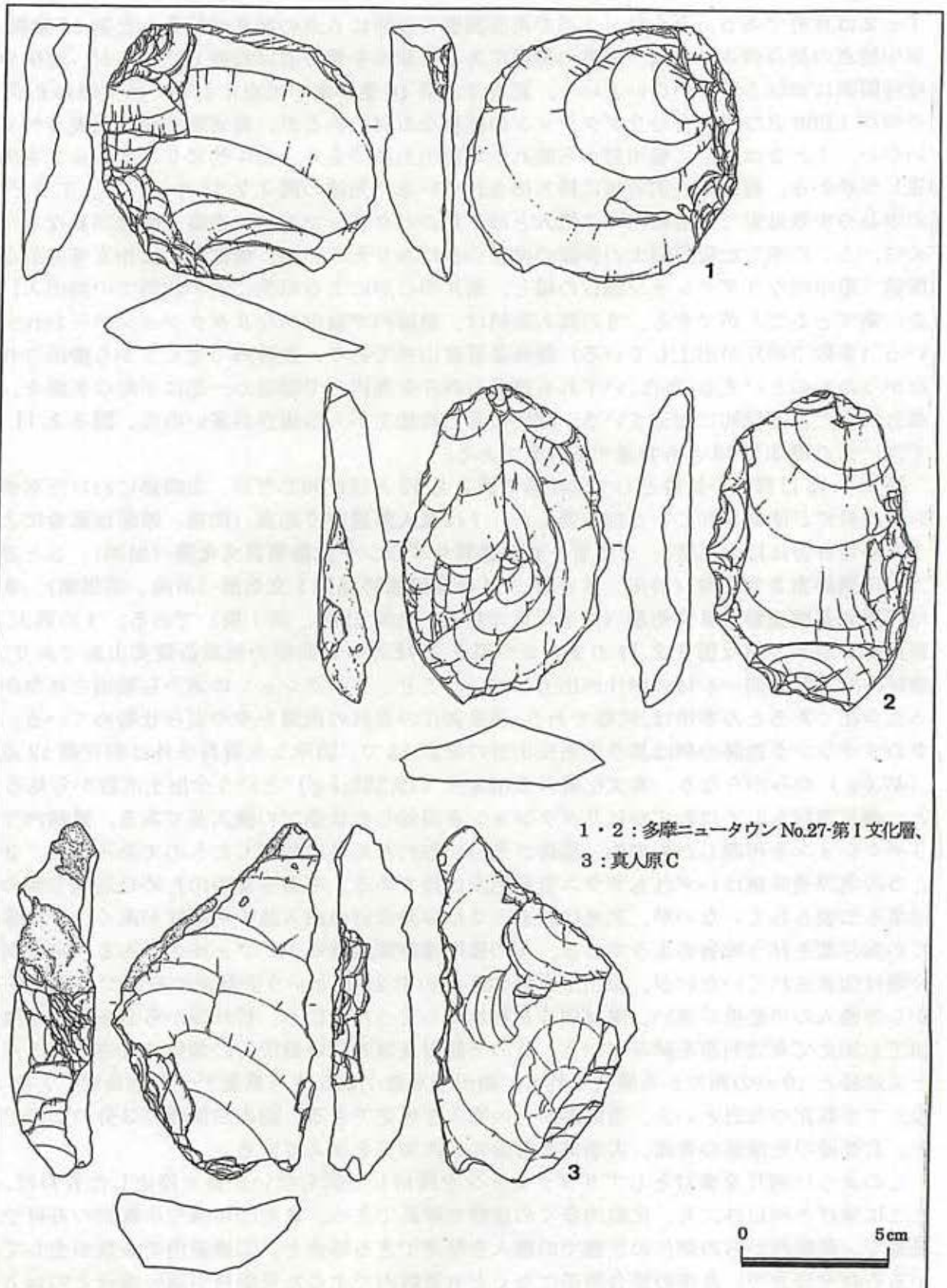


図 3.2.12 礫皮のない大形の剥片からのリダクション開始状態①（S=1／2）

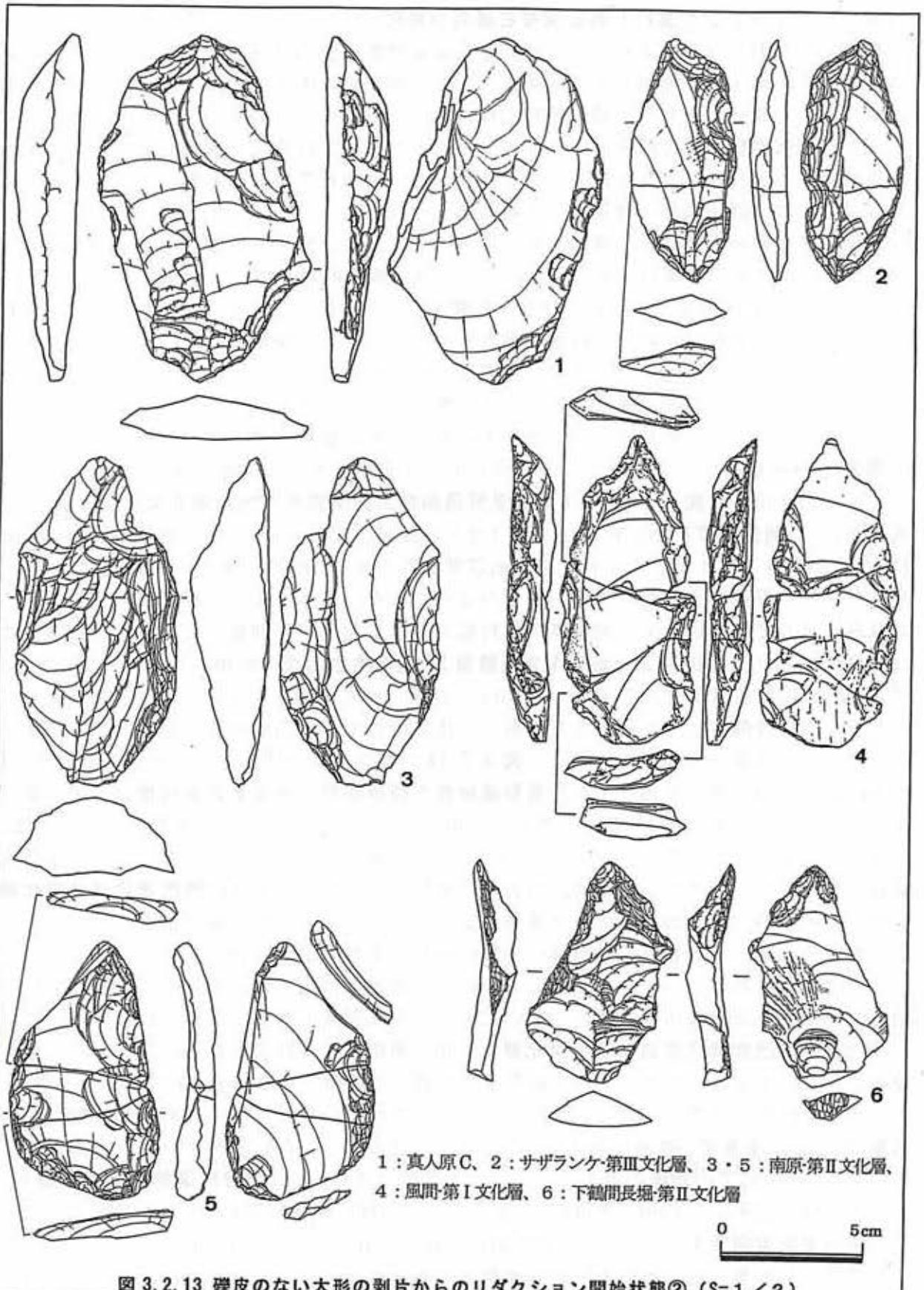


図 3.2.13 礫皮のない大形の剥片からのリダクション開始状態②（S=1／2）

（3）リダクションの進行と両面調整石器の小形化

自然石なり剥片なりを素材として開始した両面調整石器のリダクションが、その進行につれて長さ・幅・厚みを減じると同時に、生じる剥片類の大きさも減じてゆく。これは石刃核などにも共通する打製石器の原理的な性質によるもので、石器の法量が増すことはない。芯の両面調整石器の厚みは、リダクションが円盤状石核や細石刃核、石斧などに向かう目的とする場合には大きく減じることはないが、尖頭器や半月形石器などへの整形に向かう場合には、押圧剥離も併用して入念に薄くされてゆく。

両面調整石器の大きさは、獲得可能な原石の大きさや、使用目的などとの兼ね合いで融通が利くものである可能性が高い。このため一律に数値的な基準で「大形」「小形」「厚手」「薄手」「平面形状の規定度合い」などを分離することは難しく、あくまでも相対的な評価である。生じる剥片は一般に、両面調整石器のリダクション開始に近いほど厚手で、進行するほど薄手になると想定できるが、リダクションが大きく進んだ後でも、両面調整石器から厚手・大形の剥片を剥離することは不可能ではない。またリダクションが大幅に進んだ時点で生じた小形の剥片にも、二次加工を加えて別の器種とする例もある。

図 3.2.14～15 には、リダクションが進行して小形化した両面調整石器に、剥片が接合している例を示す。**図 3.2.14** の 1 は**月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点第Ⅱ文化層**（前掲、第Ⅲ期）で、個体別資料 No.52 の玄武岩（ガラス質黒色安山岩）である。個体別資料 No.52 は、2 点が接合して 1 点となった芯の両面調整石器の他に、42 点の剥片から構成されるが、本体との接合が確認された剥片は、わずか 4 点である。本体は長さと幅は小形化しているが厚みが減じていないため、報告者は「打製石斧の未成品」と理解している。2 は**多摩ニュータウン No. 27 遺跡第 2 地点第 1 文化層第 22 遺物集中地点**（前掲、第Ⅲ期）の例である。石材は暗黒色のホルンフェルスで、34 点の同一母岩の剥片をともない、そのうち 5 点が図示した接合個体として両面調整石器の本体に接合する。両面調整石器は薄手で幅が狭く、槍先型尖頭器と理解されている。**図 3.2.15** の 1～3 はいずれも第Ⅰ期で、特に小形の両面調整石器の例である。1 は**月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点第Ⅳ文化層**（前掲、第Ⅰ期）である。個体別資料 No.7 の黒曜石で、接合して 1 点となった両面調整石器（尖頭器）のほかに 136 点の剥片類から構成される。このうち図示した例では、6 点の剥片が本体に接合しているが、リダクションは片面のみに進行している。2・3 は**南原遺跡第Ⅱ文化層**（前掲、第Ⅰ期）で、石材はガラス質黒色安山岩である。母岩別分類は公表されていないが、おそらく同一母岩の可能性が高い小形の剥片が多数出土している。そのうち 2 では 2 点、3 では 1 点の剥片が、すでに著しく小形化が進んだ（あるいは当初より小形の剥片を素材として小形品の製作を目的としていたのか）両面調整尖頭器の本体に接合している。

4 は**宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡第Ⅰ文化層**（前掲、第Ⅲ期）で硬質細粒凝灰岩である。接合資料 15 で、21 点の剥片類とこの両面調整尖頭器とで構成される母岩 11 である。尖頭器としての平面形状は整ってきているが厚みが減らされていない。同一母岩の剥片類の平均重量は 0.5g にすぎず、微細な剥片ばかりであることから、かなりリダクションの進んだ状態で搬入され、若干の剥離のみを行っていると判断できる。5 は**房谷戸遺跡第Ⅰ文化層**（群馬県北橘村、谷藤ほか 1992、第Ⅲ期）の例である。石材は個体別資料 31 の黒色安山岩で、この両面調整尖頭器を含み 29 点の剥片類から構成される。接合資料 76 である。平面形状が尖頭器として整っているにも関わらず厚手である点で、4 と同じ状態にあるが、素材が

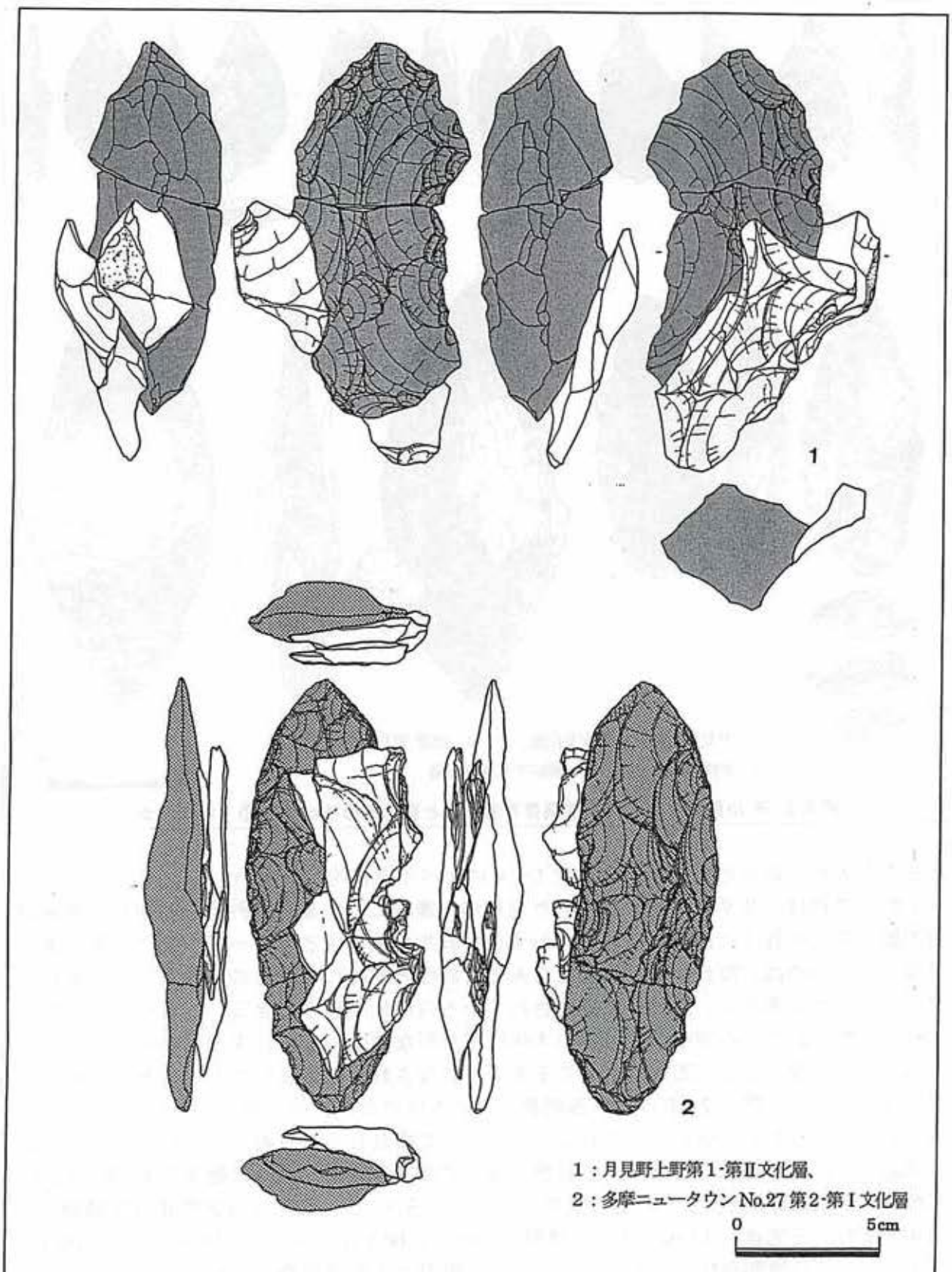


図 3.2.14 小形化が進んだ両面調整石器本体と剥片との接合資料①（S=1／2）

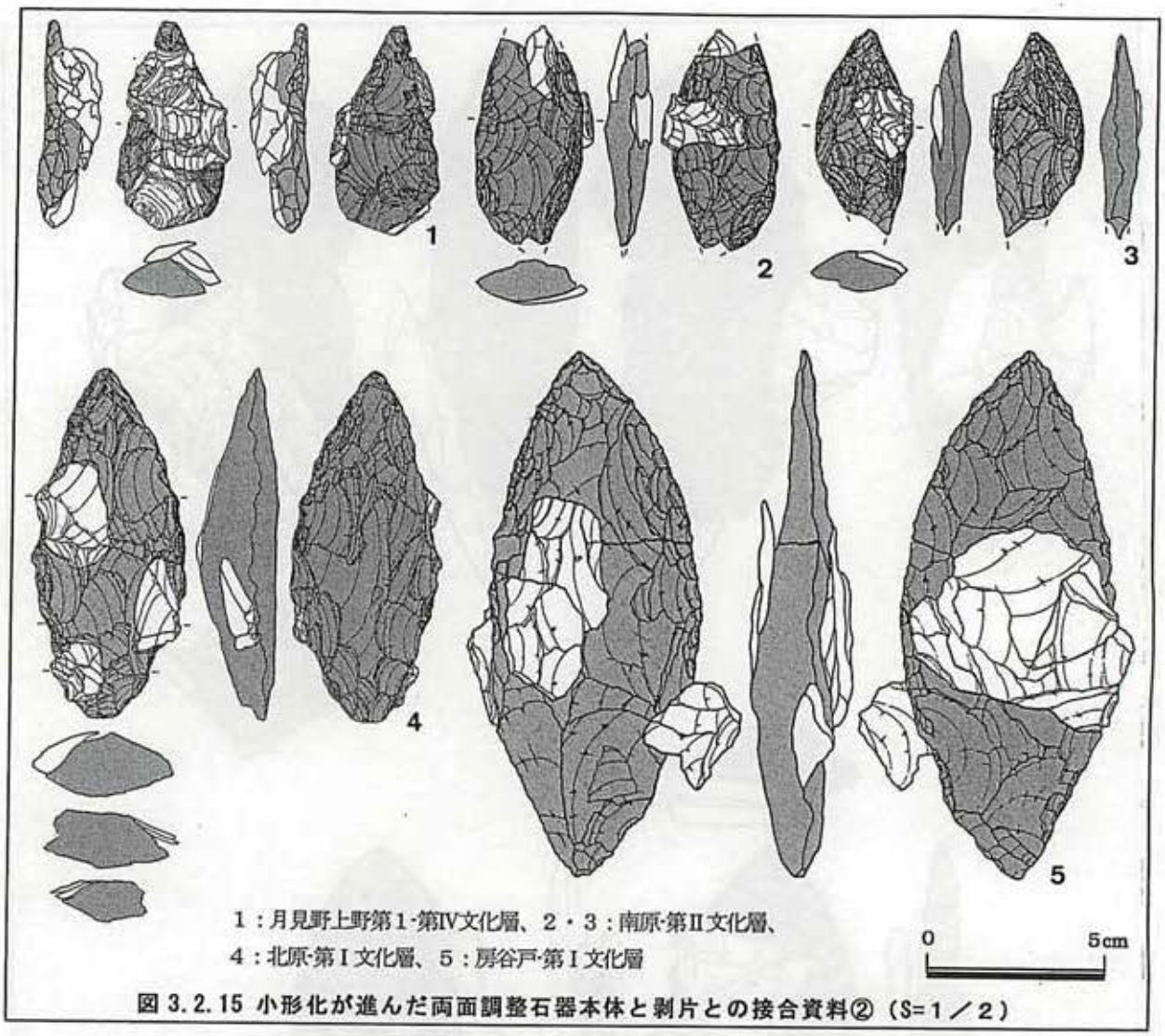


図 3.2.15 小形化が進んだ両面調整石器本体と剥片との接合資料②（S=1／2）

もともと大形であったためか、全体は1～4に比べて相対的に大きい。

これらの例は、リダクションで生じた剥片が一遺跡に一定量残されている中に、両面調整石器も搬出されずに残され、これにわずかな剥片が接合するパターンである。他の剥片が接合しないのは、接合作業が不徹底である可能性と同時に、多くの剥片あるいは接合の要となる大形の剥片が、遺跡外に搬出されている可能性も想定できる。これに対して搬出されずに残されている両面調整石器の本体は不整形な場合が多く、尖頭器や石斧といった目的の形を実現する上で困難が生じて不要品と見なされ、放棄されたものであると考えるのが自然である。**図 3.2.16** は、両面調整石器の本体のない、剥片類のみの接合例であるが、両面調整石器の両側縁に対応して向かい合って接合している剥片の、それぞれの打面の間隔から、この時点での両面調整石器の幅を想定できる例である。**図 3.2.9～8** と同様のだが、両面調整石器はより小さな状態にあることを示している。1は**大平山元II遺跡**（青森県蟹田町、三宅ほか 1980、第II～III期）の例で、接合資料 No.14 である。石材は硬質頁岩であり、母岩別分類は公表されていない。想定できる両面調整石器は、長さは不明ながら幅が8cm前後であり、**図 3.2.9～8** の約半分の大きさである。本遺跡からは多数の

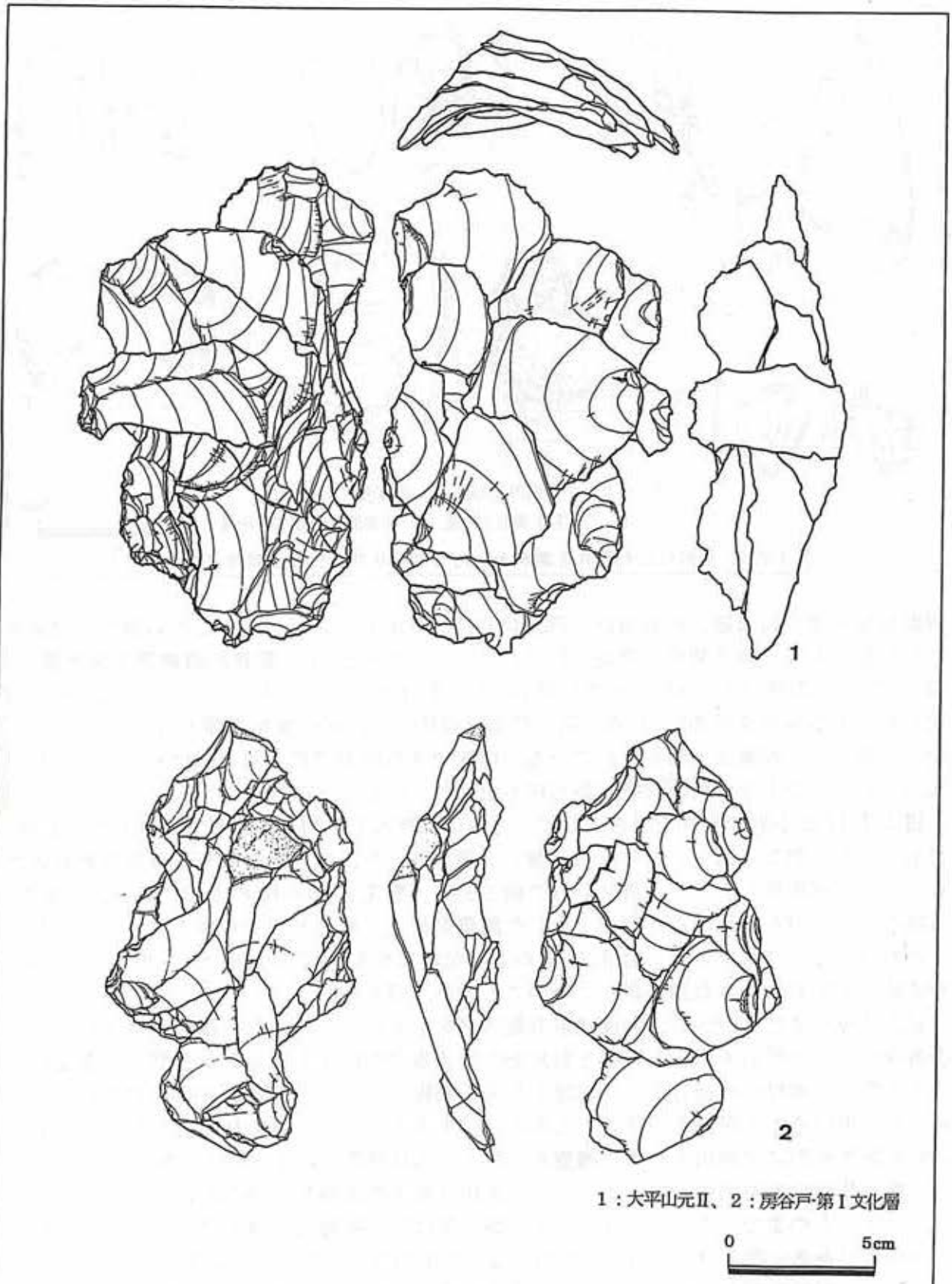


図 3.2.16 両面調整石器が小形化した状態を示す剥片の接合資料（S=1／2）

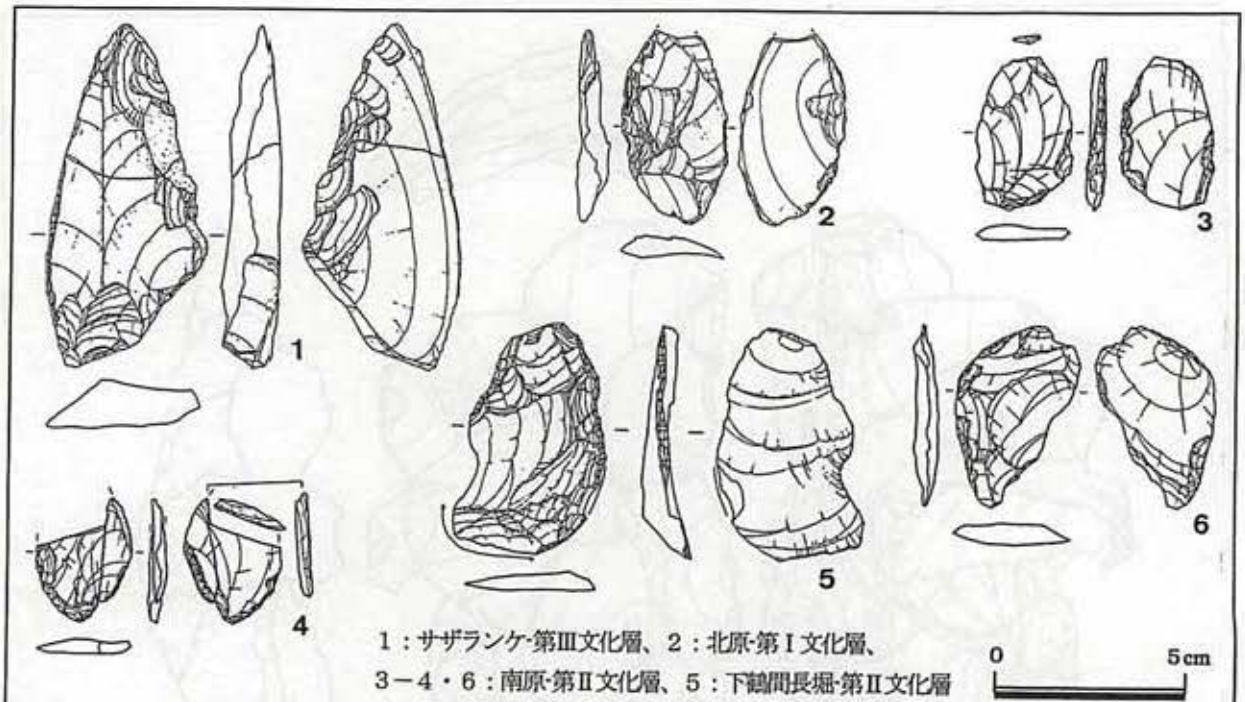


図 3.2.17 小形化した剥片を素材とした更なるリダクション開始（S=1／2）

両面調整石器（尖頭器、細石刃核、円盤状石核）が出土しているが、これら遺跡に残置された石器との間に接合関係は確認されていないようである。2 は**房谷戸遺跡第Ⅰ文化層**（前掲）の例で、黒色頁岩で 68 点の剥片類からなる個体別資料 2 であり、そのうち 23 点の剥片が接合する接合資料 20 である。同一母岩（個体）中に両面調整石器が含まれないことから、遺跡外への搬出が想定されている。復元できる両面調整石器の幅は 6 cm 前後である。このような小形の両面調整石器も持ち出されていることは興味深い。

図 3.2.17 は小形の剥片を素材として、さらに二次加工を加えて器種を製作している例である。便宜的な石器としての性格が強いと思われるが、ここからさらに両面調整石器にもっていく可能性もある。各遺跡からの例である。**図 3.2.15～16** のように芯の両面調整石器の小形化がかなり進んだ時点で生じた調整剥片も、素材として利用される場合があることが分かる。これはまた、**図 3.2.13** のようなあまり大きくない剥片からリダクションを開始して生じた小さな調整剥片についても、あてはまる。

以上にみてきた事例から、両面調整石器リダクションの一般的な特徴を列挙する。①素材として自然石を用いる場合と剥片を用いる場合の両方がある、②自然石の礫皮を除去する際や、素材の両面に平坦な剥離を加える過程で生じた大形の剥片を、別の石器の素材として用いることがある、③この大形剥片は単品として持ち込まれることがある、④芯の両面調整石器には搬出されずに調整剥片類とともに残置されるものと、搬出されて中ぬけの接合個体のみを残すものとがある、⑤搬出される両面調整石器の芯には、大きいものから小さいものまである、⑥リダクションが一気に進む場合と、複数遺跡間でゆっくりと進む場合がある、⑦リダクションが大きく進んだ状態で／または小形剥片を素材として開始した両面調整石器から生じた、かなり小さな剥片をさらに素材として選択し、二次加工を加えていくことがある。

（4）特殊なリダクション

これまで検討してきた両面調整石器リダクションは、素材の両面に平坦な調整を加えて、厚みを減じながら楕円形や尖頭形に整える形が一般的であった。次に、より特殊化なリダクション事例について検討する。リダクションの過程で両面調整石器を分割して、立体的に大きく変形する場合がある。これは断面凸レンズ形の円盤状にもっていくリダクションとは性格が異なる。両面調整石器の分割には、縦に分割するものと横に分割するものがある。縦割りの分割は技術的にも高度であり、より意図的な行為である。これに対して横割りは事故としても生じやすいことから、不本意な折れからの再利用・再展開も含む可能性がある。またある種の尖頭器など、明らかに特定の形を強く志向してリダクションが進行する場合もある。以下で順に例示する。

①両面調整石器を縦割りするリダクション：図 3.2.18～19 は、両面調整石器の平面に対して垂直方向に削片を剥離するリダクションの接合例である。一見して奇抜な現象であるため多くの先学が注目し、細石刃核（石核スクレイパー）の製作工程としての「湧別技法」（吉崎 1961）、彫器・ナイフ・掻器の製作工程としての「男女倉技法」（森嶋ほか 1975）、扇形削片・有樋尖頭器・彫器の３器種の製作工程としての「大平山元技法」（三宅ほか 1980）が提唱された。当初は大局的な系統や編年観が議論されていたが、関連資料の蓄積が進むにつれ各「技法」の再検討が行われ、湧別技法は美利河技法の提唱（長沼 1985）やテクノコンプレックス（Kimura1990、木村 1990）の議論、有樋尖頭器は技術形態学的に器種の分類を確定する議論（川口 1989、堤 1988 など）に向かった。技術形態学的分析によって、「男女倉型ナイフ」や「男女倉型掻器」の存在や、「扇形削片」の目的性は否定された。しかしいずれも製作工程を復元する目的の研究で、榊　剛史が「石器を剥離する過程は否応なく製作工程に結びつけられた」（榊 2000a、ｐ５）と評価した状況が続いた。

北米プロセス考古学の紹介以後にリダクション論の観点が導入されると、下総台地の「東内野型尖頭器」が大きくとりあげられ（註１）、石材窮乏状況に環境適応した戦略として理解された（宇田川 1995、佐藤 1995 など）。しかし本来、湧別技法・男女倉技法・大平山元技法は良質石材を豊富に獲得できる立地にある。仮に石材窮乏下での適応戦略を、両面調整石器の縦割りリダクションの一側面として認めたとしても、それだけが全てではないはずである。このような中で榊は大平山元技法を再検討し、長期間使用される「管理的な石器」の、刃部再生・刃部再形成の連続的・断続的なサイクルの一切断面が、技術形態学的には彫器や有樋尖頭器、石核などの器種として弁別できる多様な状態で現れていると論じた（榊 2000a）。これは石器現象を個別器種の「製作工程」としてのみ理解するべきではないとの主張であり、本研究の立場に一致する思考である。

男女倉技法には榊のような視点からの再検討はなされていないため詳細は不明だが、湧別技法については山田昌久らが、多様な「器種」を生み出すように見える構造を論じている（山田・白石 1990）。これらの議論から得られた最大公約数的な共通理解は、『両面調整石器を中心として複数の器種にみえる石器を作り出す構造」という点におさまり、これが系統や編年を超えた、縦割りリダクションの本質と考えてよいかもしれない。もちろん、このようなリダクションが採用された具体的な背景には、各地毎に固有の歴史的・環境的要因があり、それらに応じて先述の東内野型尖頭器も含め、異なる形で実体化していると思われるが、ここでは代表例を概観するにとどめる。

図 3.2.18 の 1～3 は、入念な調整で断面凸レンズ状に整えた両面調整石器から、複数の削片を剥離している例である。1は**大平山元Ⅱ遺跡**（前掲）で、石材は頁岩である。母岩分類は公表されていないが、榊によると「他地点で製作されたものが持ち込まれた」と考えられるという（榊 2000a）。接合している2本の削片の剥離後にも平坦調整による芯の両面調整石器のリダクションが進み、小形化している。またこの2本の直角な削片を剥離する以前、両面調整石器がいまだ大きさを保っていた時点で、後述する「ななめに削ぎ落とす」削片の剥離も行なわれた痕跡が認められるという。

2は**樽口遺跡 A－MS 文化層**（新潟県朝日村、立木ほか 1996、第Ⅱ期）の例で、石材は黒曜石の接合 57 である。いわゆる白滝型の細石刃核に7点の削片が接合している。片面に素材剥片の腹面広く残しながらも全体として入念な楕円形ないし尖頭器状に整えた両面調整石器から7枚の削片を剥離し、細石刃核としている。1～2発の加撃で半割するのではなく、薄手の削片を繰り返し剥離している点が特徴である。後に細石刃の剥離が両端から大きく進み、残核形状はほとんど円錐型に近い。3は**石川1遺跡**（前掲）の例である。石材は暗褐色の頁岩の母岩 No.26 で、図示した例の他に細石刃や2点の削器を含む 71 点の剥片類からなる。両面調整石器の本体に4点の削片、4点の剥片が接合している。これも2と同様細石刃核と思われるが、細石刃の剥離は開始されていない。4は**小瀬ヶ沢洞窟**（新潟県、小熊ほか 1993、第Ⅲ～Ⅳ期）の例である。石材は珪質凝灰岩で、不整形で長狭な、調整の荒い厚手の両面調整石器を縦に分割している。器体の上からだけでなく下からも削片を剥離している。石材が粗粒であること、両面調整石器のリダクションが荒いことは2や3の細石刃核と異なる特徴である。**図 3.2.19** も縦方向への分割であるが、下段は斜めに削ぎ落とすリダクションである。1は**大平山元Ⅱ遺跡**（前掲）の例で、石材は頁岩である。3 枚の削片を剥離して両面調整石器を半分割しているが、もともとの両面調整石器は平面形状が不定形であり、尖頭器や左右対称な楕円形などの整った形状ではないままに削片の剥離を始めている。2は**小瀬ヶ沢洞窟**（前掲）で、やはり珪質凝灰岩の厚手・不整形な両面調整石器から削片を剥離する点で、先述の**図 3.2.18** の3と共通している。

3・4は両面調整石器の器体を分割するのでなく、一端を斜めに削ぎ落とす有樋尖頭器の例である。いずれも**大平山元Ⅲ遺跡**（青森県蟹田町、三宅ほか 1981、第Ⅱ～Ⅲ期）で、石材は頁岩である。3では接合している「扇形削片」から判断すると、削片の剥離後に両面調整石器本体のリダクションが大幅に進んでいる事がわかる。また上からは器体を分割する削片も剥離されている。4は削片の角度が水平に近い例で、こうなると両面調整石器を分割するというよりは、むしろ器体の厚みを減じる調整としての縦長剥片の剥離（大沼 2002p103）に近いかもしれない。

この「ななめに削ぎ落とす」リダクションには、尖頭器に切っ先としての機能も与えるための刃部形成とする理解（森嶋 1978、榊前掲 2000 など）と、生じる「扇形削片」が背つぶし加工の不要な「ナイフ形石器」としての目的生産品であるとの理解（三宅 1981）が対立した経緯がある。湧別技法の削片の目的性に関する議論（鶴丸 1979 など）も、同型といえる。ともに純粋に技術形態のみではなく、機能論的・用途論的な解釈を混じえているところに問題がある（堤 1989）。目的物か副産物かといった二元論に陥ることなく、現象自体がもつパターンの構造性を把握する方向こそ実りある議論につながると考えるが、具体的な実践は機会をあらためたい。

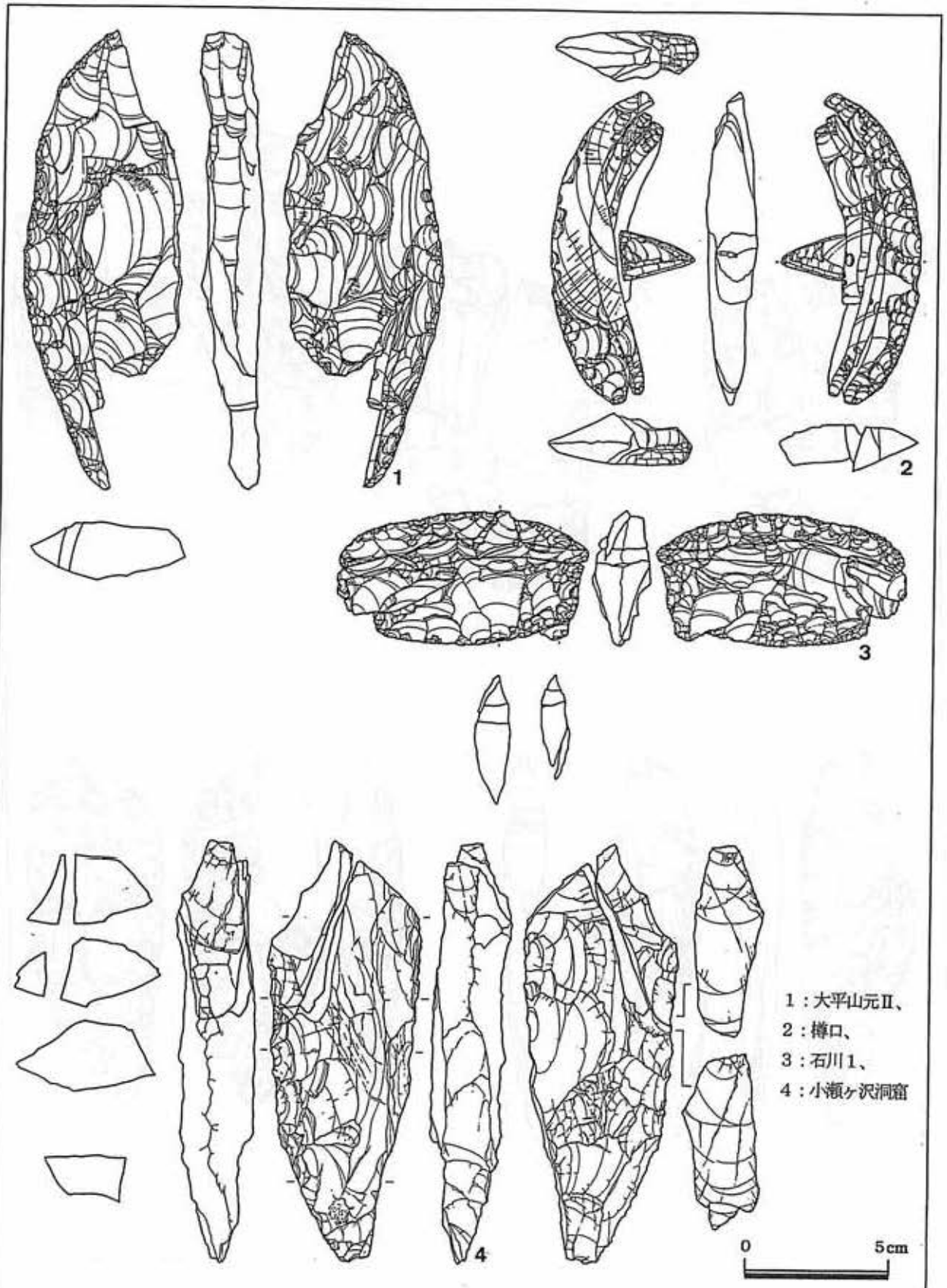


図 3.2.18　両面調整石器を縦割りに分割するリダクション①（S=1／2）

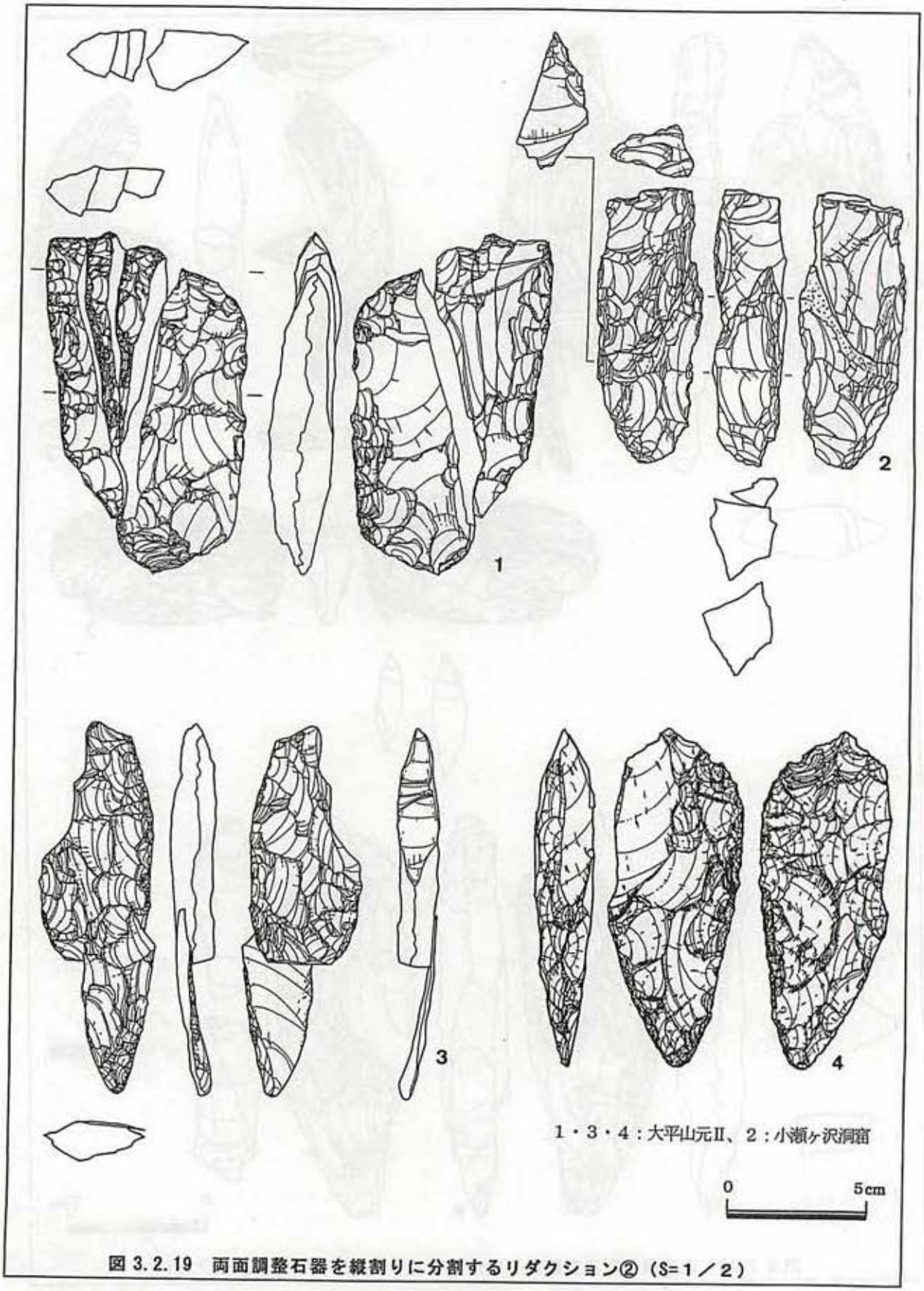


図 3.2.19　両面調整石器を縦割りに分割するリダクション②（S=1／2）

②両面調整石器を横割りにするリダクション：図 3.2.20 は横分割された両面調整石器からリダクションを展開している資料の代表例を示した。先に検討した縦方向への分割には一定にコントロールされた技術が必要であり、意図的な行為の結果と考えてよい。しかし横方向への割れは通常の器体調整の過程でも偶発的かつ頻繁に生じやすく、はたして意図的な行為の結果なのか、それとも事故なのか判別しにくい。だが製作者の意図という問題は「製作工程」を復元する上では大きいかもしれないが、リダクション論の立場ではどちらでもよく、むしろ横に割った（割れてしまった）石器を次にどのように扱ったのか、そのパターンを探ることに関心がある。

一般には分割時の割れ面を打面にして剥離を展開する場合が多い。割れ面を打面にして石刃を剥離するパターン、樋状剥離を入れるパターンがあるが、両者は漸移的で識別がむずかしい場合もある。樋状剥離が狭く少なく、側面（木口面）に限定される場合には彫器として、幅広く繰り返し剥離されている場合や器体の表裏面まで剥離が進行する場合には、石核として報告されているようである。また後述するように、分割面を除去するかのような調整を加えて楕円形または尖頭形を執拗に再現しようとする場合もある。

図 3.2.20 の１は**狸崎Ｂ遺跡**（秋田県秋田市、菅原ほか 1993、第Ⅱ期）の例である。石材は頁岩の個体 No.1 で、両面調整石器の分割片３点と剥片２点が接合しており、他に接合関係のない剥片が７点ある。両面調整石器の分割片はいずれも「石核」として報告されており、このうちの２点（図の 1734 と 36）では、側面から石刃を連続的に剥離している。石刃の剥離は 36 の一部を除き器体の表裏面には展開しておらず、もとの両面調整石器の幅だけが縮小してゆく形のリダクションとなっている。36 ではもとの両面調整石器の幅から、およそ半分の大きさにまでリダクションが進んでいる。２は**大平山元Ⅱ遺跡**（前掲）の例で、三宅徹也が「大平山元技法」を提唱した際に、大平山元技法Ｂ（樋状剥離を入れた両面調整尖頭器の分割片を素材に、石刃石核を製作する工程）の典型例とされた資料である。裏面にはかつての両面調整石器の平坦な剥離面が残るのに対し、正面と右側面には、折れ面からの縦長剥片の剥離痕を確認できる。１の狸崎Ｂの事例と異なり、石刃の剥離が面的に展開する点に特徴がある。

３は**荒砥北三木堂遺跡**（群馬県、岩崎編 1992、第Ⅲ～Ⅳ期）の例である。厚手で長狭な両面調整尖頭器が２分割され、図で上とした分割片は右下・左下の２ヵ所に、下の分割片は右上に、分割面を打面とした彫器的な樋状剥離を繰り返し入れている。上の分割片では、さらに尖頭部の先端からも樋状剥離を入れており、都合３ヵ所に樋状剥離があることになる。図示しないが、同様の例は**吉岡遺跡群Ｄ区**（神奈川県綾瀬市、白石・笠井 1999、第Ⅳ期）や、**小瀬ヶ沢洞窟**（前掲）の資料にも確認できる。第Ⅳ期の有茎尖頭器石器群に伴うことの多い、長狭な両面調整尖頭器（かつて植刃や本ノ木型尖頭器とされたものを含む）のリダクションと密接に関連する可能性が高い。４は**真人原遺跡Ａ地点**（新潟県小千谷市、小野ほか 2002、第Ⅰ期）の例で、石材は珪質頁岩である。母岩分類は公表されていないが、筆者らの試みでは接合関係や明確に同一母岩と断言できる剥片は確認できず、単品で持ち込まれた可能性が高い。素材剥片の腹面が残る両面調整石器（おそらく尖頭器もしくは尖頭器未成品）の折れ面から、樋状剥離を加えている。報告書では彫器に分類した。

器種の製作工程復元という枠組からは、１・２は石核への、３・４は彫器への、おそらく尖頭器からの転用として理解されるかもしれない。しかしリダクション論の観点からは、両面調整石器の多様な利用法を示す事例として理解できる。

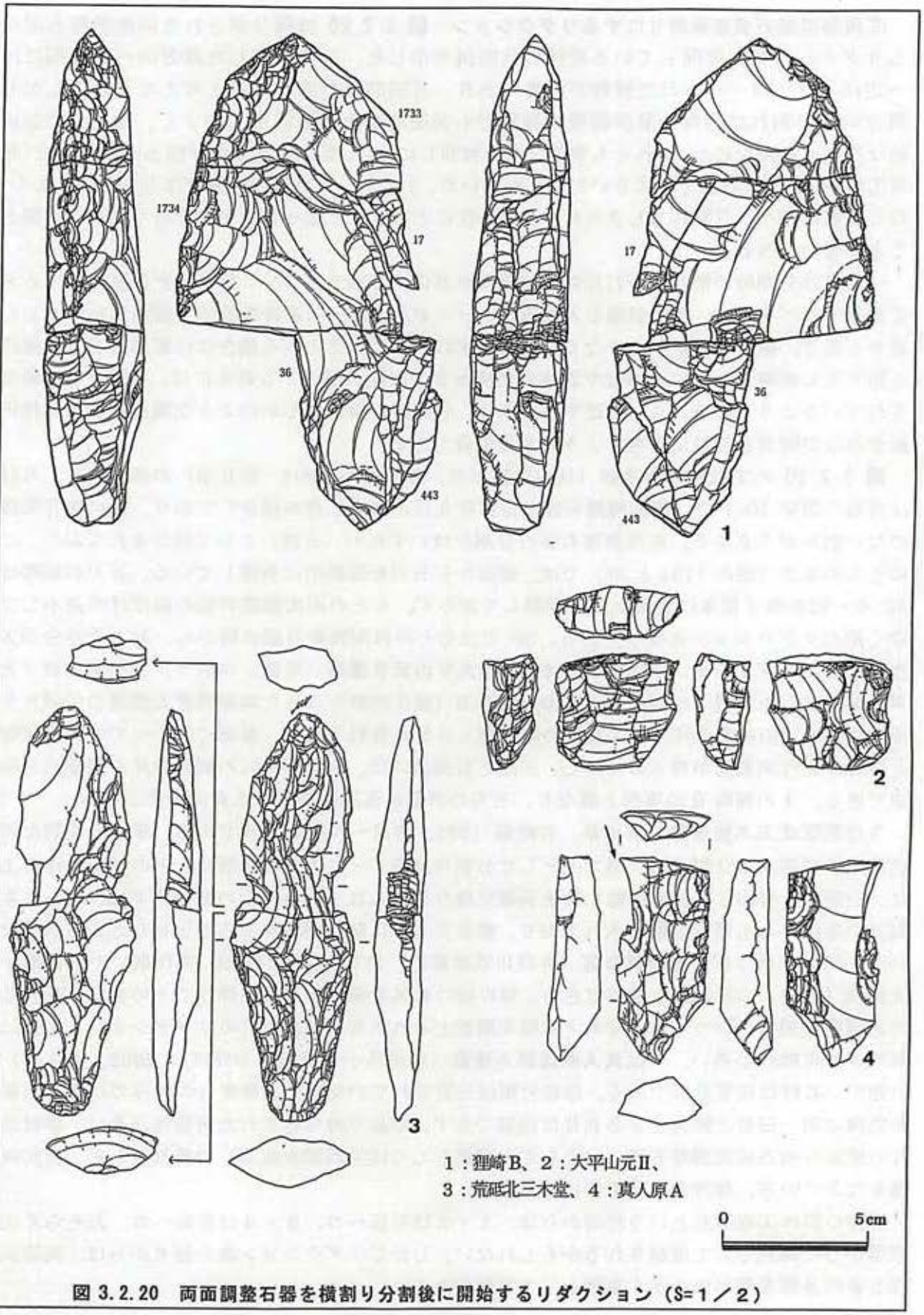


図 3.2.20　両面調整石器を横割り分割後に開始するリダクション（S=1／2）

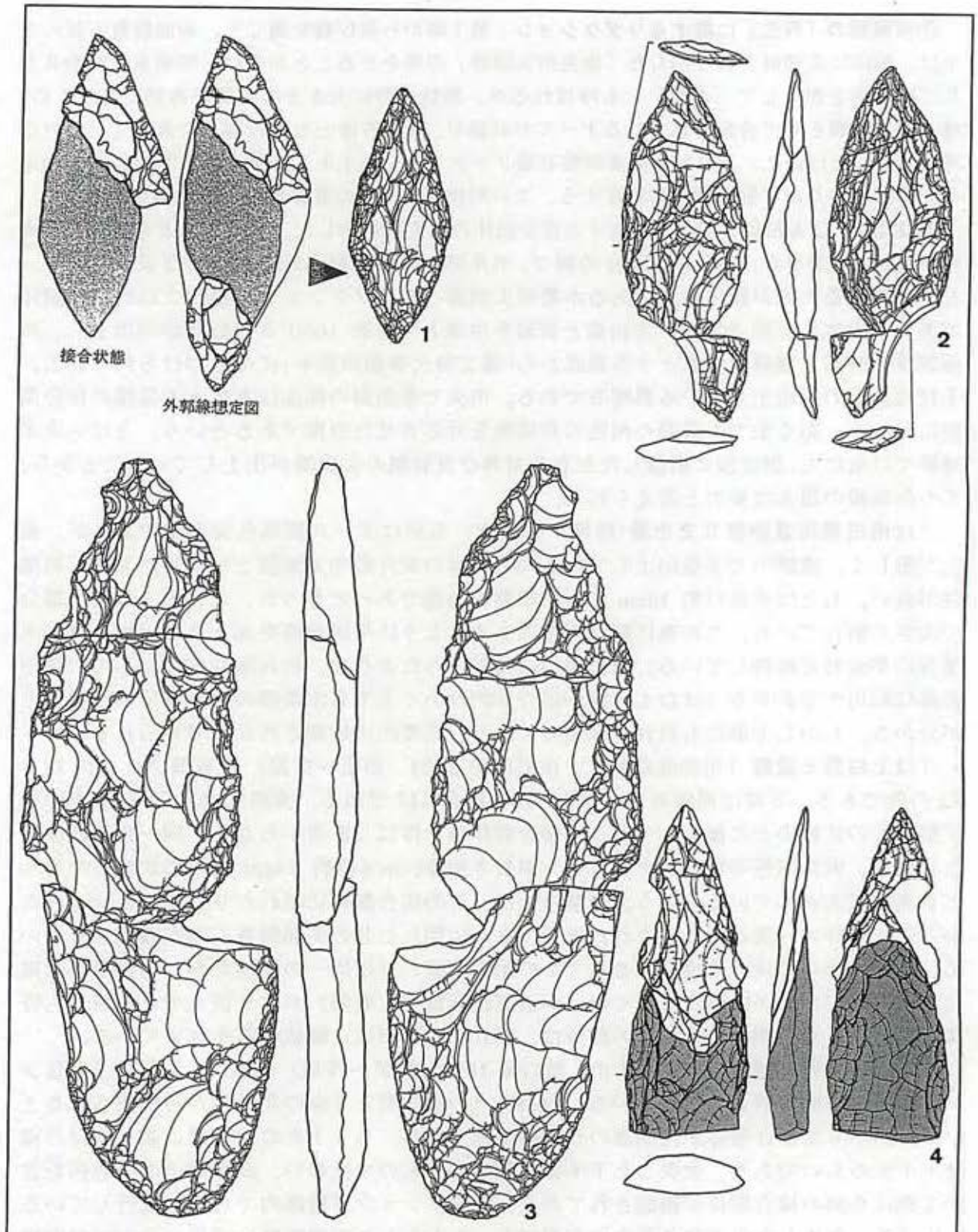
③尖頭器の「再生」に関するリダクション：第Ⅰ期から第Ⅳ期を通じて、両面調整石器の大半は、端部に尖頭部を作り出した「槍先形尖頭器」の形をとることが多い。狩猟具・刺突具としての用途を想定して「石槍」とも呼ばれるが、形状や特に大きさの変異が多様であるため、槍先形尖頭器として分類されているすべての石器が、同じ石槍としての機能を有していたとは考え難い。とはいえ、とりわけ両面調整石器リダクションの主として後半で、執拗にくりかえし尖頭部を作り出す接合個体も存在する。この形状によほどの意味があったに違いない。

図 3.2.21 は尖頭器の形状を修復する接合個体の代表例を示した。1は**寺田上Ａ遺跡**（新潟県津南町、佐藤ほか 1998、第Ⅲ期）の例で、半月形に近い左右非対称の長狭な尖頭器から、左右対称で最大幅が器体中央にある木葉形尖頭器へのリダクションが推定された接合個体である（山本・安部 2000）。安山岩と頁岩を主体とする約 1600 点の石器群が出土し、両面調整尖頭器と掻器を特徴とする組成から「縄文時代草創期前半」に位置づけられている。石材は少量のみ出土している黒曜石である。中央で基部側の部品は本体との直接の接合関係にはなく、あくまでも母岩の褐色の筋模様を対応させた想定であるという。とはいえ本遺跡では他にも、想定図に類似した左右非対称な頁岩製の尖頭器が出土していることから、この外郭線の復元は妥当と考えられる。

2は**用田南原遺跡第Ⅱ文化層**（前掲）の例で、石材はガラス質黒色安山岩であるが、風化が激しく、遺跡内で多数出土している同じ石材の剥片類や尖頭器とは母岩が異なる可能性が高い。もとは全長が約 12cm の両面調整尖頭器であったものが、４分の１ほどの部分で大きく割れている。この後に割れ面を除去するように平坦調整を加えることで、再び木葉形に平面形を維持している。先に**図 3.2.20** でみたような、割れ面を打面にして石核や彫器に転用するあり方ではなく、製作者の目的はあくまでも木葉形の尖頭器であったことが分かる。しかし上部にも折れが発生しており、結果的に放棄されたと考えられる。

3は**上白滝２遺跡**（北海道白滝村、長沼ほか 2001、第Ⅲ～Ⅳ期）の石器ブロック 11－12 の例である。石材は黒曜石で、母岩 176、接合 417 である。実際にはさらに 30 点の剥片類がこの状態の上に接合しており、接合個体の全体は 33 点からなる。同一母岩は他にないため、両面調整石器のリダクションが長さ約 26cm×幅約 14cm 程度の状態まで進んだ状態で搬入されているという。遺跡内では、この接合個体に現れたリダクションを経たあとに、剥片の一部が持ち出された上で、３つに割れた芯の両面調整石器が残地されている。割れ面から形状の修復を図る点で２の用田南原とほぼ同一の性格だが、尖頭形が明確に志向されていたかは断定しにくい。両面調整石器（尖頭器）がより巨大である点にも特徴がある。また分割片のうち下の部分は、割れ面から側縁に樋状剥離を加えている。

4は**前田耕地遺跡**（東京都秋川市、橋口編 1979、第Ⅲ～Ⅳ期）の例で、石材は「珪質シルト」で個体別資料５とされている。約 80 点の剥片類と２点の尖頭器から構成されるという。図示した接合個体が尖頭器のうちの１点である。もう１点の尖頭器は剥片素材の細身・小形のものであり、欠失した下半部に相当するものではない。剥片同士の接合例を含めて他に６組の接合関係が確認されており、リダクションが遺跡内で急速に進行しているといえる。欠失した下半部の長さは不明だが、もともとの両面調整尖頭器の最大幅が中央にあると仮定すると、全長が約 20cm に近い大形品と考えられる。現存する部分は繰り返し尖頭状にリダクションしていることが明らかな接合個体である。



1：寺田上A、2：南原-第Ⅱ文化層、
3：上白滝2-Sb11・12、4：前田耕地

図 3.2.21　尖頭器の「再生」に関するリダクション（S=1／2）

第３節　石核としての両面調整石器利用を示す接合例

（１）両面調整石器本体と剥片器種の接合例

本節の目的は「両面調整石器が石核を兼ねる」という命題を、接合資料によって直接的に検討することにある。剥片に事後的な二次加工を加えているもの全てを、以下では「剥片器種」と呼んで二次加工の加えられていない剥片から区別する。この分類に問題があることは改めて後述するが、二次加工ある剥片は単なる残滓ではなく、何らかの道具としての使用意図を認めることができる、との前提にたつ。尖頭器、削器や掻器などの技術形態学的に安定した分類が可能なものだけではなく、部分的な二次加工にとどまるものや不定形なものも含める。後者は前者の未製品である可能性や「便宜的な道具」である可能性を評価してのことである。これらの前提の上で、接合資料を検討していく。

図 3.3.1 は真人原遺跡Ｃ地点（前掲）の例である。石材は接合資料１として報告された珪質頁岩である（報告書では黒色頁岩と記載されている）。この遺跡で主体を占める珪質頁岩は、表面が白色～灰褐色に風化し剥離面の全体や一部が強い光沢を帯びるものが多いが、接合資料１は風化した表面も折れ面と変わらない黒味の強い青暗色を呈し、光沢も顕著ではない。また 2000 年に筆者らが石材分布調査を実施した際に、この接合資料１に類似した、風化面も新しい割れ面も同じ暗色を呈する珪質頁岩の円礫を、真人原遺跡から数百ｍ下流の信濃川の河床で採取した（未報告）。このため新潟県北部ないし山形県南部に想定されている灰白色で光沢をもつ珪質頁岩のグループ（秦 2002）とは供給起源が異なる、在地の石材であると考えられる。報告書では母岩別分類を公表していないが、特徴的な石材であるために、166 点が同一母岩として識別されている（鈴木 1997）。

上段のⅠは全構成部品の接合状態で、礫皮面を広く残す大形のものも含む 82 点の剥片と２点の周辺調整尖頭器が、１点の両面調整石器の本体に接合している。あるべき剥片の不在は認められるものの、径約 13cm、厚さ約５cm の扁平な円礫の原石形状が把握できる。遺跡にはおおむね自然石の状態で搬入され、比較的短い時間内にこれを一気に割りつくし、一部の剥片は搬出されつつも（註２）、芯の両面調整石器を含む大半の生産物をその場に残したために、このような接合復元が可能になっている。

中段左の接合状態のⅡはリダクションの進行上、礫皮面を広く残す剥片を取り去った段階である。これら礫皮面を残す剥片のうち、小形で縦長の剥片が、打面を含む一端を折り取られる形で周辺調整尖頭器に加工されている（中段右）。またⅡの正面で、図中で上方向からの剥離で生じた、やはり小形の縦長剥片を利用して、周辺調整の尖頭器が製作されている（中段）。これらの周辺調整尖頭器に用いられている素材剥片は、必ずしも大形のものでも厚手のものでもない点は興味深い。やがて芯の両面調整石器に至る。

この接合個体では、１つの原石が１つの両面調整石器（下段）に、一遺跡の中で一気にリダクションしている。これは原石がすでに小さいためであろう。リダクションの当初より最終段階にいたるまで一貫して求芯的な剥離によっている。この過程の中で、Ⅱの裏面に接合している大形の縦長剥片も生じている。この縦長剥片には現時点では二次加工が加えられていないが、真人原遺跡Ｃ地点と接合関係のある真人原遺跡Ａ地点では、このような大形の縦長剥片に二次加工を加えて、削器または尖頭器の未製品に加工している例が多数存在する（小野編 2002）。このような縦長剥片が両面調整石器に直接接合することは、必ずしも石刃石核から剥離されたものではない可能性を示す上で興味ぶかい。

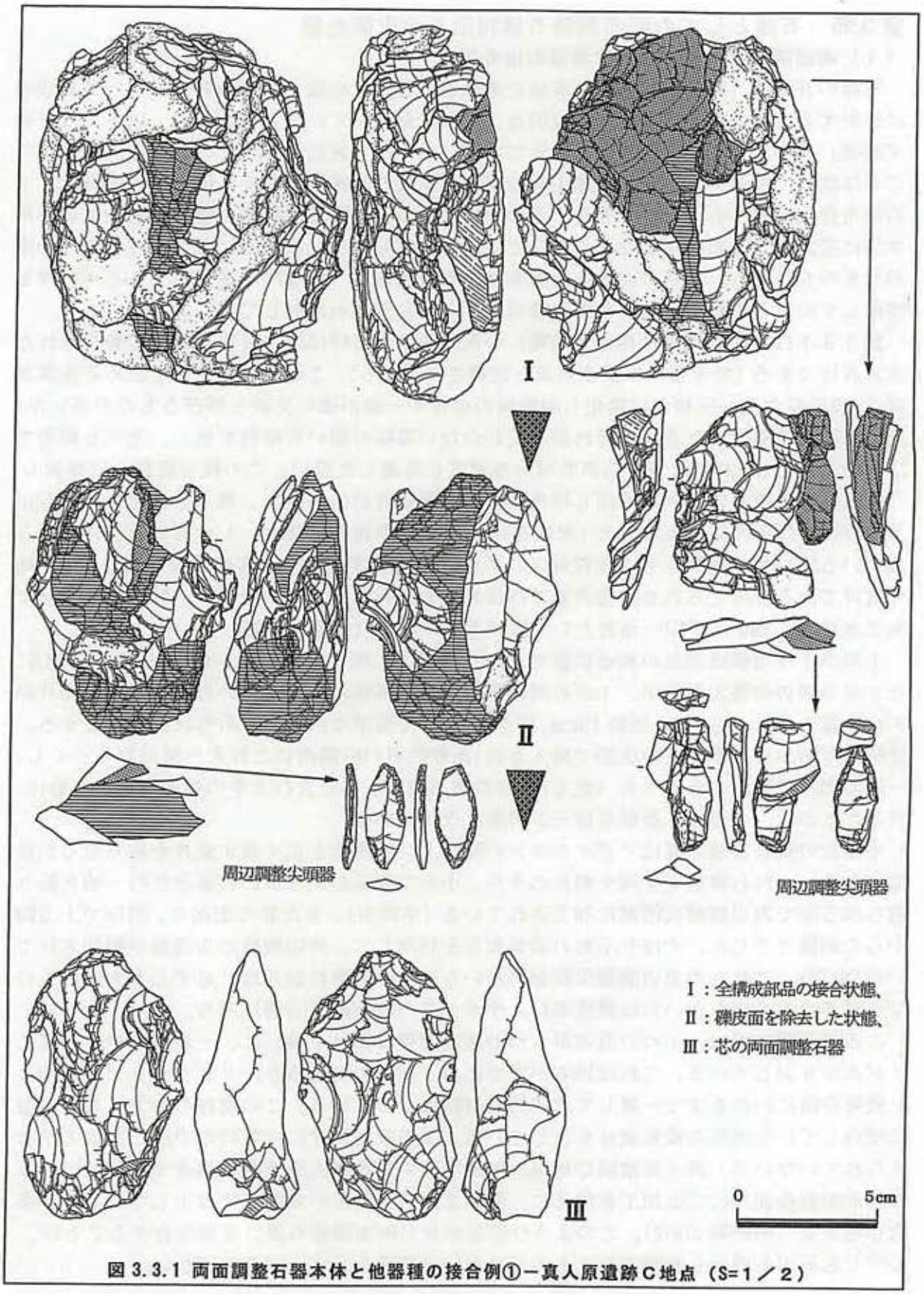


図 3.3.1 両面調整石器本体と他器種の接合例①－真人原遺跡C地点（S=1／2）

図 3.3.2 は**用田鳥居前遺跡第Ⅴ文化層**（栗原ほか 2002）の例である。相模野台地のＬ２層下部を中心に 115 点の石器からなる小規模な石器群である。石材組成は流紋岩を２点含む以外は全てガラス質黒色安山岩である。**図 3.3.2** はガラス質黒色安山岩１の接合資料で、石刃核から有樋尖頭器へのリダクション過程が明らかにされた（註３）。**図 3.3.2** の上段のⅠは全構成部品の接合状態で、樋状剥離のある両面調整尖頭器を中心に 18 点の剥片などが接合し、全体で打面再生を経た石刃核となっている。他に直接の接合関係にない同一母岩の剥片は 39 点が識別されているが、小形・薄手のものが大半で礫皮面を残す例も少ない。このことから遺跡内で進行したリダクションはわずかであり、他の占拠地で礫皮を除去後に、石刃核の状態で搬入されたと判断できる。したがって素材が自然石なのか剥片なのかは不明である。

１は側面の一部にかつての作業面の頭部が残る打面再生剥片で、全５点の剥片が接合している。２は１を生じた打面再生の後に剥離した厚手の石刃を素材に、片側の一側縁に連続的な二次加工を加えている。この石刃核はⅠの正面下部に見られる 180 度の打面転移、１の輪切りの打面再生、２を剥離するに先立つ入念な打面調整など、Ｂ１層下部（砂川期）の石刃核と共通する特徴をもつ。中段のⅡでは２の素材を剥離したのと同じ作業面・同じ方向に、連続的な剥離が加えられている。ここで生じた剥片は、断面図に見るようにいずれも薄手で２のような厚みはないため、この連続剥離は素材としての石刃を獲得する意図は弱いようである。

薄手となった核は尖頭状に整えられる。Ⅰの周辺に突出するようにして接合する剥片の存在は、平面形を尖頭状に整える作業が本遺跡内で行われたことを示すが、この作業と２の石刃の剥離との前後関係は確定できない。また本来あるはずの接合剥片の不在は、平面形を整える際に生じた剥片が本遺跡の外に持ち出された可能性を示すが、この現象は、生じた剥片には単なる残滓だけではなく、何らかの使用意図があったものも含まれていた可能性を示す。やがて削片（8）を剥離して、下段Ⅲの不整形な有樋尖頭器にいたる。ただし**図 3.3.2** のⅠとⅡではリダクション過程を理解しやすくするため、有樋尖頭器の先端部を下・樋状剥離面を裏面に意図的に置き直している（Ⅲのみ表裏・天地を返している）。

この事例は、当初より有樋尖頭器の「製作」を第一の目的に、あくまでもその一部に石刃の生産を組み込んだのか、それとも当初は通常の砂川的な石刃核であったものを、石核リダクションの進行に応じて尖頭器ー両面調整石器リダクションに「転用」したのかは、明らかではない。輪切りの打面再生が行われていることは、打面と作業面との関係を一時的に固定した、砂川的な石刃核を念頭においた剥離作業の時点があったことを示すが、一方では求心的な剥離で全体を扁平に整える意図も読み取れる。むしろこれが石刃核なのかそれとも尖頭器なのかの二択を迫る問い方が、そもそも不適切といえる。一つの石器が、そのリダクション過程の中で様々な役割を求められ、適宜実現されていたのであろう。特定の両面調整石器を尖頭器などいわゆる「器種」（未製品をふくむ）と、石核とに分けることの本来的な難しさ、敢えて言えば両面調整石器にこのような分節を与えることが不適切な場合もあることを、接合状態が示すリダクション過程として示す資料として重要である。

図 3.3.3～3.3.4 には、両面調整石器の本体を含む接合資料に、二次加工のある器種が接合している各地の例を示した。**図 3.3.3** の１・２は**石川１遺跡**（前掲）の例である。石材は頁岩の母岩 No.1 で、２点の両面調整石器の本体と 73 点の剥片類から構成されている。

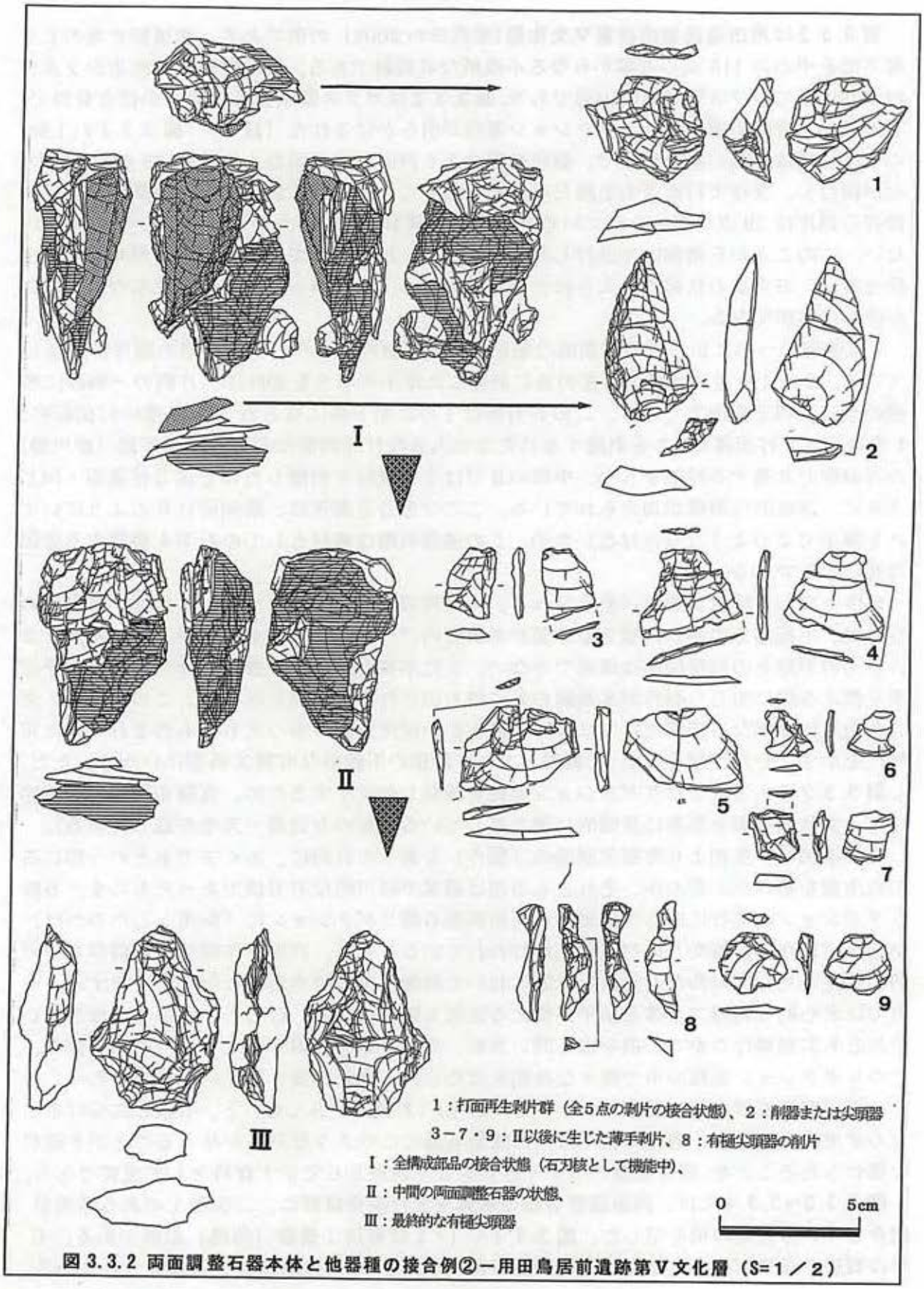


図 3.3.2 両面調整石器本体と他器種の接合例②－用田鳥居前遺跡第Ⅴ文化層（S=1／2）

図示した例は、剥片を素材とした薄手で不整形な半月形の両面調整石器に、7点の剥片と1点の掻器（2）が接合している。報告者は「本来は横長の大形剥片を素材にした削器で、刃部の再生を繰り返し、小型化したものと考えられる」として「4段階の磨滅した刃部、いいかえれば3回の刃部再生」を認めている（長沼 1988、p 190）。掻器に加工された剥片が生じたのは、この刃部再リダクションの過程である。

3は**荒屋遺跡**（新潟県川口町、芹沢ほか 2003、第Ⅱ期）の例である。石材は珪質頁岩の母岩1、接合1である。細石刃核の側面に荒屋型彫器と1点の剥片が接合している著名な接合資料である。実測図で判断する限り、接合面のネガ面は両面調整石器の通常の調整剥離とは考え難いほど細長く、生じた素材剥片は石刃状の縦長剥片であった可能性が高い。

4～6は**上似平遺跡**（北海道帯広市、山原 2000、第Ⅱ期）の例で、石材は黒曜石である。図示した接合個体は、彫器1点、石核1点、剥片 72 点から構成されており、この他に同一個体の剥片が 18 点、彫器削片が4点確認されているという。はじめに比較的大形（長さ約 15cm、打面幅5cm 以上、高さ 6cm 以上が想定されている）で、細石刃の剥離も進行している状態の楔形細石刃核が遺跡に持ち込まれたようである。しかしこの細石刃核に打面から側面への器体調整剥離を加えた際に、細石刃核は二つに割れてしまった。これらのそれぞれを再利用してゆく状況を表わす接合個体である。

山原によると、2分割された細石刃核のうち、片方は稜形成や下縁調整を加えて石核として再生し、石刃の連続的な剥離が円周上に展開することで、最終的に円錐形の残核形状となり、遺跡に残置されている（**図 3.3.3** の 5）。これに対しもう一方の分割片は、主として旧打面からの平坦調整で一回り小さな楔形の両面調整体に整えられ、第2の細石刃核としての再生が試みられたらしい。この過程で生じた調整剥片を、彫器（**図 3.3.3** の 6）の素材として利用している。しかし調整剥片同士は彫器も含めて接合するのものの、ここで生じたはずの第2の細石刃核（芯の楔形両面調整石器）は、接合関係を確認できないばかりか遺跡出土の同一個体資料の中にも含まれていないことから、他遺跡へ搬出されていった可能性が高いという。

本資料は、厳密には両面調整石器の本体に二次加工ある器種が接合した例とはいえず、むしろ調整剥片同士の接合の中に器種が含まれる形に近いが、当初の大形の細石刃核を芯の両面調整石器と見なすならば、その一部は5の円錐型石核として著しく縮小しながらも接合関係内に残っているため、両面調整石器本体と彫器の接合事例とみなしてよいと判断した。

図 3.3.4 は**多摩ニュータウン No.27 遺跡**（前掲）**第2地点第Ⅰ文化層第 16 遺物集中**の例である。石材は暗黒灰色の頁岩で、両面調整石器（尖頭器未成品）に5点の剥片が接合しており、うち2点には二次加工が加えられている。他に直接の接合関係にはないが同一母岩の可能性がある剥片類は 187 点あり、その中にまとまった接合資料があるが、図示した例と直接の接合関係は確認されていない。芯の両面調整石器には礫皮面が広くのこり、主要剥離面の一部も残ることから、大形の剥片を素材としてリダクションを開始したことが理解できる。報告書では接合している二次加工剥片は、それぞれ掻器および削器と分類されているが、実測図で判断する限り二次加工部位や単位が一定していないことから定型的なものとは言えず、便宜的な性格が強いか、あるいは製作を開始したばかりで何らかの理由で停止した状態にあるものと思われる。

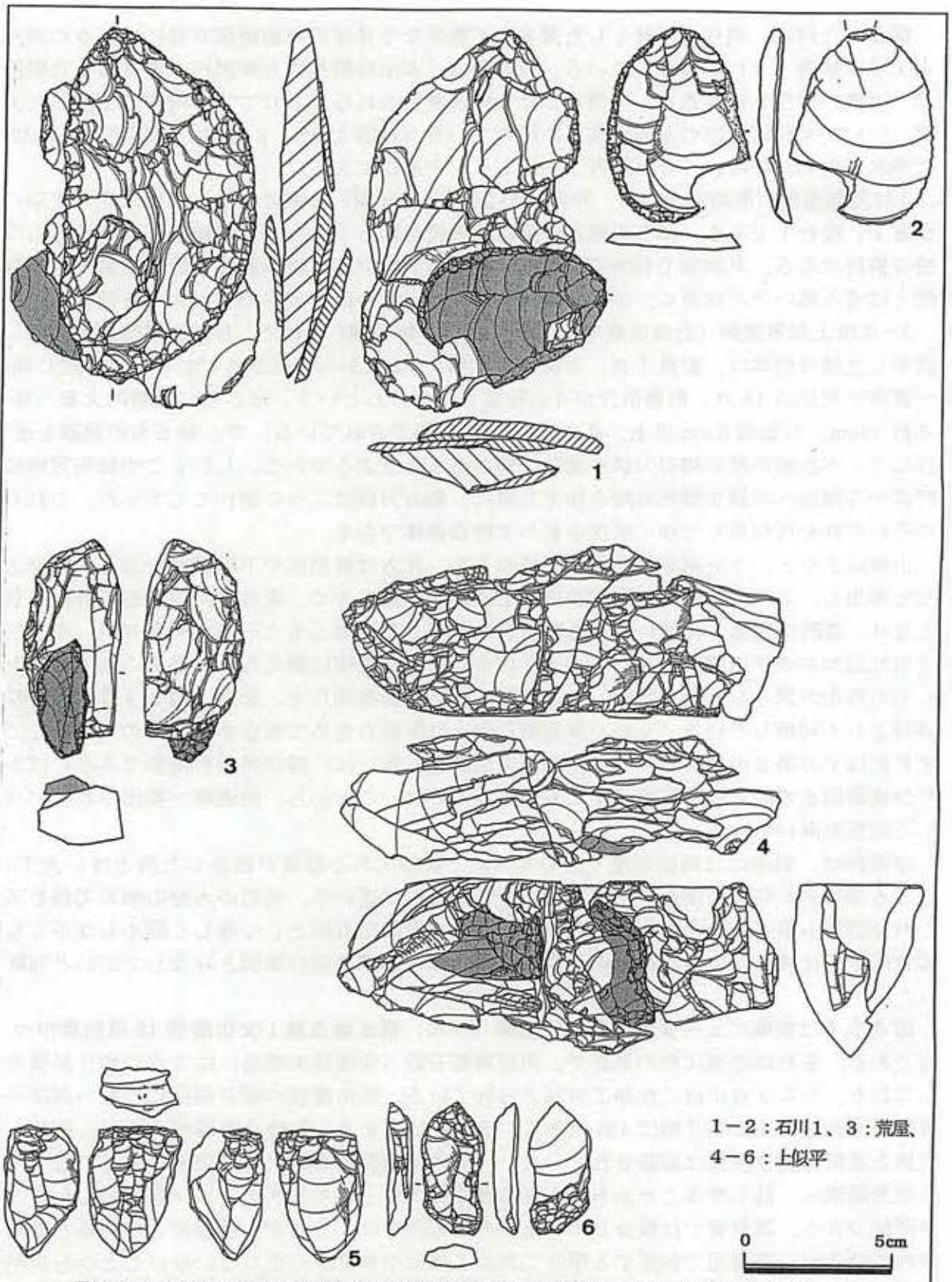


図 3.3.3 両面調整石器本体と他器種の接合例③－各地の例：その１（S=１／２）

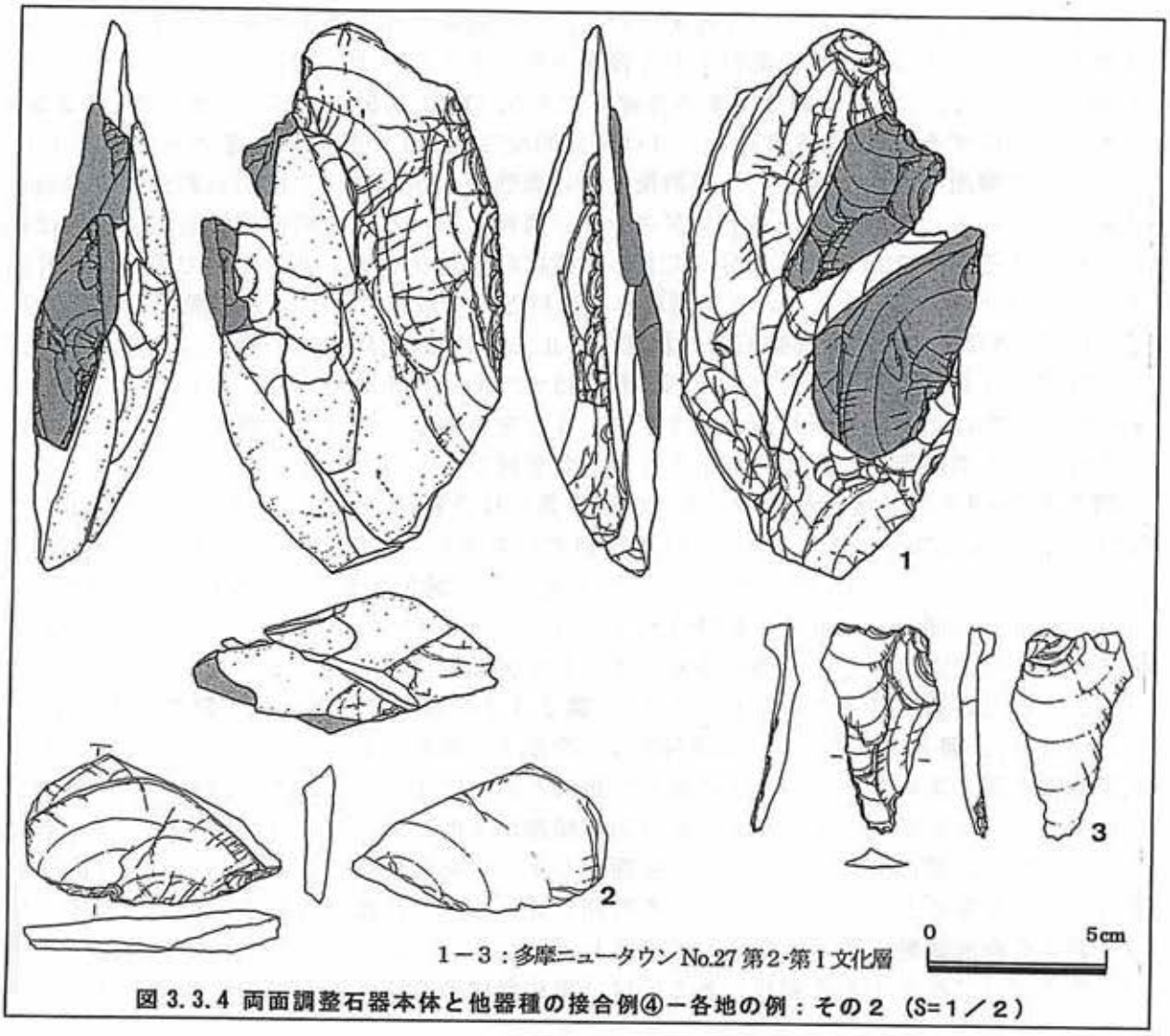


図 3.3.4 両面調整石器本体と他器種の接合例④－各地の例：その２（S=1／2）

ここに挙げた例のほかにも、土浦市西原遺跡で両面調整尖頭器の剥離面の一部に、小形の周辺調整尖頭器が接合している例を実見の上で確認しているが、接合状況図は未報告である。

（２）調整剥片と二次加工ある器種の接合例

図 3.3.5～13 には、両面調整石器の本体との直接の接合関係は確認できないが、両面調整石器のリダクション時に生じる調整剥片同士の接合の中に、二次加工のある器種が含まれている例をしめす。石核リダクションから生じた剥片の類似した接合状態との区別が困難な場合もあるが、おおむね両面調整石器リダクションの痕跡を示すものを選択した。母岩別分類を参照すると、本体の両面調整石器は遺跡外に持ち出された可能性が高い。

図 3.3.5～8 は**下茂内遺跡第Ⅰ文化層**（前掲）の例である。石材は黒色緻密な安山岩の個体別資料 No.9 の接合 No.9 である。全 549 点からなる同一母岩（個体）のうち 186 点の剥片や石核が接合し、総重量 29,054.4g にも達する巨大な接合個体である。ここで図を提示するのは分割した一部の状態である。**図 3.3.5** は報告書で接合 No.9－C とされた一群の接合個体で、長さ 43cm×幅 27cm×厚さ 14cm の巨大な「剥片」を素材として、その表

裏両面に荒々しいリダクションを進めている。この過程で生じた大形剥片の多くはそのまま残置されているが、一部は素材として選択され、主として尖頭器に向けたリダクションを開始している。これらが**図 3.3.6** の各資料である。(**図 3.3.5** の網がけと番号は、**図 3.3.6** の番号に対応する)。**図 3.3.6** の１・２は部分的な二次加工が認められるのみだが、３・６は主要剥離面を大きく残した片面調整・周辺調整の尖頭器に、４は両面調整の尖頭器に成形されている。５はこの一連のリダクション過程における芯の両面調整石器あるいは残核に相当する部分である。したがって５の生成にむけたリダクションの中で多くの剥片が生じ、その一部が 1～４・６の「尖頭器」の素材として選択された、との説明も可能である。5 は粗雑なままの両面調整石器の状態で停止しているが、周辺部の細かな調整からは、これ自体がさらに尖頭器に向けて成形されるはずであった可能性を読み取れる。また図で右の展開面では、上部の折れ面からリダクションを再会しており、分割後の上の部品だけでも独立した両面調整石器に持ち込もうとした意図がうかがわれる。

図 3.3.7～8 も同じ接合個体の一部で、報告書で接合資料 No.9-Ｂとされた一群である。長さ 38cm×幅 25cm×厚さ 10cm の巨大な剥片を素材とし、主としてその打面付近の表裏両面からリダクションを開始している。しかし先にみた**図 3.3.5** の接合 No.９－Ｃと異なり、リダクションが開始した直後で放置されている。このわずかなリダクションで生じた大形剥片のほとんどが素材として選択され、主として尖頭器に向けたリダクションを開始している。これらが**図 3.3.8** の各資料である。(**図 3.3.7** の網がけと番号は、**図 3.3.8** の番号に対応する)。**図 3.3.8** の１・4 は部分的な二次加工が開始されている。２は一回り大きな両面調整石器であったものが、上の部分で折れたあとに主として図の左側縁からの集中的なリダクションが進み、より小形・細身の尖頭器に変形している。３は厚手の剥片を素材として選択し、周辺からリダクションを開始したが中央で折れたてしまい、後には図の下半分の部品を中心としたリダクションを再開している。なお接合資料 No.9-Ｂの芯の本体は、およそ両面調整石器とは言えないほどわずかなリダクションしか受けてはおらず、しいて言えば「二次加工ある剥片」あるいは「剥片素材の石核」としての状態にとどまっている。

これらの資料は、巨大な剥片をリダクションしていく過程で生じた剥片を、適宜、他の器種の素材に充てていることを明確に示している。本章第２節の**図 3.2.11～13** で想定したあり方を、実際の接合資料として証明する資料である。この下茂内遺跡は第Ⅳ章で後述するように、石材産地に近接した当時の河原を占拠して形成された両面調整石器の集約的なリダクションの場であり、いわゆる「原産地付近の製作遺跡」である。両面調整を主体とする多くの各種尖頭器がここで仕上げられるだけでなく、中抜けの接合資料の存在から、盛んに次の占拠地へと持ち出されていったことが想定できる。

図 3.3.9～11 は原石の形状が復元されるが、芯の両面調整石器は持ち出されて存在しない中抜けの接合個体に、二次加工ある器種が含まれる事例である。両面調整石器本体との接合ではないが、両面調整石器リダクションの過程で生じる剥片を他器種の素材に利用していることを示すものである。**図 3.3.9～10** は**北支湧別４遺跡**（前掲）の石器ブロック２・３の例である。石材は黒曜石の母岩 30、接合 125 である。母岩 30 は 126 点から構成され、ここに示した接合 125 のほかに６組の接合個体が確認されているが、いずれも小量の剥片同士の接合である。接合 125 は 53 点の剥片類が接合している。水磨の進んだ円礫を素材

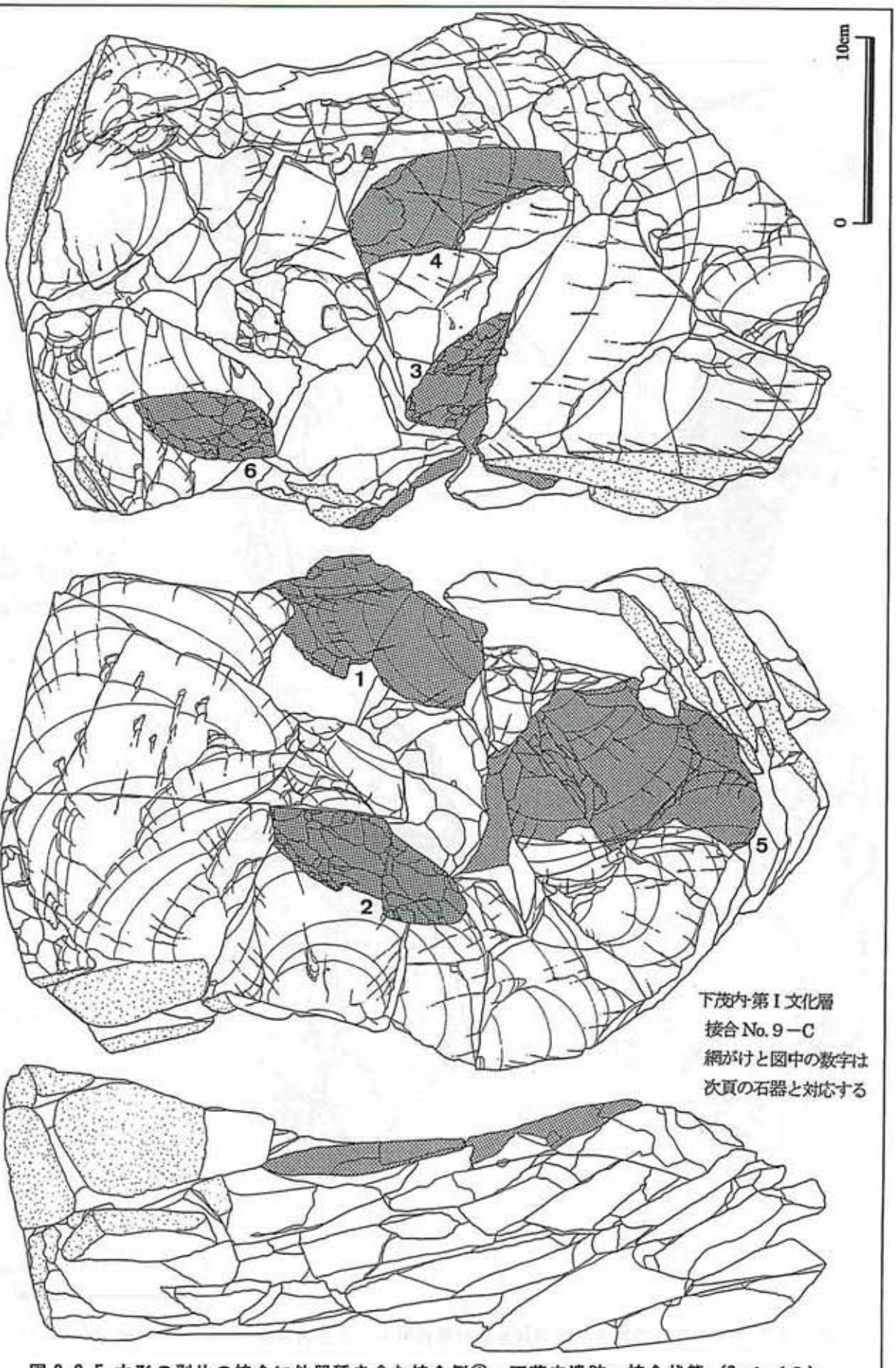


図 3.3.5 大形の剥片の接合に他器種を含む接合例①－下茂内遺跡：接合状態 (S=1／3)

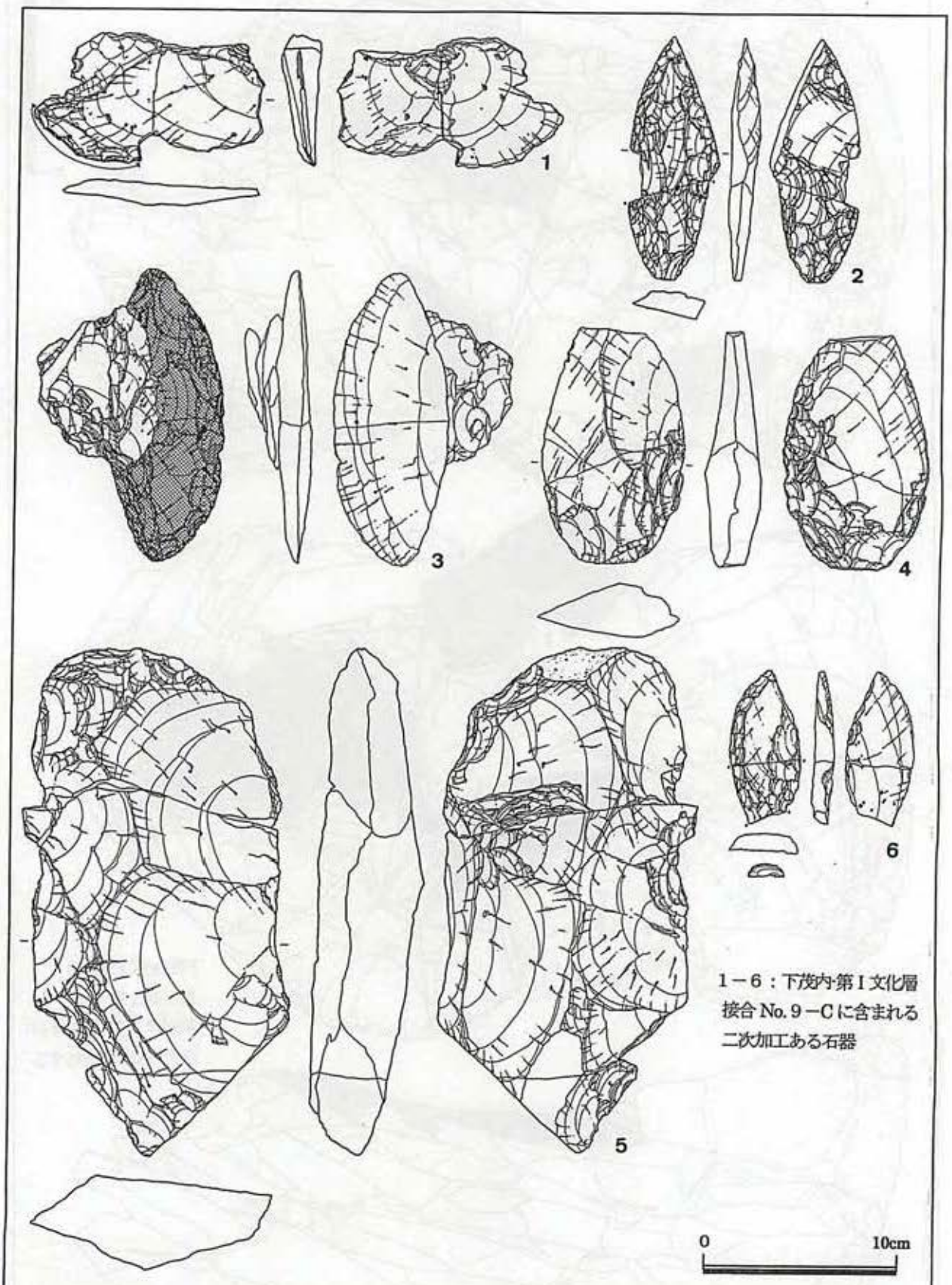


図 3.3.6 大形の剥片の接合に他器種を含む接合例①－下茂内遺跡：分解した器種（S=1／3）

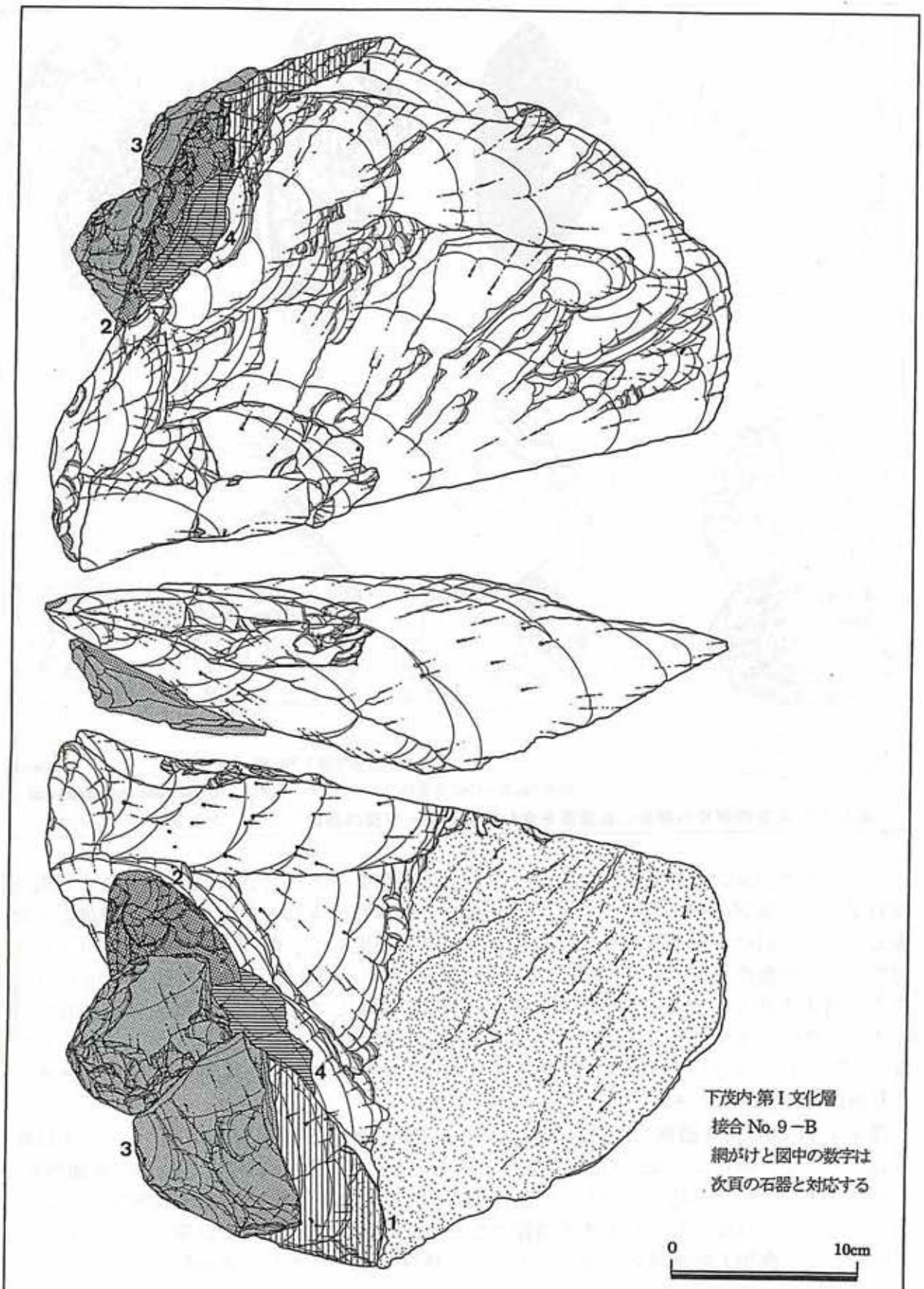


図 3.3.7 大形の剥片の接合に他器種を含む接合例②－下茂内遺跡：接合状態（S=1／3）

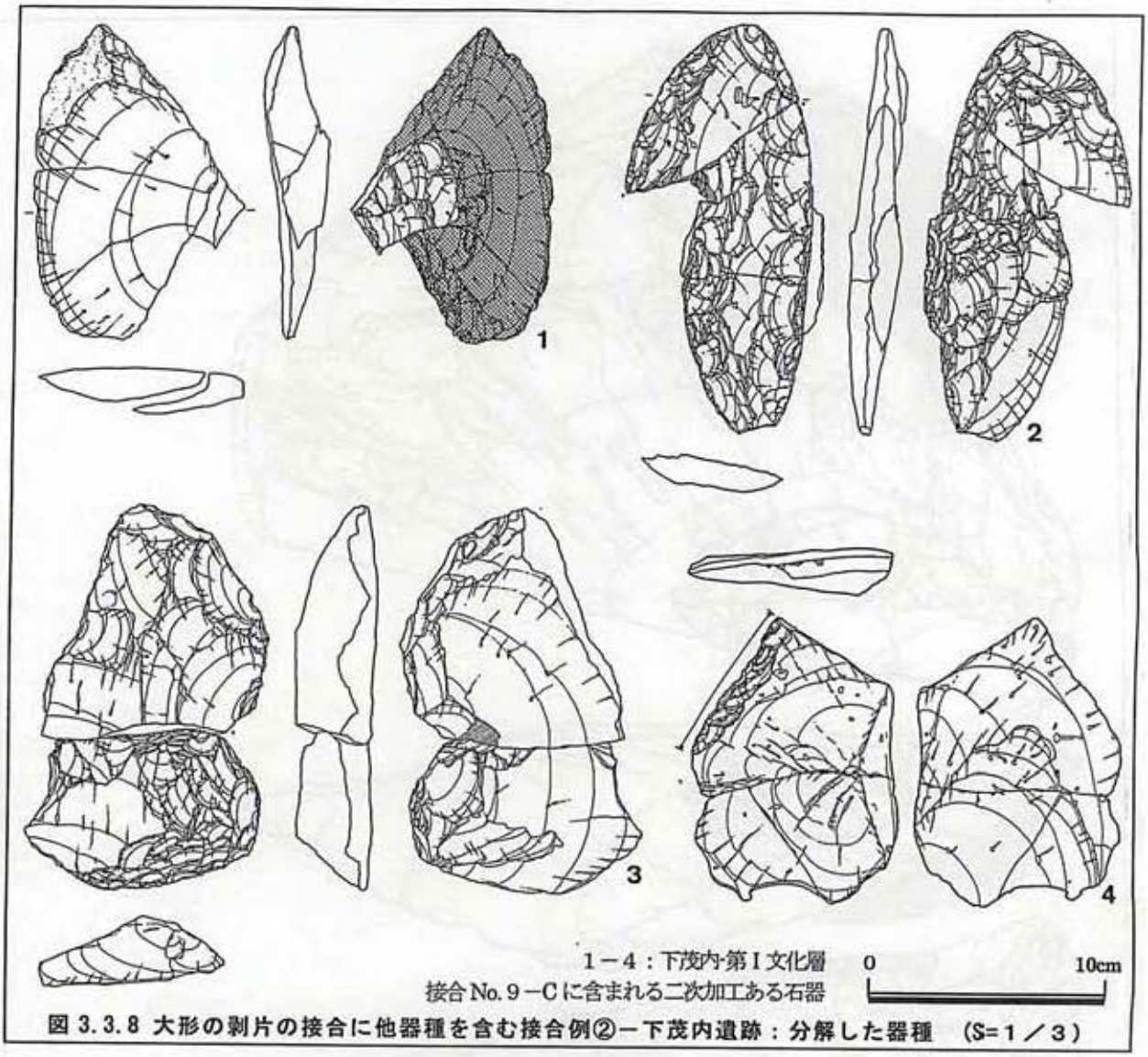


図 3.3.8 大形の剥片の接合に他器種を含む接合例②－下茂内遺跡：分解した器種 （S=1／3）

としてリダクションを開始し、礫皮面を除去する過程までが接合されている。芯の両面調整石器は同一母岩の中に含まれておらず、遺跡外に持ち出されたようである。礫皮面を除去した後に、図の右上で生じた大形の剥片を素材に選択して、**図 3.3.10** の掻器（1）と削器（2）を製作している。（**図 3.3.9** の右上の網がけと番号は、**図 3.3.10** の番号に対応する。**図 3.3.9** の左下の網がけは、中抜けの空間を透かして見えている反対側の接合部品の主要剥離面を示す。）1の掻器は二次加工が極めて微弱であり、刃部再生リダクションはほとんど進んでいないことから、未使用の可能性がある。また2の削器は、被熱のためか不規則に砕け割れている。

図 3.3.11 は**石川1遺跡**（前掲）の例である。石材はめのう質頁岩の母岩 16 で、1は礫皮面を広く残す剥片など 62 点の剥片類が、原石形状に近く接合している。芯の両面調整石器は含まれない「中抜け」であり、同一母岩内にも認められず、遺跡外に搬出されたと判断できる。2は礫皮面を除去する過程で生じた、背面の全面を礫皮が覆う厚手の剥片を素材として二次加工を加えた石器である。この時点では二次加工は背面側にしか及んでい

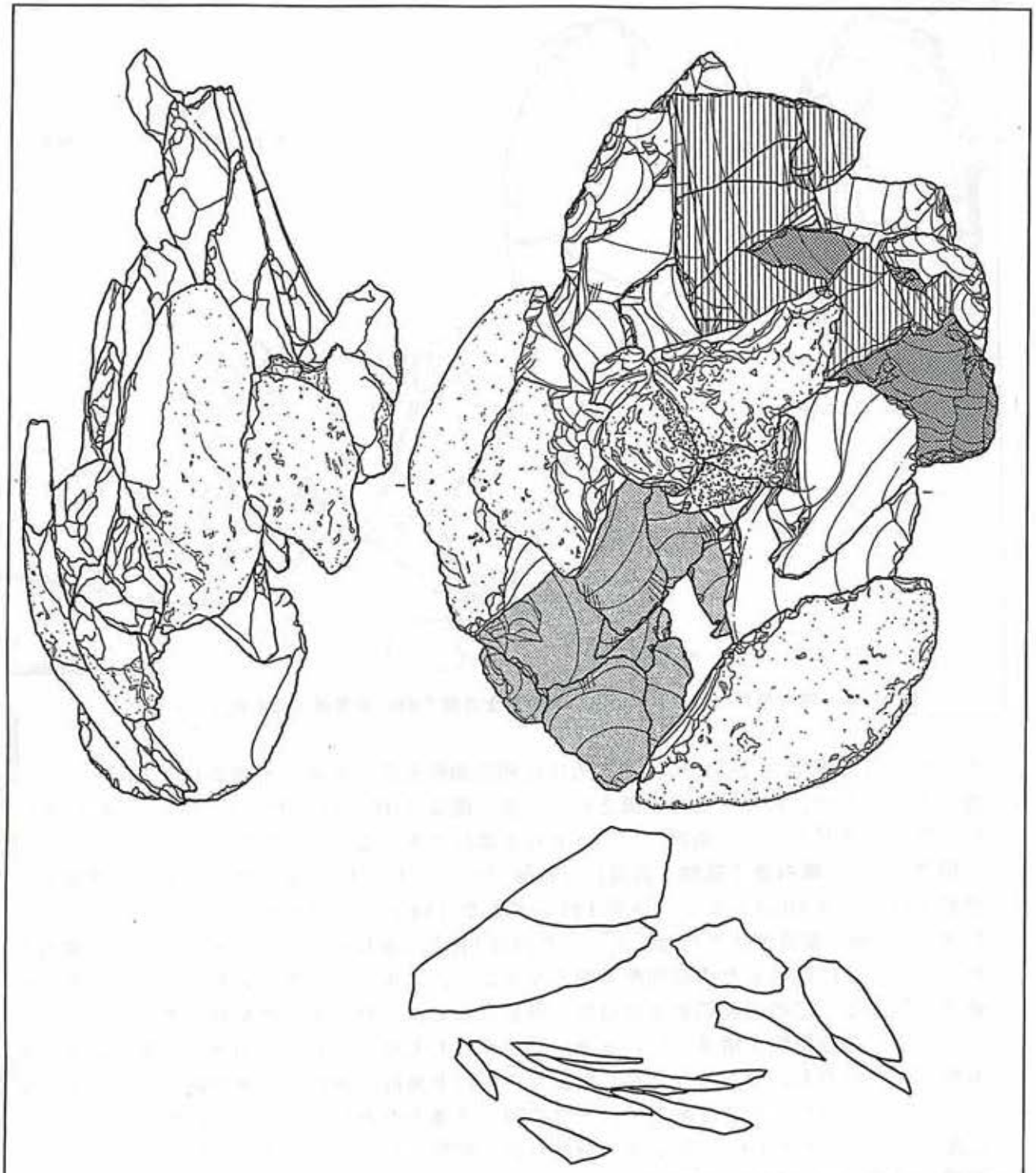


図 3.3.9 原石形状に戻るが芯のない剥片同士の接合例に他器種を含む例①：その１（S=１／２）

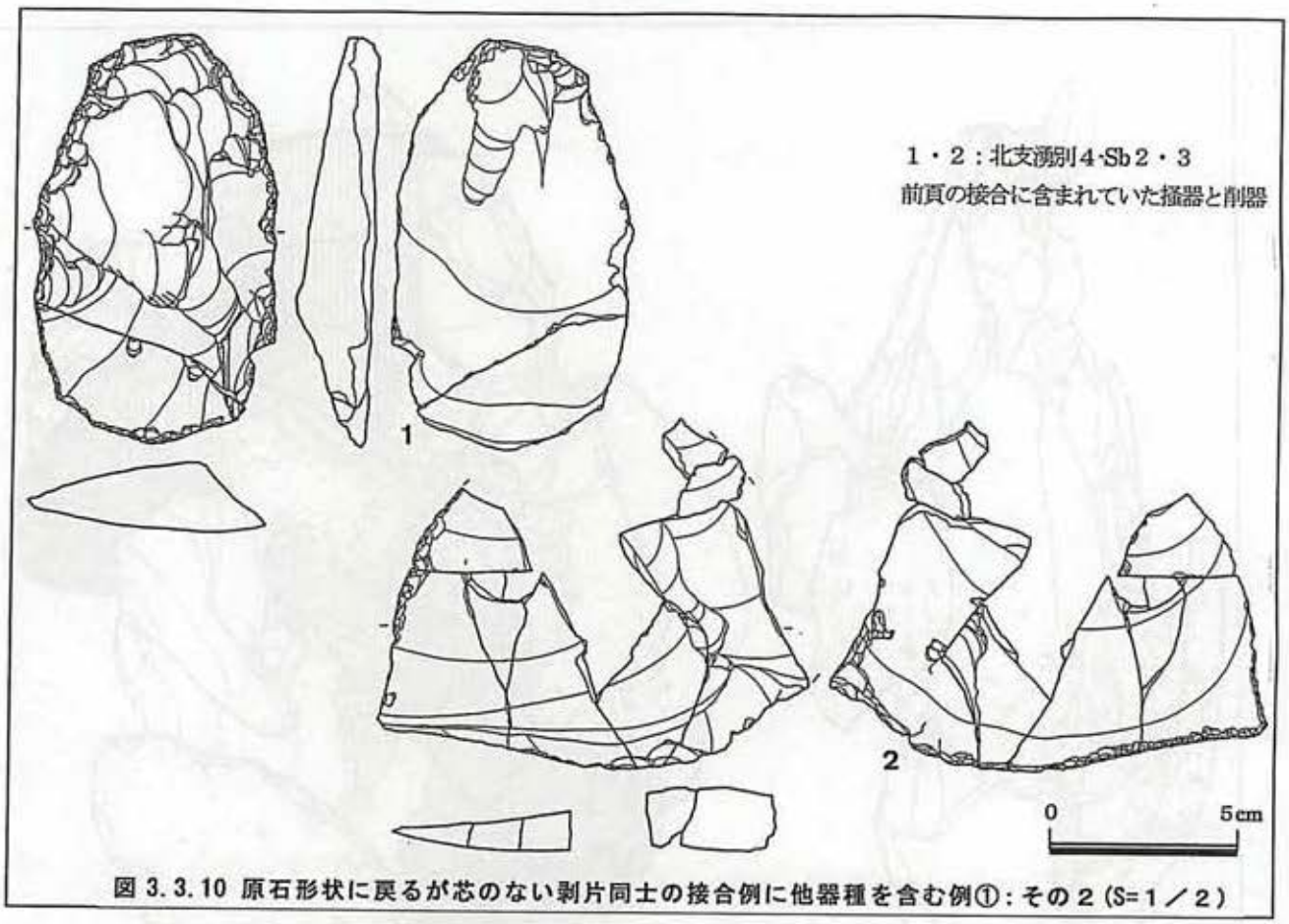


図 3.3.10 原石形状に戻るが芯のない剥片同士の接合例に他器種を含む例①：その２（S=１／２）

ないが平坦な調整であるため、将来的には両面調整石器への展開も視野に入れていた可能性があるものの、結果として残置されている。**図 3.2.10～11** で想定したような礫皮面の広く残る、リダクション初期で生じた剥片を素材にあてることが証明されている。

図 3.3.12 は**奥白滝１遺跡**（前掲）の石器ブロック 11・12 の例である。石材は黒曜石の母岩 121、接合 2939 である。母岩 121 は総点数 144 点から構成され、ここで図示した例以外に 15 組の接合個体を含む。図示した例は 56 点の剥片類からなる接合個体で、礫皮が除去された後に進行した両面調整石器リダクションで生じた一連の剥片が、片側の面のみ接合している。芯の両面調整石器は同一母岩に含まれておらず、遺跡外に搬出されたと想定できる。接合資料を構成している剥片はいずれも大形であり、搬出された両面調整石器も相当に大形のものであろう。生じた剥片の１つを素材に選択し、両側縁に二次加工を加えている。かなり大形ではあるが大きさの割には薄手の剥片であり、二次加工は背面のみに展開しているために、これが両面調整石器に展開されていく可能性は低い（報告書では削器に分類している）。

図 3.3.13 は**正面中島遺跡**（前掲）の例である。石材は凝灰岩の母岩 219 の接合 No.35 である。母岩 219 は 132 点出土しており、尖頭器４点、掻器１点、削器１点、二次加工剥片１点をこの中に含み、図示した他に６組の接合個体を含む。尖頭器はいずれも両面調整だが欠片であり、これらの尖頭器がリダクションの芯であったか否かは定かではないが、欠片の本体は出土していないため、複数の尖頭器が存在していたのがそれぞれ折れた後に、

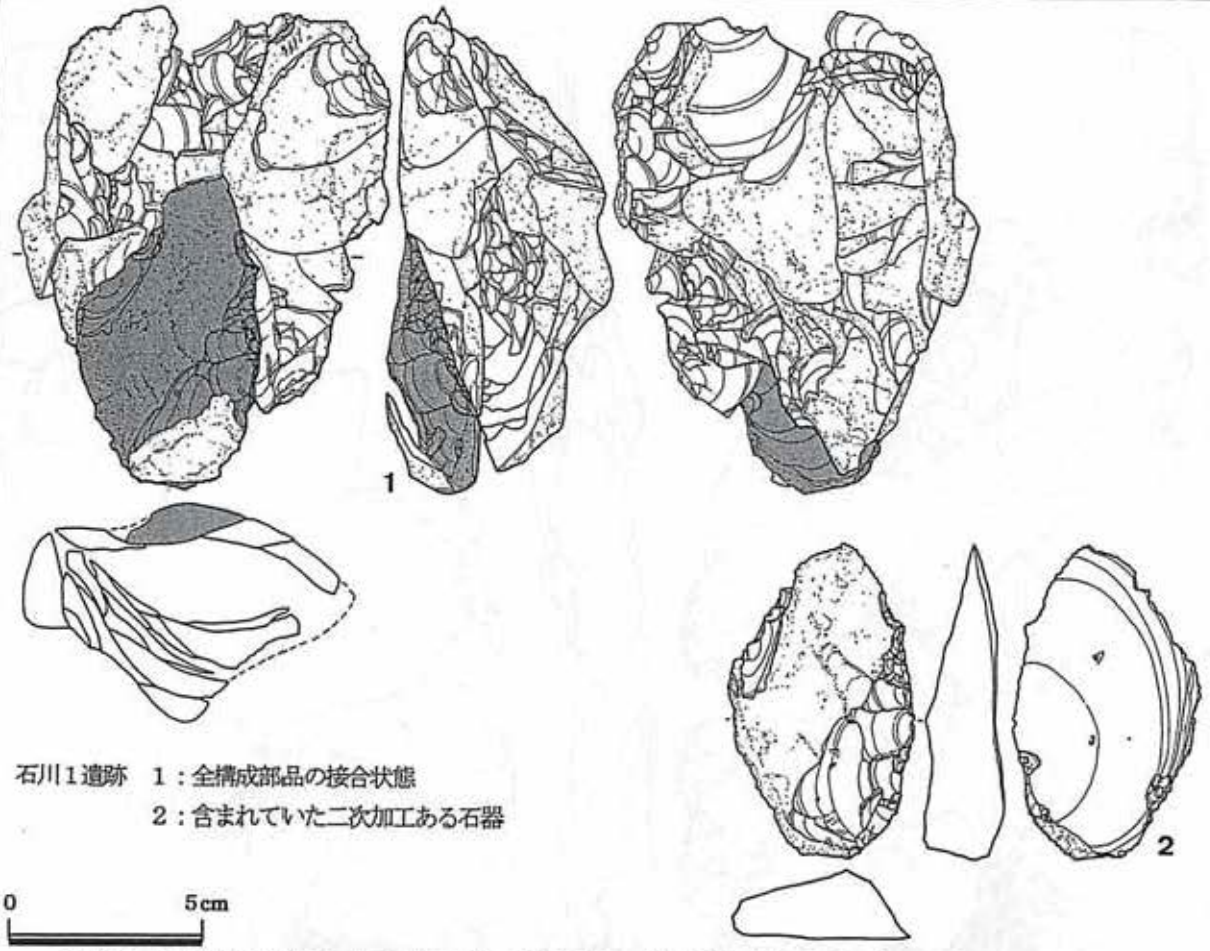


図 3.3.11 原石形状に戻るが芯のない剥片同士の接合例に他器種を含む例②（S=1／2）

大きな方の部品をすべて持ち出している可能性もある。報告者によると、これらの尖頭器は薄く幅が狭いために、最終整形がこの場で行なわれていたと想定している。1は10点の大形剥片が接合しているが、両面調整石器の片側の面だけである。礫皮面が残らないことから、リダクションがある程度進行した時点で搬入されている。接合する剥片のうち最も大きなものが2の削器に加工されている。下段の3と4は、1との直接の接合関係は確認できないものの、同一母岩を構成する掻器と削器を示した。これらも1や2を生じたリダクション過程でともに生じた剥片を素材に、器種を製作していることを示す。

図 3.3.14 上段は**房谷戸遺跡第Ⅰ文化層**（前掲）の例で、石材は黒色安山岩の個体別資料4、接合22である。個体別分類は全点を対象としておらず、個体別の組成内容も定かではないが、幅約8cmを想定させる両面調整石器の調整剥片に、丸みを帯びた刃部の掻器が接合している。**図 3.3.14** 下段は**大網山田台No. 8遺跡第Ⅰ文化層**（千葉県大網白里町、田村1996、第Ⅱ期）の例で、石材は「チョコレート頁岩」である。石器集中外からの単独出土品であるが、石材から主要な石器群（荒屋系細石刃石器群）に帰属する可能性が高い。「チョコレート頁岩」については母岩分類が行なわれていないが、細石刃核や荒屋型彫器などを含む121点が出土している。礫皮面を広く残すリダクションの初期段階で生じた剥片が3点接合しており、すべてに二次加工が加えられ、掻器や削器とされている。

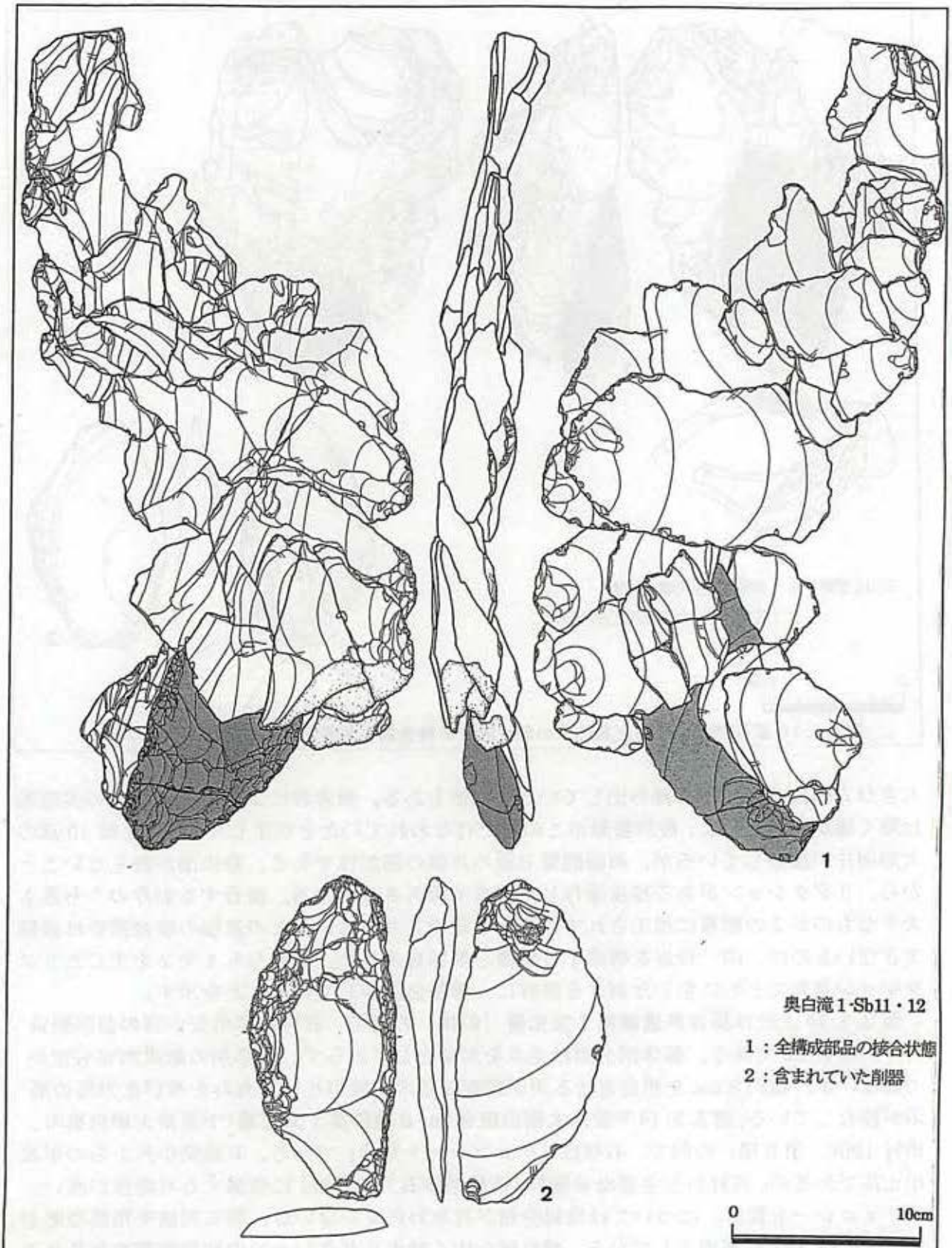


図 3.3.12　剥片同士の接合例に他器種を含む例①(S=1／3)

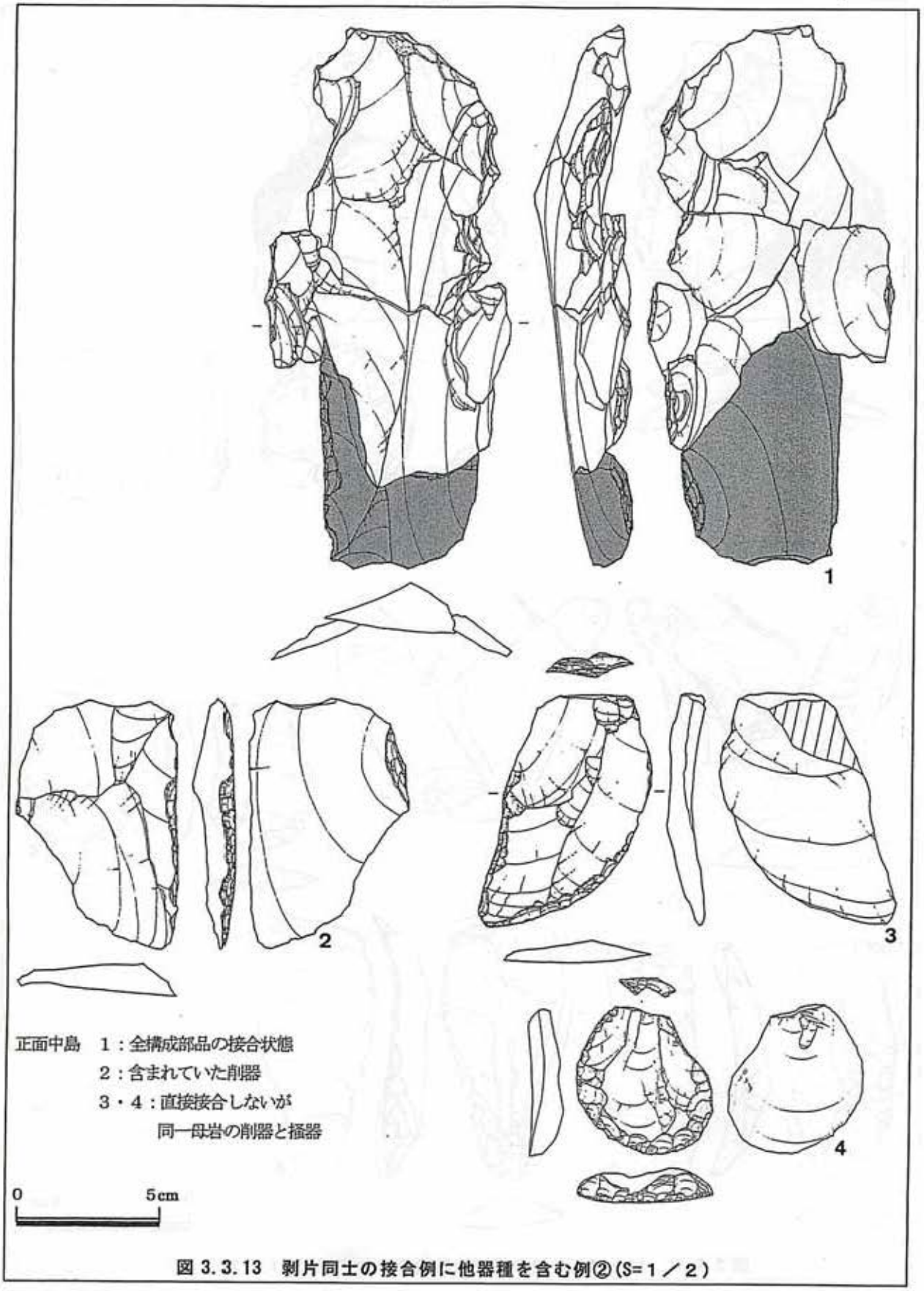


図 3.3.13　剥片同士の接合例に他器種を含む例②(S=1／2)

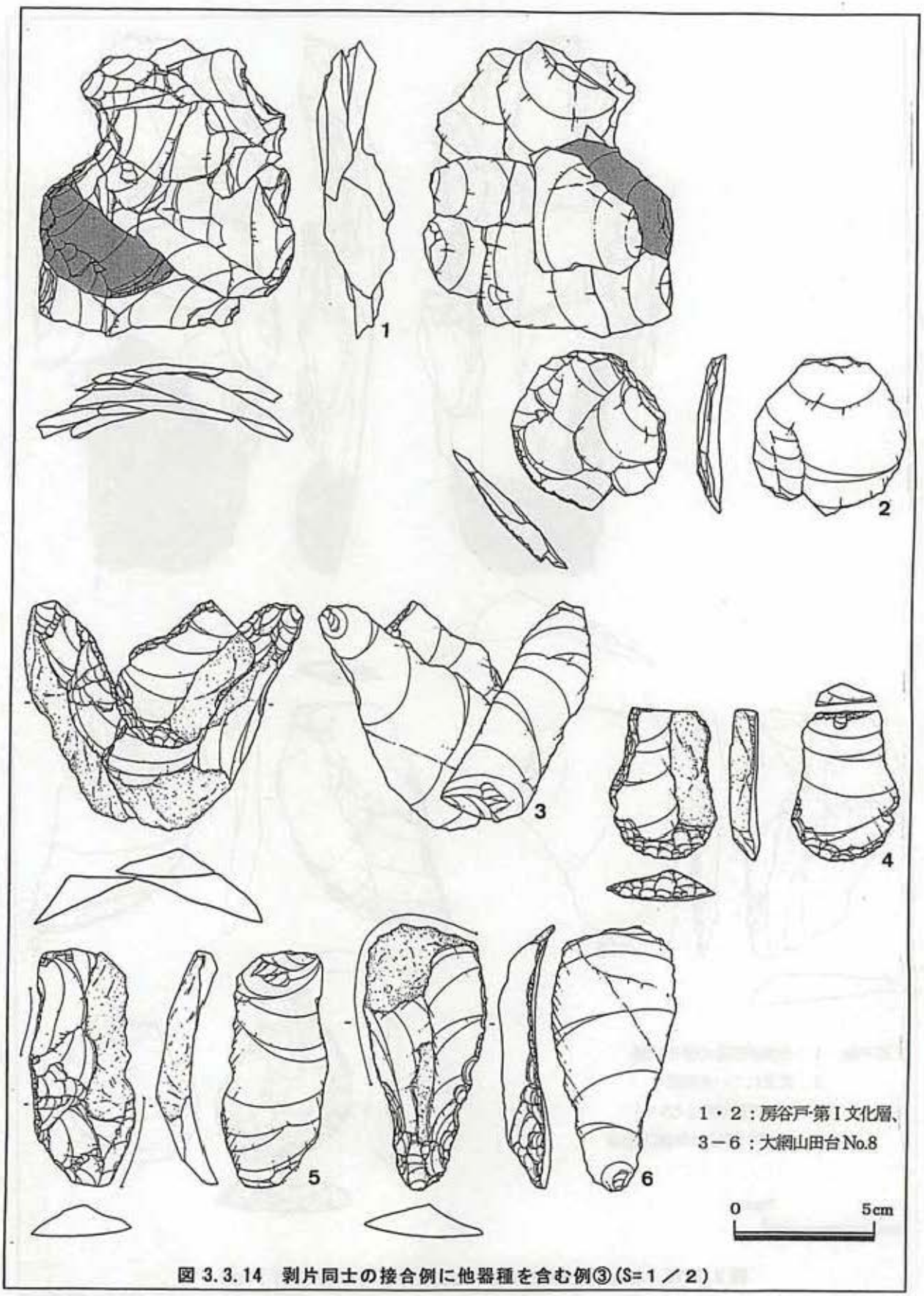


図 3.3.14　剥片同士の接合例に他器種を含む例③(S=1／2)

（３）器種分類問題

一般に石器の器種分類は、分類の目的により方針が異なるが（註４）、遺跡出土時点の石器の形象にもとづかざるを得ない。このため接合資料などで現象してくる「一つの石器の形が変化してゆく可能性」を分類基準に反映させ難い。ここからいくつかの問題が発生するが、本節では両面調整石器群で特に問題となる「核／剥片問題」と「削器／未成品問題」について、議論を先に進める目的でこれらの問題を無効化する概念を用意する。

①「核／剥片問題」：これまでに見てきた接合資料から、「両面調整石器が石核を兼ねる」との命題は、認めることができよう。しかしリダクションが進んだ両面調整石器が、はじめから自然石を素材とした「核」なのか、それとも剥片に二次加工を加えた「剥片石器」なのかは、接合資料によらずに見分けることは困難である。この問題は「両面調整尖頭器は製作工程の復元が困難」（栗島 1986）などとして知られていたが、両面調整石器の石核としての側面を考慮した場合に、特に大きく顕在化してくる。

剥片石器の原理論では、①「剥離によって核（ネガ）と剥片（ポジ）が生じる」という枠組みを基本とする（竹岡 1979 など）。これに即して最終剥離面がネガならば核・ポジならば剥片との基準を徹底すれば、すべての両面調整石器は「核」である。しかし同時に、これでは二次加工のある石器もすべて「核」になるはずだが、ふつうはそうは考えない。なぜなら②「石器を覆うネガ剥離面は、主要剥離面の生成に先立つ先行剥離面と、主要剥離面の生成後に生じた二次加工剥離面とに、明確に区分できる」との第２の前提を立てることで、「石核」「剥片」とは別のカテゴリーである「器種」としての分節線を引くからである（註５）。この分節によって、二次加工の剥離面は最終剥離面とはみなされない。したがって二次加工ある各種の「器種」を「核」に分類することは、通常ありえない。

しかし両面調整石器を覆うネガ剥離面は、先行剥離面／二次加工剥離面の区別がむずかしい。両面調整石器が核であるなら、先行剥離面という概念はそもそも成り立たない。尖頭器など平面形が規定されている場合や、石斧など刃部が明らかな場合には、縁辺部の小剥離面や刃部整形に限れば二次加工を区別でき、区別できない場合でも「典型例」からの類推での説明が可能な範囲では、問題には感じにくい。だが形が特殊化していない両面調整石器では、石核としての剥片剥離か器種としての二次加工かの区分は、原理的に不可能といえる（註６）。もとより「石核」「剥片」「器種」といった枠組みは、実体ではなく関係論的な概念にすぎない。石刃素材の石器などのように、石核－目的剥片－二次加工－製品の連鎖モデルが成立する場合には、核／剥片／器種の区分が実体であるかに錯覚できるが、両面調整石器に石核－目的剥片－二次加工－製品の連鎖モデルの適用をはかると、核／剥片／器種の区分が関係論であることが見えてくる。第Ⅱ章第５節で紹介した定義１でも、素材が核なのか剥片なのかはぼかされている。

このように考えるのではなく、両面調整石器を覆うネガ剥離面は全て二次加工であると決めてしまえば、この問題は浮上しない。その具体例が両面調整石器＝石槍説で、不定形な場合には「未製品」や「母形」と説明する。しかしこれでは、石核としての利用可能性は覆い隠されてしまう。石核でもある、という両面調整石器の重要な特徴の一つを見えにくくする効果は、本研究の議論にはふさわしくない。

石核を兼ねる両面調整石器という理解は、石器分類の上でむずかしい問題を提起する。上述の問題を「核／剥片問題」として名指ししておく。石核を兼ねるとの理解が誤りであ

るために難しいのではない。むしろ石器理解の準拠枠が、①核／剥片の分節と②先行剥離面／二次加工剥離面の分節、この2点を前提とするために、分析対象（両面調整石器）と分析概念の相性が悪いのであろう。これが第Ⅱ章第3節で論じた、トゥール・リダクションとコア・リダクションの区分を両面調整石器には適用しにくい、ということの理由である。トゥール・リダクションとコア・リダクションの区分が適用可能なのは、石核－目的剥片－二次加工－製品の連鎖モデルが成立する場合、つまり①核／剥片の分節と②先行剥離面／二次加工剥離面の分節が可能な石器現象に限られる。

より分析対象に即した説明のためには、異なる準拠枠を新しく創作する必要がある。両義的な石器を、そのままそういうものとして扱っていける、「核／剥片問題」を無効化する枠組みや分類が求められる。本研究では、**両面調整石器リダクション**という枠組みを用意することでこの問題を回避する。両面調整石器リダクションは、トゥール・リダクションともコア・リダクションとも異なる第3のカテゴリーであり、両面調整石器の素材が核なのか剥片なのか、両面調整石器の本体が残滓なのか利器なのかは問わず、これらの両義性を前提とした「石材を両面調整状に縮小してゆく過程」として定義する（定義2）。以下の議論では、第Ⅱ章第3節で述べた広義のリダクションよりも限定的な内容を示す必要がある場合に、この用語を用いる。

さらにチョッパーやチョッピング・トゥールといった「礫器」も、これ自体が道具なのか、それとも他器種の素材を供給する石核なのか区別できないという、「核／剥片問題」と同じ問題を抱えている。調整石核のように、明らかに規格的な素材剥片量産技術を確認できる場合には、ためらうことなく「石核」として分節できる。しかし自然石の一端に連続的な剥離を加えたのみといった単純な石器の場合には、利器なのか石核なのか判断できない。この問題について本研究では**礫核**という概念を用意することで、両義性問題を無効化する。礫核とは礫器と石核の総称であり、利器なのか残滓なのかは問わない。ただし両面調整石器リダクションとは性質の異なる、コア・リダクションに対応する概念である。なお表記法の対応上の都合から、以下ではコア・リダクションを「石核リダクション」と表記する。

②「削器／未成品問題」：剥片の側縁に連続的な二次加工を加えただけの石器は、ナイフ形石器群など石刃技法を技術基盤とする、石核リダクションの文脈の中に現れた場合には「削器」と分類される。しかし両面調整石器群の場合、これらは剥片を素材とした両面調整石器リダクションの開始直後の姿（尖頭器などの未成品）である可能性も高く、削器として別扱いにすると、石器群の理解を妨げるおそれがある（例として本章**図 3.2.13** の全体や第4章**図 4.2.2** の6、**図 4.3.1** の7、**図 4.3.2** の3など）。しかし削器なのか未成品なのかの識別は、多くの場合は石器それ自体の属性から識別されるよりは、問題となる石器が供伴する他の石器群との文脈に規定されている可能性が高い。この問題を「削器／未成品問題」として名指ししておく。

「削器／未成品問題」を、石器自体の属性（二次加工の部位や連続性、角度など）に頼る形で、石核－目的剥片－二次加工－製品の連鎖モデルの中で完全に解決することはむずかしいと思われる。しかし議論を先に進めるために、概念を工夫して問題を無効化することはできよう。この目的から、本研究では**剥片器種**という概念を用意する。剥片器種とは、剥片の縁辺に連続的な二次加工が加えられた石器の総称で、主要剥離面（＝腹面）が広く

残ることで剥片（石刃も含むポジ生産物）を素材としていることが明らかな石器と定義する（定義３）。掻器・削器・彫器・周辺調整尖頭器など、「非・両面調整」の器種を広く総称することになる。

両面調整石器群の石器は、①両面調整石器、②礫核、③剥片器種、そして④剥片、以上４つのカテゴリーから構成されると考えることで、「核／剥片問題」や「削器／未成品問題」などの石器分類の両義性問題を無効化する。

（４）円盤状石核

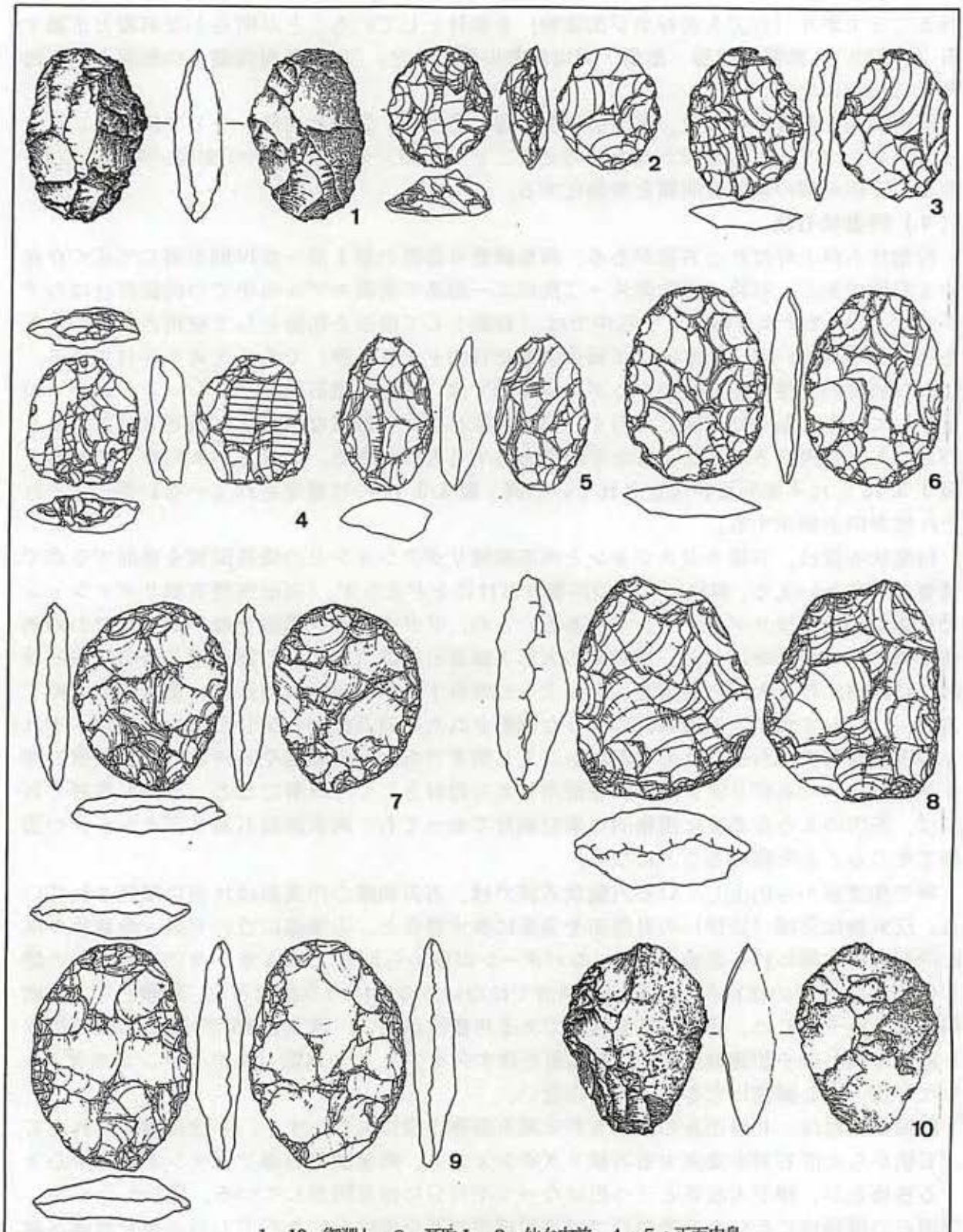
円盤状石核と呼ばれる石器がある。両面調整石器群の第Ⅰ期～第Ⅳ期を通じて広く存在する石器である。石核－目的剥片－二次加工－製品の連鎖モデルの中での位置付けはむずかしく、このモデルを前提とする中では、「結果として縁辺を利器として使用されることもあるかもしれないが、基本的には剥片剥離を目的とする石核」であると考えられている。この石器も両義性問題を喚起するが、本研究では「両面調整石器リダクション」の一つの姿として、さしあたり理解しておく。平面形状がかなり厳密な円盤状に規定されているものと、あまり規定されずに多様な平面形を呈するものがある。大きさもまちまちである。**図 3.3.15** には平面形状が規定されている例、**図 3.3.16** には規定されていない例の、それぞれ代表例を提示する。

円盤状石核は、石核リダクションと両面調整リダクションとの境界問題を喚起する点で、重要な一群といえる。利器／石核の両義性だけにとどまらず、「両面調整石器リダクションでもありかつ石核リダクションでもある」との、リダクション構造全般のレベルでの両義性である。一例を挙げると、第Ⅲ期の大形尖頭器石器群（いわゆる神子柴・長者久保石器群）に頻繁に伴う大形の石刃を、どのように理解するかの問題に関わる。第Ⅲ期の大形石刃が、はたしてナイフ形石器群のような調整された石刃石核から生じたものなのか、それとも円盤状石核から生じたものなのか。もし前者であれば尖頭器や石斧など両面調整石器リダクションに石核リダクションを併用した石器群としての理解になる。しかし後者であれば、石刃のような高度に規格的な素材剥片であっても、両面調整石器リダクションの過程で生じることを認めることになる。

神子柴遺跡から出土している円盤状石核では、石刃剥離の作業面は片面に限定されている。反対側は角礫（岩犀）の自然面を全面に残す場合と、尖頭器に近い平坦・魚鱗状の求心的剥離面に覆われる場合の、２つのパターンが認められる（2004 年１月に展示ケース越しに実見）。縁辺の微細剥離は石刃作業面ではない方の面にのみ確認され、利器としての使用痕跡というよりは、純粋に打面調整である可能性が高い。**図 3.3.16** では 10 の大平山本Ⅱ遺跡の例が神子柴遺跡の前者（自然面を残すタイプ）、３の遠間コレクションが後者（入念な平坦・求心調整になるタイプ）に近い。

同様の問題は、北海道島の更新世終末期石器群全般にも存在する。入念に調整された石刃石核から大形石刃を量産する石核リダクションと、両面調整石器リダクションを中心とする技術とが、細石刃技術と三つ巴になって不可分に相互関連している。図示しないが、黒曜石の獲得地に近い白滝遺跡群では両面調整石器を素材とした石刃石核の接合個体が確認されている。

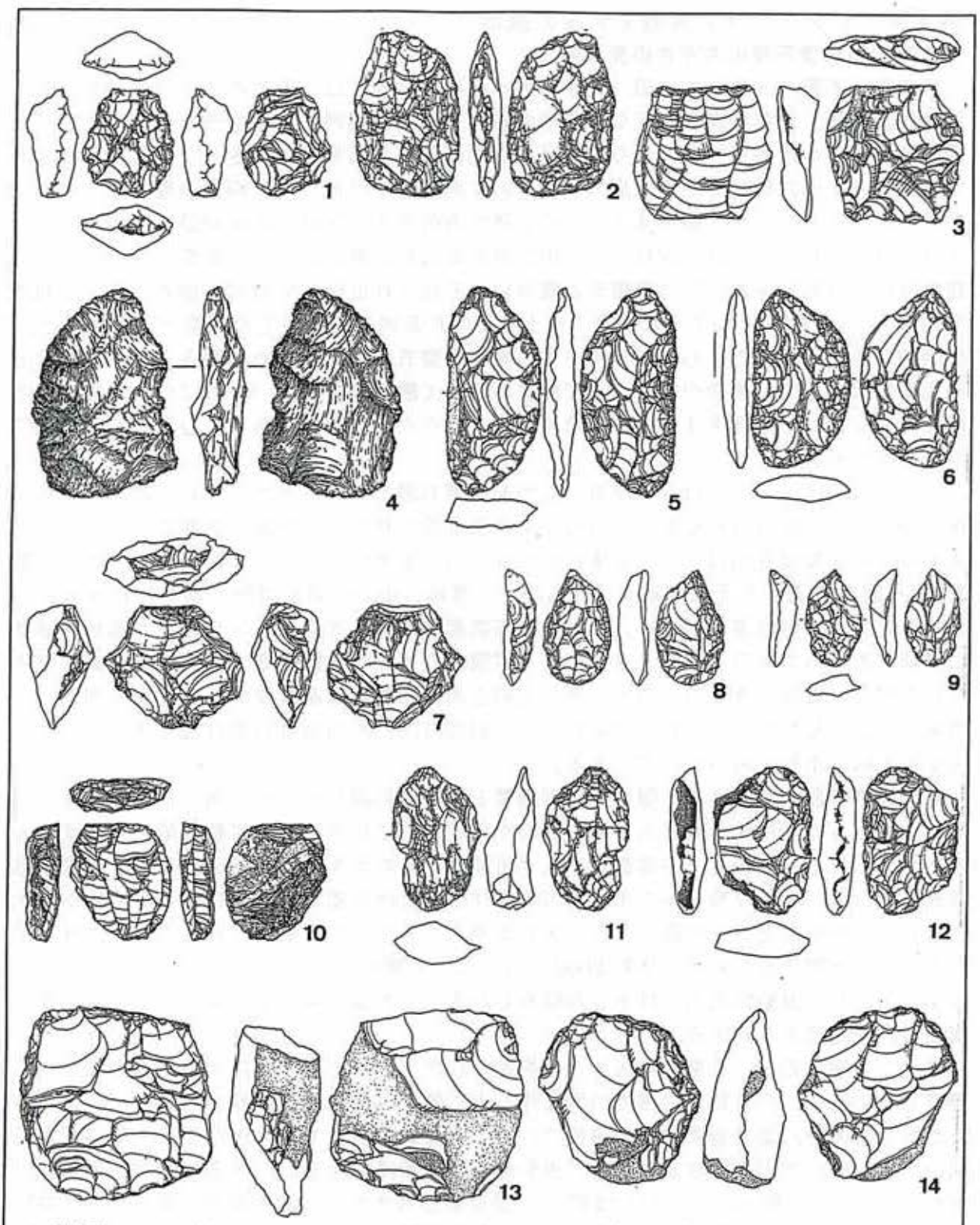
円盤状石核は重要な資料ではあるが、ここで十分な議論を展開する用意ができていないため、問題の提起にとどまる。いずれ機会を改めて再論したい。



1・10：御淵上、2：耳取Ⅰ、3：仙台内前、4・5：正面中島、
6・7・9：野川、8：大平山元Ⅱ

0 5cm

図 3.3.15 平面形状が規定されている円盤状石核（S＝1／4）



1：真人原A、2：貝坂桐ノ木平A、3：幌加沢-遠間コレクション、4：小瀬ヶ沢洞窟、5：石川1、
6：仙台内前、7・10・13・14：大平山元II、8・9：星光山荘B、11：真人原C、12：荒屋

0 5cm

図 3.3.16　平面形状が規定されていない円盤状石核（S＝1／4）

第４節　リダクション構造モデルの提示

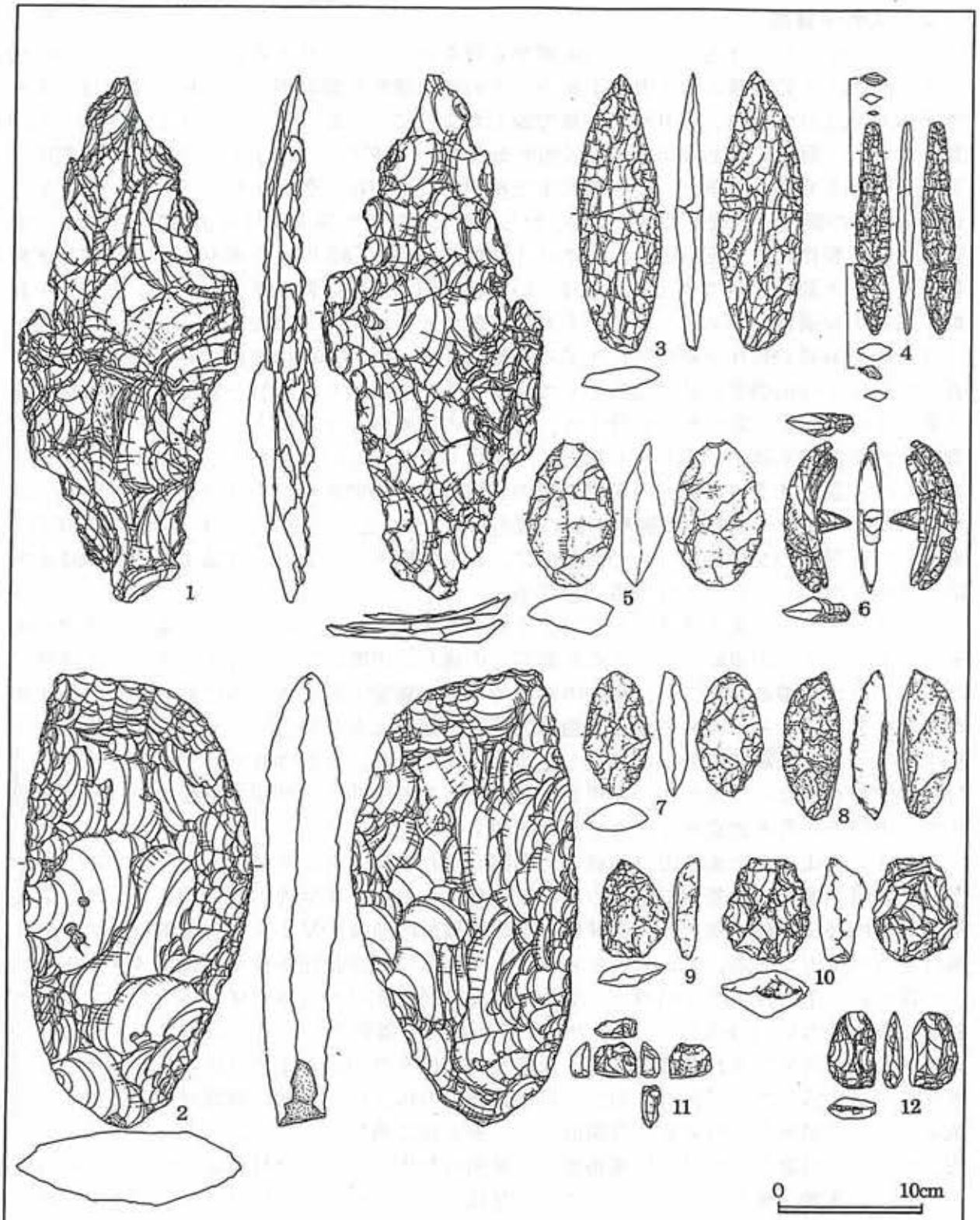
（１）両面調整石器の大きさの変異幅

両面調整石器の大きさの上限（大きい方への拡張範囲）は、原石の大きさに規定される可能性が高い。岩体の露頭付近など大形の岩屑を自由に獲得・利用できる条件下では、人間の身体能力の限界まで、いくらでも巨大な両面調整石器を製作できる。**図 3.4.1** は実見する機会のあった資料を中心に選択したもので網羅的ではないが、両面調整石器の大きさの変異幅をくみたてた。**図 3.4.1** で１の下茂内遺跡第Ｉ文化層は両面調整石器の本体を含まない調整剥片のみの接合資料だが、黒色緻密安山岩の露頭に、２の遠間コレクションは採集資料ではあるがおそらく黒曜石の露頭に、それぞれ近接して大形の原石を入手し得た立地にある。11 や 12 のような関東で出土した削片系細石刃核やその母型と比較すると、圧倒的な大きさである。しかし、すべての両面調整石器が、はじめは**図 3.4.1** の１や２と同程度に大きくて、運搬や使用の中で順次縮小して**図 3.4.1** の 11 や 12 になる、と考える訳にはいかない。**図 3.4.1** の１や２は可搬性という点でも問題があり、むしろ特異な例である可能性もある。

もともとあまり大きくはない原石から両面調整石器が製作されたことが、礫面の状態や接合資料例から読み取れる場合もある。本章第１節で見たような接合状態から原石の大きさを推定可能な接合例は、さまざまな大きさの原石を用いていることが明らかである（**図 3.2.1～図 3.2.7**）。また繰り返しになるが、一遺跡の中での両面調整石器の接合が原石にまで復元される例は多くはない。これは両面調整石器のリダクションの進行が複数遺跡間に連鎖するためであろう。**図 3.2.7** の上ノ平遺跡Ｃ地点や、**図 3.3.1** の真人原遺跡Ｃ地点などの場合、獲得できる原石の大きさを上回る両面調整石器を製作することは物理的に不可能である。したがってこれらの場合には、初期段階の両面調整石器は**図 3.4.1** の１や２よりも大幅に小形であったはずである。

両面調整石器の大きさの下限は、両面調整石器やその調整剥片を、何らかの道具またはその一部として利用する場合の、利用目的や作業の終了などによって臨機的に変異するものと考えられる。しかし「石器製作が入手可能な原石の大きさに規定される」との理解は単純ではない。大きな原石から小さな石器を作ることは可能だが、逆に小さな原石から大きな石器を作ることは不可能である。大きな原石を入手できる場合には、文化的・社会的規定を含めた製作者の裁量（小野 2000 など）に、石器のサイズが完全に任されると考えてよい。しかし遊動領域内では小さな原石しか入手できない条件下では、これに対応する複数の方策が考えられよう。

以下に列挙すると、①原石の大きさに規定された小さな石器を製作する（遊動領域内で獲得できる点と、その特定岩種で石器を作る点に強いこだわりがあり、石器のサイズへのこだわりは弱い）、②石器製作への適性では劣るが遊動領域内でも大きな原石を獲得できる、別の岩種を用いて大きな石器を作る（遊動領域内で獲得できる点、大きな石器との点にこだわりがあり、岩種へのこだわりは弱い）、③遊動領域外から大形の原石を調達する（隣接他集団との友好関係、産地の存在など可能な条件が整っている上で、そういった石材利用が選択可能）などの対応策を、理論上は想定できる。しかし実際の遺跡出土資料には、これらが様々な割合で混在している可能性があり、個別の一事例・一資料のレベルで事情を同定してゆくことには一定の限界がある。



1：下茂内（長野）、2：幌加沢遺跡遠間地点（北海道）、3：大刈野（新潟）、4：吉岡C（神奈川）、5・7：正面中島（新潟）、6：樽口（新潟）、8：中土（新潟）、9・11：東峰御幸畑西（千葉）、10：真人原A（新潟）、12：中原（茨城）

図 3.4.1　両面調整石器の大きさの変異　(S=1／4)（長沼 2003b、p112 引用）

（2）入れ子構造

本章第3節で見てきたように、両面調整石器をとり込んだ接合資料の中に二次加工の加えられた他の石器器種が含まれ、石核としての両面調整石器利用を示す接合資料は、各地で多数確認されている。第Ⅱ章第3節で論じたように、いわゆる「リダクション論」の議論の中には、製作工程と刃部再生を区別するなど、「リダクション」として説明する範囲の限定を試みる立場がある。しかしこれまで検討した事例は「製作工程」「刃部再生」「剥片剥離」などの識別が意味を持ちにくい。むしろ逆に、従来の研究では両面調整尖頭器の「製作工程」、「製作」終了後の使用の中での「刃部再生」や「転用」、円盤状石核の「剥片剥離技術」などと説明されてきた諸現象は、いずれも両面調整石器のリダクションという一般的・包括的な過程の、ある一部だけを見た了解にすぎないのではないか。

両面調整石器の製作＝縮小時に生じる調整剥片を、他の器種の素材剥片として利用する。言い換えると両面調整石器が石核として作用する。すなわち、石材を利器と石核の両機能を兼ねる両面調整石器の形で管理する。またその調整剥片を素材として「製作」された二次的な両面調整石器も、同じく石核として作用し得る。このしくみを、**図 3.4.2** に模式的に示した。**図 3.4.2** では、両面調整石器の石核としての拡張性は、ヨコの段（左→右へ進むリダクション：一つの両面調整石器の縮小過程）と、タテの段（上→下へ進む繰り下げ：剥片／石核関係の交替過程）との両方向に、ともに開かれており、理論上はこの関係を無限に拡張できる。これを入れ子構造と呼ぶ。

言うまでもないが**図 3.4.2** は数列の形をかりて表現したモデルであり、過去の事実の復元ではない。全ての遺跡で、全ての石器がこの通りに実際にあったなどと主張する意図はない。実際の遺跡の事例では、最初の時点での両面調整石器の大きさに縛られたり、必要な作業の違いによって求められる石器の大きさが変わったりすることで、ある程度よりも小さくなった両面調整石器は石核として作用しなくなり、実施されたリダクションとしては拡張回数が少ないことも多いと思われる。ただし潜在的には無限に拡張できるしくみの中で、実際の限界を適宜決定できる点は強調したい。

これと一見よく似たあり方（石核から剥離された剥片が再び石核として作用する「入れ子」の素材生産）は、後期旧石器の他の石器群にもある。規格性の高い例として米ヶ森技法や瀬戸内技法、低い例として武蔵野台地のⅨ層段階前後やⅤ上～Ⅳ層下部段階の、剥片素材の石核などがある。しかしこれらは入れ子関係の拡張範囲が狭く（**図 3.4.2** の下方向への段の繰り下げ回数が1回限り／または少ない回数となる）、核自体が特定の形に整形されることも少ない（註7）。これに対して両面調整石器群ならではの特徴は、①**図 3.4.2** のタテ方向も含めた入れ子関係の大きな拡張可能性を持つ点、②核自体も目的の形に整形される点にある。この「入れ子関係の拡張範囲」の広さは、石材の獲得地点と、実際に石器を利用する場所との時間的・空間的なズレを自在に調節することに、関連していると解釈している（現象としては石材獲得地での集約的製作と、両面調整石器の状態での他遺跡への搬出・運搬・搬入という、すでに先学諸氏によって繰り返し指摘されてきた形で現れている）。

第Ⅱ章第1節で論じた稲田孝司の石器製作構造（稲田 1969）は、繰り返しになるが①剥片剥離（技術基盤）、②調整剥離（二次加工）、③器種および型式の組成、の3点に注目するものであった。この枠組みを用いて両面調整石器群のリダクション構造を説明すると、

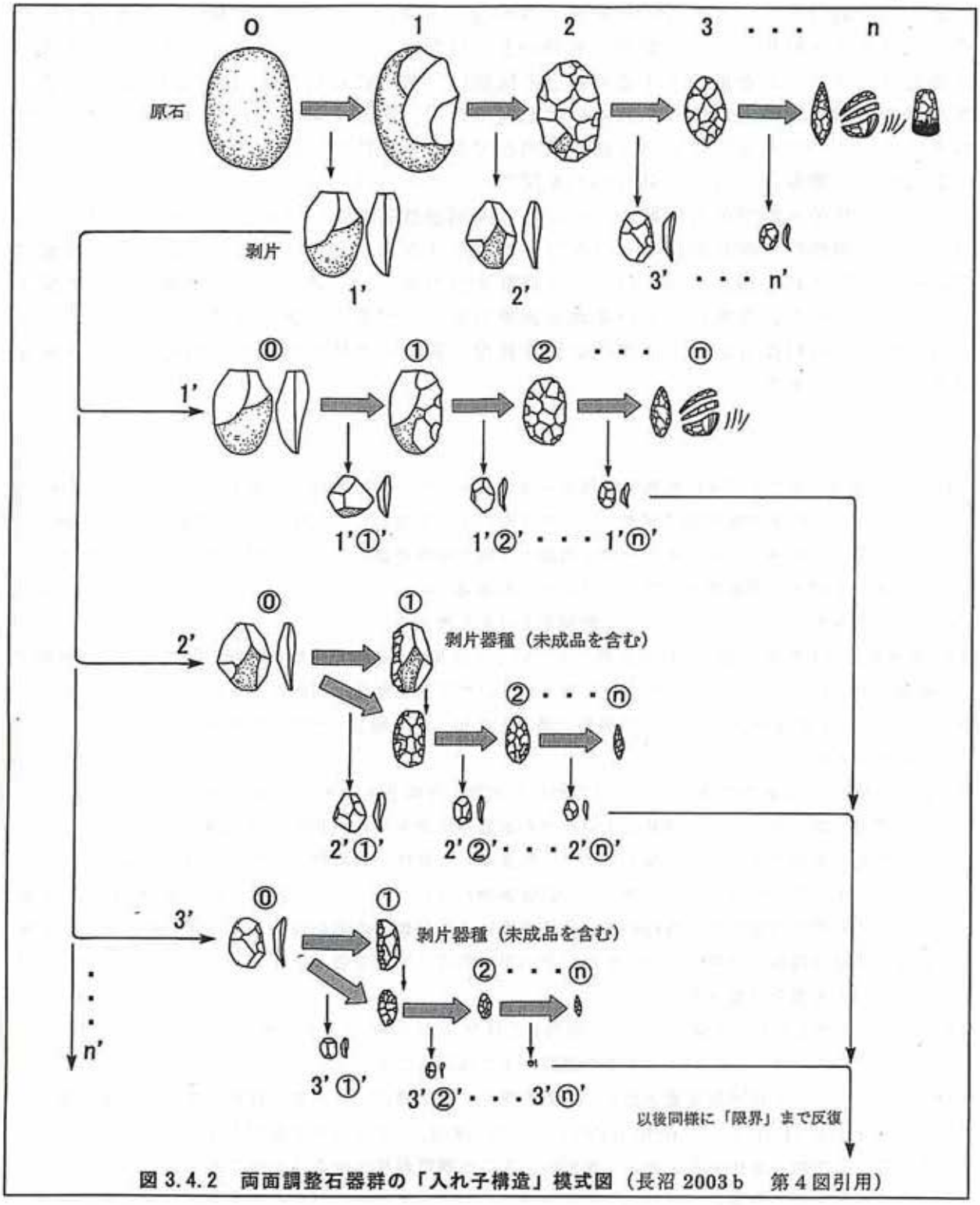


図 3.4.2　両面調整石器群の「入れ子構造」模式図（長沼 2003 b　第 4 図引用）

①の剥片剥離と②の調整技術とが一体化していて、これらの分離に意味がない構造（入れ子構造）と言うことができる。

もちろん「製作」の「終了」後は原則としてリダクションしない（欠損品は廃棄する）両面調整石器や、リダクション幅が小さい石器、相似形を保つ石器などもあり得る。特に

小形の尖頭器などは、これらの可能性の方がむしろ高い。これらには確かに「製作工程」や「刃部再生・転用」などの説明が有効かもしれない。しかしこれらと、もとより多様・大幅なリダクションを前提とする石器との区別は、個別にはむずかしい。接合資料も含めて石器の遺跡出土時点の姿しか我々には把握できず、剥離で消去された石器の履歴の全体は見えないためである。むしろ上述の区別ができない条件下では、どのような説明がより広範な現象の理解にとって有効なのかを探るべきであろう。

そこで包括的・原理的な理解のためには、両面調整石器とは尖頭器も含め、多様なリダクションの可能性を潜在的にもつ存在で、特殊な状況の下ではリダクションの幅や継続時間が狭く限定される場合もあり得る、と理解する方がよいと考えたい。手持ち石材の縮小という避けられない事態に、石材を両面調整石器の形で管理・運用することで対処するあり方の中で、石材保有状況や作業内容の変異など個別の事情に応じて、多様に見える現象が生成したのであろう。

註

1）有樋尖頭器の中でも、東内野型尖頭器の一部の小形品や、細原遺跡（茨城県北茨城市、館野 1982）などの例は、両面調整石器リダクションではないものも含む。尖頭器という分類では樋状剥離をもつ点で確かに共通するが、東内野型尖頭器の一部や細原遺跡の有樋尖頭器の素材は剥片である。この一連の手続きは両面調整石器リダクションの範疇ではなく、石核リダクションあるいは刃部形成（または再生）リダクションとして理解するべきと考える。

2）調査範囲が石器集中部の主体部を押さえているとは言え、石器集中部の北半が送電線鉄塔の敷設で破壊されていることから、潜在的に包蔵されていた石器を完全に回収できていない可能性は残る。

3）旧稿（長沼正樹 2003b)でも同一の資料に言及したが、出土層位と点数の記載が本章と異なる。旧稿が誤りで本章が正しい。

4）竹岡俊樹は、「石器製作者によって行なわれた石器の分類を復元する」（竹岡 2003、p186 など）ことを石器分類の目的とし、遺跡出土時点での石器の形象を属性分析的手法で厳密に捉えることで、この目的を実現できるとの立場をとる。分類基準の離散性・再現性との点では高く評価できるが、そもそもイーミックな分類との遠近には評価基準がないため、目的の設定自体に無理があると思われる。本研究の立場では、当時の製作＝使用者による分類との対応は問わず、また年代学的な評価は先行研究の経験則を尊重しつつも理化学的年代測定に比重を置いた上で、石材の運用を明らかにする目的で石器を分類する。

5）二次加工の加えられた石器に対して「器種」ではなく、「形態」（織笠 1984）や「形式」（小林 1975）の語を用いる立場もあるが、ここでの議論の上では同じことである。

6）ルロワ＝グーランは単位重量あたりの有効刃部長さを指標に、石器製作技術の変化を人類の進化と対応させたが（Leroi - Gourhan1964［荒木訳 1973］）、両面調整石器であるハンドアックスの有効刃部として核の本体のみを扱い、整形時に生じる調整剥片の縁辺は刃部にカウントしていない。

7）角錐状石器や舟形石器の一部には、石核を兼ねたかに見えるものがある。なお田村隆は東関東の舟底形細石刃核を「舟形両面体」という語で呼んだ（田村 2003）。舟底形細石刃核は、両面調整石器ではないが、リダクション過程の点で両面調整石器と構造的に同型との評価では、と付度する。しかし一方で寺崎康史は、北海道島の美利河技法を湧別技法から分離する議論の中で、舟底形に整形された石器は、両面調整石器とは根本的に異なると説いている（寺崎 1998）。

第Ⅳ章　遺跡群の形成構造

第１節　遺跡間連鎖と遺跡規模の変異

（１）遺跡間のつながりと遺跡群の形成構造

前章でモデル化した両面調整石器のリダクション構造（入れ子構造）は、中ぬけの接合資料や同一母岩中に本体をともなわない剥片だけの接合資料にみられるように、通常は一遺跡の中だけでは全過程が完結せず、複数の他遺跡との搬出・搬入関係の中で進行する。前章で細分の地域・時期の限定をはずして、良好な接合資料を選択的に抽出して議論を展開せざるを得なかったゆえんである。それでは、複数の他遺跡との搬出・搬入関係とは、どのような関係であったのか。もちろん実際には、地域ごとに異なる歴史的・環境的諸条件などにより多様に変異すると考えられるために、個別時期・地域での具体的な復元を目指すなら、各時期・地域ごとに検討する必要がある。その作業への一部着手は第Ⅵ～第Ⅶ章で示すが、多くは将来の課題である。本章では、前章に引き続いて一般的・原理的な理解を進めることで、今後の個別地域研究の基礎となる枠組みの構築を目的とする。

なお「遺跡群」の語は、小河川流域や連続した地形面など一定の限定的な空間範囲に、時期的にも近接した遺跡が群集するあり方を示す場合に用いられることが多い。しかし本研究では、より一般的に「互いに関連性をもつと想定できる複数遺跡」という広い意味で用いる。したがって特定地域の具体的な遺跡の群集体（例えば月見野遺跡群、越中山遺跡群、鷹山遺跡群、ノヴォトロイツコエ遺跡群など）を示すわけではない。また「遺跡形成」の語は、通常の用法では埋没過程や埋没後の自然的作用を含むコンテクストの変形も含むが、本研究では、人為的な行為の痕跡が、さまざまな活動の結果として景観の中に残されてゆく過程について用いる。したがって遺跡群の形成構造とは、石器のリダクション構造が、人々の活動を通じて、景観のなかに複数の遺跡として分散的に痕跡化してゆく際の一般的なしくみであり、第Ⅱ章第４節でのべた集団の「移動・居住形態」（高倉前掲 1999）とも密接に関連するものである。

（２）石材獲得地と両面調整尖頭器

両面調整石器は端部が尖る形＝両面調整尖頭器としての姿が注意をひくため、これまでは主として尖頭器石器群の研究において、遺跡間の連鎖関係に関わる論点が示されてきた。第Ⅰ期の小形尖頭器石器群の研究では、編年と伝播・系統論的な関心から南関東と中部高地との関係が注目されていたが（織笠 1987 など）、やがて黒曜石という両地域間に共通する石材に着目し、地域間の石器の動きをさぐる視点も出てきた。栗島義明は、男女倉周辺で尖頭器としての形が整えられた石器が、製品やブランクとして南関東へ持ち込まれ、再加工・整形された可能性を指摘した（栗島 1989）。安蒜政雄も黒曜石産地に近い「石器生産遺跡群」で多量に製作された槍先形尖頭器の未成品が、南関東の平野部へもたらされたと説いた（安蒜 1991）。

これらの論点は信州産黒曜石を用いる有樋尖頭器（男女倉型）をめぐって具体的に追求された。相模野台地の尖頭器石器群の廃棄パターンを検討した関口博之は、相模野台地で単独搬入品として出土する黒曜石製有樋尖頭器よりも、信州の黒曜石の原産地直下（男女倉遺跡）で出土する黒曜石製有樋尖頭器の方が一般に大形であると指摘し、この現象を男

女倉遺跡群（製作地）で製作された有樋尖頭器が、管理的な石器としてリダクションを繰り返しながら複数遺跡間で使いまわされ、最終的に機能を終了した状態で相模野台地に廃棄された結果と解釈した（関口 1992）。白石浩之は有樋尖頭器の遺跡に①「樋状剥離尖頭器」を分配・消費する、②拠点的な場で原形を製品化する、③素材から原形をへて製品化までの一連の作業を行い他遺跡に搬出する、④原形をストックする、との４つの性格の異なる活動痕跡を見出し、これらを製作過程と石材流通の関係の中での諸変異と理解して、関口の議論をより細かく具体化した（白石 1997）。

有樋尖頭器以外の尖頭器石器群では島田和高が、砂川期のナイフ形石器群では石器個体の核が最終的には不要品・残核として捨てられるのに対し、逆に両面調整尖頭器は個体の核こそが最終的な目的物（尖頭器）となると指摘して、両面調整石器リダクションと石核リダクションとの本質的な違いに切り込んだ（島田 1994）。島田はこの時点では、製作工程の前半と後半とが遺跡間で繰り越される砂川モデル的な連鎖関係を、尖頭器石器群にも想定していたようである。しかし後に、前者を「石核消費」、後者を「両面体消費」と概念化した上で、石核消費は特定の原石採取場所に規定されない（平野部の河川流域で各種の石材を、適宜・常時獲得することを前提とする）のに対し、両面体消費は特定石材の原産地（出現期には中部高地の黒曜石、やがて平野部山麓各地の各石材）に「拠点的につなぎ止められ」ると論じて、遺跡間連鎖関係の上でも、石核消費と両面体消費は性格が異なることを明らかにした（島田 1999）。

両面調整石器が、原産地など（原産地ではなく、中継的な石材獲得地の場合もある）特定石材の獲得タイミングに「つなぎ止められ」ている点の指摘は重要である。同じ現象を別の角度から論じた国武貞克は、南関東各地のナイフ形石器群から小形尖頭器石器群への移行期を中心に石材利用を検討した結果、「量依存型（一括搬入型）」、つまり一度に多量の石材を獲得する方策が「両面体調整石器」の特徴であると論じた。その上で、何らかの原因で石材供給の頻度が低下する状況が生じたことへの対処策として、限られた機会の中で多量に石材を獲得する方向に変化したと述べ、これが「両面体調整石器群」の出現契機となったと解釈した（国武 2002、2003）。

「同じ量の原石からできる製品の数が少ない石核石器としての尖頭器は大量の石材を必要とすることから、原産地の近くでより多く生産される条件があった」と述べた中村由克（中村 1989）に端的に代表されるように、両面調整尖頭器の製作には多量の無駄な剥片が生じるので、大形の原石を安定して入手できる条件が必要で、このために良質石材の原産地の近くに拠点的な製作跡が存在した、との論点は、以前から提出されていた。両面調整石器リダクションが剥片器種の素材供給も兼ねるという今日的な視点からは、一面的な評価ともいえるが、拠点的または集約的ともいえる大規模な遺跡が連鎖関係の中で重要な位置を占めていることは、ナイフ形石器群と比較した場合の両面調整石器群の大きな特徴といってよい。

（３）遺跡規模の変異

端が尖る両面調整石器に多数の剥片が伴う遺跡は「尖頭器の製作跡」と説明されてきた。しかし遺跡によって出土量に大きな格差がある。**表 4.1.1** には、報告書で「尖頭器の製作跡」やこれに類する説明のある遺跡の中から、点数または重量のデータが公開されているものを選んだ。とりわけ目をひくのが、出土総点数が数万点から数十万点におよぶ遺跡で

表 4.1.1　両面調整石器群の遺跡規模の変異

遺跡名	総点数	調査範囲	点数／1㎡	総重量(g)	石材種数	主要石材※	時期	備考	文献
美白滝１（１次・２次）	647,321	7,407㎡	87.4	864,363.8	9	黒曜石	第Ⅱ・Ⅲ期	一括含む	長沼ほか編2002
上白滝２	432,429	6,925㎡	62.0	1,264,407.9	8	黒曜石	第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期	一括含む	長沼ほか編2001
荒屋（２次・３次）	92,435	80㎡	1,155.4	8,526.1	5	珪質頁岩	第Ⅱ期	フルイ含む	芹沢ほか2004
上白滝５	86,034	7,860㎡	10.9	166,009.4	7	黒曜石	第Ⅲ・Ⅳ期	一括含む	長沼ほか編2002
下茂内　第Ⅱ文化層	約70,000	28,200㎡	約2.5	－	2	黒色緻密な安山岩	第Ⅲ期	水洗含む	近藤1992
美利河１	55,159	1,585㎡	34.8	396,304.1	3以上	硬質頁岩	第Ⅱ・Ⅲ期	水洗選除く	長沼1984
三ノ宮・下谷戸　第Ⅰ文化層	54,086	6,420㎡	8.4	55,413.7	11	ガラス質黒色安山岩	第Ⅳ期	フルイ含む	宍戸編1999
八風山Ⅵ　Ｂ地点	44,390	28㎡	1,585.4	80,442.6	1	ガラス質黒色安山岩	第Ⅲ期	フルイ含む	須藤1999
北支湧別４	24,149	5,472㎡	4.4	104,805.5	3	黒曜石	第Ⅲ・Ⅳ期	一括含む	長沼ほか編2001
臼谷岡ノ城北	22,835	6,600㎡	3.5	－	－	－	第Ⅳ期	－	山本ほか1992
勝谷戸　第Ⅰ文化層	8,486	－	－	－	3	黒色頁岩	第Ⅲ期	－	谷藤編1992
角二山	5,763	132㎡	43.7	－	5	硬質頁岩	第Ⅱ期	－	宇野ほか1975、桜井1992
上白滝６	5,062	6,953㎡	0.7	16,824.3	5	黒曜石	第Ⅲ・Ⅳ期	一括含む	長沼ほか編2001
白草	4,416	1,500㎡	2.9	2,495.3	4	珪質頁岩	第Ⅱ期	フルイ含む	川口1993
真人原Ｃ	4,171	148㎡	28.1	11,605.4	11	無斑晶質安山岩	第Ⅰ期	－	小野編1997
真人原Ａ	3,568	312㎡	11.4	8,193.10	13	珪質頁岩	第Ⅰ期	－	小野編2002
西岡Ａ	3,138	16,500㎡	0.2	558.40	15	無斑晶質安山岩	第Ⅰ期	－	土屋ほか2000
宮ヶ原サザランケ　第Ⅲ文化層	2,823	5,900㎡	0.5	19,332.1	9	緻密黒色安山岩	第Ⅰ期	－	鈴木1996
八風山Ⅰ	2,097	44㎡（試掘）	47.7	23,942.5	2	ガラス質黒色安山岩	第Ⅲ期	遺跡範囲保存	須藤1999
花見山	1,336	15,000㎡	0.1	－	13	安山岩	第Ⅳ期	－	坂本ほか1995
中尾　第Ⅰ文化層	1,189	1,200㎡	1.0	－	－	ガラス質黒色安山岩	第Ⅲ期	－	白石1980
中村　第Ⅲ文化層	1,144	－	－	－	5	粘板岩	第Ⅰ期	－	伊藤ほか1987
上ノ平Ｃ　草創期	924	10,100㎡	0.1	－	12	頁岩	第Ⅲ期	－	沢田1996
宮ヶ原北原　第Ⅰ文化層	901	3,900㎡	0.2	11,509.3	16	ガラス質黒色安山岩	第Ⅲ期	－	市川ほか編1998
吉岡Ａ　草創期１	862	31,090㎡	0.1未満	15,660.1	10	中粒凝灰岩	第Ⅲ期	流出分あり	砂田1998
宮ヶ原サザランケ　第Ⅳ文化層	620	5,900㎡	0.1	2,447.8	6	硬質細粒凝灰岩	第Ⅰ期	－	鈴木1996
鹿原ＳＦＣ内遺跡Ⅰ区	515	2,300㎡	0.2	－	26	凝灰岩	第Ⅳ期	－	関根編1992
前三舟台	481	－	－	－	8	安山岩	第Ⅳ期	－	佐伯1992

※石材名称は各報告書に準じた

ある。調査範囲の規定から遺跡の全範囲を完掘していない場合も多く、未調査範囲もふくめた実際の埋蔵量はより膨大と考えられる。ここでは便宜的な基準として、出土総点数が10,000 点を超える遺跡を大規模遺跡と呼んでおく。出土量が多すぎて出土遺物の集計が進まず資料の全貌が公表されていない場合や、遺跡の広がりが大きすぎて未調査部分が広く残る場合が大半である。このため、それぞれの遺跡の内部での詳細な行動復元には、長期的な研究が必要である。ここでは遺物量の膨大さという現象がもつ意義を、より小規模な他の遺跡との関連の中で考えてゆくことを主眼とする。

同様に便宜的な基準として、出土点数が 10,000 点未満で 300 点以上の遺跡を中規模遺跡、300 点未満を小規模遺跡として整理しておく。この基準そのものにはさほどの意味はないが、石器の出土点数によって遺跡を数段階の規模の異なるグループに分けることが可能である、という点こそが重要である。ここでは仮に３段階に区分したが、異なる分類も可能であろう。この他にも、いわゆる「デポ」や単独出土例など、特殊な出土状況を呈する遺跡も存在する。

①集約的な石器準備：更新世においてすでに風成層が堆積して久しい河成段丘上に、数万点から数十万点の石器を出土する遺跡が立地するパターンがある。これらを段丘上大規模遺跡と呼ぶことにする。この類型の代表例としては、黒曜石の産地に近い**白滝遺跡群**（北海道白滝村、長沼ほか 2000）がある。湧別川と支湧別川に挟まれた三角地帯に約５段の段丘面が形成されており、両面調整石器を多出する遺跡が複数立地するのは、湧別川によって形成されて 15～20 万年前に離水したと推定されている上から３段目の上白滝面である。

遺物包含層以下にも風成のローム土層が続き、遺跡に人々が占拠した時点ですでに当時の河床からかなりの比高が存在したと想定できる。

白滝村の赤石山では、標高 800m以上に「8 号沢」や「あじさい滝」などの黒曜石露頭が存在するが、流下する沢からも転礫状態の黒曜石を獲得できる。木村英明によると、この 800mライン上にも石器製作の痕跡がわずかに残されているが、大規模な遺跡が立地し始めるのは標高 600m付近の小平坦面であり、その代表例が幌加沢遺跡遠間地点であり、調査は継続中であるが 1992 年までの集計では、100 ㎡のわずかな調査範囲から 26 万 2315 点の石器が出土しているという（木村 1995）。ちなみに先述の上白滝面の段丘上遺跡群は標高 400mラインに相当し、赤石山の露頭からは４～６km ほど離れている。またガラス質黒色安山岩の産地に近接する**八風山遺跡群**（長野県佐久市、須藤 1999）も同様の性格をもつ遺跡であろう。八風山遺跡群では、沢との比高の低い立地の遺跡（Ⅵ遺跡）と比高のある台地上（Ⅰ遺跡）に、両面調整石器の集約的な初期リダクションが行なわれた遺跡が所在する。

石材の原産地に近くないにもかかわらず、段丘上に立地する遺跡から膨大な点数の石器が出土する場合がある。**武井遺跡群**（群馬県新里村、第Ⅰ期）が代表例である。明治大学による第１次調査（杉原 1977）を嚆矢に断続的な調査が進められているが、遺跡の広がりが大きい上に出土量も膨大で、その全貌は明らかにされていない部分が大きい。中間的な報告によると総計約 20 万点以上の石器群が出土しているという（加部 1998）。石材組成は黒色頁岩やチャートなど遺跡付近の石材を中心に多様というが、中でも第Ⅱ次調査の峰岸地点では信州系の黒曜石や東北日本海側の硬質頁岩といった遠隔地石材が 60%を占めるなど（阿久沢 1998）、一定量の遠隔地石材が認められるようである。有茎尖頭器の製作跡である**三ノ宮・下谷戸前遺跡**（神奈川県伊勢崎市、宍戸ほか 1999、第Ⅲ期）も、離水後に数万年が経過している風成層の上部から約５万点の石器群が出土した集約的な「製作跡」だが、箱根産と推定されるガラス質黒色安山岩の獲得可能地に格別に近いわけではない。これらの遺跡の解釈には、一定範囲の遊動生活の中での石材獲得上の中継地的な役割や、一回の滞在時間は短いながら複数回にわたる利用の結果が重複して、結果として膨大な石器群が形成されている可能性なども考慮する必要がある。

一方で、いまだ完全に離水していない当時の河原を占拠して集約的な製作を行い、膨大な遺物が出土している遺跡もある。これらを隣水大規模遺跡と呼ぶことにする。この類型の遺跡の代表例として、**下茂内遺跡**（長野県佐久市、近藤ほか 1992）を挙げる。黒色緻密な安山岩（ガラス質黒色安山岩）の産地である八風山から約 2.5km はなれた香坂川の低位段丘上に立地し、時期分離の困難な縄文の石器も含めると約 10 万点の石器が検出されている。石器群は砂礫層直上から出土するため、遺跡が占拠された当時は香取川の離水前後の河原（自然堤防や中洲）であったと考えられている。また**岩瀬遺跡**（秋田県山内村、利部ほか 1996）も同様の遺跡である。横手川の右岸の低位段丘（現在の水面からの比高７～10m）に立地し、水成堆積の砂やシルトが石器包含層からその上までをも被覆していることから、遺跡の占拠当時は完全には離水していない氾濫原または河原であったことが理解できる。報告書によると「縄文草創期」から「前期」にわたる 45 個所の石器集中、「草創期」では１基の竪穴状遺構と３基の「石器石材集積遺構」などから膨大な点数の石器が出土したという。剥片・砕片を含む全石器については点数・重量のデータ公表がなく不明だ

が、きわめて大規模な遺跡の一つといえる。礫皮面に覆われた剥片が多数接合するなど、両面調整石器リダクションの初期を示す接合資料も多数確認されており、河原や自然堤防など河川に接近した場所を占拠して、足元で獲得できる石材（ここでは珪質頁岩）を用いて両面調整石器の初期リダクションを実施していた例である。全容は不明だが**前田耕地遺跡**（東京都秋川市）、**本ノ木遺跡**（新潟県津南町）といった学史上著名な遺跡も、このパターンの遺跡と同様の性格をもつ活動痕跡である可能性が高い。

この隣水型大規模遺跡は、第Ⅲ期～第Ⅳ期のいわゆる「縄文草創期」に多い。大規模遺跡だけでなく中・小規模遺跡も自然堤防など水際に立地する傾向ともあわせて、内水面漁労の開始など生業戦略の変化を説く解釈もあるが（佐藤 1992、佐藤ほか 1996 など）、完新世以前の古い時代にもこのような水際の遺跡が仮にあっても、沖積作用による削剥または埋没のため、現在は調査できないという事情も想定でき、更新世の旧石器時代には存在していなかったとは断言できない。

これらの大規模遺跡では、中抜けの接合資料が多く確認されることから、遊動生活に携帯するために両面調整石器のリダクションの開始を集中的に行う、あるいは必要に応じてこれらの地点に回帰して石器装備を補充したと想定できる。ただし接合資料が豊富であっても、一回の占拠で全ての遺物が残されたのか、それとも何度も反復利用された痕跡の重ね書きで大規模な出土量となっているのかを、分離・確定することは難しい。岩瀬遺跡でも、調査者による「草創期」「早期」「前期」の区分は、供伴する土器とともに、遺物群を被覆する河川堆積物によって復元された、旧河道の移動や切り合いを考慮している。

②中規模ないし小規模遺跡：さきに見たような大規模遺跡は実際には稀であり、両面調整石器群の遺跡の大多数は、出土点数が数千点以下の中規模・小規模な遺跡である。

中規模・小規模な遺跡でも、多くの剥片を出土する遺跡は「製作跡」として理解されてきた。これらの遺跡では、「石槍の製作に際して礫や分割礫、或いは大形剥片を持ち込んでそれを加工して石槍を製作したのではなく、両面調整品としてある程度の形態を整えた未成品として搬入した石器を製品に仕上げた」（栗島 1990p28）現象がみられることが多い。これまでは尖頭器製作の専門家集団を想定した、流通や分業と関連づけた説明が与えられてきた（栗島 1990、稲田 1993、白石 2001a など）。しかし両面調整石器のリダクション構造の概念で、より簡潔に説明できよう。すなわち「未成品を持ち込んで」「石槍製作の仕上げ」を行うという説明ではなく、両面調整石器の刃部再生を兼ねる剥片剥離＝リダクションが移動生活の中で随時行われ、それらの痕跡が個々の遺跡に現れる結果、一遺跡に着目した場合に様々なリダクション段階の石器が残されていると説明したい。両面調整石器には、未成品・完成品の区別や、目的の形という概念が妥当するものも確かに存在するが（尖頭器や石斧など）、一方で固定的な形を目指してはいないものも含まれ得る。しかし両者を明確に分けることは難しいため、原理的・包括的な理解ではリダクション概念でとらえておき、個別の具体的なケースで目的の形の製作が認められる場合を、特殊例として識別してゆくべきと考える。

これら中規模・小規模遺跡については、本章の第３節と第４節で詳細に検討する。

③石器の埋納および単独出土：石器製品や未製品が一ヶ所へあたかも埋納されているかのような出土状態を示す、いわゆる「デポ」として知られる現象は、神子柴遺跡（長野県箕輪村、林 1994 など、第Ⅲ期）の調査以来、交換用の余剰物資などとしての解釈も含め

て先学に注目されてきたが、これも両面調整石器群の遺跡類型の一つとして理解できる。第Ⅱ期の細石刃石器群には顕著ではないが、第Ⅲ期の大形尖頭器石器群や第Ⅳ期の有茎尖頭器石器群において、特に頻繁に確認される（栗島 1990 など）。埋納あるいは埋納的な出土状態のみが一遺跡を形成する場合と、石器集中や多数の剥片類、他の器種などをともなう比較的規模の大きな遺跡の中で、その一部に埋納現象が確認される場合との両者があるようである。栗島が説くように、石材獲得戦略の一環としての理解が適切と考えられる。

一方で両面調整石器の中でも、尖頭器や有茎尖頭器などは単独で出土する事例が多い。各地で共通する現象と考えられるが、ここでは 1998 年に集成された北関東（群馬・栃木・茨城）の例をあげておく（岩宿フォーラム実行委員会 1998）。集成された 224 ヶ所の尖頭器確認遺跡（有茎尖頭器は除く）の中で、剥片類や石器集中をともなわない単独出土例は 117 遺跡に上る。これらの集成以後も事例は増えていると思われるが、単独出土例が多い傾向は動かないと思われる。これらの多くは、両面調整石器の一部が、狩猟具として槍先に用いられた際に、狩場で落とされ回収されなかったものと理解するのが素直であろう。

（４）遺跡群形成についての一般論と個別論

これまで概観してきたような規模や内容の異なる遺跡群は、内容の相互補完性という意味において、たがいに有機的に関連していると考えられる。これらの関係の中で、以下のようなリダクション段階の遺跡間への配置や副次的な石材管理を、単独または複数の組み合わせで併用することによって、実際の遺跡における多様な表現型が形成されるものと考えられる。

①石材獲得地の付近（段丘上大規模遺跡、臨水大規模遺跡）で、両面調整石器の一次的な準備を集約的に行う。②集団の移動経路上にある任意の地点でも、必要に応じて両面調整石器の一次的な準備と補給を行う（石材獲得地から離れた一部の段丘上大規模遺跡）。③移動経路上の特定の地点にいわゆる「デポ」を配置して原石や両面調整石器を備蓄し、必要に応じてこれらも利用する。④両面調整石器の石核的利用に加えて、剥片剥離専用の石核からの素材供給も補助的に適宜行う。

集団の移動行程の経路上各地点（遺跡）では、「尖頭器の製作」というよりも、両面調整石器の刃部再生を兼ねる剥片剥離、すなわち「両面調整石器リダクション」が随時行われ、石核としての有用性が低下したものや破損品が常時廃棄される。また移動経路上で手近に入手できる石材も適宜用いて、両面調整石器の初期準備を行う場合や、利器を兼ねない石核を用意して剥片の供給を行うことも、必要に応じてなされる。このようなしくみから、様々な規模と内容の遺跡群を遺跡間の連鎖関係の中で形成するのであろう。

また利用石材との関係で考えるなら、以下の３つのあり方が想定できる。A：産地が限定される特殊な石材（黒曜石、硬質頁岩など）を選択的に利用する。これは①や③と結びつくことが多い。B：移動経路上あるいは狭い遊動領域内部で常時獲得可能な石材を利用する。②④と結びつくことが多い。C：上記 AB の併用で、特殊な石材と手近な石材とをともに用いる。

もちろんここでの議論はあくまでも一般論であり、実際に生じた一回性の出来事の具体的な実体は、地域毎・時期毎に固有の歴史的・環境的条件に規定されて多様なものであったことは言うまでもない。そこで以下では、こういった個別的・具体的な事例に議論の焦点をあてることで、遺跡群の形成構造についての理解をさらに深めたい。

第２節　中規模遺跡と小規模遺跡の関連

（１）対象遺跡

ここで取り上げる遺跡は**用田鳥居前遺跡**（神奈川県藤沢市、栗原ほか 2001）と**吉岡遺跡群Ａ区**（神奈川県綾瀬市、砂田ほか 1998）の「縄文草創期」（Ｌ１Ｓ層上部出土石器群）との事例である。ともに出土層位と器種組成から、第Ⅲ期の大形尖頭器石器群に位置づけられる。出土層位と石器群は異なるが、用田鳥居前遺跡と吉岡遺跡群Ｂ区（二次調査）のＢ１層下部の石器群（用田鳥居前遺跡第Ⅳ文化層と吉岡遺跡群Ｂ区遺物群Ⅳ）では、筆者らの手によって２km 離れた遺跡間接合を確認した（栗原ほか 2002、吉田ほか 2003）。この遺跡間接合はナイフ形石器群（砂川期）であって、本章で対象とする時期ではないとはいえ、石材環境や地形・植生景観の共通性なども含め、両遺跡間の近さを示す証拠となる。先史時代の集団の日常的な活動圏に含まれる、二つの地点と仮定することに無理はない。

用田鳥居前遺跡の「縄文草創期」第２石器集中地点（以下では「用田鳥居前」と表記する）は、総出土点数が 173 点と小規模な石器群である。両面調整尖頭器を主体にわずかに削器、掻器、細石刃を伴う（図 4.2.1）。両面調整石器の大半は欠損品で、当該期に多い

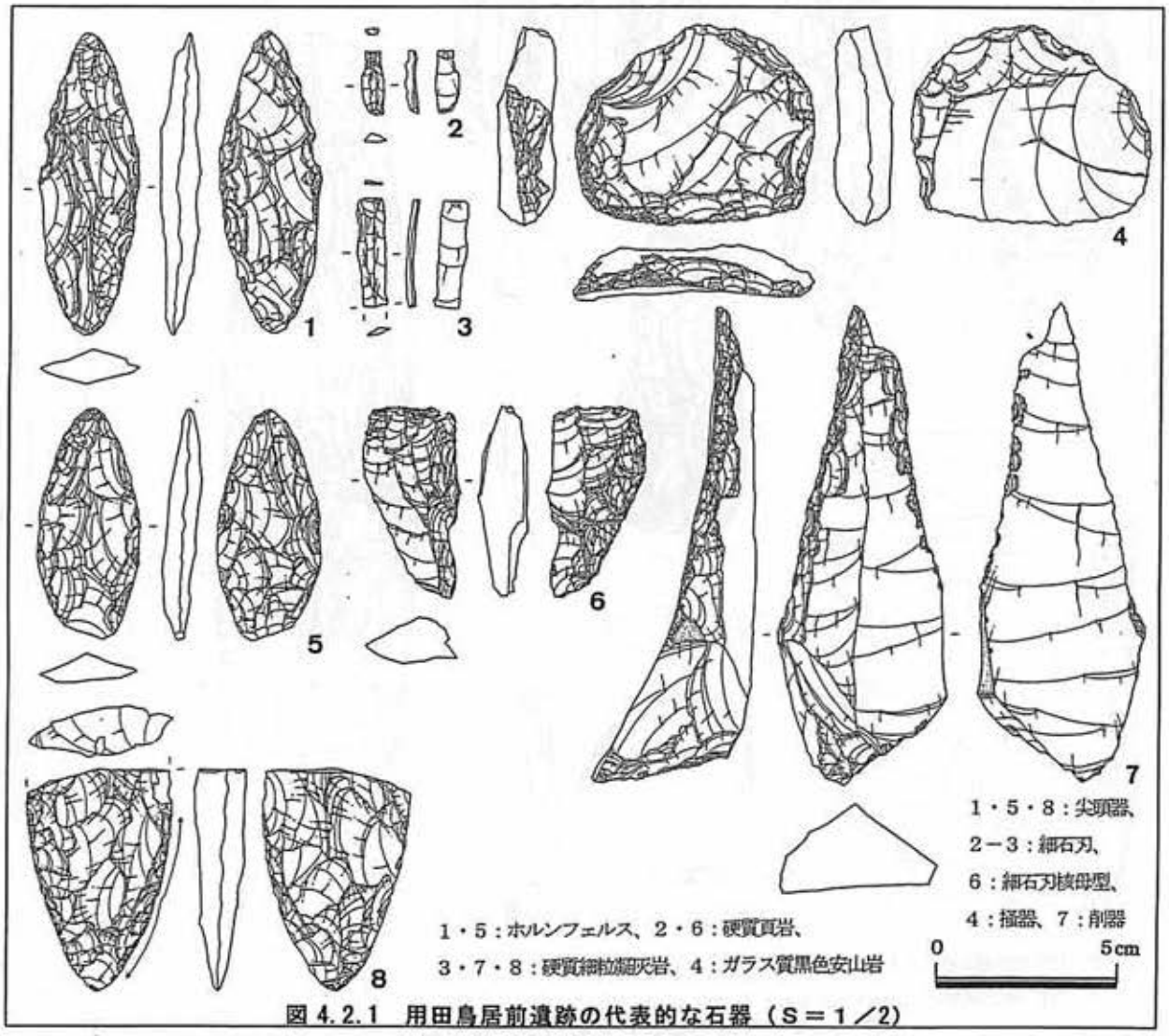


図 4.2.1　用田鳥居前遺跡の代表的な石器（Ｓ＝１／2）

大形の局部磨製石斧（いわゆる神子柴型石斧）や土器は出土していない。調査区中央に撹乱があり、これで失われている石器もいくらかは想定しなければならないが、全体としてのまとまりは十分に把握可能である。

吉岡遺跡群Ａ区「草創期１」（以下では「吉岡Ａ区」と表記する）は、総出土点数が862点の中規模な遺跡である。報告書に「当該期の石器群として列島内でも稀な石斧製作跡」と記載されているように（砂田ほか 1998 p 459）、石斧を中心とする両面調整石器リダクションが行われた遺跡である。多数の石斧関連資料（様々な大きさの局部磨製石斧、磨かれる前の打製石斧の状態にあるもの、それらの欠損品、刃部のみの欠片など）を中心として、両面調整尖頭器や削器が加わる。土器は出土していない（**図 4.2.2**）。石器の出土状況の平面分布をみると、水流の影響で石器群の全体が二次的に移動している。その過程で本来は存在していた微細な剥片類の相当数が失われた可能性があるものの、ある程度以上の

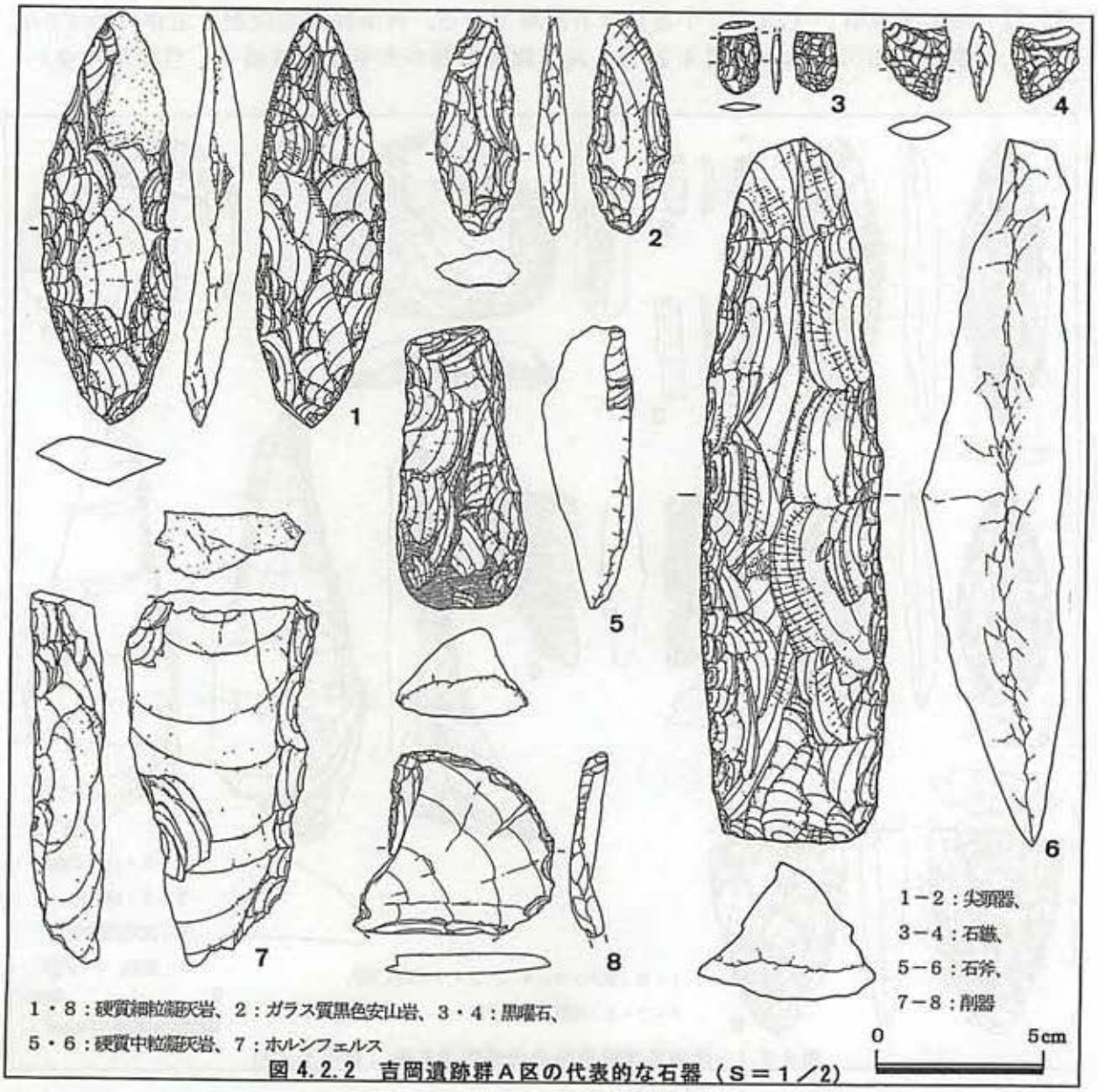


図 4.2.2　吉岡遺跡群Ａ区の代表的な石器（Ｓ＝１／2）

大きさの石器については全体の傾向を把握できる資料体であると判断した。

このような器種組成の違いは、示準石器的な観点からは編年的な時期差として説明することもできるかもしれない。しかし出土層位や尖頭器の特徴が共通すること、**寺尾遺跡**（神奈川県綾瀬市、白石 1980）や**月見野遺跡群上野遺跡第１遺跡**（前掲）、**長堀北遺跡**（神奈川県大和市、小池ほか 1991）など、近接する相模野台地内での第Ⅲ期の類例遺跡のあり方を考慮すると、石斧・細石刃・土器の現れ方は遺跡毎の変異が大きいことから、これらの有無自体の過大評価には問題があると思われる。むしろ石材利用の点で、尖頭器などを中心とする両面調整石器リダクションを基底としている共通性に注意する必要があると考える。そこで本章では２つの遺跡（占拠・滞在地点）は編年的な意味では同時に形成されたとの前提にたち、同一時期内での遺跡間の変異を把握するとの目的で議論を進める。

石材は各種の凝灰岩類やホルンフェルスが相模川で、チャートや頁岩は多摩川流域で採取でき、これらは遺跡近傍で獲得可能な石材として理解できる。一方でガラス質黒色安山岩（箱根または北関東）、黒曜石（箱根・信州・神津島）、黒色頁岩（北関東西部）、珪質頁岩（北関東の東部から福島県南部）、硬質頁岩（山形県南部）は、数 10～数 100ｋｍ以上離れた地域の産物である可能性が高い。

（２）器種組成と石材組成

まず器種組成と石材組成の遺跡間での変異を検討する。器種分類には、石材運用を把握する目的で以下の上位分類群を併せて設定した（註１）。**両面調整石器**：各種の尖頭器、各種の石斧、両面調整石器、削片系の細石刃核、およびこれらの未成品の総称で、素材の両面が平坦な調整剥離で覆われているもの。両面調整石器リダクションの諸過程を示す資料群である。小形のものは最初から剥片素材で石核を兼ねない可能性もあるが、大きさで石核機能の有無を識別する基準の設定は困難なので含めてあつかう。**礫核**：礫器と石核の総称。道具としての礫器か、剥片供給用の石核なのかは判断が困難なので、両者を含めて塊状の石に連続的な剥離を加えているものをまとめて扱う。石材運用を検討する上では、石核リダクションが併用されていた可能性を示す点に意味があり、それ自体が刃物なのか石核なのかの区別はさしあたり重要ではない。非削片系の細石刃核もここに含め、礫石器でも磨り石・叩石・台石など剥離によるリダクションではない石器は検討対象から除外した。**剥片器種**：削器、掻器、尖頭器、二次加工ある剥片などと分類されているものの総称で、主要剥離面の生成以後の二次加工が面的に展開せずに周辺にとどまり、素材が剥片であることが明らかなもの。素材とされた剥片は、両面調整石器リダクションからも石核リダクションからも生じ得るが、厳密な分離は困難である。**剥片**：通常の定義による剥片に加えて、砕片や石刃、細石刃などもふくめた。

表 4.2.1 は両遺跡の石材別の器種組成と、重量による石材組成である。器種組成は、両面調整石器のうち尖頭器が卓越すること、細石刃関連資料をわずかに含むこと、剥片が全体の約９割を占める点で共通する。しかし吉岡Ａ区では石斧、削器、石鏃、礫核、叩石・磨石も組成に加わり、用田鳥居前よりも多様な器種から構成される。削器とした中には尖頭器など両面調整石器のリダクション初期のものを含む可能性があり、叩石や礫核が伴うことも勘案すると、出土点数の規模の違いーそこで行われた石器リダクション（≒石器製作）の集約度の違いーを表わしていると考えられる。

表 4.2.1 の下段には石材組成をグラフで視覚的に表現した。吉岡Ａ区は 14,985.4g、用

田鳥居前は 625.3g と全体の重量に大きな開きがあり、重量では吉岡Ａ区は用田鳥居前の約 23 倍の規模である。しかし石材構成では共通する点も多い。主要な３～４種類の石材が全体の過半数をしめ、少数派の石材はごく微量となること、この主要石材は各種の凝灰岩類とホルンフェルスなど遺跡付近で獲得できる石材であり、微量となるのは黒曜石や硬質頁岩、黒色頁岩といった産地が離れている石材であることなどが共通点である。近場で入手できる石材を中心として、尖頭器を中心とする両面調整石器のリダクションを行っていることがわかる。用田鳥居前遺跡の礫核は小形の細石刃核であり、吉岡Ａ区のような大形品ではない。したがって用田鳥居前遺跡では、素材剥片の供給に石核リダクションは行われていない。中規模遺跡・小規模遺跡ともに両面調整石器リダクションを石材運用の中心にしており、石核リダクションの併用は、むしろ限られた機会であった可能性を想定できる。

次に器種ごとの石材構成を見よう。**図 4.2.3** は両遺跡の主要３石材（重量比の上位３位まで）の、器種の上位分類群ごとの重量構成である。吉岡Ａ区では中粒凝灰岩、硬質細粒

表 4.2.1　吉岡Ａ区と用田鳥居前の組成

吉岡A区　石材別器種組成(点数)

	両面調整石器				剥片器種			剥片	石斧刃部の欠片	礫核	原石	叩石・磨石	合計
石材	尖頭器	石斧	細石刃核	石鏃	削器	掻器	二次加工剥片						
中粒凝灰岩		3			3			366		3	1	3	379
硬質細粒凝灰岩	2	8			6			216	2	1			235
ホルンフェルス	9	3			4		5	100			1		122
ガラス質黒色安山岩	13		2		4		1	36					56
硬質中粒凝灰岩	1	2			1			43					47
黒曜石	1			2				6					9
チャート		1			2	1							4
頁岩					1			1					2
安山岩								1					1
結晶片岩								1					1
合計	26	17	2	2	21	1	6	770	2	4	2	3	856

吉岡A区　石材組成(重量)

石材	重量（g）
中粒凝灰岩	5242.1
硬質細粒凝灰岩	4122.7
ホルンフェルス	3306.7
硬質中粒凝灰岩	1041.0
ガラス質黒色安山岩	926.4
安山岩	186.9
チャート	87.8
結晶片岩	29.2
頁岩	23.2
黒曜石	19.4
合計	14985.4

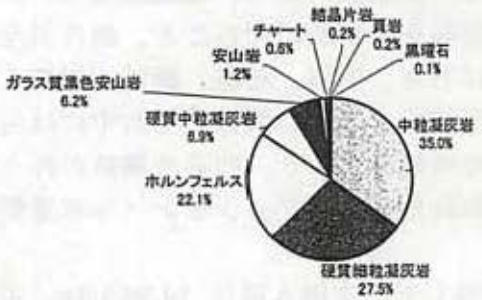
用田鳥居前　石材別器種組成(点数)

	両面調整石器				剥片器種			剥片	細石刃	礫核	原石	叩石・磨石	合計
石材	尖頭器	石斧	細石刃核	石鏃	削器	掻器	二次加工剥片						
硬質細粒凝灰岩	1				1			11	1				14
ガラス質黒色安山岩	1					1		35					37
ホルンフェルス	4							45					49
軟質細粒凝灰岩								29					29
珪質頁岩								14					14
硬質頁岩			1					6	1	1			9
黒色頁岩	2							4	1				7
頁岩								2					2
黒曜石								2					2
合計	8		1		1	1		148	3	1			163

用田鳥居前　石材組成(重量)

石材	重量（g）
硬質細粒凝灰岩	230.2
ガラス質黒色安山岩	138.5
ホルンフェルス	87.4
軟質細粒凝灰岩	57.6
珪質頁岩	46.8
硬質頁岩	37.0
黒色頁岩	26.7
頁岩	1.0
黒曜石	0.1
合計	625.3

吉岡A区　石材組成(重量:n=14,985.4g)



用田鳥居前　石材組成(重量:n=625.3g)

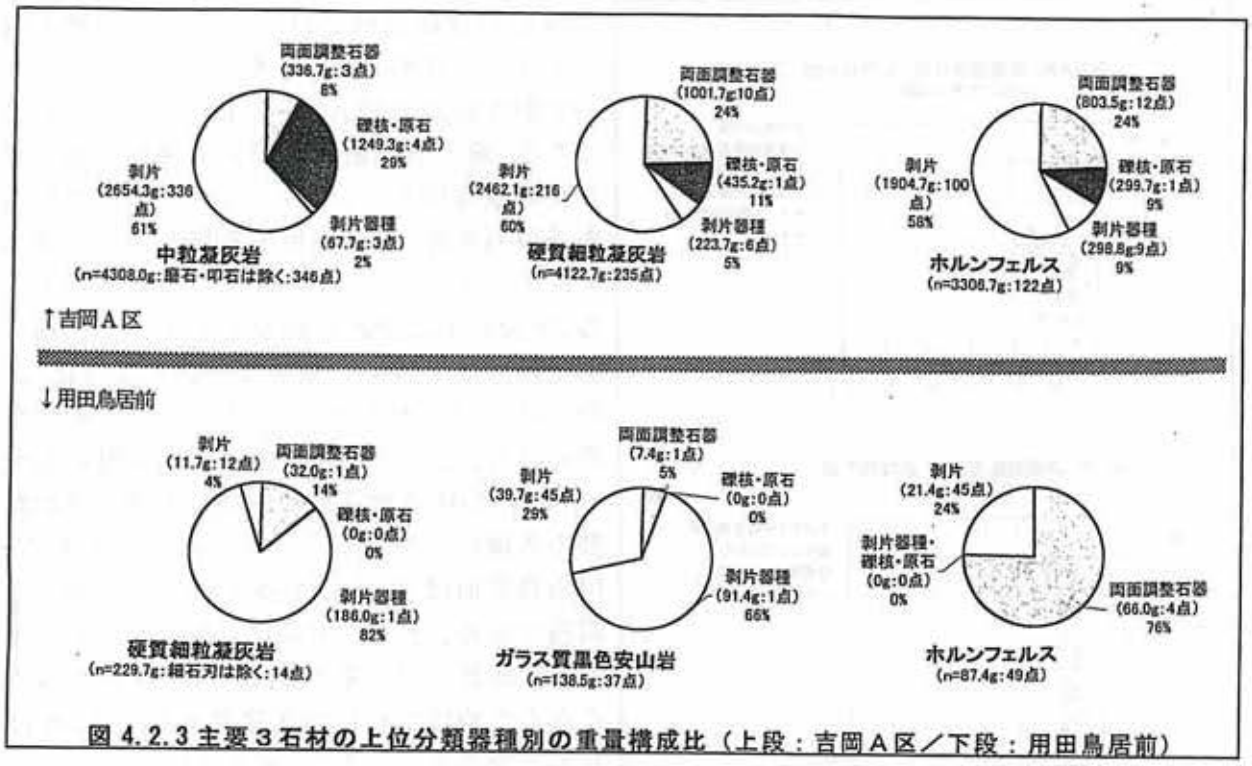


図 4.2.3 主要３石材の上位分類器種別の重量構成比（上段：吉岡Ａ区／下段：用田鳥居前）

凝灰岩、ホルンフェルスの３種で、用田鳥居前では硬質細粒凝灰岩、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルスの３種である。

吉岡 A 区では３石材とも、剥片が 60%前後と重量の過半数を占め、変異するのは両面調整石器と礫核・原石、剥片器種である点で共通する。ただし礫核・原石はすべて、後に触れるように遺跡内では剥片剥離をほとんど行なっていない母岩である。重量で６割を占める剥片が存在することは、活発な両面調整石器リダクションがここで行なわれた結果であると解釈できる（ただし後述するように、持ち出された礫核に由来する剥片が含まれている可能性は残る）。

これに対し用田鳥居前は状況が大きく異なっている。剥片は３石材ともむしろ少数派であり、剥片器種または両面調整石器が全体の７割から８割の重量を占める。用田鳥居前の中では共通するが、吉岡 A 区とは対極のあり方である。硬質細粒凝灰岩は１点の削器、ガラス質黒色安山岩は１点の掻器が、ともに全出土石材の重量の大半を占める。これは後述するように、１点の剥片器種が搬入され、その刃部形成・刃部再生リダクションで生じた剥片が、出土している剥片の大半を占めることを示している。両面調整石器も同様で、ホルンフェルスでは欠損品を含む４点の両面調整尖頭器の重量が、全体の 76%を占める。これはリダクションがかなり進行した両面調整尖頭器が搬入され、遺跡内ではごくわずかなリダクションのみが行なわれたと解釈できる。ホルンフェルスの剥片では、平均重量はわずかに 0.5g である（全 45 点）。なお礫核は主要３石材には存在しない。

これらの違いから解釈できることは、吉岡 A 区では両面調整石器のリダクションが多数の剥片を生じるほどに活発に行なわれたのに対し、用田鳥居前では、両面調整石器のリダクションはほとんど行なわれずに、搬入された剥片器種の刃部再生リダクションがわずかに行われたにすぎないという、石材消費活動内容の大きな差である。

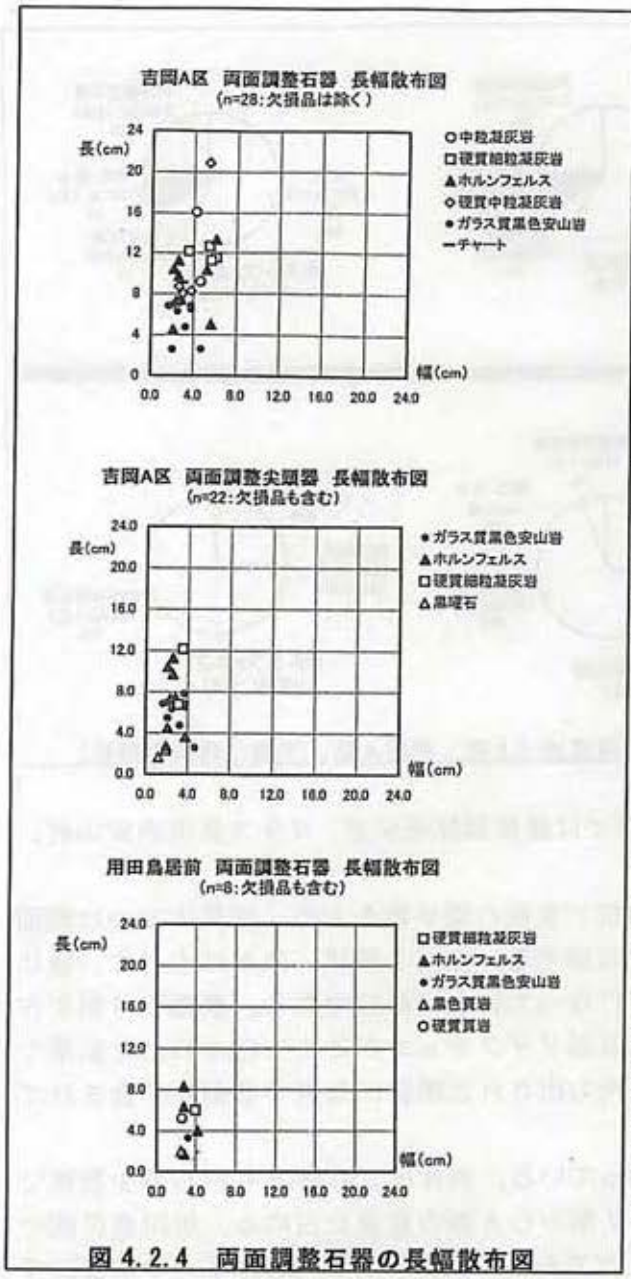


図 4.2.4　両面調整石器の長幅散布図

次に両遺跡に残されている両面調整石器の大きさを比較する。**図 4.2.4** は上中段の二つの散布図が吉岡Ａ区、最下段が用田鳥居前である。最上段と最下段が両面調整石器全体の長幅散布図で、吉岡Ａ区では大きな欠損のある資料を除いたが、用田鳥居前では欠損品を除くとわずか３点になってしまうことから、半分以上に折れた例などもすべて含めた。最上段と最下段を一見して分かるように、吉岡Ａ区では点数が多いだけでなく大形品を多く含む。これは吉岡Ａ区の両面調整石器が石斧（いわゆる神子柴型石斧や打製・局部磨製の各種）を多く含んでいるためでもある。用田鳥居前は 8 点中７点までが両面調整尖頭器である。そこで中段に、吉岡Ａ区の両面調整尖頭器だけを取り出した。母集団が少なくなるためにこれには欠損品も加えた。やはり石斧をのぞくと長さ・幅ともに小さなものが多くなる。しかしこの両面調整尖頭器だけの比較でみても、用田鳥居前は吉岡Ａ区よりも全体として小形品にまとまる傾向には変わらない。また両遺跡を通じて言えることだが、ホルンフェルスや硬質細粒凝灰岩は相対的に大形のものを含むが、ガラス質黒色安山岩は小形品が多い。これは石材獲得地からの距離が離れていることを示している可能性がある（第Ⅶ章では対象とする時期と地域は異なるが、この現象を詳しく検討する）。

まとめるなら、吉岡Ａ区では剥片が多量に残るような活発なリダクションがおこなわれていた。ここで遺跡に残された両面調整石器は、全体の中の重量比としては多数の剥片に押されて少ないとはいえ、一点としてみた場合には大形品が多い。これに対して用田鳥居前では、遺跡内でおこなわれたリダクションは相対的に不活発であり、遺跡に残された両面調整石器は小形品や欠損品が多い。このような点において、両遺跡の内容は対照的であるといえる。

（３）母岩構成と石材消費の変異

次に両遺跡で公表されている母岩分類をもとに、遺跡内・遺跡間での石材の運用を検討する。母岩の構成を比較する上での分類は、安蒜（1992）を参考に下記の分類を設定した。**類型Ａ**（記号●）：複数の石器から構成され両面調整石器または礫核のある母岩。**類型Ｂ**（記号△）：複数の石器から構成され、両面調整石器も礫核もないが剥片器種がある母岩。

類型C（記号×）：複数の石器から構成されるが、両面調整石器、礫核、剥片器種のいずれもなく剥片のみからなる母岩。**単独母岩**(表記「単独」)：母岩を共有する複数の石器のない、1点のみからなる母岩。

類型Aは両面調整石器ないし礫核の本体が占拠地に持ち込まれ、そこでリダクションが行われた上で停止し、芯の両面調整石器や礫核がその場に残されたものである。類型Cは両面調整石器または礫核のリダクションが、遺跡内で行われた上で芯の本体が他遺跡へ持ち出された母岩である。次回以降の他所の占拠地で、さらなるリダクションが継続された可能性がある。類型Bは、削器や掻器など剥片器種の、素材の生成時を共有する一群の剥片から構成されている場合には類型Cと同じ状況を想定できる。しかし先に見たように、剥片器種が単独で持ち込まれて、その刃部再生リダクションで生じた一連の剥片のみから構成される場合もある。この場合は、石材運用という点ではむしろ類型Aに近い状況として理解しなければならない。単独母岩は単品の状態で占拠地に持ち込まれた石器で、剥片、剥片器種、両面調整石器、礫核など様々な状態の例があるが、持ち込まれたにもかかわらずリダクションが一切行われずに残置された石器である。

表4.2.2は吉岡A区と用田鳥居前の母岩構成である（註2）。まず共通点から指摘する。

①母岩消費の停止を示す類型Aでは、両遺跡とも両面調整石器のほうが礫核よりも多い。礫核の同一母岩に剥片をともなう例は、吉岡A区の中粒凝灰母岩No.18と用田鳥居前の硬質頁岩HSh1のみである。前者では剥片がわずか2点であり、石核リダクションは遺跡内でほとんど行なわれていない（生じた剥片を搬出した可能性は残る）。後者の用田鳥居前では礫核に5点の剥片類がともなうが、先述のように全て細石刃核・細石刃関連の資料であるため、剥片器種の素材供給としての石核リダクションとは性質が異なる。両遺跡で消費が停止した母岩の中には、石核リダクションで素材剥片の供給をおこなった母岩はほとんどないと言える。礫核を出土している吉岡A区も含めて、両遺跡ともに、両面調整石器リダクションが主体を占めていた可能性を示唆する。ただし類型Cの剥片の中には、持ち出された礫核の石核リダクションに由来するものが含まれる可能性がある。これについては後に剥片の属性分析から考えてみたい。

②両遺跡ともに類型Cの母岩が多い。先述のように類型Cは、遺跡外に搬出された両面調整石器や礫核の本体の存在を示す。単独母岩を除き最低でも吉岡A区で48点、用田鳥居前では12点の両面調整石器または礫核が、遺跡外に持ち出されていることになる（類型Cの件数合計）。類型Bもあわせると吉岡A区では52点、用田鳥居前では14点となる。両面調整石器に限ると出土している点数は吉岡A区で47点（礫核を含めると53点）、用田鳥居前では8点（礫核を含めると9点）であるため、これらの数とほぼ同じか、むしろ上回る点数の持ち出し品を想定できる。占拠地に残した石器と持ち出した石器の合計を、その時点で集団が保有していた石器の総量として仮定すると、一回の占拠（滞在）地からは、持ち出す石器の方が点数としては多いようである（重量は推測が不可能）。わずかに2遺跡の分析から一般論に敷衍することは危険だが、持ち出し品の数が残置品に匹敵するかむしろ多いという現象は、遺跡群の形成構造を理解する上で重要な論点となる可能性がある。今後、他時期や他地域も含めて検討を深めたい。

③単独母岩の両面調整石器や礫核がある点も両遺跡に共通する。両面調整石器では、吉岡A区の中粒凝灰岩・ホルンフェルス・黒曜石に、用田鳥居前のホルンフェルス・硬質頁

表 4.2.2　吉岡Ａ区と用田鳥居前の母岩構成

吉岡遺跡群A区

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
中粒凝灰岩	1	●	2	191.4			2	32.0	156	1104.4
	18	●			1	90.1			2	30.4
	2	×							8	68.7
	3	×							5	8.1
	4	×							21	164.9
	5	×							3	6.4
	6	×							37	150.8
	7	×							7	43.6
	8	×							75	483.8
	9	×							5	18.3
	10	×							13	29.8
	11	×							4	47.0
	12	×							5	81.1
	13	×							4	6.8
	14	×							2	130.0
	15	×							6	14.0
	16	×							2	46.5
	17	×							3	28.1
	単独	—	1	145.3	2	1159.2	1	35.7	4	171.6
	縦の合計		3	336.7	3	1249.3	3	67.7	362	2654.3

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
ホルンフェルス	53	●	1	31.5			2	69.5	1	37.9
	54	●	1	25.7					5	104.3
	59	●	1	83.8					13	31.0
	66	●	1	28.7			1	22.3	1	59.2
	73	●	6	497.0			1	24.6	4	780.6
	58	△					1	56.5	4	121.7
	62	△					1	39.8	3	21.8
	55	×							5	109.5
	56	×							4	31.5
	57	×							16	89.0
	61	×							6	40.6
	63	×							2	5.2
	64	×							2	10.8
	65	×							6	35.1
	67	×							3	42.7
	68	×							4	29.9
	単独	—	1	136.8	1	299.7	3	86.1	20	353.9
	縦の合計		11	803.5	1	299.7	9	298.8	99	1904.7

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
ガラス質黒色安山岩	45	●	4	73.3					24	163.8
	46	●	2	46.6					2	31.1
	47	●	5	131.4					4	13.7
	48	●	3	132.8			1	43.6		
	49	●	1	129.9			1	47.4		
	51	●	1	29.8			2	41.4	2	12.8
	50	×							4	23.9
	52	×							2	4.9
	単独	—								
	縦の合計		16	543.8			4	132.4	38	250.2

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
硬質細粒凝灰岩	20	●	1	153.4					4	26.5
	70	●	5	557.5			2	65.8	3	42.3
	71	●	4	288.8					3	38.2
	21	△					3	65.7	112	1236.9
	30	△					1	44.7	3	42.9
	32	△					1	27.5	11	55.7
	22	×							5	17.4
	23	×							4	68.8
	24	×							2	15.7
	25	×							4	74.5
	26	×							3	53.0
	27	×							5	16.5
	28	×							4	62.4
	29	×							6	94.2
	31	×							6	50.3
	33	×							2	15.8
	34	×							3	27.0
	35	×							2	10.9
	36	×							2	1.1
	単独	—			1	435.2			31	512.0
	縦の合計		10	1001.7	1	435.2	7	223.7	215	2462.1

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
硬質中粒凝灰岩	36	●	1	127.4			1	12.2	5	46.7
	71	●	2	509.5						
	37	×							5	47.0
	38	×							2	2.1
	39	×							2	4.5
	40	×							2	7.8
	41	×							3	7.2
	42	×							5	20.8
	43	×							2	171.7
	44	×							13	35.7
	単独	—							4	48.6
	縦の合計		3	636.9			1	12.2	43	391.9

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
黒曜石	75	●	3	3.5					6	9.9
頁岩	76	△					1	15.8	1	7.4
チャート	74	●	1	51.2			1	4.6		
	単独	—					2	32.0		
結晶片岩	単独	—							1	29.2
安山岩	単独	—							1	186.9
	縦の合計		4	60.7			4	52.4	9	233.4

●……両面調整石器または礫核を伴う母岩
△……両面調整石器も礫核も伴わないが剥片器種を伴う母岩
×……剥片のみからなる母岩

用田鳥居前遺跡

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
ホルンフェルス	Ho1	●	1	15.0					17	7.4
	Ho2	●	1	21.4					2	0.6
	Ho3	●	1	4.0					2	2.9
	Ho5	×							4	0.5
	Ho6	×							3	1.9
	Ho8	×							2	0.2
	Ho14	×							3	0.6
	Ho15	×							3	0.8
	Ho16	×							3	1.3
	単独	—	1	25.6					5	5.2
	縦の合計		4	66.0					44	21.4

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
硬質細粒凝灰岩	HFT1	●	1	32.0					3	3.5
	HFT2	△					1	186.0	1	1.2
	HFT3	×							2	0.5
	HFT4	×							2	3.6
	HFT5	×							2	0.8
	単独	—							3	2.6
	縦の合計		1	32.0			1	186.0	13	12.2

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
硬質頁岩	HSh1	●			1	7.3			5	2.7
	単独	—	1	14.6					2	12.4
黒色頁岩	BSh2	●	1	22.4					3	0.8
	単独	—	1	3.0					2	0.5
珪質頁岩	SSh1	×							13	45.9
	単独	—							2	0.5
頁岩	単独	—							2	1.6
	縦の合計		3	40.0	1	7.3			29	64.2

	母岩No	母岩類型	両面調整石器		礫核		剥片器種		剥片	
			点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
ガラス質黒色安山岩	GAn2	△					1	91.4	28	19.0
	GAn3	×							4	1.6
	単独	—	1	7.4					3	19.1
黒曜石	Ob1	×							2	0.1
	縦の合計		1	7.4			1	91.4	33	39.7

●……両面調整石器または礫核を伴う母岩
△……両面調整石器も礫核も伴わないが剥片器種を伴う母岩
×……剥片のみからなる母岩

岩・ガラス質黒色安山岩に確認できる。持ち込まれたにもかかわらずリダクションが全く行われず、その場に残置された石器である。用田鳥居前遺跡では両面調整石器が全部で8点（うち7点は尖頭器）しか出土していない中で、3点までが単独搬入・リダクションの未遂行・残置品である。この3点の単独搬入品はいずれも器体長軸中央を越える大きな欠失があり、尖頭器としての修復が不可能なまでに大きく横割れした石器を、わざわざ持ち込んでいることになる。石核や彫器など別の形での再利用を意図した可能性が高い。また単独母岩の礫核は、吉岡A区の中粒凝灰岩、硬質細粒凝灰岩、ホルンフェルスに確認できる。単体で持ち込まれながらも石核リダクションが行なわれていない例であり、利器としての利用も想定できる。

④単独母岩の剥片が一定の点数存在することも共通する。剥片の状態での持ち込みを示すが、遺跡付近の石材（凝灰岩類やホルンフェルス）にも、遠隔地の石材（用田鳥居前の硬質頁岩）にも確認できる。単独で搬入された剥片の平均的な大きさ（重量）は、吉岡A区では安山岩で186.9g（1点のみ）、中粒凝灰岩で42.9g（全4点）、ホルンフェルスで17.7g（全20点）、硬質細粒凝灰岩で16.5g（全31点）、硬質中粒凝灰岩で12.1g（全4点）などと、相対的に大形の剥片である。したがって剥片器種の素材の候補として、他の場所で剥離された剥片の中から選ばれて持ち込まれた可能性が高い。

一方の用田鳥居前では、硬質頁岩で6.2g（全2点）、ガラス質黒色安山岩で6.3g（全3点）、ホルンフェルスで1.0g（全5点）、硬質細粒凝灰岩で0.8g（全3点）、頁岩で0.5g（全2点）、黒色頁岩で0.2g（全2点）などと微細な剥片である。これらが剥片器種の素材として選択的に持ち込まれたとは考え難い。1枚だけの剥離をおこなって本体を持ち出した可能性や、同時に生成した剥片群のうち、その1点だけを残して他をすべて持ち出したといった可能性も想定できなくはないが、無理がある。母岩分類の妥当性に問題があるのかもしれない。

以上をまとめると、①消費が停止した母岩は両面調整石器リダクションが大半である、②持ち出された両面調整石器や礫核の本体の数は遺跡に残されたものとほぼ同じか、むしろより多い。③持ち込まれたにも関わらずリダクションを全く受けずに残置された両面調整石器・礫核・剥片が存在する。これらが両遺跡の共通点である。

次に異なる点を指摘する。①類型Bが用田鳥居前では相対的に少ない。用田鳥居前の類型Bは硬質細粒凝灰岩のHFT2と、ガラス質黒色安山岩のGAn2であるが、いずれも先述した「単品で搬入された剥片器種本体と、その刃部再生リダクションで生じた剥片群のみから構成される」ものである。剥片の平均重量は1g前後あるいは未満である。素材剥片と剥片器種の供伴という意味での類型Bは、用田鳥居前には存在しない。これに対して吉岡A区には、硬質細粒凝灰岩の母岩21、30、32やホルンフェルスの母岩58、62のような、平均重量が5g以上の剥片を複数伴う類型Bが存在する。特に硬質細粒凝灰岩の母岩21は3点の剥片器種（いずれも削器）と112点の剥片から構成され、剥片の平均重量は11gである。吉岡A区では多数の素材剥片の供給が行なわれて、剥片器種が素材剥片から製作されていたことを示している。これに対して用田鳥居前の剥片器種は搬入品のみであり、素材からの剥片器種の製作は一切行なわれていない。

先にみた全体での出土量（点数・重量）＝遺跡規模の格差、器種組成の相違、上位分類器種の重量構成＝おこなわれたリダクションの活発さの違い、両面調整石器の大きさの格

差といった両遺跡の相違点とは逆に、ここで検討した母岩の構成では共通点の方がむしろ多い。母岩構成上の変異は剥片器種を素材から製作する行為の有無に現れていたのみであり、石材の消費・運用の原則的な部分については、両遺跡は同じようなしくみを共有していたと考えられる。

（4）類型C剥片の属性

類型Cの母岩を構成する剥片の特徴を検討することで、持ち出された両面調整石器や礫核について、これらが搬入され遺跡内にあった期間のリダクションの進行度を、ある程度は推測することができる。以下ではこの観点から、剥片の属性を検討・比較してみたい。しかし類型Cの母岩の多くは出土点数が10点未満であり、全ての母岩を個別に定量的検討の対象にすることはできない。そこで類型Cの全体と、比較対象として類型Aの全体に限定して、その傾向をみてみよう。

図4.2.5は母岩類型CとAの剥片の、長幅比を比較した。上段が吉岡A区、下段が用田鳥居前である。吉岡A区では大形の剥片が残されているのに対し、用田鳥居前では4cm以下の剥片しか残されていないとの遺跡間の大きさの相違が目につくが、類型Cと類型Aとの差は、両遺跡ともに顕著ではない。類型C・Aともに長幅比が1：1を中心にまとま

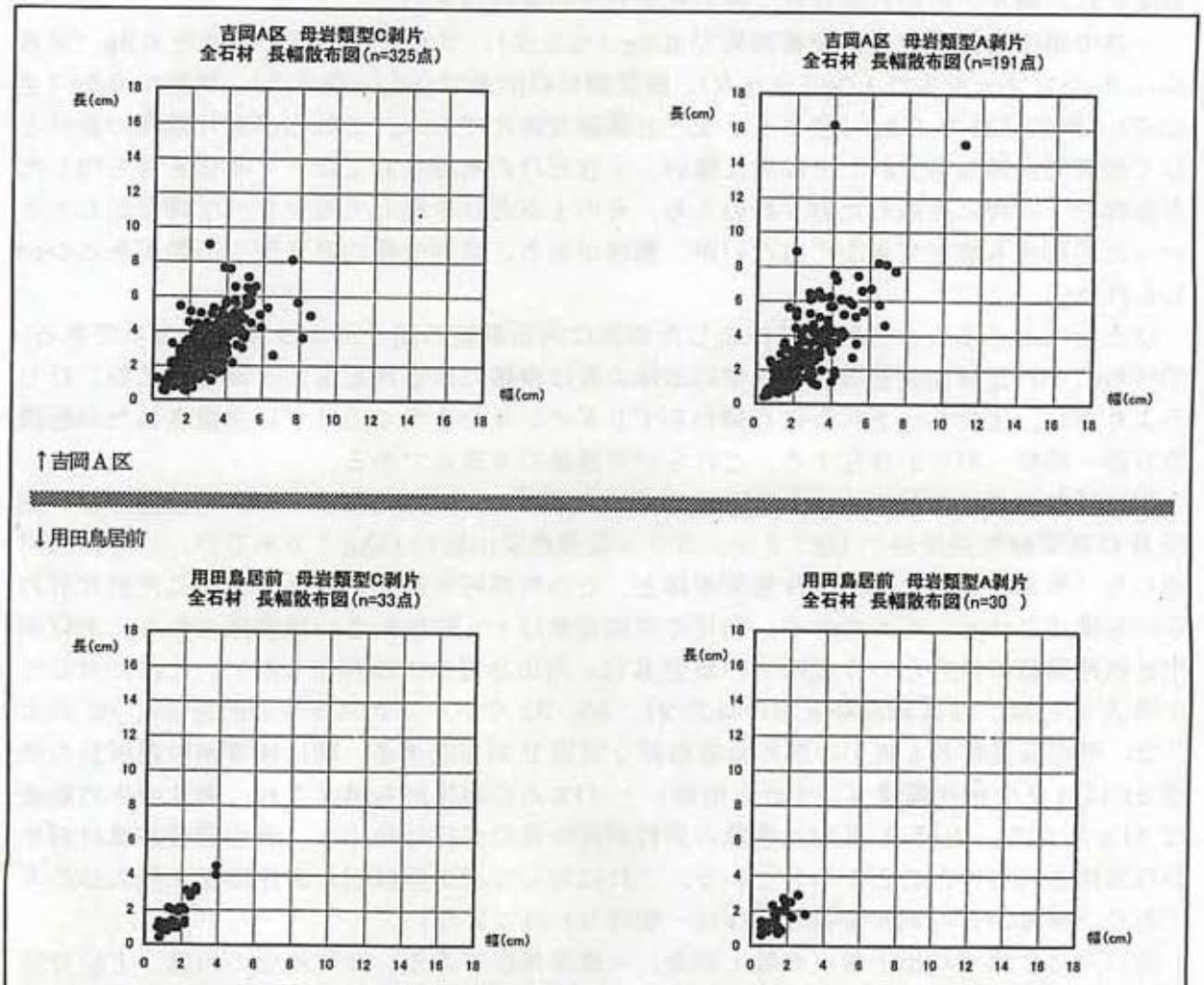


図4.2.5 母岩類型C・類型A剥片の長幅散布図（上段：吉岡A区／下段：用田鳥居前）

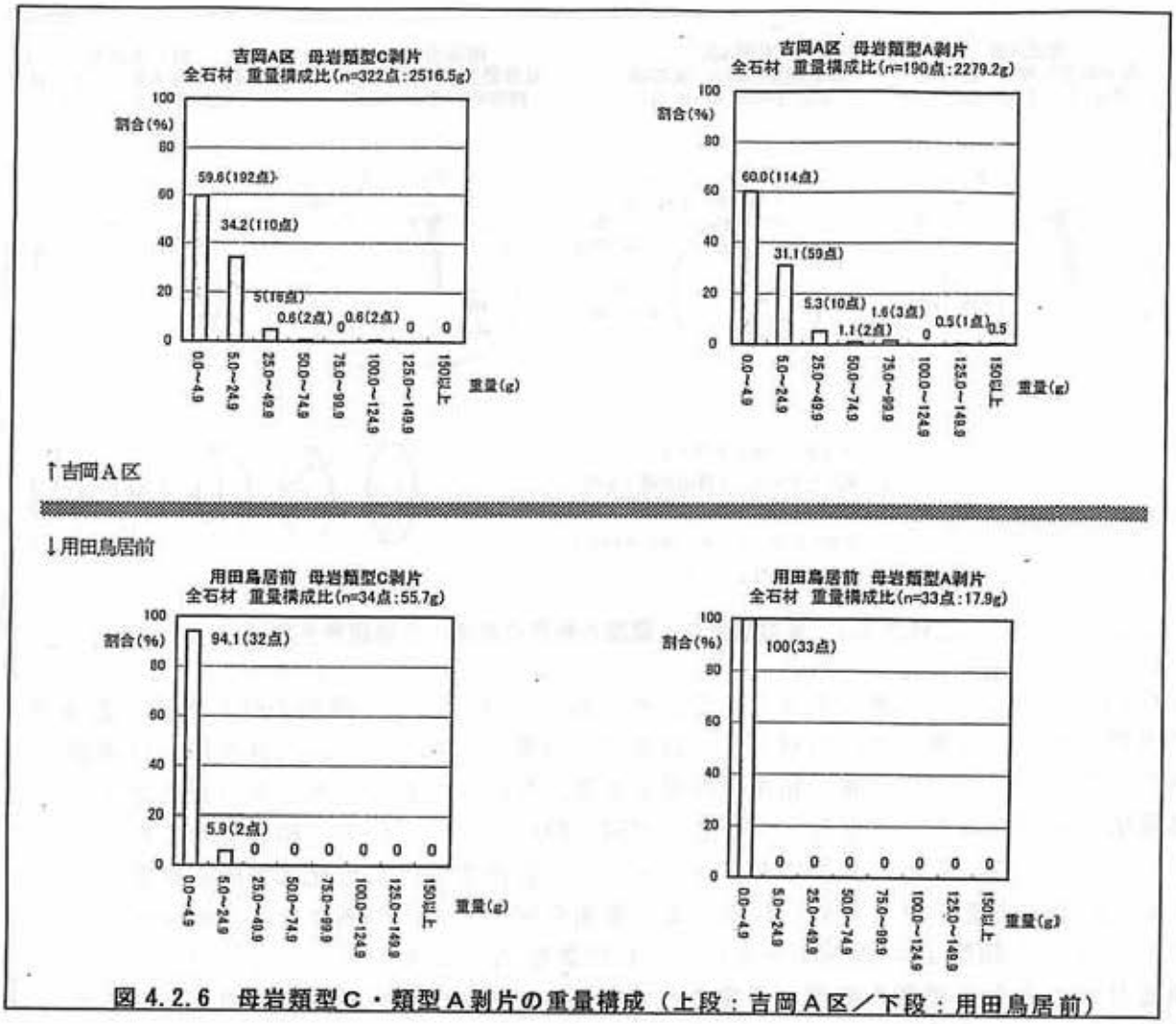


図 4.2.6　母岩類型C・類型A剥片の重量構成（上段：吉岡A区／下段：用田鳥居前）

っている。吉岡A区では類型Aに大形の剥片が、用田鳥居前では逆に類型Cに相対的に大きな剥片があるものの、有意差とは認め難い。

図 4.2.6 では母岩類型のCとAにおいて、剥片の重量構成比を比較した。**図 4.2.5** の傾向がそのまま重量にもあてはまり、各遺跡内での類型CとAの差よりも、遺跡間の量的な差のほうが顕著である。特に用田鳥居前の類型Aは100%が5g未満であり、25g以上の剥片が一定量存在する吉岡A区と対照的である。これは用田鳥居前の類型A剥片は、両面調整石器リダクションが完全に終了し切っていることを示す。用田鳥居前では、母岩自体の消費が他遺跡に持ち越されているはずの類型Cでも、大形の剥片は存在せず、遺跡内で行なわれたリダクションは微々たるものといえる。これに対して吉岡A区では、類型AとCともに、5g以上25g未満の剥片も30%前後存在する（ただし吉岡A区は流水により微細な剥片は失われた可能性があり、実際の5g未満の点数も本来は多かったはずである）。

図 4.2.7 は背面に残る礫皮面（礫面）の比較である。一般に礫面が広く残る剥片ほど、原石に近いリダクションの初期に生じたもので、逆に礫面をまったく残さない剥片は、一定程度にリダクションが進行した後に生じたものである。リダクションが片面のみで進行する場合など、厳密にはリダクションの後半で礫面の広く残る剥片が生じることもあるが、

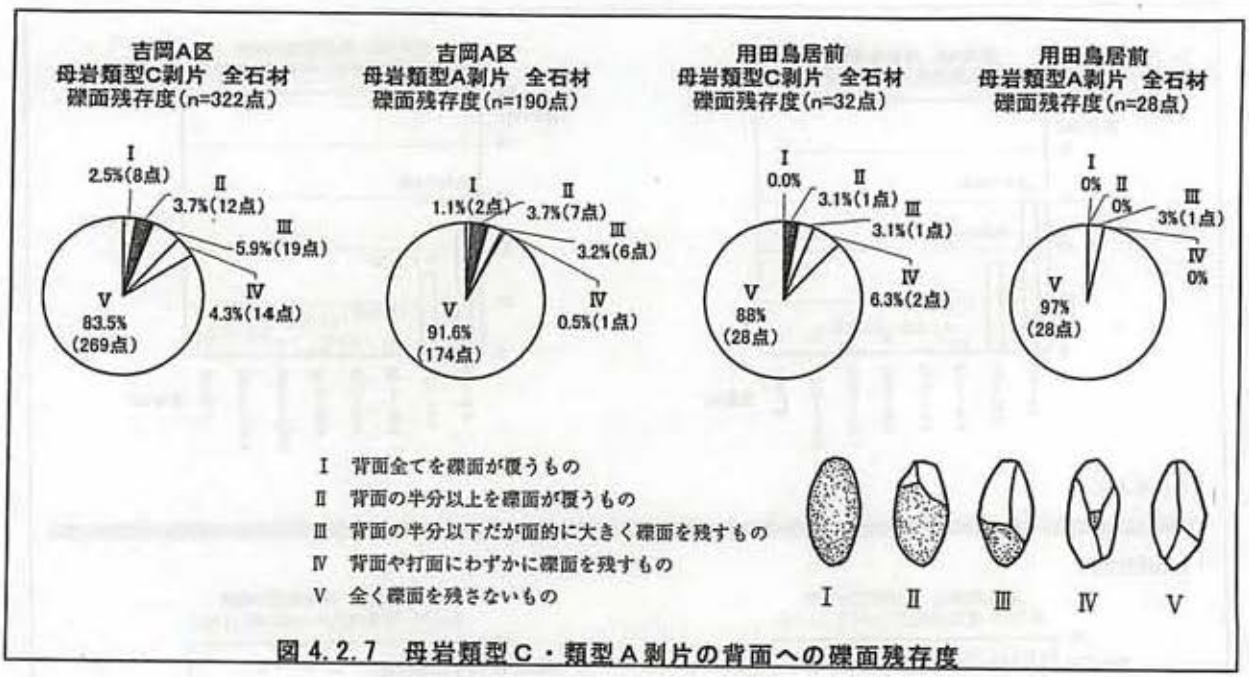


図 4.2.7 母岩類型C・類型A剥片の背面への礫面残存度

全般的な傾向として有意な基準であると考える。この前提から、礫面の残り具合を図 4.2.7 の凡例のように分類した。石材ごと・母岩ごとの集計も試みたが、有意な傾向は確認できなかったため、全石材の集計結果のみ提示する。先にみた剥片の大きさ（長幅散布図）や重量構成とは異なり、両遺跡ともほとんど同じ傾向を示している。礫面を全く残さないVが大半を占めることは、すでにリダクションが一定程度進行した状態で両面調整石器が持ち込まれたことを示すと考えられる。また礫面を残すⅠ～Ⅳの割合では、両遺跡ともに、類型Cよりも類型Aの礫面が少ない。これは類型Aが消費を終了した母岩である一方、類型Cはさらなる消費の継続が予定されていた、リダクション過程の只中にある状態の両面調整石器または礫核から生じたものであることを示す。

（5）遺跡群形成構造の解釈

遺跡規模と組成の異なる用田鳥居前と吉岡A区では、出土量の相違は、主に両面調整石器と剥片の大きさと量（点数・重量）、剥片器種を製作した作業の有無から生じていた。より興味ぶかいのは母岩構成の共通点で、両遺跡ともに石核リダクションよりも両面調整石器リダクションが主体であること、搬出された両面調整石器は遺跡に残されたものと同数ないしより多いこと、単独搬入品は両面調整石器・礫核・剥片器種・剥片のすべての状態で一定量存在すること、また剥片に残る礫面の、類型CとAとの変化傾向にも共通点が認められた。これらは、遺跡規模や器種組成の見かけの違いを超えた、リダクション過程が痕跡化される際の原理の共通性を表わしていると考えることができる。

遊動生活の中で、石材をリダクション程度の異なる複数の両面調整石器として携帯し、特定の滞在地では活発にリダクションを進めて、生じる剥片から剥片器種も製作する。この過程で生じた剥片や剥片器種、便宜的に併用した礫核も、多数の両面調整石器とあわせて持ち出し、別の占拠地では両面調整石器のわずかなリダクションや、剥片器種の刃部調整のみのリダクションをおこなう。このような営為の反復によって、様々な規模と組成の遺跡群が形成されるのが、吉岡A区と用田鳥居前から導かれた遺跡群の形成過程である。

第３節　中規模遺跡の変異幅

（１）対象遺跡

一口に両面調整石器群の中規模遺跡といっても、その内容は同じではない。中規模遺跡間の変異幅を明らかにする目的で、ひきつづき個別遺跡を詳細に解析してみたい。ここでは南関東の相模野台地の**南原遺跡第Ⅱ文化層**（栗原ほか 2004）（**註３**）と、信濃川流域の**真人原遺跡Ａ地点**（小野編 2002）および**Ｃ地点**（小野編 1997）を対象とする。３遺跡ともに第Ⅰ期の小形尖頭器石器群であり、4000 点前後の出土点数をもつ中規模遺跡である点で共通するが、地域的に遠く離れており石材環境も大きく異なる。遺跡を残した人間集団も、日常的な生活を共有する規模のまとまりとしては、異なっていた可能性が高い。したがって先の用田鳥居前遺跡と吉岡遺跡群Ａ区とのような、先史時代の一集団の日常的な活動圏に含まれる各地点としての仮定や、遺跡間の直接の連鎖関係を想定することはできない。個別的な歴史的出来事の具体的な復元を意図するのではなく、中規模遺跡の変異幅をモデル化する上で対照的な事例として選択した。

南原遺跡第Ⅱ文化層（以下では「南原」と表記する）は、相模野台地の LⅰH 層中部を中心とする総出土点数が 4324 点の中規模遺跡である。大まかには６ヵ所の石器集中からなり、特に第１、３、４、５石器集中で多数の石器が出土している。器種組成は両面調整を主体とする小形の尖頭器を主体とし、１点の彫器、削器か尖頭器未成品かの識別が困難な例、わずかな二次加工剥片と叩石・台石の他は、すべて両面調整石器リダクションの過程で生じた剥片類である（**図 4.3.1**）。石材組成はガラス質黒色安山岩が 99%以上を占める。正式な本報告が未刊行な中で ^{14}C 年代測定結果のみ先行して公表されており（砂田

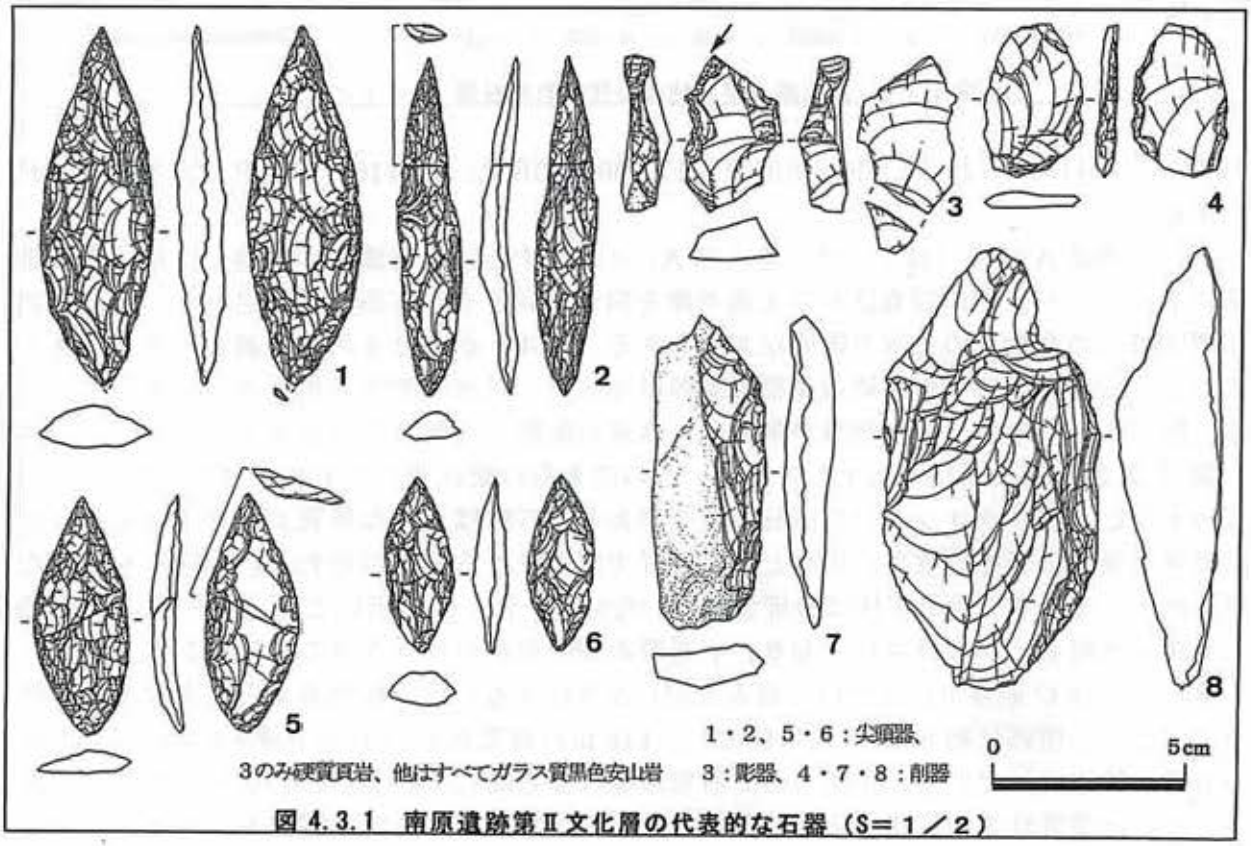


図 4.3.1　南原遺跡第Ⅱ文化層の代表的な石器（S＝１／２）

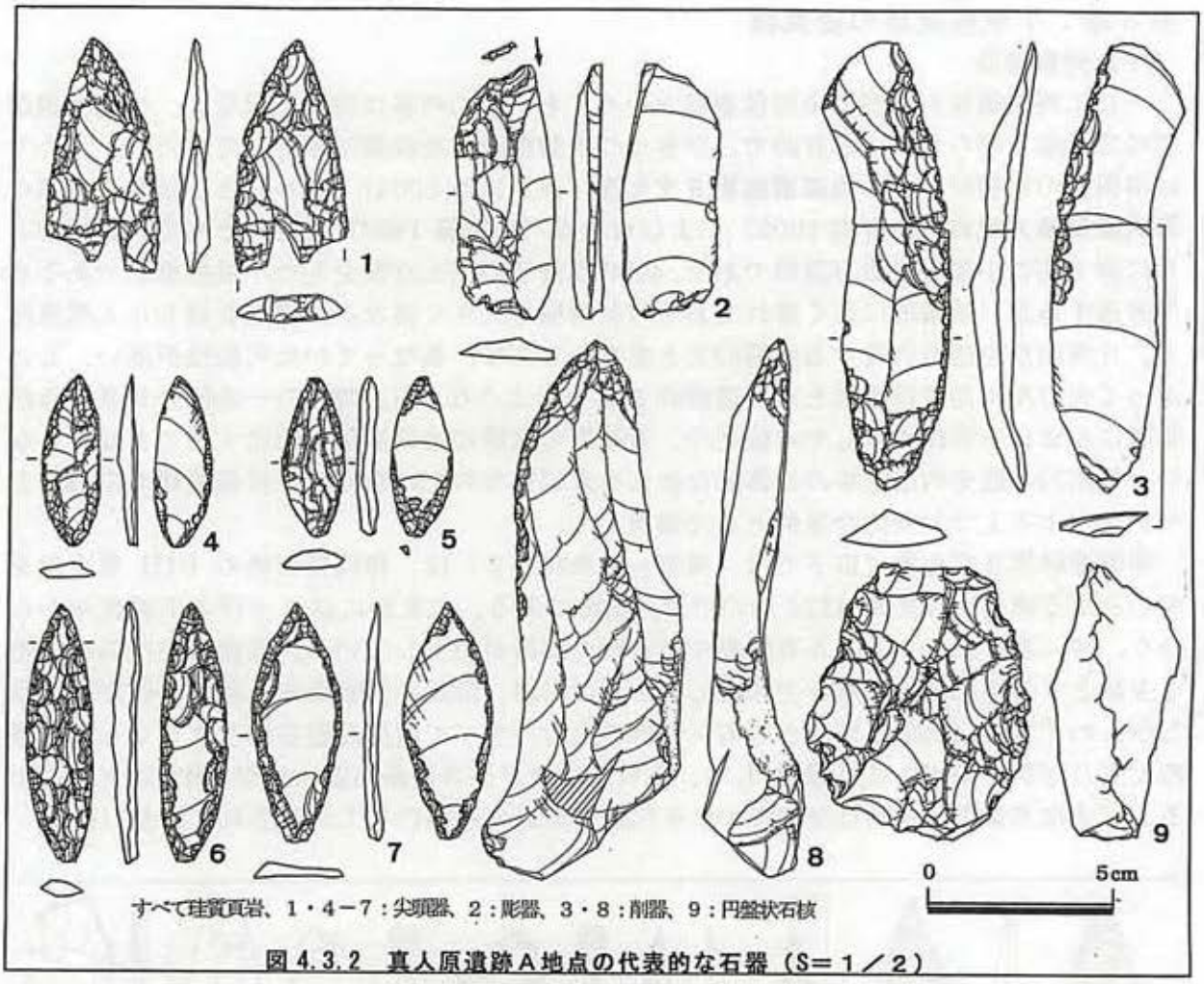


図 4.3.2　真人原遺跡A地点の代表的な石器（S＝1／2）

1999)、これによると 16,880±90B.P.、17,090±90B.P.、17,110±90B.P.である（いずれも未較正)。

真人原遺跡 A 地点（以下では「真人原 A」と表記する）は信濃川の発達した河成段丘地帯に所在し、312 ㎡の調査区から土器や礫を除き 3568 点の石器が検出されている。一部に縄文時代の遺物との分離が困難な部分もある（註４）が、２ヵ所の石器集中部を完掘している。石器組成は小形の周辺調整尖頭器が主体で、両面調整尖頭器の存在は断片的である。他に石刃を素材とした複数の削器や、３点の彫器、円盤状の石核などが出土している（図 4.3.2)。石刃石核は出土していないものの多数の縦長剥片や石刃の存在が特徴的で、石刃を生む石核リダクションの痕跡が濃厚である。石材は良質な珪質頁岩を主体とし、他に無斑晶質安山岩や珪質凝灰岩など遺跡付近で獲得できる石材が加わる。黒曜石も微量ながら出土している。数値年代は分析されていないが、テフラ分析によりＡｓ－ＹＰｋ（浅間－草津黄色軽石）が確認されており、石器群の垂直分布のピークはこの下にある。

真人原遺跡 C 地点（以下では「真人原 C」と表記する）は、A 地点から小さな沢の谷地頭をはさんで南西に約 80m ほどに位置し、148 ㎡の調査区から土器や礫を除いて 4171 点の石器が検出されている。１ヵ所の石器集中をほぼ完掘しているが、この石器集中の一部がすでに送電線鉄塔の工事によって破壊されていたために、これに関連して失われた石器

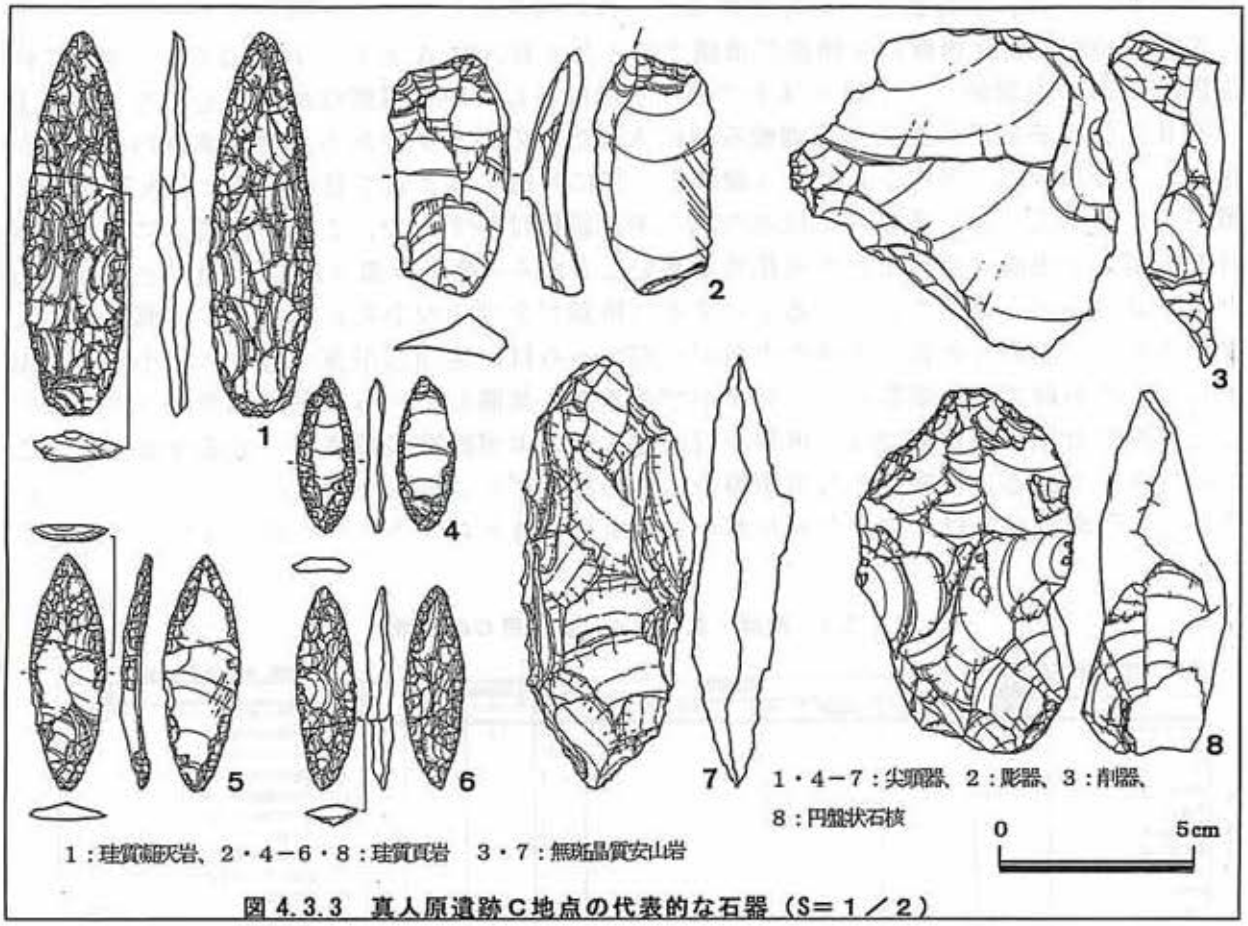


図 4.3.3　真人原遺跡C地点の代表的な石器（S＝１／２）

を想定する必要がある。縄文時代の遺物との分離が困難な部分があることはA地点と同様である。石器組成は小形の周辺調整尖頭器が主体との点でA地点と共通するが、両面調整尖頭器も比較的安定して出土している。A地点と比較して尖頭器以外の定型的な剥片器種は少ない（**図 4.3.3**）。石材は無斑晶質安山岩を主体に、在地の珪質凝灰岩や遠隔地の黒曜石も混じるが、尖頭器とその調整剥片はA地点と同じ良質の珪質頁岩が選択的に用いられている。なお真人原遺跡の両地点については、第VI章で個別地域の文脈の中で再論する。

（２）器種組成と石材組成

すでに概略を紹介したが、より具体的に比較する。**表 4.3.1** は各遺跡の器種組成と石材組成の比較である。**表 4.3.1** は磨石・叩石や礫は除き、剥離によるリダクションに関連するもののみを対象とした。器種分類はすべて筆者が再検討したため、既報告と異なる部分がある。真人原Cの無斑晶質安山岩に、剥片器種や尖頭器の欠片を多く認めた点が特に異なる。砕片は剥片に統合した。二次加工ある剥片は、特に真人原遺跡の両地点において、等価かつ離散的に識別できない（偶発剥離や非人為的な微細剥離との区別が困難で、これらの可能性のある資料も含めると、あたかも組成上有意であるかのような膨大な数になる）ため、すべて「剥片」の中に含めた。真人原遺跡の両地点では縄文時代に属する可能性のある石器も一部含めた。

石材名は各報告書に従ったが、地域が異なることもあり分類者（南原遺跡－柴田　徹、真人原遺跡－中村由克）の方針で名称が異なる。筆者の判断では、ガラス質黒色安山岩と

無斑晶質安山岩、硬質頁岩と珪質頁岩は同一の岩種を示していると思われる。

器種組成は、剥片器種の尖頭器が卓越することが真人原ＡとＣの共通点だが、南原の両面調整石器の尖頭器も、小形・薄手で剥片を素材としている可能性があるものを、定義上（第Ⅱ章第５節参照）から両面調整石器に入れたものが大半である。剥片素材の尖頭器が多いという現象は、実体としては３遺跡すべてに共通すると見て良い。また真人原Ａで削器が 11 点出土している以外には定型的な剥片器種はわずかで、この「削器」には剥片素材の尖頭器の未成品が含まれる可能性が高いことから（第Ⅲ章第３節）、３遺跡ともほとんど尖頭器のみから構成されているといえる（彫器が少ないながら必ず伴う点は興味深い）。また３遺跡とも剥片を含む全体の点数が卓越する石材に尖頭器が多く含まれ、小量のみ出土している石材では尖頭器がごくわずかである点も共通している。先に本章第２節で検討した相模野台地の第Ⅲ期では、単独母岩の搬入品の両面調整尖頭器が一定量確認できたことと対照的である。各遺跡とも尖頭器の集中的なリダクションをおこなっており、その結果として尖頭器の石材に膨大な剥片が生じた結果と考えられる。この傾向は特に南原と真

表 4.3.1　南原・真人原Ａ・真人原Ｃの組成

南原　石材別器種組成(点数)

石材	両面調整石器 尖頭器	両面調整石器 円盤状石核	剥片器種 尖頭器	剥片器種 削器	剥片器種 錐器	剥片器種 彫器	剥片	尖頭器端部の欠片	磨石	合計
ガラス質黒色安山岩	46		10	3			4266	19		4344
中粒凝灰岩							11			11
ホルンフェルス				1			2			3
硬質頁岩						1	1			2
黒曜石							11	1		12
細粒凝灰岩							3			3
細粒安山岩							2			2
中粒凝灰岩（流紋岩？）							1			1
粘板岩							2			2
不明							1			1
砂岩							1			1
合計	46		10	4	0	1	4301	20	0	4382

南原　石材組成(重量)

石材	重量（g）
ガラス質黒色安山岩※※	2778.5
中粒凝灰岩	41.4
ホルンフェルス	14.0
硬質頁岩	24.6
細粒凝灰岩	7.5
中粒凝灰岩（流紋岩？）	1.6
粘板岩	1.3
黒曜石※※※	0.1
細粒安山岩※※※	0.1
砂岩※※※	0.1
不明	0.2
合計	2869.4

※0.1g未満の石器2383点を除く
※※個々の全ての石器が0.1g未満

真人原A　石材別器種組成(点数)

石材	両面調整石器 尖頭器	両面調整石器 円盤状石核	剥片器種 尖頭器※	剥片器種 削器	剥片器種 錐器	剥片器種 彫器	剥片	尖頭器端部の欠片	磨石	合計
珪質頁岩	5	1	60	11	1	3	3140	16	2	3239
無斑晶質安山岩							30		1	31
凝灰岩							60			60
珪質凝灰岩			2				68			70
頁岩							25			25
チャート							61			61
安山岩							3			3
碧玉							2			2
玉髄			1				20			21
黒曜石			1				28			29
珪化木							2			2
花崗岩							5			5
粘板岩							1			1
不明							19			19
合計	5	1	64	11	1	3	3464	16	4	3568

※石錐とナイフ形石器は剥片器種の尖頭器に含めた

真人原A　石材組成(重量)

石材	重量（g）
珪質頁岩	5933.1
無斑晶質安山岩	756.2
凝灰岩	741.5
珪質凝灰岩	521.9
頁岩	133.4
チャート	40.9
安山岩	11.8
碧玉	8.0
玉髄	5.0
黒曜石	3.7
珪化木	2.2
花崗岩	1.6
粘板岩	0.2
不明	33.2
合計	8193.3

真人原C　石材別器種組成(点数)

石材	両面調整石器 尖頭器	両面調整石器 円盤状石核	剥片器種 尖頭器	剥片器種 削器	剥片器種 錐器	剥片器種 彫器	剥片	尖頭器端部の欠片	磨石	合計
無斑晶質安山岩	2		3	8			427	4	3	447
珪質頁岩	3	1	60			1	3049	6	4	3124
珪質凝灰岩	2		1	1			336	1	3	344
凝灰岩							77			77
珪質砂岩							16			16
頁岩							41			41
安山岩							16			16
砂岩							23			23
玉髄							27			27
黒曜石	1		3				36	1		41
チャート							15			15
合計	8	1	67	9	0	1	4063	12	10	4171

真人原C　石材組成(重量)

石材	重量（g）
無斑晶質安山岩	6035.4
珪質頁岩	2917.7
珪質凝灰岩	1960.2
凝灰岩	263.9
珪質砂岩	152.5
頁岩	123.3
安山岩	103.8
砂岩	73.1
玉髄	59.0
黒曜石	15.1
チャート	7.8
合計	11711.8

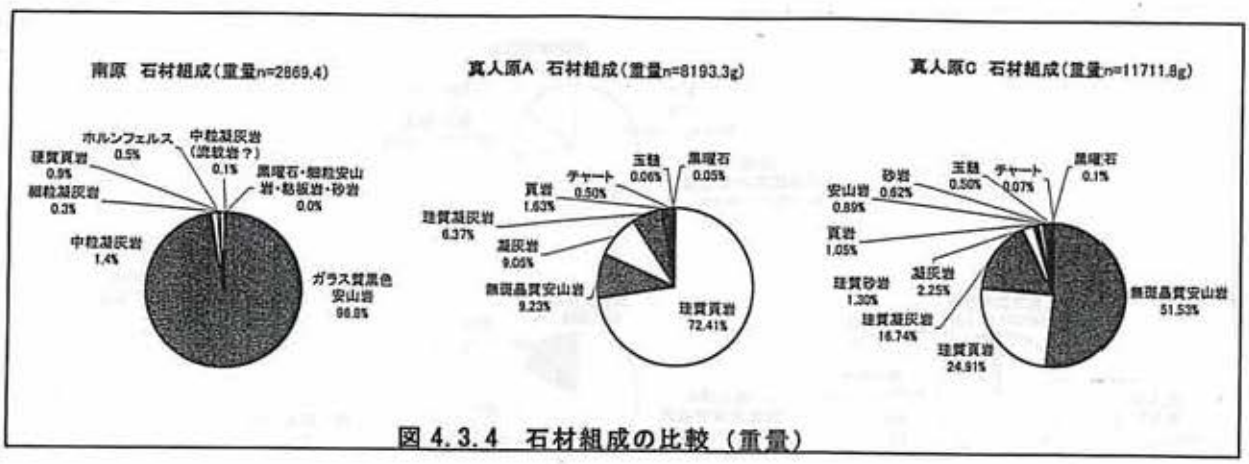


図 4.3.4　石材組成の比較（重量）

人原 A に顕著である。ただし南原では２点しか出土していない硬質頁岩に彫器が含まれ、単独搬入品に近い。真人原 C には単独搬入の黒曜石の両面調整尖頭器が１点ある。

図 4.3.4 は各遺跡の石材組成を重量の割合で視覚的に表現した。３遺跡とも異なる傾向を示している。南原は全体の 96.8%をガラス質黒色安山岩が占める。これは１点の剥片の重量が 0.1g 未満で計測不能であった 2383 点を除いた値であり、仮にこれらの計測不能分の累計を約 200ｇ程度に見積もるなら、割合は 97%を超える。１点の平均重量ではわずか 0.6g であり、石器群は全体が微細な石器を主体に構成されている。このガラス質黒色安山岩の理化学的な産地同定は行なっていないが、相模野台地の他遺跡での蛍光 X 線法による分析例（山本・柴田 1998）および肉眼観察では、遺跡から約 40km 南西の箱根付近に産出するものを中心としている可能性が高い。

真人原 A は珪質頁岩が重量で全体の 74%を占め、残りは無斑晶質安山岩、凝灰岩、珪質凝灰岩がほぼ均等となる。**表 4.3.1** に見るように珪質頁岩は点数でも 3239 点（90%）と卓越する。第Ⅵ章で再論するが、この珪質頁岩は遺跡の付近では現在は採取できず、北東に約 120km の山形県内陸部産の可能性が考えられる。しかし秦が実施した薄片観察法では、山形県内陸部や新潟県域でこれまでに確認されている産出地の珪質頁岩とは、石英粒子構造や微化石の特徴が一致せず、石英粒子構造から日本海産の可能性が高いとまでの指摘は可能ながら、具体的な産地を特定できないという（秦 2002）。

真人原 C では、在地石材である無斑晶質安山岩が重量で 51%と全体の半分を占め、珪質頁岩（30%、珪質凝灰岩（17%）がこれに続く。しかし**表 4.3.1** の点数では珪質頁岩が 3050 点（74%）と卓越しており、両面調整石器・剥片器種を含めた尖頭器の数が多いのも珪質頁岩である。無斑晶質安山岩は点数では少なく、平均重量が 13.5ｇと比較的大形の剥片で構成されている。逆に珪質頁岩の平均重量は 0.9g であり、尖頭器を多数含みながらも微細な石器を中心に構成されている点で、むしろ南原に近い状況といえる。

なお南原には礫核がないが、真人原 A では４点、真人原 C では 10 点出土している。

図 4.3.5 は、各遺跡の主要な３石材（南原のみ１石材）の、器種の上位分類群ごとの重量構成である。尖頭器の端部欠片は便宜上、剥片器種に入れた（もとより全体に影響を与える重量ではない）。上段の一つの円グラフが南原、中段の３つが真人原Ａ、下段の３つが真人原Ｃである。３遺跡の共通点は、いずれも剥片が７割以上を占めることにある（ただし真人原Ｃの珪質凝灰岩[下段右]のみは、礫核が５割以上の重量を占める。これは剥片の

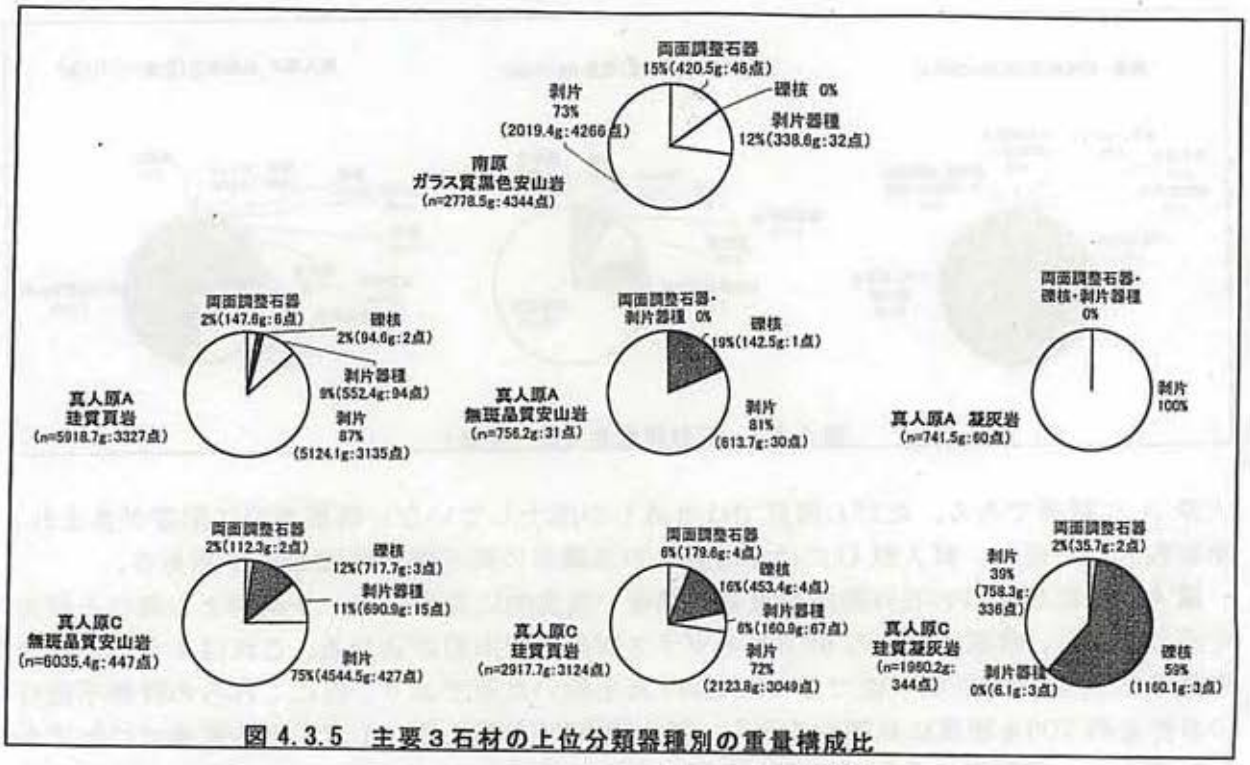


図 4.3.5　主要３石材の上位分類器種別の重量構成比

点数も少なくないにもかかわらず、比較的大形の礫核が３点あるためである)。剥片が多数を占めるパターンの極端な例は中段の真人原Ａの凝灰岩で、100%が剥片である。

南原遺跡では両面調整石器が 15%あり、一見すると他遺跡や他石材よりも多く見えるが、１点の平均重量はわずか９ｇ にすぎず、その実体は多数の小さな両面調整石器（欠損品もふくめた尖頭器）の蓄積である。これら小形の尖頭器は繰り返すように剥片器種としてもよいものが大半で、実際には真人原Ａの珪質頁岩や、真人原Ｃの珪質頁岩・無斑晶質安山岩に近い構成と考えたほうがよい。まとめるなら①両面調整石器は重量ではわずかとなる、②剥片が遺跡出土石器の大半を占める、以上の２点が共通する傾向であり、③重量構成に遺跡間の変異が生じるのは主として礫核の有無に規定される事がわかる。これは石核リダクションが併用・実施されたか否かの差である可能性があり、中規模遺跡の遺跡間変異を考える上で、一つの論点となるものと考えられる。

（３）石材別の剥片の属性比較

真人原の両地点では母岩別分類を実施していないため、第２節で吉岡Ａ区と用田鳥居前の比較で実施したような、母岩構成に立ち入った分析は実施しない。また両面調整石器は重量構成比に見たように小形の尖頭器が大半で、第２節で実施したような大きさの変異の検討から有意な傾向を導くことはできなかった。そこで、以下では各遺跡の石材別に剥片の属性を検討する。

図 4.3.6 は３遺跡の石材別にみた剥片の長幅散布図であり、剥片の大きさ、長幅のプロポーション、およびそれらの分布を同時に比較することが目的である。南原はガラス質黒色安山岩のほかに少数派の石材をまとめて提示したが、真人原Ａと真人原Ｃでは重量の上位３石材のみ示す。

母集団が 100 点以上の資料群には、２つのグループを明確に認めることができる。①長

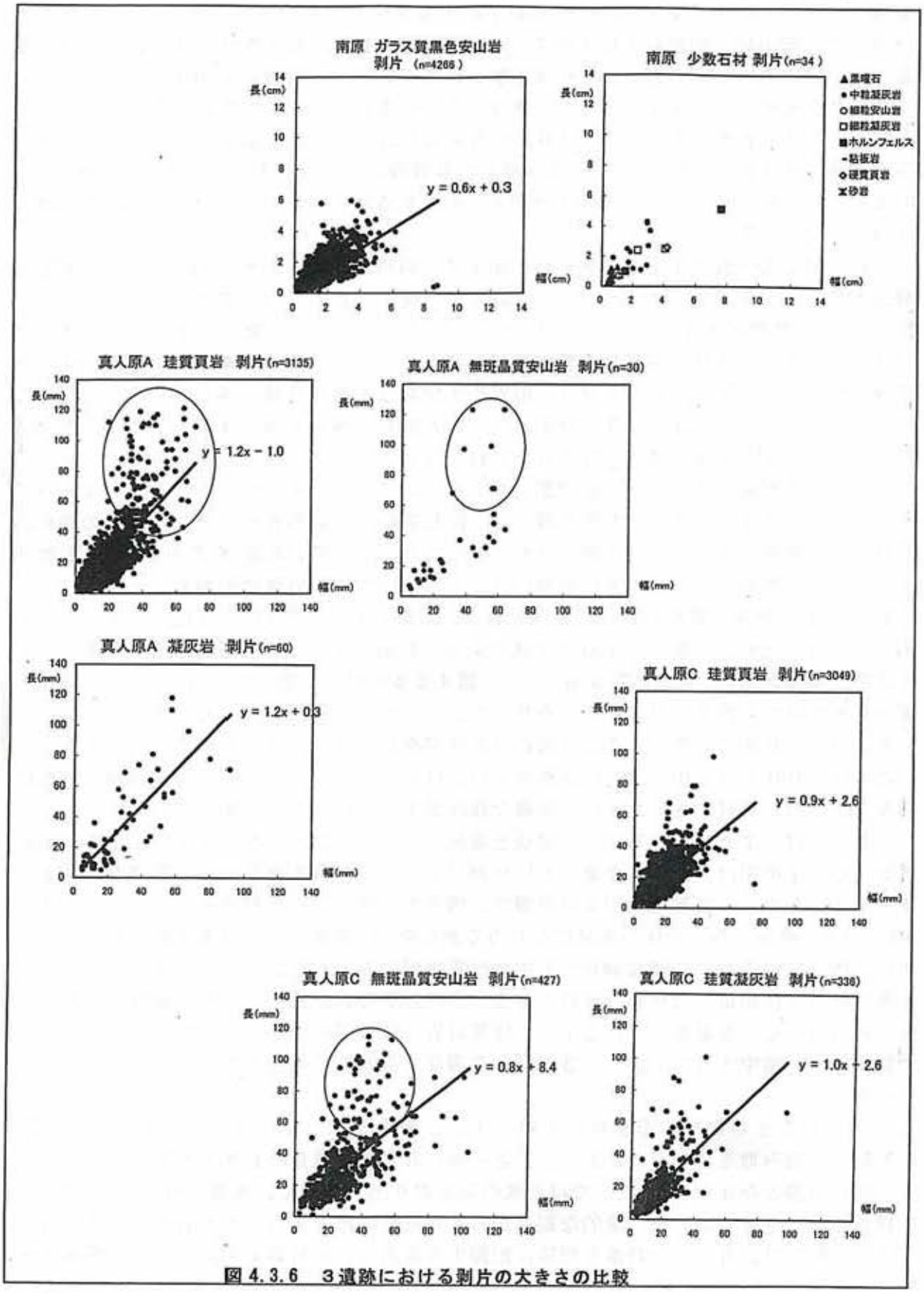


図 4.3.6　3遺跡における剥片の大きさの比較

長幅比が１：１前後で長さ・幅が 6cm 以下に大多数がまとまるグループ（上段：南原のガラス質黒色安山岩、中段右：真人原 C の珪質頁岩）。長さ・幅の数値が小さくなるほど密集する。このグループの剥片は、両面調整石器あるいは剥片器種の尖頭器のリダクションで生じた剥片のうち、本来の意味での残滓（もはや素材としての転用に向かない）を主体とすると考えられる。南原のガラス質黒色安山岩と真人原 C の珪質頁岩は、微細な残滓のみが遺跡に残された石材と言える。真人原 C の珪質凝灰岩には大形の剥片も認められるが、およそこちらのパターンに近いと評価でき、やはり遺跡に残されたのは尖頭器調整の微細な剥片が中心であると見てよい。

これに対し②小形で１：１の剥片が密集すると同時に、長さが６～12cm までの大形の縦長剥片も一定量が存在するグループがある（中段左：真人原 A の珪質頁岩、下段中央：真人原 C の無斑晶質安山岩）。このグループの剥片も、１：１の微細な剥片が密集する部分は①のグループ同様に尖頭器調整の残滓と考えてよい。しかし**図 4.3.6** の楕円で囲った部分に相当する大形・縦長の剥片は、削器や尖頭器など剥片器種の素材として利用可能な大きさを備えている。真人原 A の珪質頁岩、真人原 C の無斑晶質安山岩は、残滓のみではなく素材剥片も一定量が遺跡に残された石材と言える。

これらの大形縦長剥片が、両面調整石器リダクションから生じたのか、あるいは石核リダクションから生じたのかは判断が難しい。真人原 C の無斑晶質安山岩には３点の礫核があり、この礫核と剥片の接合も確認されていることから（第Ⅵ章**図 6.2.1** 参照）、石核リダクションを併用している可能性が高い（これについては第Ⅵ章で再論する）。

真人原 A の無斑晶質安山岩と珪質凝灰岩は、重量組成の上位２位と３位ではあるが点数的には少ないため、母集団が 100 点未満である。長幅比１：１を中心に散漫に分布し、大きさの変異幅が広い。無斑晶質安山岩では、**図 4.3.6** の楕円で囲った部分のように、大形・縦長も小数ながら認められる。母岩分類をおこなっていないためにこれ以上は解析できないが、剥片の状態での単独搬入品を含む可能性が高い。また必ずしも小さな値に密集しないことは、100 点以上出土している他の石材とは大きく異なる。おそらく尖頭器の調整に関与していない石材であるために、微細な残滓が生じていないのであろう。

これら石材によって異なる剥片の構成を遺跡のレベルで整理しなおすと、以下の解釈が導かれる。①南原は、点数・重量ともに９割以上のガラス質黒色安山岩で微細な剥片を主体とすることから、遺跡全体が尖頭器調整の残滓を主体とした活動痕跡である。②真人原 A は、大形･縦長で剥片器種の素材になり得る剥片を、珪質頁岩で一定量と他の石材でもわずかに残しているが、微細な剥片の集中は珪質頁岩のみであることから、尖頭器の調整は珪質頁岩にほぼ限定した活動の痕跡である。③真人原 C は、主として無斑晶質安山岩の大形・縦長剥片を一定量残している上に、珪質頁岩と珪質凝灰岩を加えた主要３石材すべてに微細剥片が集中することから、３石材で満遍なく尖頭器の調整をおこなった活動の痕跡である。

次に石材ごとの剥片の重量構成を検討する。剥片の大きさについての傾向は先の**図 4.3.6** でも読み取ることができるが、長さ・幅の計測値と重量は必ずしも対応しない（著しく厚い石器の存在など）。ここでは重量のみを取り出すことで、遺跡に残された剥片の、石材ごとの大きさの違いを、量的な観点からより鋭敏に把握することを目的とする。なお以下の分析では、各石材の特徴を鋭敏に把握する理由で、資料数も安定してかつ**図 4.3.6**

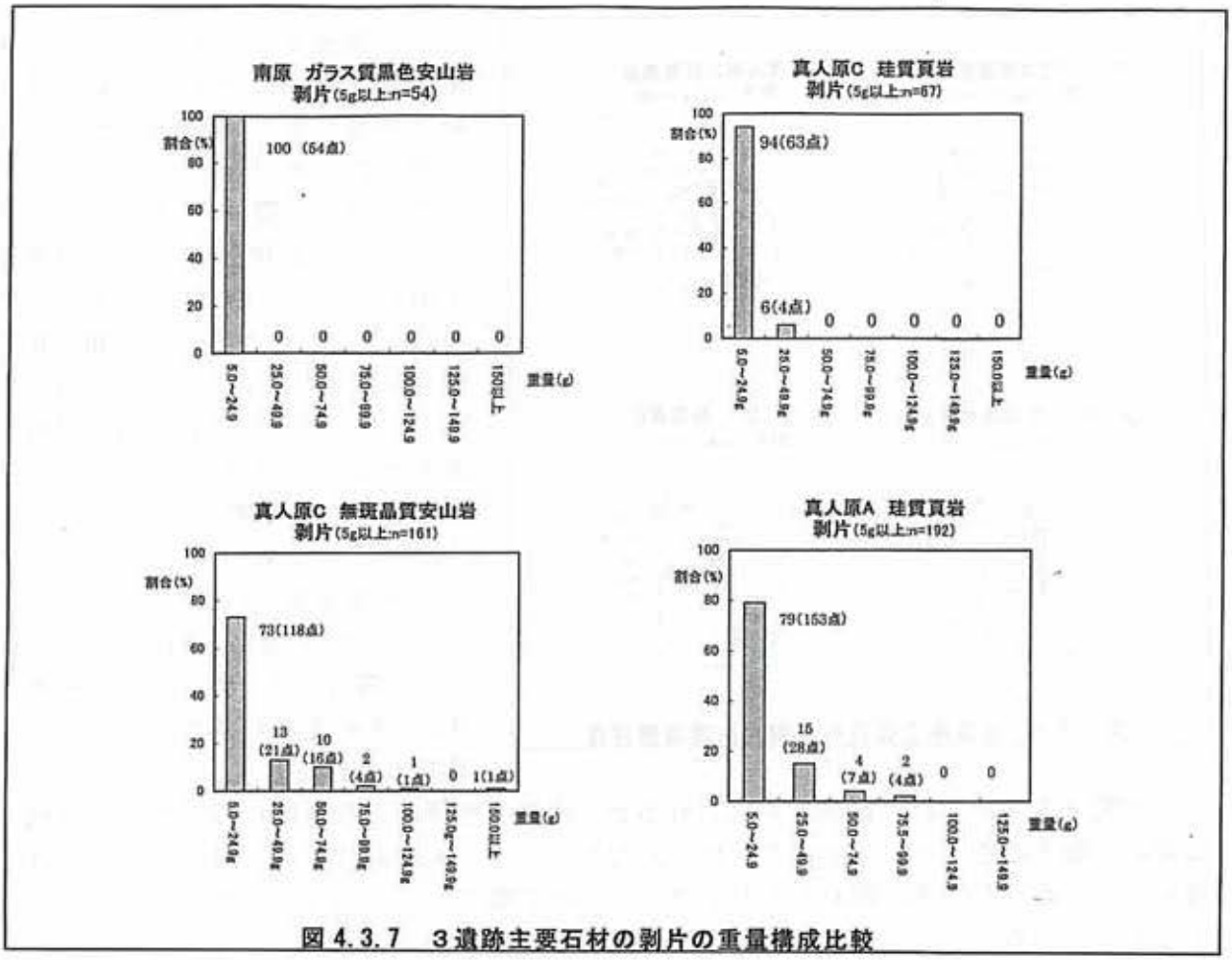


図 4.3.7　3遺跡主要石材の剥片の重量構成比較

で特徴的な性格が認められた、南原のガラス質黒色安山岩、真人原 A の珪質頁岩、真人原 C の無斑晶質安山岩と珪質頁岩に対象を限定する。これらの石材では 5g 未満の剥片はどの石材でも多数を占め、これを含めると傾向が見えにくくなることから検討対象から外す。

上段左の南原のガラス質黒色安山岩では、極端な傾向が現れている。検出した全 4266 点の剥片のうち、5 g 以上の重量をもつものはわずか 54 点（0.01％）にすぎず、しかもそれらすべてが 25 g 未満である。これと似たパターンは上段右の真人原 C の珪質頁岩で、全 3049 点の剥片のうち 5 g 以上は 67 点にすぎない（0.02%）。真人原 C では 25 g 以上 45 g 未満の剥片も 4 点出土しているとはいえ、全体として南原のガラス質黒色安山岩とほぼ同じあり方とみてよい。先述した、剥片器種の素材となるような大形剥片が一切存在せず、微細な残滓のみが遺跡に残されていることがより鮮明に理解できる。下段の真人原 C の無斑晶質安山岩と真人原 A の珪質頁岩 25 g 以上の剥片も少ないながら一定量が存在する。素材となり得る大形剥片を一定量遺跡に残していることを示し、上段と下段はきわめて対照的な残され方ということができる。

次に**図 4.3.8** では、今までと同じ各遺跡の主要石材について、背面の礫面残存度を比較した。Ⅰ～Ⅴまでの基準は、**図 4.2.7** の凡例と同じである。同じく 5 g 以上の剥片を対象としているが、被熱や風化で判断が困難なものは対象外としたため、母集団の数は**図 4.3.7** とは一致しない。

図 4.3.8　3遺跡主要石材の剥片の礫面残存度

礫面を全く残さないVが約80%を占めることは全遺跡の全石材に共通するが、礫面を残すⅠ～Ⅳの割合に変異がある。上段の2つのグラフは先の**図 4.3.7** で同じパターンを示した南原のガラス質黒色安山岩と、真人原 C の珪質頁岩である。この2つの石材ではⅢとⅣの割合が大きく、ⅠとⅡの割合はほとんど0%である。これは背面に礫皮面を大きく残す剥片が存在しないに等しいことを表わしている。ところが下段の2つのグラフは、真人原 C の無斑晶質安山岩と真人原 A の珪質頁岩であるが、背面の全面を礫皮面が覆うⅠと、背面の大半を覆うⅡが、それぞれわずかとは言え一定量認められる。

先の**図 4.3.7** みられた傾向と対応させると、微細な残滓のみを遺跡に残している石材では背面に礫皮面を大きく残す剥片がほとんどない一方、大形剥片も残している石材では、背面の全面近くが礫面に覆われたリダクションの初期で生じる剥片も、遺跡に残されていることが分かる。

最後に剥片の剥離角を検討する。一般に、石刃を剥離する適切な剥離角度は約 80 度と考えられている（大沼 2002 など）。しかし両面調整尖頭器のリダクションでは、石器の器体が薄手の凸レンズ状もしくはこれに近い形状であることから、剥離角はより鈍角に近くなる。つまり剥片の剥離角が 80° に近い剥片は、剥片器種の素材としての目的的な剥離で生じたものを多く含み、逆により鈍角な剥片は両面調整尖頭器の調整リダクションとしての剥離で生じたものを多く含むと考えることができる。

図 4.3.9 ではこれまでの分析と同じ主要石材について、剥離角の分布を比較した。計測対象は5 g 以上の剥片である。折損により打面部が残存していない剥片は計測できないことから、母集団の数は**図 4.3.7～4.3.8** とは異なる。

下段右の真人原Aの珪質頁岩は母集団の数が多いこともあって正規分布をなしているが、他の3石材は 71～80° を境にそれよりも図の左にある（鈍角を示す）剥片の割合が多いことで共通している。これは計測対象とした剥片の中に、両面調整尖頭器など打面と作業面のなす角度が鋭角（結果的に生じる剥片の剥離角は鈍角）な「核」から剥離されたものが多く含まれることを示している。とりわけ上段の左、南原のガラス質黒色安山岩は 61～70° にピークがあり、他の3石材に比較して特に鈍角であるといえる。このことからも南原に残された剥片の大半が、両面調整尖頭器の細部調整時に生じた剥片であることを裏付けることができる。ただしこれまでの検討で南原のガラス質黒色安山岩と似た傾向を示してきた真人原Cの珪質頁岩（上段右）は、南原のガラス質黒色安山岩ほど鈍角的ではな

い。この真人原Cの珪質頁岩がやや例外的だが、全体としては先に長幅散布や重量構成、礫面の残存度の検討から、大形剥片も遺跡に残されていることが明らかであった石材（真人原Aの珪質頁岩、真人原Cの無斑晶質安山岩）では、71～80°にピークがあり、大形・縦長の剥離による剥片器種の素材の供給も盛んであったことを示すと考えられる。

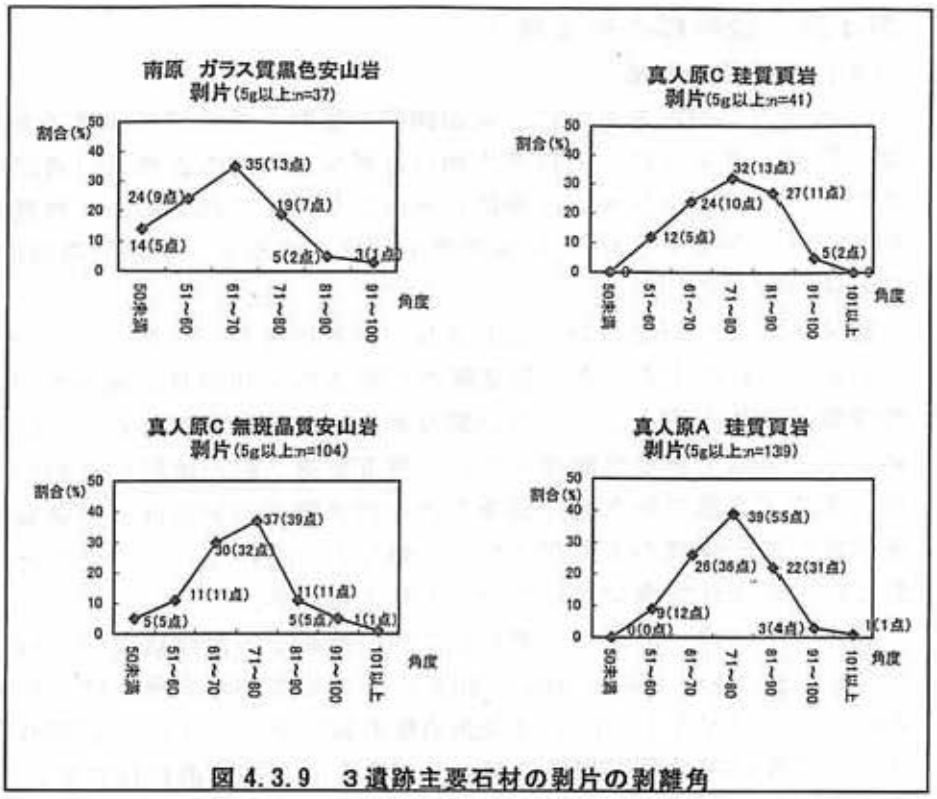


図 4.3.9　3遺跡主要石材の剥片の剥離角

以下に3遺跡の特徴をまとめる。①南原遺跡：ガラス質黒色安山岩という特定の石材に偏る。多数の微細な剥片のみで、大形の剥片は残されていない。石核リダクションは全く現れておらず、完全に両面調整石器リダクションの痕跡のみである。遺跡は微細な残滓のみが残された活動痕跡である。②真人原遺跡A地点：珪質頁岩という特定の石材に偏る。多数の微細な剥片とともに大形・縦長の剥片が多量に残されている。石刃を生じる石核リダクションが併用されていた可能性が高いが、石刃石核自体は残されていない。遺跡は微細な残滓とともに剥片器種の素材も残された活動痕跡である。③真人原遺跡C地点：特定の石材に偏らず、無斑晶質安山岩・珪質頁岩・珪質凝灰岩の主要3石材で、微細な剥片を多量に遺跡に残している。石核リダクションの併用が無斑晶質安山岩と珪質凝灰岩に大きく現れており、これらの石材では多数の石核や大形剥片が残されている。しかし珪質頁岩のみに限るなら、微細な剥片のみが残されている点で南原と良く似ている。遺跡は微細な残滓とともに剥片器種の素材も残された活動痕跡である。

以上3遺跡の検討から、中規模遺跡に現れる変異部分は、①石材構成が一種類の石材のみに限定されるか複数種を併用するか、②石核リダクション併用の有無、③素材となる大形剥片も残されるか、微細な調整の残滓しか残されないか、この3点にあるとの結論を提示する。本節と同じ詳細さでの検討はできないが、南原遺跡が所在する相模野台地でも、単一の石材ではなく複数の石材を残す遺跡や、大形剥片や石核リダクションが多く残される遺跡はある。月見野遺跡群上野遺跡第1地点の第Ⅳ文化層（相田ほか 1986）や、中村遺跡第Ⅲ文化層（伊藤ほか 1987）などが代表例である。本節ではモデル化の準備として地域的・環境的文脈を捨象したが、特定の有意な地理的範囲の中で遺跡間の変異を検討する作業こそ、移動・居住形態の具体的な復元に有効であろう。その一部は第Ⅵ章で実践する。

第４節　遺跡群の形成構造

（１）遺跡群の形成

これまでの検討をもとに、両面調整石器群の遺跡群形成構造を考えてみたい。本章第１節で概観したように、石材産出地の近傍など特定の占拠地（遺跡）で集約的な両面調整石器の準備（リダクションの開始）をおこない、これを搬出・携帯して人々は遊動領域を巡回していたと考えられる。両面調整石器リダクションが複数遺跡間にまたがって進む点が、核心部分である。

表 4.4.1 では母岩分類が公表されている遺跡のデータをいくつか参照した。網羅的ではないが、これによると本章第２節の吉岡Ａ区と用田鳥居前の例で確認した、両面調整石器や礫核の本体が出土していない調整剥片のみの母岩があることは、ほかの遺跡でも広く認められる現象である可能性が高い。第Ⅱ章第２節で検討した剥片からのリダクション開始や、本章第２節でみた剥片器種や剥片の状態での単独母岩（単独搬入）が示すように、両面調整石器や礫核の本体だけでなく剥片も、素材としての利用価値が見込まれたものは頻繁に持ち出されて携帯されていたと考えられる。

表 4.4.2 には、本章で分析した以外の遺跡での器種組成の一例を示した。やはり網羅的な集成ではないものの、掻器・削器以外の定型的な器種をほとんど伴わない点に共通性を認めることができる。削器は両面調整石器リダクションの初期の状態を含む可能性を考えると、器種組成は両面調整石器のリダクション関連品にほぼ限定されるとさえ言えよう。また報告者が「石核」として認定するような石器が、全体の出土量の割に少ない。これは田村隆がすでに指摘しているように（田村 2001）、両面調整尖頭器という一つの存在が、いわゆる「石槍」以外にも、石核を含む複数の使用目的を兼ねることを示唆する。

さらに移動行程の中で一時的に滞在・占拠した各地点でも、近場で獲得できる石材も合わせて必要なリダクションをおこなった痕跡が、中規模や小規模の遺跡を形成したと考え

表 4.4.1　両面調整石器群における母岩構成の例（長沼 2002b 表１を一部改変）

遺跡名	時期	出土総点数	総母岩例数（単独を含む）	両面調整石器と剥片からなる母岩例数	剥片のみの母岩例数（単独剥片含む）	両面調整石器のみの母岩（単独含む）	文献
宮ヶ瀬サザランケ 第Ⅲ文化層	第Ⅰ期	2,823	17	7	5	0	鈴木ほか編1996
後野Ｂ	第Ⅱ期	748	11	3	7	1	川崎1976
宮ヶ瀬北原　第Ⅰ文化層	第Ⅲ期	901	47	7	30	10	市川ほか編1998
宮ヶ瀬馬場　第Ⅰ文化層	第Ⅲ期	199	66	2	9	55	近野ほか編1996
前三舟台	第Ⅳ期	481	55	8	24	23	佐伯1992
長堀北　第Ⅰ文化層	第Ⅳ期	74	34	2	30	2	小池ほか1991

表 4.4.2　両面調整石器群における器種組成の例（長沼 2002b 表３を一部改変）

遺跡名	時期	尖頭器(各種)	石斧（各種）	細石刃核	掻・削器	彫器	石錐	R・UF	剥片・砕片	石核	礫器	文献
宮ヶ瀬サザランケ　第Ⅲ文化層	第Ⅰ期	47	-	-	4	-	-	8	2,758	-	1	鈴木1996
中村　第Ⅲ文化層	第Ⅰ期	42	-	-	8	-	-	21	1,064	-	-	伊藤ほか1987
宮ヶ瀬サザランケ　第Ⅱb文化層	第Ⅱ期	-	-	14	2	-	-	12	124	-	1	鈴木1996
後野Ｂ	第Ⅱ期	1	-	4	3	7	-	-	564	-	2	川崎1976
長堀北　第Ⅱ文化層	第Ⅲ期	13	1	2	-	-	-	5	800	-	-	小池ほか1991
月見野上野第Ⅰ　第Ⅱ文化層	第Ⅲ期	10	3	2	4	-	-	3	1,642	1	-	相田編1986
寺尾　第Ⅰ文化層	第Ⅲ期	58	6	-	5	-	-	7	1,096	1	-	白石1980
岡谷戸　第Ⅰ文化層	第Ⅲ期	48	-	-	5	-	-	-	8,119	-	-	谷藤編1992
宮ヶ瀬北原　第Ⅰ文化層	第Ⅳ期	33	-	-	12	-	1	16	825	3	3	市川ほか編1998
長津田宮ノ前南	第Ⅳ期	24	4	-	3	-	1	23	512	6	6	伊丹ほか編1998

ることができよう。中規模遺跡や小規模遺跡の変異は、第２節と第３節で例示したように、石材組成や母岩構成の違い、遺跡内でおこなわれた両面調整石器リダクションの活発さの違い、剥片器種の素材となり得る大形剥片の有無、石核リダクション併用の有無などとして、現れることが明らかにされた。

図 4.4.1 は、第１節での概観と第２・３節での具体例の検討をもとに、石材獲得の側面を中心に遺跡群の形成構造をモデル化した。この図は実在する特定の地域を想定せず、抽象的な空間内に複数の異なる石材獲得可能地が分散している状況を示している。大きな三角で表現した特殊な石材の産地とは、黒曜石や珪質頁岩など、産地が限定される石材の獲得可能地を意味する。白丸で表現した一般的石材の獲得可能地とは、各種凝灰岩類やチャート、ホルンフェルス、粗粒な頁岩、各種の珪質の岩など、多くの河川や段丘礫層から円礫として獲得できる石材を意味する。網がけは一般的な石材の獲得を意味する（網がけのない丸印は、潜在的には存在していながら人々によって利用されない石材獲得可能地を示す)。逆三角（▼）は、集団の移動行路の中で残された遺跡を意味し、その大きさが遺跡の規模を表わしている。

集団の移動と石材の獲得は、ここに想定した条件の中で最も単純には３通り考えることができる。①特殊な石材の獲得可能地での大規模遺跡を移動経路の中に取り込むパターン。

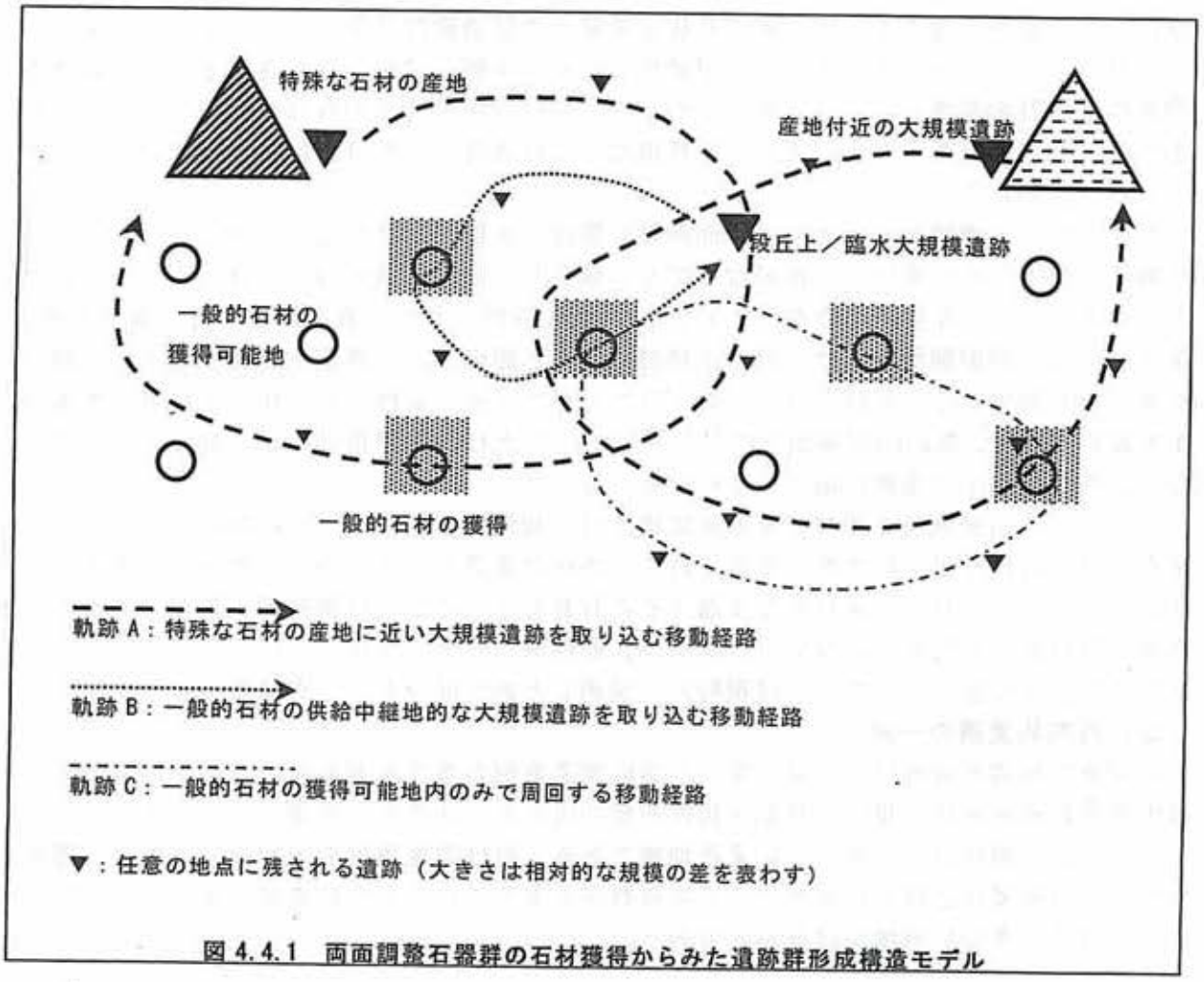


図 4.4.1　両面調整石器群の石材獲得からみた遺跡群形成構造モデル

図では太い点線の矢印で集団の移動軌跡を示した（軌跡A）。②一般的石材ではあるが段丘上や河原（臨水型）の大規模な中継地的遺跡を移動経路の中に取り込むパターン。図では細かい点線の矢印で軌跡を記した（軌跡B）。③一般的石材の獲得可能地のみを周回し、大規模遺跡を移動経路の中に取り込まないパターン。図では細い一点破線で軌跡を示した（軌跡C）。これら移動軌跡の任意の地点で複数の遺跡が形成されていくため、個別の遺跡には、それまで集団がたどってきた行路における石材獲得の履歴を反映した形で、各種の石材が残されることになる。くわえて集団が置かれていた個別的な文脈によって、剥片器種の素材供給を行なう必要性や「製作する」器種の種類は変異するため、遺跡に残される石器の器種組成やリダクションの進行状態は多様に変異する。これが両面調整石器群の基本的な遺跡群形成構造であると考えられる。

①のパターンが最も純粋に現れる形は、遠隔地産の単一の石材のみが遺跡に残される姿である。本章第3節で検討した相模野台地の南原遺跡が、もっともこれに近い。比較した真人原のA・C両地点も、基本的にはこの軌跡Aのパターンと考えられるが、特に真人原Cでは一般的な石材を適宜獲得しているために、遺跡の内容に変異が生じている。また後にⅦ章で検討する、本州島北半に展開した第Ⅱ期の荒屋系細石刃石器群は①のパターンの極端な例である。②のパターンは、本章第1節で言及した武井遺跡群や前田耕地遺跡など、特定地点の大規模遺跡を石材受給の要とするものである。③のパターンは、本章第2節で検討した相模野台地の第3期（用田鳥居前遺跡と吉岡遺跡群A区）がこれに近い。

これらのパターンはモデルとして単純化したが、実際には組み合わされることで複雑な内容の遺跡群を形成してくる。特に②のパターンは大規模遺跡の存在を根拠に想定しているため、②と③が複合していても、小規模な一つの遺跡だけを見た場合には、判断がむずかしいと思われる。

なお一般に、遺跡から出土する両面調整石器は、欠損品だけでなく小形品や縁辺が階段状剥離になるものが多い。欠損がなくても石核としての有用性が限界に達して放棄されたものを含むのではないだろうか。こう考えるなら、石核としての有用性を十分に保つ大形・厚手・幅広な両面調整石器は、次の占拠地に次々と搬出されて遺棄されず、出土する機会が少ない石器である可能性が高いと考えることができる。石核として使える状態の両面調整石器の出土は、集約的準備地での「ハネもの」、または石材獲得手段の一部としてのデポなど、特定状況下の遺跡に限られるのであろう。

このような両面調整石器群の遺跡形成構造は、個別の各地域ごとや時期地では、そこに特有の環境条件や歴史的文脈に影響されて、多様な変異を示す。各地の地域的な変異を個別にとらえて、それらの通時的な変遷とその背景をさぐることは興味深い課題であるが、各地の資料状況が均質ではないこともあり、原理論としての本研究では、部分的にしか立ち入ることができない。ここでは現時点で見通しのある部分を、2点に限って例示する。

（2）時期的変遷の一例

南関東の相模野台地は風成層の厚さと遺跡調査事例の多さを兼ねており、両面調整石器群の遺跡群形成構造や集団の移動・居住形態の復元を、通時的な変遷として追求できる見込みのある、現時点では唯一といえる地域である。他は調査事例数が少ないまたは石器群の内容が情報量にとぼしい地域や、石器資料が充実していても土層堆積が薄く、層位的な変遷を確認できない地域がほとんどである。

相模野台地の両面調整石器群は、第Ⅰ期には遠隔地産を含めた特定石材との結びつきが強い（国武 2003）。最初にB1下層の信州系黒曜石製の有樋尖頭器、次にB1層上部の信州系・伊豆・箱根系など各地の黒曜石が混在する段階を経る。やがてL1H層になるとガラス質黒色安山岩（南原遺跡や宮ヶ瀬サザランケ遺跡[鈴木ほか 1996]など）やチャート（中村遺跡[伊藤ほか 1987]など）に変わり、滞在地（遺跡）近場の石材も多用する傾向が現れるが、やはり特定石材との結びつきの強さは持続する。全体として**図 4.4.1** の軌跡Aのパターンで遺跡群が形成されている可能性が高い。石核リダクションの併用は遺跡毎の変異が大きい。ところが第Ⅱ期になると石材利用の変異が一転して複雑となる。両面調整石器リダクションをほとんど発現させない活動痕跡も増え、その場合には舟底形や稜柱形の細石刃核が特徴的に見られる。L1H 層上部に細石刃が始めて出現する頃には伊豆柏峠の黒曜石が多用されるが、やがて各種の在地石材も活発に利用され、黒曜石も信州系・箱根系・神津島系と多角化するなど、複雑な石材構成を見せていく。おそらく**図 4.4.1** の複数のパターンが複合している可能性が高い。その一方で器種組成は細石刃関連とわずかな礫器のみからなる単純な構成を見せる。本研究でこれ以上は立ち入ることができないが、相模野台地のこの段階の石材消費と遺跡群の形成については、仲田大人の研究に詳しい（仲田 2003）。

やがて本章で吉岡A区と用田鳥居前を検討した第Ⅲ期になると、各種の凝灰岩やホルンフェルスといった遺跡付近の多用な岩種が一遺跡内で混在するようになり、特定石材と両面調整石器との結びつきは弱くなる。遺跡に残される両面調整石器の数も増え、両面調整石器の大きさの変異幅も広がる（＝さまざまなリダクションの進行状態にあるものが残される）。用途・機能ごとの岩種の選択や作り分けの可能性もあり、小形品の中には剥片素材で「石核は兼ねない」ものも含まれるであろうが、遺跡近場の複数の獲得地からの常時的な石材獲得を示すと考えられる。石核リダクションの併用はわずかになる。これは第Ⅰ期や、実体は不明ながら第Ⅱ期に比較して、第Ⅲ期では集団の遊動範囲が相対的に狭くなっていることを示唆すると考えられる。全体として、**図 4.4.1** の軌跡Bまたは軌跡Cのパターンで遺跡群が形成されている可能性が高い。やはり本研究では深く立ち入らないが、第Ⅳ期になると竪穴住居跡を伴う遺跡が出現するようになり、土器の出土量も増える。遺跡から出土する遺物総量が少ないこと、住居跡遺構の規模も小さく数も少ないなど、完全な長期的定住とまでは言えないものの、定着度合が確実に高まっている傾向が指摘されている（仲田 2001、桜井 1996 など）。

（3）地域的変異の事例

歴史的文脈に規定された可能性のある地域的な変異については、遺跡群の形成とは少し異なるが、東北地方の石刃を例として挙げたい。日本海側内陸部を中心に珪質頁岩が豊富な東北地方は、両面調整石器群以前のナイフ形石器群の時代に、この石材を生かした高度な石刃技術による石核リダクションが発達した地域である。両面調整石器群に遷移して以後も（この具体的な過程は南関東ほど詳細には把握されていない）、第Ⅵ章で一部論及する第Ⅰ期や、第Ⅶ章で検討する第Ⅱ期でも珪質頁岩製の石刃は、各遺跡で両面調整石器（尖頭器や細石刃核）との量的関係の点で多彩な変異として見え隠れする。さらに第Ⅲ期になっても、大平山元Ⅰ遺跡（谷口 1999）、八森遺跡（佐藤 1998）、月山沢J遺跡（鈴木 1998）など、石刃が広く普通に伴う。第Ⅱ章第3節の「円盤状石核」の項で述べたように、大形

の両面調整石器から石刃を剥がすことは技術的に可能であり、これらの石刃を石核リダクションと両面調整石器リダクションとのどちらから供給したのか定かではない。しかし伝統的に石刃を作り続けてきた地域であることから、地域色として伝統の残存を認めたい。関東地方でも第Ⅲ期の石刃関連資料は、後野遺跡A地区(川崎 1976)、寺尾遺跡(白石 1980)、用田鳥居前遺跡（栗原ほか 2002）など、珪質頁岩そのものか、あるいはよく似た性質の岩種（硬質細粒凝灰岩の一部など）が好んで用いられることが多い。かつて第Ⅲ期は石刃の有無を基準に編年的に細分された経緯があるが、このように珪質頁岩地域との分布論上の関連で説明することもできると考える。

註

1）分析に際し、紛失等の一部を除く両遺跡の全ての石器資料を実見し（吉岡A区 856 点、用田鳥居前 163 点）、母岩分類や器種分類、計測値のうち長さと幅の一部を筆者の認識に改めてある。以下の分析対象は、上記の実見できた点数の資料である。この作業に際し、(財）かながわ考古学財団の栗原伸好氏と吉田政行氏には多大な配慮と便宜を賜った。記して感謝する。

2）報告書では単独母岩にも母岩番号を与えてあるが、今回の集計では単独母岩は別扱いとした。したがって表 4.2.1 の母岩 No. の欄に欠番があるかにみえるが、これに相当する資料はすべて「単独」の中に含まれている。このために単独母岩に複数の石器を含めて集計しているが、これは単独母岩の例数という意味であり、単独母岩とした石器は実際にはすべて 1 点ごとに母岩が異なる。

3）筆者が（財）かながわ考古学財団に在職中の 2000 年から 2002 年にかけて接合・実測作業を進めた資料体であり、栗原伸好氏から分析と本研究への引用の許可を頂いた。記して感謝する。本章の分析を実施した時点では未報告資料であったが、2004 年中に正式報告書が刊行予定である。刊行された報告書と本研究との間で、石器の点数や分類の一部に齟齬が生じている可能性があるが、本章執筆時に報告書を反映させることはできない。

4）工藤雄一郎は石材別に垂直分布のピークを検討し「無斑晶質安山岩・チャート・玉髄」の剥片類が上層の黒色土にまとまることから、これらが縄文時代の遺物の混在である可能性を指摘している（工藤 2002)。工藤自身が述べているように、検討した母集団が少ない点に問題を残している。チャートはともかく、無斑晶質安山岩と玉髄はこの地域では旧石器にも多用される石材であり、特に無斑晶質安山岩は隣接するC地点では重量で主体をしめ、尖頭器も複数が確認できることから、本節では主体的な石器群にともなう石材であるとの前提で議論を進める。

第Ⅴ章　両面調整石器群の構造

第１節　モデルを用いた研究の性格

一般に、研究対象とする過去の社会と我々との時間的・空間的な隔たりが大きいほど、史実の細部にわたる把握は困難になる。とりわけ先史考古学では多くの場合、有機質部分の滅失や堆積過程の諸作用による変形をうけた、断片的な資料で研究を進めざるを得ない。ある好条件の資料から得られた内容や情報を、他の条件を異にする遺跡や地域・時期にまで敷衍できるか否かとの問題もある。もちろん、より良好な遺存状態の遺跡、好条件な資料の探索は継続されるべきではあるが、現実的には、多数を占める遺存状態に問題のある資料から研究を進めざるを得ない。この現実を受け入れるならば、過去に生じた個別の出来事を、事実として復元してゆく研究戦略は限界に突き当たる。

そこで改めて研究戦略が問われるが、本論ではモデルを用いた研究戦略を採用する。むろんモデルを用いた推論でも上記の困難を避けられるものではない。しかしモデルとして提示する考察や結論は、過去の事実への近似を狙ってはいるが、不断の修正や変更を前提としてこれらに対し開かれている。モデルの優劣は、モデルの構築手続きの妥当性や、実際に生じた過去の出来事から遠いか近いかということよりも、むしろそのモデルがいかに多くの資料を整合的に説明できるのかなど、モデル提出後の検証作業がより重要となろう。とはいえ無前提・無根拠からのモデル構築は不可能であり、本論では先行研究の中で指摘されてきた論点と、具体的な遺跡出土資料を適宜用いてモデルを構築する手法をとる。このモデル自体は過去の事実を直接描いたものではなく、あくまでも近似にすぎない。ここで描かれた近似としてのモデルは、今後の新資料の増加を受けて変更を迫られるべき性格のものである。

第２節　階層的モデル

（１）階層的把握について

両面調整石器の包括的な説明には、３つの異なる階層（註１）のモデルが必要であろう。第１の階層は全域をおおう一般モデルで、世界中のすべての地域・時代の両面調整石器に共通する一般的特徴に関するものである。ある出来事や事態の歴史的固有性に価値をおく立場から、このような一般論の展開に疑問を抱く向きもあろう。しかし各地・各時期の具体的な個別事例を特殊なものとして互いに無関係に理解するのではなく、全体の説明を体系化したいと考えるために、この階層の議論の必要性と有効性を認めたい。

これに対して第２の階層以下は特殊モデルである。第２の階層は小野　昭の階層モデル（小野 1988）でいう「技法のレベル」にほぼ相当する。現在の複数国家の領域を横断する規模には広域ではあるが、第１の階層の完全に汎地球規模の空間範囲と人類史の全体にわたる時間範囲よりは、相対的には限定された歴史的に固有な時空間である。本研究で主に照射するのはこの第２の階層のうち、更新世終末期の日本列島から極東大陸部という限定を持つ時空間である。第３の階層はより局所的で、当時の集団の生活圏内でのミクロな環境条件や、各集団に固有な文化的・社会的コンテクストなどを反映して、短い時間幅で移り変わる個別的な時空間である。本研究では第Ⅵ章・第Ⅶ章・第Ⅸ章で踏み込むことにな

る。この第３の階層の内にのみ実践的な研究を限定するべきとの考えもありえよう。しかし枠組みの議論を棚上げにしたまま、個別遺跡や個別資料の細かな分析を重ねても、おおもとの枠組みから外へ出ることはむずかしい。本研究では、枠組みの議論こそがむしろ急務との立場をとっている。

図 5.2.1　階層的モデルの包摂関係

各階層間の包摂関係を図 5.2.1 に示す。第２の階層は第一の階層の特殊な一部で、第３の階層は第２の階層の特殊な一部である。また第２、第３と抽象度を下げるにつれ、モデルは各地・各時期の歴史的な一回性の個別性に応じて、具体性を増すと同時に多数（無数）になろう。しかし筆者個人の力では全ての網羅はかなわない。そこで本章では第３の階層は問題点の指摘にとどめ、本章では主に第１と第２の階層のモデルを中心に考えていきたい。

（２）両面調整石器の一般的特徴

第１の階層は最も抽象度が高い。すべての地域・時代の両面調整石器に共通する内容の提示が理想だが、最大公約数的な内容となろう。両面調整石器それ自体は普遍的な存在である。約 170 万年前のアシュール石器群のハンドアックスから、ごく最近の現生狩猟採集民まで、石器を作り使う際の基本的な手法として、広く各地の各時代で長く作り使われてきた。このために全域的・一般論的には、特定の歴史的時空間を区切る指標にはなりにくい。しかし第２の階層以下の、局所レベルの個別地域に空間範囲を限るならば、その地域内の石器群変遷の中では特定の時点で両面調整石器が出現または消失し、時期的な指標になることも確かである。存在としては普遍的だが、個別の文脈の中では多様に利用されてきたと言える。また両面調整石器という上位分類群は、機能や用途、製作者の意図の違いなどを暗示する石器分類とは異なる。例えば両面調整の掻器や削器があってもよいし、尖頭器や石斧（斧形石器）でも両面調整でないものは、両面調整石器とは呼べない。

第Ⅱ章第５節（ｐ33）で両面調整石器の定義を紹介したケリー（Kelly1988）は、①石核、②頑丈で再生可能な刃部をもつ利器、③結果としての両面調整、という３つの側面をもつとも指摘した。これらは解釈論的説明と言えよう。以下ではこのケリーの議論を土台に、いくつかの検討を加えてみたい。

①石核としての両面調整石器：石核としての側面は、第Ⅲ章第３節で検討したように、接合資料で直接に証明されている。接合しない場合でも、背面を覆う先行剥離面の構成、側面観、打面周辺部の特徴や剥離角などを手がかりに、両面調整石器の整形時に生じた剥片を弁別できる場合も少なくはない。この点では、両面調整石器が石核を兼ねる場合があるとの理解に、大きな問題はない。小形の尖頭器や石鏃など小さい両面調整石器は石核を兼ねるとは考えにくいが、具体的に「何 cm 以下は石核を兼ねない」などと定義することはむずかしい。それでも仮に、小さな両面調整石器は石核を兼ねないと認めたとする。すると今度は、はじめから小形の素材剥片を選択して小さいこと自体が目的に作られたもの

と、はじめは大きくあったものがリダクションの結果として小形化したものとの識別が必要になる。この識別は原理的にはむずかしが、小形の石器も素材が両面調整石器から供給されたのであるならば、両面調整石器リダクションの枠組み（入れ子構造）で理解しなければならない。もちろん平坦調整が器体の全面を覆うと、素材の理解が難しくはなる。

②頑丈で再生可能な刃部をもつ利器としての両面調整石器：ケリーはまた、両面調整石器の刃部は、二次加工を加えていない剥片に比べて鋭さでは劣るが、耐久性と刃部再生可能性に優ると論じた。しかし耐久性の追及は後述の「特定の形状を求めた結果としての両面調整石器」にむしろ近いと思われる。より特徴的なのは刃部再生可能性であろう。刃部再生が行われることを前提とした石器は、変形を前提とした石器（変形指向石器）であり、特定の形を求めた石器とは性格が異なる。またはある程度は特定の形を求めてはいても、その許容範囲が広い。両面調整石器の調整剥片の中には、打面と背面とが交わる稜（先行剥離角）として、あるいは剥片の末端部の一部に、かつての両面調整石器の縁辺（＝利器としての刃部）の一部を、取り込んでいる剥片がある。こういった剥片のかつての両面調整石器の利器としての刃部の周囲を顕微鏡で観察し、使用痕跡の有無を確認することで、利器的な使用や刃部再生可能性については検証できるはずである。

ところが削器・掻器・彫器など、素材剥片の片面のみに二次加工を加えた石器にも、刃部再生は頻繁に認められる。刃部再生可能性だけならば、両面調整でなくても良いわけである。では両面調整石器の刃部再生ならではの特徴とは何か。これは先述①の石核としての利用に関連しそうである。削器・掻器・彫器といった非両面調整の剥片器種は、それらの刃部再生剥片を他の器種の素材として利用する例が認め難いことと、対照的である。素材供給を兼ねた刃部再生可能性こそ、両面調整石器に特有な意義と言えよう。

③結果としての両面調整石器：ケリーはさらに、着柄の都合やスタイル的な要求などから、特定の形を実現するために両面調整による整形がなされるとも述べている。これが結果としての両面調整石器である。石器の断面形を対照的な凸レンズ形に整えるとか、刃部の立体角度を一定範囲の中に規定するなどは、両面調整の技術によって可能になる。また押圧剥離による平坦整形（魚鱗状）では、生じる剥片類は他器種の素材として利用するには薄すぎるため、石核を兼ねているとは考え難い。そこで押圧剥離は「特定の形状を作り出す手段としての両面調整」に相当する場合が多いと考えてよいかもしれない。

この結果としての両面調整石器という考え方は、両面調整石器のすべてが、石核としての作用や刃部再生可能性を追求したとは断言できないことを意味する。しかし、石核や刃部再生を狙ったものと、そうでなく形を純粋に求めたものとの一義的な識別は難しい。そこで整形＝刃部再生＝素材供給の三位一体を前提として、そのうちの特殊な部分には、石核としての利用や刃部再生可能性を求めない例も含み得る、と考えるべきであろう。この「特殊な部分」をどうしても識別したい場合には、先述の「大きさ」や「押圧剥離」などが手がかりの一案となり得る、と考えておきたい。

（３）個別の各小地域における多様性

第２の階層については次説で詳細に論じることにして、先にミクロな階層での特殊モデルである、第３の階層の問題について考えてみたい。この第３の階層こそが、先史時代の集団の日常的な遊動範囲に、ゆるやかに対応すると考えている。一定の領域内に固有な植生や動物相・地形などを含めた景観に応じて、多様なあり方で技術が駆使され、その結果

として遺跡群が形成される。個別遺跡の詳細な分析が有効・必要であり、遺跡間連鎖や移動・居住形態の具体的な解釈に結びつく。南関東など土層堆積が厚く調査精度が高い地域では、この階層の議論を詳細に展開できる可能性がある。後述する第２の階層の議論は、第１の階層ほどではないが多少とも抽象化・単純化したものであり、具体的な個別地域や個別遺跡の事例とは、必ずしも調和的ではない。これに対し、実際の遺跡の事例が存在するのは、すべてこの第３の階層である。実際の遺跡事例では個別事情の特殊性が敏感に反映されるためか、両面調整石器による石材の運用に加えて、規格的な石刃や、礫器または不定形剥片による素材供給も共に現れている。時には一遺跡の表現型では両面調整石器によらない石材運用や素材管理が、主体となることさえある。両面調整石器による石材運用の中でも、非在地の特別な石材を用いる場合も、在地の多様な石材を用いる場合もある。はじめに大きな両面調整石器を用意して遺跡間で順次リダクションが連鎖する場合もあれば、はじめから小さな両面調整石器を多量に製作する場合もある。それらは各地の個別の環境や、各遺跡が形成された時点の個別な・特殊な事情に強く規定されて多様である。この階層においてはモデル的に考える場合にも、各小地域や小時期幅の歴史的固有性に合わせた形で、多数・無数のモデルが組み立てられる必要があろう。その作業への一部の着手を、本研究の第Ⅵ章、Ⅶ章、Ⅸ章で提示するが、多くは今後の課題である。

第３節　石器群構造の変遷

（１）更新世終末から完新世初頭の極東北部の両面調整石器群

更新世終末期から完新世初頭の極東北部（環日本海の北半）には、両面調整石器を主体とする石器群が広く展開した（第Ⅷ章）。ここでは、この広範囲ながら一定の限定を持つ時空間を、階層的把握の議論の中で「第２の階層」として位置づけ、そこに認められる特徴を見てみたい。もちろん、この時空間の中でもよりミクロな地域や時期では多様なあり方を呈しているし、この時空間以外にも下記の諸特徴が認められる可能性までをも、否定する意図はない。大陸側については発掘調査を含めた取り組みを開始している（第Ⅸ章）が、現時点では、日本列島の資料と対等の精度ではないために、よく分からない部分が大きい。そこでこの空間範囲の中でも、調査事例の多い本州島を代表させる。

第Ⅱ章でふれたように、本州島では後期旧石器時代を通じて、コントロールされた石核から規格的な形や大きさの剥片を量産し、これらを素材として各種の二次加工石器を製作するといった、石器製作の全体を素材生産の時点で統一するしくみが認められる。かつて稲田孝司が「統一的構造」と述べた（稲田 1996）あり方である。これを等価構造とよぶ（**図 5.3.1** の左）。この中でパターンを識別しやすい一部は、米ヶ森技法、瀬戸内技法、各種の石刃技法などとして把握されてきた。また識別しにくい部分も、二極構造や二項モードなどの概念で説明が試みられている。その背景には、後期更新世の中でも $\delta^{18}O$ ステージ２という冷涼な環境の下で、居住地の移動を繰り返す遊動生活を想定できる。道具の可搬性(重さや大きさ)への縛りが、この等価構造に現れていると説明したい。この時期の斧形石器は両面調整による石材の管理・運用ではあるが、ナイフ形石器・台形様石器・掻器・削器などの剥片石器類とは素材供給関係が独立していることが多く、この意味では構造外的性格が強い。排他的な石材選択（ホルンフェルス・粘板岩・蛇紋岩など各地の石材環境に応じて多様だが、剥片石器類とは異なる石材を選択する点で同型）も傍証となろう。

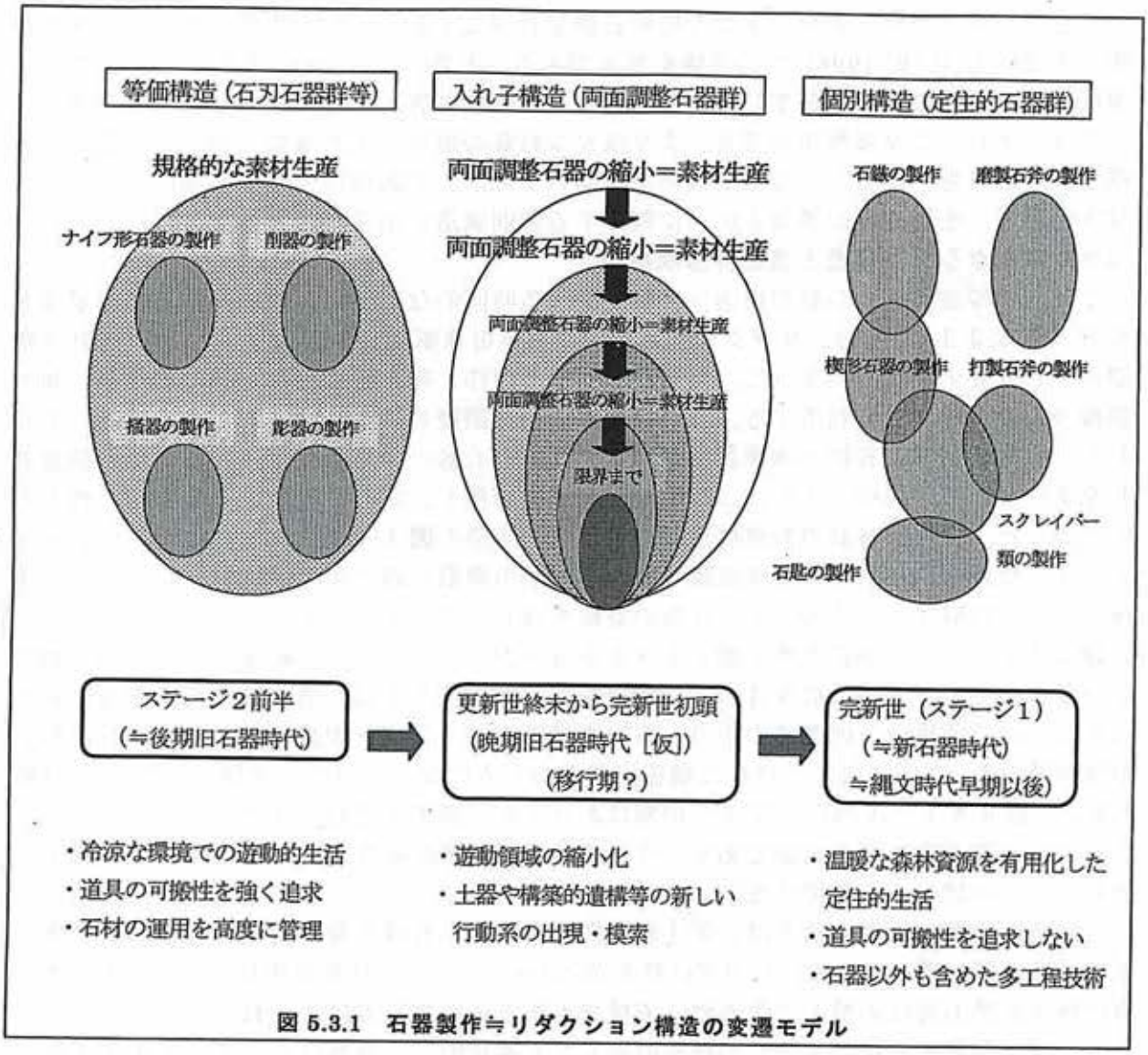


図 5.3.1　石器製作≒リダクション構造の変遷モデル

一方でいわゆる「縄文早期～前期」以後では、素材供給の点で石器製作技術の全体を統一するしくみは認めにくい。石鏃なら石鏃、打製石斧なら打製石斧などと、個別の器種ごとに石材が運用される。先述の斧形石器のような構造外的な性格が全体に広がり、各器種は相互に構造外的とさえ言える。かつて稲田孝司が「縄文文化の一遺跡におけるそれぞれの石器器種は、非常に分化しており、一定の統一的な石器製作技術の要素で一つの石器群として全体を結びつけることはきわめて困難なように思われる。それは、労働形態の多様化と個別化の進展の結果であるにちがいない」と解釈した（稲田 1969）あり方である。これを個別構造と呼ぶ（**図 5.3.1** の右）。剥片石器製作の石核や接合資料を観察すると、まるで無作為に打ち割っているように見える。石鏃と楔形石器のように製作工程や素材供給が器種間で一部共通する場合もあるが、この場合も規格的な素材量産とはみなしがたい（註４）。また両面調整技術は石斧や石篦、押圧剥離による尖頭器・石匙・石鏃などの製作に多用されるが、後述する両面調整石器群のような、素材供給を含む石器製作技術の全体を覆うあり方ではない。この背景には、完新世（ステージ１）の温暖・湿潤な環境下で、

土地を定着的に利用し森林の多様な植物資源を有用化するために、生活の諸技術が多工程化・多種類化（山田 1996）する事情を想定できる。定着的・定住的な生活では道具や道具素材への可搬性の要求が低下し、多工程化した技術は必要に応じて、より大きな道具、より多量の道具、より多種類の道具、より様々な材質の道具、より複数の部品や材質から構成される道具を、作る。この生活技術系全体の変化が、石器部門の平面へ写像しているあり方として、それぞれの器種を別々に製作する個別構造が出現したと解釈したい。

（2）リダクション構造と遺跡群形成構造

これらの等価構造から個別構造へと移り変わる時間的な中間に、両面調整石器群が展開する（**図 5.3.1** の中央）。リダクション構造は、第Ⅲ章第４節の**図 3.4.2** での「入れ子構造」としてモデル化したように、両面調整石器の製作＝縮小時に生じる調整剥片を、他の器種の素材剥片として利用する。言い換えると両面調整石器が石核として作用する。すなわち、石材を利器と石核の両機能を兼ねる両面調整石器の形で管理する。またその調整剥片を素材として「製作」された二次的な両面調整石器も、同じく石核として作用し得るものであった。また遺跡群の形成構造は、第Ⅳ章第４節の**図 4.4.1** に示したように、各種の石材産地付近や中継的な大規模遺跡を組み込む形の移動行路の中で、多様な規模と内容（器種組成と石材構成）の変異をもつ複数の遺跡を残してゆくものであった。

図 3.4.2 に示した両面調整石器のリダクションが、一つの原石の縮小方向と石核／剥片の交替方向との２方向に拡張性の高い構造を有していることは、遺跡群の形成構造における複数の石材獲得地との関連の中で、石材の獲得タイミングと実際の使用時点における石材保有量とを、文脈に応じて自在に調節可能なあり方になっていると評価できる。以上（**図 3.4.2** と**図 4.4.1** の連携）を、第２の階層における両面調整石器群の構造として提示する。これは本研究の実質的な結論であり、今後の各地での個別研究、あるいは一国史を超えた比較研究の前提として定位する。

この両面調整石器群の構造は、第Ⅰ章で問題とした「狩猟具発展史観」と土器の有無による「旧石器・縄文二分論」の中では見えがたかった。「狩猟具発展史観」では、先述のように両面調整石器は石槍などとされ、石核でもあるとの着目点は生まれにくい。一方で、両面調整石器群の構造は土器の出現を前後しても連続的で、画期はむしろ土器出現よりも古い時点と新しい時点とに認められそうである（厳密な線引きは将来の課題である）。しかし土器の有無を基準とする「旧石器・縄文二分論」は、時代区分論という階層の異なる論点も巻き込みつつ、この石器群構造の画期の把握を見えにくくする。石器の編年研究も、漸移的・連続的な変化を暗黙の前提に、現象をなぞるだけの作業を実証的研究と錯視してきた感がある。このために複数の石器器種がめまぐるしく変遷するとか、遺跡ごとの形態組成や器種組成の変異が複雑であるなどとして（現象の表面のみに着目する限りこれらは当然の帰結である）、明晰な見通しが得られることはなかった。本研究において両面調整石器群の構造をモデル化したことで、これまで提示されてきた画期のいくつかには、再検討が求められることになろう。

（3）時代背景について

第２の階層における、石刃石器群（等価構造）から両面調整石器群（入れ子構造）への遷移の背景を語るには、環境イベントや日本海対岸地域との比較が必須である。しかし気候変動のミクロな地域性や、気温変化の植生への影響度合の評価が未知数であること、日

本海対岸地域資料の報告精度（第Ⅷ章）といった、比較対象側の問題もある。現状では時代背景や歴史的評価への論及は時期尚早かもしれない。しかし、このような不確定性をことわった上で、あえて方向性をのべてみたい。

稲田孝司は大形獣狩猟が両面調整尖頭器の出現を要求したとの仮設を示したが（稲田1969）、化石動物の消長からは逆に大形獣狩猟から小形獣狩猟への変化の可能性が高く（河村 2000）、この変化が両面調整尖頭器の出現時期と対応するか否か定かではない。また小畑弘己は古植生復元のデータを提示し、森林景観の増加と両面調整石器の組成参入が対応するとの年代観から、「手持ちの石槍」としての両面調整石器が、森林棲の動物の捕獲に大きな力を発揮したと説いた（小畑 2000）。いずれも両面調整石器を「狩猟具」と理解し、狩猟対象獣が変化したために、これに対応して狩猟具や労働編成の変化が生じたとの理解で共通している。しかし動物遺存体の欠落するロシア極東部や日本列島を含む島弧地域では、狩猟対象獣の変化を具体的な資料で実証することは困難である。

むしろ小畑が示した、両面調整石器（尖頭器）の利用を草原景観から森林景観への遷移に関連付ける視点に、狩猟対象獣の変化とは異なる意味で注目したい。パッチ状植生における森林景観の広がりは集団の遊動領域を狭め、これに関連して石材産地への接近頻度の変化、植物質資源の加工必要性の増加などが互いに複雑に影響して、等価構造とは異なる石材管理システムを出現させたと考えておく。現状では論証に必要なデータが不確定であり、断定は困難であるために見通しとして述べるにとどめる。

（4）両面調整石器群の歴史的意義

更新世終末期は、$\delta^{18}O$ の気温変化曲線の上で寒冷なステージ2から温暖なステージ1（現在＝完新世）への移行期である。相対的に安定した寒冷状態が持続したステージ2前半とも、また温暖状態で安定しているステージ1とも異なり、ベーリング・アレレードの温暖期や、古ドリアス・新ドリアスの寒冷期に代表される急激で不規則な寒暖の振幅が見られる。

一般に気温の変化が生物活動に与える影響は、年間を通じて気温や降水量に変化の少ない低緯度地域や高緯度地域よりも、これらの変化にとむ中緯度地域でより強いと想定できる。更新世終末期の気温変化自体に地域差が認められる可能性（福沢 1995 など）からくるミクロな生態学的条件の相違に加えて、人類の場合には各地で伝統的に培われた文化的慣習などにも規定され、実際には個別地域ごとに多様な契機（佐藤 1992a）で遊動領域の縮小が進行した可能性が高い。この流れの中で、時間的・空間的な諸変異を生みつつ根底では同じ構造を共有する石器群に、石器の集約的大規模準備地と個別消費地との時間的・空間的分化の拡大、石器の埋納行為、細石刃技術の受容・放棄、土器の採用、住居跡群や貯蔵穴の出現（註5）などの新しい行動系が出現してくる。本研究ではこういった石器以外の活動痕跡について深く立ち入らないが、これらは等価構造の石刃石器群には顕著ではなく、両面調整石器群において広く認められるようになる事態である。

両面調整石器は一言でいうならば一つの石で多くの種類の労働をする道具である。これを使いこなすには、一つの石が縮小してゆく複雑な過程の全体を的確に把握し、予定される労働内容と、季節移動の中での石材獲得可能地への接近機会との兼ね合いを、完全に掌握して制御する複雑な認知が必要である。このような性格は石刃石器群にもみられるが、規格的な剥片を等価的に量産することで必要な諸労働に対応した等価構造の石器群と比較

して、両面調整石器群においてより顕著と考えている。この複雑な認知が、遊動領域の小地域化に関連する上記の新しい行動系の中で醸成された、あるいはこれらの行動系を喚起した可能性が高い。

ステージ1の完新世的な自然環境への本格的な人類の適応は、第2の階層の中でも本州島では、土器の多量化や大規模集落の増加などを確認できる約 9000cal.B.P.以降と考えられる（谷口 2002c、2004 など）。縄文的な個別構造石器群の背景にある、植物資源の多様な利用は（山田 1996 など）、先述した両面調整石器群の一つの石を多角的に利用する発想や、新しい行動系によって醸成された認知や思考によって、すでに準備されていた可能性を想定できる。なお人類史は定住化に向けて定向進化したわけではない。完新世以後の本州島に限定してさえ、遊動性が高まったり再度定着化したりといった変異は頻繁に生じている。

以上の議論をまとめる。①更新世終末期の気候変化を、両面調整石器リダクションによる石材運用で移動範囲を縮小させながら遊動生活で適応した点、②この中で生じた新しい行動系によって、後の完新世適応を準備した点、この2点をもって両面調整石器群の第2の階層における歴史的意義とする。

第4節：類似の先行研究との相違

（1）構造の生成要因を説く研究

以下では、両面調整石器群の認識の出発点である稲田孝司、近年活発に両面調整石器を論じている国武貞克と田村　隆にしぼって、各氏と本研究との違いを明らかにしたい。

第Ⅱ章で述べたように、稲田孝司は石器製作を構造的に把握し、尖頭器石器群の出現を「旧石器的石器製作」の解体と理解した（稲田 1969）。本研究の議論はこの延長線上にある。しかし稲田は尖頭器石器群に「統一的構造の崩壊」をみたが、本研究は、両面調整石器を中心とした石材の運用という点で、統一的な構造は、石刃石器群（＝等価構造）とは大きく異なる形ながら尖頭器石器群や細石刃石器群にも確固として存在すると理解し、稲田の意味での統一的構造が崩壊するのは、個別構造の定住的石器群においてであると考える。稲田論文が発表された当時は、リダクション論、石器製作や石材消費の遺跡間連鎖、移動・居住形態、遺跡形成過程といった行動論的な議論が本格的に開始する前であり、また利器が石核を兼ねる両面調整石器の両義性も明らかにされていない。これらの点は、第Ⅱ章第2節で検討したように、加藤晋平氏に始まる石器群間変異、砂川遺跡に始まる遺跡間連鎖、削片系細石刃石器群の技術論的研究、北米プロセス考古学の技術組織論などに関する一連の議論が積み重ねられた後に研究を開始した本研究との、世代的な差といえる。こういった研究の蓄積の中で、稲田の時点では見えていなかった、両面調整石器群に独特の「統一的構造」＝「入れ子構造」が見えてきたわけである。

しかしより大きな相違は以下である。稲田は、尖頭器の出現の背後に新しい労働形態（小型獣狩猟→大形獣狩猟、集団内の閉鎖的で未分化な労働→分化した特定労働の集団間協業）の萌芽を読み取り、この特化した狩猟のための尖頭器の製作が、旧来の石器製作構造の中での矛盾となって構造の変化が生じたと論じた。弁証法的な唯物史観の論法、洗練された形の「狩猟具発展史観」で、構造の成り立ちを説いたのである。また近年では国武貞克も「両面体調整石器群」の生成を論じている。第Ⅳ章第1節で述べたように、国武は相模野

台地・武蔵野台地・下総台地の石器群を石材に着目して検討し、量依存型（一括搬入型）＝石材の供給頻度が低い状況への対応が、「両面体調整石器群」の出現契機となったと論じた（国武 2002、2003）。

これらに対し、本研究は「構造」（しくみ、ルール、文法）の把握と提示を主目的としており、「構造」の生成要因の解明や生成過程の詳細な追跡は、現時点では中心的な関心ではない。「構造」を把握する目的は、大陸部を含めた広域に共通する枠組みへの希求にある。この意味で、もとより空間的な思考（註６）であり、稲田や国武のように時間軸上に由来を問う研究とは性格が異なる。また北米プロセス考古学の強い影響下にある議論のように、両面調整石器を利用する意味（機能）を、不安定な遊動生活や長距離移動と結びつける解釈（佐藤 1995、加藤 1996a など）にも、本研究は賛同しない。不安定な遊動生活や長距離移動は、石刃石器群のような等価構造でも解決可能に思われるためである。その由来や機能はあえて問わず（註７）、端的に「構造」があったのだとの前提で、その内容自体と範囲を考えてゆく。このような姿勢は、構造の生成や機能を説く研究と対立するというよりも相互補完的な位置づけにあり、言い換えれば研究戦略上の役割分担と考えている。

（２）石器群の複雑な実体を把握する研究

田村　隆は「尖頭器の石材消費（バイフェース・リダクション）」を「第３項」ととらえ、その出現によって「二項性」として把握できた後期旧石器的な「石材消費戦略」の「構造が大きく変換する」（田村 2002、58 頁）と述べた。これは一面では稲田や本研究に近い考え方であると受けとめたい。しかし田村の特徴は、両面調整石器による石材消費戦略を、あくまでも他の互換的な一連の戦略束の中の一つとして把握する点にある。これは石器群全体を規定する構造として両面調整石器を評価する本研究とは、異なる視点である。田村は「デザイン戦略」の互換的な束が、様々な組み合わせで石器群に現象する様子を把握することで、石刃技術や石刃技術によらない石核リダクションの剥片供給などが、両面調整石器に複雑に絡み合う実態を解析している（田村 1998、2003）。

繰り返すが、本研究が両面調整石器群の概念を用意する目的は、大陸部を含めた広域空間を共通に議論する枠組みを求めることにある。そこで各地の実態の多様性は承知の上で捨象する。したがって両面調整による石材管理を主体的なものとみなし、他を補助的なものと仮定する。この点で、特定小地域（東関東）の複雑な実資料の分析を手がける田村とは目的が異なる。田村の研究は、本章でいう第３の階層をあつかう優れた研究の一つであると評価したい。

また田村は「各石器群には新旧の関係があると考えられるが、いうまでもなく、それは継起的な、また単線的な時系列におかれるものではなく、時に複線化し、交叉し、逆行し、相互変容する等々といった動態性をもっている」（田村 2002、 51 頁）との理解から、段階論的な把握を強く批判する。しかし本研究の狙う第２の階層では、段階論的な把握が有効であると考える。ここには方法上の相違がある。先に「等価構造」→「入れ子構造」→「個別構造」の３段階を想定したが、これらそれぞれの内部では（よりミクロな階層では）、田村の言う「単線的な時系列におかれるものではなく、時に複線化し、交叉し、逆行し、相互変容する等々といった動態性」としての把握が必要な部分もあろう。

さらに田村は尖頭器（石槍）の「割り出し」と「割り取り」を区別した（田村 2001）。これは重要な論点である。従来のように尖頭器（石槍）という分節を用いる限り、核を兼

ねる両面調整であろうと剥片素材の周辺調整であろうと、先端が尖るという定義で「尖頭器」という同じカテゴリーに入ることになってしまう。両面調整・周辺調整などの区別は、大形・中形・小形や柳葉形・木葉形などとともに、あくまでも「尖頭器」に付随する属性、「尖頭器」を形態細分する基準の一つにすぎなかった。こうした思考はおそらく、ナイフ形石器文化→尖頭器文化→細石器文化との示準石器による段階的変遷の枠組みの中に、個別の遺跡から出土した尖頭器を位置づける必要上からのものと思われる。また「狩猟具の進歩」という史観を描く上でも好適な分節であったのかもしれない。

しかし素材供給・石材運用の点では両者は大きく異なる。本研究の議論に即すると、「割り取り」は石核から量産された素材剥片から製作される点で、むしろナイフ形石器などと同型の石核リダクション、等価構造を含む。一方の「割り出し」は石核を兼ねる両面調整石器による入れ子構造の石材運用を含む（註８）。尖頭器という分節は器種分類（ひいては時期区分）を狙うものだが、石材運用の把握を狙う上では、「割り出し／割り取り」や両面調整石器などの分節がむしろ有効である。小形尖頭器(註９)は、石核リダクションで連続的に剥がし取られた剥片を素材にしている点で、石材運用上はナイフ形石器と同じカテゴリーに含めるべきであり、逆に大形の両面調整尖頭器は、石核を兼ねる両面調整石器リダクションの点で、削片系の細石刃核などと同じカテゴリーに含める必要がある。

註

1）階層は時間・空間の両方に関するものである（小野 2001）。

2）ルロワ＝グーランは、単位重量あたりの有効刃部長を指標に、石器製作技術の変化と人類の進化を対応させたが（Leroi - Gourhan 1964[荒木訳 1973]）、ハンドアックスの有効刃部として核の本体のみを扱い、整形時に生じる調整剥片の縁辺は刃部としてカウントしていない。

4）ミクロに第３の階層のレベルで見るならば、東北や北海道島の一部、アムール流域などには、規格的な素材剥片の量産や、両面調整石器による素材剥片供給が引き続き行われる地域・時期もある。

5）両面調整石器や構築的住居跡などは、要素としてならば、アシュール石器群のハンドアックスや、ビルツィンクスレーベン遺跡の住居跡群など、既に前期旧石器時代に存在した。特定の生態学的・社会的条件がそろうなら、要素としての技術や生業などは他集団と独立に採用され得るし、しかるべき条件下においては、たやすく放棄され得ると考えている。また伝播の動きがあっても、受け入れ側の社会的環境次第では受け入れられない、あるいは選択的な受け入れになるとの指摘（岡本 1962）も重要である。総じて、特定の要素を指標とする短絡的な伝播論は受け入れがたい。

6）大陸側資料の問題は、本研究にとっては空間範囲の区切り方の問題として存在している。これは現行の日本国の領土を所与とした一国史的な前提と、その入れ子として現行の県郡市町村といった行政区分を所与とする小地域史的な前提への懐疑である。かつて国外との比較は系統論と同義で（大井 1968 など）、細石刃石器群など系統関係の議論が活発に行われた学史的経緯がある。しかし系統を国外（または他地域）に求めるという、その発想自体が、現状の国境を所与として内外に分ける一国史（またはその入れ子としての小地域史）的な前提に立っており、みとめがたい。

7）問われた場合の返答として、植生環境の変化＝森林景観の増加による遊動領域の縮小化によって生成したとの見通しを、一応は用意している。国武氏の説と矛盾するものではないが、現時点では古環境データの蓄積による検証を待つべきものである。

8）ただし「割り取り」の中には、剥片を素材としながらも両面調整に仕上げられた小形のものや、周

辺調整・部分調整・両面調整を問わず、両面調整石器由来の剥片を素材とするものが存在し得る。

9）これは周辺調整・部分調整、小形で剥片素材の両面調整尖頭器に該当する。本研究は細石刃以前の尖頭器石器群でも、大形の両面調整尖頭器に関しては、両面調整石器による石材管理を確認できるとの立場をとる。細石刃以前に位置づけられる真人原遺跡A地点における、多様な剥片を素材とする小形・薄手の周辺調整尖頭器と、大形の両面調整尖頭器との間の管理性が異なるという認識（第Ⅳ章、第Ⅵ章）が根拠である。

第３部　各地の具体相

第Ⅵ章　信濃川流域における尖頭器石器群の遺跡間変異

第１節　信濃川流域の環境と遺跡

（１）本章の目的

小形尖頭器石器群は、本研究の主題である両面調整石器群の中では第Ⅰ期に相当する（第Ⅱ章第５節参照）。新潟県小千谷市に所在する**真人原遺跡**のＡ地点とＣ地点の調査によって、両面調整・周辺調整・部分調整などの多様な小形尖頭器を特徴とする石器群の内容が明らかになった（小野編 1992、1997、2002）。両地点では尖頭器の特徴が共通する一方で、石核リダクションと石材組成が大きく異なっている。ところが両地点の間で接合関係が確認されたことから、石核リダクションと石材組成の相違は、一つの技術系の中での部分的変異として理解できる可能性が開けた。同時にこの変異が生じた理由を説明する必要が生じた。本章では、信濃川流域という地域的限定と、周辺調整尖頭器を示準石器とする石器群という時間的限定（註１）を設け、この中で石材組成の遺跡間変異を検討することで、遺跡間の連鎖と集団の行動の解釈を試みる。両面調整石器群のリダクション構造の変異が、具体的な個別時期・地域の文脈の中で現れている一事例である。

（２）地質と石器産出層の年代

甲武信ヶ岳に源を発する千曲川は長野県域を北流し、新潟県境で名前を信濃川に変えて日本海に注ぐ。中流では河成段丘が発達し、津南町・中里村域で右岸に８ないし９つの面を展開する。より下流の川西町域－小千谷市域では、ローカルな地殻変動のために面の連続に変化が生じている。これらの河成段丘は後期鮮新世の魚沼層群（小林ほか 1986）を基盤とし、これを削剥する礫・砂・シルトの水成堆積物の互層をへて、離水後に堆積した火山灰や大陸レスに由来する風成のローム層、漸移層、黒ボク土と連続する。ローム層は、古い順に谷土ローム、米原ローム、貝坂ロームが区分されている（新潟火山灰グループ 1981、1995）。段丘面の標識地である津南町域での段丘面形成年代は、米原面で約 30～14 万年前、貝坂面が約 5 万年前、正面面は約 2.5 万年前と考えられており（早津・新井 1981）、ローム層の堆積を欠く大割野面は完新世以後の離水である。

後期旧石器は貝坂ロームから産出する。貝坂ロームは正面面でＡＴが検出されているため、その堆積過程中にＡＴが降下した程度の形成年代と言える。ローム層の厚さは、米原ロームと貝坂ロームを共にのせる朴ノ木坂面の下モ原Ⅰ遺跡で約３ｍ（佐藤ほか 2000）だが、貝坂ロームのみをのせる正面面の正面中島遺跡では約１ｍ（佐藤・佐野 2002）、さらに下流の真人原遺跡では 0.5m未満（小野編 2002）となる。後期旧石器の時間幅の全体が１ｍに満たない層厚範囲に圧縮されて産出するため、層位学による相対編年は不可能といってよい。同様の理由から、純層ではなく火山ガラスのピークとして認識される広域テフラや、^{14}Ｃによる年代測定では、埋没後の移動を受けた石器群の垂直分布と、テフラや ^{14}Ｃ試料との関係が評価しにくく、数値年代の検討には限界がある。このために石器群の編年は、主に石器自体の技術形態学な検討を中心に行われている（佐藤 2002 など）。

（３）尖頭器石器群の確認状況

この地域において、発掘調査で周辺調整・部分調整の尖頭器を検出した遺跡は、小千谷市の真人原遺跡、中魚沼郡津南町の**道下遺跡**（山本ほか 1999）のほかに、同じ津南町の

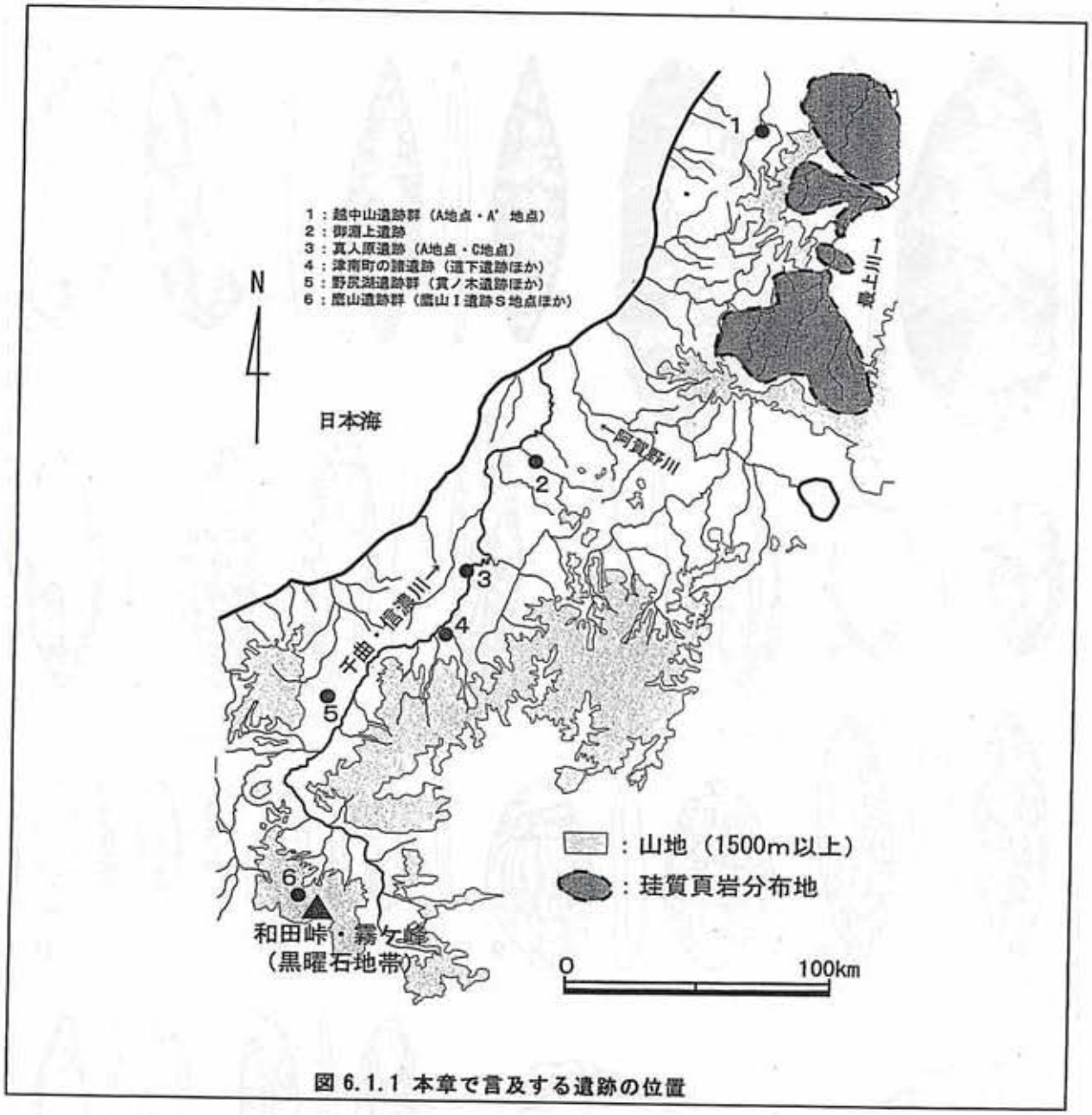


図 6.1.1 本章で言及する遺跡の位置

居尻 B 遺跡（鈴木・新田 1999）、**貝坂桐ノ木平 A 遺跡**（山本ほか 1999）、**越那 A 遺跡**（原・宮田 2000）、**雨池 A 遺跡**（小谷 2000）などが確認されている。また信濃川を津南町域から約 70km 下った地点で合流する五十嵐川流域には、瀬戸内系のナイフ形石器との供伴が問題とされた南蒲原群下田村の**御淵上遺跡**（中村 1971、1977）が所在する。**図 6.1.1** にはこれらの遺跡の位置を、**図 6.1.2** には代表的な石器を示した。真人原遺跡の両地点は第Ⅳ章第 3 節の**図 4.3.2～4.3.3** を参照されたい。近年の調査が多く過去の調査の再整理も企画されているために、定量的な分析に耐える詳細な情報の公表は、そのほとんどを将来に期待されている。佐藤雅一氏のご教示や概報などによると、津南町域の尖頭器石器群の諸遺跡は、貝坂桐ノ木平 A・道下・越那 A・居尻 B がいずれも貝坂面に立地しているという。雨池 A は米原Ⅱ面に相当する志久見川右岸の高位段丘面である。真人原遺跡が立地する下

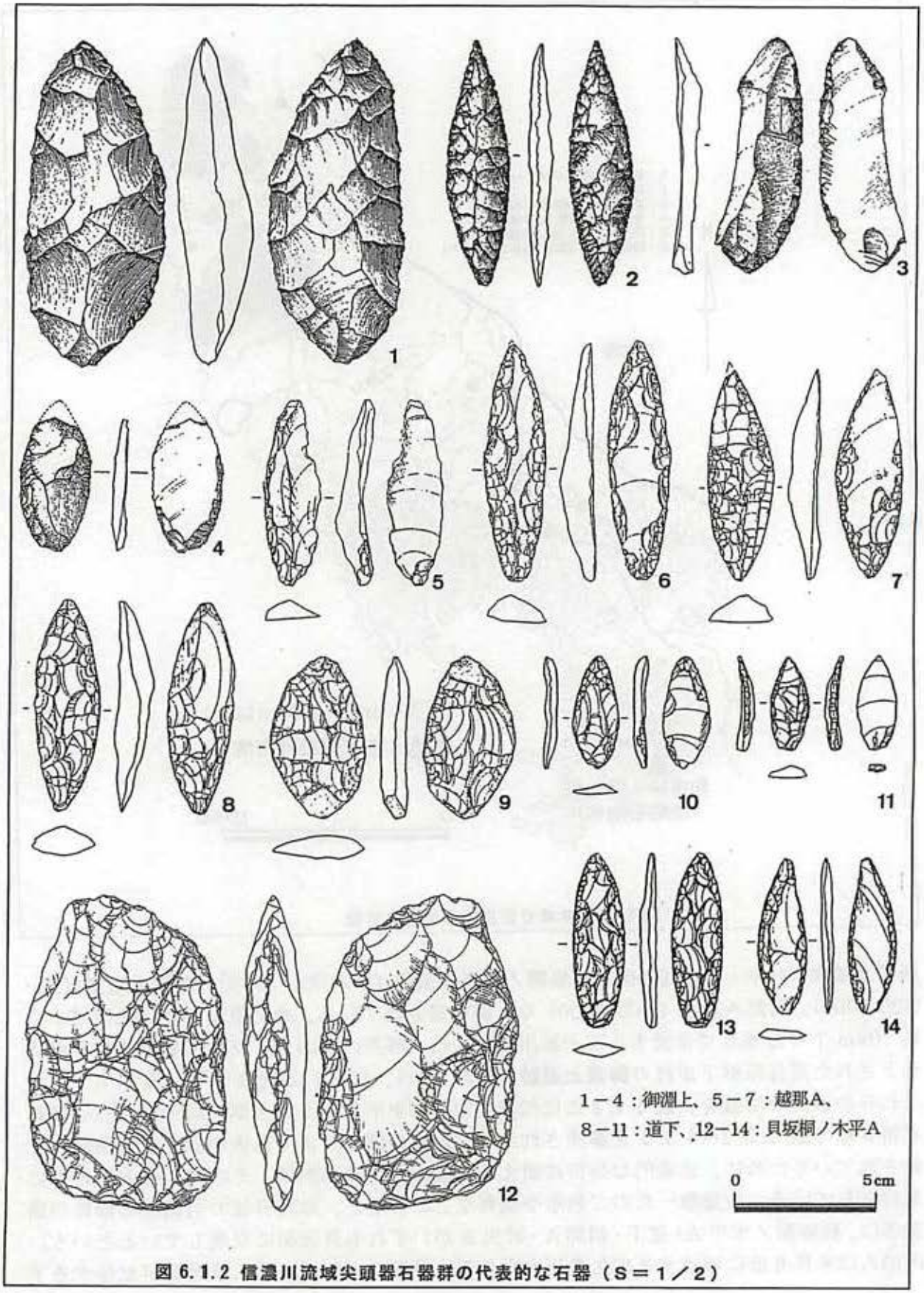


図 6.1.2 信濃川流域尖頭器石器群の代表的な石器（S＝1／2）

原Ⅰ面は、津南町域で多くの尖頭器石器群をのせる貝坂面よりも一段低い、正面面に対比されてきた（中村 2002）。しかし、この地域の段丘区分と対比は従来の成果を大幅に見直す必要があるとされ、仮称「真人原面」が提唱されるなど（高浜・大塚ほか 2002）、真人原遺跡と津南町域との段丘対比は確定していない。先述のようにローム層の堆積が薄いとの事情から、これらの遺跡群は主に石器の技術形態学的な検討によって、ナイフ形石器群よりも新しく細石刃石器群よりも古い「尖頭器石器群」と理解されている（小野編 1992、立木・高橋 1999、佐藤・山本ほか 1999、佐藤 2002）。数値年代は広域テフラ、また北関東や相模野台地での石器群の層位学的シーケンスやローカルなテフラからの推測で、「1.5～1.4 万年の時間幅の中におさまるであろうと暫定的にむすんでおく」とされた（小野編 1992 p 60）。しかし相模野台地において近年の複数遺跡での ^{14}C 測定値の蓄積を経て年代観が改められ、小野が真人原遺跡の部分調整尖頭器を対比したＢ１上部～Ｌ１Ｈの尖頭器石器群は、今日ではおよそ 18,000～17,000B.P.（暦年較正して 21,000～19,000cal.B.P）の範囲で理解されている（砂田 1999）。

（４）石材環境

この遺跡群を取り巻く石材環境について述べておく。ミクロな石材環境としては、津南町付近の遺跡から出土する岩種の現在の産出状況が、津南町域とその周辺で綿密に調査されている。これによると志久見川で黒色安山岩（＝無斑晶質安山岩）、清津川で暗灰色ないし黒色の頁岩、中津川で各種の凝灰岩類などが、河床転礫として採取できるという（岡ほか 1998、山本 2000）。これらの支流と信濃川本流との合流点より下流では、水磨や淘汰が進むとはいえ上記岩種が採取できると考えてよい。マクロな石材環境としては、津南町から北東に約 150～200km の山形県の内陸部に、寒河江川や最上川を中心とする良質な珪質頁岩を産出する一帯がある（秦 1998）。千曲川の上流では、南西に約 100km の距離に和田峠や霧ケ峰など、中部高地の黒曜石産地群が存在する。これらの良質な珪質頁岩や黒曜石も、様々な量や状態で尖頭器石器群の遺跡から出土している。

第２節　真人原遺跡の石核リダクションと尖頭器製作

（１）真人原遺跡の石核リダクション

両面調整石器群の個別地域・時期では、両面調整石器リダクションによる剥片器種への素材供給だけではなく、利器を兼ねない塊状の石核をもちいた素材供給が併用されることがしばしばある。とりわけ第１期の小形尖頭器石器群ではこの傾向が強いようである。真人原遺跡でも塊状の石核は C 地点で 10 点出土しており、これらと同じ岩種で多量の剥片が存在し、接合関係も確認できる。利器を兼ねない塊状の石核の運用がなされている場合、第Ⅱ章第３節で紹介したコア・リダクション（以後、石核リダクションと表記する）の概念の適用が可能であり、また必要となる。つまり真人原遺跡では両面調整石器リダクションと石核リダクションが併用されている。そこで剥片や石核、接合資料の観察から読み取れる剥片剥離のパターンを、石核リダクションとして検討しておく。

真人原遺跡では A・C 両地点をあわせて４種類の石核リダクションを識別している。これを**表 6.2.1** に示した（註２）。なお、これらは現象を整理・記述する目的で識別したものの、互いに排他的なものとは考えていない。複数の技術や手順を同時に有し、石材の保有量や石核の縮小などに対応して適宜使い分けるものと理解している。

表 6.2.1 真人原遺跡 A 地点・C 地点の石核リダクション

類型	特徴	残核形状
石核リダクションⅠ類	打面調整を行なわずに厚手・大形の縦長剥片を連続的に剥離するもの。打面転移も適宜行なう。	直方体または立方体
石核リダクションⅡ類	打面と作業面とを頻繁に入れ替え、すづまりの剥片を連続的に剥離するもの。	半球状またはつぶれた円錐状
石核リダクションⅢ類	打面と作業面とを頻繁に転移して入念な打面調整を行い、厚手・大形の縦長剥片を連続的に剥離するもの。	出土していないため不明 剥片の接合例から存在を推定
両面調整石器リダクション	両面調整石器の製作・刃部再生が素材剥片の供給と一体化しているもの。	円盤状または尖頭器

Ⅰ類は C 地点の無斑晶質安山岩に典型的に現れている。縦長剥片の剥離後は、リダクションの進行と石核の小形化に応じて、打面を頻繁に転移するようである（図 6.2.1）。

Ⅱ類は C 地点の粗粒の珪質頁岩（おそらく山形産ではなく在地石材）や珪質凝灰岩に典型的に現れている（図 6.2.2）。より良好な接合例は未報告ではあるが道下遺跡でも多数確認されている。また御淵上遺跡で「握斧」として報告されている例（中村 1971、1977）の一部にある大形の石核も、本類型の残核であると考えられる。

Ⅲ類は A 地点の良質の珪質頁岩（おそらく山形産）に典型例が現れている（図 6.2.3）。しかし本類型のみは、石核の本体の出土を確認していない。剥片の観察では、背面にかつての打面の縁辺が残る剥片の存在が目立ち、頻繁な打面転移を示す。石核調整を示す稜付きの縦長剥片も出土している。しかし円盤状の打面再生剥片が出土していないことから、打面の劣化に際して石核を輪切りにする打面再生よりも、打面や作業面との頻繁な転移や、打面縁辺部の入念な調整で、石核リダクションの遂行を図ると考えられる。打面転移は 180 度だけでなく 90 度、斜め方向やねじれ方向も含むため、石核は円盤形、半球形に近い形を含むと想定できる（註３）。これらに、第Ⅲ章第３節で検討した両面調整石器リダクションを併用するのが、真人原遺跡の素材供給のあり方である。

（２）尖頭器と素材の選択

A・C の両地点で、欠損品も含め多く出土している小形の周辺調整・部分調整の尖頭器は、素材剥片の背腹両面が残る例では器体が薄い。ゆえに石核リダクションⅠ類やⅢ類で生じる大形で厚手の縦長剥片を素材としてはいない。側方観が湾曲する例、背面の剥離面構成が求心状の例もある。これらを図 6.2.4 に示した。両面調整尖頭器を含む両面調整石器の調整剥片などの、様々な契機から生じる薄手の剥片を素材とするようである。欠損品とともに多く出土することからは、使用による損傷に際して、石核リダクションや両面調整石器リダクションで新たに素材を用意し、始めから作り直して補充する石器、一点の更新間隔の短い存在である可能性を指摘できる。どちらかというと臨機的で使い捨て、多く作って頻繁に廃棄するような性格が強いとも言える。それでは大形で厚手の縦長剥片は、いかなる目的で量産されたのだろうか。削器（註４）や彫器はこれらを素材とする例が多い。また大形の剥片の縁辺に不規則で部分的な二次加工や微細剥離がある例が多く、素材剥片の形状に大きな変更を加えずに使用する場合もありえよう。

真人原遺跡では、A・C 両地点ともに両面調整尖頭器の数は少ない。図 6.2.5 は両地点の両面調整尖頭器および未製品を集めた。多くは剥片素材の可能性が高く、石核を兼ねる多機能道具というほどの例はむしろ少ない。示唆的なのは両面調整尖頭器の整形途上品と考えられる図 6.2.5 の３である。腹面の全面を平坦調整が覆うが、背面には素材剥片の並

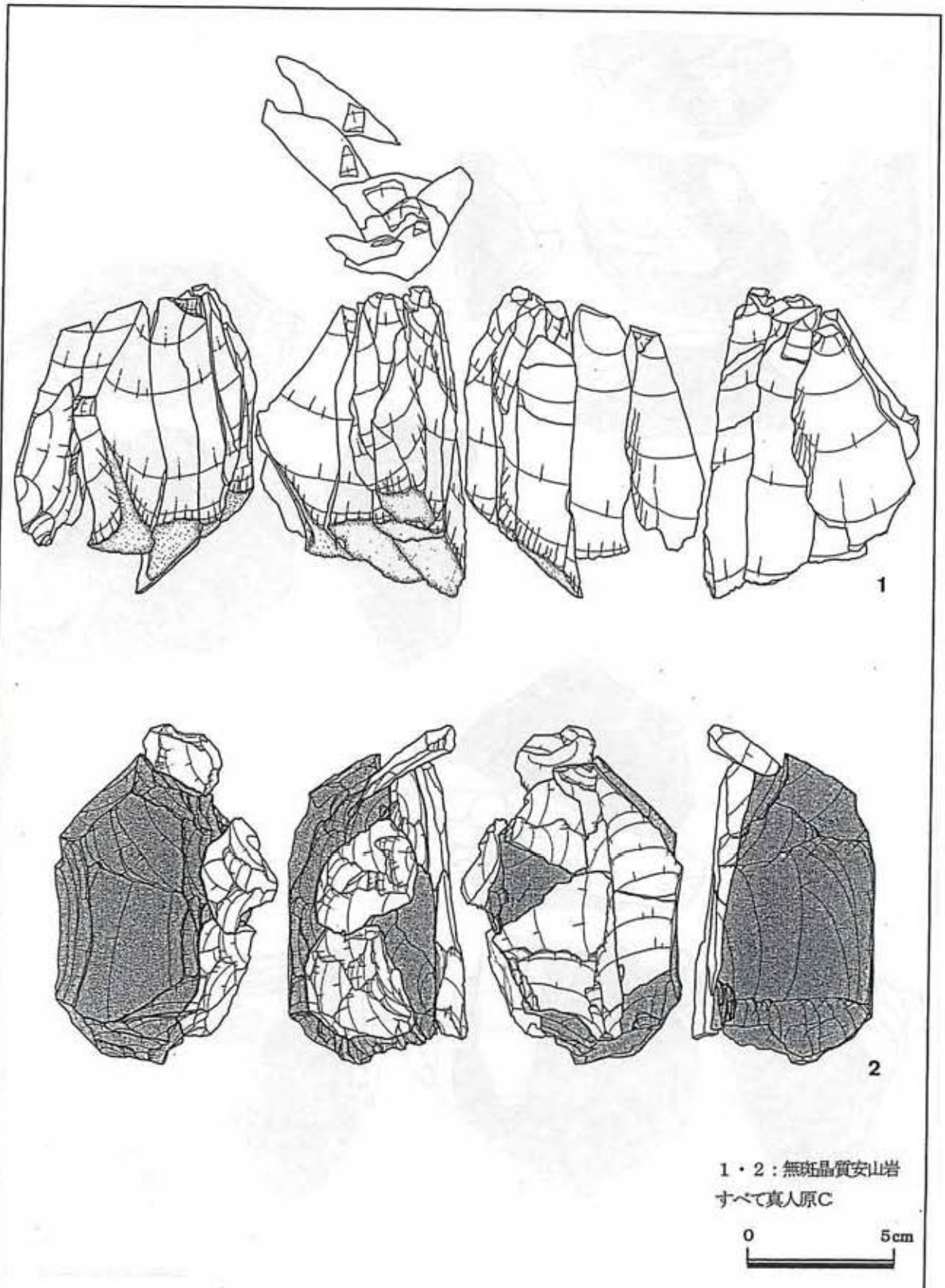


図 6.2.1　石核リダクションⅠ類の接合例（S＝１／2）

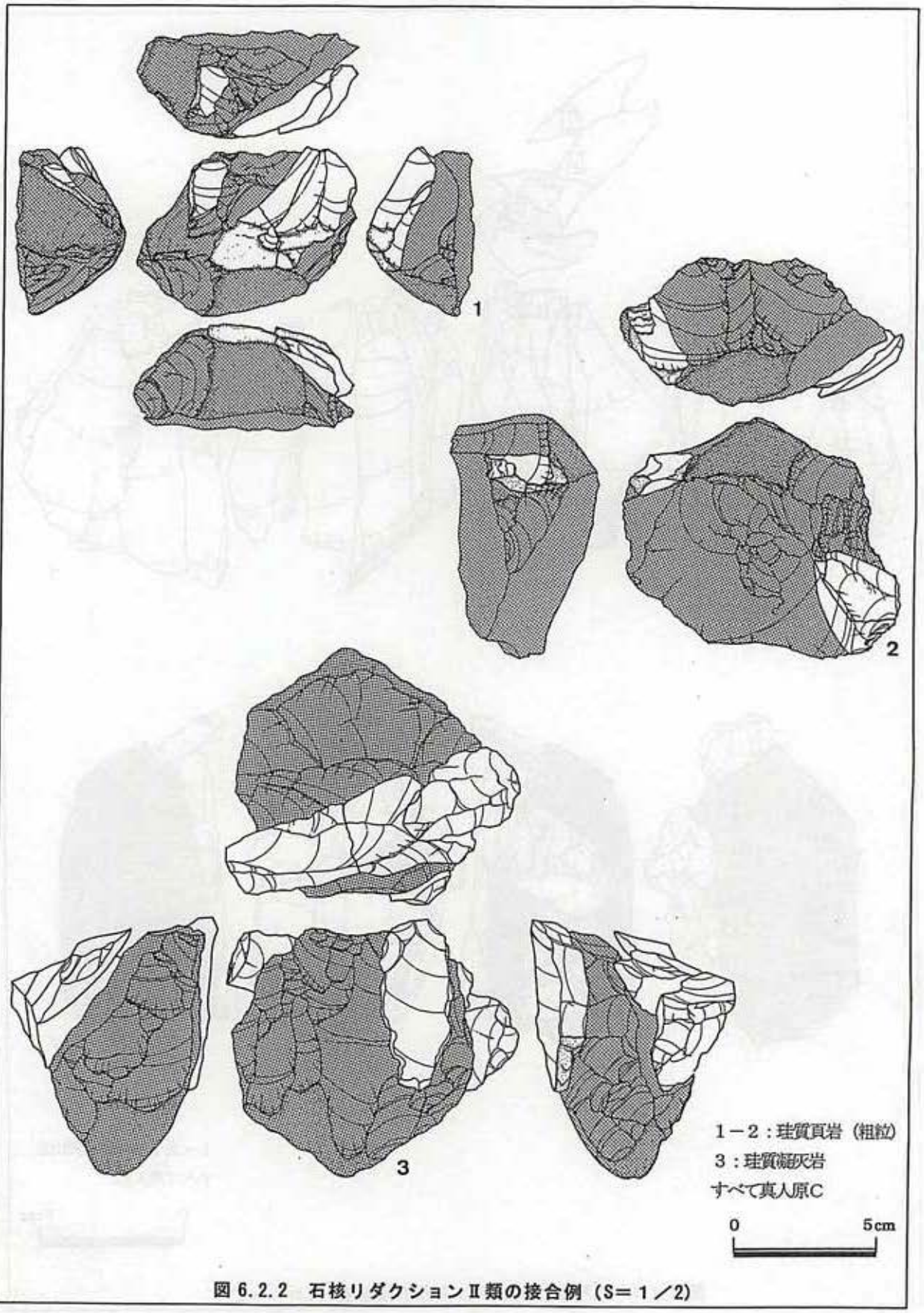


図 6.2.2　石核リダクションⅡ類の接合例（S＝1／2）

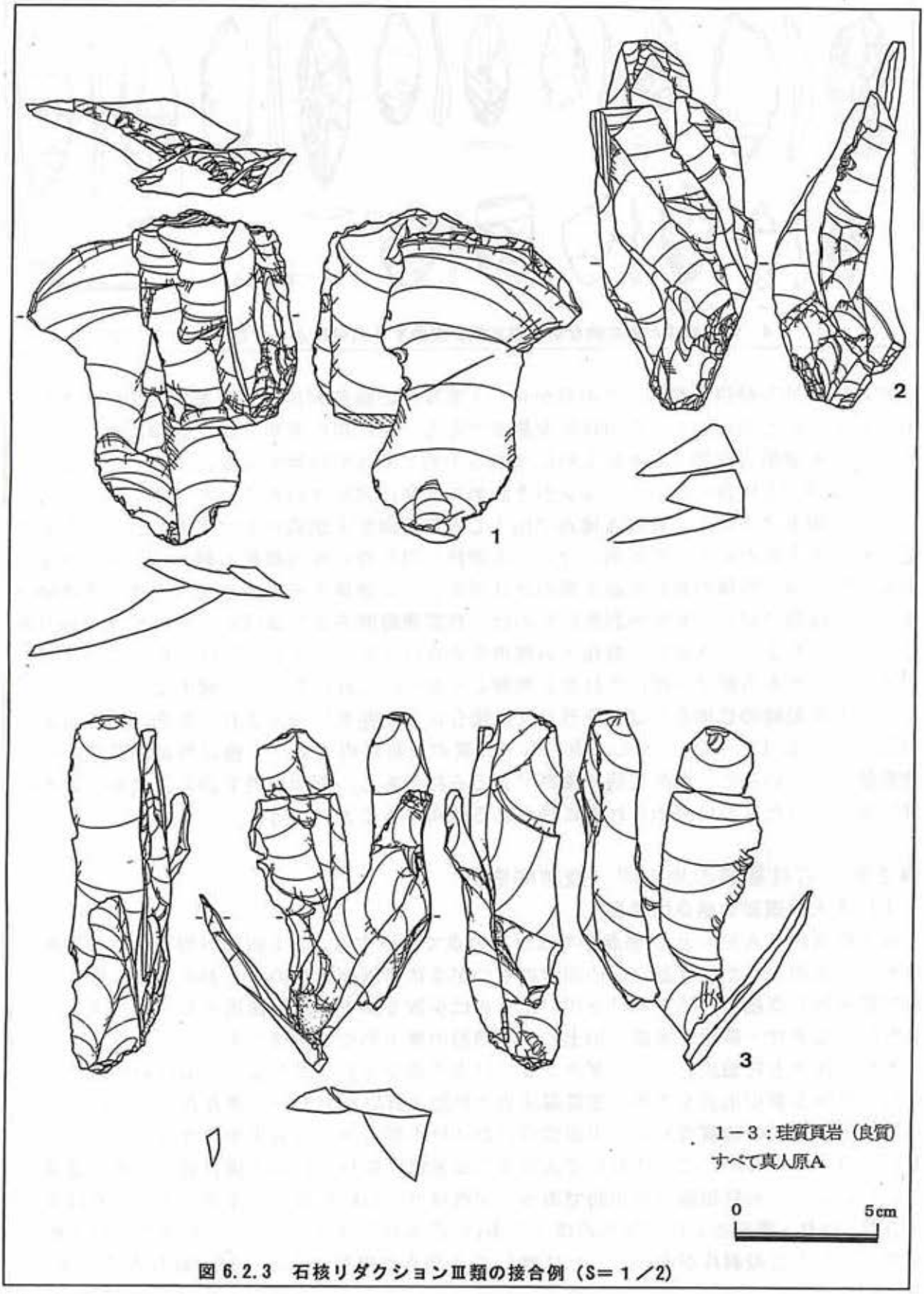


図 6.2.3　石核リダクションⅢ類の接合例（S＝１／2）

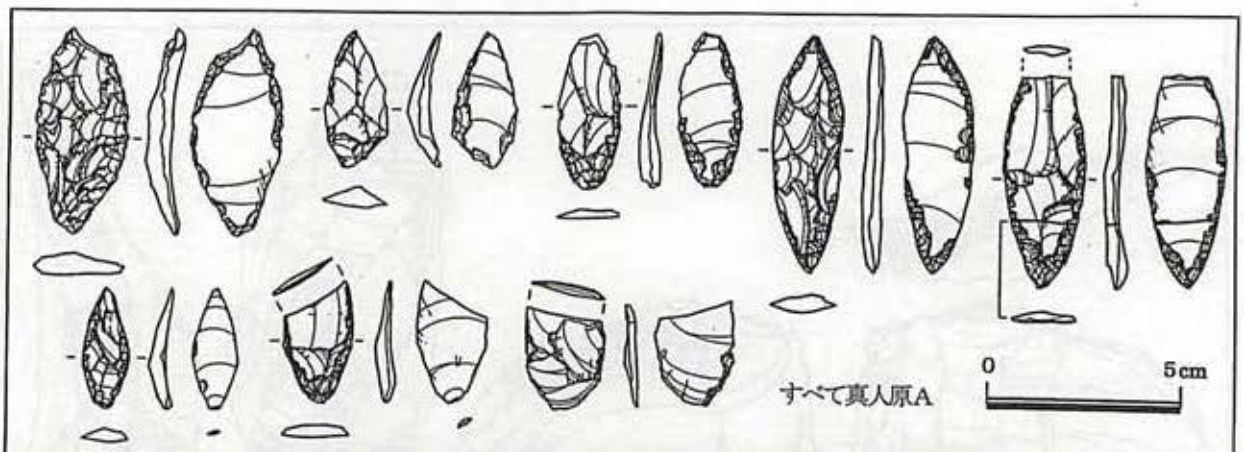


図 6.2.4　背面構成が求芯的な例と側方観が湾曲する素材による尖頭器（S＝１／2）

行する直線的な稜線が残る。この例から、大形厚手の縦長剥片が両面調整尖頭器の素材として利用される場合もあった可能性を想定できる。また第Ⅳ章第３節で詳細に検討したように、両面調整尖頭器の二次加工時に生じる小形で薄手の剥片が大量に出土していることは、両面調整尖頭器のリダクションがきわめて活発に実施されたことを示すと考えたい。

しかし**図 6.2.5** の１～６はＡ地点で出土した両面調整尖頭器の全てであり、欠損品と先述の整形途上品のみで、完形例はない。尖頭器に限らない両面調整石器の一般的である、刃部再生と剥片器種の素材供給を兼ねたリダクション効果を考慮するなら、真人原遺跡Ａ地点の尖頭器においても両面調整のものは、複数遺跡間を持ち運ばれる管理的な存在であると考えられよう。Ａ地点で製作・刃部再生を含むリダクションを受けた両面調整尖頭器の大半が、次の占拠地へ搬出されたと理解しておく。これに対して、**図 6.2.5** の下段に示した真人原遺跡のＣ地点では、完形または接合により完形に復元された両面調整尖頭器が出土している（７～11)。８の１点のみが良質の珪質頁岩であり、他は無斑晶質安山岩や珪質凝灰岩といった、遺跡近傍で獲得できる石材である。両面調整石器も、遺跡付近の石材で製作されたものは搬出されずに残される傾向にあるといえる。

第３節　石材組成の地点間・遺跡間変異

（１）真人原遺跡の地点間接合

真人原遺跡のＡ地点とＣ地点とでは以下の点で共通する。①尖頭器が器種組成の大半を占める。②出土した尖頭器は周辺調整のものが主体で両面調整のものが少ない。③尖頭器は珪質頁岩が卓越し、他の石材を用いたものは少数である。④尖頭器を製作する途上で生じた微細な剥片・砕片が多量に出土し、尖頭器の集中的な製作跡である。

だが全体の石材組成と石核リダクションは次の点で大きく異なる。①石材組成は、Ｃ地点では無斑晶質安山岩を主体に珪質凝灰岩や粗粒の頁岩などが一定量存在し、多様である。光沢に富む良質の珪質頁岩は、尖頭器のほかには小形・薄手の剥片や砕片がほとんどで、大形の剥片が少ない。これに対してＡ地点では光沢に富む良質の珪質頁岩が点数・重量ともに卓越して、石材組成は単相的である。②両地点ともに黒曜石が非常に少ない点は共通するが、点数・重量ともにＣ地点のほうが多い。③石核リダクションは、Ｃ地点ではⅠ類、Ⅱ類による大形の剥片が多い。これに対してＡ地点はⅢ類による大形の縦長剥片が多い。

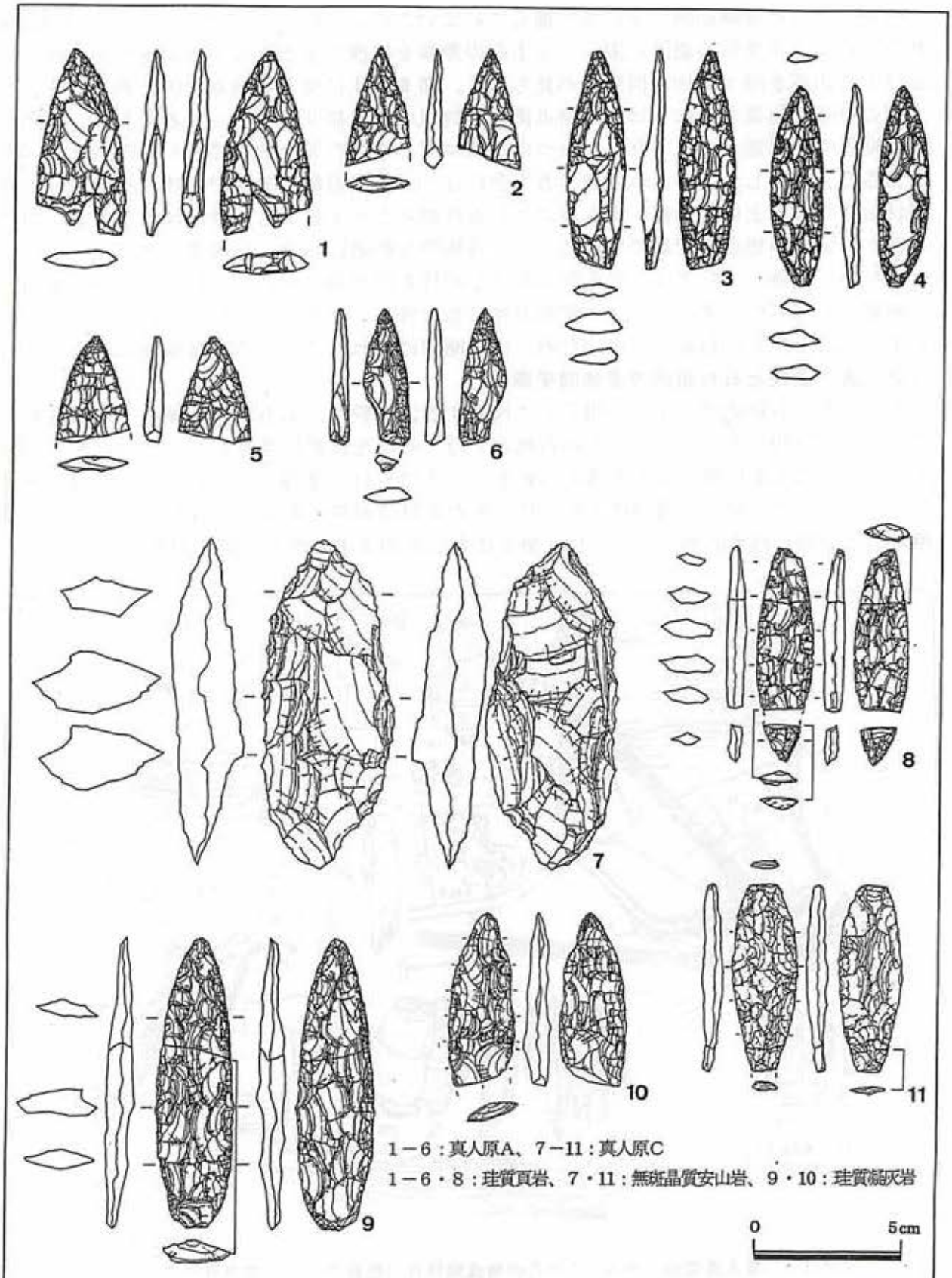


図 6.2.5　真人原遺跡 A 地点・C 地点の両面調整尖頭器（S＝1／2）

両地点ともに遺跡範囲の全体を完掘していないため完全なサンプルとは言えないが、現時点で得ている資料の範囲に限っても上記の差異を指摘できる。しかし両地点間には 100 m以上の距離を隔てた地点間接合が見られる。**図 6.3.1** にはこの地点間接合例を示す。接合例の存在を重視するならば、両地点間の石材組成や石核リダクションの差異は、編年上の時期差や集団差とするよりも、一つの技術体系の中での部分的変異として理解するべきであろう。しかし、このように考える場合には、同じ技術体系の中で石核リダクションや石材組成の表面上の変異が、地点毎に生じる仕組みこそを説明しなければならない。石核リダクションの地点間変異の要因について具体的な説明にふみこむ用意は現時点ではできていない。見通しとしては、搬入時における石材の保有量や形状、占拠地の場の機能などに影響されて石核リダクションの変異が生じると考えているが、これらを資料に則して検証する手段を持ち合わせていないため、後に簡潔に触れるにとどめて保留としたい。

（2）道下遺跡と石材組成の遺跡間変異

そこで次に石材組成の変異に限定して検討する。一般に、ある石材を獲得した地点から時間的・空間的に近いタイミングの占拠地では、石材を潤沢に保有していることからその石材が遺跡に大量に残されると考えられる。一方で石材の獲得から時間的・空間的に離れたタイミングで占拠した遺跡においては、その石材は消費が進んで保有量が希少のために相対的に遺跡に残され難く、残された場合にも二次加工率の増大（梶原 1991）や石核の著

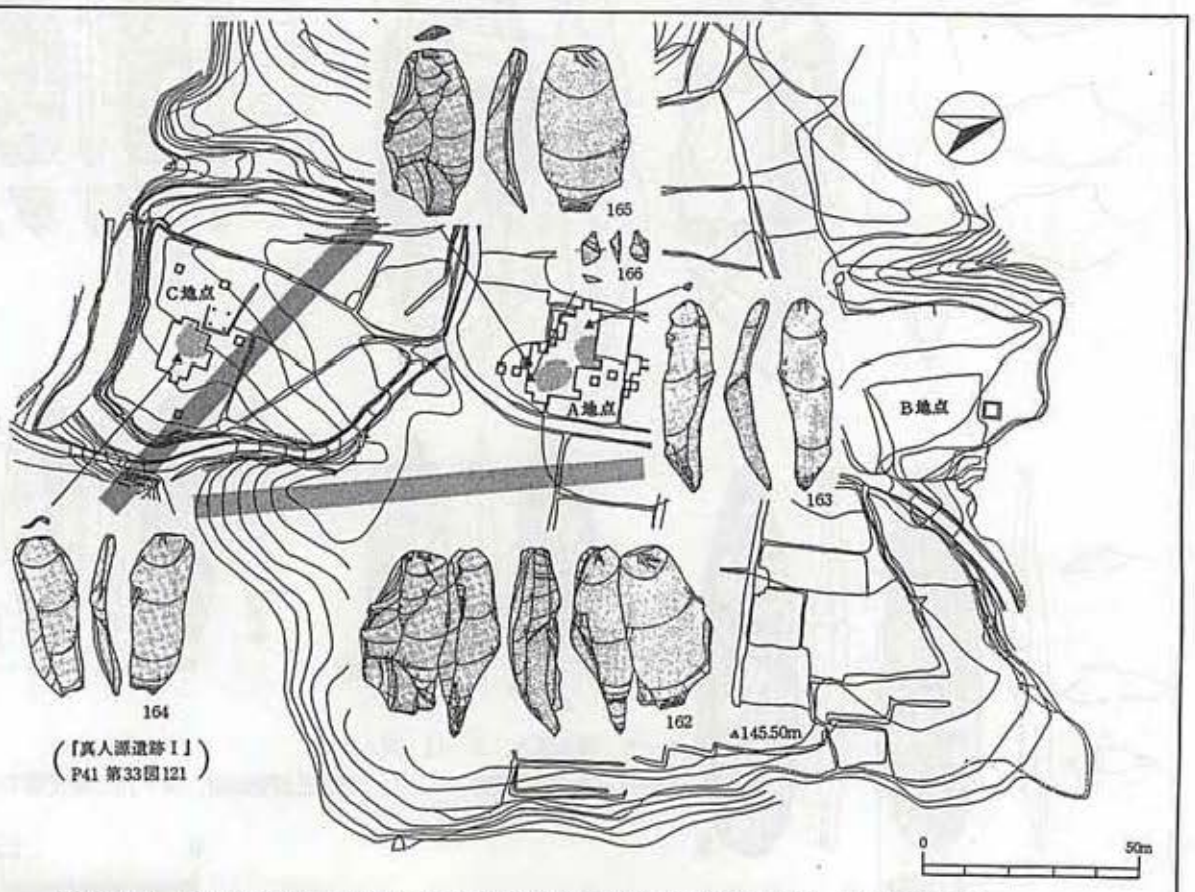


図 6.3.1　真人原遺跡 A 地点・C 地点の地点間接合（珪質凝灰岩・接合資料５）

（小野編 2002 第 57 図引用）

しい縮小（栗島 1993）など、倹約的な石材消費が見られるはずである（註５）。また占拠地付近で入手可能な近地産石材を代替利用する頻度が高まるとも考えられる。真人原遺跡のＡ、Ｃ両地点にみられた石材組成変異の説明としても、集団の移動計画の中での石材獲得タイミングと場の占拠タイミングの関係を仮説的に想定したい。

石材組成の変異の意味をより具体的に考えるために、真人原遺跡から信濃川の約 30ｋｍ上流に位置する道下遺跡（長沢・山本・阿部 1997、原 2000）の事例を検討する（註６）。道下遺跡は 8,990 ㎡の調査範囲のうち特に約 400 ㎡の範囲に集中して約 4000 点以上の石器が出土した。貝坂面の西側段丘崖に沿って立地し、出土層位は漸移層からローム層上部で、浅間山起源の降下テフラ As－K（1.3～1.4 万年前）直下に石器の垂直分布のピークがあるという。尖頭器の特徴から真人原遺跡の両地点と同じ時期に位置付けられている（長沢他前掲 1997、立木・高橋 1999）。山本克氏のご教示と筆者の観察では、石材の大半は中津川、清津川、信濃川など遺跡付近で採取可能な粗粒の頁岩類や珪質凝灰岩類である。これらの石材には石核を取り込んだ良好な接合例が多く、背面を礫面が広く覆う大形の剥片、多様な形を呈する石核、剥離が進んでいない原石も多数存在する。

真人原Ａ地点、Ｃ地点、道下遺跡の２遺跡３地点において、黒曜石の産地同定を実施・公表しているのは真人原遺跡Ｃ地点（藁科 1997）のみだが、肉眼観察では道下遺跡や真人原遺跡Ａ地点の黒曜石も透明度が高く大枠では信州産と考えられる。道下遺跡では、黒曜石は全体の石材組成の中で主体的とはいえないまでも、真人原の両地点と比較するならば相対的に多数出土しており、両面調整尖頭器や剥片類の接合資料も確認されている。

一方で真人原遺跡ではＡ・Ｃの両地点で多く出土し、特にＡ地点では重量においても卓越する、光沢に富む良質の珪質頁岩は、道下遺跡ではわずかしか出土していない。この珪質頁岩の産地は秦によると山形県の特定産地には同定できないとされるが（秦 2002）、遺跡近辺や信濃川中流・上流域に現状では確認できない（註７）。

（３）石材獲得モデル

表 6.3.1 は、これまでに検討した真人原遺跡Ａ地点、同Ｃ地点、道下遺跡の主要石材の組成である。道下遺跡は整理調査中のため筆者の観察所見を示す。

道下→真人原Ｃ→真人原Ａの順で遺跡に残される黒曜石の量が減少することは、信州方面から北上する移動経路上の時間経過を反映している可能性があると考えられる。逆に珪質頁岩に着目した場合、真人原Ａ→真人原Ｃ→道下の順で遺跡に残される量が減少する。これには北の方面から南下する移動経路上の時間の経過を反映している可能性がある。すなわち、新潟県北部または東北南部の内陸部から中部高地にまたがる回帰的移動の中での占拠タイミングの違いが、個別遺跡における石材組成の変異をもたらすと考えたい。

表 6.3.1　真人原遺跡Ａ地点、Ｃ地点、道下遺跡の主要石材の組成（重量ｇ）（長沼 2002a 第２表引用）

	珪質頁岩 Siliceous Shale	珪質凝灰岩 Siliceous Tuff	無斑晶質安山岩 Andesite	黒曜石 Obsidian	粗粒な頁岩・凝灰岩類 coarsed Shales and Tuffs
真人原A Mattobara A	5933.1	521.6	756.2	3.7	874.8
真人原C mattobara C	2917.7	1960.2	6035.4	15.1	387.2
道下 Michishita	非常に少ない very little	多い many	少ない little	やや多い appreciable	非常に多い abundant

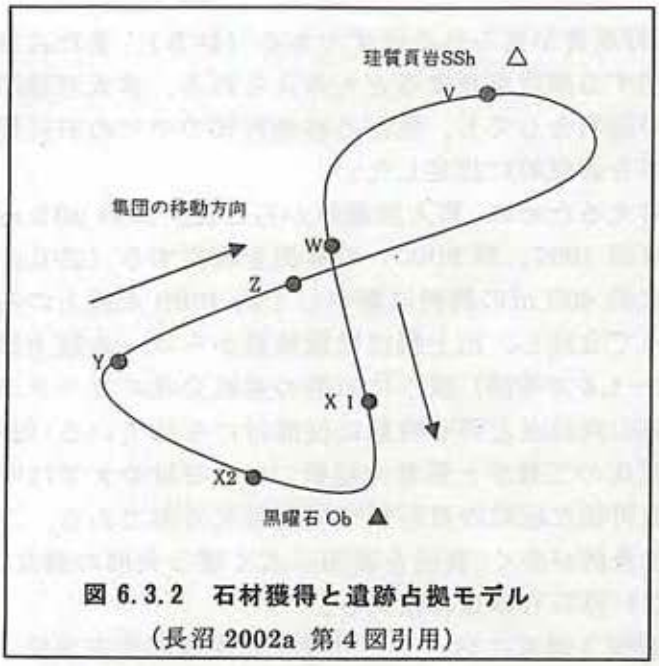


図 6.3.2　石材獲得と遺跡占拠モデル
（長沼 2002a 第4図引用）

これを**図 6.3.2** に模式的に示した。**図 6.3.2** で、Wに相当する位置にあるのが真人原遺跡A地点、Z相当が真人原遺跡C地点、Y相当が道下遺跡である。ただしこれはあくまでも石材組成という限定的な観点からの遺跡間変異の説明であり、各遺跡で過去に実際に生じた出来事の復元を直接に意図するものではない。本来ならばこのような共時的モデルの提示に先立って、遺跡間の可能な限り厳密な同時性を論証する手続きが必要であるが、方法上の制約（註8）から今のところ成しえない。ゆえに大枠での見通しに留まり、断定的な結論ではない。現時点での限られた資料に観察できる遺跡間変異という現象を説明するための一試案にすぎず、将来的な資料の増加で変更を迫られるべきものである。

（4）野尻湖遺跡群の石材組成

次に以上の説明の傍証として、より信州系黒曜石の産地に近い野尻湖遺跡群の尖頭器石器群（大竹 2000）を検討する。**図 6.3.3** は真人原遺跡のA、C地点と、野尻湖遺跡群**貫ノ木遺跡**および**西岡A遺跡**の石材組成の比較である。貫ノ木遺跡第1、第2地点と西岡A遺跡では、報告書の分類でⅢb石器文化(貫ノ木)、Ⅲa石器文化（西岡A）とされる周辺調整・片面調整の尖頭器が特徴的なブロックのみを取り出した。貫ノ木第2のその1とは、2001、2018、2021のブロック群で、その2は2049・2050と2055～2063のブロック群である。両者は直線距離で数十m離れていることから分離した。石材は報告書の記載に準じ、頁岩、凝灰岩、凝灰質頁岩、緑色凝灰岩を「粗粒な頁岩・凝灰岩」にまとめた。また「その他」には、チャート、玉髄、砂岩などをまとめた。

黒曜石（註9）と珪質頁岩に着目すると、片方の割合が多い遺跡では他方が少ない関係を指摘できる。珪質頁岩が少なく黒曜石が多いパターンは野尻湖遺跡群に特徴的であり、黒曜石産地に近いことを反映している可能性がある。**図 6.3.2** のXの位置に相当しよう。さらに微妙な違いに注目するならば、**図 6.3.2** において珪質頁岩が多い貫ノ木第2Ⅲb石器文化その2はX1、逆に黒曜石が多い西岡A遺跡Ⅲa石器文化や、貫ノ木第2Ⅲb石器文化その1は、X2に相当しようか。なお道下遺跡は黒曜石が全体の割合の中では少ないながらも一定量が認められ、むしろ良質の珪質頁岩が少ない点で、西岡Aや貫ノ木第2その1に近いパターンを示すと考えられる。

また無斑晶質安山岩と粗粒な頁岩・凝灰岩は、遺跡毎の割合の変異が大きいことを指摘できる。これらについては、必要に応じて占拠地の近くで適宜採取されることで遺跡毎の変異が生じると解釈する。なお信州の黒曜石原産地遺跡でも、頁岩や凝灰岩などの剥片が少量ながら出土していること（小野 1996 など）は示唆的である。

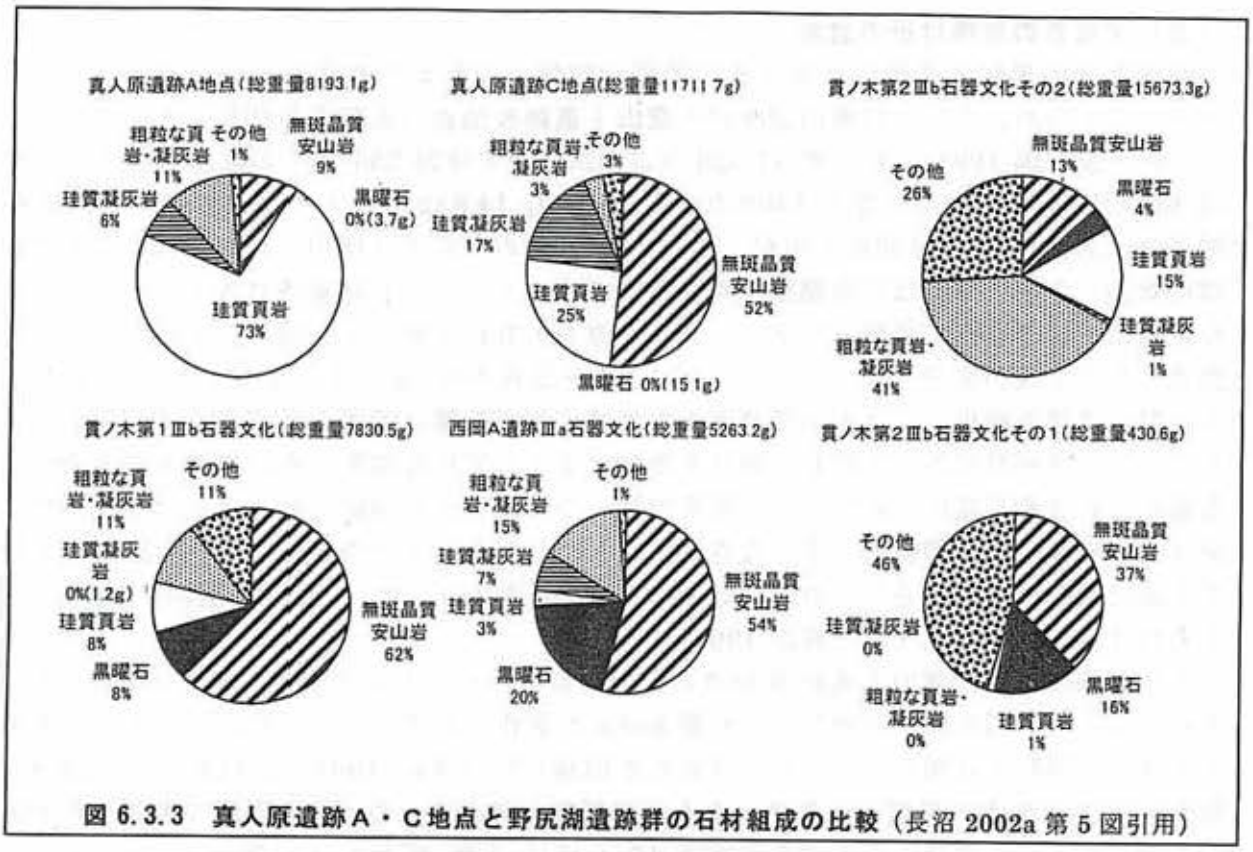


図 6.3.3　真人原遺跡Ａ・Ｃ地点と野尻湖遺跡群の石材組成の比較（長沼 2002a 第 5 図引用）

第４節　良質な石材の獲得地付近の遺跡

（１）珪質頁岩の産地付近の遺跡

図 6.3.2 で、珪質頁岩産地に近いⅤに相当する遺跡の候補として、山形県朝日村の**越中山 A' 遺跡**（加藤 1975）を挙げることができよう。加藤　稔によると、大形木葉形や中形柳葉形の両面調整尖頭器、石刃を素材とした片面調整や周辺調整の尖頭器、大量の石刃から構成される石器群であるという。ナイフ形石器として分類されている一群も実測図から判断する限り、石刃素材の周辺調整尖頭器や両面調整尖頭器のリダクション開始直後の姿（未成品）として理解できる例も含む。多数出土している大形の石刃は、「かなりの点数が接合する」という（加藤 1975 p 118）。写真が公表されている接合例（加藤 1992 口絵 6）は、芯の石核のない剥片同士の接合であるが、頻繁な打面転移と石核調整を確認でき、石刃や縦長剥片を生じる点でも、真人原遺跡で確認した石核リダクションⅢ類として理解できる可能性が高い。

公表されている文献による限りの判断では、尖頭器の形態組成や石刃が多いとの点でも、真人原遺跡Ａ地点とよく似ているようである。両面調整尖頭器の折断面から彫刀面を入れる「両面調整石器素材の彫器」の存在も、真人原遺跡Ａ地点や道下遺跡（未報告資料）と共通する。尖頭器の石材は玉髄がわずかに入る以外はすべて硬質頁岩（＝珪質頁岩）であるという点でも、真人原遺跡のＡ・Ｃの両地点と類似したあり方である。剥片類も含めた石器群全体の重量や点数のデータが未公表のため定量的な比較検討はできないが、小形尖頭器石器群の集団が珪質頁岩の産地の近くを占拠した時点での遺跡形成の現れ方（註 10）を示している可能性が高い。

（２）黒曜石の産地付近の遺跡

中部高地の黒曜石産地に近接する尖頭器石器群には男女倉遺跡群や渋川遺跡群などが知られているが、ここでは鷹山遺跡群の**鷹山Ｉ遺跡Ｓ地点**（長野県長門町）をとりあげる（戸沢・安蒜編 1991）。総点数 17,520 点の内訳は、尖頭器 235 点（未成品 189 点、完成品 46 点）、石核 684 点、原石 1569 点、剥片・砕片 14,832 点などである。尖頭器は３cm 前後の小形、４～５cm 前後の中形、６～８cm 前後の大形と３種類に区分され、小形では周辺調整、中～大形では片面調整・両面調整が多いという。石材組成は水晶をわずかに含む以外は、ほぼすべて黒曜石である。豊富な原石・石核・剥片・未成品の資料をもとに尖頭器の製作工程が復元されており、これによると長径が８cm 以下、厚さが１～３cm ほどの小形の角礫を選択し、この小形原石から直接に両面調整尖頭器のリダクションに入るパターンと、小形原石から剥離した剥片を素材に主として片面調整・周辺調整尖頭器をつくる場合との２者が識別されている。後者では一つの原石から剥離される剥片は１～数枚と少なく、石核整形や調整もあまりなされず、またリダクションの開始されたばかりの石核が大量に遺跡に残される。このシンプルな石核リダクションは、「鷹山Ｓ型剥片剥離技法」と名付けられている（氏家・島田 1991）。

また安蒜政雄は、鷹山Ｉ遺跡Ｓ地点の母岩別資料から「およそ剥片・砕片 30 点に対し１点の割合で、両面調整の槍先形尖頭器未成品が製作されている」と仮定した上で、多数の未成品が遺跡外に搬出されている可能性を指摘した（安蒜 1991、p 124）。道下遺跡や真人原遺跡Ｃ地点の黒曜石は先述のように信州系と考えられるが、尖頭器の製作工程や原石のリダクション過程を復元するのは不可能なほど、点数・重量ともに零細な存在である。鷹山Ｉ遺跡Ｓ地点の石器が直接、道下遺跡や真人原遺跡などに搬入されたとの断言はできないが（註 11）、原石の状態ではなくリダクションがやや進んだ両面調整尖頭器や、小形の素材剥片、剥片素材尖頭器の完成品が搬出され、道下遺跡や真人原遺跡のような遺跡では、わずかな調整のみが行われた可能性がある。野尻湖遺跡群でも、貫ノ木遺跡第１地点の黒曜石もリダクションが進んでおり、両面調整尖頭器のほかは小形化した彫器や楔形石器である。大形の掻器・削器や石刃、石核などは無斑晶質安山岩や凝灰質頁岩である。西岡Ａ遺跡の黒曜石も小形の周辺調整尖頭器などに多く、逆に石刃は珪質凝灰岩、大形の剥片は無斑晶質安山岩が多い。

（３）信濃川流域小形尖頭器石器群の石材利用

以上の検討から、信濃川流域の小形尖頭器石器群に見られた石材組成の遺跡間変異は、南西の黒曜石と北東の珪質頁岩という、二大良質石材獲得地を往復する移動ルートの中で、無斑晶質安山岩や珪質凝灰岩などの石材を移動の先々で手近に獲得した行動系の結果、形成されたと解釈できる。各遺跡では、珪質頁岩と黒曜石はともに各種の尖頭器として残されるのに対して、削器や彫器など大形剥片を素材とする剥片器種は、珪質凝灰岩や無斑晶質安山岩など近場の石材で残ることが多い（野尻湖遺跡群）。多数の石核や良好な接合資料が確認できるのも（真人原遺跡Ｃ地点や道下遺跡）、これら在地の石材である。

現時点では定量的データで示せないものの、珪質頁岩と黒曜石では、石材運用に相違が認められるようである。珪質頁岩は真人原遺跡Ａ地点のように、石材獲得地からかなり離れても大形の縦長剥片や石刃も含めて多量に遺跡に残るが、黒曜石は野尻湖遺跡群のように獲得地からさほど離れなくとも少量しか残らない。また珪質頁岩は周辺調整の尖頭器に

（真人原遺跡など）、黒曜石は両面調整の尖頭器に結びつく（道下遺跡など）場合が多いようである。

おそらく珪質頁岩は、山形県内陸部では河川転礫として大形原石を入手できるため、石核リダクションⅢ類などの石刃技術と結びつくことで、細身・縦長の素材剥片が安定して供給されるのであろう。このために周辺調整尖頭器に向き、また獲得地から遠くはなれた位置でも多量に保有できる＝遺跡に残される（真人原遺跡Ａ地点）のであろう。逆に手持ちの珪質頁岩が枯渇し、手近な石材を臨機的に獲得せざるを得ない場合には、在地の石材に適した石刃剥離技術（石核リダクションⅠ類）に切り替えるか、石刃の生産自体をその場所では実施しないこともあろう（真人原遺跡Ｃ地点の全体的傾向など）。先に本章第２節で指摘した石核リダクションの現れ方の遺跡間変異について、こういった説明を与えることもできる。これに対して黒曜石は原石がそもそも小形で（註 12）、「鷹山Ｓ型剥片剥離技法」など小形剥片を生産してこれを素材とする、あるいは小形原石から直接に両面調整石器リダクションを開始する。このために獲得地から離れた各遺跡では、量的には零細な存在となり両面調整尖頭器の姿をとるのであろう。すなわち原石の産状（大きさ）に規定されて、二大良質石材の運用が異なった形で組織されていた可能性を指摘しておく。

信濃川流域の第Ⅰ期小形尖頭器石器群は、石核リダクションと両面調整石器リダクションとを併用して、産状の異なる二大良質石材の産地に「つなぎとめられ」ながら（第Ⅳ章第１節）、移動の先々でも臨機的な石材獲得をおこなっていたと解釈したい。真人原遺跡で異なる性格をみせるＡ地点とＣ地点との間に接合関係を確認できたことの説明として、複数遺跡間の連鎖パターンの解釈に着手を試みたが、十分に論じきれたとはいえない。より説得力のある説明のためには、註８で触れた「同時の階層性」に関する問題系をふまえ、また現時点では未公表の複数遺跡のデータを用いた上で、遺跡間の比較検討が必要である。

註

1）周辺調整尖頭器は、定型的でありながら刃部再生による変形幅が大きくないと判断し、スタイル論的な理解が可能であると考えるため、時期的な指標となるとの前提を採用する。しかしどの程度の物理的な時間幅を有するのかは不明である。ゆえに物理的な時間としては幅広い時間幅を「同時」とみなしている可能性はある。

2）本章は長沼 2002a を大幅に改訂したものであり、旧稿では「剥片剥離」の用語を用いていたが、本研究全体の論旨と整合させるために「石核リダクション」と言い換え、また「剥片剥離Ⅱ類」としていたものは両面調整石器リダクションとして独立させた。このため旧稿と異なった番号になっているが、資料認識自体には変更はない。

3）最近、吉ヶ沢遺跡Ｂ地点（新潟県朝日村）において、石核リダクションⅢ類（またはⅡ類）に関連する良好な接合資料が確認された（澤田 2003）。澤田敦は「いわゆる真性の石刃技法とは異なり、最終的な石核の形態が両面体となるような工程」と説明している。2004 年５月に実見に際し、澤田敦氏に詳細なご教示を頂いた。記して感謝する。

4）真人原遺跡の報告書で削器や二次加工のある剥片とした例の中には、両面調整尖頭器の未成品を含む可能性があるが弁別し得ない。リダクション論をつき進めるなら「未成品」／「製品」の二分論的な識別は無意味となる（長沼 2000）。

5）埋め込み戦略採取モデルも含む、遊動生活の中での自集団による直接的採取（小野 1996）の石材獲

得を前提に考える。田村隆氏が論じているように（田村 1992）、日常的に使用する石材の大半を他集団から入手するような状況は想定し難く前提とできない。ただし少量の特殊な石器や石材が、儀礼的・象徴的に集団間で贈与・交換される可能性はある。

6）道下遺跡は現在、津南町教育委員会が整理調査を進めており、正式報告は今後の予定である。本章記載は 1997 年 12 月と 2001 年 3 月に津南町教育委員会で実見した際の筆者の所見であり、将来刊行された報告書の内容が本章と矛盾した場合の責任は全て筆者にある。津南町教育委員会の佐藤雅一氏には、未報告資料の見学の便宜と引用の快諾を頂き、あわせて魚沼地方の旧石器全般について多くのご指導を頂いた。また山本克氏にも道下遺跡出土資料に関して詳細なご教示を頂いた。記して深く感謝する。

7）1996 年と補助的に 2000 年に筆者らが行った石材分布踏査での知見による。また秦によると、遺跡にもっとも近い清津川の七谷層のものは、A 地点の分析サンプルの中には含まれていないとされる（秦 2002）。なお阿部 1999 も参照した。

8）同時性の保証問題は複雑である。過去の出来事における「同時の階層性」と、現在の資料性における「同時の階層性」との、両方への配慮が要求されるためである。過去の出来事における「同時の階層性」とは、どのレベルでの「同時」が問題となる現象を研究対象としているかの自覚である。現在の資料性における「同時の階層性」とは、研究手法の資料と方法が、どのレベルの時間幅を刻むのに有効なのか・限界をもつのかの自覚的評価である。本来ならば、これらの諸問題を整理しなければ遺跡間の共時的な関係を議論できないが、多くは今後の課題である。

9）野尻湖遺跡群の産地同定は望月明彦氏による。貫ノ木遺跡では測定可能な 4613 点中、和田鷹山群の 1884 点と諏訪星ヶ台群（藁科の「霧ヶ峰」におおむね相当）1754 点が卓越する。西岡 A 遺跡でも測定可能な 455 点中、和田鷹山群の 231 点と諏訪星ヶ台群の 116 点が卓越する。

10）山形県に相対的に近い上新田 B 遺跡（新潟県新発田市）でも、周辺調整尖頭器を特徴とする約 6000 点の石器群が最近確認された（鈴木 2003）。在地の粗粒な珪質頁岩を主体とし、黒曜石は蛍光 X 線分析で信州系という。しかし本章で検討することはできなかった。

11）真人原遺跡 C 地点の産地同定は藁科哲男氏による。31 点が藁科による和田峠 1 ～ 3 群であり、1 点のみ霧ヶ峰である。藁科の方法でも鷹山、星糞峠で採取した黒曜石の中に和田峠 1 群が多く含まれるとのことで（藁科 1993）、一方の望月は「和田鷹山群」とのカテゴリーを設定・採用している。星糞峠に近接する鷹山遺跡群と真人原 C 地点を直接に結びつけるには、産地同定上の問題が残る。

12）鷹山遺跡群では、尖頭器石器群に先行するナイフ形石器群（鷹山 I 遺跡 M 地点）では、大形の原石から石核調整をへて石刃を量産している。あたかも尖頭器石器群になってから小形原石の意図的な選択が始まったかにみえるという。小菅将夫は、ナイフ形石器群から尖頭器石器群への移行の間に、星糞峠付近の黒曜石の産状が変化して大形原石の採取が困難になったと解釈している（小菅 1991）。

第Ⅶ章　本州島北半における荒屋系石器群の長距離移動

第１節　長距離移動集団の石器群

（１）荒屋系石器群について

細石刃石器群は、本研究の主題である両面調整石器群の中では第Ⅱ期に相当する。本州島の楔形細石刃核をもつ石器群は、細石刃核や彫器の系譜が北海道島やシベリア、華北、アラスカにつながるため「北方系削片系細石器石器群」（佐藤 1992a）、「北方系細石刃石器群」（佐野 2002）と呼ばれてきた。中でも、荒屋型彫器と角二山型掻器を持ち、石器石材が東北日本海側（山形県内陸部）産の珪質頁岩へ特殊化した一群は、「荒屋系細石刃石器群」（永塚 1997）と呼ばれる。細石刃核は北海道島の湧別技法の札滑型に相当し、北東アジア全域に共通する動向である（白石 1993 など）。しかし石材利用や器種組成が北海道島の札滑石器群とは異なり、本州島北半の環境に特殊化した地域色の強い現象として理解する視点も必要である。本章では、両面調整石器リダクション構造の変異が、具体的な個別時期・地域で実際に現れている事例として、本州島北半の荒屋系細石刃石器群（以下では荒屋系石器群と表記する）という限定的な時空間（註１）を対象に、石材運用から集団の移動・居住形態を検討する。荒屋系石器群の数値年代は、**荒屋遺跡**（新潟県川口町）で 13,690±80B.P.から 14,050±110B.P.の範囲の測定値（AMS、未較正、サンプル数 15 点ーいずれも炭化物）が得られている（北川 2003）。**表 7.1.1** は本章で扱う遺跡の一覧表である。

（２）行動論に関する先行研究

荒屋系石器群には、生業や移動・居住形態を論じた研究が多い。生業については、サケ・マスなど遡河性魚類の漁労（内水面漁労）に特殊化した集団との仮説がある。加藤晋平が提唱し(加藤 1984)、佐藤宏之による民族誌例の例示（佐藤 1992a）、桜井淳也による河川次数との相関の指摘（桜井 1993）などの補強を受けている。これに対して加藤博文は、シベリアでは楔形細石刃石器群の技術構造の成立と内水面漁労との相関は弱く、むしろシカ類に特化した狩猟と密接に結びつくとの観点から、本州島の石器群が内水面漁労に特化したとは断定できない、との批判を行っている（加藤 1996a、1996b）。

移動・居住形態については、珪質頁岩への特化を論拠とした太平洋側と日本海側との長距離移動・回帰移動モデルが提出されている。田村隆は晩氷期の日本海側での多雪化開始を原因とした、豪雪地居住集団の季節的・一次的な回避行動を想定した（田村 1993）。加藤博文もシカ猟へ特殊化した集団との持論から、一定量の積雪を迎えると他所へ群で移動するシカの生態を引用し、狩猟者集団がシカを追跡する形の長距離移動を唱えた（加藤 1996a）。しかし多雪化の開始は、海水準変動による対馬暖流の日本海への北流開始に規定されるが、最近公表された先述の荒屋遺跡の数値年代とは整合しない（註２）。

また稲田孝司は、珪質頁岩にこだわる一群を従来の居住地への回帰を前提に遠征した「回帰遊動集団」、多様な石材を用いる一群を新たな居住地の開拓を図った「植民集団」として、目的の異なる移動の存在を論じた（稲田 1996）。これに対して佐野勝宏は、「北方系細石刃石器群」の全体にⅠ期からⅢ期まで３段階の時間差を設定し、珪質頁岩に執着して一遺跡での占拠時間の短い回帰的な長距離期移動を行うⅠ期の移動・居住形態が、時間とともに変化し、在地の多様な石材を用いて狭い範囲を一定期間占拠するⅢ期にいたる、と

表 7.1.1 荒屋系石器群の遺跡一覧（主に大場 2003、立木 2003、萩谷 2003 による）

遺跡名	所在	発掘/採集	隣接河川等	状態	組成（発掘で集中部が調査された遺跡のみ）								遺構
					細石刃核	細石刃	削器	彫器	掻器	削片	礫器	その他	総計	
下堤D	秋田県秋田市	発掘	岩見川	組成あり	2	11	1	2					約250	
狸崎B	秋田県秋田市	発掘	岩見川	組成あり・台形様石器群と混在	1	19	6	6	3	5	2		1778	
宮山坂F	山形県遊佐町	採集	月光川	楔形細石刃核、荒屋型彫器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
鶴子台	秋田県八竜町	発掘		掻器２点など計8点の関連資料				1	2				8	
八森	山形県八幡町	採集	荒瀬川	神子柴と東山の発掘地点から離れて荒屋型彫器１点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
山屋B遺跡	山形県新庄市	採集	戸前川	楔形細石刃核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
角二山遺跡	山形県大石田町	発掘	最上川	組成あり	9	1212	6	29	32	31		4	5763	環群
越中山遺跡群D地点	山形県朝日村	採集	赤川	楔形細石刃核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
同　X地点	山形県朝日村	採集	赤川	荒屋型彫器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
同　M地点	山形県朝日村	採集	赤川	削片と荒屋型彫器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
同　O地点	山形県朝日村	採集	赤川	削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
上野山	山形県朝日村	採集	赤川	楔形細石刃核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
弓張平	山形県西川町	採集	寒河江川	削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
月山沢	山形県西山町	発掘	寒河江川	神子柴の石器群が主体。楔形細石刃核は採集	−	−	−	−	−	○	−	−	−	
西覚寺・茶沢	山形県寒河江市	採集	寒河江川	削片とブランク	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
金谷原	山形県寒河江市	採集	最上川	楔形細石刃核と削片	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
所前	山形県山形市	採集	立谷川	スポール、角二山掻器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
名生館	宮城県古川市	発掘	江合川	荒屋型彫器など６点が出土		1	1	1	1				6	
学壇遺跡群	福島県福島市	発掘	阿武隈川	組成あり　前時期石器群と混在	○	○	○	○	○	○			10436	
真野土城跡	福島県鹿島町	採集	真野川	削片１点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
薬師堂	福島県石川町	発掘	阿武隈川	ホロカ型（非削片系）　ナイフと混在	2	2	○		○				156	
一里段A	福島県白河市	発掘	阿武隈川	楔形細石刃核１点		1								
屋敷前	福島県いわき市	発掘	夏井川	荒屋型彫器２点		2							2	
上ノ山C	新潟県新発田市	採集	加治川	楔形細石刃核母形１点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
鳥谷内	新潟県新発田市	発掘	加治川	荒屋型彫器１点				1					1	
行塚B	新潟県安田町	発掘	阿賀野川	荒屋型彫器１点			2	1						
中道	新潟県安田町	採集	阿賀野川	楔形細石刃核１点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
大平	新潟県水原町	発掘	阿賀野川	組成あり、ナイフ形石器群と混在	1	9	5	3	1				29	
鍛冶山	福島県会津坂下町	発掘	阿賀野川	古墳盛土から荒屋型彫器２点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
笹山原遺跡群No. 27	福島県会津若松市	採集	阿賀野川	採集だけで荒屋型彫器100以上	○	○	○	○	○	○			多数	
吉野屋	新潟県下田村	採集	五十嵐川	楔形細石刃核２点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
小戸谷	新潟県下田村	採集	五十嵐川	荒屋型彫器１点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
藤平	新潟県下田村	発掘	五十嵐川		1	○	−	−	○	−	−	−	−	
中土	新潟県下田村	発掘	五十嵐川	組成あり、ナイフ形石器群と混在	4	22	6	12	9	1	1	1	79	
瓜割	新潟県長岡市	発掘	信濃川	削片１点、楔形母形１	1					1				
天上原A	新潟県小千谷市	採集	信濃川	荒屋型彫器１点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
荒屋（２次・３次）	新潟県川口町	発掘	信濃川	組成あり、多量の彫器	20	5590	5	626	19	27	2	○	92435	土壌群
月岡	新潟県堀之内町	発掘	魚野川	組成あり	6	93	10	14	5	9			378	
上ノ台I	新潟県六日町	採集	魚野川	楔形細石刃核、荒屋型彫器	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
大刈野	新潟県湯沢町	発掘	魚野川	組成あり・細石刃石器群は未報告	○	○	○	○	○					環群
常宿山	新潟県十日町市	採集	信濃川	舟底（削片のようでもある）１点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
正面中島	新潟県津南町	発掘	信濃川	組成あり	1	19	15	11	11	2	1		156	
千僧	新潟県中里村	発掘	信濃川	ホロカ１点	1									
屋敷田	新潟県津南町	発掘	信濃川	荒屋型彫器１、細石刃３		3		1					4	
笹原川東	新潟県津南町	発掘	信濃川	荒屋型彫器１				1					1	
小坂平	新潟県津南町	発掘	信濃川	楔形細石刃核１点	1								1	
杉久保C	長野県信濃町	発掘	野尻湖	荒屋型彫器ほか				3	1				4	
大久保南	長野県信濃町	発掘	野尻湖	削片、削片系細石刃核	1								1	
境ヶ崎	長野県信濃町	発掘	野尻湖	Hahのホロカ	1								1	
千苅	長野県飯山市	発掘	千曲川	楔形１、矢柱形１、母形２	4								4	
小野平	長野県長野市	採集	千曲川	楔形細石刃核	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
押手	群馬県子持村	発掘	利根川	楔形細石刃核	1									
箱田遺跡群上原	群馬県北橘村	発掘	利根川	組成あり		51	1	2	2	1			183	
鳥取福蔵寺II	群馬県前橋市	発掘	利根川	組成あり（未報告）	○	○	○	○	○	○				
頭無	群馬県前橋市	発掘	利根川	組成あり	1	121	10	9	1	1			425	
茂合	群馬県安中市	発掘	利根川	荒屋型彫器				1					1	
大雄院前	群馬県桐生市	採集	渡良瀬川	楔形細石刃核、荒屋型彫器など	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
稲荷山V	群馬県笠懸町	発掘	利根川	楔形細石刃核	1								1	
池戸口峯山	群馬県太田市	発掘	渡良瀬川	荒屋型彫器				1					1	
赤羽根	栃木県岩舟町	発掘	渡良瀬川	楔形細石刃核	1	1			1				3	
白草	埼玉県川本町	発掘	荒川	組成あり	1	478	2	21	2	6	1		4416	土壌
中郷	埼玉県騎西町	発掘	利根川	削片１点						1			1	
那須官衙関連	栃木県小川町	発掘	那珂川	荒屋型彫器１点				1					1	
横田大宮	茨城県那珂町	発掘	久慈川	珪質頁岩の剥片形と他石器の供伴関係は不明	1	204	8		18	1	1			
後野B	茨城県ひたちなか市	発掘	那珂川	組成あり	4	167	4	7			1		748	
向野No. I	茨城県ひたちなか市	発掘	那珂川	角二山掻器１点					1				1	
恵岡中原	茨城県つくば市	発掘	桜川	組成あり、柏時期石器群と混在	1		2	7	3	1			41	
原田北	茨城県土浦市	発掘	霞ヶ浦	荒屋型彫器				1					1	
寺畑	茨城県土浦市	発掘	霞ヶ浦	荒屋型彫器				1					1	
柏原	茨城県取手市	発掘	利根川	組成あり	2	104	1	2			1		243	
鬼人塚	千葉県柏市	発掘	利根川	荒屋型彫器				1					1	
空掘No. 61	千葉県成田市	発掘	利根川水系数香川	組成あり	6	14	7	10	9	3			62	
木戸場A地点	千葉県佐倉市	発掘	高崎川	組成あり	2	3	11	9	7				102	
高岡遺跡群大山	千葉県佐倉市	発掘	高崎川	楔形細石刃核	1	3	1	1	2				11	
高岡遺跡群大堀寺	千葉県佐倉市	発掘	高崎川	楔形細石刃核	1				1				2	
関野台貝塚	千葉県佐倉市	発掘		荒屋型彫器		2	1	1					4	
木戸先	千葉県四街道市	発掘	鹿島川	楔形細石刃核、草創期石器群と混在	2	1		2					5	
和良比	千葉県四街道市	発掘	鹿島川	荒屋型彫器	3			3					6	
大網山田台No. 8	千葉県大網白里町	発掘	南白亀川	組成あり	2	34	9	9	7		1		175	

の変遷を説いた（佐野 2002、2003）。稲田が目的の異なる移動の結果と解釈した石材利用の相違を、佐野は移動・居住形態の時間軸上の変化と理解したことになるが、互いに他説を論駁し切ることは、現状ではまだ困難に見える。

（3）可搬性追求の技術構造

長距離移動生活を必要とした具体的な理由や、石材利用からみた移動・居住形態の変異が移動目的の相違か時間軸上の変遷かといった議論はさておき、荒屋系石器群の各遺跡が長距離移動の過程で残された活動痕跡であるとの理解は、およそ共有されている。荒屋系石器群は第Ⅱ章で述べたように両面調整石器群の中でも、両面調整石器の石核としての利用が最初に注目された石器群であり、最小の運搬重量で最大限の石材利用が可能な可搬性重視の技術構造をもつ石器装備であると論じられてきた（第Ⅱ章第２節参照）。

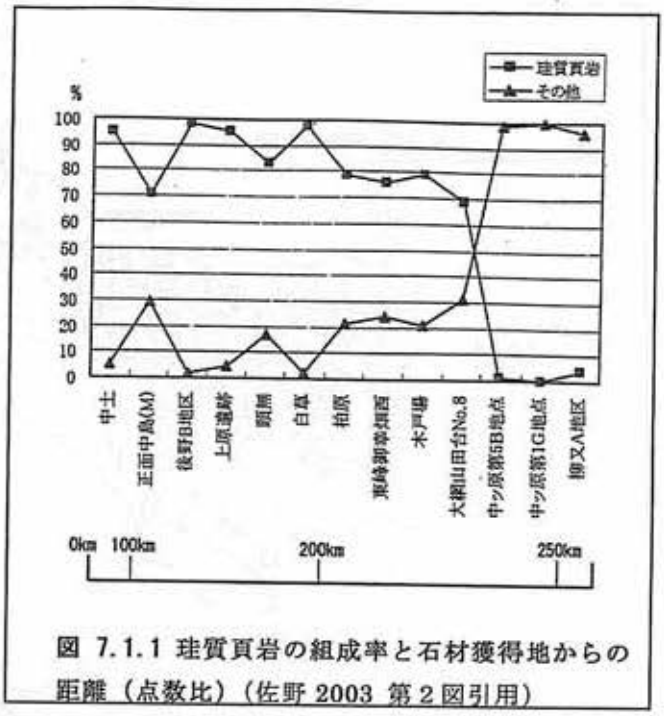


図 7.1.1 珪質頁岩の組成率と石材獲得地からの距離（点数比）（佐野 2003 第２図引用）

図 7.1.1 は佐野勝宏の論文からの引用で、荒屋系以外も含む「北方系細石刃石器群」の石材組成（点数比）と、珪質頁岩の分布域からの距離である。荒屋系石器群ではない中ッ原遺跡群と柳又 A 地区以外は、珪質頁岩が 70%以上の高い割合を示している。珪質頁岩の獲得可能な地域から 200km 以上も離れた遺跡でも、出土石器の 9 割近くが珪質頁岩である。これは第Ⅵ章でみた信濃川流域の尖頭器石器群のように、近場の多様な石材を随時補給するあり方とは異なり、獲得タイミングの限定的な単一の岩種に強くこだわる石材利用である。

第２節　石材獲得地からの距離と両面調整石器の大きさ

（1）石材獲得地からの距離

本州島の北半は、日本海側の丘陵が多い低地、大分水嶺の脊梁山脈、太平洋側北部の山地と南部の関東平野、およびこれらの移行帯とに地形的に大きく分かれる。遺跡の分布を扱う上では、日本海側・移行帯・太平洋側の三地域として考えることになる。良質の珪質頁岩の獲得が可能な地域として、山形県南部の山間部を中心とする東北日本海側が知られている（秦 1998）。堆積岩である珪質頁岩には理化学的産地同定法が未開発であるため、太平洋側で出土する珪質頁岩を、すべて山形産と断定することに問題がない訳ではない。しかし太平洋側ではこれまで山形産に匹敵する良質な珪質頁岩の産地が確認されていないこと、本論では「珪質頁岩の入手が相対的に容易な地域なのか・困難な地域なのか」との把握で十分であることから、議論の展開に影響はないと判断する。

移行帯に相当する群馬、栃木、茨城各県の北部山間部では黒色頁岩や多様な珪質頁岩が産出するが、山形産に較べて粗粒で質が劣る。房総半島南部の鴨川流域からも珪質頁岩が

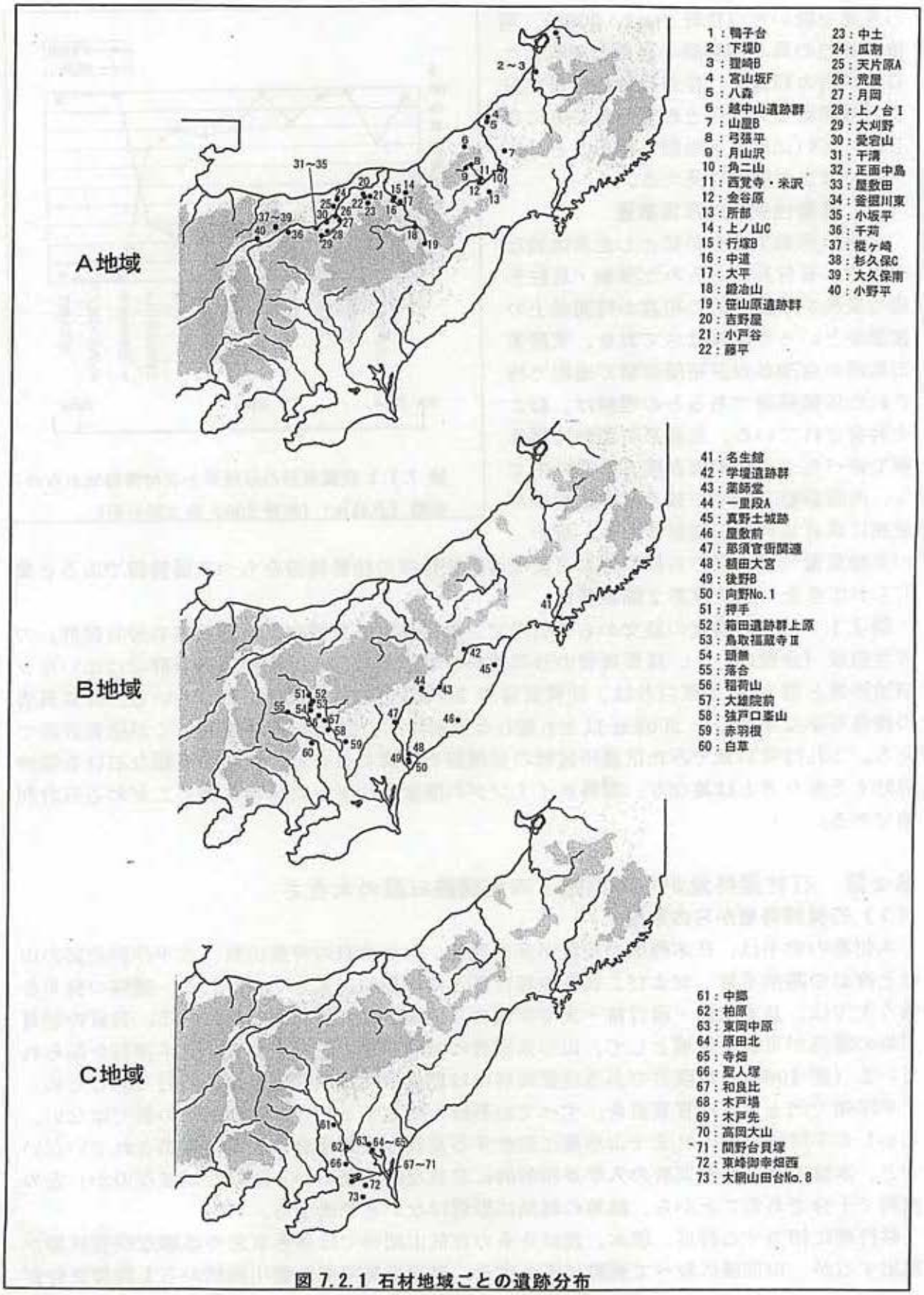


図 7.2.1 石材地域ごとの遺跡分布

産出する（田村 1994）というが、白色に風化する独特なもので山形産の石とは区別できる。移行帯では各種石材は採取可能だが、良質な珪質頁岩の獲得は困難であると見て良い。

移動の障壁となる大地形や、未知の原産地が発見される可能性のある地域なども考慮して、以下のように地域区分を行う。**A 地域**＝珪質頁岩の産出地近傍で相対的に石材入手が容易＝脊梁山脈以西の日本海側。**C 地域**＝産出地から遠く離れ相対的に石材入手が困難＝脊梁山脈以東で山麓から離れた関東平野。**B 地域**＝これらの中間の石材環境＝脊梁山脈以東で、脊梁山脈の山麓や低い山地に隣接する地域。

図 7.2.1 は石材地域ごとの遺跡分布である。単純に分布を問題とするだけなので、発掘調査の実施されていない表面採集資料のみの遺跡も含む。A地域は他地域よりも面積的に広いことや、各地での調査精度等のバイアスを考慮する必要はあるが、原産地近傍のA地域に遺跡数が多いことが分かる（40 遺跡）。それが原産地から離れるにつれてB地域 19 遺跡、C地域 12 遺跡と減少する傾向を認めることができる。

（2）両面調整石器の大きさ

図 7.2.2 は絹川一徳の論文からの引用（絹川 1996）に遺跡分布図を添付した。東北日本海側の石材獲得地に近いほど両面調整石器（細石刃核）が大きく、逆に太平洋側や中国地方など遠くなるほど小さいことが分かる。この傾向は、関東地方で新資料の蓄積が進んでいる今日でも大きな変更の必要はない。**図 7.2.2** で7の後野Bの例は大形だが、実見によると削片を転用した細石刃核であり、両面調整石器の本体ではない。石材獲得が可能な地域の近くでは両面調整石器は大形だが、遊動生活の中でリダクションが進行し、石材の

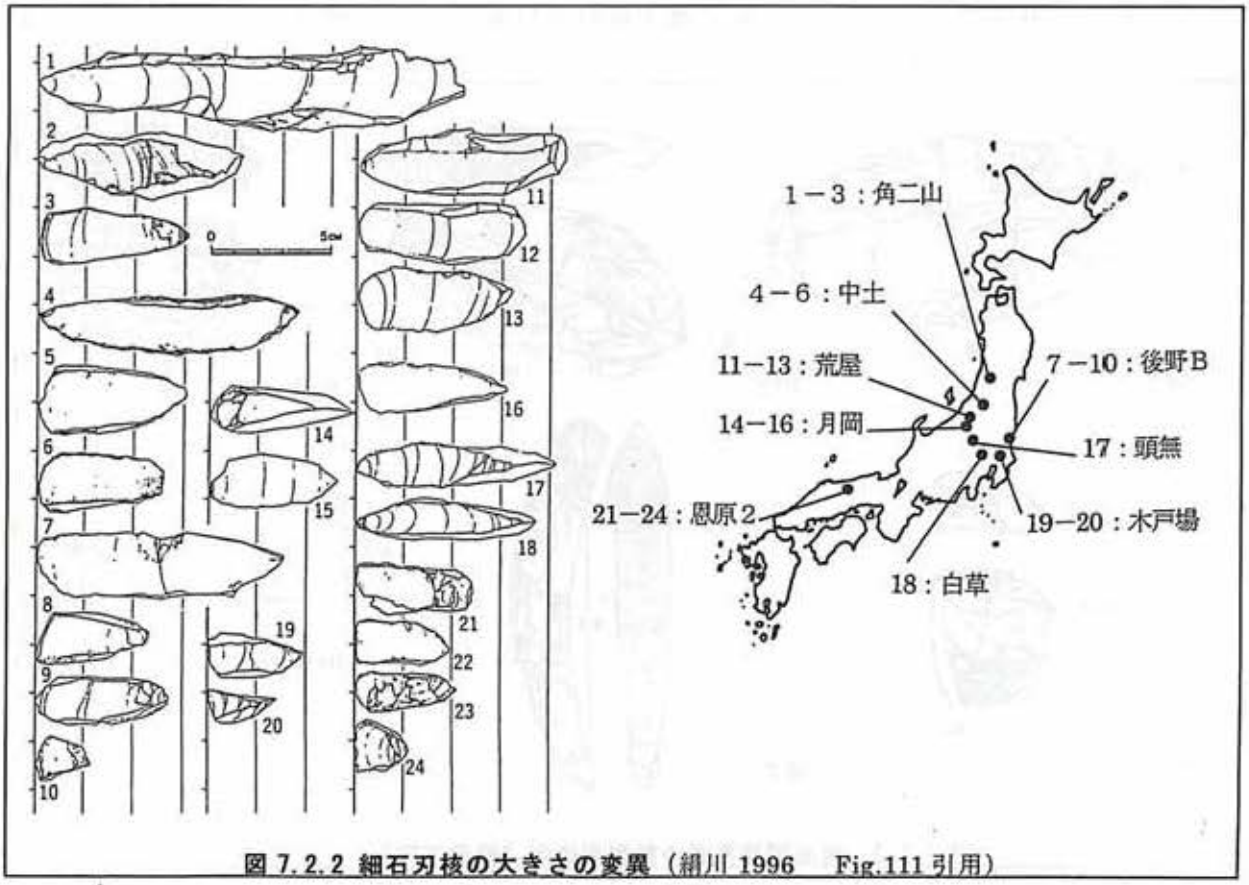


図 7.2.2 細石刃核の大きさの変異（絹川 1996　Fig.111 引用）

獲得地から離れた地点では、遺跡に残される両面調整石器は小形になるとの見通しが立つ。

この見通しを具体化するために、両面調整石器（細石刃核）の長さと幅を計測し、石材獲得地からの距離との相関を検討する。計測基準を**図 7.2.3** に示す。細石刃の剥離が進行した資料も、両面調整石器リダクションの一過程とみなして計測対象とする。削片（スポール）（註３）も完形品であれば剥離された時点の両面調整石器の長さを反映するため、完形品の長さのみ計測する。接合で本来の大きさが復元できる場合は接合状態で計測する。削片が剥離されていない両面調整石器は最大長を長さ、これに直交する最大長を幅とする（**図 7.2.3 例１**）。削片剥離後の両面調整石器は、細石刃剥離が開始している場合は作業面側の、いない場合は任意の側の、削片剥離面の一端を基準に、削片剥離面と平行方向に最も近い最大長を長さとし、これに直交する最大長を幅とする（例２、３、４）。通常は「細石刃核の高さ」とされる部分を「両面調整石器の幅」として計測することになる。**例４**のように器形の最大長と「長さ」として計測する部分が一致しない場合もありえる。削片は最大長と主要剥離面の剥離方向とが一致する場合にはこれを長軸とする（例５）。理論上は直交する可能性もあるが（例６）、今回検討した資料中にこのような例はなかった。

報告書等で実測図が公表されているものは実測図から、されていないものの一部は実物資料から計測した。計測できた両面調整石器は 31 遺跡 85 点、削片は 20 遺跡 43 点である。

図 7.2.4～7.2.5 は、各項目の計測値である。横軸にとった各遺跡は石材獲得地（山形県内陸部）からの距離の順に並べた。両面調整石器の長さ（**図 7.2.4** 上段）では、大半が５～10cm の範囲にまとまり、全体として見るかぎり石材獲得地からの距離との強い相関は認めにくい。しかし 17～18cm の最大値や 10cm を超える大形品はいずれも石材獲得地に近い遺跡（図の左）に、２～３cm の最小値は石材獲得地から遠い遺跡（図の左）に現

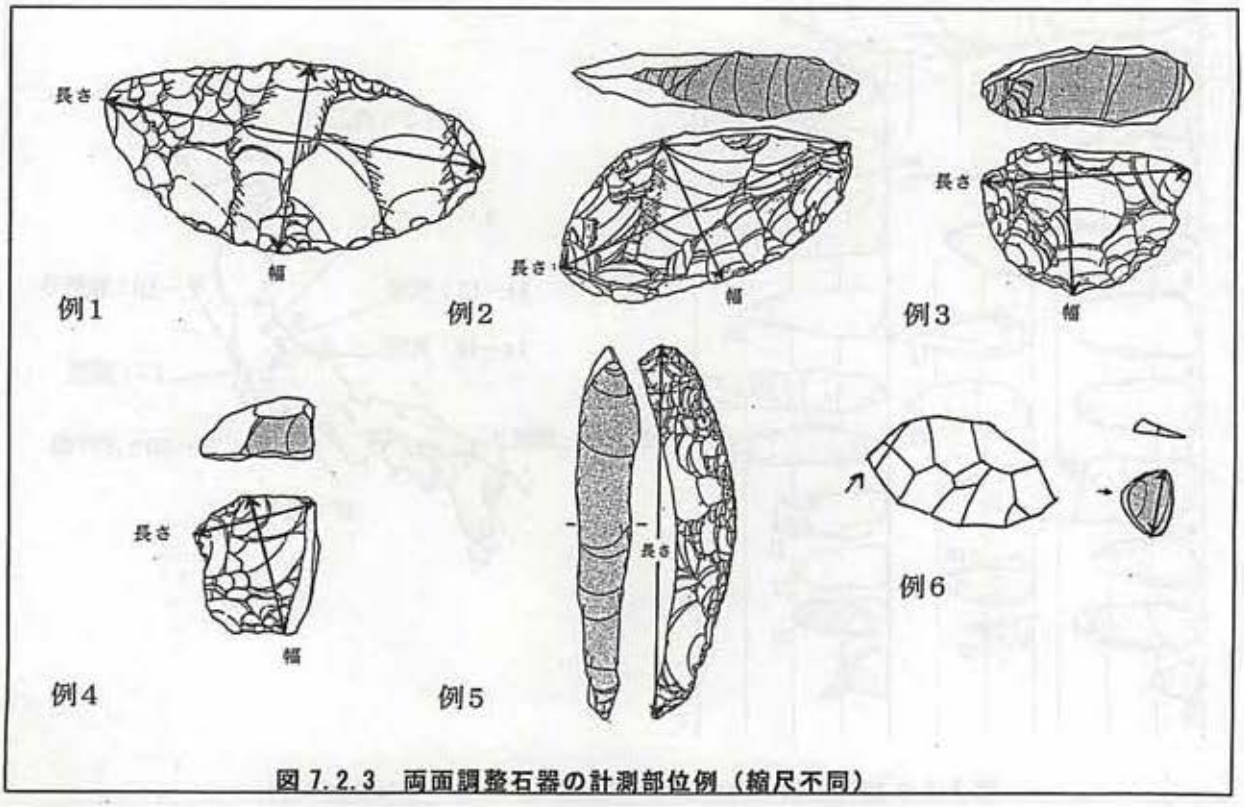


図 7.2.3　両面調整石器の計測部位例（縮尺不同）

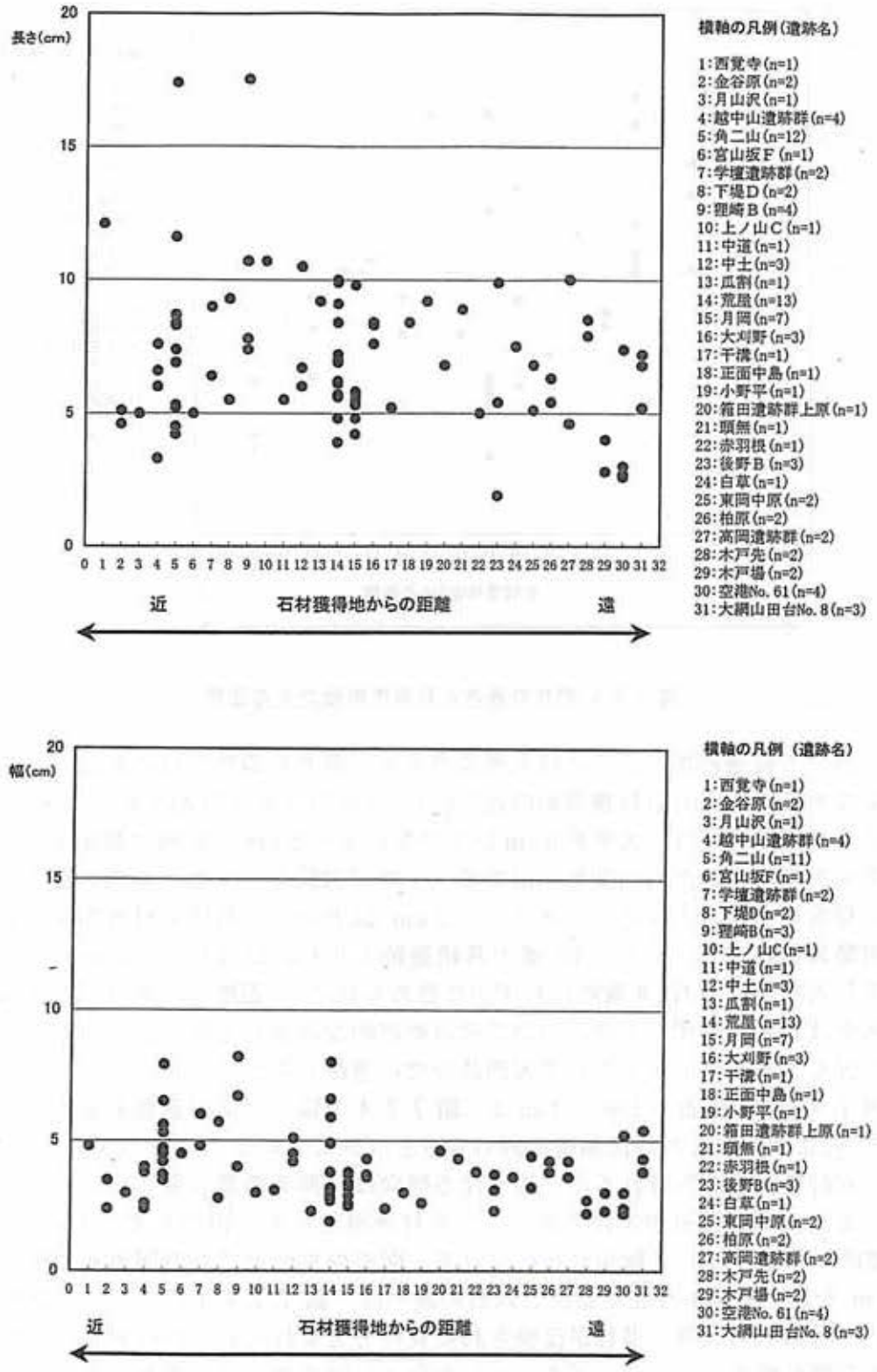


図 7.2.4 両面調整石器（細石刃核）の大きさと石材獲得地からの距離

（上段：長さ／下段：幅）

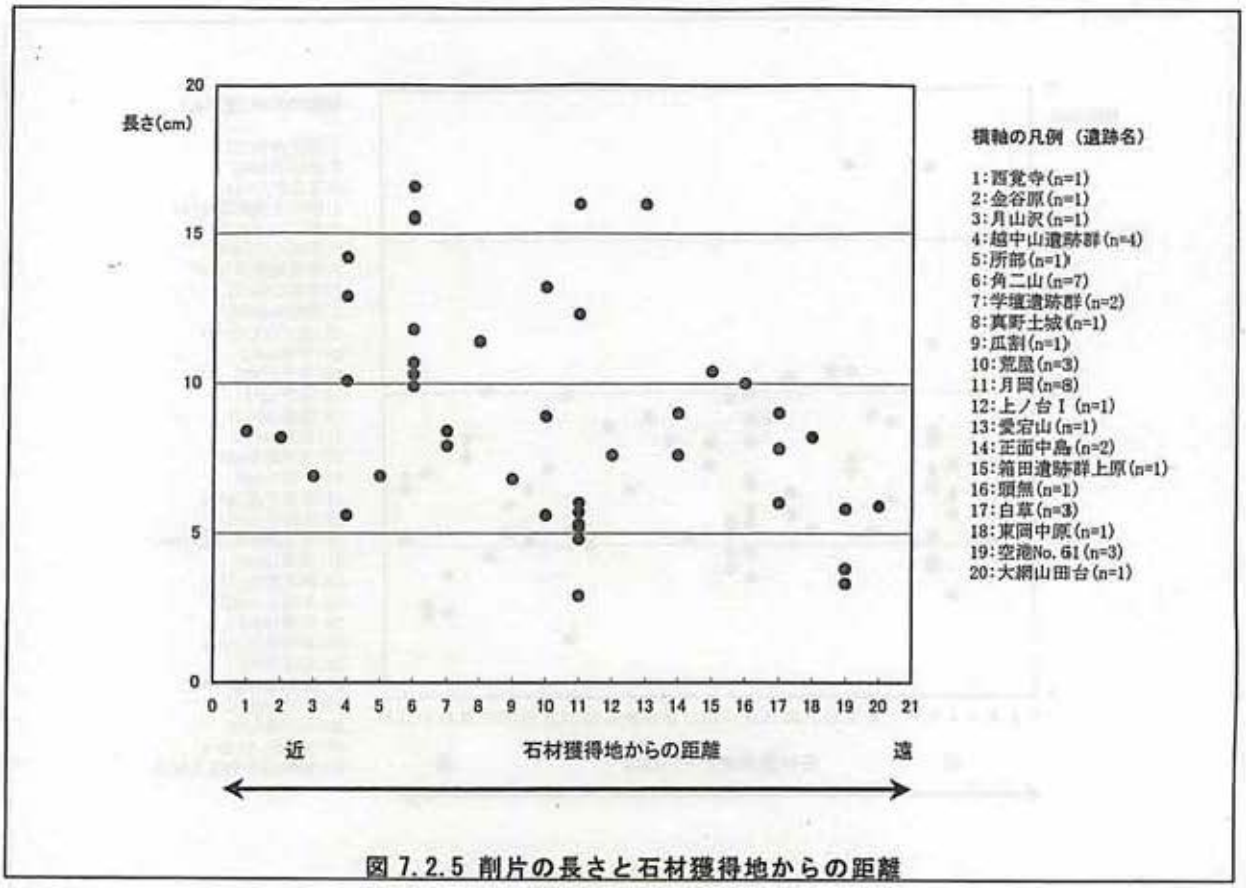


図 7.2.5 削片の長さと石材獲得地からの距離

れることから、石材獲得地の近くには大形品があり、離れた遺跡には小形品がある、との指摘は可能である。ただし石材獲得地の近くにも 5 cm 以下の小形品が存在する。

幅（図 7.2.4 下段）では、大半が 5 cm 以下で特に 2 ～ 5 cm の範囲に集中する。細石刃核として削片を剥離された両面調整石器の幅（＝細石刃核として見た場合の高さ）は、平均的にこの程度の大きさとなるのであろう。 5 cm 以上の大形品は石材獲得地に近い図の左半分の遺跡にのみ表れており、15 番の月岡遺跡より右にはほとんど存在しない（空港 No.61 遺跡と大網山田台 No.8 遺跡にわずかに認められる）。距離との関係は、全体として漸移的な減少は認められず、上限についてのみ断続的な形として認めることができる。石材獲得地の近くであるにもかかわらず大形品のない遺跡もある

削片（図 7.2.5）の分布の上限と下限は、図 7.2.4 上段の「両面調整石器本体の長さ」とほぼ重なる。これは削片が両面調整石器の長さを反映していることを示すと考えられる。図の右側－石材獲得地から離れるほど短くなる傾向は、両面調整石器本体の長さよりも顕著である。また両面調整石器本体の長さでは石材獲得地に近い図の左側でも少ない 10～15cm の範囲に、削片は一定数が分布している。図の中央付近でも月岡遺跡や愛宕山遺跡など、15cm を超える例が存在する。これらの違いは、図 7.2.4 上段の「両面調整石器本体の長さ」では細石刃剥離の進行が反映された資料も含まれているのに対し、完形の削片は両面調整石器が縦割りの分割リダクションを受けた時点での両面調整石器の長さを、より純粋に反映しているためであると考えることができる。

第３節　リダクション段階の遺跡間変異

（１）リダクション段階の設定と分析方法

次に剥片器種（彫器や掻器など）も含めた、石器群全体のリダクション段階の遺跡間変異を検討する。**図 7.3.1** は荒屋系石器群の石器ライフ・サイクル、すなわち素材の獲得から加工、使用・再生、廃棄にいたる製作工程の全体を模式的に復元した。筑波大学遠間資料研究グループ（山田・白石 1990）と桜井美枝（桜井 1992）の研究成果を参考に、資料を実見する中で得た知見も加えている。

段階Ⅰは両面調整石器の準備段階である(**図 7.3.2**)。荒屋系石器群の両面調整石器は、リダクションを経て細石刃核になるものであり、また削片を素材とした細石刃核と区別するためにも「両面調整石器＝細石刃核」と呼ぶことにする。削片剥離のない両面調整石器を、本段階とする。確認できたのは**図 7.3.2** の４点のみであり、荒屋系石器群ではこの状態の両面調整石器が遺跡に残されることは稀といえる（註４）。また示した例はいずれも小形で薄手だが、次の**図 7.3.3** にみる既に削片が剥離された両面調整石器や削片の大きさから推定して、より大形の両面調整石器が一般的であった可能性が高い。

削器・彫器・掻器には段階Ⅰは無いものとする。将来的にはこれらの器種に加工されるであろう剥片類（素材剥片）は、一定の厚みや大きさを備えたものとして感覚的な識別はできるが、他の残滓としての雑多な剥片類から離散的に分離できないとの理由による（二次加工を加えずに剥片のままの状態でも、道具として使用された可能性もある）。

段階Ⅱは初めて特定器種としての役割が付加される段階である（**図 7.3.3**）。両面調整石器＝細石刃核では、削片の剥離で打面を用意されているが細石刃の剥離が開始していない状態を段階Ⅱとする（**図 7.3.3** の 1～3）。削片は石器群全体のリダクション過程の中ではこの段階に初めて現れることから、事後的な二次加工や転用のない削片そのものは段階Ⅱとして扱う。つまり削片にも段階Ⅰはない（**図 7.3.3** の４～6）。削器・彫器・掻器はそれぞれの弁別的な二次加工を加えられ、各器種に分化する。削器と掻器では二次加工の強度（二次加工単位の大きさと深さ）が弱い（二次加工単位が小さく浅い）ことを基準に段階Ⅲから区別する。削器は石刃や大形の縦長剥片を素材とする例が多い(**図 7.3.4** の 1～3)。彫器は彫刀面の樋状剥離が一条のみであることで次の段階Ⅲから区別する（**図 7.3.4** の 4～6)。削器よりも薄手・小形ながら、やはり石刃状の縦長剥片を素材とする場合が多いが（**図 7.3.4** の 5～6)、両面調整石器のリダクション時に生じる剥片もある(**図 7.3.4** の 4)。

段階Ⅲは細石刃の剥離や各器種のリダクションが大きく進む段階である（**図 7.3.5**)。他器種からの転用が確認できる資料、刃部再生の反復で素材の形状が大きく損なわれている資料がこの段階を特徴づける。両面調整石器＝細石刃核は細石刃の剥離が進み（**図 7.3.5** の 1)、削片は二次加工や転用が認められる（**図 7.3.5** の 2～4)。削器は二次加工が深く入り（**図 7.3.5** の 10)、極端に細身になる（**図 7.3.5** の 9)、一度折れて再生したのか長さが縮む（**図 7.3.5** の 11)。彫器は複数の樋状剥離が繰り返し入る（**図 7.3.5** の 8)。掻器は二次加工が腹面にまで入る例や長さが著しく縮む例がある（**図 7.3.5** の 5～7)。

段階Ⅳはリダクションが大幅に進行した結果、各器種とも十分な機能を果たすことが困難と推定されるほどまでに、石器の法量が減少した状態である。両面調整石器＝細石刃核は細石刃の剥離が限界まで進み（**図 7.3.6** の 1～2)、他器種に転用される（**図 7.3.6** の 3 は掻器に転用された例)。削器（**図 7.3.6** の 10）や掻器（**図 7.3.6** の 18・9・11）もリダ

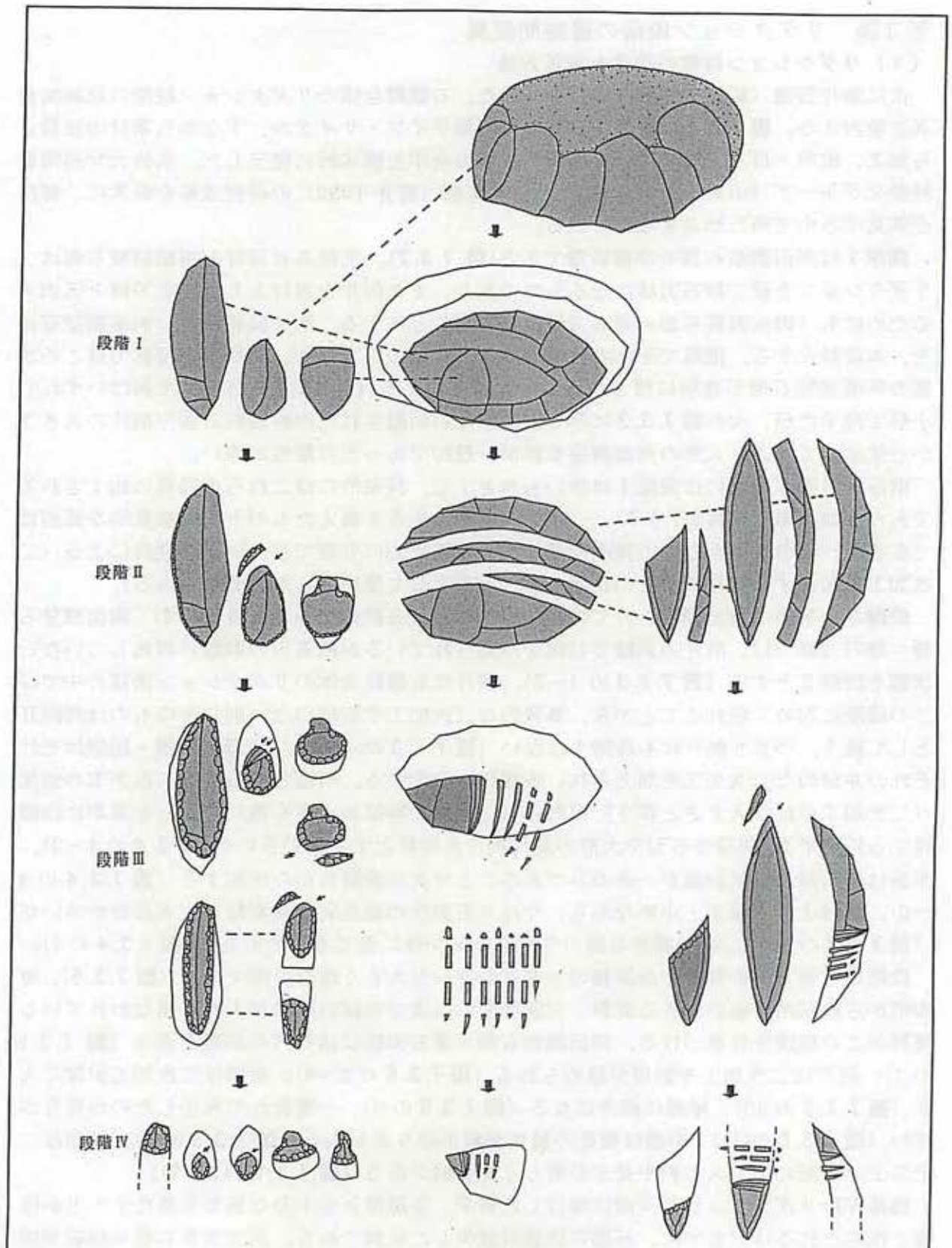


図 7.3.1　荒屋系石器群のリダクション段階の設定

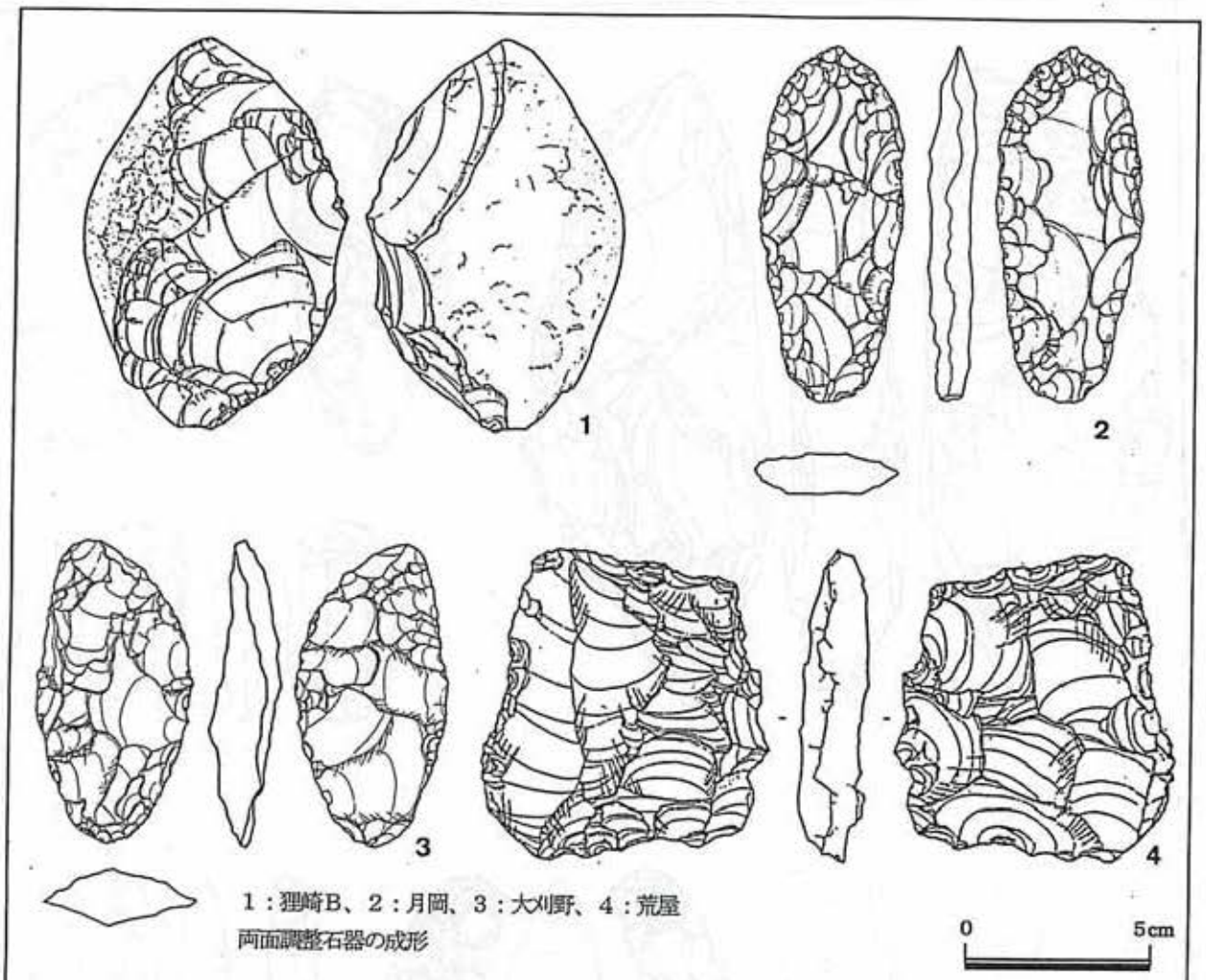


図 7.3.2　リダクション段階　段階Ⅰの資料例（S＝１／2）

クションが限界まで進む。彫器や掻器では素材剥片自体が、小型化した両面調整石器から生じた薄手・小形の剥片を素材とするものも含む（図 7.3.6 の 4～7・12）。

一般には、大半の遺跡でこれらの段階Ⅰ～Ⅳの全てに相当する石器が残される。しかし手持ち石材が豊富な場合には、リダクションの早い段階の石器が残されると想定できる。逆に手持ち石材が枯渇している状況であれば、リダクションの進んだ段階の石器が多く残されることになろう。そこで段階Ⅰ～Ⅱの石器が多い遺跡では石材消費の前半段階にあたり、段階Ⅲ～Ⅳの石器が多い遺跡は石材消費の後半段階にあたると考えてよい。

分析は各遺跡出土の両面体＝細石刃核、削器、彫器、掻器、削片について遺跡ごとに検討し、各石器がどの段階かを判断して、その段階別・器種別の点数を求める。次いで器種の枠を取り払って段階ごとの総点数を求め，検討した石器の総点数との割合から出現頻度を計算する。

$$\text{出現頻度（\%）} = \frac{\text{段階ごとの総点数（点）}}{\text{検討した石器の総点数（点）}} \times 100$$

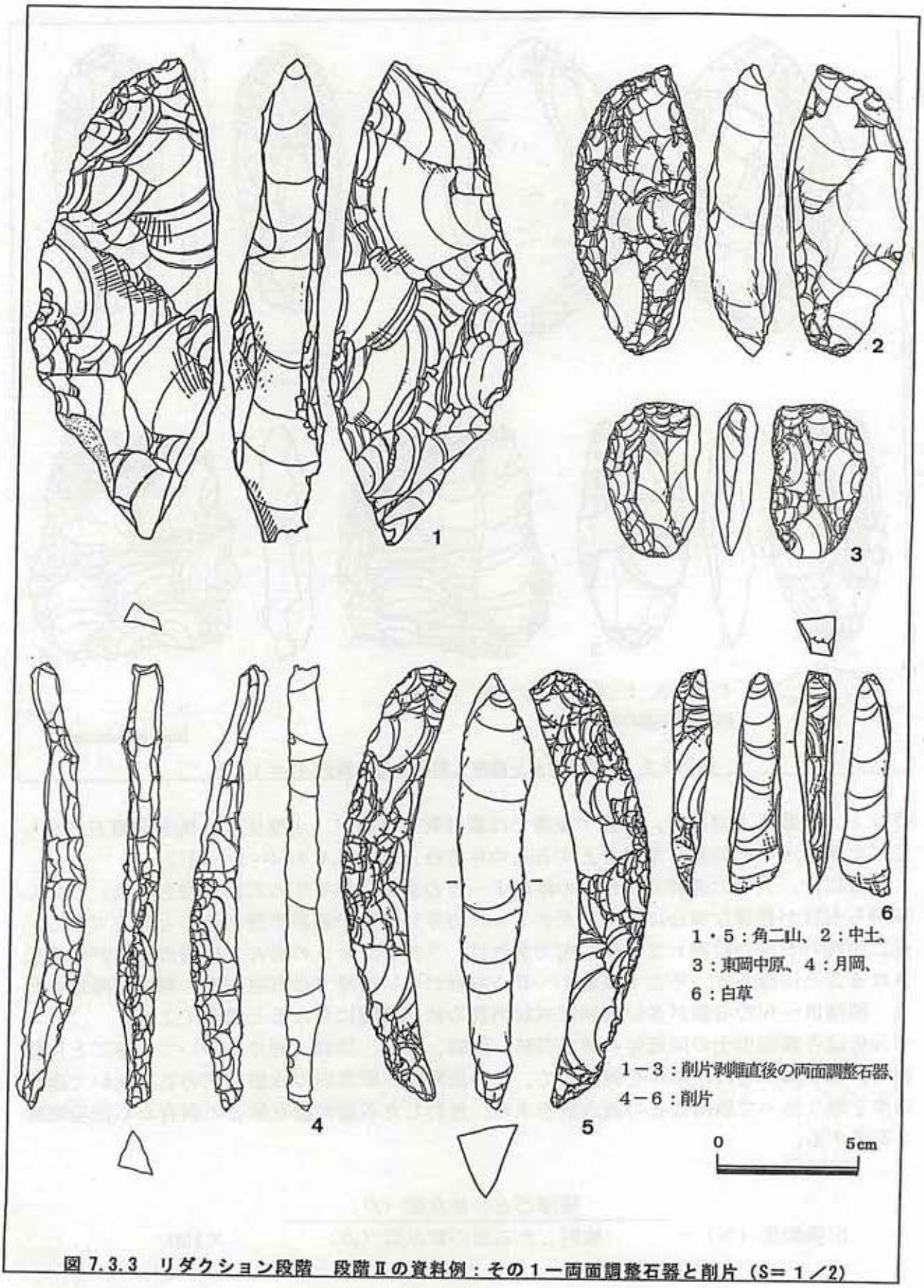


図 7.3.3　リダクション段階　段階Ⅱの資料例：その１－両面調整石器と削片（S＝１／2）

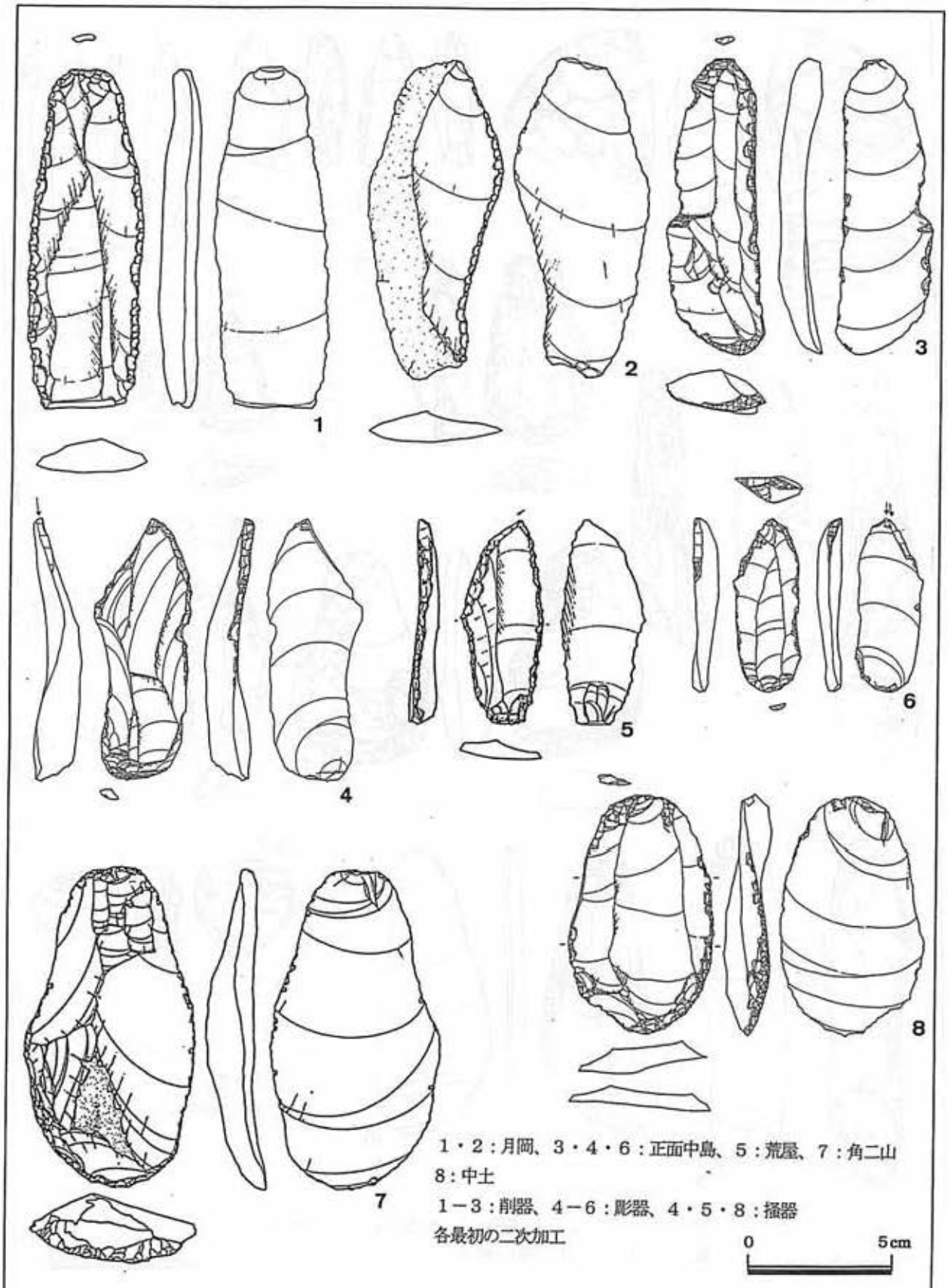


図 7.3.4　リダクション段階　段階Ⅱの資料例：その２－剥片器種（S＝１／2）

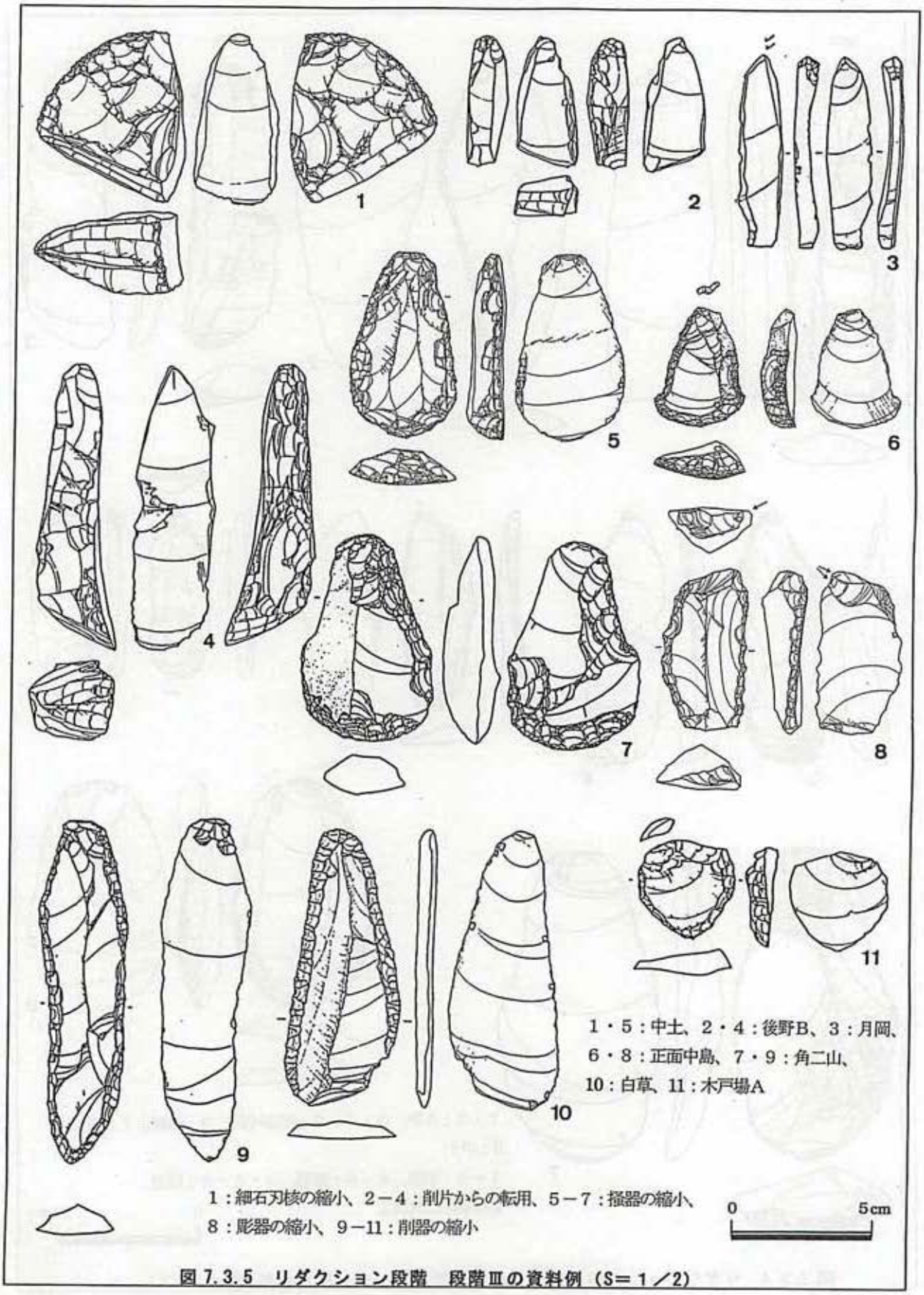
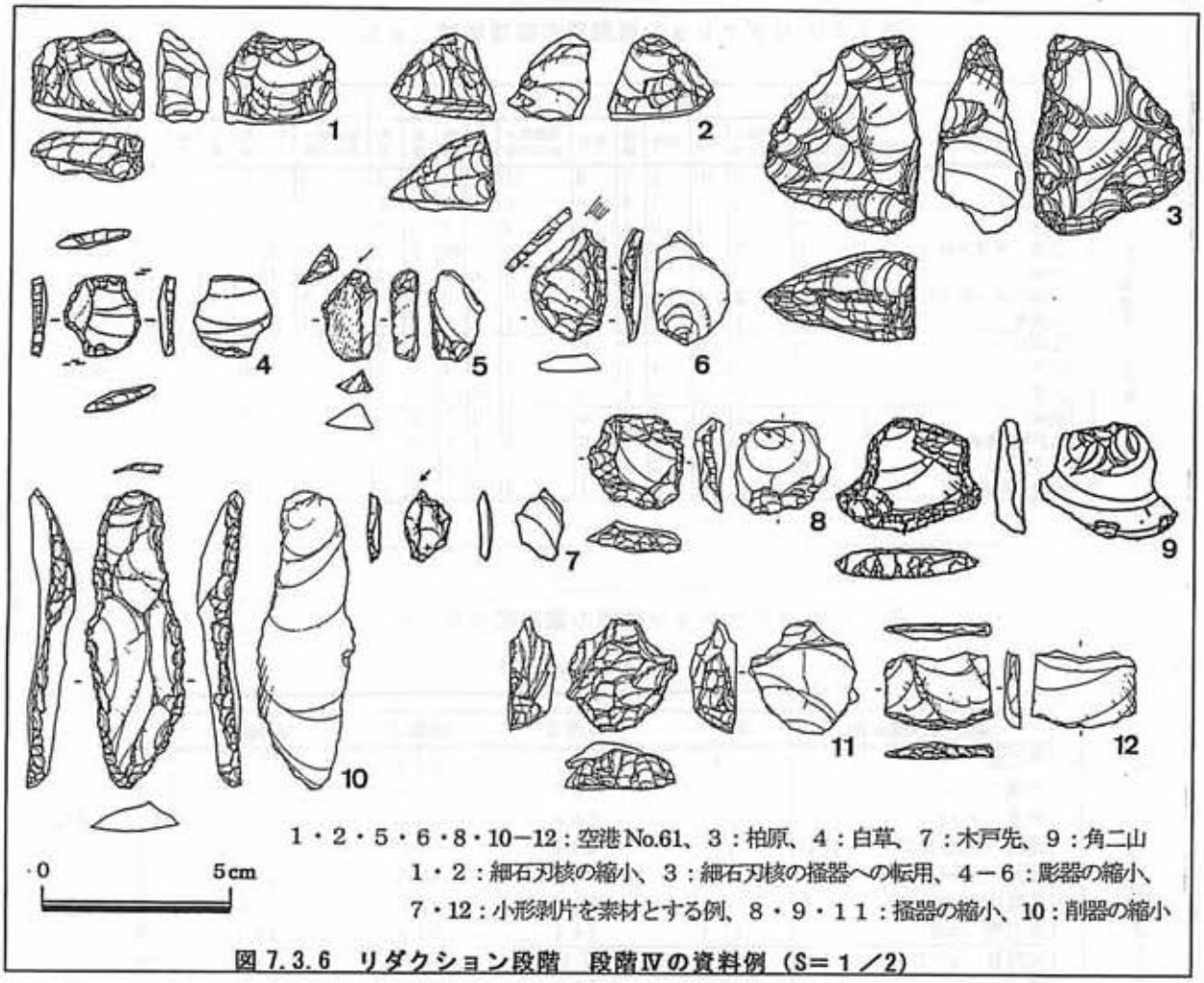


図 7.3.5　リダクション段階　段階Ⅲの資料例（S＝1／2）



1・2・5・6・8・10−12：空港No.61、3：柏原、4：白草、7：木戸先、9：角二山
1・2：細石刃核の縮小、3：細石刃核の掻器への転用、4−6：彫器の縮小、
7・12：小形剥片を素材とする例、8・9・11：掻器の縮小、10：削器の縮小

図 7.3.6　リダクション段階　段階Ⅳの資料例（S＝1／2）

（2）前半型の遺跡と後半型の遺跡

安定した組成をもつ 14 遺跡の検討結果が、**表 7.3.1～7.3.2** である。縦軸の遺跡は石材獲得地からの順に並べてある。表 **7.3.1** は遺跡ごとの器種別点数内訳で、これをリダクション段階を単位に集計し、割合で示したのが次の表 **7.3.2** である。リダクション段階Ⅰと段階Ⅱとの割合を合計した数が、段階Ⅲ・段階Ⅳの割合の合計を上回る遺跡をリダクション段階の「前半型の遺跡」とよぶ。これらの遺跡では、リダクション段階の前半が主として遺跡に残されているものである。逆の遺跡を「後半型の遺跡」と呼ぶことにする。

これに従うと前半型の遺跡は下堤D、中土、大刈野、頭無であり、後半型の遺跡は角二山、後野B、白草、木戸場A地点、空港 No.61 となる。荒屋、月岡、正面中島、大網山田台 No.8 は前半と後半がほぼ同率で拮抗する。遺跡によってはサンプル数が少なすぎる場合もあるため、統計学的な意味では問題がないわけではない。また荒屋遺跡と角二山遺跡は既公表分の実測図資料にもとづいているが、特に出土点数が膨大な荒屋遺跡では、全体のうちの一部資料（1990 年の概報報告分までの公表資料）しか分析しておらず、ここで提示した数値が母集団全体の傾向をどの程度反映しているかは不明である。しかしごく大まかには、石材獲得地に近いほどリダクション段階の前半型の遺跡が多く、逆に遠くなると後半型の遺跡が多くなる、との傾向を指摘できる。

表 7.3.1 リダクション段階別の器種組成（点数）

		段階Ⅰ	段階Ⅱ					段階Ⅲ					段階Ⅳ					
		両面体＝細石刃核	両面体＝細石刃核	削器	彫器	掻器	削片	両面体＝細石刃核	削器	彫器	掻器	削片	両面体＝細石刃核	削器	彫器	掻器	削片	
近	角二山	0	4	10	6	3	9	12	7	11	8	3	0	0	0	3	0	A地域
	下堤D	0	2	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
	中土	0	1	1	0	5	0	2	1	0	1	0	0	0	0	1	0	
石材獲得地からの距離	荒屋（概報資料分）	1	2	1	33	2	10	6	1	42	2	2	0	0	2	0	0	
	月岡	1	1	7	2	3	12	6	4	10	0	2	0	2	1	1	2	
	正面中島（細石刃石器群	0	2	4	4	9	1	0	8	6	3		0	2	1	0	0	
	大刈野	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	
	後野B	0	0	0	1	0	0	1	2	6	0	2	1	1	0	0	0	B地域
	頭無	0	1	3	5	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	
	白草	0	1	2	6	1	2	0	1	15	0	2	0	0	0	0	1	
	柏原	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	C地域
	木戸場A地点	0	0	4	2	1	0	0	4	6	4	0	2	0	0	0	0	
遠	空港No. 61	0	1	4	2	4	2	0	1	6	3	1	4	1	2	2	0	
	大網山田台No. 8	0	0	6	2	4	1	3	2	7	2	0	0	0	0	0	0	

表 7.3.2 リダクション段階の遺跡間変異（%）

リダクションの進行

遺跡名（対象点数）	段階Ⅰ	段階Ⅱ	段階Ⅲ	段階Ⅳ	
角二山（n=76）	0	42.1	53.9	3.9	A地域
下堤D（n=5）	0	80.0	20.0	0	
中土（n=12）	0	58.3	33.3	8.3	
荒屋（概報資料分:n=104）	1.0	46.1	51.0	1.9	
月岡（n=54）	1.9	46.3	40.7	11.1	
正面中島（n=40）	0	50.0	42.5	7.5	
大刈野（n=9）	11.1	44.4	33.3	11.1	
後野B（n=14）	0	7.1	78.6	14.3	B地域
頭無（n=13）	0	78.6	14.3	7.1	
白草（n=31）	0	32.3	58.1	3.2	
柏原（n=5）	0	20.0	20.0	60.0	C地域
木戸場A地点（n=23）	0	30.4	45.2	8.7	
空港No. 61（n=33）	0	39.4	33.3	27.3	
大網山田台No. 8（n=27）	0	48.1	51.9	0	

近 ← 石材獲得地からの距離 → 遠

第４節　遺跡類型と器種組成の変異

（１）遺跡類型の変異

次に遺跡を規模と内容で分類し、その分布傾向を検討する。同様の検討は加藤博文（加藤前掲 1996a）がおこなっている。加藤は出土点数の多い大規模遺跡をＬ型、小規模で両面調整石器を剥片器種への素材供給に活用しない遺跡をＳ１型、中規模で両面調整石器を中心とした複合的な技術を発現させている遺跡をM型、出土遺物数が極めて少なく小規模な遺跡をＳ２型とした。その上で、Ｌ型は石材獲得地の近くでの搬出用石器の製作と準備、Ｓ１型は長距離移動を予定しない移動行程、M型とＳ２型はともに冬季の長距離移動を予定した移動行程の中で、同一の集団がそれぞれ残したと解釈した。

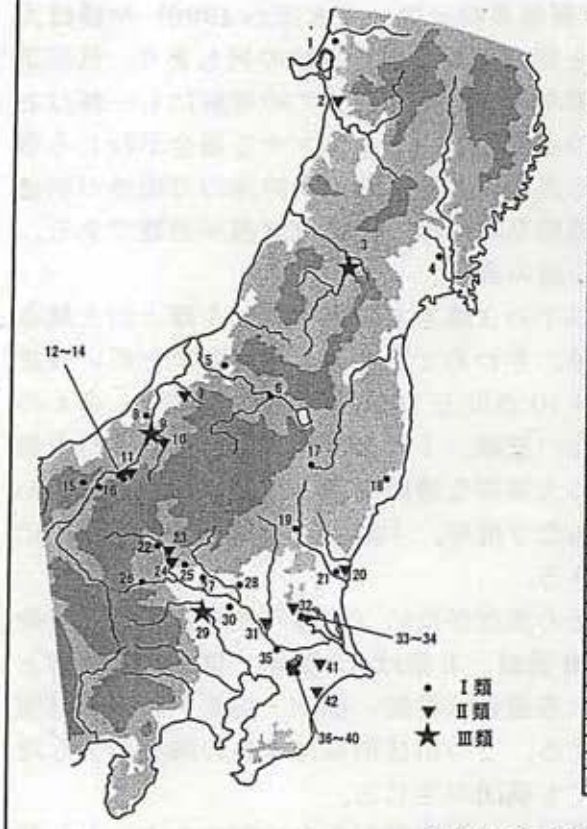
加藤の特徴は、舟底形（ホロカ型）細石刃石器群も北海道島の接合資料を根拠として「削片系細石刃石器群」と同一集団とみなしている（Ｓ１型）点にある。確かに本州島の舟底

形細石刃石器群には、**樽口遺跡A-MH文化層**（新潟県朝日村、立木ほか 1996）や**額田大宮遺跡**（茨城県那珂町、川崎 1978）など荒屋系と同じ良質な珪質頁岩の例もあり、荒屋遺跡の一部に舟底形が含まれるなど、荒屋系石器群の部分的変異としての理解にも一理はある。しかし本州島の舟底形細石刃石器群は在地の多様な石材を主体とする場合がむしろ多く、編年研究の学説史上（白石 1995 など）でも荒屋系石器群とは別時期の可能性が指摘されてきた。このために舟底形細石刃石器群と荒屋系石器群の関係は評価が困難である。そこで舟底形細石刃核の遺跡は除いて遺跡類型を組み直す。

出土点数、組成の規模、遺構の有無を基準に以下の３類型を設定する。**Ⅰ類**：出土総点数が 10 点未満の断片的な資料で構成される遺跡。きわめて限定的な作業内容と短い占拠（滞在）時間を想定できる。**Ⅱ類**：出土総点数が 10 点以上 1000 点未満の遺跡で、多くの器種や剥片類から構成され、遺構・礫群を持たない遺跡。Ⅰ類とⅢ類の中間的な性格を想定できる。**Ⅲ類**：出土総点数が 1000 点を超える大規模な遺跡で、多くの器種や剥片類から構成され、かつ構築的な遺構または礫群をともなう遺跡。Ⅰ類やⅡ類とくらべ相対的に長期にわたる占拠で、多様な活動内容を想定できる。

発掘調査が実施された遺跡と、他時期石器群との混在がない（分離可能な）遺跡を対象とする。条件に適した 44 遺跡のうち、Ⅰ類は 28 遺跡、Ⅱ類は 13 遺跡、Ⅲ類は３遺跡となった。**図 7.4.1** は類型別の遺跡分布図である。各遺跡は群馬・栃木・福島・新潟の県境の山岳地帯を取り囲むように楕円を描いて分布する。この山岳地帯は今日の調査が入らないと同時に当時の集団の日常的な活動領域としても疑問が生じる。

Ⅰ類とⅡ類は各地域に満遍なく分布する。福島以北は調査例が少なく傾向をよみとれないが、関東平野ではⅡ類がほぼ等距離に分布し、その間をⅠ類がうめている。Ⅲ類は３例しかないが、そのうち２例は日本海側の山間部にある。**図 7.4.1** で３の**角二山遺跡**は、珪質頁岩の産出地に比較的近く、両面調整石器（細石刃核）や削片、剥片器種は総じて大型である。発掘資料で 5763 点、採集資料をあわせると 6000 点以上の石器が回収されている。削片が多いことが特徴だが、他の剥片器種の点数は、全体の規模のわりに多いとは言えない（**図 7.4.1** 付表）人頭大の大形品を含む円礫が径約４～５ｍにまわる礫群が検出されている（加藤ほか 1982）。**図 7.4.1** で９の荒屋遺跡は、日本海側のＡ地域とはいえ、珪質頁岩の産出地からは約 100km 以上は離れている。しかし第１次調査で 2378 点、第２・３次調査の 92435 点を合わせた総計約 95000 点の出土資料と、その他多数の表採資料が存在する、とびぬけた大規模遺跡である。両面調整石器（細石刃核）や削片は角二山ほど大きくはない点で石材獲得地からの距離を反映しており、むしろ彫器と彫器削片が圧倒的に多い点に特徴がある。長径 3.8m深さ 0.2mの竪穴住居状遺構を中心に、19 基の様々な大きさの土壙が複雑な切り合い関係をもって検出され、反復的な土地利用を示している。関東平野で唯一のⅢ類である**白草遺跡**は、点数こそ多いがフルイ回収の微細剥片や細石刃、彫器削片が大半である。点数で 99%以上を占める珪質頁岩の総重量は 1.2kg たらずと、角二山や荒屋とは比較にならないほど少規模な遺跡であるが、それでも関東平野の中では突出している。径 2.3m×1.5m深さ約 0.5mの皿状の掘り込み（土壙）が１基検出され、この中からも荒屋系石器群が濃密に出土した（川口 1993）。荒屋遺跡で２基が検出された「大型土壙」（土壙６、14）に相当する大きさであり、荒屋遺跡では複数が切りあって存在していた構築物が、白草遺跡では単独の姿で現れているとでもいえようか。



遺跡名	図番号	遺跡類型	石材地域	組成								遺構
				横打刃	縦打刃	両面	楔形	掻器	削片	磨製	その他	総計（剥片除く）	
荒屋敷遺跡	12	I類	A				1					1	
小坂平	13	I類	A	1								1	
大久保南	15	I類	A	1								1	
座台	25	I類	B				1					1	
笹森山V	26	I類	B	1								1	
後野B遺山	27	I類	B				1					1	
中道	30	I類	C						1			1	
原堰東側遺	19	I類	B				1					1	
笹野No. 1	21	I類	B					1				1	
原田北	32	I類	C				1					1	
寺畑	34	I類	C				1					1	
個人蔵	35	I類	C				1					1	
一里段A	17	I類	B		1							1	
神平	22	I類	B	1								1	
柳台山	6	I類	A				2					2	
笹倉跡	18	I類	B		2							2	
原前遺跡群大協寺	39	I類	C	1					1			2	
広野	8	I類	A	1						1		2	
余目B	28	I類	B	1	1			1				3	
行塚B	5	I類	A		2		1					3	
座倉台	14	I類	A		3		1					4	
杉久保C	12	I類	A				3	1				4	
千台	16	I類	A	4								4	
前野台B遺	37	I類	C		2	1	1					4	
米戸先	3	I類	C	2	1		2					5	
和良比	40	I類	C	2			4					6	
名生館	4	I類	B		1	1	1	1				6	
鴨子台	1	I類	A				1	2				8	
長岡遺跡群大山	29	II類	C	1	3	1	5	1				11	
東岡中原	22	II類	C	1		2	2	3	1			41	
笹畑No. 61	41	II類	C	6	14	7	19	9	3			62	
中土	7	II類	A	4	22	6		9		1	1	79	
米戸畑A地点	26	II類	C	2	3	11	9	7				102	
正法中島	11	II類	A	1	19	10	11	11	3	1		156	
大網山田台No. 8	42	II類	C	2	34	9	6	3		1		175	
長谷遺跡群上原	23	II類	B		8	1	2	2	1			183	
柏原	31	II類	C	2	104	1	2				1	243	
下堀B	2	II類	A	2	11	1	2					約250	
月岡	10	II類	B	6	93	10	14	5	9			378	
堀無	24	II類	B	1	121	10	9	1	1			428	
後野B	20	II類	B	4	167	4	7			1		748	
白坂	29	II類	B	1	478	2	21	2	6	1		4416	土壙
角二山	3	II類	A	9	1215	6	29	33	31	12	○	5763	炉穴
荒屋(1次・2次・3次)	9	II類	A	71	6272	8	1051	30	27	8	○	94813	土壙群・包含層発掘

図 7.4.1　類型別の遺跡分布図

なお条件にあわず検討対象から外した中に、大規模で遺構等をともなうⅢ類の候補は他にも２つの遺跡がある。いずれも日本海側（A 地域）である。そのうちの一つである**大刈野遺跡**（新潟県湯沢町、佐藤 1988）は、**図 7.4.1** で 10 の月岡遺跡の上流に所在する。複数の礫群が検出されているが、大形尖頭器石器群（第Ⅲ期）との分離が困難な出土状況であり、荒屋系石器群と礫群の関係も評価が難しいことから、検討対象から外した。実見によると珪質頁岩製で荒屋系石器群とほぼ確定できる資料は 20～30 点前後にすぎず、約 2500 点前後が出土している珪質頁岩以外の在地石材を仮に全て分離するならば、中規模なⅡ類遺跡とみなすべきかもしれない。もう一ヶ所は**笹山原遺跡群 No. 27 遺跡**（福島県会津若松市、高原ほか 2002）で、**図 7.4.1** で６の鍛冶山遺跡の上流、猪苗代湖付近に所在する。表採資料のみであるため検討対象からはずしたが、採集資料だけで約 1200 点以上の石器群が回収されており、荒屋型彫器だけでも約 100 点におよぶという。試掘調査の結果、数度の圃場整備によって遺跡は完全に破壊・消滅していたことが確認され、遺構の有無はもはや検討不可能だが、彫器が異常に多い点で潜在的には荒屋遺跡に類似した内容や規模であった可能性が高く、惜しまれる。

（２）器種組成の変異

石器の器種組成は、動物遺存体が残らないこの地域において、場の機能を推測する唯一の手がかりである。遺跡間での機能差の検討がここでの目的である。具体的な機能は不明ながらも「遺跡間に活動内容の差が想定できるのか、できないのか」という大枠での議論にととどまる。荒屋系石器群では器種構成は画一的であり、組成が問題となるのは各器種

の量的比率である。なお二次加工剥片など便宜的な石器は除き、定型的な器種のみを検討する。細石刃も除く。分析は先の遺跡類型で言うⅡ類とⅢ類の中でも、さらに一括性の保証が高いと判断できる遺跡に限った。その結果、実際に検討できた遺跡数は 14 遺跡にとどまった。

表 7.4.1 は各遺跡における器種の出現率を表わしたものである。縦軸に取った各遺跡は石材獲得地からの順に並べてある。両面調整石器は細石刃核や細石刃核母型も含む。下堤 D の「石刃」はすべて細石刃、「ナイフ形石器」は石錐とみなした。中土は新潟石器研究会の集計に依拠した（新潟石器研究会 1996）。後野 B の尖頭器は実見により削器とみなした。柏原の掻器は、実見により彫器（ブランク）とみなした。

大きくみて尖頭器、石錐、石刃、石核が、石材獲得地から離れるにつれて欠落し、器種構成が特定器種（削器・彫器・掻器）に収斂していくことを指摘できる。荒屋や角二山では尖頭器や石錐など多様な器種から構成されるが、木戸場Aや頭無では掻器、彫器、削器に限定される。また欠落はしないが削片の出現率が原産地を離れるにつれバラツキを持ちながら減少する。母集団が少ないこともあり、些細な数値上の差異に有意な傾向を読み取ることは難しい。強いて言えば彫器の出現率の変異が大きく、彫器を多く残す遺跡とそれほどでもない遺跡がある。荒屋遺跡は極端に彫器が多い例だが、白草や後野 B も比較的多い。逆に角二山や大網山田台 No.8 は彫器が少ないグループで、中土では 1 点も出土していない。

遺跡間で活動内容に差があったか否かを明らかにする目的から言えば、具体的な作業内容こそ不明ながら、ある程度の性格の違いを識別できる。すなわち細石刃核以外の石核や、石錐、尖頭器、石刃など多様な器種構成を持つ遺跡と、逆に細石刃核・削片関係と掻器、彫器、削器のみに限定される遺跡とに分かれる。便宜的に前者の多様なグループを「多様型組成」、後者の限定されたグループを「限定型組成」と呼ぶことにする。多様型組成の遺跡は石材獲得地の近くに多く、相対的に多様な作業がおこなわれていた。一方で限定型組成の遺跡は石材獲得地から離れた地域に多く、そこではより限定された作業がおこなわれていたと解釈できる。

表 7.4.1　各遺跡の器種組成

遺跡名（対象点数）	組成（%）									
	両面調整石器※	削器	彫器	掻器	削片※※	石錐	尖頭器	石刃	石核	
角二山（n=127）	7.1	4.7	22.8	25.2	24.4	1.6	0.8	2.4	11.0	A地域
下堤D（n=6）	33.3	16.7	33.3	−	−	16.7	−	−	−	
中土（n=29）	13.3	20.0	−	30.0	−	6.7	3.3	26.7	−	
荒屋（1次・2次・3次）（n=1218）	5.9	0.4	87.0	1.7	2.2	2.0	0.1	0.2	0.6	
月岡（n=54）	11.1	18.5	25.9	9.3	16.7	−	−	16.7	1.9	
正面中島（n=44）	2.3	34.1	25.0	25.0	4.5	−	−	9.1	−	
後野B（n=15）	26.7	26.7	46.7	−	−	−	−	−	−	B地域
箱田遺跡群上原（n=6）	−	16.7	33.3	33.3	16.7	−	−	−	−	
頭無（n=22）	4.5	45.5	40.9	4.5	4.5	−	−	−	−	
白草（n=32）	3.1	6.3	65.6	6.3	18.8	−	−	−	−	
柏原（n=6）	33.3	16.7	33.3	−	−	−	16.7	−	−	C地域
木戸場A地点（n=28）	6.7	36.7	30.0	23.3	−	−	−	−	3.3	
空港No. 61（n=35）	17.1	20.0	28.6	35.7	8.6	−	−	−	−	
大網山田台No. 8（n=27）	8.1	43.2	24.3	18.9	2.7	−	−	2.7	−	

遠 ← 石材獲得地からの距離 → 近

※細石刃核、細石刃核母型を含む

※※彫器削片は除き両面調整石器リダクションの剥片のみ

第５節．長距離移動の実体

（１）地域間における遺跡間連鎖

リダクション段階の出現が前半型から後半型へ変化すること、大規模遺跡が少なくなること、器種組成が多様組成型から限定組成型へと変化することは、全体的な傾向としては、石材地域の日本海側内陸部から太平洋側平野部への地理的な移行とおおむね対応する。言い換えるなら、石材獲得地から離れるにつれてリダクション段階の後半の石器が遺跡に多く残されるようになり、長期滞在の遺跡は少なくなり、遺跡の作業内容も限定されるようになるとの、分布論上の有意な傾向を認めることができる。

リダクション段階は本来連続的なものであることから、前半段階なしで後半段階のみということは原理上あり得ない。そこで上記の傾向からはあたかもＡ地域で前半の消費に供されたその石材がＢ地域やＣ地域に持ち出され、引き続き後半の消費が行われたと解釈できる。これは先行研究で提示されてきた、太平洋側と日本海側との長距離移動・回帰移動モデルを追証することになろう。より抽象度を高めて述べるなら、単一の石材産地での機会限定的な石材獲得の結果であろう

Ｂ地域に残された遺跡の中には、Ａ地域からの行程の往路で珪質頁岩を豊富に持っていた場合と、逆にＣ地域からの復路で石材が枯渇しかけている場合との、両者が含まれている可能性が高い。リダクション段階別出現度の検討結果によれば、おそらく頭無遺跡は前者の例であり、後野Ｂ遺跡は後者であろう。標高 1,000m の山岳地帯が途切れるもしくは薄くなる所を通って地域間の長距離移動を行っていたと見るなら、その行路には群馬ルートと福島ルートを想定できる。頭無遺跡は群馬ルートの往路、後野Ｂ遺跡は福島ルートでの復路に残された活動痕跡であると解釈しておく。

（２）移動・居住形態の地域間変異

規模による遺跡類型について見ると、Ⅲ類の大規模遺跡は、潜在的候補の遺跡を含めてもＡ地域に多くＢ地域には１箇所のみ、Ｃ地域には存在しない。また器種組成についても、多様型組成はＡ地域に多く、限定型組成はＣ地域に多い。なぜ遺跡規模（滞在期間）と器種組成（作業内容）まで、石材獲得地からの距離に規制されるのであろうか。

ここにはおそらく、集団の移動・居住形態の地域間における相違が反映している可能性が高い。すなわち、Ａ地域とＢ地域の巡行中にはベースキャンプでの長期滞在や反復的利用に、出先機関的な小規模のキャンプとを組み合わせた移動・居住形態を取り、一方Ｃ地域での活動中はベースキャンプを持たず、より頻繁な移動のみからなる移動・居住形態を営んだと解釈できる。これを**図 7.5.1** に模式的に示した。Ａ地域のベースキャンプの候補には遺構をともなうⅢ類の角二山遺跡、荒屋遺跡、潜在的ながら笹山原遺跡群 No.27 遺跡が挙げられる。これらの遺跡は珪質頁岩の獲得地に相対的に近く、両面調整石器を石材運用の中心に据えて石材消費を節約する必要は、相対的に弱かった可能性がある。これが石核や石刃の出土に示される、両面調整石器リダクション以外の素材供給がおこなわれていたことの一因であろう。同時にまた、ベースキャンプゆえに多様な作業をおこなう必要性から、石錐や尖頭器など多様な器種が製作・使用・廃棄されたのであろう。

逆にＣ地域での巡行中には効率的な石材消費が一段と追求されたことが、この地域に来た際には大規模なベースキャンプをもたない移動・居住形態を採用した理由であると解釈できよう。Ｂ地域唯一のⅢ類（ベースキャンプ）である白草遺跡が、先述のように石器の

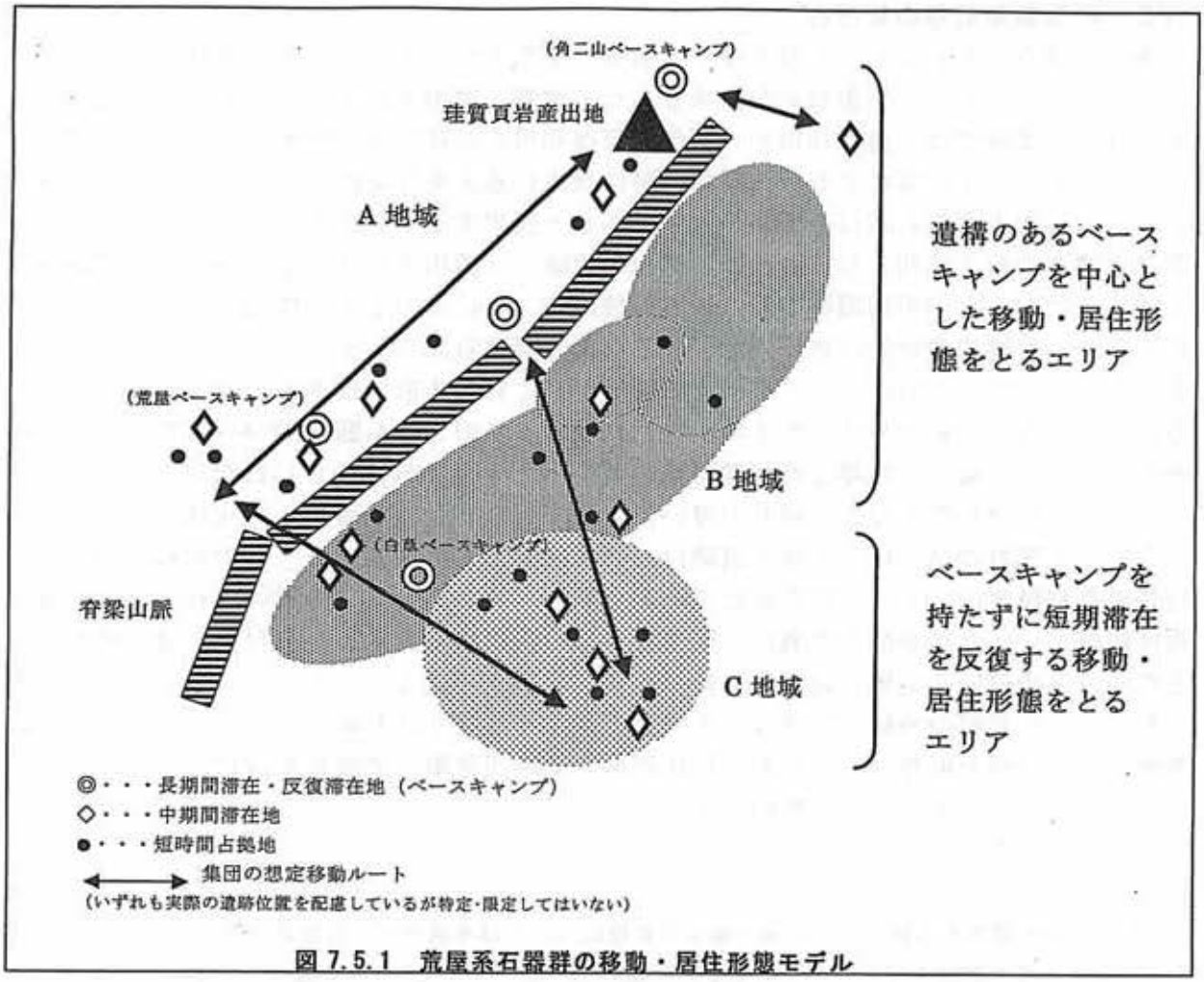


図 7.5.1　荒屋系石器群の移動・居住形態モデル

出土量の点ではⅡ類遺跡とあまりかわらない小規模な遺跡である点も傍証となろう。なお白草遺跡は、荒屋遺跡の例とも合わせて考えると、わずか２例という少ない例数ではあるが、彫器の卓越という組成上の現象と、径２m前後、深さ数十 cm 程度の皿状の土壙との、何らかの関連を注意しておきたい。

C地域の限定型組成の遺跡でも常に現れる荒屋型彫器や角二山型掻器は、両面調整石器を素材供給源とする節約性の高い器種である。また厚手・大形の削器はそれ自体が刃部再生への高い潜在的有用性を持つだけでなく、彫器や掻器にも転用できることで、これも石材消費の倹約に適している。後野Bに見られた削片の細石刃核への転用、空港 No.61 遺跡に例のある削片の彫器への転用、柏原遺跡に見られる細石刃の剥離が進行した後の細石刃核の削器への転用なども石材の節約として説明できる。この節約性は、単一の石材産地での機会限定的な獲得との解釈に親和的である。

この移動行程の中でも地域ごとに移動・居住形態のパターンを変えているとの解釈が仮に正しければ、その原因として、それぞれの地域に駐留していた季節の違いなども想像することができる。動物遺存体のように季節性の指標となる資料が出土していれば具体的な追及が可能だが、有機質遺物を伴わないこの地域では、もはやこれ以上に議論を詰めることはできない。

（３）両面調整石器の管理性

遺跡に残される石器が、不要となって放棄・廃棄されたものか、後の使用のために備蓄してあるのか、それとも象徴的な意味をもって遺棄・埋納されるのか、知る術はない。Ⅰ類やⅡ類の遺跡では、遺跡利用が一回性で反復利用の形跡がないため、おそらく不要となっての廃棄か、不注意による紛失等が遺跡に残される主要な要因（註５）であろうと推察している。出土する石器は不要品が大半であると仮定するなら、有用で必要とみなした石器は、偶然の紛失は別としても次の占拠地（遺跡）に搬出されたはずである。一遺跡からの出土点数が少ない両面調整石器（細石刃核）は、特にこのような性質を持っていた可能性が高い。移動中や次の占拠地内で、有用な両面調整石器のリダクションが次々と進行するなら、我々の目の前にこの「有用な石器」が目に見える形で残される（遺跡から出土する）のは、むしろ稀な事態であるのかもしれない。このことも**図 7.2.4～7.2.5** の両面調整石器の長さ・幅で、距離との相関が認め難かった一因であるかもしれない。また、先述したように移動行程の行きと帰りの違いによっても、有意差が埋没した可能性がある。

荒屋系石器群の A～C 各地域の遺跡は、日本海側と太平洋側とを一つの行動領域内に含む長距離移動集団によって残された遺跡群であり、リダクション段階の現れ方や出土量、器種組成といった遺跡間の変異は、原産地からの距離に規制された石材保有量、移動行程上のルートの違い、地域における移動・居住形態の違いによって生じた現象であると解釈した。この石器群の遺跡間変異は、先学諸氏によって繰り返し論じられてきたように、頁岩地帯への回帰を前提とした移動・居住形態と遺跡間連鎖、遺跡群形成によって、うみだされたものと説明するのが合理的である。

註

1）本章では荒屋系石器群の内部の細分編年可能性については考慮せず、荒屋系石器群すべてを「同時」とみなす前提で議論を行う。現時点では荒屋遺跡以外に ^{14}C 年代測定が実施された事例はないが、荒屋遺跡の ^{14}C 測定値だけを見ても約 550 年の時間幅がある。しかしこの中を人工遺物の特徴によって細分する層位的・型式学的根拠は薄い一方、各遺跡にみられる共通性の高さの方が顕著なためである。なお近年、青森県や岩手県でも資料の蓄積が進んでいるが、本章ではこれらを分析対象に反映させることはできなかった。今後の課題とするが、全体的な議論の骨子に大きな影響はないと判断する。

2）安田喜憲によると、日本海側でブナ林の拡大が始まるのは約 13,000B.P.以後であることが花粉分析で示されており、これが多雪化開始を示すという（安田 1995）。荒屋遺跡の ^{14}C 年代はこれと整合しない。しかし温暖・湿潤化の結果としての多雪化の開始は、δ^{18}O の気候曲線を小地域に適用することの是非も含めて単純ではない。季節風とミクロな微地形に規定されて局所的・パッチ状の多雪地帯の出現や、また寒暖の振幅の中で多雪と少雪が急激に入れ替わる可能性などもある。荒屋系石器群を残した集団が、多雪に見舞われたか否かの判断はむずかしい。

3）本章で単に「削片」と記した場合は、すべて両面調整石器本体を縦分割して生じたものをさす。ファーストスポール、セカンドスポール（スキー状スポール）を含む。彫器の樋状剥離を入れる際に生じたものは含まない。論及する必要がある場合には、「彫器削片」と別表記する。なお「彫器削片」は全ての遺跡で正しく識別されているとは限らないため、組成の検討対象から排除している。

4）山形県南部山間地、珪質頁岩の産出地に所在する東山遺跡では、長さ約 32cm の珪質頁岩製の両面調整石器が採集されている（加藤ほか 1982）。黒曜石の産地直下で礼滑型の大形ブランクを集中準備

した北海道白滝村の幌加沢遺跡遠間地点や、白滝遺跡群で出土している両面調整石器に相当する大きさであり、このような大形の両面調整石器が多数出土する遺跡が、本州島でも珪質頁岩産地付近に存在する潜在的な可能性がある。本章で分析対象としなかった青森県の大平山元Ⅱ遺跡（三宅 1980、宮本他 1992）では、長径 15cm ほどの円盤状石核が多数出土している。遺跡から 2 km 以上上流では石器に向く硬質頁岩（珪質頁岩）が獲得できるという（谷口ほか 1999、p 7）。細石刃核・削片・荒屋型彫器など荒屋系石器群の要素を部分的に含むが、剥片類や石核類を含めた資料全体では複数時期の分離が困難であり、定量的検討は困難である。

5）遺跡に残される石器の性格についての問題は、石器群研究の上で本質的ではあるが（岡村 1979）、発掘資料だけからは判断不可能である。民族誌事例を検討した西秋良宏によると、石器製作により生じた石屑類をまとめて製作場所から離れた地点に廃棄する場合と、逆に仕事場付近に遺棄したままの両者がみられ、前者は作業空間が固定的な場合（定住民など）に多く、後者は遊動民などあまり固定的でない場合が多いという（西秋 1994）。またオーストラリア先住民のアルヤワラの石器製作を参与観察したビンフォードらの報告では、貴重な遠隔地産の石材を用いた剥片剥離作業が行われた空間には、剥片の搬出と清掃の結果、数日後には 1 点の剥片も残されないという（Binford 1986）。

第Ⅷ章　広域比較研究の実践に向けて

本章の構成

本研究では、これまで主に日本列島の資料を分析してきたが、第Ⅴ章で示したモデルは、ロシア極東地域を中心とした地域にも適用可能であると考えている。更新世終末から完新世初頭の極東北部では、多様な両面調整石器を特徴とする石器群が広域に展開した。器種組成や細石刃核の種類等の地域的変異は多様だが、両面調整石器リダクションを中心とした石材運用の点で共通する。

しかし現状ではロシア極東地域の報告の精度・制度の問題から、短期間に具体的な研究を実施することは難しく、将来的かつ長期的な研究計画が必要である。そこで本章では国境横断的な広域比較研究の実践への準備を行う。はじめに、10,000B.P.を遡る数値年代の遺跡で土器が出土することが注目を集めているアムール河下流域を中心に、各地の研究動向を概観する。次に ^{14}C 測定値を用いて各地を俯瞰的に比較し、最後に広域比較研究の条件に関する若干の考察を行う。

図 8.0.1 は本章で言及する遺跡の位置である。ただし ^{14}C 測定値の得られている遺跡を中心としているため、網羅的なものではない。

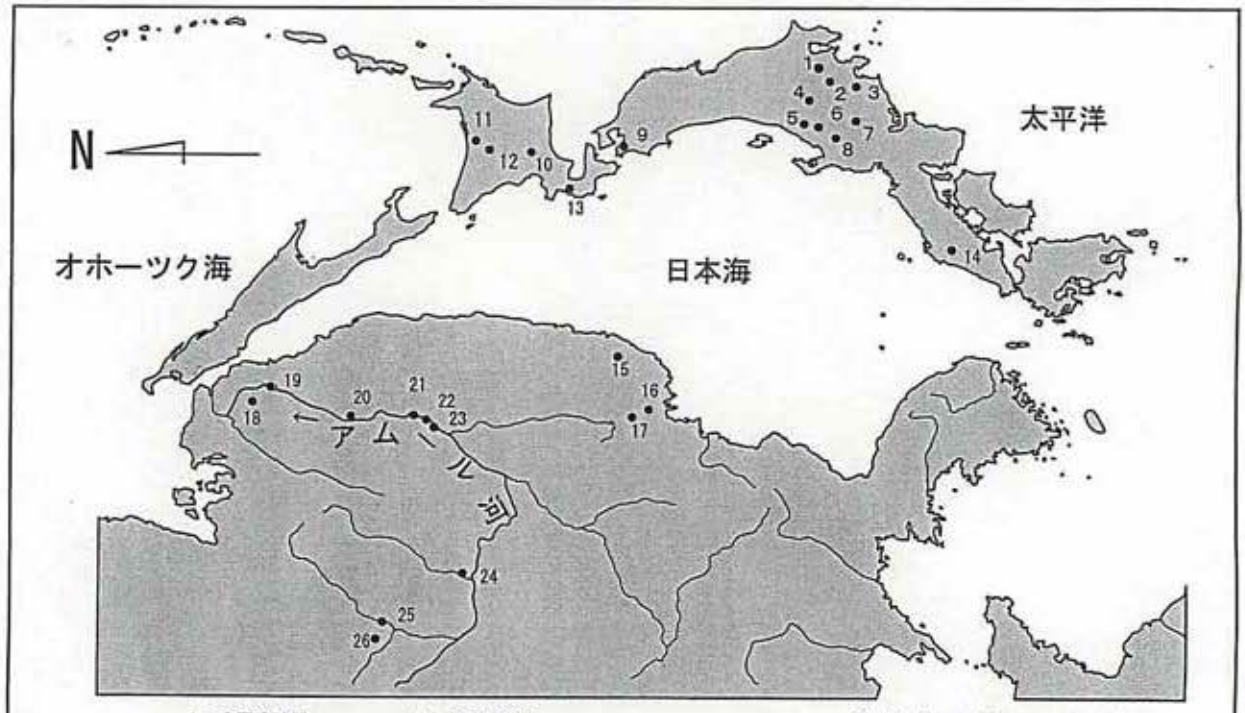


図 8.0.1 本章で言及する遺跡の位置

第１節　オシポフカ文化研究の経緯

（１）中石器時代としてのオシポフカ文化

オシポフカ文化研究の初期の学説史は、デレビャンコが記している(Деревянко1983、pp94－96)。これによると、1926 から 1927 年にゲラシモフが、木葉形の槍先・スクレイパー・ナイフなどを出す２ヶ所の遺跡をハバロフスク市内で発見した。1935 年にオクラドニコフがアムール総合学術調査の一環として、同市内のアムール河に架かる鉄橋の転轍手小屋付近を発掘して石器の出土層位を確認し、立地する段丘面と石器の特徴がゲラシモフの資料と一致することが理解された。なおこれらの調査と同一の地点か定かではないが、鳥居龍蔵も 1919 年のハバロフスク滞在中に、鉄橋の付近で石槍、石鏃、石斧や土器を採取しているという(鳥居 1924－1976)。

1960 年には、再びオクラドニコフが鉄橋遺跡から西に数 km 離れた**オシポフカ遺跡**の発掘を、1963 年には件の**鉄橋遺跡**と養犬所の敷設に伴う試掘を実施し、ソリュートレ的と表現された入念な調整が両面を覆う木葉形・楕円形・ひし形・幅広・細身など大小多様な両面調整石器、ゴビ型石核(木口形・楔形細石刃核)、手斧＝スクレブラ状石器(厚手で楕円形、撥形の両面・片面調整石器)、石斧、小形スクレイパー等の石器組成を把握した。後にオクラドニコフとデレビャンコは、石斧の存在から発達した木材加工技術(舟や定置式漁具を製作した可能性)を論じ、狩猟と採集に漁労を加えた先史経済上の新たな段階としてオシポフカ文化を位置付けた(Окладников・Деревянко1973)。この時点では土器は未確認で、土器を持たずに漁労を始めた中石器時代とされた。生業の解釈には民族起源論パラダイムから、遺跡付近に居住する現生の少数民族であるナナイやウルチの生業も参照にされたと思われる。日本への紹介は加藤晋平が早い(加藤 1980)。土器の供伴可能性を考慮しはじめたロシア側の新見解を紹介しつつ、ロシア側の説く新石器的な要素は混在とし、オシポフカ文化をあくまでも中石器時代として紹介している。

（２）ガーシャ遺跡の「最古土器」

1975 年から 1990 年まで、デレビャンコらが約 1,000 ㎡にわたる継続的な発掘調査を実施した**ガーシャ遺跡**(Деревянко・ Медведев1993、オクラードニコフ・メドヴェージェフ[清水・村上訳]1990、 Medvedev[梶原訳]1993、デレビャンコ・メドヴェージェフ 1995 など)が、研究の新展開を拓いた。遺跡はハバロフスク市の北東(下流)の郊外に所在し、民族誌時代、中世（女真)、鉄器時代、新石器時代の複合遺跡である。新石器時代前半期の住居址が掘り込まれた粘土層中地表下約２ｍの粘土層中から、オシポフカ文化の石器と土器片とが重なって出土した。この粘土層中炭化物の ^{14}C 測定値が 12,960±120B.P.(Ле-1781)を示して以来、オシポフカ文化には新石器の開始や土器起源の問題が加わった。より下流のコムソモリスク＝ナ＝アムーレ市近郊の**フーミ遺跡**も、石器組成・土器・^{14}C 測定値でガーシャの内容を追証した(Лапшина1999、2000)。これらの遺跡は、アムールやその支流を見下ろす岬や段丘崖上に立地すること、遺跡の分布圏や立地点が、ハバロフスク市周辺に在住し河川漁労に特化したエスニックグループ(ナナイやウリチ)の、民族誌時代や現在の居住範囲や集落・漁場と近接することから、河川漁労を重視したとの解釈も補強された(デレビャンコ・メドヴェージェフ 1995、Лапшина 1999、p105)。

ガーシャ遺跡の意義は、土器の存在と数値年代を示した点にある。しかし他時期・他時代との複合遺跡で出土遺物の一括性に問題があり、石器組成・土器・^{14}C 測定値との関係

が評価しにくいとの問題が残されていた。オシポフカ的な石器が上層からも鉄器時代や新石器時代前期以後の土器片とともに多数出土しているため、最下層の粘土層中での土器と石器の供伴や年代値は認めても、石器群の全体の組成と土器との関係が評価し難い。フーミも事情は同様である（註１）。また現在、プリアムーレではオシポフカ文化に前後する石器群の詳細が不明である上に、オシポフカ文化内も数段階に細分される潜在的可能性がありながら（後述）良好な層位的出土例に恵まれていないため、石器群の連続的な変遷は把握できていない。

アムール中流の**グロマトゥーハ文化**（Окладников・Деревянко1977、可児 1992）は、東シベリアとの文化的関係や新旧遺物の混在等の問題点を大貫静夫が指摘しており（大貫 1999）、その複雑な実体は明らかではない。またデレビャンコらは**セレムジャ遺跡群**で、層位と石器の特徴によるとする 25,000～23,000B.P.から 12,000～10,000B.P.にわたる後期旧石器文化を含む４段階の変遷を提示し、最上層の第１文化層を下流のオシポフカ文化に対比した（Деревянко・Волков・Ли1998）。だが小畑弘己は、報告者が 20,000B.P.を遡るとした最下層でも、削片系の細石刃技術や木葉形尖頭器の存在から古くとも 15,000B.P.を遡らない可能性、報告者による各文化層は多時期遺物の混在を含む可能性を指摘している(小畑 2000)。このような現状では、セレムジャ遺跡群の報告内容を層位に裏付けられた石器群変遷の基準とすることは躊躇される。他の考古学的文化との時空間のマクロな大別のためにも、またオシポフカ文化内でのミクロな編年細分の上でも、より好条件の別の遺跡－可能ならば上層に他時期文化層のない単純遺跡－において、純粋な石器組成とそれに確実に伴う土器の把握が求められている。

（３）新調査の展開

近年、ハバロフスク州立郷土誌博物館のシェフコムードを中心とする調査で、新資料が蓄積されつつある。ハバロフスク市から南西(上流)に約 20km の、ヘハチル考古学地区（Шевкомуд ほか 2001）における、ノヴォトロイツコエ遺跡群・オシノヴァヤ＝レーチカ遺跡群の発見と調査である。ヘハチル山地から流下した広大な扇状地の末端が、ウスリー・アムール合流点付近で侵食されて形成された崖線にそって、約 60 ヵ所以上の遺跡が確認されている。最も広い範囲が調査されている**ゴンチャルカ１遺跡**では 1995 年から 2001 年まで計 531 ㎡を発掘し、多様な両面調整石器と細石刃核に伴い土器の小破片を多量に検出した。1995 年調査の概要は梶原洋が紹介し、外面ジグザグ紋の土器の一群をザバイカルのウスチ＝カレンガ遺跡に、口縁直下に円孔をもつ一群を沿海州のウスチノフカ３遺跡に関連付ける梶原案が示された（シェフカムート[梶原洋訳・解説]1997、梶原 1998）。2001 年には筆者らとの合同調査で約 120 ㎡分の拡張範囲から新資料を追加した。この成果について第Ⅸ章で簡単に紹介する。遺物の編年という意味での石器や土器の細分は、遺跡形成論的な問題を勘案すると難しいが、上層に散見される新石器時代の新段階や鉄器時代の遺物はわずかで、調査区の一部に土層堆積が厚い部分もある等、好条件の遺跡である。

他にも**ゴンチャルカ３遺跡**と**ノヴォトロイツコエ１遺跡**(Малявин・Шевкомуд1999)、**オシノヴァヤ＝レーチカ 10 遺跡**(加藤・赤井 2003)、**ノヴォトロイツコエ 10 遺跡**(シェフコムード・長沼ほか 2004)などが、シェフコムードや筆者らの手で調査された。いずれも小面積の発掘ではあるが、多様な両面調整石器と細石刃核、土器のセットを確認している。遺跡群は同一の地形面上に近接して立地し基本層序が共通しているため、各遺跡の比較検

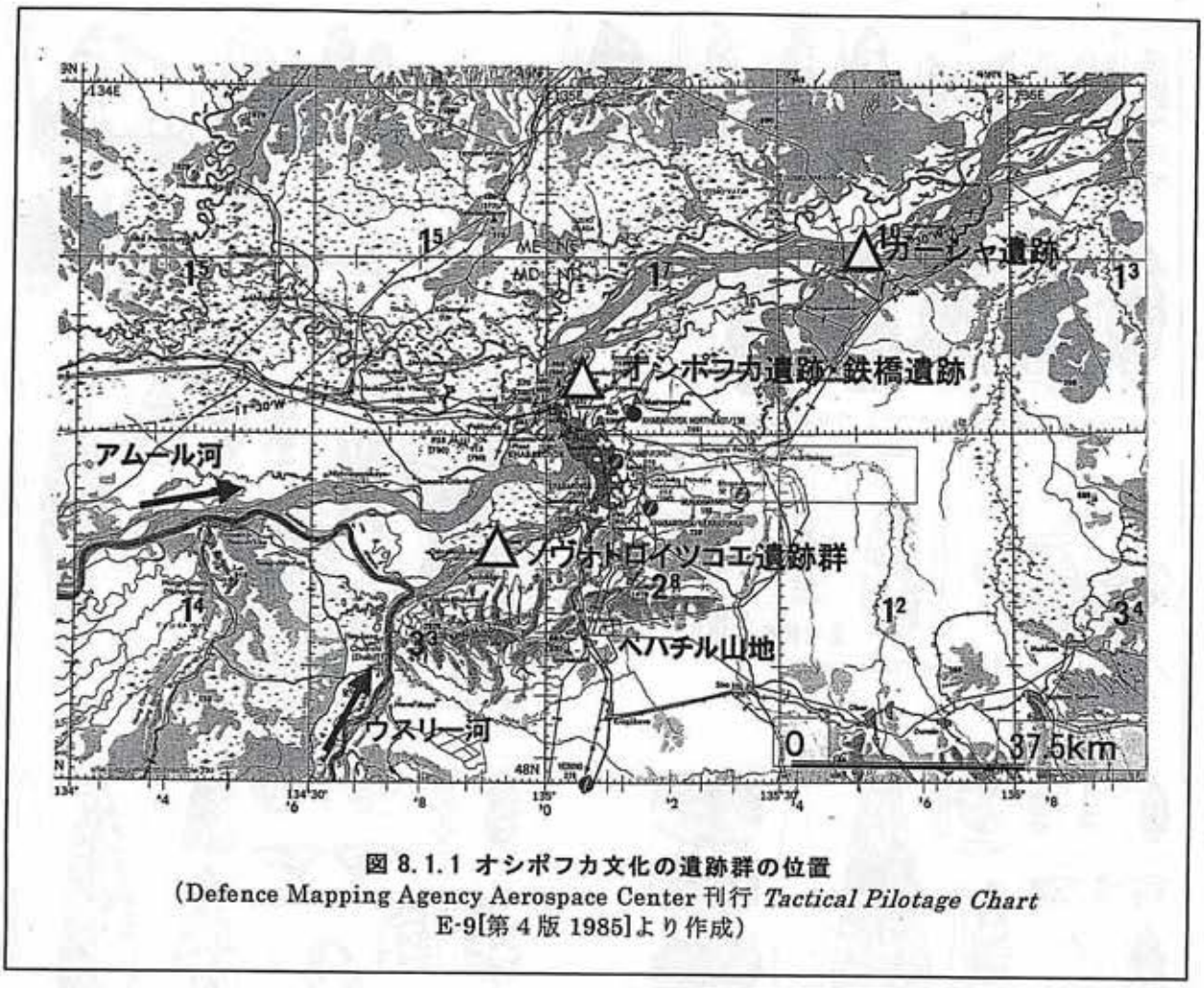


図 8.1.1 オシポフカ文化の遺跡群の位置
(Defence Mapping Agency Aerospace Center 刊行 *Tactical Pilotage Chart* E-9[第 4 版 1985]より作成)

討によって上層文化層や構造土の有無など、個別遺跡の特殊条件の影響を変数としたセット関係の把握に有望である。他にも、オクラドニコフの鉄橋遺跡と同一の遺跡である**アムール２遺跡**が開発に先立つ緊急調査として 2001 年に発掘され、両面調整石器や細石刃核に加えて土器を検出している(Шевкомуд・Косицына2002)。

第２節　オシポフカ文化の理解

(1)人工遺物の特徴

現時点で公表されている範囲でオシポフカ文化の内容を確認する(**図 8.2.1～図 8.2.2**)。ここでは各遺跡全体の概略にとどめる。石器組成は、細石刃核と多様な両面調整石器を主体に、掻器や削器、石斧などが伴うあり方が一般的である。細石刃核は湧別技法と、小形の円礫を素材に簡素な打面形成で細石刃を剥離する例との二種類がセットになる。オシノヴァヤ＝レーチカ 10 遺跡では、細石刃核にスポールが接合している(**図 8.2.1**)。両面調整石器は大きさ・形状とも多様であり、尖頭器、石斧、石鏃(いずれも局部磨製を含む)、掻器などの各器種とこれらの未製品を含む。両面調整尖頭器に限っても大きさや平面形の変異幅が広く、左右非対称の半月形、細身の柳葉状、最大幅の位置など多様である。小形の一群は石鏃と考えられているが、平基や凹基は目立たず、かなり小さな例でも木葉形であ

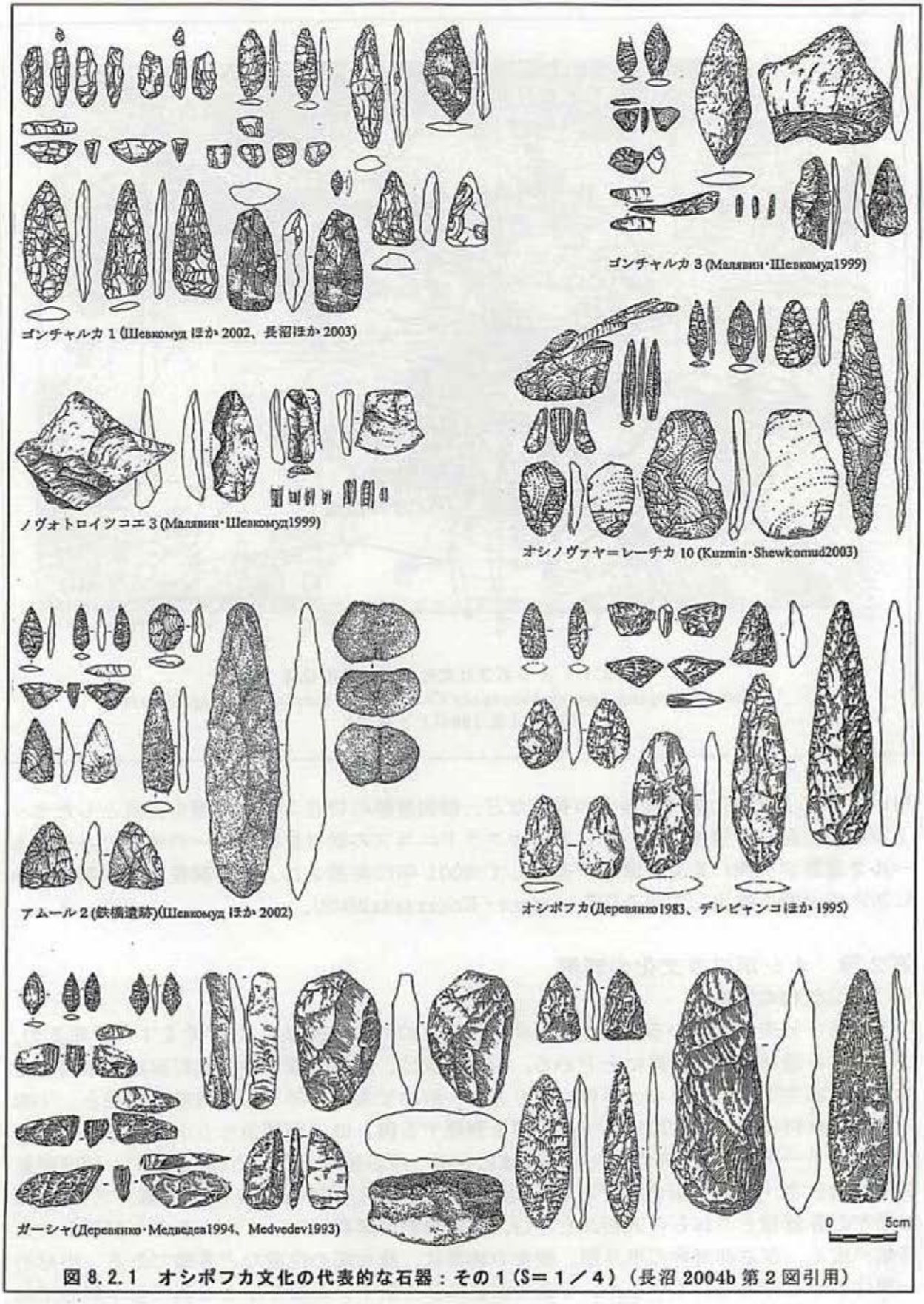


図 8.2.1　オシポフカ文化の代表的な石器：その 1 (S＝1／4)（長沼 2004b 第 2 図引用）

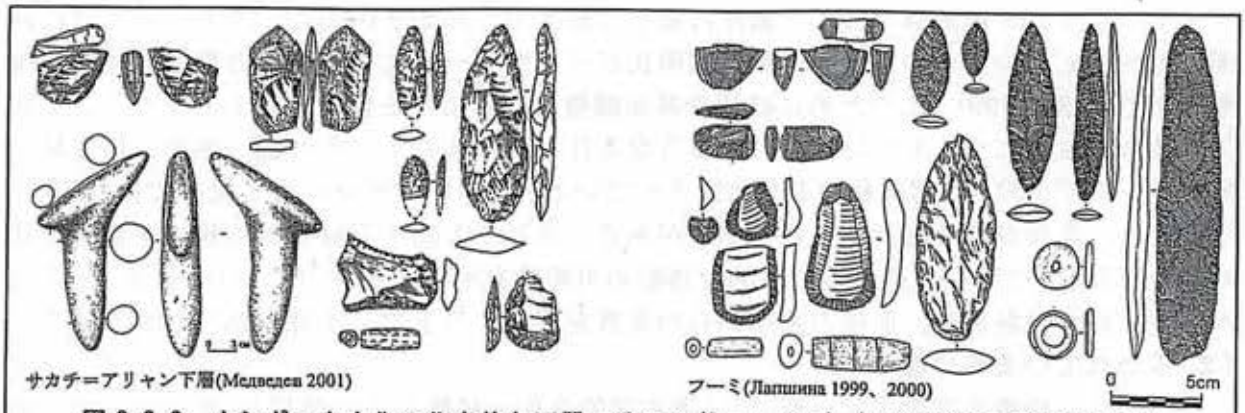


図 8.2.2　オシポフカ文化の代表的な石器：その２(S＝１／４)（長沼 2004b 第３図引用）

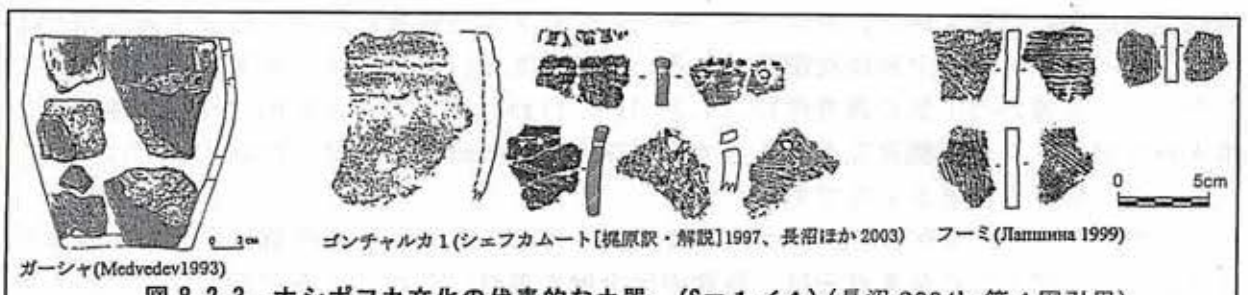


図 8.2.3　オシポフカ文化の代表的な土器　(S＝１／４)（長沼 2004b 第４図引用）

る。基部が三角形状で上下非対象の一群は有茎尖頭器を想起させるが、両側縁からの抉り込みで明確なカエリや舌部を作り出す例は、一般的ではない。

両面調整石器のうち先頭部を作り出していないものは、尖頭器や石斧などの未製品の可能性もあるが、大形のもの(図 8.2.1 下段ガーシャ遺跡の中央上段など)は、手斧＝スクレブラ状石器」と呼ばれる。これは細石刃核や両面調整石器と並びオシポフカ文化の特徴とされてきた石器だが、感覚的な用語で示す内容の幅が広く、各種未製品や石核を兼ねるもの、掻器や石斧に近い例も含む。掻器にも両面調整のものがあり、尖頭器などの未製品にもみまがうが、端部に急角度な刃部を作出している点で識別には再現性がある。掻器は平面が二等辺三角形を呈する例が繰り返し確認されており、様式化がうかがえる。他に削器、彫器、石錐などがある。石刃素材のもの皆無ではないが少なく、多くは両面調整石器のリダクション過程の様々な段階で生じた調整剥片を素材としている。

また研磨技術が見られることも重視されている。ロシア側では土器の存在とともに、新石器時代の開始を示す要素として注目されている。石斧だけでなく尖頭器や石鏃にも磨かれた例がある。また溝をもつ円礫も複数の遺跡で再現性をもって存在する(図 8.2.1 のアムール２やガーシャなど)。これは網を用いた漁業の証拠(石錘)と解釈され、オクラドニコフらが指摘した石斧＝木材加工技術、遺跡立地とともに漁労の根拠として注目されている。後述するように象徴的遺物も存在する(Медведев2002)。

土器は小破片で多く出土しているが、保存状態は劣悪で、石器と比較して理解は進んでいない。完形に近く復元された例はガーシャ遺跡の１例のみで、平底の深鉢が復元されている(図 8.2.3 左)が、容量や器形の変異幅は不明である。ゴンチャルカ１、ノヴォトロイツコエ 10 遺跡でも、未報告の小破片の中に平底の底部、平坦な口縁が含まれている。ノ

ヴォトロイツコエ遺跡群では、土器片は総じて厚手で、外面と内面のいずれか、または両面とも剥落しているものが多い。栗島義明氏がパッチワークによる製作と説明している現象である(栗島 1999)。このために紋様や基面調整を確認できる資料が著しく少なく、土器の全体像を見えにくくしている。このような条件下ではあるが、条痕紋、無紋、円孔紋、櫛歯のジグザグ紋、隆起線紋などが確認されている。なおゴンチャルカ１遺跡では、石器・土器とも、表面が強く磨耗しているものがある。石器でも同一石材ながら様々な表面状態のものが混じっている。遺物の二次的な移動の可能性を示唆するものであり、後述する「豊かな時代像」の解釈や、前後の時期からの変遷を理解する上で、注意を払う必要がある。

(２)描かれている時代像

ソヴィエト極東考古学では一般に、「考古学的文化＝民族」との前提(臼杵 1996)で、ある地域の考古資料の一群に「文化」を設定し、その系統性(民族起源論)と、その民族の経済的発展段階の評価を研究の目的としてきた。ソヴィエト連邦における社会主義思想や多民族国家イデオロギーと密接な関連がある。この「文化」の設定は、広大な地域を対象にしながら小規模かつ少数の調査件数にもとづいて行われるため、仮説的な性格が強い。日本人研究者が、ロシア側研究者によるオシポフカ文化の研究を理解・評価する際には、こういった文脈への注意が必要である。

オシポフカ文化に固有の内容については、漁労を加えた段階との理解は今日でも継承されている。ただしこの生業復元は、魚骨の出土例に裏付けられている訳ではなく、出土物による根拠は、先述した木材加工技術を示唆する石斧と魚網用の錘と解釈されている有溝の石製品である。これにハバロフスク市周辺に在住し河川漁労に特化したエスニックグループの生業を参照している。生態系や環境条件を考慮した地域的な空間範囲を担保として「民族」と「文化」の同一性を設定し、その中で諸民族の系統関係を探る発想である。ここからの帰結として豊かな物質文化をもつ安定した時代像が描かれる。一例をあげると、ラプシナ(Лапшина1999)はフーミ遺跡の報告の中で、軟玉製の管玉(**図 8.2.2** の右)をオシポフカ文化に帰属すると評価している。筒状の例は**サカチ＝アリャン遺跡下層**でも供伴と見なされている(**図 8.2.2** の左)。またシェフコムードは 1996 年のゴンチャルカ１遺跡の調査で、図が提示されていないが墓を検出したと報告した(Шевкомуд1996)。さらにメドヴェージェフは極東新石器時代の図像学的・象徴的遺物を集成・検討した中で(Медведев2002)、サカチ＝アリャン遺跡下層の双頭男根状石製品(**図 8.2.2** の左) を、オシポフカ文化に帰属するとしている。この石製品は男根と同時に顎が張り出した女性像でもある「両性具有的」と解釈され、女性像とみた場合の頭部と胴体の屈曲角度が、コンドン郵便局遺跡出土の類似の石製品や著名な土偶と類似する点から、オシポフカ文化と後の新石器の新しい段階との連続性を想定している。また新石器文化への連続性では、シェフコムードもゴンチャルカ１遺跡の櫛歯ジグザグ紋(**図 8.2.3** の左)を、この地域の新石器時代を通じて一貫した「ヴォズネセノフカ伝統」の萌芽と評価しているが、日本人研究者から、このジグザグ紋を上層からの混在とみる理解や、ザバイカルのウスチ＝カレンガ遺跡の土器に対比する案も提示されている(梶原 1998、小畑 2003)。

地元研究者の所見は傾聴すべきだが、土層堆積の薄さを勘案すると、本来はオシポフカ文化に帰属しない上層遺物を、オシポフカ文化の帰属と誤解している可能性も排除できない。またオシポフカ文化として今日では一くくりに認識している全体の中に、細分すべき

いくつかの画期が存在する可能性もある。土器の出現はもとより、生業変化を示す石鏃や石錘、社会組織の変化を示す象徴的遺物についても、オシポフカ文化に前後する段階との連続の中で、その消長を確認してゆく必要がある。

(3)オシポフカ文化に前後する段階

オシポフカ文化に先行する後期旧石器は、アムール下流では最近まで未調査であった。1999年に調査された**ゴールィ＝ムィス4遺跡**は、オシポフカ文化より遡る上部旧石器と評価されている(Шевкомуд・Като2002、加藤・Shevkomud ほか 2003)。両面調整石器や細石刃核が欠落して大形の石刃製石器と石刃石核が発現しており、土器もない(**図 8.2.4** の上段)。湖に突き出した岬の突端に立地するため土層の堆積が極めて薄く、層位的な判断は不可能である。さらに複数の炉跡の炭化物による ^{14}C 測定値は、オシポフカ文化の数値年代の範囲に収まる。類例のない現時点での評価はむずかしいが、オシポフカ文化の変異幅や年代的に並行する異系統石器群などとしての理解の余地もある。またクズミンらは、旧石器と初期新石器が一部共存したと解釈している(Kuzmin・Shewkomud2003)。オシポフカ文化以前の石器群は研究の端緒が開かれたばかりで、いくつかの作業仮説を検証するべく、今後の調査の進展が期待される。

アムール下流の新石器編年は、オクラドニコフによってマルィシェヴォ文化→コンドン文化→ヴォズネセノフカ文化との序列が設定されてきた(Хлобыстин1996)。この中で石器

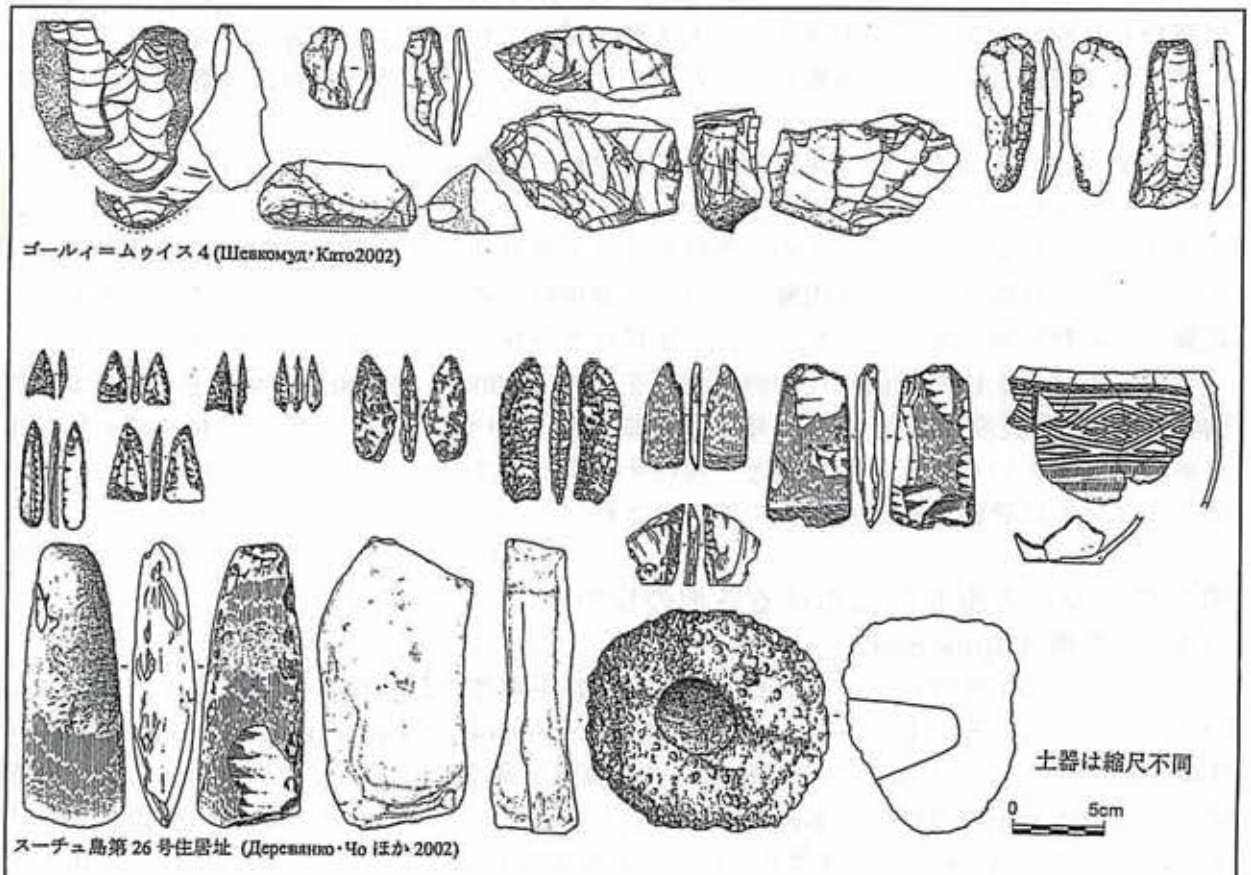


図 8.2.4　オシポフカ文化に前後する石器群（上段：後期旧石器／下段：マルィシェヴォ文化）
（長沼 2004 b 第 5 図引用）

群の変遷は、石器製作技術中の石刃の割合が徐々に低下し、両面調整技術の割合が増えるとの流れで把握されていた。この変遷観には、アムール中流のノヴォペトロフカ文化(石刃鏃石器群)を考慮した可能性や、時期の異なる土器群や石器群が混じった資料に、文化を設定したなどの問題点が指摘されている(加藤 1998、33 頁)。

オシポフカ文化を初期新石器と理解するならば、これに後続するのはマルィシェヴォ文化ということになる。マルィシェヴォ文化の土器は横走する紋様帯や押型紋の充填などを特徴とする。石器はプリズム形石核、石刃鏃や石刃素材の石器といった石刃技術が卓越し、これに石核スクレイパー(=楔形細石刃核)、両面調整の植刃、ナイフ(日本でいう石匙のツマミがないもの)、石鏃、磨製石斧などが加わるとされてきた。しかし実測図の提示は少なく、混在の可能性もあって実体は不明であった。近年、**スーチュ島遺跡群**の成果(第 26 号および第 27 号住居址)が公表された(Деревянко・Чо ほか 2002)。マルィシェヴォの住居址出土で一括性が比較的高い資料群だが(註 2)、石刃鏃や石刃石器群は断片的である。石器組成は平基や凹基の石鏃、両面調整だが両端が尖らない植刃、全体が磨かれた石斧や磨り切り状の石斧、石皿など、オシポフカ文化と大きく異なる(**図 8.2.4** の下段)。数値年代も、オシポフカ文化とマルィシェヴォ文化の間には断絶がある。これは単に相当する ^{14}C のサンプルが得られていないだけではなく、そもそもこの時期を埋める可能性のある遺跡自体が、アムール下流では知られていない。この未解明の段階を埋める鍵が、先述のノヴォペトロフカ文化(石刃鏃石器群)で、数値年代も 9000B.P.台を示す。オシポフカ文化に石刃鏃は認められない。アムール下流では、石刃鏃は確かにマルイシェヴォ文化やコンドン文化に伴う形で確認されるが、石器群の一括性の問題から、その量的割合は実際には評価しにくい。

このように、オシポフカ文化に前後する石器群の変遷は、ごく大まかには、大形石刃→オシポフカ文化→(石刃鏃石器群?) →マルィシェヴォ文化として把握し得る。しかし細部の具体像は不明であるため、ある一遺跡出土の石器群の一括性を、石器自体の特徴から細かなレベルで評価することは困難である。土層堆積が薄いこともあり、一遺跡の発掘で一定量の石器群を得た場合、それらすべてを供伴とみなすことが多いように見受けられる。またオシポフカ文化の数値年代の幅は未較正で約 12,000～10,000B.P であるが、日本列島(本州島)では同程度の時間幅(いわゆる縄文草創期)の中で、石器・土器とも数段階の細分編年が実施されていることを考えると、現在オシポフカ文化として一くくりにされている内部も、将来的に資料の蓄積が進む中で細分されていくであろう。

第 3 節　環日本海北部における各地の様相

(1) 沿海州 (Приморье)

沿海州は石材産地付近も含め比較的多くの遺跡が調査されており、各成果の総括も幾つか刊行されている (Кузнецов 1992、Васильевский・Крупянко・Табарев1997、Дьяков2000 など)。しかしこの地域は土層の堆積が薄く、小畑弘己によると、石器群の変遷は ^{14}C 年代と花粉分析、日本列島との比較を基準としているため、遺跡形成過程や年代観、土器供伴の評価等に地元研究者の間で一致を見ない部分も大きいという(小畑 2002)。小畑は包括的な編年案を提示しており (小畑 2001)、これによると①**ウスチノフカ 1 遺跡下層** (18,000～15,000B.P.、寒冷なシラカバの森林ツンドラ、石刃石器群＋船形石器)、→

②**ゴルバトカ３遺跡下層、ウスチノフカ１遺跡上層、ウスチノフカ４遺跡**（13,000～12,000B.P.、削片系細石刃核＋両面調整石器）、→③**スヴォロヴォ３遺跡、同４遺跡、ウスチノフカ６遺跡**（11,000～9000B.P.、シラカバとカラマツまたはハシバミの森、多量の両面調整石器＋削片系および剥片素材の細石刃核）、→④**ウスチノフカ３遺跡、イリスタヤ１遺跡、同２遺跡、テイモフィエフカ１遺跡、ゴルバトカ３遺跡上層**（9000～8000B.P.、温暖なプレボレアル期～ボレアル期のシラカバ、ハシバミの森、多量の両面調整石器＋円錐形を含む各種の細石刃核、土器の存在は評価が不一致）とまとめられている（^{14}C測定値は花粉帯との対比で一部取捨選択されている)。小畑は②のゴルバトカ３遺跡下層に相当する石器群をオシポフカ文化に並行とし、あわせて差異も指摘している（プリアムーレでは両面調整尖頭器が大形だが沿海州では小形、沿海州での石斧の発達と手斧＝スクレブラ状石器の未発達等)。しかし年代推定には先述のように不確定要素が多い。

（２）北海道島

木村英明のテクノコンプレックスの考え方が定着（木村 1995）して以来、複数の製作技術や細石刃核型式を包括し、有茎尖頭器の参入等の基準で細石刃石器群を前後２段階に捉える枠組みで編年が進められている。寺崎康史は**柏台１遺跡**の ^{14}C測定値（蘭越石器群が22,000～19,000B.P.）（福井・越田 1999）を勘案し、寺崎案による細石刃石器群前半期（峠下１類+美利河→蘭越→峠下２類＋札滑）と後半期（白滝→忍路子→広郷）との境界を約15,000B.P.に置き、さらに細石刃石器群の後に有茎尖頭器を伴わない大形尖頭器石器群が来るとした（寺崎 1999a、1999ｂ)。

しかし**美利河１遺跡**（長沼 1985)、**日東遺跡**（長沼・越田・佐藤 2000)、白滝遺跡群（長沼・鈴木ほか 2001、長沼・鈴木ほか 2002）等の ^{14}C測定値は、細石刃石器群の前半期とされた札滑石器群が**上白滝２遺跡**で 14,000～11,000B.P.、後半期とされた広郷石器群が日東で 17,000～16,000B.P.、また後半期の指標とされる有茎尖頭器が上白滝２遺跡で 18,000～16,000B.P.、さらに細石刃石器群以後とされた大形尖頭器石器群が美利河１で 18,000～17,000B.P.、**奥白滝１遺跡**でも 19,000～15,000B.P.等と、石器から導かれた編年と整合しておらず、数値年代と人工遺物編年との関係の整理は今後に託される所が大きい（註３)。近年は旧資料の再分析（山田 1999、高倉 2000)、小地域や個別石器群に限定した表現型のグルーピングや遺跡間変異の把握(山原 2002、Izuho2002)など、個別石器群の性格を詳細に追及する研究が活発で、これらの成果から細分編年や年代観も照射される可能性がある。細石刃石器群の後半とされる忍路子石器群は、細石刃核素材を含む両面調整石器の大きさや形態に分化がみられる点、細石刃核は削片による打面形成ながら小形である点においてオシポフカ文化と類似する。しかし島内の他石器群との厳密な関係や数値年代は存続期間幅の評価も含めて定まっていない。

（３）本州島

本州島の人工遺物の変遷は、重複や欠落する事例、石器と土器の組み合わせなど細部に不確定は残るものの、①細石刃石器群（土器なし、13,000B.P.以前)、→②神子柴系石器群＝大形尖頭器と石斧(無紋や窩紋のプレ隆線紋土器、一部隆線紋土器、14,000～13,000B.P.)、→③有茎尖頭器（諸段階を含む隆線紋土器、13,000 ～11,000B.P.)、→④石鏃（爪形紋や多縄文のポスト隆線紋、12,000 ～10,000B.P.）が、大枠での共通認識といえる（註４)。人工遺物の変遷順序と ^{14}C測定値との間に著しい矛盾はない。いわゆる神子柴系石器群と

オシポフカ文化とは石器の特徴や組成、土器を伴う点が酷似し、年代的な関係もほぼ対応との評価（谷口 2002b）もあるが、後述するようにオシポフカ文化には新しい測定値もあり、本州島の有茎尖頭器以後の段階に並行する部分を一部に含む可能性がある。また大陸との比較の文脈上には二種類の議論が生じている。一方は一国史的前提を批判して日本国内のみに有効な時代区分論を問い直す（小野 1998、谷口 1999、春成 2001 など）。他方は「大陸からの伝播」との枠組みを批判して、地域生態系への適応や内在的形成過程を強調する（安斎 2002）。両者の両立は可能と考えるが後述したい。

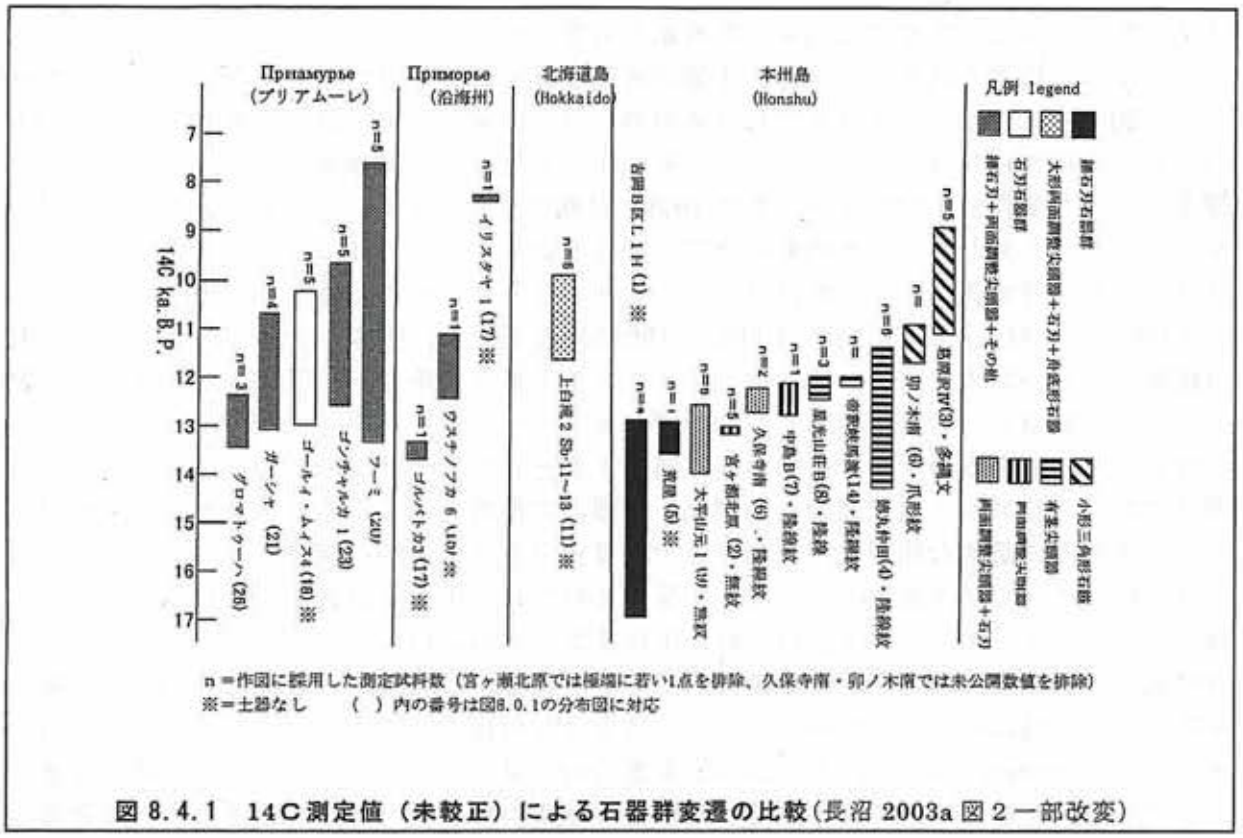
第４節　広域比較研究の可能性と問題点

（１）^{14}C測定値による広域比較

数値年代には、距離の離れた地域間を共通の物差しで比較できるメリットがあるが、アムール下流と本州島では、人工遺物と数値年代の関係の確からしさが同等ではない。これは人工遺物の編年研究の進み具合の問題と、サンプルの層位的連続性の問題である。考古学的な相対編年と理化学的な数値年代とのクロスチェックは、人工遺物編年の連続、およびサンプル採取地点の層位的な連続と、多数の測定値との比較で実現される。日本列島では人工遺物(石器や土器)の大枠での変遷観と、複数の ^{14}C 測定値との間に大きな矛盾はない(谷口 2002、工藤 2002 など)。また土器の出現以前の ^{14}C 測定値も蓄積され、これらとローム層の層位的連続の間にも大きな矛盾はない(砂田 1999)。しかしアムール下流では、人工遺物編年の不確定性や土層堆積の薄さために、日本列島と同等の精度でのクロスチェックは現時点では望めない。長期的な取り組み(おそらく数十年以上の研究の継続が必要であろう)の中で、多数の数値年代データを蓄積しつつ、人工遺物の編年研究をさらに進める必要がある。

以上の限界を踏まえつつもあくまでも現時点での認識として、**図 8.4.1** は ^{14}C測定値で各地の石器群変遷を比較した（註５）。^{14}C測定値はβ線と AMS、補正の有無とその確率など異なるものが混在しており、厳密に言えば適切ではない。また各種の試料（包含層下層有機物層、石器集中と伴う・伴わない包含層炭化物、住居跡内炭化物、炉跡内炭化物、土器付着炭化物、土器胎土内有機物など）を含むことも考慮すると各数値の確からしさにも差があり、概略俯瞰の試み以上に立ち入った議論はできない。また各地で人工遺物の編年の確立程度、^{14}C測定例の多寡、石器群変遷と ^{14}C測定値との整合性にも差がある。プリアムーレは石器群変遷の見通しに信頼できるものがないが、^{14}C測定値は比較的多い。沿海州は石器群変遷の見通しはあるが確定しておらず、この石器群変遷観と少ない ^{14}C測定例との間に矛盾はないが、石器群変遷自体が ^{14}C測定値にも依拠しているために循環論的な感が否めない。北海道島は石器群変遷の見通しは立てられており ^{14}C測定値も多いが、先述のように両者の矛盾が著しい。本州島は ^{14}C測定値とはほぼ独立に石器群変遷が確立されており、これと多数の ^{14}C測定値とはおおむね整合する。

また**図 8.4.1** ではオシポフカ文化の測定値の幅は他と比較して明らかに広いことを指摘できる（註６）。第Ⅸ章で述べるようにゴンチャルカ１遺跡では１遺跡からの 14C 測定数としては最多であり、これをもとに約 13,000～12,000B.P.と 10,000～9000B.P.との二枚の文化層の存在が予測されている。また北海道島の大形尖頭器石器群は、石器群変遷観と矛盾しない上白滝２の Sb-11～13 の値を仮に妥当とすると、本州島のいわゆる神子柴系の


Приамурье
(プリアムーレ)
Приморье
(沿海州)
北海道島
(Hokkaido)
本州島
(Honshu)
凡例 legend
14C ka. B.P.
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
n=5
n=5
n=4
n=5
n=3
n=1
n=1
n=1
n=6
n=1
n=4
n=2
n=5
n=6
n=1
n=3
n=1
n=5
n=6
n=1
n=1
n=1

年代の問題と同様に長期的な展望で取り組む必要がある。

このような限界を踏まえた上で、土器の変遷が最も確立されている本州島を軸に比較すると、**図 8.4.1** ではオシポフカ文化は本州島のプレ隆線紋に近い値と、隆線紋後半ないし爪形紋や多縄文に並行する値とを持つ。あくまでも現時点での数値年代の比較であり、強調されてきた製作技術の共通点（栗島 1999）は検討されてよい。しかし仮に ^{14}C 測定値の幅広さを有意と見なすと、本州島の土器の起源を総体としてのオシポフカ文化に求めるには時期尚早の感が強まる。小畑は梶原によるオシポフカ文化の土器の細分案（シェフカムート[梶原訳・解説]1997、梶原 1998a、1998b）を土台に、①ガーシャ１式、フーミ下層（繊維混入）→②ガーシャ２式、ゴンチャルカ１下層（絡条体）→③ゴンチャルカ１上層（円孔文や櫛歯）との変遷を示し、③がグロマトゥーハの一部や遠くザバイカルのウスチ＝カレンガ、沿海州のウスチノフカ３に関連するとした（小畑 2002、2003）。ただし包含層炭化物の ^{14}C 試料と人工遺物との関係、土器の完形復元例が少ない、遺物表面の磨耗といった遺跡形成論的な問題など、現時点での資料がもつ制約的な諸条件の中では、今後の調査で検証されるべき仮説の一つとして受け止めたい。また石器群との供伴に否定的な異論もあるウスチノフカ３の土器は、仮に供伴を認めても花粉分析や石器群の特徴からは完新世初頭である可能性が高いとの指摘がある（小畑 2001、2002）。これは本州島の『縄文早期』に年代的に並行する時期である。このような現状ではクズミンらが説く土器出現の多元説（Кузьмин・Ветров ほか 2000）が整合的に見える。クズミンらは最古級の土器について、アムール下流域、日本列島、華南の３ヵ所の核地域を認めている。全ての地域の出現についての統一的な説明や一点の起源地からの各地への伝播といった説明は難しく、各核地域の生態系との関わりで個別に考えるべきであろう。

なお土器の編年や対比は土器自体の検討で進めるべきとの立場は、各核地域の内部で出現後の土器を扱う場合には正論ではある。だが千 km 以上の空間距離と数値年代で千年単位の時間距離とを互いに隔てた各地の間の連絡を、土器自体の特徴から評価することには方法論上の無理があるのではないか。また土器出現の背景を出現以前からの流れの中で把握するには、石材利用の遺跡間連鎖や石器群間・遺跡間変異の解明から迫る集団の移動・居住形態とその時系列上の変遷を明らかにした上で、その流れの中での土器出現の位置や出現後の展開を把握すべきである。環境変遷史との比較も人工遺物の個別要素とではなく移動・居住形態の変化とこそ関連させるべきで、このような問題に迫るには石器資料が重要となる。具体的な研究が実施可能な資料的条件が整っている地域は現状では限られるが、南関東等の可能な地域でモデル化（桜井 1996、仲田 2001 など）し、各地の事例と比較してゆく方向を一つの実践戦略として提案できよう。

（３）広域比較研究にむけて

比較研究上の困難は、国毎、地域毎に調査の件数や規模、報告の制度や精度に差がある点だけでなく、各国史の縦割りの中で異なる時代区分概念を用いている点にも起因する。わが国固有の歴史の中にどこまでも古い過去をも包摂しようとする傾向も一部に根強い（註７）。だが現在の国民国家の領域が先史時代にも意味を有していたとは考え難い。短期的には困難ではあるが各国史に分断されてきた先史時代を国境横断的に捉えなおす作業が必要である。一方で強調されている個別生態系への適応との観点は、国境横断的把握とは逆ながら一国史の枠組みをミクロ方向へのベクトルで解体する点には意義を認めたい。

しかし伝播論的な枠組みを批判する上でも広域の各地を横断する共通性や類似性が実資料に見られる現実は動かないため、この共通性の説明は個別地域論とは別に進める必要があると考える。

伝播論と個別地域論との二択ではなく第３の道を模索したい。そのためには、間地域的な共通性の伝播論とは異なる視点からの理解とその変異としての小地域の個性的な実体の把握とを、複眼的に追及する研究戦略が前提となろう。この前提の上であえて図式的に述べると、石器群の技術構造は広域的な、集団の具体的な移動・居住形態や土器は小地域的な検討が有効であろうか。この場合、広域を議論する際の枠組みには、一部の地域や時期、学問分野の細部に特化せず、どこからも等距離に離れた中立性が求められよう。人工遺物とは独立な^{14}Ｃ年代や両面調整石器群の概念はその一案である。現在の国境を超えた比較、数値年代や環境変遷史との比較が可能な中立的枠組みーこの条件を満たすなら、筆者の案とは異なるより適切な枠組みが提案、採用されてよい。

第Ｉ章の冒頭でみたように、かつて日本列島内で後期旧石器の存在が知られておらず、縄文文化が日本列島最古の人類と考えられていた頃、縄文文化の起源は大陸に求められたが、当時の知見では正当なことであった。しかしその後も縄文文化の起源を大陸に求める発想は引き継がれ、かつて丸ノミや植刃をバイカル地域に、近年は神子柴系石器群をオシポフカ文化にと日本の縄文の起源地は繰り返し大陸に求められてきた。しかし土器の出現を前後する石器群の変遷は、本州島とアムール下流で同じ程度の細かさではわかっていない。この事情から、オシポフカ文化を「日本の縄文草創期」の故郷として特定するのは時期尚早である。また文化的伝播を前提とした構図は、環日本海各地の詳細が数値年代を伴って明らかにされるにつれ、成立し難くなりつつある部分もある。ただしこのことが日本列島内に完結した縄文の発生を直ちに意味するわけでもなく、また数値年代を放棄してまで文化的伝播の論理に固執するなら、古環境変遷史との比較が閉ざされる。広域に共通する、細石刃石器群から大形尖頭器石器群へ、との基調の中で、各地の個別生態系に応じた多様な契機による完新世適応がなされたとの理解に立つなら、縄文文化起源論や伝播論か内在論か等の問題の立て方自体が無効化する。これらの問題の立て方を超えた比較が、今後の研究が目指してゆくべき方向であると考える。

註

1）フーミ遺跡の資料の一括性は小畑弘己も批判している（小畑 2002）。

2）腐食土層が未発達なために竪穴住所が完全に埋没せず、現在でも窪みが地表に現れている。この窪みを、新石器時代の人々も繰り返し再利用した可能性があり、一つの住居跡が複数の文化期をまたがって断続的に利用されることもあり得る。一括性の高さは相対的な評価である。

3）なお上白滝２の Sb-11、12、13 の大形尖頭器石器群に平面分布が近い Cb-4、5 の ^{14}Ｃ測定値は 11～10ka で、報告者はこれのみを積極的に評価している。

4）紙幅の都合上、個別の測定値は再録しない。工藤 2003 および谷口 2002a、2002b を参照。

5）筆者も生態学的アプローチを重視して古環境変遷史と人工遺物研究との統合を目指す立場を本来とるが、今回は人工遺物の変遷とその広域比較に論点を絞ることから ^{14}Ｃ測定値は全て未較正値で議論する。古環境変遷史との比較に際して必要となる暦年較正は、導入初期の混乱を越えて整理が進んでいる（工藤 2003a など）。また ^{14}Ｃ以外の各種年代測定法による値は、現状での古環境変遷史

との対比が困難であるため言及を控える。なお本図作成に用いたデータの個別の原典は紙幅の都合上省略する。長沼編 1985、砂田 1999、長沼・越田・佐藤 2000、樋泉・津村 2000、長沼・鈴木ほか 2001、Kuzmin2001、長沼・鈴木ほか 2002、Шенкомуд 他 2002、谷口 2002a・2002b、工藤 2003 を参照。

6）吉岡B区や徳丸仲田、葛原沢Ⅳも測定値範囲が幅広いが、本州島の他遺跡では狭く集中しこれらが全体として石器群変遷との整合性を有している。対してブリアムーレでは多くの遺跡で一様に幅広い点に有意性を認めたい。

7）西尾幹二は、縄文文化を日本民族の基層文化とする思想から、大平山元Ⅰ遺跡を世界最古の土器として日本民族の太古からの優秀性を強調しているが（西尾 1999）、このような論調は一面的かつ扇動的である。

第Ⅸ章　ゴンチャルカ１遺跡の調査

本章の構成

前章でみたアムール下流地域のオシポフカ文化は東アジア最古級の土器の存在で著名だが、先行する石器群や直接に後出する石器群の内容や、オシポフカ文化の中での編年の細分は明らかにされていない。現時点での ^{14}C 年代では更新世終末期から完新世移行期に相当し、石器群の内容も神奈川県寺尾遺跡などを代表例とする本州島の同時期の資料と共通する部分も多く、国境にとらわれない比較研究を進める上で重要な地域である。筆者らは将来的な比較研究を可能にする資料提示を目的に、ノヴォトロイツコエ遺跡群でフィールド調査を開始した。国際共同調査という性格から、体系的な成果の報告には長期的な取り組みを必要とする。本章では取り組みの第１段階として、**ゴンチャルカ１遺跡**の 2001 年の調査の概要を提示する。

第１節　遺跡の概要と調査の方法

（１）遺跡の位置と立地

ハバロフスク市の中心街から南西の中露国境に向かう地域は、フレベット山地からの扇状地の北端がアムール河の氾濫と侵食を受けて形成された、台地状の地形が発達している（**図 9.1.1**）。この台地状地形の崖線に沿ってオシポフカ文化期の遺跡が集中しており、ノ

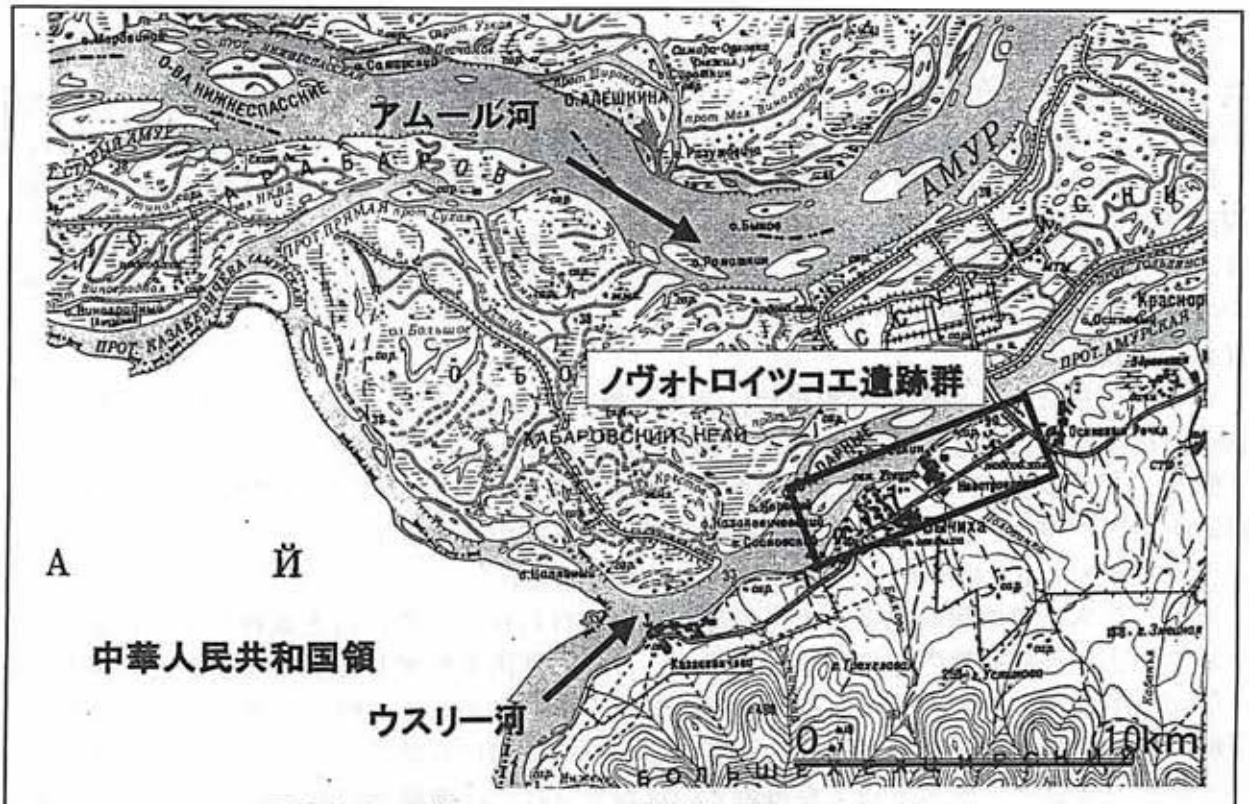


図 9.1.1　ノヴォトロイツコエ遺跡群の位置と周辺の地形
（Топографическая карта:Хабаровский край и Еврейская АО. ВТУ ГШ 1995 年版より作成）

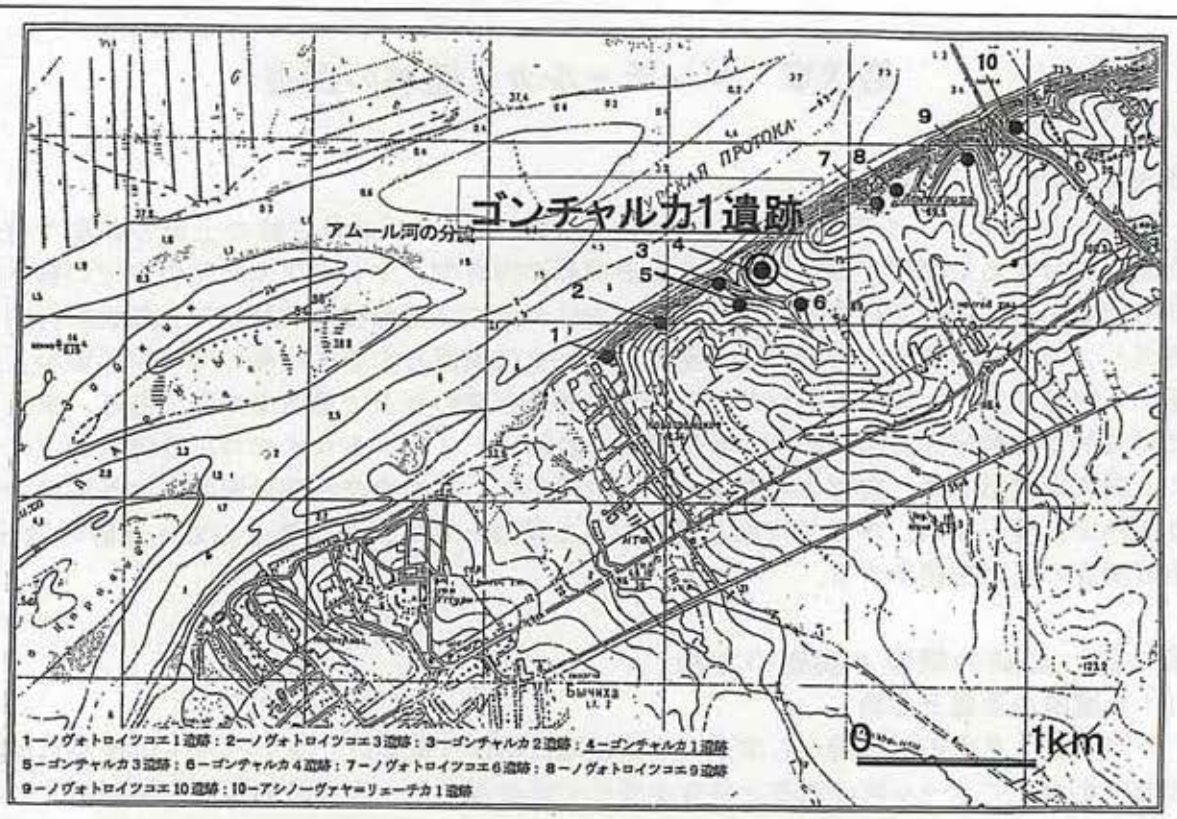


図 9.1.2　ゴンチャルカ１遺跡の位置と立地（Малявин・Шевкомуд1999 fig.2 一部改変）

ヴォトロイツコエ遺跡群として知られている（Малявин.・Шевкомуд1999）。ゴンチャルカ１遺跡は、この台地を刻む小支谷（ゴンチャルカ川）と、アムール分流との合流点を見下ろす斜面の突端に立地する（**図 9.1.2**）。遺跡の現況は山林で、アムール河の現水面からの比高が約 14～16m を測る。シェフカムートは 1995 年に 100 ㎡、1996 年に約 300 ㎡の調査を行い、1995 年の成果は日本語でも紹介され（シェフカムート[梶原訳・解説]1997）、日本でも「最古の土器群」に関連して注目されてきた（梶原 1998、谷口 1999、コノニェンコ[栗島訳・解説]1999、白石 2001 など）。

（２）調査の方法

グリッド法による調査区の設定は、過去の調査との整合性を重視しこれを引き継いだ。10m×10m の大グリッドをセクターと称し、遺跡はⅠ～Ⅵまでのセクターに分割してある（**図 9.1.3**）。調査区の西と北は急峻な崖のため現在以上の拡張は不可能だが、東と南には緩斜面が広く続き、調査区設定のさらなる展開が可能である。１セクターを 100 の小グリッド（１m×１m）に分割し、この小グリッドが遺物取り上げの平面的単位となる。

当初、日本の旧石器時代遺跡の発掘調査で広く行われている、出土遺物の全点に番号を与えて３次元座標空間内での位置を記録する方式の採用を提案したが、ロシア側の同意を得られなかった。この方式は、遺物の垂直分布の検討によって、時代を異にする複数回の活動痕跡の重複なのか、一回性の活動痕跡なのかの弁別に有効であると説いたが、垂直分布の検討は後述のプラスト法でも可能との反論をうけた。議論を重ねた結果、出土した時点で遺物を観察し、石器のうち二次加工の施された「製品」および「石核」、また「大きな

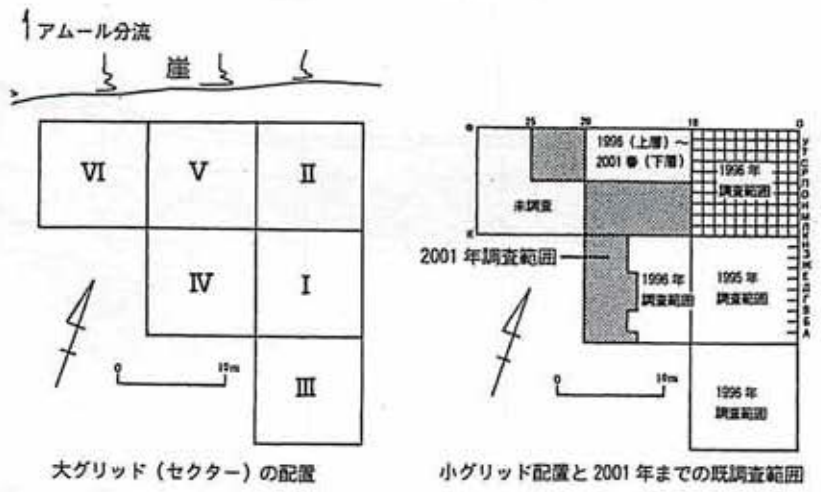


図 9.1.3　調査区の設定（長沼ほか 2003 第 2 図引用）

土器片」は、全点に番号を与えて位置を記録するが、二次加工のない剥片、小さな土器片は出土位置を記録せず、小グリッド単位のプラスト法で一括して処理することで合意した。プラスト法とは人工層位法の一種で、垂直方向に 5 cm 刻みで厳密に平らに掘り下げ、その 5 cm 毎に含まれる遺物のまとまりをもって、垂直分布の傾向を検討・抽出するものである。平坦に掘り下げる精度が厳密であれば、垂直分布の検討に有効であると判断した。

日程、天候、人員数等の諸条件を協議の上、125 ㎡を調査することに同意・決定した。

（3）基本層序

図 9.1.4 に基本層序を示す。1 層は表土の黒色土で、層厚は 5 ～10cm ときわめて薄い。2 層は灰白色でややローム化した砂質粘土層である。層厚は 20～40cm で調査区全域にわたって安定して堆積しており、新石器時代後期・初期鉄器時代の遺物をごく少量包含する。3 層は 2 層と似た砂質粘土層だが、2 層よりも風化が進んでいることから粘性・しまりともに強く、色調は黄褐色を呈する。シェフコムードによる過去の調査所見を踏襲して、主として色調を基準にさらに 3 a 層、3 Б 層に分層した。上層の 3 a 層は層厚が 15～20cm で下層の 3 Б 層よりも粘性・しまりともに弱い。下層の 3 Б 層も層厚は 15～20cm で、3 a 層よりも色調が濃い。ともに調査範囲の全面に安定して堆積している。4 層は 5 層との漸移層で、水成堆積の砂が混じって灰白色がかり、粗粒で締まり・粘性ともに弱い。調査区の全体には広がらず、局地的に認められる。5 層は基盤で扇状地堆積物の砂礫層である。また 4 層以下には、東西方向に走る氷楔（アイスエッジ）を平面的に確認できる。

遺物は 3 a 層から 4 層まで出土するが、3 a 層には少なく、垂直分布のピークは 3 Б 層である。基盤に切り込む氷楔に流入した土からも少量の遺物が出土するが、構造土の形成時期を示すのではなく、埋没過程で遺物が移動したものと判断している。

図 9.1.5 にセクターⅤのⅡライン北壁（上段）とセクターⅣの 20 ライン西壁（下段）の堆積状況を示した。東西方向は、斜面の勾配が比較的きついが、斜面堆積物というほどのものではなく、各層は水平に堆積している。また地表から礫層上部までの深さは最深部で約 90cm、最浅部で約 40cm と層厚の変異に富む。

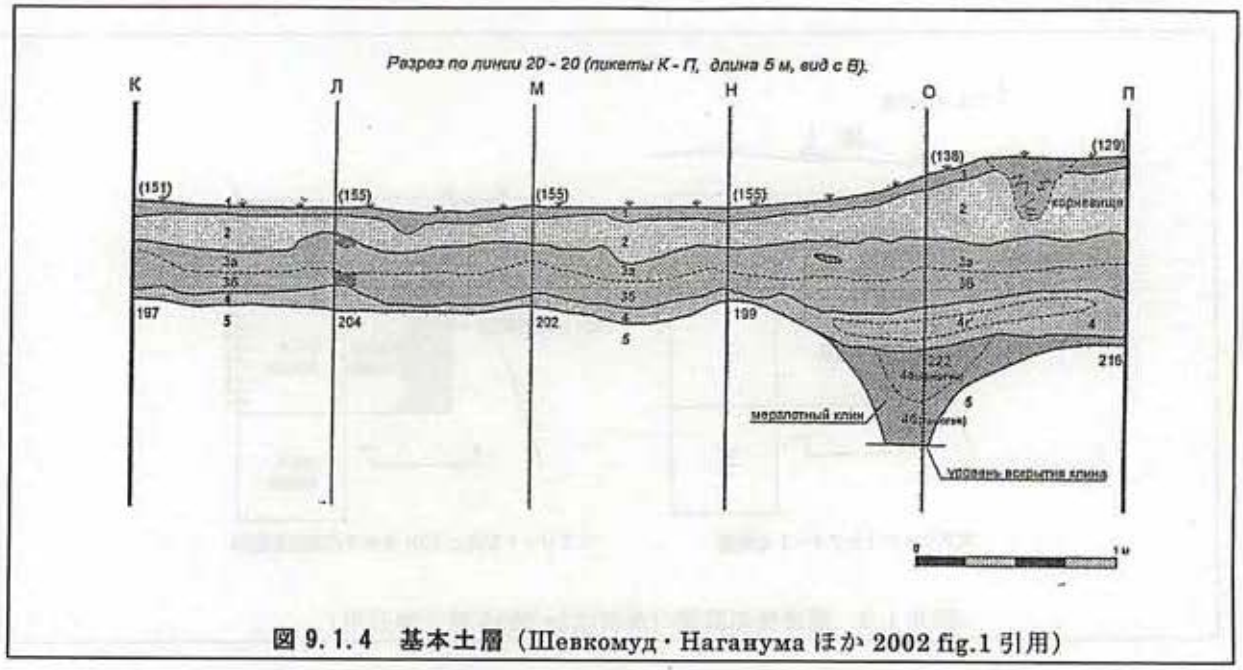


図 9.1.4　基本土層（Шевкомуд・Наганума ほか 2002 fig.1 引用）

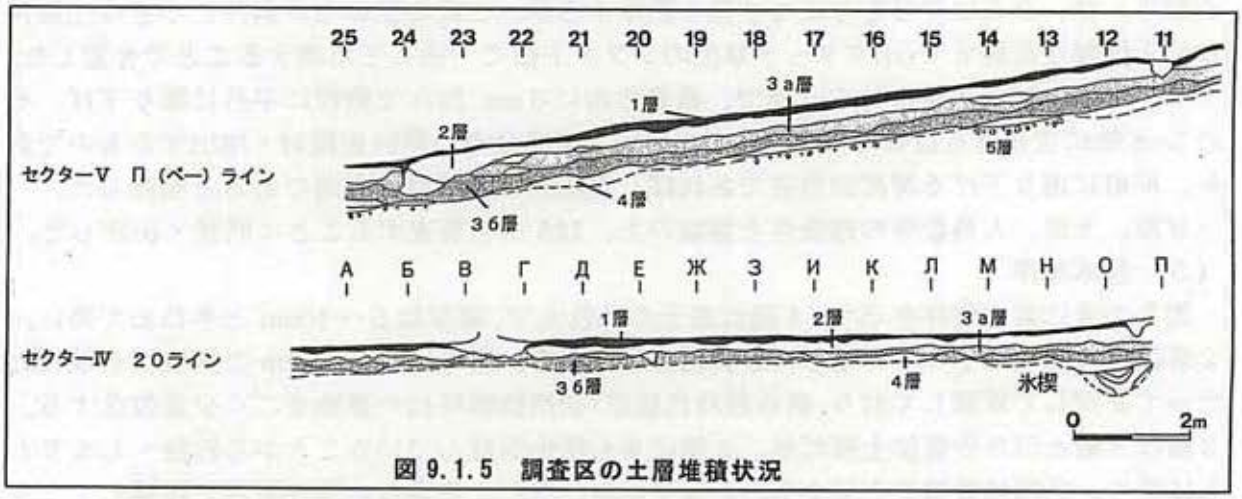


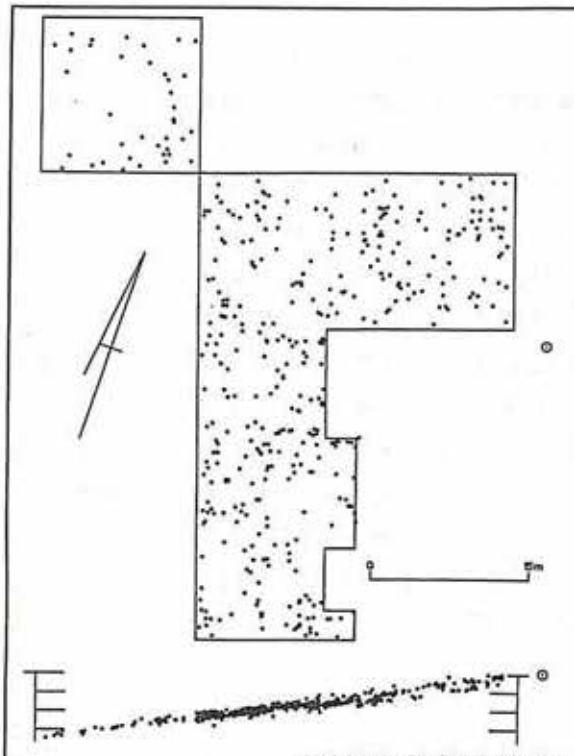
図 9.1.5　調査区の土層堆積状況

第２節　遺物と遺構

（１）出土遺物の分布

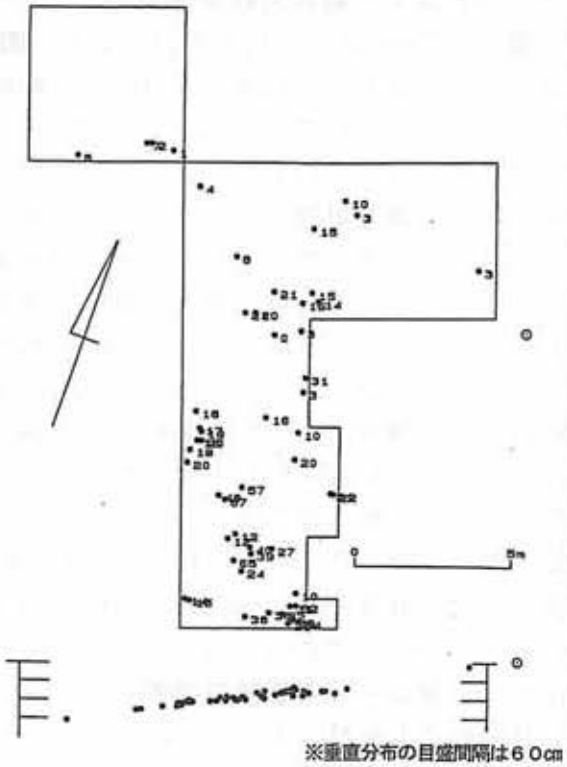
出土位置を記録した遺物は石器と土器をあわせて 431 点である。**図 9.2.1** にこれらの平面分布を示した。全体の分布は明確な集中を形成することなく、調査区全体に散漫に広がる。土器片の分布は調査区の南側にやや多い。両面調整石器（尖頭器と石斧）の分布、細石刃石器群（細石刃および細石刃核、細石刃核未製品）の分布も、全体の分布と平面・垂直ともに異なる傾向は見せない。

また加工や被熱を受けていない拳大～人頭大の自然円礫が、集中部を形成しながら多数出土した。これらの一部は明確に人為的な配石とみられるものもあるが、４層の水成堆積や５層の扇状地堆積物に含まれる礫と連続していく部分もあり、これらの性格について明快な解釈を与えるに至っていない。以下では、出土位置を記録した二次加工のある石器と土器について、概要を簡潔に記述する。



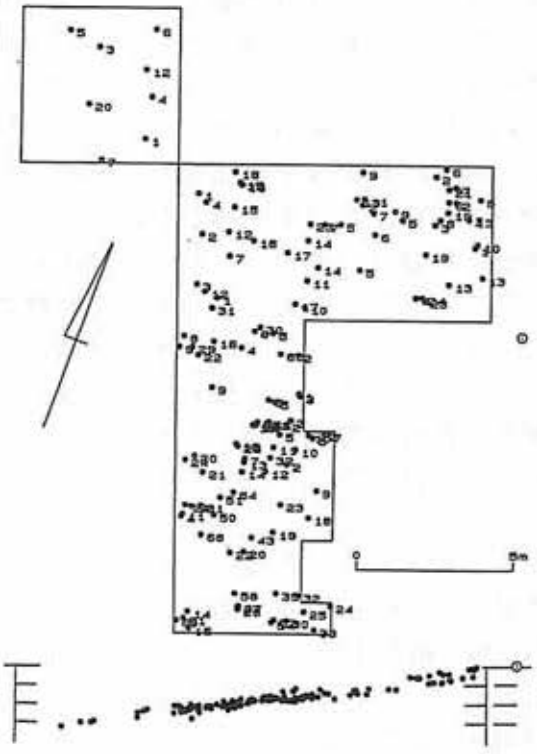
※垂直分布の目盛間隔は６０cm

出土位置記録遺物全点の分布



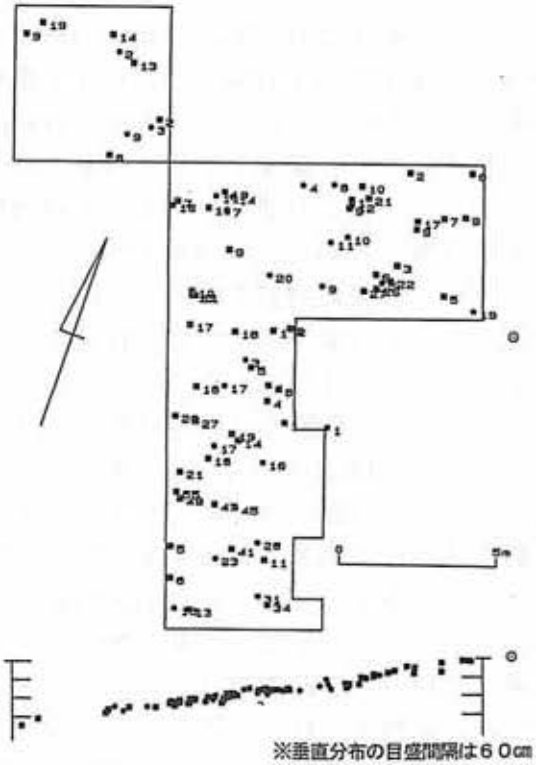
※垂直分布の目盛間隔は６０cm

大きめの土器片の分布



※垂直分布の目盛間隔は６０cm

両面調整石器（大小各種の尖頭器および石斧）の分布



※垂直分布の目盛間隔は６０cm

細石刃石器群（細石刃および細石刃核）の分布

図 9.2.1　出土遺物の平面分布図

（２）石器①－細石刃石器群

図 9.2.2～9.2.5 に出土遺物を示す。**図 9.2.2** の１～６は細石刃核である。直径５cm 前後の玉髄・碧玉の小円礫を素材とし、簡略な下縁調整、側面調整、打面調整をへて細石刃を剥離する。５以外は自然面が広く残る。６は一見すると両面調整状の母形を用意した後に削片を剥取して打面を形成しているが、打面の脇に円礫の礫面が残ることから、完全な両面調整石器を用意していないことが明らかである。石材は５が玉髄で他は碧玉である。

石材利用の選択性が強く、後述の両面調整石器群に用いられる石材は細石刃核には用いない。逆に、この玉髄・碧玉を用いた両面調整尖頭器や大形剥片、縦長剥片、二次加工のある器種もほとんど認められない。原石の大きさに規定され大形剥片を得ることが困難なためであろうか。図示した例の他にも、細石刃核下縁の稜を丁寧に作り出す例や、細石刃核母形の長軸方向に削片を剥取して打面を形成する、北海道島の「湧別技法」に類似する手法への意図が読み取れる例もある。しかし、こういった手順を踏まえず略式な調整をへて細石刃の剥離に到る例が大半である。また図示しないが、細石刃核の素材と同じ玉髄・碧玉の小円礫をランダムに打ち割った、礫器状を呈する不定形な石核が多数出土している。明確な細石刃核の他に、細石刃剥離が行われていない母形、先述の不定形小石核をあわせ、現場作業の時点で 58 点を確認した。

（３）石器②－両面調整石器群

両面調整尖頭器、半月形石器や石斧にこれらの未製品や不定形なものを含めて、器体の両面を平坦な調整が覆う一群を両面調整石器群とした。両面調整尖頭器は、リダクションが進んでいないものから欠損品まであわせて、現場作業の時点で 141 点確認している。黒色～暗灰色の堆積岩（泥岩か頁岩の一種）とガラス質黒色安山岩が主体である。黒色の堆積岩は器種を問わず石器両面の稜線が磨耗している例が多い。尖頭器の平面形状は木葉形、柳葉形、半月形、それぞれの大型（10cm 以上）・中型（５～10cm）・小型（５cm 以下）など変異に富む。**図 9.2.2** の７は最大幅が中央にある薄手の両面調整尖頭器で、大形～中形ではこのタイプが基本である。石材は黒色の堆積岩である。８は最大幅が基部よりにある両面調整尖頭器で、基部を欠失している。表裏両面に研磨面があり、これが剥離面を切ることから、局部磨製尖頭器とでも言い得る。灰白色の堆積岩である。９は黒色の堆積岩による半月形石器である。10、11 は４点が重なっていわゆる「デポ」状に出土した例からの２点で、この４点は小形ではあるが、大きさ・形態・石材（黒色の堆積岩）の規格性が高く、人為的な集積の可能性がある。12 は中形柳葉形の両面調整尖頭器でガラス質黒色安山岩である。13 は大形で平面・断面形とも不整、縁辺の細部調整もみられない尖頭器の未製品で、風化の激しい灰色の堆積岩である。

図 9.2.3 には掻器・彫器・削器を示した。両面調整尖頭器以外の器種では、掻器が形態的・量的に安定している。掻器・削器をあわせて現場の時点で 58 点を確認した。平面形が三角形を呈し、刃部が直線またはわずかに内湾する例（**図 9.2.3** の１、２、４、５）と、平面形は楕円形で凸刃の例（３、７）とがある。これらはいずれも多数出土し、平坦な剥離で両面調整または片面調整に仕上げている。素材剥片の背腹両面を残し縁辺のみに二次加工を加える剥片器種には、便宜的な掻器（６、８）、不定形な彫器（９）や削器（10、11）がある。削器は尖頭器未製品の可能性もある。

これら剥片器種の石材は、両面調整尖頭器や石斧と共通する黒色～灰白色の堆積岩で、

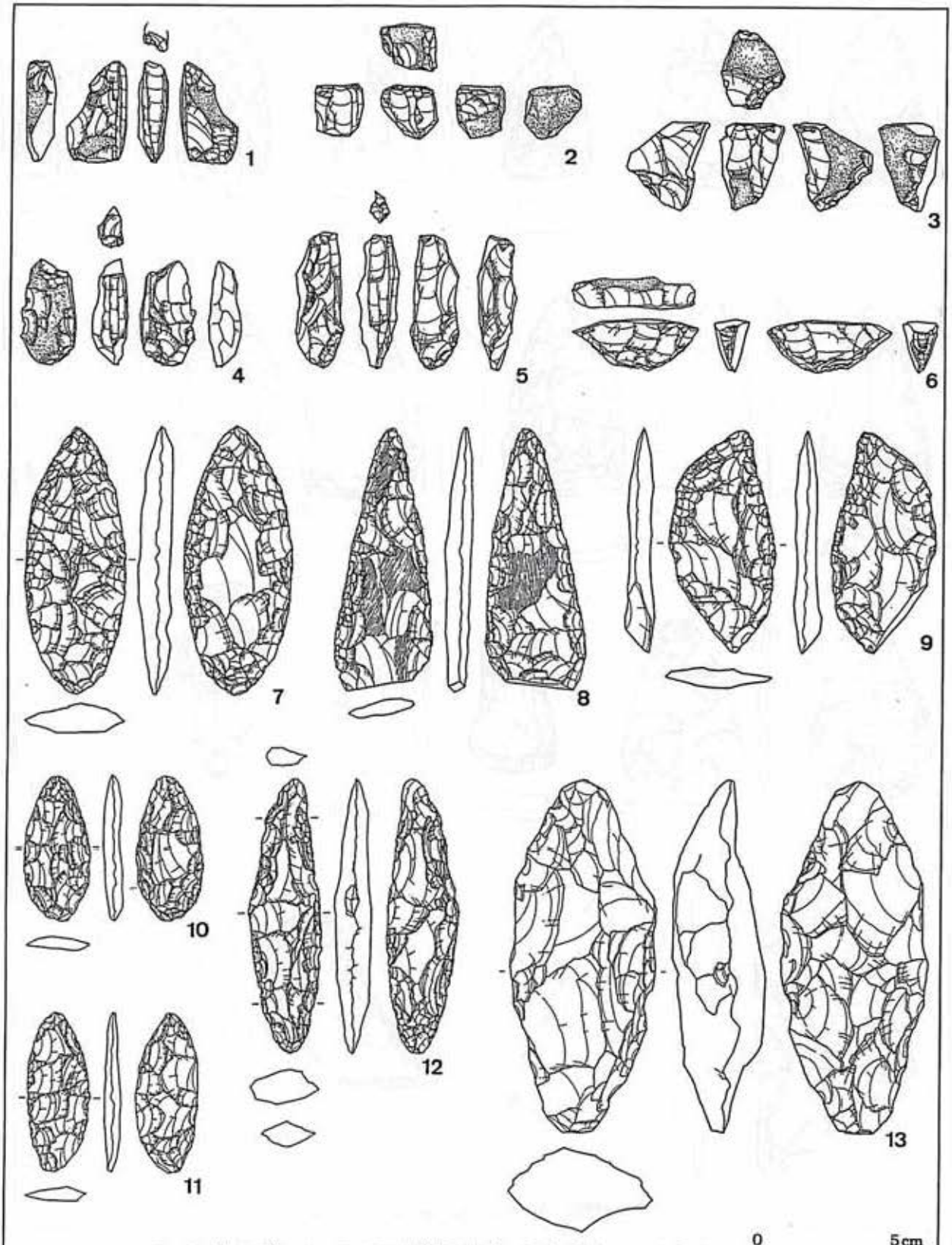


図 9.2.2　出土石器①細石刃核・両面調整尖頭器　（S=1／2）（長沼ほか 2003 第 5 図一部改変）

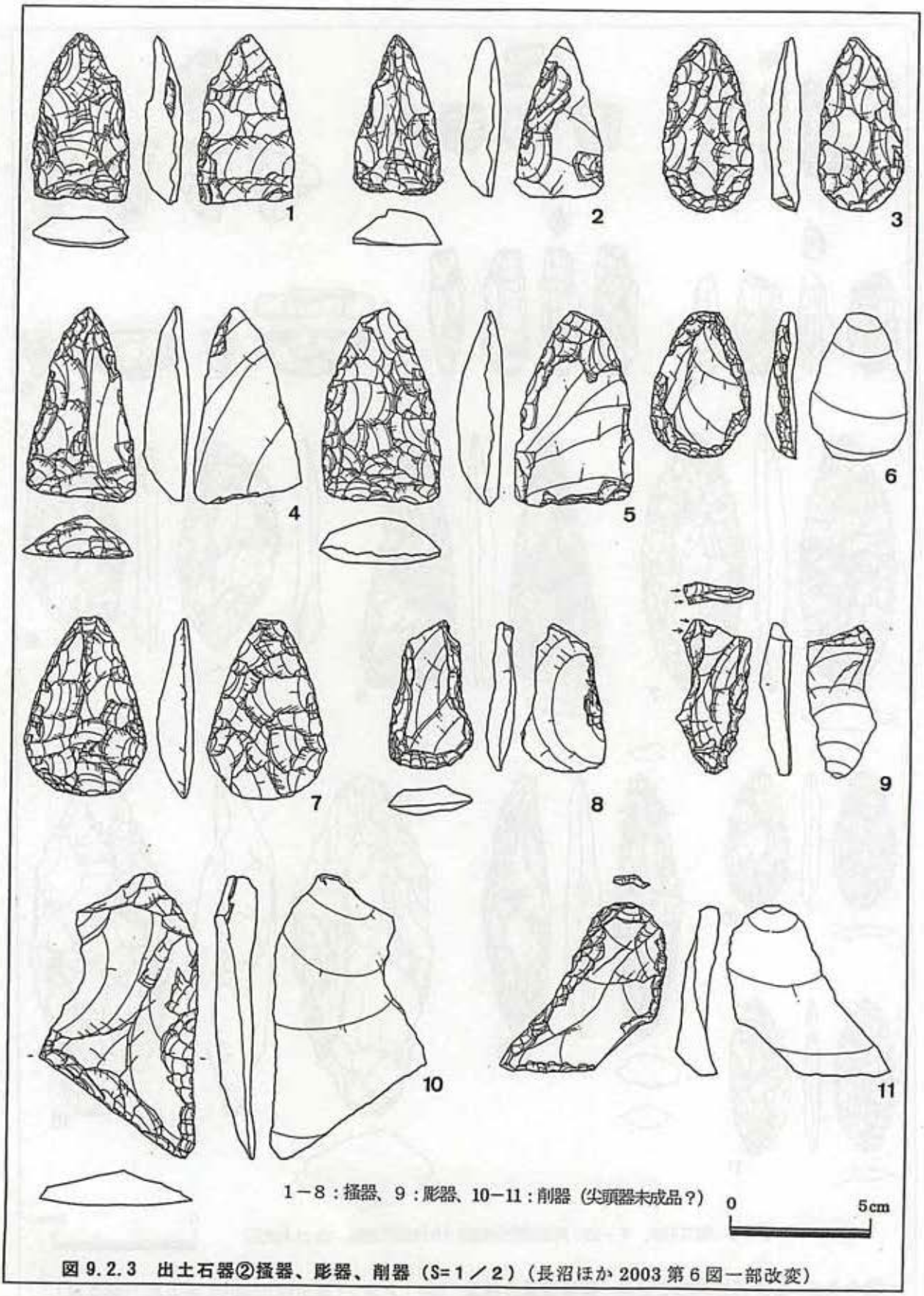


図 9.2.3　出土石器②掻器、彫器、削器（S=1／2）（長沼ほか 2003 第 6 図一部改変）

素材剥片の特徴が分かるものでは、背面の剥離面構成が不定方向な例や、剥片の側方観が湾曲する例が多いことから、両面調整石器リダクションの各段階で生じた剥片を素材としている可能性が高い。縦長剥片は皆無ではないが主体的ではなく、石刃を量産する石核リダクションはほとんど確認できない。

図 9.2.4 には石斧と男根状石製品を示した。石斧は大きさ・平面形状・刃部形状・研磨面の有無等において多様で、現場作業時点で 12 点を確認している。**図 9.2.4** の２は両面調整尖頭器と共通する黒色の堆積岩で、刃部が片刃の丸ノミ状を呈するが研磨はなく、また全体に不整形であるために、破損後に石核に転用された可能性がある。３は風化の激しい名称不明の石材で、直線状の刃部正面観・平面形態をもち両刃である。４は板状節理の発達した粘板岩で、刃部作出以前の製作途上で放棄された未製品である。１は砂岩の細長い自然円礫の一端に、磨り切りによる溝を配した男根状石製品である。

これら細石刃石器群と尖頭器石器群は石材が異なるものの、**図 9.2.1** に示したとおり発掘調査時の所見では平面分布・垂直分布ともに重なり合うことから、供伴すると判断している。出土位置を記録しなかった剥片類のプラスト・グリッド単位での集計や、自然礫の集中ともあわせた総合的な垂直分布データの詳細な分析は現在作業中であるが、上記を覆す見通しは得られていない。

（４）土器片

遺存状態が悪く器形復元の不可能な少破片が多数出土した。平底の底部片や平縁の口縁部破片も含む。内外面無紋、外面無紋・内面条痕のもの、内外面条痕、円孔紋などがある。遺存状態が悪く、器形復元の不可能な少破片を多量に検出した。大半は無紋や内外面とも剥落するなど特徴をつかみ難いが、平底の底部片や平縁の口縁部破片も含む。器壁は直線的な例が多く、わずかに内湾する例もある。胎土は大粒の石英を混じる例、砂を多く含む例など多様で、複数個体の存在が明らかである。全般的に焼成は粗悪で、取り上げ時や洗浄時に破損するほど脆い。大きく摩滅して角が取れた土器片も多い。紋様が認められる土器片では、外面無紋・内面条痕、内外面条痕、円孔紋、隆起線紋などがある。

図 9.2.5 にその一部を示した。展開は断面図をはさんで左が外面、右が内面である。１は外面に水平方向へ二本の平行沈線のある内外面条痕紋である。外面は沈線に平行な、内面は斜め方向への長い条痕がある。２は外面から内当てる施紋がなされている。４は器壁の屈曲の激しい例で、外面の施紋や胎土は２と酷似し、内面には水平方向にほぼ平行した条痕がある。３は口縁の下に粘土紐を貼り付けた隆起線紋土器である。拓影では不鮮明だが隆帯の上には篦状工具による幅３㎜前後の刻みが２～３㎜の等間隔で施されている。各隆帯の上下は粘土紐貼り付けの圧痕を生かした並行沈線となっている。内面の全面が剥落しており、残存している厚さは９㎜前後である。焼成が悪く厚手である等、日本列島の有舌尖頭器に一般的に伴う隆起線紋土器とは異質であり、日本列島との直接的な伝播関係・系統関係の議論は時期尚早と考えている。アムール地域での今後の類例の蓄積を待ちたい。

（５）遺構など

円礫の集中部を多数検出した。大きく２種類に分けられる。①は、人頭大の円礫が間隔を空けて散布し、基盤の砂礫層に確認できる円礫と岩相・大きさが異なる。被熱がある例、平坦面をもつ台石状の例、剥離面をもつ石核や石斧の未製品状の例も一部に含む。人為的な性格が強いと考えている。②は、拳大かそれ以下の小円礫が狭い範囲に密集する。被熱

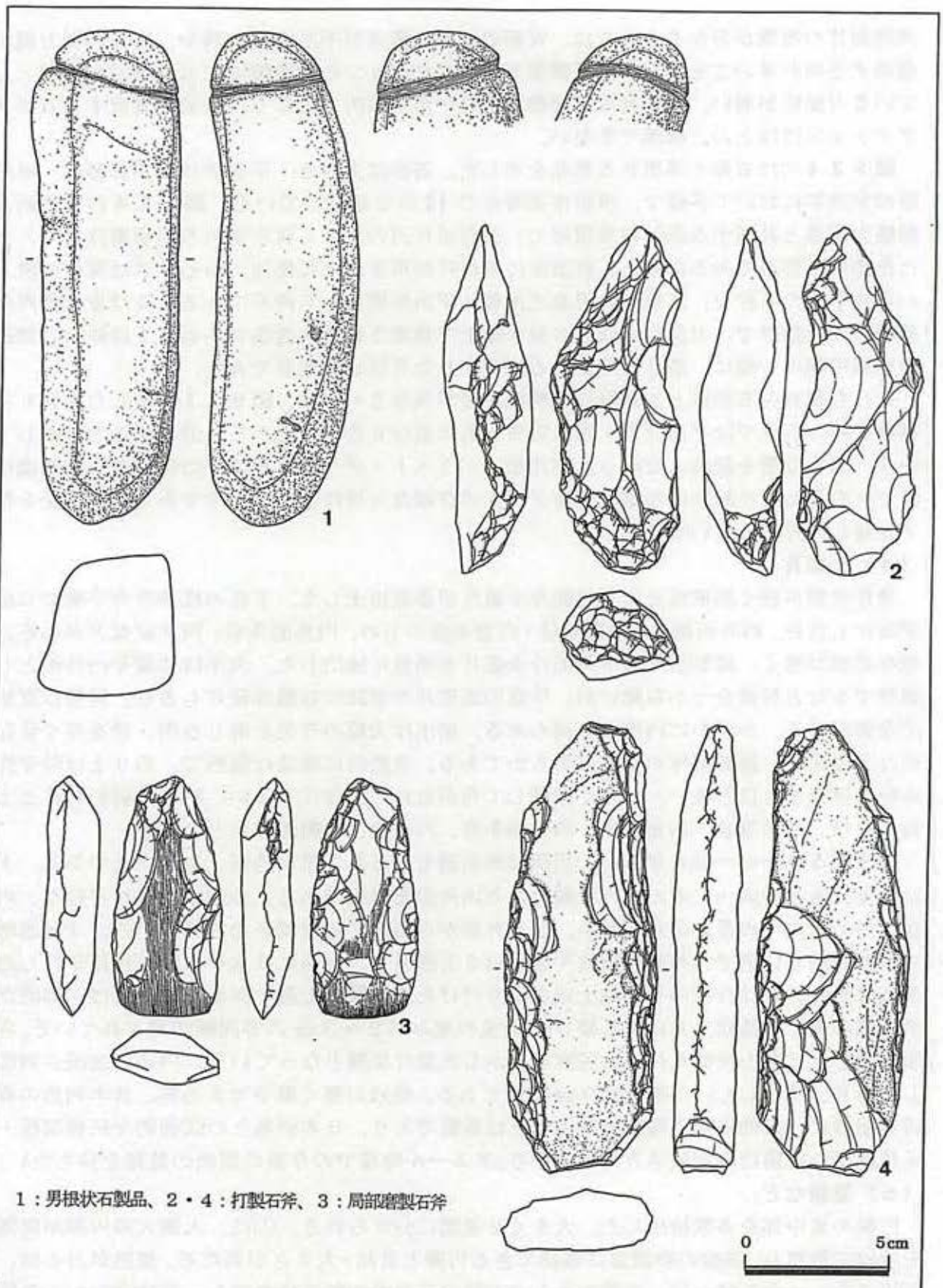


図 9.2.4　出土石器③石斧、男根状石製品（S=1／2）（長沼ほか 2003 第 7 図一部改変）

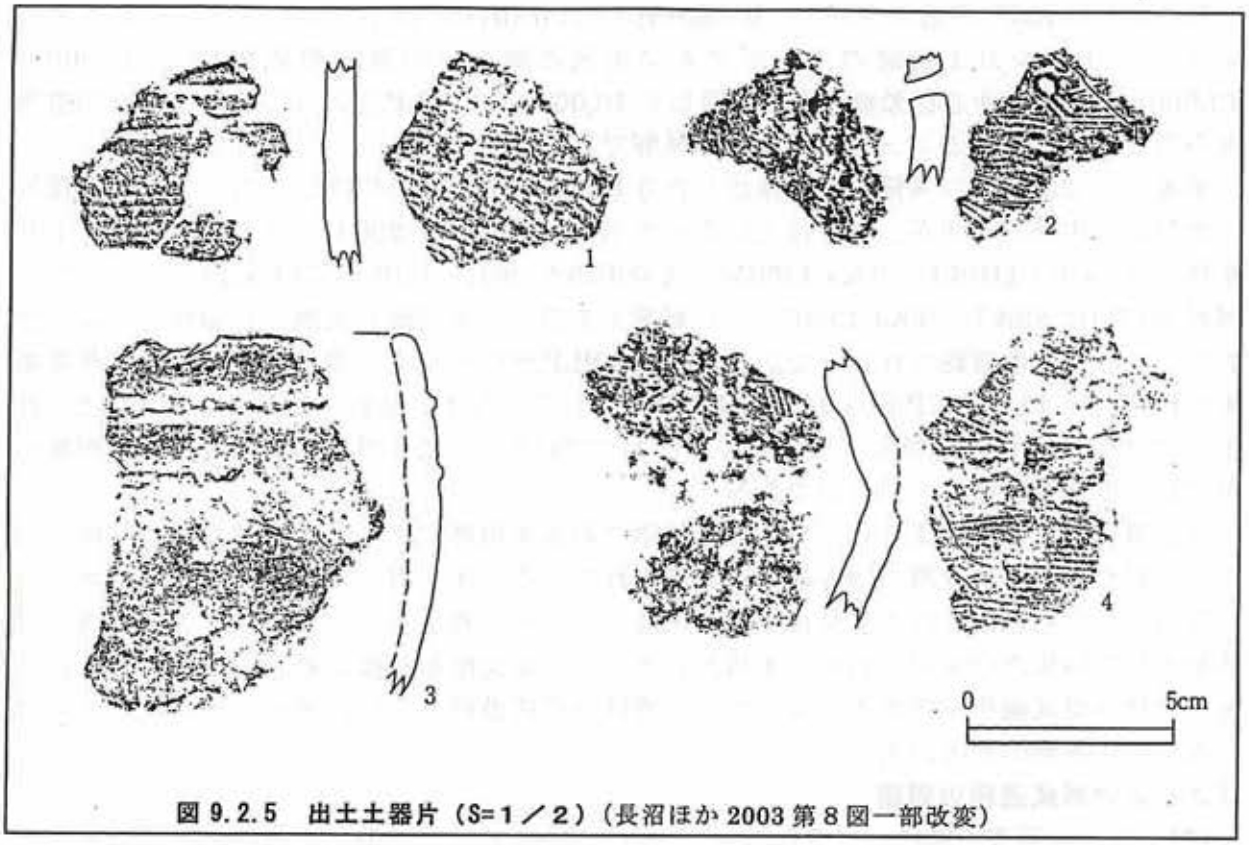


図 9.2.5　出土土器片（S=1／2）（長沼ほか 2003 第 8 図一部改変）

や剥離等は認められず、基盤の砂礫層へ漸移的に連続する部分もある。こちらは自然現象である可能性を含む。しかし①と②は、平面・垂直分布とも明確に分け難く、一つの礫集中に両者の性格が見られることもある。総じて個別の評価は困難である。いずれも 3a 層から 4 層までみられ、特定のレベルに集中することはない。

炉跡と認識した遺構を 7 基検出した。直径 30～50cm 前後の円形～楕円形を呈する暗色のシミで、プラン確認時には一見すると大形の柱穴のように見えるが、半裁すると中央を深さ 10ｃｍ程度の最深部とする、浅い皿状となる。明確な炭化物集中や赤色化した焼土、白色の灰などは肉眼で確認できない。斜面地のためレベリングのデータは類似した値を示さないが、7 基ともすべて 3 b 層中であり、傾斜に沿う場合のおおむね同一の平面から検出された。うち 1 基は、径 10ｃｍ程度の円礫が 3 点配され、石囲い状を呈していた。これらの暗色の覆土を精査すると、微量の炭化物粒が検出される。3 基から 1 点ずつ計 3 点の炭化物試料の採取に成功した。

第 3 節　ゴンチャルカ 1 遺跡をめぐる諸問題

（1）数値年代について

ゴンチャルカ 1 遺跡で得られている ^{14}C 測定値はこれまでで 8 例あり、オシポフカ文化の遺跡の中は、一遺跡からでは最多の測定値が蓄積されているといってよい。はじめてわが国に紹介された値は、1995 年の調査で検出した包含層内炭化物で、9890±230B.P.（Gak-18981）、10,590±60B.P.（LLNL-102168）、12,500±60B.P（LLNL-102169）の 3 点であった（シェフカムート［梶原訳・解説］1997）。後に 12,055±75（AA-25437）、10,280

±70（AA-25438）が追加された（Шевкомуд・Haraнума ほか 2002）。これらにもとづいてゴンチャルカ１遺跡のオシポフカ文化包含層を、①遺跡形成年代が 13,000～12,000B.P.に相当する活動痕跡と、②同じく 10,000～9000B.P.との、二枚の文化層の重複とみるのが、後述するシェフコムードの見解である。

筆者との 2001 年の共同調査で検出した３Б層中の７ヵ所の炉跡のうち、３基から採取した炭化物の測定結果が、吉田邦夫によって示された（吉田 2004）。これによると、１号炉跡が 11,340±110B.P.（TKa-13005）、２号炉跡が 3610±60B.P.（TKa-13006）、３号炉跡が 10,550±80B.P.（TKa-13007）との結果である。２号炉跡の数値は信頼性に欠けるものの、これまでは確認されていなかった 11,000B.P.台のデータも現れ、遺跡の存続時間幅を大枠では約 12,000B.P.から 10,000B.P.の間としてとらえる理解の蓋然性が高まった（註１）。ただしこの間に連続して定住していたわけではなく、遊動性の高い移動・居住形態の中で短い滞在を反復していたのであろう。

また第Ⅷ章で述べたように、日本海の対岸である本州島では、ほぼ同程度の時間幅の中で、土器や石器に数段階の細分編年が実施されている。オシポフカ文化として一括されている内部は、潜在的にはより細かな変遷を持っていると考えてよい。しかし調査件数の多寡や土層堆積状況の相違もあり、本州島とオシポフカ文化を直接比較することは難しい。人工遺物の型式編年を考えるだけでなく、遺跡の形成過程を十分に把握しなければならない点にも、困難の要因がある。

（２）遺跡形成過程の問題

1995 年より調査を継続してきたシェフコムードは、ゴンチャルカ１遺跡のオシポフカ文化包含層の形成について以下のモデルを考えている。まず４層から５層上面および氷楔内に落ち込んでいる遺物には、表面の磨耗が特に激しいものが多数含まれることから、遺物群が地表に露出している間・または土中への埋没や堆積の過程の中で大きく移動している可能性がある。これらを最初の占拠時の活動痕跡と考え、遺跡形成の古期とする。一方でより上層の３a 層から３Б層の遺物群は、表面の磨耗が相対的に少なく土器片や尖頭器の集中部があること、大形円礫の人為的な配石、同一平面上で複数の炉跡を検出できることなどから、よりイン・シトゥーに近い。これは下層の遺物群を残した人々よりも一定程度の時間を経た後に、この土地に来訪した別の人々の活動痕跡であり、遺跡形成上の新期とする。この古期と新期の間では、石器・土器の技術的・型式学的特徴や種類、組成の明確な差は認めにくく、人工遺物の型式編年としては分離し難い。また遺物の垂直分布は離散的な２つのピークをもつヴィーナスラインとしては把握できず、２枚の「文化層」との明確な証拠を示すことは出来ない。しかし大まかな傾向では、遺跡形成の新期では石器製作の研磨技術がより発展・安定し、研磨部位の広い石斧・尖頭器・石鏃や、男根状石製品などの呪術具も登場する。土器は器厚・胎土・紋様のバラエティが多様化する。つまり遺物の表面状態を元に遺跡形成を大きく２回のイベントに分け、その間に石器（研磨技術）と土器製作の漸次的な発展・進歩を見るモデルである。

遺物の表面状態に変異が生じる理由を、遺跡形成過程上の差とみなす推論は、筆者も大枠で支持する。先述したように ^{14}C 年代値に概略２つのピークが認められることとも整合的である。しかし細部には異議もある。３Б層にも磨耗した遺物は少なくない。詳細に観察すると各層における磨耗の程度は層間・層内ともに一様ではなく、埋没中の移動の大

きさに２段階以上の違いを想定できると思われる（註２）。また３Ｂ層の主要な部分は原位置をほぼ保つとみなし、動いているのは一部と考える場合でも、それは無視しえるほど少ない部分なのか、そうではないのか、この評価が問題になる。すなわち遺跡形成の多段階モデルの可能性である。

この議論を先に進めるためには、遺物の磨耗の程度を評価し、グリッド毎（平面分布）、層位毎（垂直分布）にカウントして、分布上の傾向を数値的に捉える必要がある。その上で、磨耗程度の傾向、分布偏差の傾向と、石器や土器の製作技術や紋様をチェックすることで有効な検証が可能になろう。今後の課題である。また条件の異なる他の遺跡、具体的には、斜面地ではなく平坦面に立地する遺跡、より小規模な遺遺物表面の磨耗が認められない遺跡の調査で比較資料を得て、純粋なセット関係の一部を把握してゆくことも有効である。

（３）今後の課題

土層堆積が薄く周氷河性構造土の影響も大きい寒冷地域では、複数イベントの活動痕跡の「重ね書き」による遺跡形成、遺物分布パターンの非人為的な変形を考慮する必要がある。また日本列島の土器出現期の考古学資料と比較するには、土器の紋様や製作技法、石器の形態や製作技術などの個別具体的な要素に着目するだけではなく、土器の器形の分化程度や紋様バリエーションの多様度、石材消費の遺跡間連鎖パターンなど、現象からは一歩引いた抽象度を高めたレベルで比較する必要があるのかもしれない。人工遺物の特徴、遺跡の形成プロセス、^{14}C年代といった、由来や性質の異なる資料や情報は、それぞれ長所・短所や意味内容が異なるため、総合的・多角的に考える必要がある。かつて不明瞭であった「大陸」資料の実体が少しずつ解明されつつある今日では、単線的な伝播系統論を脱し、地域間を横断して共通する構造の把握と地域ごとの固有性とを、複眼的に追及する視点が求められよう。本章はそのための不十分な一歩にすぎないが、今後とも調査・整理の継続的な取り組みを予定している。

註

１）極東の森林地帯では自然発火の山火事が多いため、包含層中の炭化物年代の評価は慎重に行う必要があるという。2002年３月の北アジア調査研究報告会（北海道大学）の際に、大貫静夫氏よりご教示いただいた。

２）遺物表面の磨耗状態は、遺物の移動の大きさや地表での露出時間の長さだけではなく、洪水など特殊イベントの有無、石器の石材の種類、土器の焼成の良し悪し等、多様な要因に規定されているのが実体であろう。磨耗程度の違いを全て遺跡形成の時間差に還元できるわけではないが、個別の１点ごとには識別し得ない難しさがある。

終章

本研究の実質的な結論に相当する両面調整石器群の構造は、すでに第Ⅴ章で述べたため、ここでは若干の補足的な議論と、今後の課題の整理をおこなうことで結びとする。

生態学的アプローチについて

先史考古学において、「自然環境の変化に対する人類の適応行動」という枠組みから、更新世終末期を含む更新世・完新世移行期を論じる研究プログラム（あるいはパラダイム）は、決して古いものではない。以前はむしろ新石器革命＝農耕・牧畜（食料生産）の開始が、人類史上の重大事件と意義付けられて研究され、この中で後氷期の環境変化が、食糧生産の開始を導いた理由の一つとして論じられていた。食糧生産の開始を重視する背景には、人類史が野蛮→未開→文明の発展段階を辿るとのマルクス主義史的唯物論の公式（Engels1891[戸塚訳 1965]）がある。第Ⅰ章で検討した日本列島の「縄文文化起源論」も例外ではない。「日本国の歴史」の中で、先土器時代が旧石器時代なのか新石器時代なのか、あるいは「縄文時代」が新石器時代なのか否かをめぐる評価は、この史的唯物論の文脈の中でこそ意味を持っていた。そもそも「旧石器時代」「中石器時代」「新石器時代」といった時代区分は文化史的な由来をもつが、農耕・牧畜の有無など生産諸力を重視する点では、史的唯物論の強い影響化にある。

しかし近年の先史考古学では、過去の人類が作った道具や活動の痕跡だけを研究して、そこに技術革新や生産力の発展を読み取るのではなく、古環境復元研究と密接に連携しながら、地域毎に異なる多様な環境と人類活動との相互作用を研究する、いわゆる生態学的アプローチが隆盛するようになった。史的唯物論が内的に破綻したからというわけではなく、人類活動に起因する地球自然環境の破壊問題に直面している今日では、マルクス思想が捨象した（あるいは19世紀的な時代背景で自然は無限と前提していた）、マルクス理論の外部の領域である「環境と人類の相互関係」が、重要な課題として迫る今日的時代状況と関係すると思われる。生態学的アプローチでも食糧生産の開始や定住化の問題は重視されるが、人類史の発展段階の中への位置付けというのではなく、地域毎に異なる環境への個別の適応結果という側面から理解されることになる（註1）。

時代呼称について

更新世－完新世移行期の環境変化に対する人類の適応という問題の立て方は、この生態学的アプローチの文脈の中で意味を持つ問いである。本研究は更新世終末期の石器資料に限定した内容ではあるが、この生態学的アプローチの流れに属するものである。したがって技術革新や生産力の発展を評価軸とするならば「旧石器時代」「中石器時代」「新石器時代」の3択枝の中から一つ選択して、両面調整石器群をどれかに位置付け評価することは、生態学的アプローチの文脈では意味をもちにくい。第Ⅴ章で述べたように、両面調整石器は石器現象としては古くからあった。このため、狩猟具発展史観や生産力の増加といった史的唯物論の枠組みで両面調整石器を理解するべきではない。石器を作り使う際の基本的な手法として、各時代・各地域で長く作り使われて

きた両面調整石器は、それとしては普遍的な存在ではある。しかし北東アジアの環日本海地域に居住していた人類が、更新世終末期から完新世への気候変動を乗り切る際に両面調整石器を利用したということは、このマクロな地域の、第２の階層における歴史的な固有性として評価することができる。

第Ⅴ章第３節で論じた両面調整石器群の歴史的意義を前提に、第２の階層における文化史的な時代呼称について再考してみたい。文化史的な時代呼称は一国史（国民国家史）の枠組みに強く規定される部分が大きい。大陸部を含めた枠組みの構築が筆者の狙いだが、第二次世界大戦以後の日本国の国際政治的な立場の問題もあり、現状ではなお困難が多い。韓半島や極東ロシアでは土器の出現をもって新石器時代の開始とする傾向にあるが、本研究の立場では新石器時代を完新世適応として評価するため（註 2）、いまだ完新世の安定した温暖化が開始していない更新世終末期の人類活動を、新石器時代の概念に含むことはできない。また「中石器時代」は、ヨーロッパの完新世適応のうち農耕・牧畜を伴わない適応型を含意する用語である。しかし北東アジアの両面調整石器群では、逆に完新世以前の人類活動の中に、土器や磨製石斧といったヨーロッパで言う新石器的要素が含まれることになる。したがって北東アジアの両面調整石器群にこれを用いると、大きな誤解を招く。そこで現状で次善なのは、完新世適応とは対照的な、あくまでも更新世の現象であることを適切に示す「晩期旧石器時代」（芹沢 1967a）であると考える。

歯切れの悪い議論に終始したように、文化史的な区分と生態学的アプローチとの整合をはかる作業は、現状では困難である。しかし将来的には、生態学的アプローチが主導する方向で整理される可能性が高いと思われる。ただしこの傾向が進みすぎると、人類固有のレベルで作動する現象が捨象され、生物レベルの現象に回収されるおそれがある。また個別地域への適応という視点が強化されることは広域的な理解を排除し、政治的には狭いナショナリズムやリージョナリズムを助長するおそれもある。こういった可能性を回避するために、何らかの議論の前提をさらに工夫しなければならない。

今後の課題

最後に今後の課題を以下に記す。①両面調整石器群の構造が広がる時間・空間範囲の、マクロな階層での限定した把握。時間範囲の上限は本州島の相模野台地 Ｌ２層や、北海道島の蘭越石器群に現れている両面調整石器リダクションを一つの目安とすると、約 20,000B.P.の前後を想定しているが、断定には至らない。時間範囲の下限は、本州島で縄文的な器種組成が確立する時点を目安とするならば、約 9000B.P.前後と考えられる。やはり不確定な部分が大きく、今後さらに検討を深めなければならない。ミクロな階層のレベルでは、後述するように個別地域ごとに異なっている可能性がある。空間範囲については、後期旧石器の初頭からすでに両面調整石器や細石刃が出現する可能性が高い中央シベリアや、個別構造が通時的に卓越する可能性のある華南以南との間に境界を設定できる可能性を想定しているが、詳細は確定していない。第Ⅷ章と第Ⅸ章で、アムール下流地域を対象に探求を開始したことを報告したように、当面は大陸の極東沿岸部（沿海州およびアムール流域）や島嶼部（韓半島、北海道島、サハリン島）において、どこまで両面

調整石器群構造の共有を確認できるかを追求したい。

②マクロな階層での構造の出現（等価構造から入れ子構造への遷移）や、消滅（入れ子構造から個別構造への遷移）の理由と背景について、具体的な古環境復元資料を踏まえた説明。かつて各種のデータが相対的に少ない研究状況の中では、人工遺物の研究だけから歴史を叙述することが可能であると錯視でき、歴史的意義も論じられてきたが、今日的には人工遺物研究のみからの歴史復元は、無謀な試みと言える。構造の出現の理由については、第Ⅴ章で見通しとして、本州島では植生景観の変化による遊動範囲の縮小を述べた。これと第Ⅳ章第１節で論じた「限られた機会に石材を大量獲得する事情」との関連も、想定できるかもしれない。しかし先述の時間範囲の上限は、グリーンランドの$\delta^{18}O$の気温変化曲線で温暖化が開始する約 15,000cal.B.P.（第Ⅰ章**図 1.4.1** 参照）とのズレが大きい。また気温の変化が植生へ与える影響函数が未知なこと、気温変化自体の地域性の問題など不確定要素が大きく、森林景観の増加と遊動領域の縮小という対応関係を、厳密に論証することは現状ではまだむずかしい。グローバルな気温変化曲線に個別遺跡の ^{14}C測定値を対比するだけではなく、特定地域において複数の花粉サンプルや、遺跡外でも埋没泥炭層からの植物遺存体などを総合した具体的な古環境復元を行い、その地域の中での複数遺跡の連鎖関係と比較していかなければならない。

消滅の背景を論ずるには「縄文早期」の石器リダクション構造と移動・居住形態の関連を追求する必要がある。早期の石器製作はすでに「個別構造」に推移している可能性が高いが、北海道島南部など大規模な定住集落が出現する地域がある一方で、南関東など遊動性が逆に高まる地域もある。構築的遺構の規模や量など定住化程度を示す指標と、石器リダクション構造・遺跡群形成構造を関連させた研究が課題となろう。

③構造の内部での変異が、時間軸上に変遷する過程の具体的な把握。本研究では、両面調整石器群の中に第Ⅰ期から第Ⅳ期の細分を認めた上で議論をおこなったが、これらの変遷について十分に論ずることはできなかった。

④ミクロな階層（第Ⅴ章で述べた第３の階層）における各個別小地域（おそらく実際の遊動範囲や日常的生活圏に相当する）の内部での具体的な行動復元と、その変遷の解明。本研究の第Ⅵ章と第Ⅶ章で実践したような各地・各自期の事例研究をより多く展開する必要がある。①の時空間範囲の把握や、②の古環境をふまえた構造の変化理由の説明についても、見通しを得る具体的な手掛かりになる可能性がある。

註

1）生態学的アプローチも、一種の唯物論である。人類も生物の一員であり物質を代謝して生存している以上、また考古学の資料が物質（人工遺物など）である以上、純粋に観念論的な手法で先史考古学を研究する立場はあり得ない。マルクス的な史的唯物論と生態学的アプローチが大きく異なるのは、「発展」と「法則」を前提としない点にあり、これらに替わる重要な概念は「適応」と「構造」である。

2）完新世適応の具体相は、小地域毎の個別生態系に応じて異なろう。農耕・牧畜など生業による基準や、磨製

石器・土器など人工遺物の要素的特徴で「旧石器時代」と「新石器時代」を分ける議論は、全域的には成立し得ない。局所的には成立するが、小地域ごとに定義が異なるなら同じ用語を用いるべきではない。とはいえヨーロッパの基準を全世界に当てはめたり、逆に個別地域論に埋没して全域的な定義を退けたりといった思考も、同じく不毛と考える。最大公約数的な部分には共通の用語を用いたい。人間活動の変化の最大公約数的な部分とは、あえて言えば完新世適応であろう。旧石器時代・新石器時代の区分と用語は、更新世から完新世への移行に大きな気候変動をともなった中～高緯度地域では残したい。そこで暫定的に、旧石器時代を「更新世に適応した石器時代」、新石器時代を「完新世に適応した石器時代」と再定義する。人工遺物の特徴に基づいて時代を区分するべきとの立場からの批判は予想されるが、人工遺物の特徴は各地ごとに異なるであろうので、全域的な定義には適さない。

謝辞

本研究をなすにあたり、小野　昭先生、山田昌久先生、加藤博文先生から懇切で適切なご指導を賜った。

筑波大学考古学研究室に学んだ当時の西田正規先生、西野　元先生、常木　晃先生、前田　潮先生、秋山圭子、有村　誠、内山幸子、川口武彦、高畠貴宗、谷口陽子、福田正宏、桃崎裕輔、山本　薫の各氏、東京都立大学考古学研究室に学んだ当時の澤田秀実先生、高瀬克範先生、岡澤祥子、小野哲也、工藤雄一郎、近藤さおり、榊　剛史、佐野勝宏、橋詰　潤、松本　茂、三山らさ、向山めぐみ、山岡拓也の各氏、(財) かながわ考古学財団で遺跡調査の実務を積んだ当時の井関文明、栗原伸好、砂田佳弘、多田敦子、畠中俊明、村木　敬、森　一欽、若杉直哉の各氏、北海道大学北方文化論講座の木山克彦、赤井文人、鈴木健二の各氏とのそれぞれ日常的な議論の中で、自らの思考を形成することができた。

また各地の資料見学や調査、研究会席上などで、出穂雅実、梅川勝史、大貫静夫、大沼克彦、小熊博史、小畑弘己、折茂克哉、笠井洋介、梶原　洋、加藤　学、亀田直美、鴨志田篤司、北村亮、木村英明、小林清隆、澤田　敦、鈴木俊成、鈴木宏之、鈴木素行、佐藤雅一、佐藤宏之、白石浩之、菅沼　亘、諏訪間　潤、立木宏明、堤　隆、富永　弘、直江康雄、長崎潤一、中沢祐一、仲田大人、長沼　孝、新田浩三、橋本勝雄、細野高伯、前原　豊、松本　拓、三瓶裕司、御堂島正、村上　昇、山本　克、吉田政行、A.クズネツォフ、I.シェフコムード、V.ジャーコフ、Y.クズミン、Z.ラプシナの諸先生から、多大なご教示やさまざまな便宜を頂いた。むろん本研究の内容について、以上の方々に責任があるわけではない。

なお本研究の一部には、(財) 高梨学術奨励基金による平成 13 年度研究助成、および平成 15 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果を含む。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

参考文献

①論文等（和文）

阿子島香 1989『石器の使用痕』ニューサイエンス社。

阿子島香 1991「民族考古学と旧石器研究」『北からの視点』日本考古学協会 1991 年度仙台宮城大会実行委員会、63－75 頁。

阿子島香 1995「ドゥフォール岩陰の彼方に－石器群の空間分布と人間活動－」『歴史』第 84 輯、1－29 頁。

阿子島香 1998「アジアから北米大陸への人類の拡散と適応」『科学』第 68 巻第 4 号、305－313 頁。

麻生優・岡本東三・加藤晋平・永峯光一・林謙作・小林達雄 1980「(座談会)縄文土器の起源」『國學院雑誌』第 81 巻第 1 号、19－63 頁。

雨宮瑞生 1993「研究展望・縄文時代の定住生活の出現およびに定住社会に関する史的諸問題」『古文化談叢』第 29 集、1－19 頁。

阿部朝衛 1999「第 1 章旧石器時代　第 3 節環境と遺跡　第 3 項石材」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編、高志書院、49－52 頁。

安斎正人 1990『無文字社会の考古学』六興出版。

安斎正人 1994「縄紋文化の発現－日本旧石器時代構造変動論（3）－」『先史考古学論集』第 3 集、43－82 頁。

安斎正人 1999「狩猟採集民の象徴的空間－神子柴遺跡とその石器群」『長野県考古学会誌』89、1－20 頁。

安斎正人 2001「長野県神子柴遺跡の象徴性－方法としての景観考古学と象徴考古学－」『先史考古学論集』第 10 集、51－72 頁。

安斎正人 2002「神子柴・長者久保文化」の大陸渡来説批判－伝播系統論から形成過程論へ－」『物質文化』No.72、1－20 頁。

安蒜政雄 1977「遺跡の中の遺物」『季刊どるめん』第 15 号、50－62 頁。

安蒜政雄 1991「黒耀石原産地の遺跡群の性格」『長野県小県郡長門町鷹山遺跡群Ⅱ』鷹山遺跡群調査団、118－126 頁。

安蒜政雄 1992「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」『駿台史学』86、101－128 頁。

伊藤恒彦 1987「（6）個体別資料の分布とブロック間の共有関係」「（7）本文化層の位置付けと問題点」『中村遺跡－都市計画道路町田南大野線埋蔵文化財発掘調査報告書－』中村遺跡発掘調査団、75－97 頁。

伊藤恒彦 1988「相模野台地の 2 種類の尖頭器石器群」『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会、93－113 頁。

石坂圭介 1983「縄文文化発展論序説」『國學院雑誌』第 84 巻第 6 号、75－84 頁。

泉　拓良 1999「新たな縄文観の創造に向けて」『季刊　考古学』第 69 号、雄山閣、14－17 頁。

稲田孝司 1969「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』第 15 巻第 3 号、3－18 頁。

稲田孝司 1982「旧石器時代」『日本の美術』1、No.188、至文堂、65－117 頁。

稲田孝司 1986「縄文文化の形成」『岩波講座日本考古学　6 変化と画期』岩波書店、65－117 頁。

稲田孝司 1993「細石刃文化と神子柴文化の接点－縄文時代初頭の集団と分業・予察－」『考古学研究』第 40 巻第 2 号、21－46 頁。

稲田孝司 1996「恩原に居住した旧石器時代の回帰遊動集団と植民集団」稲田孝司編『恩原 2 遺跡』岡山大学文学部考古学研究室、182－231 頁。

岩宿フォーラム実行委員会 1998『北関東の槍先形尖頭器文化』岩宿フォーラム実行委員会。

臼杵　勲 1996「ロシア極東の中世考古学における『文化』」『考古学雑渉　西野元先生退官記念論文集』：西野元先生退官記念会、286－296 頁

氏家敏之・島田和高 1991「Ⅲ章　鷹山Ⅰ遺跡Ｓ地点における石器製作技術」戸沢充則・安蒜政雄編『鷹山遺跡群Ⅱ』長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団、56－101 頁。

宇田川浩一 1995「尖頭器リダクションと石器生産技術の地域性」『法政考古学』第 21 集、41－59 頁。

江坂輝彌 1943「稲荷台系文化の研究－東京市赤堤町新井　新井遺跡調査報告」『古代文化』13－8 頁。

江坂輝彌 1944「廻転押捺文土器の研究」『人類学雑誌』第 59 巻第 8 号、297－301

大井晴男 1989「日本先土器時代研究のパースペクティヴーそれへの時評的な展望ー」『神奈川考古』第 25 号、1－26 頁。
大塚和義 1968a「本州地方における涌別技法に関する一考察」『信濃』第 20 巻第 4 号、1－10 頁。
大塚和義 1968b「縄文草創期に関する問題点」『古代文化』20－8・9号、京都、165－170 頁。
大塚達朗 1999「型式研究　総論」『縄文時代文化研究の 100 年　縄文時代』第 10 号、3－12 頁。
大貫静夫 1999「東北アジア先史社会の変容と極東の成立ー旧石器時代から新石器時代へー」『シンポジウム海峡と北の考古学ー文化の接点を探るー資料集 1・テーマ 1：旧石器から縄文へ』日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会、3－22 頁。
大沼克彦 2002『文化としての石器づくり』学生社。
大場正善 2003「東北地方南部の細石刃文化」『シンポジウム日本の細石刃文化Ⅰ－日本列島における細石刃文化ー』、八ヶ岳旧石器研究グループ、72－98 頁。
大山　柏 1940「再生器具」『史前學雑誌』第 12 巻第 2 号、47－75 頁。
岡　修司・山本　克・阿部昭典 1998「周辺の石材環境」『同尻遺跡群試掘調査報告書』新潟県津南町教育委員会、76－78 頁。
岡村道雄 1979「旧石器時代遺跡の基礎的理解についてー遺棄と廃棄ー」『考古学ジャーナル』167、10－12 頁。
岡本明郎 1962「日本における土器出現の自然的・社会的背景について」『考古学研究』第 8 巻第 4 号、10－16 頁。
岡本東三 1979「神子柴・長者久保文化について」『研究論集Ⅴ　奈良国立文化財研究所学報』第 35 冊、奈良国立文化財研究所、3－57 頁。
岡本東三 1986a「先土器時代から縄紋時代へ」『考古学研究』第 33 巻第 1 号、82－89 頁。
岡本東三 1986b「第 29 回例会発表要旨　縄紋土器の起源」『考古学雑誌』第 71 巻第 2 号、94－95 頁。
岡本東三 1993「縄紋文化移行期石器群の諸問題」小野昭・鈴木俊成編『環日本海地域の土器出現期の様相　1993 年度日本考古学協会シンポジウム』雄山閣、59－75 頁。
岡本東三 1999「神子柴文化をめぐる 40 年の軌跡ー移行期をめぐるカオスー」『先史考古学研究』第 7 号、1－22 頁。
小田静夫 1971「台形石器について」『物質文化』No.18、1－13 頁。
小野　昭 1986「石器の生産」『岩波講座日本考古学 生産と流通』岩波書店、141－166 頁。
小野　昭 1988「遺跡分布からみた後期旧石器時代の社会ーナイフ形石器群を例とした分布の現象と実体ー」『第四紀研究』第 26 巻第 3 号、305－315 頁。
小野　昭 1996「黒曜石の近距離・遠距離移動の接点」『和田村の黒曜石をめぐる課題ー原産地遺跡分布調査を終えて』和田村教育委員会、52－55 頁。
小野　昭 1998「新たな人類史のはじまり」『科学』第 68 巻第 4 号　岩波書店、285－293 頁。
小野　昭 2000「環境と人類ー相互作用論と適応の構造ー」『野辺山シンポジウム 2000　人類の適応行動と認知構造』、八ヶ岳旧石器研究グループ、25－27 頁。
小野　昭 2001『打製骨器論ー旧石器時代の探求ー』東京大学出版会。
小野　昭 2003「コラム 7．1－1　型式の系列と外挿法」町田　洋ほか『第四紀学』、朝倉書店、p274.
小畑弘己 2000「ジュクタイ文化・セレムジャ文化再考ー植刃槍と両面加工石槍ー」『九州旧石器』第 4 号、249－278 頁。
小畑弘己 2001「Ⅲ．極東地域の移行期」『シベリア先史考古学』、382－398 頁。
小畑弘己 2002「第 2 章　極東地域における移行期の諸問題」『東シベリア・極東における完新世適応システムの研究』、63－80 頁。
小畑弘己 2003「シベリア・沿海州」『季刊考古学』第 83 号、雄山閣、80－84 頁。
織笠　昭 1979「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学』第 47 号、81－98 頁。
織笠　昭 1984「石器形態の復元」『東京考古』2、1－12 頁。
織笠　昭 1987「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』13、44－73 頁。
織笠　昭 1991「石器文化研究会の歩みと石器文化研究の視点」『石器文化研究 3 シンポジウムＡＴ降灰以前の石器文化ー関東地方における変遷と列島内対比ー』石器文化研究会、1－6 頁。

織笠　昭 1992「弥三郎第２遺跡　縄文時代草創期」『土気南遺跡群Ⅱ』（財）千葉市文化財調査協会、7－237頁。
角張淳一 1994「後期旧石器時代後半期の黒曜石原産地と南関東に出土する尖頭器の評価」『中部高地の考古学』Ⅳ、長野県考古学会、35－44頁。
梶原　洋 1991「石器群形成に及ぼす石材環境の意義」『北からの視点　日本考古学協会 1991 年度宮城大会シンポジウム資料集』、51－62頁。
梶原　洋 1998a「なぜ人類は土器を使いはじめたのか－東北アジアの土器の起源」『科学』第68巻第４号、296－304頁。
梶原　洋 1998b「シベリア・極東の更新世・完新世移行期と土器の起源」『シンポジウム：更新世－完新世移行期の比較考古学　発表要旨』、23－31頁。
加藤晋平 1970「先土器時代の歴史性と地域性」『郷土史研究講座Ⅰ　考古学と地域性』朝倉書店、58－92頁。
加藤晋平 1980「東アジアにおける狩漁撈社会の発達－とくにソ連邦極東・沿海州について－」『東アジア世界における日本古代史講座　１原始日本文明の系譜』、學生社、18－47頁。
加藤晋平・松本美枝子 1984「日本細石刃文化の源流」『史艸』第25号、39－82頁。
加藤博文 1993「東シベリア後期旧石器時代の骨角製槍先について」『古代文化』第45巻第７号、11－26頁。
加藤博文 1996a「モービル・トゥールとしての両面調整石器－縄文化にむかう技術組織の変動－」『考古学雑渉　西野元先生退官記念論文集』、西野元先生退官記念会、26－44頁。
加藤博文 1996ｂ「細石刃石器群における生業活動の検討－シベリアからの視点－」（上）（下）『古代文化』第48巻第３号、28－36頁、第48巻第４号、19－28頁。
加藤博文 1997「技術体系とその多様性の解釈：細石刃石器群の事例にて」『筑波大学先史学・考古学研究』第８号、１－29頁。
加藤博文 1998「アムール川下流域の新石器文化－その編年案と内包する諸問題－」『北東アジアにおける新石器文化の変遷と多様性の研究』筑波大学大学院地域研究研究科、22－35頁。
加藤博文 2000「アムール下流域における新石器文化研究の近年の動向」『古代文化』第52巻第９号、49－55頁。
加藤博文・赤井文人 2003「ハバロフスク州オシノバヤ・レチカ 10 遺跡調査報告」『第４回北アジア調査研究報告会』、11－14頁。
加藤博文・I.Ya.Shevkomud・山田昌久・川口武彦・長沼正樹 2003「アムール下流ゴールィ・ムィス４遺跡における上部旧石器石器群の調査」『北海道旧石器文化研究』第８号、1－7頁。
加藤　稔 1975「越中山遺跡〔東田川郡朝日村〕」『日本の旧石器文化２　遺跡と遺物（上）』、雄山閣、112－137頁。
加藤　稔 1992『東北日本の旧石器文化』雄山閣。
加藤　稔・酒井忠一・宇野修平・佐藤禎宏・長沢正機・海野丈芳 1982「最上川・荒川流域の細石刃文化」『最上川　総合学術調査報告』山形県総合学術調査会、768－819頁。
可児通宏 1992「復元されたシベリアの縄文施文の土器」『季刊考古学』38，66－67頁。
鎌木義昌 1965「Ⅰ縄文文化の概観」鎌木義昌編『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』河出書房、１－28頁。
鎌木義昌 1966「縄文式土器・縄文文化の起源について」『岡山理科大学研究紀要』第２号、87－97頁。
鎌木義昌 1975「旧石器時代論」『岩波講座　日本歴史１　原始および古代１』、岩波書店、36－74頁。
鎌木義昌・芹沢長介 1965「長崎県福井岩陰－第１次発掘調査の概要－」『考古学集刊』第３巻第１号、１－14頁。
川口　潤 1989「樋状剥離を有する尖頭器の再検討」『旧石器考古学』36、29－54頁。
河村善也 2000「日本の旧石器時代動物群について」『日本列島の旧石器動物群をめぐる諸問題　資料集』日本第四紀学会、４－10頁。
北川浩之 1994「C14 年代が正確な年代に直結した」『科学朝日』11、33－34頁。
北川浩之 2003「荒屋遺跡第２・３次発掘調査で採集されたチャコール試料の加速器質量分析法による炭素 14 年代測定結果」芹沢長介ほか編『荒屋遺跡』川口町教育委員会、55－56頁。
絹川一徳 1996「M文化層の石器組成と石器装備の維持・補給について」稲田孝司編『恩原２遺跡』岡山大学文学部考古学研究室、145－154頁。
木村英明 1990「北日本の細石刃技術」『十勝考古学とともに』、十勝考古学研究所、１－８頁。

木村英明 1995「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学の諸問題－北海道考古学』第31輯，3－64頁。
清野謙次 1985『日本原人の研究』第一書房（初出：1923年、萩原星文館）。
工藤雄一郎 2002「遺物の分布と遺跡の形成」小野昭編『真人原遺跡III』東京都立大学考古学研究室、90－98頁。
工藤雄一郎 2003a「更新世終末期から完新世移行期における考古学研究の諸問題－環境変遷史と考古学的時間軸の対応関係－」『古代文化』第55巻第6号、15－27頁。
工藤雄一郎 2003b「細石刃石器群の年代に関する諸問題」『シンポジウム　日本の細石刃文化　II－細石刃文化研究の諸問題－』八ヶ岳旧石器研究グループ、193－209頁。
国武貞克 2002「旧石器時代の領域分析－特定共時における‘戦略束’－」東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室　紀要』第17号、1－68頁。
国武貞克 2003「両面体調整石器群の由来－関東地方V層・IV層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性－」『考古学』I、安斎正人編、52－77頁。
栗島義明 1984「有茎尖頭器の型式変遷とその伝播」『駿台史学』62、50－82頁。
栗島義明 1985「草創期土器型式変遷における一考察－隆起線文から爪形文へ－」『信濃』第37巻第4号、87－109頁。
栗島義明 1986a「『渡来石器』考－本ノ木論争をめぐる諸問題－」『旧石器考古学』32、11－31頁。
栗島義明 1986b「槍先形尖頭器石器群の研究序説－中部日本における地域的様相の把握－」『考古学研究』第32巻第4号、10－41頁。
栗島義明 1988a「神子柴文化をめぐる諸問題－先土器・縄文の画期をめぐる問題（一）－」『財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第4号、1－92頁。
栗島義明 1988b「隆起線文土器以前－神子柴文化と隆起線文土器文化の間－」『考古学研究』第35巻第3号、69－79頁。
栗島義明 1990「デポの意義－縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖－」『財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第7号、1－44頁。
栗島義明 1991「北からの新石器革命」『考古学ジャーナル』341、ニューサイエンス社、8－13頁。
栗島義明 1993「湧別技法の波及－削片系と在地系の細石刃核について－」『土曜考古』17号、1－37頁。
栗島義明 1993「細石刃文化と石材環境」『細石刃文化研究の新たなる展開』II八ヶ岳旧石器研究グループ、185 －191頁。
栗島義明 1999「神子柴文化の系統問題－ニーナ論文に寄せて－」『土曜考古』第23号、157－170頁。
剣持みどり 1979「角二山細石刃石器群の構造」『山形考古』第3巻第2号、9－25頁。
小坂井敏晶 2002『民族という虚構』、東京大学出版会。
小菅将夫 1991「鷹山遺跡群における黒曜石製石器の生産とその背景」戸沢・安蒜編『鷹山遺跡群II』長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団、102－108頁。
小林巌雄・立石雅昭・安井　賢・風間　修・黒川勝己・油井　裕・渡辺其久男 1986「新潟積成盆地における西山・灰爪累層、魚沼層群の層序と古環境」『地質学雑誌』第92巻第5号、375－390頁。
小林達雄 1962「無土器文化から縄文文化の確立まで」『創立80周年記念若木祭展示目録』國學院大學考古学会、6－12頁。
小林達雄 1967「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」『信濃』第19巻第4号、25－32頁。
小林達雄 1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16、1－10頁。
小林達雄 1974「縄文土器の起源」『考古学ジャーナル』100、ニューサイエンス社、26－30頁。
小林達雄 1975a「タイポロジー」『日本の旧石器文化　1総論編』、雄山閣、48－63頁
小林達雄 1975b「層位論」『日本の旧石器文化　1総論編』、雄山閣、114－136頁
小林達雄 1977「1　縄文時代の成立」『日本原始美術体系　1縄文土器』、講談社、155頁。
小林達雄 1979「縄文土器の登場」『日本の原始美術　①縄文土器I』講談社、46－47頁
小林達雄 1982「総論」『縄文文化の研究　3縄文土器I』雄山閣、3－15頁。
小林達雄 1987「日本列島における土器の登場－はじめにイメージありき－」『國學院大學考古学資料館紀要』第3輯、國學院大學考古学資料館、3－23頁。
小林達雄 1989「縄文土器の編年」『縄文土器大観1草創期　早期　前期』小学館、248－255頁。

小林達雄 1993「シンポジウム・討論：環日本海における土器出現期の様相－まとめ－」小野昭・鈴木俊成編『環日本海地域の土器出現期の様相　1993年度日本考古学協会シンポジウム』雄山閣、217－223頁。
近藤義郎 1965「後氷期における技術的革新の評価について」『考古学研究』第12巻第2号、10－15頁。
シェフコムード,I.Y.・長沼正樹・村上　昇 2004「ノヴォトロイツコエ10遺跡2003年発掘調査」『第5回　北アジア調査研究報告会』、38－39頁。
榊　剛史 1998「変形論の意義と適用範囲」『旧石器考古学』56、61－67頁。
榊　剛史 2000a「樋状剥離尖頭器の変形－大平山元遺跡の樋状剥離尖頭器－」『旧石器考古学』59、1－17頁。
榊　剛史 2000b「両面調整尖頭器の変遷観－相模野台地における検討－」『専修考古学』第8号、25－50頁。
佐川正敏 1998「中国の更新世－完新世移行期の考古学的発見」小野　昭編『シンポジウム：更新世－完新世移行期の比較考古学　発表要旨』、国立歴史民族博物館　春成研究室、32－34頁。
桜井準也 1993「細石刃文化遺跡と河川次数－内水面漁撈を考える－」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開　II細石刃文化研究の諸問題』、佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ、252－266頁。
桜井準也 1996「相模野地域における縄文時代草創期遺跡のあり方－隆線文期の評価をめぐって－」『考古論叢神奈河』第5集、1－20頁。
桜井美枝 1991「細石刃石器群の技術構造－山形県角二山遺跡の分析」『加藤稔先生還暦記念　東北文化論のための先史学歴史学論集』、441－462頁。
佐々木高明 1991「縄文時代の時代区分」『日本の歴史①　日本史誕生』集英社、102－107頁。
佐藤達夫 1971「無土器文化の石器」日本歴史学会編『日本考古学の現状と課題』、吉川弘文館、25－41頁。
佐藤宏之 1991「『尖頭器文化』概念の操作的有効性に関する問題点」『長野県考古学会研究叢書』第1号、124－134頁。
佐藤宏之 1992a「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説－関東地方を中心に－」『法政大学大学院紀要』第29号、55－83頁。
佐藤宏之 1992b『日本旧石器文化の進化と構造』柏書房。
佐藤宏之 1995「技術的組織・変形論・石材受給－下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察－」『考古学研究』第42巻第1号、27－53頁。
佐藤雅一 1999「遺跡間接合の意義について－津南町・下モ原I遺跡と居尻A遺跡の石器接合事例を中心として－」『新潟県考古学会第11回大会研究発表会発表要旨』、12－15頁。
佐藤雅一 2001「V新潟県における縄文時代草創期の遺跡と遺物　2．信濃川上流域の遺跡と遺物の様相」『重要文化財考古資料展－火炎土器と小瀬ヶ沢・室谷洞窟出土品－』長岡市立科学博物館、113－126頁。
佐藤雅一 2002「新潟県津南段丘における石器群研究の現状と展望－後期旧石器時代から縄文時代草創期に残された活動痕跡－」『先史考古学論集』第11集、1－51頁。
佐藤雅一・星野洋治・石坂圭介・岡　修司 1993「信濃川水系における縄文時代草創期遺跡の様相」『環日本海における土器出現期の様相』、雄山閣、175－199頁。
佐藤雅一・山本　克・織田拓男・安部英二 1999「津南町における旧石器時代の石器群」『第12回　東北日本の旧石器文化を語る会　発表要旨集』、18－38頁。
佐野勝宏 2002「北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態」『考古学研究』第49巻第1号、38－58頁。
佐野勝宏 2003「北方系細石刃石器群の移動形態」『シンポジウム　日本の細石刃文化　II－細石刃文化研究の諸問題－』八ヶ岳旧石器研究グループ、122－131頁。
沢田　敦 1996「2縄文時代草創期の石器について」『磐越自動車道関係発掘調査報告書　上ノ平遺跡C地点』新潟県教育委員会、106－109頁。
白石典之 1993「北東アジアの細石刃石器群－技術より見た時間・空間的変遷とその背景－」『筑波大学先史学・考古学研究』第4号、1－27頁。
白石典之 1995「中央日本における細石刃石器群の展開」『群馬考古学手帳』5、1－28頁。
白石浩之 1973「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論－特に関東・中部地方を中心として－」『物質文化』No.21、41－55頁。

白石浩之 1976「旧石器終末から縄文時代草創期の尖頭器について（上）（下）」『考古学ジャーナル』126、ニューサイエンス社、5－12頁、同127、7－13頁。
白石浩之 1982「縄文時代草創期の石鏃について」『考古学研究』第28巻第4号、104－129頁。
白石浩之 1988a「縄文文化の起源をめぐる問題－有舌尖頭器からの一提言－」『神奈川考古』第24号、65－80頁。
白石浩之 1988b「縄文文化の起源をもとめて－神奈川県大和市月見野遺跡群上野遺跡第1地点出土の遺物から－」『大和のあけぼのII』大和市教育委員会、27－44頁。
白石浩之 1989『旧石器時代の石槍－狩猟具の進歩－』東京大学出版会。
白石浩之 1990「本ノ木遺跡の意味するもの－縄文時代草創期研究の視点－」『神奈川考古』第26号、1－26頁。
白石浩之 1992「旧石器時代終末から縄文時代初頭の石斧の研究」『加藤稔先生還暦記念　東北文化論のための先史学歴史学論集』、加藤稔先生還暦記念会、463－491頁。
白石浩之 1997「石槍の分布とその様相－樋状剥離尖頭器からみた集団の動き－」『人間・遺跡・遺物』3、　発掘者談話会、27－47頁。
白石浩之 2001a「日本列島の完新世・更新世移行期の考古学研究」『愛知学院大学人文学部研究紀要』第30号、55－62頁。
白石浩之 2001b『石槍の研究－旧石器時代から縄文時代初頭期にかけて－』ミュゼ。
白石浩之・荒井幹夫 1976「茂呂系ナイフ形石器を主体とした石器群の変遷」『考古学研究』第23巻第2号、9－24頁。
白崎高保 1941「東京都稲荷台先史遺蹟」『古代文化』第12巻第8号、10－21頁。
島田和高 1994「両面調整槍先形尖頭器の製作と原料消費の構成－槍先形尖頭器石器群における原料消費と遺跡の連関に関する一考察－」『旧石器考古学』49、29－44頁。
島田和高 1999「槍先形尖頭器の製作と黒耀石原産地」『第7回岩宿フォーラム／シンポジウム岩宿発掘50年の成果と今後の展望予稿集』笠懸村教育委員会、岩宿フォーラム実行委員会、62－69頁。
島立　桂 1988「『本ノ木論争』とその周辺」『旧石器考古学』37、45－58頁。
新東昇一 1997「南九州の縄文文化の伝搬経路についての諸問題」『考古学ジャーナル』No.424、4－8頁。
杉原荘介 1950「考古学界最近の動向　2岩宿の旧石器」『科学朝日』10巻7号、グラビア頁。
杉原荘介 1953「日本における石器文化の階梯について」『考古学雑誌』第39巻第2号、21－25頁。
杉原荘介 1962「神奈川県夏島貝塚出土遺物の放射性炭素による年代決定」『駿台史学』第12号、119－122頁。
杉原荘介 1963「会報」『考古学集刊』第2巻第1号、巻末頁。
杉原荘介 1965「日本の先土器時代」『日本の考古学　I先土器時代』、河出書房新社、1－24頁。
杉原荘介 1967「日本先土器時代の新編年に関する試案」『信濃』第19巻第4号、1－4頁。
鈴木　暁 1997「1）接合資料1・1'」『真人原遺跡II』真人原遺跡発掘調査団・東京都立大学考古学研究室、49－56頁。
鈴木公雄 1984「日本の新石器時代」歴史学研究会・日本史研究会編『講座　日本歴史I原始・古代1』、東京大学出版会、75－116頁。
鈴木次郎 1989「相模野台地における槍先形尖頭器石器群」『神奈川考古』第25号、27－55頁。
鈴木保彦 1974「本州地方を中心とした先土器時代終末から縄文草創期における石器群の様相」『物質文化』No.23、1－15頁。
砂田佳弘 1999「4. 相模野細石器の暦年補正年代」『吉岡遺跡群IX　考察編・自然科学分析編』（財）かながわ考古学財団、25－30頁。
諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について－層位的出土例の検討による石器群の段階的把握－」『神奈川考古』第24号、1－30頁。
関口博幸 1992「槍先形尖頭器の変容過程－相模野台地における槍先形尖頭器の製作と廃棄プロセス－」『（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』10、1－26頁。
芹澤長介 1947「南関東に於ける早期縄紋式文化研究の展望」『あんとろぽす』第2巻　第4號、13－17頁。
芹沢長介 1954「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」『駿台史学』第4号、65－106頁。

芹沢長介 1956「日本に於ける無土器文化」『人類学雑誌』64－3、31－43頁。
芹沢長介 1957「日本に於ける無土器文化の起源と終末についての覚書」『私たちの考古学』13、4－13頁。
芹沢長介 1959「日本最古の文化と縄文土器の起源」『科学』第29巻第8号、岩波書店、22－26頁。
芹沢長介 1960『石器時代の日本』、築地書館。
芹沢長介 1961「日本における細石器文化」『歴史教育』第9巻第3号、日本書院、10－16頁。
芹沢長介 1962「縄文土器の起源」『自然』第17巻第11号、中央公論社、28－35頁。
芹沢長介 1962「旧石器時代の諸問題」家永三郎ほか編『岩波講座　日本歴史　1原始および古代1』、岩波書店、77－107頁。
芹沢長介 1965「縄文文化の研究をめぐる諸問題－周辺文化との関係－」鎌木義昌編『日本の考古学　II縄文時代』、河出書房、418－442頁。
芹沢長介 1966「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』第2集、東北大学日本文化研究所、1－67頁。
芹沢長介 1967a「旧石器時代の終末と土器の発生」『信濃』第19巻第4号、5－12頁。（4月）
芹沢長介 1967b「日本の旧石器（7）」『考古学ジャーナル』11、ニューサイエンス社、10－11頁。
芹沢長介 1972「縄文土器の起源」『サイエンス』第2巻第5号、日本経済新聞社、19－35頁。
芹沢長介 1987「土器の発現と縄文人の生活」『世界考古学体系　日本編　補遺』天山舎、28－37頁。
芹沢長介・中山淳子 1957「新潟県津南町本ノ木遺跡発掘調査略報」『越佐研究』第12号、1－19頁。
髙倉　純 1998「北海道における石刃鏃石器群の研究－移動・居住形態の検討を中心に－」『考古学研究』第44巻第4号、55－78頁。
髙倉　純 1999「遺跡間変異と移動・居住形態復元の諸問題－北西ヨーロッパと日本における研究動向－」『日本考古学』第7号、75－93頁。
髙倉　純 2000「北海道北見市吉井沢遺跡B地点出土細石刃石器群の再検討－忍路子型細石刃核を組成する石器群の石器製作工程と石器製作作業の復元－」『北海道旧石器文化研究』第5号、1－34頁。
髙倉　純 2004「2003年の歴史学界－回顧と展望－日本　考古　一」『史学雑誌』第113編第5号、10－15頁。
高浜信行・大塚富男・卜部厚志・信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ 2002「真人原遺跡にみられる古地震痕」小野昭編『真人原遺跡III』東京都立大学考古学研究室、128－134頁。
滝沢　浩 1964「尖頭器」『考古学手帖』23、2－5頁。
竹岡俊樹 1979「石器製作工程〈下位構造〉の分析」『物質文化』No.32、1－9頁。
竹岡俊樹 2003『石器の見方』勉誠出版。
多田隆治 1997「最終氷期以降の日本海および周辺域の環境変遷」『第四紀研究』第36巻第5号、287－300頁。
谷口康浩 1999「第5章　調査成果の総括と問題提起」『大平山元I遺跡の考古学調査－旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探求－』大平山元I遺跡発掘調査団、84－103頁。
谷口康浩 1999「揺らぐ『縄文文化』の枠組み－縄文文化の範囲と段階区分の問題－」『白い国の詩』1999－12（通巻520号）、（株）東北電力地域交流部、20－27頁。
谷口康浩 2000「日本列島東北部における土器出現の^{14}C年代・暦年代と時代区分の問題」『日本第四紀学会講演要旨集』30、186－189頁。
谷口康浩 2002a「縄文早期のはじまる頃」『異貌』第20号、共同体研究会、2－36頁。
谷口康浩 2002b「日本および極東における土器出現の年代」『國學院大學考古学資料館紀要』第18輯、國學院大學考古学資料館、45－67頁。
谷口康浩 2002c「縄文時代遺跡の年代」『季刊　考古学』第77号：雄山閣、17－21頁。
谷口康浩 2003「長者久保・神子柴石器群と細石刃石器群の関係」『シンポジウム日本の細石刃文化II－細石刃文化研究の諸問題－』、八ヶ岳旧石器研究グループ、171－192頁。
谷口康浩 2004「日本列島初期土器群のキャリブレーション^{14}C年代と土器出土量の年代的推移」『考古学ジャーナル』、No.519、4－10頁。
田村　隆 1991「野見塚遺跡の先土器時代－コア・リダクションと狩猟・採集活動－」『松戸市野見塚遺跡ほか－北総開発鉄道文化財調査報告書III』（財）千葉県文化財センター、263－280頁。

田村　隆 1992「石材についての諸問題－特に関東地方の石材採取戦略について－」『考古学ジャーナル』No.345、2－7頁。
田村　隆 1993「野辺山を視る眼－石器の行動理論構築に向けて－」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開　Ⅱ細石刃文化研究の諸問題』、佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ、280－298頁。
田村　隆 1994「型式学・様式論・記号学」『古代文化』第46巻第9号、1－18頁。
田村　隆 1998「移行の論理－石器群のデザイン分析と文化＝社会理論－」『先史考古学論集』第7集、1－48頁。
田村　隆 2001「尖頭器石器群の石材消費戦略」『(財) 千葉県文化財センター　研究紀要』22、49－63頁。
田村　隆 2003「林小原子台再訪－東部関東における長者久保－神子柴石器群－」『考古学』Ⅰ、1－51頁。
田村　隆・国武貞克・吉野真如 2003「下野－北総回廊外縁部の石器石材（第1報）－特に珪質頁岩の分布と産状について－」『千葉県史研究』11、千葉県史編纂委員会、153－143（1－11）頁。
立木宏明 1996「中部地方北部における後期旧石器時代後半から縄文時代草創期前半の石器群の再検討」『考古学と遺跡の保存　甘粕健先生退官記念論文集』、27－48頁。
立木宏明 2003「中部地方北部地域の細石刃文化」『シンポジウム日本の細石刃文化Ⅰ－日本列島における細石刃文化－』、八ヶ岳旧石器研究グループ、98－127頁。
立木宏明・高橋春栄 1999「第Ⅰ章旧石器時代　第2節編年と地域性　第4項尖頭器石器群」新潟県考古学会編『新潟県の考古学』、高志書院、38－39頁。
堤　隆　1989「有樋尖頭器をめぐる評価」『長野県考古学会誌シンポジウム特集号　中部高地の尖頭器文化』、長野県考古学会、45－62頁。
堤　隆　1996a「4　遺跡間接合」『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅱ』、八ヶ岳旧石器研究グループ、83－85頁。
堤　隆　1996b「削片系細石刃石器群をめぐる技術的組織の異相－中ッ原細石刃石器群を中心として－」『古代』第102号、36－61頁。
堤　隆　1999「晩氷期へと突入する縄文草創期－シンポジウム：更新世終末期の比較考古学から－」『考古学ジャーナル』No.442、43－44頁。
堤　隆　2000「掻器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』第47巻第2号、66－84頁。
鶴丸俊明 1979「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号、23－50頁。
鶴丸俊明 1985「黒曜石供給の一形態とその技術」『考古学ジャーナル』No.244、18－23頁。
寺崎康史 1999a「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』第8集、71－88頁。
寺崎康史 1999b「細石刃石器群の変遷とその終末」『シンポジウム　海峡と北の考古学－文化の接点を探る－資料集Ⅰ・テーマ1：旧石器から縄文へ』、45－56頁。
樋泉岳二・津村宏臣 2000「4．遺跡の放射性炭素年代と暦年代」『日本先史時代の14C年代』日本第四紀学会、59－87頁。
土肥　孝 1982「縄文文化起源論」『縄文文化の研究　3縄文土器Ⅰ』雄山閣、17－41頁
戸沢充則 1964「縄文文化起源論の系譜」『日本考古学の諸問題－考古学研究会十周年記念論文集－』、河出書房、1－15頁。
戸沢充則 1965「尖頭器文化」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』、河出書房新社、145－160頁。
戸沢充則 1975「インダストリー論」『日本の旧石器文化　1総論編』、雄山閣、64－73頁
戸沢充則 1990「先土器時代文化の構造」『先土器時代文化の構造』、同朋社、5－159頁。
鳥居龍蔵 1976「人類学及人種学上より見たる北東アジア」『鳥居龍蔵全集　第8巻』：朝日新聞社、1－258頁（初出：1924年、岡書院）。
長崎潤一 1990「後期旧石器時代前半期の石斧－形態変形論を視点として－」『先史考古学論集』第3号、1－33頁。
長崎潤一 2000「リダクション」安斎正人編『用語解説　現代考古学の方法と理論Ⅲ』、同成社、234－240頁。
仲田大人 2001「南関東における縄文時代草創期前半の居住形態－最適化モデルによる予備的検討－」『先史考古学論集』第10集、73－116頁。
仲田大人 2002「後期旧石器時代の人口推定－居住形態にもとづくシミュレーション－」『MICRO BLADE』第2号、1－20 頁。
仲田大人 2003「相模野細石刃石器群の技術構造」『考古論叢　神奈河』第11集、1－38頁。

永塚俊司 1997「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物』3　発掘者談話会、90－117頁。

長沼正樹 1997「剥片剥離と尖頭器の製作工程」小野昭編『真人原遺跡Ⅱ』真人原遺跡発掘調査団・東京都立大考古学研究室、82－85頁。
長沼正樹 2000「鍛冶屋　中畑文利さんの道具と技術」『人類誌集報2000』、人類誌調査グループ・東京都立大学考古学研究室、87－96頁。
長沼正樹 2002a「剥片剥離および石材組成の地点間・遺跡間変異」小野昭編『真人原遺跡Ⅲ』真人原遺跡発掘調査団・東京都立大学考古学研究室、110－117頁。
長沼正樹 2002b「両面調整石器研究序説－更新世終末期石器群理解の枠組み構築にむけて－」『考古学研究』第49巻第3号、65－84頁。
長沼正樹 2003a「更新世終末から完新世初頭における極東アジア北部の両面調整石器群」『古代文化』第55巻第10号、25－33頁。
長沼正樹 2003b「両面調整石器の問題－予備的な一考察－」『シンポジウム日本の細石刃文化Ⅱ－細石刃文化研究の諸問題－』、八ヶ岳旧石器研究グループ、102－121頁。
長沼正樹 2004a「両面調整尖頭器の変形事例」『考古学ジャーナル』No.512、ニューサイエンス社、8－11頁。
長沼正樹 2004b「アムール下流の土器出現期」『東アジアにおける新石器文化と日本　Ⅰ』、國學院大學、129－139頁。
長沼正樹・I.Ya.シェフコムード・工藤雄一郎・S.F.コスチナ・松本　拓・M.V.ガルシコフ・橋詰　潤　2003「ゴンチャルカ1遺跡2001年発掘調査の概要とその諸問題」『旧石器考古学』64、73－82頁。
長沼正樹・佐野勝宏 2003「川口町荒屋遺跡採集の両面調整石器」『越佐補遺些』第8号、9－11頁。
中村由克 1989「尖頭器の石材－原産地遺跡の性格をめぐって－」『長野県考古学会誌シンポジウム特集号　中部高地の尖頭器文化』、長野県考古学会、79－88頁。
中村由克 2002「2．地質」小野昭編『真人原遺跡Ⅲ』東京都立大学考古学研究室、6－7頁。
新潟火山灰グループ 1981「新潟県下のローム層について　そのⅠ－信濃川ロームについて－」『地球科学』第35巻第6号、294－311頁。
新潟火山灰グループ 1995「新潟県下のローム層について　そのⅡ－信濃川ローム層の層序」『地球科学』49、188－202頁。
西尾幹二 1999『国民の歴史』、産経新聞社。
西田正規 1986『定住革命』新曜社。
西田正規 1996「狩猟採集社会との接点－人類史の立場から－」スチュアート　ヘンリ編『採集狩猟民の現在－生業文化の変容と再生－』、言叢社、223－237頁。
野口　淳 1996「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上段階の遺跡群－石器製作の工程配置と連鎖の体系－」『旧石器考古学』51、19－36頁。
萩谷千明 2003「北関東の細石刃文化」『シンポジウム日本の細石刃文化Ⅰ－日本列島における細石刃文化－』、八ヶ岳旧石器研究グループ、156－183頁。
橋本勝雄 1988a「千葉県佐倉市木戸場遺跡A地点『第1・第2ユニット』から」『研究連絡誌』第21号、(財) 千葉県文化財センター、12－18頁。
橋本勝雄 1988b「三　縄文文化起源論」『論争・学説日本の考古学2先土器・縄文時代Ⅰ』雄山閣、101－136頁。
橋本勝雄 1989「東日本の細石器文化－東北・北陸・中部高地・東海地方の研究の動向－」『考古学ジャーナル』No.306、12－21頁。
橋本　正 1977「直坂Ⅱ遺跡第5ユニットから」『どるめん』15、ＪＵＣＣ出版局、63－80頁。
秦　昭繁 1998「珪質頁岩とその分布」『考古学ジャーナル』No.432、31－35頁。
秦　昭繁 2002「珪質頁岩の分析」小野昭編『真人原遺跡Ⅲ』真人原遺跡発掘調査団・東京都立大学考古学研究室、124－127頁。
濱田耕作 1929a「日本の古代土器」『史前學雜誌』第1巻第4號、1－8頁。
濱田耕作 1929b「日本文明の黎明」『史學雜誌』第40編第12號、1－14頁。
林　謙作 1962「東北地方早期縄文式文化の展望」『考古学研究』第9巻第2号、20－31頁。

林　謙作 1993「縄文土器のはじまり」小野昭・鈴木俊成編『環日本海の土器出現期の様相　1993 年度日本考古学協会シンポジウム』、雄山閣、31－44 頁。
林　茂樹 1995『伊那の石槍－フィールド・ノートから－』、相沢忠洋賞受賞記念刊行会。
早津賢二・新井房夫 1981「信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代」『地質学雑誌』第 87 巻第 12 号、791－805 頁。
春成秀爾 1976「先土器・縄文時代の画期について（一）」『考古学研究』第 22 巻第 4 号、68－92 頁。
春成秀爾 1999「日本における土器編年と炭素 14 年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 81 集、437－449 頁。
春成秀爾 2000「旧石器時代から縄文時代へ－問題と展望－」『日本第四紀学会講演要旨集』30、日本第四紀学会、196－199 頁。
春成秀爾 2001「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』第 40 巻第 6 号，517～526 頁。
福沢仁之 1995「天然の『時計』・『環境変動検出計』としての湖沼の年縞堆積物」『第四紀研究』第 34 巻第 3 号、135－149 頁。
藤野次史 1989「日本列島における槍先形尖頭器の出現と展開」『周陽考古学研究所報』第 4 集、1－52 頁。
藤野次史 1991「土器出現期における槍先形尖頭器製作技術」『先史考古学論集』第 1 集、83－111 頁。
藤野次史 2004『日本列島の槍先形尖頭器』同成社。
松本　茂 2003「石器のかたちはどのように決まるか－石器製作行為をめぐる人間の認知－」松本直子ほか編『認知考古学とは何か』、青木書店、54－70 頁。
三瓶裕司 1996「いわゆる有舌尖頭器について－計量分析による分類－」『神奈川考古』第 32 号、97－112 頁。
御堂島正 1985「考古学上の仮定と事実－形態・機能・スタイル－」『神奈川考古』第 20 号、87－104 頁。
宮下健司 1976「縄文文化起源論争史をめぐる諸問題（一）（二）」『信濃』第 28 巻第 3 号、65－77 頁、同第 4 号、15－29 頁。
森嶋　稔 1967「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器－その神子柴系文化の系譜試論（予報）－」『信濃』第 19 巻第 4 号、33－35 頁。
森嶋　稔 1968「神子柴型石斧とそれをめぐっての試論」『信濃』第 20 巻第 4 号、11－22 頁。
森嶋　稔 1970「神子柴型石斧をめぐっての再論－その神子柴系文化の系譜について」『信濃』第 22 巻第 10 号、157－172 頁。
森嶋　稔・川上　元・森山公一 1975『男女倉』長野県和田村教育委員会。
山内清男 1932「日本遠古之文化Ⅱ－縄文土器の起源」『ドルメン』第 1 巻第 5 号、85－95 頁。
山内清男 1968「縄文土器の改定年代と海進の時期について」『古代』第 48 号、1－16 頁。
山内清男 1969「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』第 224 号、4－22 頁。
山内清男・佐藤達夫 1960「縄紋土器文化のはじまる頃」『上代文化』30、1－2 頁。
山内清男・佐藤達夫 1962「縄紋土器の古さ」『科学読売』12、84－88 頁。
山内清男・佐藤達夫 1964「Ⅱ無土器文化」「Ⅲ縄文式文化」『日本原始美術　1 縄文式土器』、講談社、137－144 頁。
山内清男・佐藤達夫 1967「下北の無土器文化」『下北　－自然・文化・社会－』、九学会連合下北調査委員会編、平凡社、98－109
山口卓也 1994「二上山を中心とした石器石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代　本編』中・四国旧石器文化談話会、185－198 頁。
山田晃弘 1984「北海道後期旧石器時代における石器製作技術構造の変遷に関する予察」『考古学雑誌』第 71 巻第 4 号、1－29 頁。
山田　哲 1999「北海道の前半期細石刃石器群についての研究－常呂郡訓子府町緑丘 B 遺跡石器群の再検討－」『先史考古学論集』第 8 集、1－70 頁。
山田昌久 1985「縄文時代における石器研究序説－剥片剥離技術と剥片石器をめぐって－」『論集日本原史』吉川弘文館、219－252 頁。
山田昌久 1990「『縄文文化』の構図－東アジア始原文化の動向と縄紋文化の位相－」（上）（下）『古代文化』第 42 巻第 9 号、13－25 頁、第 42 巻第 12 号、32－44 頁。
山田昌久 1995「コスモポリタン『縄文人』」戸沢充則編『縄文人の時代』、新泉社、17－48 頁。

山田昌久 1996「時間知変化・多工程技術・空間知変化ー定住人類の資源関与に注目してー」『季刊考古学』55号、雄山閣、27−32頁。
山田昌久・白石典之 1990「幌加沢遺跡遠間地点石器製作技術系の摘出と『細石刃文化期』石器製作技術体系への構図」『湧別川ー遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録』遠軽町教育委員会、215−212頁。
山原敏郎 1998「北海道の旧石器時代終末期についての覚書き」『北海道考古学』34輯、77−92頁。
山原敏郎 2000「十勝平野における細石刃核の変形についてー帯広市上似平遺跡Aブロックの接合資料からー」『北海道旧石器文化研究』第5号、43−53頁。
山原敏郎 2002「北海道島における旧石器文化〜新石器文化の移行期について」『第3回北アジア調査研究報告会』、33−35頁。
山本　薫・柴田　徹 1998「宮ヶ瀬遺跡群第Ⅰ文化層、栗原中丸第Ⅰ文化層および寺尾遺跡第Ⅰ文化層から出土したガラス質黒色安山岩製石器の石材産地について」市川ほか『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅤ　北原（No.10・11北）遺跡』（財）かながわ考古学財団、381−401頁。
山本　克 2000「周辺の石材環境」『下モ原Ⅰ遺跡』新潟県津南町教育委員会、25−30頁。
山本　克 2000「第1節　旧石器時代のまとめ」『下モ原Ⅰ遺跡』津南町教育委員会、191−225頁。
山本　克・安部英二 2000「津南町寺田上A遺跡出土の石槍接合資料」『越佐補些』第5号、2−5頁。
八幡一郎 1932「楕圓捺型紋土器」『考古学』第3巻第6號、15−18頁。
八幡一郎 1936「日本先史文化と大陸の關係」『上代文化』第14號、1−6頁。
横山英介 1999「北海道の特殊性」『季刊　考古学』第69号、23−28頁。
吉崎昌一 1961「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』第26巻第1号、13−23頁。
吉田邦夫 2004「ロシア極東先史時代遺跡の放射性炭素年代測定結果」『東アジアにおける新石器文化と日本　Ⅰ』、國學院大學、117−122頁。
渡辺　誠 1968「日本列島における土器出現の背景をめぐって」『古代文化』20−8・9号、京都、171−177頁。
綿貫俊一 1992「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」『古文化談叢』28集、1−33頁。
藁科哲男 1997「Ⅲ遺構と遺物　7．石器の素材環境　2）黒曜石の産地分析」小野昭編『真人原遺跡Ⅱ』、東京都立大学考古学研究室、71−79頁。

②発掘報告書等

相田　薫編　1986『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会。
麻生順司ほか 1989『風間遺跡群』法政大学多摩校地城山地域遺跡調査会
阿久澤智和 1998「峯岸地点（第Ⅱ次調査）出土の石器群」『第6回岩宿フォーラム／シンポジウム　武井遺跡と北関東の槍先形尖頭器文化　予稿集』笠懸村教育委員会・新里村教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会』、27−34頁。
伊丹　徹ほか編 1998『長津田遺跡群Ⅳ　宮ノ前南遺跡』（財）かながわ考古学財団。
市川正史ほか編 1998『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅤ　北原（No.10・11）遺跡』（財）かながわ考古学財団。
伊藤恒彦ほか 1987『中村遺跡』中村遺跡発掘調査団。
岩崎泰一編 1992『荒砥北三木堂遺跡Ⅱ』群馬県教育委員会。
岩本義雄ほか 1979『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館。
宇野修平・上野秀一 1975「角二山遺跡」『日本の旧石器文化2遺跡と遺物（上）』、雄山閣、96−111頁。
江坂輝弥・西田学 1967「愛媛県上黒岩遺跡」『日本の洞穴遺跡』、平凡社、224−236頁。
大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団 1999『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査ー旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探求』大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団。
大竹憲昭 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15　ー信濃町内その1ー貫ノ木遺跡・西岡遺跡　旧石器時代』長野県埋蔵文化財センター。
小熊博史ほか 1994「新潟県小瀬ヶ沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『環日本海地域の土器出現期の様相』雄山閣、77−173頁。

小野　昭編 1992『真人原遺跡Ⅰ』真人原遺跡発掘調査団・新潟大学考古学研究室。
小野　昭編 1997『真人原遺跡Ⅱ』真人原遺跡発掘調査団・東京都立大学考古学研究室。
小野　昭編 2002『真人原遺跡Ⅲ』真人原遺跡発掘調査団・東京都立大学考古学研究室。
加部二生 1998「武井遺跡の調査概要ー新里村教育委員会の調査を中心としてー」『第6回岩宿フォーラム／シンポジウム　武井遺跡と北関東の槍先形尖頭器文化　予稿集』笠懸村教育委員会・新里村教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会』、19−26頁。
川口　潤 1993『白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡』(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
川崎純徳 1976『後野遺跡ー関東ローム層中における石器と土器の文化ー』勝田市教育委員会。
川崎純徳 1978『額田大宮遺跡』茨城県那珂町史編纂委員会。
川道　寛編 1998『茶園遺跡』長崎県岐宿町教育委員会。
工藤信一郎 1996『野川遺跡』仙台市教育委員会。
栗原伸好ほか 2002『用田鳥居前遺跡』(財) かながわ考古学財団。
栗原伸好ほか 2004『南原遺跡』(財) かながわ考古学財団
小池　聡ほか 1991『長堀北遺跡』大和市教育委員会。
小林　孚 1968「長野県上水内郡信濃町狐久保遺跡緊急発掘調査概報」『信濃』第20巻第4号、96−
近藤尚義ほか 1992『下茂内遺跡』(財) 長野県埋蔵文化財センター。
佐藤禎宏 1998「八幡町八森遺跡桑園地区出土の旧石器略報」『山形考古』第6巻第2号、61−70頁。
佐藤雅一ほか 1988『大刈野遺跡』新潟県湯沢町教育委員会。
佐藤雅一ほか 1998『堂尻遺跡群試掘調査報告書　寺田上A遺跡　堂尻手の塚　正面ヶ原B遺跡』新潟県津南町教育委員会
佐藤雅一・原ひろみ 2000『道下遺跡（縄文時代編）』新潟県津南町教育委員会
佐藤雅一・佐野勝宏 2002『正面中島遺跡』新潟県津南町教育委員会。
佐藤雅一・新田康則・阿部昭典・古谷雅彦・笠井洋祐・織田拓男 2000「新潟県津南町・平成11年度調査成果ー旧石器時代〜縄文時代初頭に関連する調査ー」『第12回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』、71−79頁。
佐藤雅一・山本克・安部英二・高山茂明 2000『下モ原Ⅰ遺跡ー国営農地再編整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書ー』新潟県津南町教育委員会。
澤田　敦 1996『上ノ平遺跡C地点』新潟県埋蔵文化財調査事業団。
澤田　敦 2003「吉ヶ沢遺跡B地点出土遺物整理作業の成果」『第17回　東北日本の旧石器文化を語る会　予稿集』、75−81頁・
宍戸信吾ほか編 1999『三ノ宮・下谷戸遺跡Ⅰ』(財) かながわ考古学財団。
白石浩之 1980『寺尾遺跡』神奈川県教育委員会。
白石浩之・笠井洋祐 1999『吉岡遺跡群Ⅷ　縄文時代3　草創期の石器文化』(財) かながわ考古学財団。
菅原俊行ほか 1993『狸崎B遺跡』秋田市教育委員会。
杉浦重信 1987『東麓郷1・2遺跡』富良野市教育委員会。
杉原荘介 1977『群馬県武井における二つの石器文化』明治大学文学部研究報告　考古学代7冊、明治大学。
鈴木　暁 2003「新潟県新発田市　上新田B遺跡の調査」『第17回　東北日本の旧石器文化を語る会　予稿集』、82−87頁。
鈴木次郎・恩田　勇 1996『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ　サザランケ（No.12）遺跡』(財) かながわ考古学財団。
鈴木　隆 1998「月山沢J遺跡出土石器群の分析」『山形考古』第6巻第2号、10−42頁。
鈴木宏美・新田康則 1999「居尻B遺跡」『平成10年度津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会、6−7頁。
砂田佳弘・三瓶裕司 1998『吉岡遺跡群Ⅴ　旧石器時代3　B1層〜L1S層の石器文化　縄文時代2　草創期』(財) かながわ考古学財団。
須藤隆司 1999『八風山遺跡群』　佐久市教育委員会。
関根唯巳編 1992『湘南藤沢キャンパス内遺跡　第2巻　岩宿時代　縄文時代Ⅰ部』慶應義塾。

芹沢長介・須藤隆 2003『荒屋遺跡　第２・３次発掘調査報告書』東北大学大学院文学研究科考古学研究室・新潟県川口町教育委員会
高橋　誠ほか 1994『木戸先遺跡』(財) 印旛郡市文化財センター。
高原要輔・淺川文雄 2002「福島県会津若松市笹山原 No.27 遺跡」『第 16 回　東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』、93－96 頁。
武田耕平ほか 1988『仙台内前遺跡』福島市教育委員会。
舘野　孝ほか 1982『細原遺跡』北茨城市史編さん委員会。
谷藤保彦ほか 1992『房谷戸遺跡Ⅱ』群馬県教育委員会。
田村　隆ほか 1987『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』(財) 千葉県文化財センター。
田村　隆ほか 1994『大網山田台遺跡群』山武郡市埋蔵文化財センター。
丹野雅人・原川雄二ほか 1999『多摩ニュータウン遺跡－No.72・795・796 遺跡－（1）』(財) 東京都埋蔵文化財センター
近野正幸ほか編 1996『宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ　南（No.2）遺跡・馬場（No.5）遺跡』(財) かながわ考古学財団。
立木宏明ほか 1996『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ　樽口遺跡』新潟県朝日村教育委員会。
筑波大学歴史人類学系遠間資料研究グループ 1990『湧別川－遠間英治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録－』北海道紋別郡遠軽町教育委員会。
土屋　積ほか編 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 16－信濃町内その２－星光山荘Ａ・星光山荘Ｂ・西岡Ａ・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平Ｂ・日向林Ａ・日向林Ｂ・七ツ栗・普光田』、長野県埋蔵文化財センター。
東北大学文学部考古学研究室編　1990『荒屋遺跡－第２・３次発掘調査概報』川口町教育委員会。
戸沢充則・安蒜政雄編『鷹山遺跡群Ⅱ』長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団。
利部　修 1996『岩瀬遺跡』、秋田県教育委員会。
長沢展生・山本克・安部英二 1997「道下遺跡　１．遺跡概要　２．旧石器時代」『平成９年度津南町遺跡発掘調査概要報告書』、津南町教育員会、2－４頁。
長沼　孝 1985『美利河１遺跡』(財) 北海道埋蔵文化財センター。
長沼　孝 1988『石川１遺跡』(財) 北海道埋蔵文化財センター。
長沼　孝・越田雅司・佐藤　剛 2000『上川町　日東遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター。
長沼　孝・鈴木宏行・坂本尚史・直江康雄 2000『白滝遺跡群Ⅰ　白滝村　上白滝７遺跡』(財) 北海道埋蔵文化財センター。
長沼　孝・鈴木宏行・直江康雄・越田雅司 2001『白滝遺跡群Ⅱ　白滝村　上白滝２遺跡，上白滝６遺跡，北支湧別４遺跡』(財) 北海道埋蔵文化財センター。
長沼　孝・鈴木宏行・直江康雄 2002『白滝遺跡群Ⅲ　白滝村　奥白滝１遺跡，上白滝５遺跡』(財) 北海道埋蔵文化財センター。
中村孝三郎 1965『中土遺跡』長岡市立科学博物館考古学研究室。
中村孝三郎 1971『御淵上遺跡』長岡科学博物館考古学研究室。
中村孝三郎 1977『越後の石器』、学生社。
中村孝三郎・小林達雄 1975「月岡遺跡」『日本の旧石器文化　第２巻　遺跡と遺物（上）』雄山閣、242－254 頁。
成島一也・宮田和男 2000『中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－中原遺跡２－』(財) 茨城県教育財団。
新潟石器研究会 1996「新潟県中土遺跡出土遺物の再検討」『長岡市立科学博物館研究報告』第 31 号、123－158 頁。
橋口定志編 1979『前田耕地Ⅱ』秋川市教育委員会。
橋口美子 1989「秋川市前田耕地遺跡の尖頭器」『旧石器時代　槍の文化史』(財) 東京都埋蔵文化財センター、49－56 頁。
原ひろみ 2000「第４節　遺構・遺物の検出状況１．旧石器時代」『道下遺跡　縄文時代編』新潟県中魚沼郡津南町教育委員会、8－9 頁。

原ひろみ・宮田千里 2000「越那A遺跡」『平成12年度津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会、24－25頁。
原川雄二・舘野　孝 1996『多摩ニュータウン遺跡－No. 27遺跡－』東京都埋蔵文化財センター

樋口昇一・森嶋　稔・小林達雄 1965「木曽開田高原における縄文以前の文化」『信濃』第17巻第6号、59－70頁。
菱沼良幸 1999『取手郡市計画事業下高井特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書III　東原遺跡・前畑遺跡・柏原遺跡』(財) 茨城県教育財団。
福井淳一・越田賢一郎 1999『千歳市　柏台1遺跡』(財) 北海道埋蔵文化財センター。
見崎　巌編 1984『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告III』大和市教育委員会
宮　重行・麻生正信・永塚俊司 2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII－東峰御幸畑西遺跡（空港No.61遺跡）－』(財) 千葉県文化財センター。
三宅徹也ほか 1980『大平山元II遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館。
三宅徹也ほか 1981『大平山元III遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館。
宮本一男・横山祐平 1992『大平山元II遺跡発掘調査報告書』青森県蟹田町教育委員会。
村上拓ほか 1999『耳取I遺跡』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
山本伸正 1992『臼谷岡ノ城北遺跡発掘調査報告書』富山県小矢部氏教育委員会。
山本克・安部英二・宮田千里・鈴木宏美・古谷雅彦・田中一穂 1999「貝坂桐ノ木平A遺跡」『平成10年度津南町遺跡発掘調査概要報告書』、津南町教育委員会、8－11頁。
吉田政行ほか 2003『吉岡遺跡群X　B区第2次調査』(財) かながわ考古学財団。

③海外文献（和訳含む）

Bamforth,D.B. 2002 Rethinking the Pole of Bifacial Technology in Paleoindian Adaptations on the Great Plains. Multiple Approaches to the Study of Bifacial Technologies , University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology, 209－228
Binford,L.R.1983 Organization and formation processes: Loooking ant curated technology *Working at Archaeology*、 Academic Press、pp149－155.
Binford,L.R.1986 An Alyawara Day －Making men's knives and beyond *American Antiquity* 51－3、pp547－562.
Engels,F. 1892 Der Ursprung der Familie,des Privateigenthums und des Staats (戸原四郎訳 1965 『家族・私有財産・国家の起源』、岩波書店)
GRIP Members 1993 Climate instability during the last interglacial period recorded in the GRIP ice core. *Nature* 346、pp. 203－207.
Kelly,R.L. 1988 The Three Sides of a Biface *American Antiquity* 53－4、717－734
Kimura, H.1990 The Microblade Technique in Northern part of Japan. *Chronostratigraphy of the Paleolithic in North, Central, East Asia and America*, pp83－90.
Kuhn,S.L. 1994 A formal Approach to the Design and Assembly of Mobile Toolkits. *American Antiquity* 59－3、 pp.426－442.
Kuzmin,Y.V. 2001 Radiocarbon Chronology of Paleolithic and Neolithic Cultural complexes from the Russian Far East, *Journal of East Asian Archaeology*, vol.3,no,3－4,2001, pp.227－254, Netherlands
Kuzmin,Y.V. 2002 Radiocarbon Chronology of Paleolithic and Neolithic cultural complexes from The Russian Far East *Journal of East Asian Archaeology*, Vol 3,3－4, 227－253 (Leiden)
Kuzmin,Y.V.,Shewkomud,I.Ya. 2003 The Palaeolithic－Neolithic Transition in the Russian Far East, *The Review of Archaeology* 24－2, pp.37－45,Massachusetts
Izuho,M. 2002 *A consideration of the microblade assemblages with Oshorokko type microblade cores in Hokkaido and its significance //Пластичатые и микропласти－нчатые индустрии в*

Азии и Америке, С.45－46, Владивосток.
Leroi - Gourhan, A. 1964 *Le Geste et la Parole*, 2vol. albino Michel, Paris.（A. ルロワ＝グーラン著　荒木亨 訳 1973『身ぶりと言葉』、新潮社。）
Medvedev,V.E. 1993「ガーシャ遺跡とロシアのアジア地区東部における土器出現の問題について」『環日本海における土器出現期の様相』、雄山閣、9－20頁
Mithen,S. 1996 *The Prehistory of the Mind*, Thames and Hudson Ltd, London（松浦俊輔ほか訳 1998『心の先史時代』、青土社。）
Popper,K.R. 1957 *The Poverty of Historicism*, Routledge and Kegan Paul Ltd, London（久野　収ほか訳 1961『歴史主義の貧困』、中央公論新社。）
Sahlins,M. 1972 *Stone Age Economics*, Aldine Publishing Co.（山内昶　訳 1984『石器時代の経済学』、法政大学出版局。）
Stuiver, M., Grootes,P.M., Brazuinas,T.F. 1995 The GISP2 $\delta^{18}O$ climate Record of the Past 16、500 Years and the Role of the Sun、Ocean、and Volcanoes. *Quaternary Research* 44－3、pp.341－345.
Taylor,K.C., Lamorey,G.W., Doyle,G.A., Alley,R.B., Grootes,P.M., Mayewski,P.A., White,J.W.C. and Barlow,L.K. 1993 The 'flickering switch ' of late Pleistocene climate change. *Nature* 361、pp.432－436.
Wilmsen,E.N. 1983 The ecology of Illusion :Anthropogical foraging in the Kalahari *Reviews in Ahthropology*,10－1 ,pp9－20
オクラードニコフ、A. П. ・メドヴェージエフ、B. E.（清水・村上訳）1990「アムール河下流ガーシャ多層位集落遺跡の研究」『古代文化』第42巻第5号、38－43頁
シェフカムート、イーゴリ・ヤコブレビッチ（梶原洋訳・解説）1997「極東・沿海州の土器の起源－ゴンチャールカ1遺跡の発掘調査－」『考古学研究』第44巻第3号、102－117頁
コノニェンコ、ニーナ（栗島義明訳・解説）1999「東アジア地域に於ける更新世後期から完新世初期への石器製作技術の移行」『土曜考古』第23号、pp. 137～156。
デレビャンコ A.P.，メドヴェージェフ，V.E.1995「極東における最も古い土器センターの一つとしてのアムール河流域」『国際シンポジウム　東アジア・極東の土器の起源－縄文文化の起源を探る－予稿集』，東北福祉大学、11～25頁。
Акимова, Е.В.,Стасюк, И.В.,Томилова, Е.А.,Лаухин, С.А. 2000 Новые данные по археологи позднепалеолитического местонахождения Дербина V. *Проблемы археологи, этнографии, антропологии сибири и сопредельных территорий*, томVI、Института археологии и этнографии СО РАН、с.24－27.
Васильевский, Р.С.,Крупянко, А.А.,Табарев, А.В.1997 *Генезис неолита на юге Дальнего Востока России каменная индустрия и проблема ранней оседлость*, Владивосток,
Деревянко,А.П. 1983 *Палеолит Дальнего Востока и Корей*, Новосибирск.
Деревянко,А.П.,Медведев,В.Е.1992 *Исследование поселения гася* .Рассийская Академия наук Сибирское Отделение.Институт Археологии и Этнографии, Новосибирск
Деревянко,А.П.,Медведев,В.Е. 1993 *Исследование поселения Гася*, Российская академия наук сибмрское отделение институт археологи и этнографи, Новосибирск
Деревянко,А.П.,Медведев,В.Е. 1994 *Исследование поселения Гася (предварительные результаты1986－1987г.г)*, Российская академия наук сибмрское отделение институт археологи и этнографи, Новосибирск
Деревянко, А.П.,Волков, П.В.,Ли Хонджон1998 *Селемджинская позднепалеолитическая культура*, Новосибирск.
Деревянко,А.П.,Чо Южон, Медведев,В.Е.,Юн Кын－Ил,Хон Хен－У,Чжун Сук－Бэ,Краминцев,В.А.,Медведева,О.С., Филатова,И.В. 2002 *Исследования на острове Сучу в нижнем приамурье в 2001 году*; Российская академия наук сибмрское отделение институт археологи и этнографи 國立文化財研究所遺蹟調査研究

Дьяков, В.И. 2000, *Приморье в раннем голоцене мезолитическое поселение Устиновка－IV*, Владивосток.

Кузнецов, А.М. 1992 *Поздний палеолит Приморья*, Владивосток

Кузьмин, Я.В.,Ветров, В.М.,Джалл, Э.ДжТ.,О'Малли,М.2000 Радиоуглеродноедатирование керамики Усть－каренгской клтуры Верхнего Витима и хронологтя начального неолита Восточной Азии *Вайкальская Сибирь в древности*, выпуск2,часть1,С.181－188, Иркутск.

Лапшина, З.С.1999 *Древности Озера Хумми* Приамурское географи－ческое общество Хабаровск

Лапшина, З.С. 2000 Древности финала плейстоцена－начала голоцена на Амуре *Вайкальская Сибирь в древности*, выпуск2,часть1, С.189－202, Иркутск.

Малявин, А. В. • Шевкомуд, И.Я. 1999 Предварительное сообщение об исследованиях новых стоянок с древнейшей керамикой в Приамурь:Гончарка－3 иНовотрицкое－3 *"Project AMUR"*、Tsukuba、pp36－52

Медведев,В.Е. 2001 Проблема истоков некоторых скульптурних и наскальных образов в первобытном искусстве юга Дльнего Востока и находки,относящиеся к осиповской культуре на Амуре, *Археология этнография и антропология Евразии*, 4(8), С.77－94, Новосибирск

Окладников,А.П.,Деревянко, А.П. 1973 *Далекое прошлое Приморья и Приамурья*, Владивосток.

Окладников,А.П.,Деревянко, А.П. 1977 *Громатухинская культура* Академия наук Сибирское Отделение. Новосибирск

Шевкомуд,И.Я.1996 Об открытии древнейших погребений и некоторых проблемах осиповской культуры (Приамуре) .*Новейшие археологические и этнографические открытия в Сибири*, С.253－256, Новосибирск

Шевкомуд,И.Я.,Като, Х.2002 Верхнепалеолитический комплекс стоянки Голы－мыс4 (Нижний Амур) *Записки Гродековского Музея* выпуск3, С.7－20, Хаьаровск

Шевкомуд, И.Я.,Косицына,С.Ф.,Горшков, М.В.2002 Результаты полевых археологических исследо ваний стоянки Амур－2 в Хабаровске *Записки Гродековского музея*, выпуск 3 ,С.31－36, Хабаровск.

Шевкомуд, И.Я.,Наганума, М,Горшков,М.В.,Косицына,С.Ф.2002 Новые исследования стоянки Гончарка－1(Приамурые) в 2001г. *Записки Гродековского Музея*, выпуск3,С.21－30, Хабаровск

Хлобыстин,Д.П.1996 Неолит Приморья и Приамурья. *Археология Неолит Северной Евразий*, Росийская академия наук, С. 310－325, Москва